THE CENTRAL REVIEW

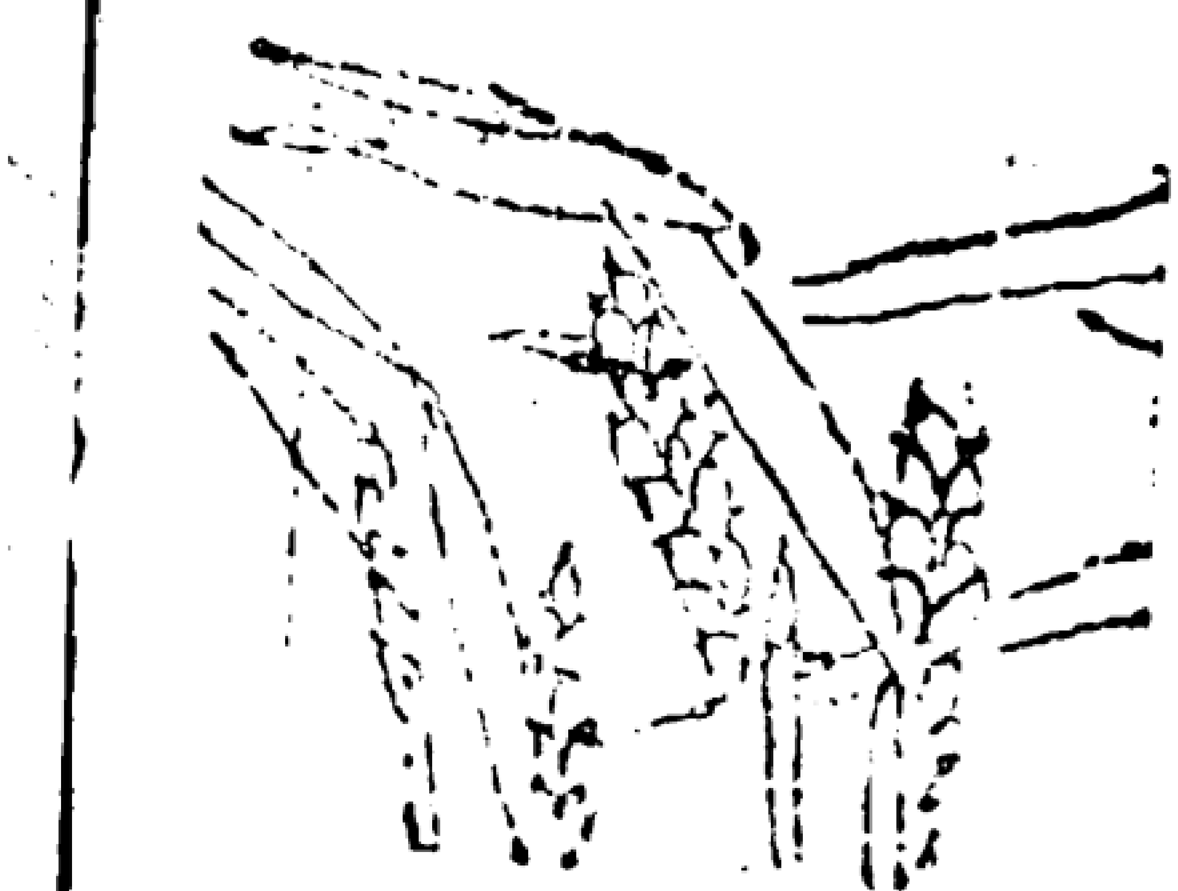
中央公論

『作家の翻譯號』

(歳末特別號)

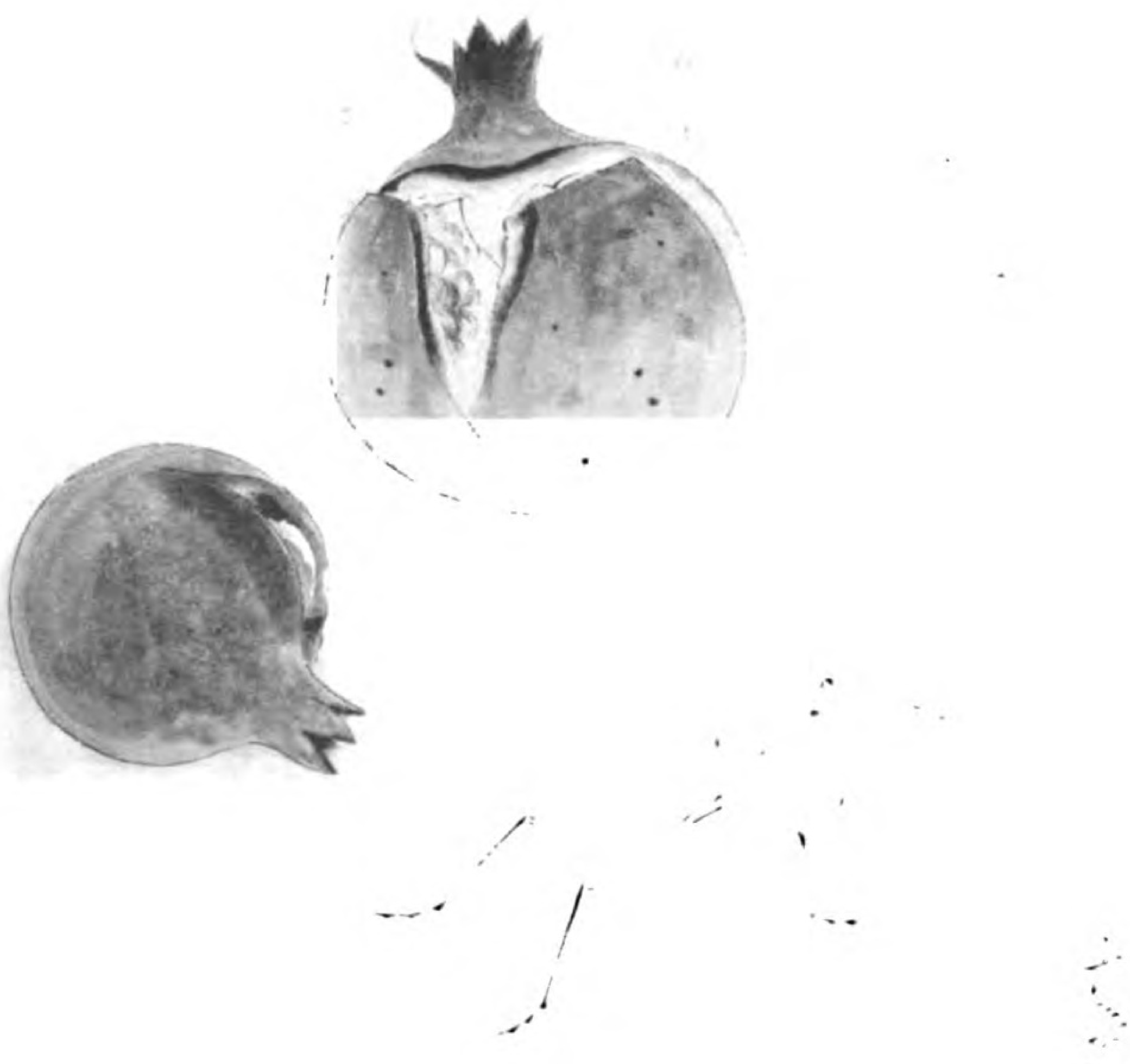
第四十二年 第十二號 第四百七十九號

昭和二年十二月一日發行（毎月一回一日發行）
昭和二年十一月十八日印刷納本



▼説苑





柘榴　　小林古徑筆

文學博士濱田青陵序・三高教授藤田元春著

日本民家史

菊大判六百數十頁・口繪玻璃版七葉・寫眞版二葉・挿畫及び間取二百六十圖・天金・布裝

價 八・八〇 書留送料 〇・二七

人文地理學專攻の著者が前後十數年に亘り日本の各地を歴遊してあらゆる階級の民家を訪ね、各地方の特色を審かにすると同時に古今東西の文獻資料を涉獵蒐集して編述したものが本書である。第一篇 **屋根** 第二篇 **民家の間取** に於いて二百數十葉の寫眞が實に著者自らの撮影であり、而もそれが殆んど全國的であることによつて、其勞苦の程が察せられる、この兩篇によつて我國民家の現有せる各種の形式と其構架が明かになり、同時にその古い變遷發達の模様がわかり、併せて庶民藝術としての農家の建築に學ぶ可き多くの美があることをも知り得るのである。第三篇 **歴史** の部は神代より近世への農家の變化を論じ特に近世に於けるその長足の進步を明確にした。最後の第四篇には **邸宅の班給** の歴史を明かにし、村方町方の地割の基礎を考證し、現存せる聚落の發生に關する歴史を明かにするとともに、京、大阪の都城と異る東京の町割の古い遠い原因までが明かにされてゐる。この點所謂『聚落地理』『都市地理』など人文地理的研究方法に其學問的基礎を與へたといふことが出來る。要之、日本の文化史、建築史、土俗史、風俗史並に地理學上從來の學者が最も等閑に附して居た方面を闡明した點に於いて、本書の出版は實に我國學界空前の業績と云つても過言でない。

新刊發賣

浮世繪歌舞伎畫集

日本浮世繪協會編・井上和雄解說

四六倍判・精巧玻璃版百五十四余圖・口繪見返木版刷・本文上優良紙使用・歐文目次・天金函入

定價 五・八〇 書留送料 〇・二七

浮世繪に畫かれたる三都歌舞伎の狀景は演劇美術の研究家は勿論歌舞伎舞臺藝術の專門家にとつても亦唯一無二の參考資料である。近時浮世繪研究の隆盛期に際會して本集の上梓は寔に時宜に適せる企てといふ可く剩さへ精巧なる玻璃版に極めて優雅なる紙質を配し遺憾なく原畫の情趣を髣髴せしめたり。敢て江湖好趣家の座右に勸む。

發行所 東京市神田區北甲賀町二三 刀江書院 電話神田 三二七一・三一八九 振替東京 七三一一八

會員募集

最新科學講座

責任編輯 理學士 石井重美 理學士 原田三夫



全十五巻

本講座の特色

▲百十餘講座純正應用科學全般を網羅す。

▲各講座はそれぞれ斯道の專門大家執筆。

▲誰にでも判り誰にでも面白き獨得の編輯

▲寫眞版挿畫圖解の豊富なること。

▲實用工業方面にも特に重きをおく。

▲會費低廉なれば購讀至便。

▲興味深き最新科學通信を毎月進呈す。

各科專門大家八十餘名執筆（順不同序）

概論
理學博士 石原純
農學士 渡邊白應

物理學・化學
理學士 竹內潔
理學博士 松野吉松

天文學・地質學
理學士 關口鯉吉
理學士 神田茂
東京天文臺 井上四郎
東京天文臺 小川清彥
理學士 石井重美
理學博士 渡邊萬次郎
理學士 原田三夫
理學士 佐藤傳三
理學博士 中村左衞門太郎
水產講習所技師 丸川久俊
中央氣象臺技師 梶間百樹
理學士 西村傳三

動植物學・人類學
理學博士 小熊捍
理學士 阿部余四男
理學博士 岡村金太郎
理學士 恩田經介
理學博士 牧野富太郎
理學博士 武田久吉
理學博士 松村松年
理學士 妹尾科實
理學士 內田亨
農學博士 內田清之助
理學博士 飯塚啓
早大教授 西村眞次

醫學・心理學
醫學士 安田德太郎
醫學博士 川上漸
理學博士 小泉丹
理學博士 山內繁雄
醫學博士 藤浪剛一
醫學博士 杉田直樹
理學士 山本宜治
醫學博士 小酒井不木
文學士 小熊虎之助

農學
農學博士 栃內吉彥
農學博士 稻垣乙丙
林學博士 上原敬二

機械工業・化學工業
理學博士 藤田經信
東京自動車學校 加藤芳夫
工學博士 小澤武
工學博士 矢野道也
工學博士 青木保
工學士 和田小六
工學士 三雲次郎
工學博士 厚木勝基
工學博士 鑑山直人
工學士 西松唯一
工學士 友田宜孝
理學士 西澤勇志智

電氣・ラヂオ
理學博士 石原純
工學博士 山本忠興
理學博士 宗正路
工學博士 田中龍夫
工學博士 別宮貞俊
通信省技師 丸毛登
放送局技師 北村政次郎
特許局技師 堀川冬弘
其他數科目二十餘大家

▲內容見本（申越次第進呈）▼

▲入會申込十二月六日限▼

規略
▲申込金壹圓▲毎月會費金貳圓五拾錢▲全額一時拂金參拾五圓（申込金不用）▲送料一冊につき八錢▲十二月上旬より毎月一冊宛刊行十五ヶ月完了

體裁
▲本講座は會員にのみ頒つ▲全十五卷菊判各二百九十餘頁總紙數四千三百餘頁▲彩色石版三色版別刷寫眞版▲挿圖各卷百數個

內容の一部

彗星と流星　天文臺 井上四郎
相對性原理　理學博士 石原純
地震　理學博士 中村左衞門太郎
細胞論　理學博士 小熊捍
高山植物　理學博士 武田久吉
進化と遺傳　理學士 阿部余四男

▲科學進步の歷史（渡邊農學士）▲化學の驚異（松野理學博士）▲月（井上東京天文臺技手）▲太陽（關口理學士）▲宇宙の構造（神田理學士）▲天文臺技手）▲四季の星座（小川東京天文臺技手）▲湖沼奇觀（田中子爵）▲地球の過去と未來（石井理學士）

人類學　早大教授 西村眞次
人体の構造　醫學士 安田德太郎
人物の病氣　農學博士 栃內吉彥
汽車と鐵道　工學士 玉橋市三
作物
飛行機と飛行船　工學士 和田小六
パルプと紙　工學博士 小澤武

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

發行所 國民圖書株式會社

電話銀座七八三番　二一八八番　三六八六番　振替東京五二二九八番



昭和二年

中央公論

十二月一日發行

十二月號

第四十二年第十二號

第四百七十九號

統治形式としての少數專制

何事をするにも愼重に考へてやれ、斯うと確信がついたら躊躇する所なく勇往邁進せよ、但し一度信じた所に何時までも執着するのは間違だ、人間には進歩がある、今日の至善は必しも明日の至善ではない、更にもツと高い立場はないかと一には自ら疑ひ又一には常に謙遜して他の經驗に訊くを怠つてはならない、斯くして始めて人性の圓滿なる進歩發達があり得るとは、よく私共が個人的修養の心得として先覺の士から聞かされる所である。斯うした忠告を正しいとすれば、詰り私共の修養に於て大事なものは、一つは自己の良知であり又一つには他人の經驗だと云ふ事になる。然らば問ふ、自分の事はいゝとして、他人の經驗が何で我々の修養に資すべき積極的の參考になるか。之に對する普通の常識的答解は斯うだ。凡て人は自分の生活をヨリ正しく導かうと眞面目に努める點に於て皆同一の基礎に立つものだ。色々な世俗的關係の相違に依てそれ〴〵異つた考方をするにしても、一歩進んだ精神生活の理想的境地に於て　お互は決してアカの他人でない。故に當人が眞面目であればある程、一方の經驗は必ず他方に何ものかを敎へるものであると。此解釋はまた自ら私共に斯う云ふ事を敎へる。或人の言行に如何に私共の眼から見て承服し難いものがあつたとしても單にそれ丈けで我々は其人を非議してはならない。其人が眞面目である限り、其人の主義なり方針なりは一應之を尊重するの必要がある。彼が人生に對して私共と同じ態度を執る者なる以上、彼の主義方針は私共と絕對に無關係なものではあり得ないから。

併し右の如き立場には世上なか〳〵反對が多い。殊に昨今の樣に唯物的社會觀の流行する世の中に於ては、恐らくこの立場は一部の人達から荒唐無稽の甚しきものとして一蹴されるかも知れない。人の思想感情はその物質的境遇に依てのみきまる。それを超越したヨリ高い共通の精神生活なんどいふものは全く幻想である。甲は甲の立場に即して一定の見解を立て、乙には乙の立場に根を張つた獨特の見解が生長する。故に乙の經驗と之に基く見解とは、乙の立場の爲のものであつて直接に甲の立場と何の交渉もあり得ない。のみならず、若し甲と乙と相對立抗爭する關係にある場合には、甲が乙に聞くといふは正に甲自らその立場を裏切るものに外ならない。好んで人の經驗を聞けなど云ふは、或は一方が巧に他方を欺瞞する詐術かも分らないと云ふのである。

以上個人の修養の問題に託して二つの相對立する見解を說明したが、この對立はまた丁度今日の政治社會にも現れて居る。近頃の歐羅巴に於て特に人の注目を惹いて居るボルシエヴイズムとフアスシズムとの將來を考ふる者に取り、右に述べた說明はまた何等か吾人に反省の料を供するものあるかと思ふ。

個人の修養に於て他人の經驗を尊重すべしとの見解に對應するものは、政界に在ては反對黨の存在を許す立場

である。反對黨の見解にも相當の尊敬を拂ひつゝ互に切瑳琢磨し合ふことに依て社會の利福を進めその進歩上を期し得ると考ふるのである。只甲乙孰れの見解を以てヨリ良き立場と認むべきや又何の點に他の經驗を學ぶべしとするや等の判斷を、彼に在ては專ら個人の良知に委すのに、此に在ては主として政治的施設に依て直接に利害を左右さるる一般民衆の批判に任ずるの差異はあるも、其立場の相異如何に拘らず、共に皆社會の爲め民衆の爲め眞面目に心志を勞して居るにものなることに付ては一點の疑をも挿まぬ。故に此見解を執る者は假令今日反對黨に蹴落されても直に之を不倶戴天の敵とも思はねば、又徐ろに捲土重來の策を講ずるの餘裕もある。意見の相違はある、併し反對派だつて元々我等の爲め惡しかれと物事を取計らうものではない。お互にさう確信して居るのだから、言論の自由は完全に公許され一切の政治運動にも何等の束縛が加へられぬ。所が其反對にかの唯物的社會觀を執ると、彼此の對立を超越したヨリ高き共通の基礎と云ふものを認めないのだから、立場の異る相手方は絕對に認容してはならぬことになる。無理にも我の立場を押通して敵を粉砕し了らなければ自ら活きることが出來ぬとするのだ。即ち極端なる獨裁政治を主張し、反對の見解に對しては一毫も假借しないのである。是の如きは正にボルシエヴイズムとフアスシズムの執る統治形式ではないか。

ボルシエヴイズム又はフアスシズムとして我々の理解するものの中には色々の内容が含まれてゐる。その内容の點から云ふと、此の二つは或る意味に於て全然相容れざる反對觀念でもある。併し單にその執る所の統治形式より觀るとき、兩者は全然同じ基礎に立つと云へる。而して統治形式として右の如き立場の可能なる實ははたゞ唯物的社會觀の完全に許され得る場合に限るは明白だ。換言すれば、右の如き統治形式は唯物的社會觀と運命を共にしてのみ存在を續け得べきものである。

ボルシエヴイズム及フアスシズムの將來の運命を語るは本稿の目的とする所ではない。只實際問題として(一)そが少數者の獨裁專制であるだけ恒久なる民衆的支持を欠き爲めに何時クーデターに依て覆さるるか分らぬ危險に直面して居ること、(二)それに備ふる爲め若し少しでも民衆的支持を恃まうとすると獨裁專制の基礎は忽ち弛み軈て必ず反對勢力の擡頭を誘致すべく其結果或は遂に幹部間の内訌を爆發するの恐れなしとせざること、(三)强てさうした結果を避けんとせば復た元に歸るの外ないが今更それも出來ぬとせば思ひ切つて民衆的支持の範圍を擴張すべく餘儀なくさるること、の三點に注意するを必要とする。斯うなると獨裁專制は何時の間にやら獨り手に消えボルシエヴイズムとフアスシズムとは其本來の面目を失つて統治形式の問題も自ら唯物的社會觀から離れてしまうことになる。固より意識して斯く離れ行くのではない、現實の必要が知らず識らず甲から乙へ立場の鞍替を命ずるのである。そこで自滅か、鞍替か、之が今やボルシエヴイズムとフアスシズムとの統治方針の前途に課せられたる選擇の問題であると云ふ者がある。いづれまた此事は折を見て再び論ずるの期があらう。

中央公論



第四十二年第十二號
十二月號
第四百七十九號

血と速度の現代

高畠素之

一

落語に『官營汁粉』といふのがある。話しの本筋は、官憲横暴者流の常套口吻を世話に砕いただけで變哲もないが、時としてそのマクラに氣の利いた諷刺を聞くことがある。いつぞやのそれは、時の政府の米價調節を嘲笑ることに發端した

ものて、甚だ愉快を極めたことを今でも記憶してゐる。日新月歩で文明が開化する當今、いつまで人間が米の飯を喰つて生きねばならぬと考へるのは愚かしい。やがてボタン一つ押せば、欲しいと思ふあらゆる食物のエキスが自然天然に口中へ流れ込み、同じく香氣も音色も自由自在に出し入れできるやうになる。若しさうなると、人體の表裏鑑別だけが役目だつた腑が排泄裝置のボタンに變り、わざわざ廁へ足を運ぶ苦勞が省かれる、などと滿場を笑倒させてゐた。

最後のサゲは單なる擽ぐりとしても、寢ながらに喰らひ且つ垂れることを無上の幸福と夢みたのは、如何にも落語家らしいユトーピアではないか。『達磨さんこちら向かんせ世の中は月雪花に酒に三味線』など、エピキュールの哲學を日本的に讃美した彼等の描き得た最後の夢は、所詮この邊に落ちつくであらうと思はれる。だが、更らに考へると、斯うしたユトーピアは必らずしも落語家ばかりの夢想ではない。生きとし生ける人間のすべて、誰しも足勞を儲けて骨折を損したがらない限り、出來ることなら、成るべく手足は動かさないで口ばかり動かしたがるべく、無用の長物たる腑のごとき、儘になるなら排泄裝置のボタンにもしたいのが人情であらう。落語家はその心理を、極めて卒直に素朴に喝破した。さればこそ、お客の肚腑をある程度まで剔抉すると同時に、再轉したるテレかくしの哄笑にも投じ得た所以である。何にを隠くさう私なども、成る程そんな時代が來てくれれば有りがたいと同感したことであつた。

そこで問題となるのは、斯ふいふ時代の到來が果たして可能かどうかの詮鑿である。必らずしも到來しないといふより、必ずしも到來するといつた方が事實にちかい。現にその當時、ラヂオが一般家庭の娯樂に提供されようなどとは夢にも考へられなかつたのだが、僅か五六年後の今日では、特に感謝すべき文明の恩惠と思ふものもなくなり、電送寫眞の實際的應用も最近の將來に確想されるに至つた。音色の放送が可能を實證された程なら、肉體的生命の維持に必要な二千五百や三千五百のカロリーが放送されないとは、よもや何人も斷言し得ないであらう。水道の如く瓦斯の如く、ネヂを左に卷くか右に卷くかの勞力で、あらゆる榮養の成素が吸出呑吐を自由ならしめる日が來ないとも限るまい。論より證據、無政府

主義の諸君はゴットキンの昔より、機械の極度なる發達が人間の所有慾を自然天然に衰滅せしむべしと樂觀し、落語家より以上のユートーピアを將來に描き來たつた。マルクス主義の諸君も同斷、彼等は機械に依る生産力の極度的增進が、嫌も應もなく資本主義經濟の自壞作用を促し、これも必然的に自由社會を出現せしむべしと樂觀しつゝある。果たして然るか否か、それやこれやの詮議は後まはしとして、日新月歩に文明が開化しつゝある目前の狀態を見れば、落語家や主義者の幻夢が必らずしも荒唐無稽とばかり言へないのは事實である。

機械の威力はそれほど魔術的である。一つの機械は更らに新しき機械を生み、その機械は又も新しき機械を生む。斯くして行住坐臥、人類の生活は單複雜多の機械に圍繞され、一としてその恩惠に成立せざるものはない。昔の忠臣孝子は、有り得べからざる最高の標準として、彼等の敵の所在を『天に驅け地に走る』とも搜し出すことに努力と誠意とを披瀝したが、機械の發明發見は驅天走地を日常茶飯の現象たらしめ、折角の咳呵も却つて切り榮えのせぬこと夥だしきものたらしめてしまつた。

二

機械は然らば、如何にして人間の生活に進出したか。

この問題の答案はだいぶ厄介だが、根本の原因は、成るべく手足の勞働を避けようとする人間本能に出發してゐる。俗諺に『濡れ手で粟の攫み取り』といふ如く、出來るだけ勞力は少くすると反對に、收益は出來るだけ多くしたいのが萬人共通の心理である。そこで人間は、何んとかして手足を動かすまいとの工夫から、これが代用となるべき簡單な道具を造ることに着想し、それの利用で手足の勞働を輕減せんとした。隨つて最初は、わづか一本乃至二本の手足を代用するに過ぎなかつた道具も、數本、數十本、數百本といふやうに代用すべき數量を次第に增加し、今日では一個の機械が、一時に

よく數千百萬本の手足を代用せしめ得るものも少くない。

元來人間は、複雜無限の欲望を有つ動物であつて、お伽噺の『底なし沼』と同じく滿足を知らない。尤も中には、食慾や性欲の如く一定量で一時は生理的に飽和する欲望もあるが、爾余凡百の諸欲望は、次から次へとヨリ高大なる對象を求めて發展し、いつ如何なる日に停止すべくも見えない。幸か不幸か、人間は斯うした複雜無限の欲望を有するが故に、自然物をそのまま取つて生活の糧に充用するほか、その形態を換へたり場所を換へたりして、これに新しい効用を增し加へようとしたのである。ところが、形態や場所を換へるためには勞働の支出が絶對に必要で、玆に『河豚は喰ひたし命は惜しし』の關係が生じた。道具の考案や機械の發明は、それ自體が河豚の解毒劑に類する。即ち、成るべく嫌な勞働は避けて、好きな生産結實だけを得たいといふ念願の現はれに過ぎない。

機械は斯くの如く、富の生産に役立たしめんため、換言すれば、人間の利用厚生に貢獻せしめんため、人間自身の頭と手に依つて造られたものであつた。隨つて機械は、どこまでも人間に支配されねばならぬ道理であり、現に過去はその通りだつたのであるが、今やその高度なる發達の結果は却つて機械が人間を支配するかの如き觀を濃厚にして來た。それは恰も、人間社會が交換の便宜のために考案した貨幣に緊縛され、その壓制的君臨に慴伏する狀態と髣髴してゐる。マルクスの巧妙な比喩に從へば、魔術師が自己の如意棒から導き出した妖物を制御し切れず、却つてその妖物に我れと我が身を供したやうなものだといふ。成るほど、それに違ひないのである。

そこで次の問題は、如何なる徑路で機械が斯くの如き威力を發揮したかである。論題の中心には迂遠なやうだが、實は此處の道理を辨へてかゝらないと、肝腎の『速度』と『血』の現代的必然性が明瞭にならないから、野暮を承知で暫らくの御辛棒を煩はしたいと思ふ。

機械が人間を支配するやうになつたのは、資本制生産が發達して工場工業が隆盛になつた後である。工場手工業の時代

までは、曲りなりにも手先きの熟練に依賴する部分が多く、勞働要具は未だしも人間勞働の補助機關たる事實を出でなかつた。然るに、大工業時代となるや、あらゆる生産は專ら勞働要具を中心とするやうになり、道具から進化した機械に對して人間の方が、今度はアベコベに補助機關たらざるを得なかつた。何故に然りしかといへば、纔かばかり精巧な發動機構と配力機構と作業機構との組み合はせに依り、機械は『最大熟練工の手の如何なる蓄積經驗に依つても與へ得られない程の、容易さと正確さと迅速さとを』發揮した結果、人間は絶對に競爭を不可能とするやうになつたからである。斯くして、機械に對する人間は、龍車に向ふ蟷螂の斧ほどにも力なく、油差しの仕事を分擔する位が關の山、最も忠實なる歩哨として護衞の役目を勤めなければならなかつた。

尤も、それがため、富の生産は何百千倍にも增大し、それだけ國利民福も增進したには違ひない。だが、天は二物を與へず、あらゆる現代生活の悲劇も亦此處に淵源する。

三

現代悲劇の極め付き『貧ゆへの……』も、素より直接間接にそれが原因である。然しこれは、直接の論題に關係がないから御免を蒙むり、先づ機械附屬品としての人間悲劇を點檢するとしよう。

今もいふ通り、機械が出現してからの多數人間は、單にその補助機關として勞働するに過ぎない。創意が加へられるでなし、興味が與へられるでなし、隨つてまた、大して熟練を必要とする譯のものでもない。老幼が婦女であつても、大の男に伍してさほど優劣が問はれない結果は、擧げて一定時間内の肉體勞働を切り賣りするに傾かしめ、双方の競爭が勞働賃銀を相對的に低下せしめればせしめるほど、收入減少を補償すべく愈よ多くの老幼婦女を勞働場裡に投入し、追ひつ追はれつ最後の淦端場は『貧ゆへの……』劇と相關して本篇の結論を導くのであるが、兎にも角にも、人間に對する機械の

支配は、斯くして量的にも質的にも次第に擴大深化したことは疑ふべくもない。一方これに對し、機械そのものも亦不斷に進歩を遂げ、ヨリ精巧なる機械は更らにヨリ精巧なる機械に轉化して、日新月歩的に人間支配の基礎を鞏固ならしめ、愈よ出でて愈よ距離を隔絶すると見なければならない。

『工場に於いては、機械に勞働者が仕へるのである……勞働要具の運動に勞働者が從つて行かねばならぬ……死んだ機構が勞働者から獨立して存在し、勞働者は生きた附屬物としてこれに併合されてしまふ』（拙譯改造社版『資本論』第一冊四〇五頁）

實際、マルクスのいふところに寸毫の嘘はなく、而も斯かる結果として、我々は彼からまた次の如き事實を教へられる。

『勞働要具の劃一的な進行に技術上勞働者が隸屬せしめられ、且つ勞働總體が男女老幼様々な個々人に依つて構成されるやうになると、玆に兵營的な規律が造り出されることになる。而してこの規律は更らに、完全なる工場規律制度となり…筋肉勞働者と勞働取締人、産業上の兵卒と下士との分業を生ぜしめる』

（同上四〇六頁）

衞兵の分割と同時に、機械はその規律的運動に隨伴せしめて、彼れの附屬物の運動をも愈よ規律的ならしむべく強制する。けだし『勞働者階級の反抗が次第に増進するため、勞働時間を思ひ切つて短縮』しなければならぬ外部的必要等もあり、かたがた『同一の時間に於ける勞働支出の増大を、勞働力の緊張の増進を、勞働時間の氣孔塡充の濃密化を、語を換へていへば勞働密度の増進を……勞働者の上に強制する』必要があるからに外ならない。

『機械組織が進歩し、機械勞働者といふ特殊な一階級の經驗が蓄積されるにつれて、勞働の速度と隨つて能率とが原生的に増進して來ることは自明の理である。斯様にしてイギリスでは、半世紀間に亘り、勞働日の延長と工場勞働の能力増進

とが兩々相携へて進んで來た。だが、熱病的活動の暫行的發作でなく、寧ろ日毎に規則正しく反覆される劃一的な活動を特徴とする勞働にあつては、勞働日の大さと勞働の能率とが互に排除し合ふ結果、勞働日の延長は勞働能率の低下とのみ、反對に勞働能率の增進は勞働日の短縮とのみ、兩立するといふ限點に結局到著せねばならなくなる……』

(同上三九〇頁)

『勞働日の短縮は先づ、勞働を壓縮すべき主觀的條件、語を換へて言へば、一定の時間により多くの力を流動せしむべき能力を造り出すものであるが、斯かる勞働日の短縮が法律を以つて強制的に勵行されるやうになるや否や、資本家の手に保有されてゐる機械は、同一の時間により多くの勞働を搾出すべき組織的に充用される所の對象的手段となる。これは二つの方面から行はれる。即ち一方には機械の速度が高められる結果、他方にはまた、同一の勞働者に依つて監視さるべき機械の範圍、換言すれば彼れの勞働すべき範圍が擴大される結果として行はれるやうになるのである。機械構造の改善は、一部的には勞働者の上により大なる壓迫を加へるについて必要であり、一部的にはまた、勞働日が制限されるとき資本家は生產費を嚴格に節約せざるを得なくなる故、機械改善は勞働の能率增進におのづから伴ふ所の現象となつて來る』

(同上三九三頁)

以上、野暮を承知と申しながら、些さか引用文の長きに失したことは自認するが、而も加藤美倫先生のいはゆる『是丈は心得おくべし』に倣つたものと御諒察を乞ふ。

四

マルクスの引證は工場勞働の內部だけに限定されてゐる。然しそれは、筋肉勞働と同時に頭腦勞働にも適用され、從つて萬人の生活全般に適用さるべき眞理であつた。何故ならば、機械は單に兵卒としての筋肉勞働者や、或は下士とし

ての勞働取締人ばかりでなく、各級の將校を代表する資本家と彼れの使用人的一黨をも、同時に規律的運動に追隨を餘儀なからしめるからである。けだし機械の生産力は、何千百萬人分の手足に匹敵すべき威力を有する限り、これが休止は何千百萬人分の勞働力發揮を休止せしめ、惹いて莫大な損害を招來する所以でなければならない。この損害を免れんとすれば、絶對に機械の運動を休止させないことが肝要である。少くとも、これが一定時間の繼續を豫定する範域に於いては、好むと好まぬとに拘らず、人間は機械の運動に附屬して勞働するの外はない。而も機械の運動は飽くまで規律的であり、一切の不檢束を許さないとあれば、人間も、機械的な規律を遵守すべき必要に當面させられる。機械の運動が急速を加へれば加へるだけ、人間の勞働も急速を必要とすることと言ふまでもない。

一本のピストンの開閉度數、一枚のベルドの旋廻度數は、斯くして人間勞働の緩急を自在ならしめる。玆に機械に依る人間の支配は完全に確保され、ヨリ優秀な機械が發明される度び毎に、人間の機械に對する相對的關係はヨリ劣惡となり、次第に悲慘を加へるのは必定の運命である。ところが一方、機械における優劣は、偏へにその生産力の大小に依存すべきを以つて、不斷なる機械の進歩發達は不斷なる速度の增進高上を意味し、嫌が應でも人間は、機械の速度に併行して引きづられて行かなければならない。斯くて機械は『同一の時間にヨリ多くの勞働を搾出すべき組織的に充用される所の對象的手段』となると共に、絶えず人間をセキ立てコキ使ひ、やがて『勞働の能率增進におのづから伴ふ所の現象』を導き出すのである。馬はロヂナンテでも乘手はドン・キホーテならぬ正銘の騎士、喘ぎ疲れながらも手綱の一鞭に疾走して行く。

今や速度の增進高上は、空間的にも、時間的にも、著しく距離の觀念を變革せしめるに至つた。親類縁者と水杯で別れた東海道五十三次の旅行は、今や特急列車の十時間余りに短縮され、間もなく飛行機の二時間に短縮されんとしつゝある。一人が一時に一錘の絲つむぎは、今や千二百錘の紡績となり、昔に比較して千二百分の一に短縮された譯である。

人生萬事いづれも然る以上、昔の一時間乃至一里の觀念と今日のそれとでは、根本的な革命があつたことを知らねばならぬ。

『時は金なり』といふ紅毛者流の諺は、成るほど彼等のマンモニズムを暴露したものではあらう。だが、同時に、それ自體に於いて、パンクチュアリティーを最高水準とする彼等の資本主義道德を表示したとも解すべきである。假りに紡績の例を取るなら、從來に比較して千二百倍の勞働が凝集され得る限り、一瞬一刻と雖も時間の無駄を省かんとするに傾くは當然である。與へられた一定の時間は出來るだけ有効に充用し、天道様は素より我れと我が身にも申し開きを立たしめんとする努力は、機械の外部的作用と相俟つて『勞働密度の增進』を驚くばかり助長しつゝある。エフイシエシーといふ。能率增進といふ。これ同一の時間に於いて、如何に勞働密度の增進を達成すべきかの研究で、物理的と同時に心理的の兩方面から科學的研究が奬勵されてゐるが、それ自體は、人間を機械と同視する見地に出發したものである。

五

既に社會の大動脈たる筋肉勞働の部面に於いて、以上の如き機械支配が嚴酷に行はれてゐるとすれば、これから分流する小動脈も亦、勢ひ規律的機械に依る規律的支配を免れることが出來ない。例へば心臟の一呼一動に依り、あらゆる毛細管の末節まで一呼一動するやうに、一切の人間運動は機械運動に從ひ、その速度への協調を余儀なくされる。現に機械的規律を最も如實に代表する時間的制約は、勞働者とか資本家とかの階級的差違を超越し、紡績工とか會社員とかの職業的差違を超越して、あらゆる人間を共同に緊縛してゐるのである。

午前八時の就業に間に合はせんとすれば、六時に起床して顏を洗ひ、朝食を取り、新聞を讀み、衣服を著け、斯くて七時半には家を出る。途中の乘物に二十五分を費やし、やうやく規定の時刻を五分前に驅けつける。若しその順序の一つで

も狂つたなら、彼れは忽ちにして『遲刻』しなければならぬ。斯くて仕事が始まれば、或る者は紡績機械に附屬し、或る者は出納帳簿に附屬するといふやうに、それ自體から己れの儲けは一文も生み出せず、何等の興味も伴はぬ無味乾燥な勞働を反覆して、晝食休憩、午后も同じことを繰り返へし四時退勤、それから何にをやらうと隨意だが、どうせ手から口への連中とて大した贅の出來る筈はなく、午後十時には睡眠に就くことを余儀なくされる。翌くる日も、翌くる日も、照る日曇る日も、同じことを同じやうに繰返へして行く。即ち彼等は、啻に生産生活の部面に於いてばかりでなく、消費生活に於いても、機械的規律の遵奉を強制されてゐるのである。

勿論、數多い中には、かうした時間的制約から超越し得べき有閑徒食の人間もあらう。だが、彼等とて同じこの世の姿姿に棲息してゐる以上、換言すれば、他人との交渉に依存して社會生活を營む以上、好むと好まざるとを問はず、便宜の上から大多數を支配する機械的規律との協調が必要となつてくる。當世流行のイデイオロギーの論法を借用すれば、幾多高邁な理屈も發見されようが、詰まるところは實生活の便宜に要約される。

機械は斯くの如く、直接に社會の生産に關與する者ばかりでなく、これに無關係な者をも間接に支配し、更らに生産部面から消費部面にまで魔手を延ばすに至り、人間はその物質生活と共に精神生活をも機械の犧牲に提供せねばならなかつた。

今や機械の速度は、ヨリ高きものから更らにヨリ高きものへと進化し、瞬時も停止するところを知らない。必然に人間も、瞬刻に增進する機械にセキ立てられ、後から後からと斷えず焦燥に追ひ詰められてゐる。現代の社會を掩蔽する人心の浮動は、一因に素より生活不安を胚胎するところであるが、機械に依つて斷えず追ひ迫られてゐることも、確かに有力な一因として作用してゐるのである。ピストンの開閉度數が迅速を加へるにつれ、ベルトの廻旋度數が迅速を加へるにつれ、人間の心理活動も亦必然に迅速を加へる。現に當今の時代に歡迎される詩歌文章は、格調も平仄も無茶苦茶、短波な

リズムと急速なテンポで神經作用を眩惑刺衝する種類のものに限られてゐる。

活動寫眞の流行もその通り、それが『光と波の音樂』と喜ばれる所以は、目まぐるしいばかり變轉する事件と場面の變化が、性急な現代人の好尙に投じ得たからに外ならない。スポーツの歡迎も然り、ヂヤヅの繁昌も然り、チヤールストンの橫行も然り、その他、等、等、等。ありとあらゆるもの、悉く機械の速度に直接間接の影響を蒙らざるはない。さればこそ、太郎冠者の『高速度喜劇』も生れ、サンシヤインの『海水浴喜劇』も生れた。愚にもつかないといふ段になれば、天下これより愚につかざるはないが、而も多大の人氣を吸收し得た所以のものは、偏へに速度的適用が時代精神と合致し得たからであらう。

六

文藝や遊藝は素より、武藝すらも古來は男女の『たしなみ』と呼ばれ、實用的必要に役立たしめる意味よりも、虛用的必要から教養を促がされる場合が少くなかつた。即ち身體の鍛練とか、精神の修養とか、總てさうした間接の目的に重きが置かれ、時にはその修得を周圍に誇示する手段として利用されたのである。隨つて、その極意に到達するためには『日く言ひがたし』の禪的悟得も必要であり、手數のかかること夥しきものであつた。然るに機械の充用が發達し、萬事に一瞬一刻の無駄を省略しなければならなくなつた今日では、よし假りに時間と身體に閑暇が與へられた者でも、こんな廻りくどい手數を敢て忍ばうとする醉狂者は見られない。これ前述せる如く、社會を擧げて性急な上にも性急を加へ、有閑者をもその濁流に捲き込んでしまつたからである。

斯ういふ時代になると、外部に對する見榮の誇示は、寧ろ有閑的であるよりも活動的であることが效果的である。そこで文化生活なるものが時代人の憧憬となる。バンガロー住宅、台所電化、斷髮洋裝、お定まりの寸法は時代の流行を席捲

しつつある。

元來、文化生活なるものは、家族共勞を余儀なくされた人々が、家庭生活の煩雜を出來るだけ省略しようといふところから考案したのであつて、本來は少しも虛榮的要素を含まなかつたのである。即ち機械の進動と併行を余儀なくされた人人が、窮余の一策として案出したものに過ぎない。妻や娘を仕事場に送つて家庭勞働の分擔者を失つた結果は、せめて台所の電化で勞働能率を增進し、その不足を補はうといふ必要に出でてゐる。斷髮や洋裝も、それ自體を活動に便ならしめ、以つて彼女等の勞働能率を十分に發揮しようといふ目的に出でてゐる。必らずしも、ハイカラを氣取らんがためではなかつた。

だが、當人はハイカラのつもりでなかつたにしても、斯かる風俗姿態が外部にハイカラな印象を與ふべきは想像に難くない。けだし『必要は萬物の母』といはれる通り、あらゆる必要は一切の趣味好尙に對しても母胎たり得るが故である。機械の速度が心理の速度を決定し、いはゆる『高速度喜劇』に迎合する心理的變化が立證されるなら、台所裝置が能率化し、容姿服裝が活動化したことに對しても、時代的美觀の移動が行はれ得ることは當然であらう。人間が悠長でよかつた時代には、長袖が美であり、結髮が美であり、邸宅が美であり、その他、茶ノ湯も、仕舞も、歌舞伎も、淨瑠璃も、三味線も、それぞれに一個の『美』を所有してゐた。今でも確かに美は美であらう。ただ然し、それは余りに靜的な美である。地には車馬が交錯し、空には飛行機が逆轉し、後から後から追ひ立てられるやうに勞働を強制され、機械の爆音と煤煙の渦卷の中で狂踏亂舞する現代人に取つては、まるで『夢の世界』の子守唄と擇ぶところがない。如何にその『美』が卓拔であつても、これでは余りに緣が遠ほすぎる。多少は卑俗でも、或は蕪雜でも、時代人の活動的要求にもう少し緣の近いものでなければ、決して心を惹かれることがないであらう。斯くして裾模樣の代りに洋裝を、丸髷の代りに斷髮を、婦人美の新しい對象として擇んで行く經路の必然性は如實に看取される。

實際上の必要から、余儀なく斷行した服裝容姿の革命は、右の如き經緯を經て一個の新しい美を創造し、やがて時代的審美眼に新しい標準を提供するに至つた。事態が此處まで進轉すると、實際上の必要は棚に上げ、長面も丸顏も猫も杓子も、押しなべて新しい標準への模倣に寧日なく、やがて熱病性を帶べる流行勢力を築き上げるのである。それもこれも、實は『速度』を基調とする機械文明が齎らせる副産物で、謂はば現代生活のプロフイールとも見られる。

七

服裝や容姿の流行が熱病性を有つと同じやうに、思想の流行も著しく熱病性を帶びてゐる。隨つて思想も亦、時代色の感染を免れないことが知られる。

元來からいへば、機械は科學の申し子であるから、機械時代には科學萬能で思想の流行などは有り得べからざるやうにも考へられる。然し科學が萬能であればあるだけ、それなりに『科學』を中心とした流行思想もおのづから存する。天體運行の理法をそのまま社會生活の理法に應用し、自然科學に對して社會科學の名稱を唱へるものが、現代思想界の壓倒的勢力を支配しつつあることは先刻御承知と思ふ。これに對しては、特に説明を加へる必要も認めないが、その餘沫的存在は多少とも論題に關係があらう。

新しい藝術運動に産業派と名乘る一團がある。これは藝術の分野に科學の移植を試み、機械主義に立脚して藝術を構成する、といつた程度の主張を有つものであるらしい。隨つて彼等の藝術は、情緒に依存せずして意識に依存し、また感情に立脚せずして理智に立脚すべきを説いてゐる。社會生活から天體運行の理法を抽き出さうといふ努力にしてからが、それ自體は、多大なる牽强と附會とを暴露して來た。而も彼等は、これを藝術活動に適用しようといふのだから、無理は最初から承知の上なるべく、唯だそれが如何にも『科學的』であるかに錯覺するところに詩的興奮を覺え、僅かに藝術的滿足

を追求してゐるのであらう。故に本質的には、彼等の謂ふ『科學的』とは最も『非科學的』なそれを意味し、正反對の立場を固持するダダイズムと同類項に圍まるべき存在である。而も尙ほ科學の名稱に執着するところは、機械の桎梏に緊縛される現代生活の斷相を如實に露出したものである。未來派、立體派、三角派、表現派、象徵派、等、等、これらの藝術運動の主張は、何づれも歪められし現實の正しき表現を看板としてゐるが、その限りに於いて『科學的』精神の末梢的反映と解して差し支へない。而も彼等は、悉く原色的塗布や怪奇的構圖に陷り、有りの儘の現實とは似ても似つかぬ不自然を誇張するに過ぎなかつた。これ前述の二派と共に括弧され、十把一束的に論斷さるべき所以である。

とはいふものの、これらの新しい藝術運動は、繪畫、彫刻、音樂、詩歌、文藝等の諸分野に於いて、次第に勢力を增大しつつあることを見逃してはならない。何が故に然るか。彼等の謂ふ『科學的』な要素に負ふのであるか。或ひは他の別個な要素に負ふのであるか。

現代のいはゆる藝術は、餘りにも科學前派であり過ぎる。舊來の約束を墨守するばかりで些さかの意味もなく、僅かに枯淡とか豪壯とか仙味とかの境地を追隨し、昔ながらに變りなき『美』の幻影を搜し求めるのみである。而も斯くの如き靜止的な美が、現代人の心奧に何ら訴ふべき力なきこと前述のとほりであるが、舊藝術家は依然として水を欲する者に石を與へてゐる。これに反して新藝術家は、よしんば粗野低調なりにも活動的な美を提供するから、次第に人心の投合を期待された譯である。一般思想にしても同樣、陳腐な穩健中正論や仁義忠孝論の御託に耳を藉す者はなく、左傾だらうが右傾だらうが、正體をハッキリしたものが歡迎されてゐる。赤か黑か、敵か味方か、右か左か、イエスかノーか、凡そ中間の微溫的な存在は次第にその立場を失はんとしつゝある。

思想や藝術の極端化的傾向に併行し、服裝や裝身具や、さては化粧法までが日に增し怪奇性を露骨にして來たのである。銀座街頭のモダン・ガールを見よ。斷髮洋裝はお定まりとして、瞼は薄黑く頰は薄紅く、唇は毒々しいほどの眞紅に

燃える。他の一人を見よ、彼女は大形友禪の著物に單色無地の羽織を纒ひ、ウェーヴせる頭髪を百舌鳥の巣よりも亂し、足よりも太く膝よりも短かき柄の先端に極彩色のパラソルを開き、寸餘のフェルト草履に偉大なる胴重を載せ、如何にして蹴出しを靡かせんかを惑ふが如く濶歩する。同じくモダン・ボーイを見よ。喇叭ズボンにツバ廣の帽子、モミアゲ長く眼鏡はロイド、ヴイクターで習ひ覺えた一節を口笛に托し、コーヒーばかりが四杯目のお代りである。寺小屋の文句と事變り、いづれを見てもモダン育ち、若し米國製活動寫眞で彼の國のフラッパーとやらを見慣れなかつたら、餘りの怪奇さに驚倒せぬ者はあるまい。

八

機械の進歩が人間の衣食住生活を極めて單純化し、機械の進動に併行し得るだけの敏活性を附與したことは、それなりに首肯された道理である。然し單にそれだけでは、必ずしも反面に怪奇性を助長しなければならなかつた理屈は見出されない。これは同じく機械の影響とはいへ、その速度的部分に由來すると同時に、次の如き理由を交錯的に胚胎したと解すべき部分が多い。

機械生産の増大が、成年男子と共に老幼婦女をも擧げて勞働場裡に沒入せしめたことは、すでに前段で説明した通りである。ところが勞働への參加は、それ自體が神身兩面の苦痛を隨伴する。即ち何ら創造の喜びを齎さず、無味乾燥なること砂を噛むが如き勞働を反覆し、機械の附屬物として後から後から仕事に追ひ立てられる結果、勞働は苦痛そのものとして彼等に反映するのである。而も一家を擧げて勞働場裡に走らしめた結果、家庭は家族各員の寄合世帶に成立する合宿所の如き觀を深め、從來の温情と慰撫とは家庭において望むべくもなかつた。斯くて彼等は、出でて乾燥なる勞働を繰り返し、歸りて酷薄なる家庭に起伏し、滿目荒凉として、疲勞を慰やし元氣を復へすべき機會とて與へられない。されど砂漠

にオアシスを求めんとするは、何人も免れがたい至情の發露である。彼等はこれを何に求めんとしたか。强烈な刺激に於いてである。生産生活が苦痛であればあるだけ、消費生活に爛熳的な享樂を追求し、生きた生き甲斐をせめても此處に獲得せんとするのである。

實際、人間は機械に依つて飽くまでも性急さを掻き立てられると同時に、あらゆる纖細な感情や微妙な神經を磨滅し、有機物としての人間が無機物としての機械に、次第なる同化を强制されて行く事實は否定しがたい。これ速度的條件と共に刺衝的條件を享樂對象に必要とする理由で、彼等の鈍磨した神經感情に對しては、卑俗でも低級でも、强烈な刺激を與へ得ざれば何らの反應も喚び起こさないのである。殊に彼等は、生きんがために喰ひ、喰はんがために働らくことを餘儀なくされてゐるのだから、洗練しなければ解し得ない趣味や、教養しなければ達し得ない娛樂やは、假りにどれほど尊貴高踏であつても、他山の石ほどにも關係なき無緣の存在たらざるを得ない。そこで八木節といふことになり、鰌すくひといふことになり、コップ酒といふことにもなる。ヨリ簡單に目的が達せられ、ヨリ强烈に享樂し得ることが、善くも惡くも先決の問題である。速度的條件と刺衝的條件とは、二にして一であり、一にして二であり、兩者の國境は判然と區劃することが出來ない。

容姿服裝の單純化が行はれる反面に、その怪奇化が次第に高度となつたのは、實益の達成と同時に趣味の滿足とを二鳥一石し、活動的要求と享樂的要求とに双つながら兼ね備へようとしたものである。婦人の着物に於いて、縞柄が次第に小兒化し、色彩が次第に原色化して來たこと、思想や藝術に於いて、實際以上の誇張が注目を惹き出したこと、これらは八木節や鰌すくひの歡迎と由因を一にし、映畫やスポーツの流行とも同根異種である。

『八時間の勞働、八時間の睡眠、八時間の休養』といふ勞働運動の標語は、如何にも正義人道らしい口吻である。それに違ひもない。然しこの要求の內部には、苦痛の代りに享樂を求めんとする現代的特色が明瞭に提示されてゐる。睡眠は

暫らく問はず、勞働と休養とを斯く判然と分割したことは、それ自ら生産的苦痛と消費的享樂とを二元的ならしめるもので、現代の代償的乃至取引的な傾向を如實に看取せられる。

機械は生産的部面において斷えず人間をセキ立てる。勞働苦痛も亦これに伴つて增大する。反面では生産的部面にあつても、享樂要求は次第に增大され、八時間の苦痛を八時間の享樂で埋め合はせんとする傾向がやうやく著しい。而も生産のための生産にセキ立てられたと同じ度合で、享樂のための享樂にセキ立てられ、瞬間的な燃燒的な享樂對象に刺激を求め、出來るだけ早く出來るだけ多く、享樂に飽滿しようと努めるのである。時代の怪奇的傾向も、その意味から見れば『能率增進』の要素を多分に含み、同時に速力第一の時代色を濃厚に表白してゐるとも言ひ得るであらう。

九

人間の無機物化は、右のやうな事情で、機械支配の程度が增大するにつれて顯著となつて來た。だが、人間は元來が有機物である。如何に無機物化が極度まで進轉するとも、決して機械そのものに成り切ることは出來ない。出來ない結果は、兩者の抗爭をおのづから內部に蓄積すると見なければならぬ。即ち人間に依る機械への反逆が、服從の一面に同時的に培養されてゐるのである。――といふと、如何にも辯證法くさい理屈となるが、あらゆる運動が常に反動を伴ふといふ力學的理解に於いても、それが有り得べきことは察するに難くないであらう。

苟くも隨意と背理とを許さぬ機械の時代に、大手を振つてダダイズムは橫行濶歩してゐる。始めなく、終りなく、目的なく理想なく、氣隨氣儘のボランタリズムを看板とするダダの歡迎は、消極的なりにも、メカニズムに對する欝憤の捌け口が求められたからに外ならぬ。產業派とか構成派とかの運動にしても、結局が機械の戲畫化に貢獻した意味で、同じやうな欝憤ばらしと見て見られないこともあるまい。その他の新しい藝術運動も悉く然り、時代の怪奇的好尙も亦、せめても

の反抗と解さるべき理由が甚だ多い。少くとも、それら一切が『目的意識』的でないだけ、機械主義とは全く背馳したものであること疑ひを容れぬ。斯くてダダ的要素は、執拗なる機械の支配にも拘らず、否むしろ執拗なる機械の支配があればこそ、今や天下に充滿するに至つた。その最も著しい現はれは、計畫的ならぬ偶發的犯罪が、急激に増大した事實に依つても證明せられるであらう。

殺人にしても強盜にしても、從來はヨリ多く斯道の玄人に依つて行はれたものであつた。ところが最近は、それがヨリ多く素人の手に依つて行はれる事實が多く、それだけ計畫的であるより偶發的である場合も多く、惹いては事件の迷宮性と警吏の無能性とを増大せしめた譯である。いま一兩年前からの重なる殺人事件を、思ひ出すままに列擧して見るが、その大部分はいはゆる犯罪的人種ならぬ者の手で行はれてゐる。先づピス健と鬼熊に敬意を表し、龍野の六人殺し、舟橋の五人殺し、葉山の三人殺し、川無の十三人殺し（未遂）大岡山の女優殺し、新宿の女郎殺し、淀橋の酒屋殺し、芝公園の藝者殺し、神田の姙殺し、谷中の赤濟殺し、池袋の下駄屋殺し、さては生子山血染の自動車、板橋は箱詰事件、等、等と算へ來たれば、商賣逆ひの私にだつてこの位は思ひ出せる。全部を入れたら幾千百件か數知れず、要するにその大部分が、素人の手で行はれたことを承知して頂けばよい。例へば大米龍雲とか、吹上佐太郎とか、從來の殺人犯人は先天的犯罪者が多かつたに比し、物取りの意志がハッキリしてゐた譯でなく、憤恨が骨に徹してゐた譯でない人間が、その場の出來心や激情で、フラ〳〵とやツつけたといふのが多いのである。

この現象に對して人は、社會力が衰滅したからだといふ。雨の降る日は天氣が惡い如く、それは當り前のことを當り前に言つたに止まる。だが問題は、如何にして社會力が衰滅したかに在るので、私はこれを風俗に於ける怪奇性を齎したと同じ社會的原因に求めたい。前者に對すれば、人情に於ける怪奇性である。人情怪奇性は風俗怪奇性と同じく、強烈た上にも強烈な刺激を追求する傾向が極度に昂揚された爲め、遂に人命殺傷といふやうな、異常興味の追求にまで發展せしめ

たとは言ひ得ないであらうか。マゾッホやサドーの記録を讀む者は、如何にこれら硬軟兩派の色情倒錯者が「流血」に誘惑されたかを知るであらう。而も今や、多かれ少なかれ現代人は、マゾッホやサドーの亞流たらざるはない。單に性的生活に於てのみでなく、强烈な上にも强烈な興味に沒頭する結果は、正常なものに滿足を求められず、何にか知ら異常なものに誘引されるといふ傾向を導いたのである。斯うした傾向の極端を先行するものとして、世の素人的犯罪者の心理を解剖するのは、必らずしも牽强附會ではあるまい。彼等の倒錯的興味は、人命をもダダ的に取り扱ふやうになつた。

然し殺人犯の例證は、餘りに異常の程度が深刻である。或は例證に適當を缺く場合もないとはいへぬ。もつと手近かな一般現象に還元しても、兎にかく、斬つた張つたの暴行事件が驚ろくばかり增大したのは事實である。この現象に對しては、前述の說明が何等の無理を伴はずして適用され得る。勝つにしても負けるにしても、組んずほぐれつお互ひの肉體と肉體とを擲きつけ合ひ、流血淋漓として格鬪することは、それが彼等の倒錯的興味を滿足せしめ得るからに外たらない。餘りにも規律的な生活に反抗するため、謂はば『野性の呼び聲』に刺激され、文明は次第に野蠻へ還らんとするのではないか。

むべなる哉、獨裁英雄に對する世界的歡迎の熱誠や、である。機械に對して餘りにも自己の微弱を痛感した人間が、彼等の同類に依つて表示された英雄的行爲を理否に拘らず隨喜渇仰する心理は、直ちに米國製活劇や日本製劍劇に陶醉する心理に通じ、やがて時代の流血殺伐の傾向にも脈絡してゐる。

十

人間が支配すべき筈だつた機械は、皮肉にも人間を却つて支配するやうになり、その弊害を斯くの如く露骨ならしめたのである。この弊害は、果して何時の世になつたら匡正されるであらうか。マルクスに依れば、この暴威は一見機械そ

のものに附隨するかと思はれるが、實はその背後的資本の暴威がなす業である。隨つて、資本といふ社會關係の暴威さへ失墜すれば、機械を通じての勞働支配もなくなり、世は泰平無事で機械は再び人間の支配に復歸すると說いてゐる。ところが機械は、今や勞働者ばかりではなく、資本家をもその桎梏に緊縛するに至つた。逆にいへば、資本家は嫌應なしに機械支配を放棄しなければならぬ形勢であり、ヨリ高度なる生産力の發達の結果として自然天然に自壞するといふ。いはゆる資本崩壞說である。マルクスとその亞流は、この見地に立脚して、現代の錯亂的傾向を資本主義末期の特殊現象と見なし、新社會の出現と共に如上の病弊は雲散霧消するものと樂觀してゐる。果たして首尾よく參るか參らぬかは、玉手箱を明けて見た後でなければ判らぬが、浦島太郎の轍を履まずんば幸ひである

現代の資本主義が、果たして末期に該當するものか、或は中期もしくは初期に該當するものか不明である。隨つて、何時になつたら『行き詰まり』が當來するか、また隨つて、何時になつたら落語家と共に描くユトーピアが實現されるか、一切合財は悉く不明といふの外はない。けれども、現代の人心浮動は、直接に機械の速度を反映したものであるから、資本主義が社會主義の世の中になつたとて、機械そのものの發達が停止しない限り、愈よ性急に人心をセキ立てるものと見なければならぬ。同樣に社會の享樂的傾向も、機械の運轉速度と併行して助長されると見て差し支へなかるべく、資本主義と社會主義との關係はこの點に大して影響が有りさうにも考へられない。現に世界最大の資本主義國家たるアメリカはこれも世界最大の享樂追求國民であるが、片や世界唯一の社會主義國家たるロシヤはどうかといふに、その享樂的傾向は必らずしもアメリカに劣るところはなささうである。

それといふのも、勞働は機械に附屬すると附屬せざるとを問はず、それ自體が苦痛を不可避的に伴ふが故である。ゴツトキンが夢想せる如く、機械の最も極度なる發達に依り、人間の筋肉的及頭腦的勞働をすべて免除する時代でも到來したなら、必然に人間の倒錯的興味も或は拂拭されよう。が、然しいつの日にそんな時代が來るのか、お釋迦樣でも御存知な

いところである。

資本主義の時代だから勞働が苦痛であり、社會主義の時代だから勞働が享樂であるといふ理屈は、如何にも尤もらしく說かれてゐるのであるが、然し社會主義の姿だとて、人間の强制勞働と機械附屬とを前提とせねばならぬ限り、どこの理屈をどう押しても、勞働享樂化の理論的是認は發見さるべくもない。そこで善くも惡くも、勞働が本質的に苦痛であることを覺悟すべき必要があり、その覺悟が立つた以上は、人心の浮動も狂燥も、或は享樂的傾向も殺伐的傾向も、免れ得ざる必然の惡と觀念してかかる度胸が肝要である。

『血』と『速度』とに表徵される生活は、素より現代の最も有力な特徵を決定するが、五年後にも十年後にも、更らには次の時代にもその次の時代にも、當該時代の時代色を決定する特徵である。むしろこの傾向は、年を逐うて激甚さを增大することありとも、決して減少することはなからうと思ふ。資本主義であることと社會主義であることとは、これが增減に些さかも本質的關係を及ぼすものではないとすべきだらう。

近世封建社會の崩壞

本庄榮治郎

一 緒言

德川時代は集權的封建制度の時代であつて、史家はこれを以て封建國家の完成せし時代として居る。從つて封建社會の特徴たる階級制度の確立や主從關係の嚴存することは、此時代に於て特に著しきものがあつた。これを他の方面より見んか、封建制度は土地を主要なる生産手段とし、農民を唯一の生産階級とし、その上に武士と稱する特權階級が支へられて居た組織である。德川時代の武士は鎌倉時代と異つて土地を離れた不生産的の階級であつて、彼等は農民によつて養はれてゐたものである。然しこの關係は果して何時まで續き得たものであらうか。

德川二百五十年の間を一口に封建社會と稱し、階級の世の中といふと雖も、經濟社會上の諸現象は刻々に變化し、その前半と後半とに於ては、社會經濟事情は非常なる差異を呈せるものではなからうか、然してこの社會經濟上における種々なる變化は、果して封建制度の維持と相容るるを得べきものであつたであらうか。

二 人口及び都市の發達

德川時代に於て我國の人口狀態は如何であつたか。當時全國の人口總數は明かでないが、増減の大勢は之れを知ることが出來る。即ち德川時代の前半に於ては人口は概して速に增殖せしにかゝはらず、其後半に於ては寧ろ靜止の狀を呈するに至つたのである。

德川時代前半の人口數については、その全數はもとより明かでないが、前田家其他大藩八家より報告せる寛文以降享保年間

の人口數によつて之を觀るに殆んどすべての場合に於て人口増加の勢を示し、減少を示せるは僅かに一個の事例あるのみである。又戰亂後の平和時代に於て人口の激して速かに増殖することは、一般に認めらるゝ所であるから、德川時代の前半に於て人口の増加せしことは疑なき所である。

然らば德川時代後半の人口は如何。八代將軍吉宗は享保十一年以後六年目毎に全國人口數を上申せしめたが、それ等の數字の今に傳へられてゐるものも少くない。尤もその數字には公卿武士及び武家に從屬するものを含まず、無籍者穢多非人の數を加へず、且つ琉球蝦夷の人口を加へざるものあり、十五歳以下については各藩の例規により不同あるのみならず、調査の不完全なるより脱漏重複せることも少からざるべく、全國平民の數についてもその全數を盡せるものではない。故に實際の人口數は以上の數字よりも一層大なるものなりしことを推察するに難くはない。此點に關して從來行はれたる諸説を綜合して考ふれば調査數に對し二百萬乃至三百萬を加ふるの必要あるべく、從て德川時代後半における人口數は概算二千八百萬乃至三千萬の間を上下せしものと見て差支がなからう。然らばその増減の割合は如何といふに、先づ享保十一年の調査數を基とし、最多數を示せる文政十一年の調査數と比較するに、平均一年千人につき僅かに〇・二四の増加に過ぎぬ。享保以後の人口が寧ろ靜止停滯の狀態に在つたことは明であらう。

かくの如く人口増加が停止するに至りしは如何なる理由によるか、思ふに國内の狀勢は太平の餘弊に染み、一般に保守退嬰に陷り、奢侈安逸の風次第に行はれて農村の疲弊となり、商工業は多く株仲間を組織し特權を擁してその發達を期し難く、殊に多大の人口を容るべき大工業の如きは未だ存せず、國民の生活は次第に困難を加ふるに至つた。況や三代將軍以後對外關係は殆んど鎖國的となり、之によつて國内の産業に刺戟を與へ國民の元氣を鼓舞し若くは餘剩人口を海外に移すの途なかりしをや。國家内外の狀勢にして既にかくの如くなる以上は、一定の限度以上に多大の人口を包容し得ざるは明かである。然るにこの一般的傾向に加へて、饑饉疫病等の災厄は頻々として起り、これが爲めに生命を失ひし者も少くない。或は租税負擔の過重により、又は勤儉令の影響により、若くは生活難によつて種々の形式の下に人口の増加することを避け、殊に墮胎殺兒の弊風行はれ、此等の所謂積極的阻障と豫防的制限とは共に人口の増加を妨ぐること頗る大なるものがあつた。勿論此等の飢饉、疫病、墮胎、殺兒等は德川時代の前半に於ても存した次第であるが一般に人口増加の勢、大なる場合と、一般社會狀態が最早多數の

人口を容るる能はざるに至りしが如き場合とに於ては、此等事件の影響は到底日を同じうして語るべくもない。加之墮胎陰殺の如きは後年に至つて生活の困難を加ふると共に盛に行はれ、又飢饉の影響は最も著しいものであるが、而も享保天明天保の三大飢饉がたゞさへ人口增加の困難なる德川時代の後半に生じたるが如きは、何れも德川後期の人口增加を一層甚しく阻害せしものといはなければならぬ。

以上述ぶるが如き人口狀態の變化によつても、德川時代の社會經濟狀態がその前半と後半とに於て大に異るに至れることを知り得るであらう。

上古以來王城の地、地方廳の所在地や交通の要路等には都市が起つたものであるが、德川時代に入つては全國各地に都市が發達し特に城下を中心として城下町を形成するに至つた。地方分裂の勢甚しく各豪族が山岳其他天險の地を選んで城廓を築きしときに當つては、所謂城下町の出現は困難であるが、小豪族の領地が次第に統一集中せられて大領土となり、山地の築城が平地に移り、人民の集住を容易ならしむるに至つて城下町は大に發達し、大名の領內經濟の中心地となつた。德川時代における大名の居城は最早城寨といふよりは、政廳乃至邸宅たる性質を有するものであり、軍事的なるよりも寧ろ政治經濟社會的意義を有するものであつた。それがためには交通の便、物資の集散、士民の來住等の條件が顧慮せられたものである。元來城下は城廓を中心として構成せられ、武士を首腦とせる都市であり、從つて消費地たるものであつたが、大名がその城下を殷賑ならしめんとした結果、此處に來つて商業に從事する者多く、又國產奬勵の結果、城下を中心として小工業の起りしものも少くはなかつた。かくて城下町の實力は武士よりも寧ろ町人に移つたものであるが、更に町人の勢力が勃興するに至るや、從來の城下町とその性質を異にせる經濟的都市たるものも起るに至つた。例へば德川時代以前より城下町として存在せし八幡は後に廢城となつて商人町となり、大阪は始め門前町であつたのが後に城下町として發達し、市の中心は城廓の下を去つて商屋の巷へと移つた。其他宿場町、港町、金山町の如きものも起るに至つた。此等都市の發達は勿論德川時代の後半期に於て著しく、地方農民が其業をすてて都市に集中し、都市の膨脹を見るに至つたことは當時注意すべき一現象であつた。

當時農民は租稅を造り出す器械の如くに考へられ、極めて憐れな生活をなせしものであるが、農民の中には耕作を廢して都に上り、商人となり、或は日傭夫となり、都會生活を享樂した

ものが少くはなかつた。大都會殊に江戸の膨脹が地方よりの移住による所多きは一般に認めらるる事實であつて、既に享保頃には都市生活が大に發展するに至つたことは徂徠の「太平策」等に明かである。文化十三年著「世事見聞錄」にも同樣都會生活を享樂する有樣を詳述し「國々は人減りて難儀殘り、繁花は人拾て難儀發す」と述べて居る。「江戸は諸國の掃溜」といふ言葉のあるによつても、地方民の都市集中の有樣を窺ふに足るであらう。そこで幕府は江戸來住者の歸農を獎勵したものであるが、十分なる效果を奏するを得ず、天保の改革では積極的に人返しの方法をとり、原則として在方の者の江戸移住を禁じ、又既に江戸に入込める者にても永年營業をなし、又は妻子眷屬を有するものの外、一期住同樣の者は歸鄕せしめ同時に農民の江戸に出稼する者に對してはその年限を定め、期に及べば必ず歸農せしむることとした。然しこの政策も一時出稼の員數を減じたのみであつて、十分なる效果なかりしものの如くである。

三　經濟上の變化

德川時代は「米遣ひの經濟」の時代なりと稱せられる。是れ當時所領の大さを示すに石高を以てし、大名旗本一般武士に至るまで、その俸祿は米穀にてあらはされ、租稅の收納も亦之を以てする等、財政經濟の基礎が米穀に存せしがためであつて、必ずしも交換の媒介物が米穀であつたことをいふものではない。勿論當時の米は或る程度まで貨幣の作用をなしたものであるが、一般交換の媒介物としてはこの時代に於て貨幣が次第に普及し假令今日の如き純然たる貨幣經濟の時代にあらずとするも、貨幣の使用普及は前時代に於て見る可らざる發達を遂げたものであつた。思ふに德川の初世金銀鑛の産出額頓に增加し、屢金銀銅貨幣の鑄造が行はれたのみならず、參覲交代制度はこの道中並に江戸滯留の間に於て通貨の使用を促進せしこと頗る大なるものがあつた。更に城下町の發達商工業の發展によつて、武士も庶民も貨幣を使用してその所要品を調達するを常とするに至つた。慶長元和の頃、金銀は既に流通して居たが、貨幣が田舍に迄も普及するに至つたのは元祿以後のことであつて、金持（カネモチ）（銀持（カネモチ））なる言葉は當時既に財産家の意味に使用されてゐたものであつた。かくて從來唯一の富として考へられた土地の外に金銀が最も重要なる富となり、一方に貴穀賤金の思想が喧しく唱へられても、實際に於ては貨幣尊重の思想が一世を風靡し、都會はもとより田舍迄へも貨幣が普及するに至つたのである。殊に都會に於ては町人が貨幣たる富を積んで財政の窮乏に陷りし武士階級に對抗するに至つた。實に容易ならざる經

濟狀態の變化ではないか。

平和の打續くに從ひ國民の生活程度は上進し、貴族富豪の間には奢侈的欲望が增大し、工藝品に對する需要增加し、且諸藩に於て國產奬勵策が行はれたため、織物、陶磁器、漆器、銅器其他種々なる工業が各地に發達した。而して茲に注意すべきことは、諸藩に於て工業の奬勵が行はれたと同時に、之を家臣たる侍又はその家族に授けて、その窮乏せる生活を救濟せしこと是である。之を家中工業といふ。

當時の工業組織は諸大名が特に自家用として、例へば特別の窯を築きて陶磁器を燒かしめ、生產物を一般に販賣することを禁ぜしが如き、即ち王朝時代の宮廷工業の如き形式のものもあつた。然し乍ら一般の形式としては手工業又は家內工業の形式を採れるものであつて、農民の副業的生產品が商人に買集められて市場に出づる場合は勿論、都會の工業勞働者の場合でも、必ずしも代金仕事のみではなく多數の分散生產が織屋又は仲買に依つて統一さるること西陣の如きものもあつた。此等のものが所謂家內工業の形式を具へをることはいふ迄もない。當時は勿論工場工業といふものなく、未だ機械の使用も行はれざりしものであるが、道具の利用は大に進み、家內工業には資本的の經營もあらはれ、應需生產のみならず商品生產も興るに至つたのである。

當時商業の中心地たりしものは大阪であるが、江戶も次第に繁昌して商業盛んとなり、各大名の城下にも自ら人民が集住して地方的の政治經濟上の中心を形成するに至つた。加之當時における工業の發達は其配分機關たる商人に活動の機會を與へ、この點に於ても商業の發達するに至りしことは當然である。商業の發達によつて取引の範圍即ち市場は擴大されて全國的となり、三都特に大阪を中心として全國各地に經濟上の連絡が出來上るに至つた。又他方には問屋、仲買、小賣商等の機關が發達して生產者と消費者との間に種々なる仲介者を生ずるに至つた。

商業の發達、貨幣の普及に伴つて金融機關や信用制度も發達するに至つた。殊に商業都市たる大阪に於ては頗る繁昌したる金融機關が存在して居た。即ち金銀の兩と錢とを交換する意味の兩替より更に進步して今日の銀行の如き業務を行ふ兩替屋があり、預金貸用の外に諸種の手形も流通し、また掛屋といふ如き特殊の商人もあらはるるに至つた。

德川時代に於て農民を治むるの法は一言にして盡せば彼等の生活を向上せしめざることに在つた。即ち百姓をして「難儀にならぬほどにして氣まゝをさせぬ」ことが治農の根本方針であ

つた。これがために當時の百姓が極めて慘じめな生活をなせしものであることは既に述べし如くである。然し彼等と雖、人間である以上は何時までも牛馬の如き生活に甘んずるものではなく、世上一般に生活の向上するにつれ、殊に町人の奢侈的生活を見るに及んでは自然多くの生活費を要することゝなり、殊に屢凶作若くは飢饉の災厄を蒙り、この負擔の過重と生活の向上と且飢饉の災厄とによつて農民の生活難は殊に窮迫せる狀態にまで押し進んで來た。この生活困難が齎せし結果は各方面に現はれた。墮胎殺兒や都市集中によつて農村人口の減少せしこと、農民が農耕の業を廢して田畑荒廢に歸することの少からざりしこと、小作爭議が享保以後幕末にかけて行はれしこと、百姓一揆の屢々起るに至りしこと等これである。凡そこれ等の種々なる現象は何れも農村の疲弊を證明するに足るものであるが、その狀況は何れも徳川中世以後に於てあらはれ來りしものであつて、他の經濟上の諸現象と同じく、徳川時代の初世と中世以後とに於ては農村の事情が著しく變化せしことを認めなければならぬ。

四　財政の窮乏

徳川幕府の初期に於ては財政は甚だ潤澤であつた。家康が慶長十一年に駿府に移つた時、これまで江戸の西城に貯へ置きし黄金三萬枚、銀子一萬三千貫目を其まゝ秀忠に與へたとき、老臣に戒めて曰く、これは自身の奉養に用ゐず、天下の物と思ひ、此上にも積貯ふべし、平常の國費は年毎の入額を以て辨じ、成たけ冗費を省き、金貨を多く貯へよ、かく貯へよといふは、何の爲めかといへば、第一は軍國の費用に備へ、第二は不慮の大災に際して賑救の費に充てんがため、第三は凶荒に備へんがためであると諭いた。家康は消極的なる節儉政策と他方には鑛山の獨占、外國貿易の伸張等の積極的政策とによつて幕府財政をかくの如く潤澤ならしめたものであるが、駿府に退隱して後も倘理財の道に心がけ、その駿府における遺金は實に約二百萬兩に達したと稱せられる。

然るに四代將軍のとき以來財政はやゝ欠乏を感ずるに至つた。明曆三年一月の江戸の大火に際し賑恤のために費せし所のもの甚だ多く、類燒各町へ救與した金額だけでも十六萬兩に達した。其後諸侯への拜借金、復舊土木の費用等巨萬の費である。且、禁裏兩度の御造營があり財用は常に乏しきを告げて居た。然し未だ大なる破綻を見るに至らなかつたが、やがて元祿奢侈の時代に入つて財政は非常に窮乏するに至つた。五代將軍綱吉は華麗を好み施與を事とし、建築の費用に巨費を要し、堂

りに土木を起して累世の貯財を消費したるに加へて、當時地震大火等の天災屢起り之れに對する救恤及修築の費用も少からざるものがあつた。然るに他方には又金銀鑛發掘の減退、正貨の海外流出があり、財政の局に當れるものが私曲を營みて國用を傾け、收納に不正のことが行はれて幕府の歲入減少し府庫遂に空しく、財政は甚しく窮迫狀態に陷るに至つた。綱吉が日光に參詣せんと欲して而も國用欠乏のため之を果さざりしが如き如何に財政の窮乏せしかを知るに足るであらう。

家宣家繼のとき新井白石が鋭意財政の整理に力めたが、殊に八代吉宗のときには財政の整理伸展のために種々盡す所があつた。即ち先づ幕府初世以來の方針たる節約の令を布き參覲交代の制度に改正を加へて上ケ米の制を設け、足高の制度を立て、租稅徵收方法に改正を加へ、或は米價調節に力め、新田の開發、貨幣の改鑄を斷行せる如きこれである。就中諸侯の在府一年なりしを半年に短縮し、その代りに一萬石につき百石宛の米を幕府に納めしめしことは、その行はれたること僅かに前後九年間に過ぎざりしとするも頗る注意すべき政策であると思ふ。かくの如くにして享保七年より同十六年に至る十ケ年平均に於ては米三萬五千六百五十四石、金十二萬七千五百五十七兩餘を餘し、享保十七年より寛保元年に至る次の十ケ年平均に於ては米四萬八千五百七十五石金三十七萬四千五百十九兩を剩し得たと稱せられる。

然るに家重の代に及んで紀綱弛み財政は又再び紊るるに至つた。そこで寶曆五年以後三ケ年間の歲出の一部を豫定し猶引續いて節約の方針を採るに至つたのであるが、次代家治の時代は所謂田沼時代であつて、役人の私曲、士風の頽廢甚しく、殊に大火飢饉その他の天變地異相ついで起り幕府も非常なる財政困難に陷つた。次代家齊のとき松平定信出でて所謂寛政の治を行ひ、儉約の勵行、運上の廢止、舊債の棄捐、七分積金の法を創むる等の政策をとり財政狀態は多少刷新せられ、寛政元年より十年に至る間に府庫の剩餘は金三十三萬八千兩に上つたといふ。然るに文化文政の時代となつて奢侈世を蔽ふの有樣であり、幕府の費用も增加し、財政の窮乏に苦しまざるを得なかつた。天保以後窮迫益甚しく年々收支相償はず財政は破綻に瀕するに至つた。

之を要するに德川幕府の財政は、その初期を除くの外、常に財政欠乏に苦しみしものであつて享保寛政の治に多少の餘裕を生じた如くであつたが、それも一時的であり幕末には財政紊亂の狀態に達したものである。而して各藩の財政も亦幕府に於けると同じく時代の經過と共に一般に窮乏に苦む有樣であつた。

五　階級制度の弛廢

封建社會は階級制度や主從關係の確立せることが其特徴であつた。從つて一階級から他の階級へ移ることは極めて困難であり、各階級の中に於ても種々なる差別があつてそれが嚴重に維持さるべきものとせられてゐた。

當時の社會階級をあらはすものとして一般に士農工商の詞がある。武士は最も貴く、農民之に亞ぎ工商の町人は最下位に列せしめられたものであり、この外に公家神官僧侶儒者穢多非人等の階級もあるが、最も重要なる大多數者の屬する階級としては武士、農民、町人の階級であつた。

階級制度は武士階級の内部に於ても嚴重に立てられたものであつた。將軍の下には大名がある。大名には御三家、御家門、譜代、外樣の別があり、國主、準國主、城主、邑主の格がある。幕府直屬の武士には旗本御家人の二種があつた。彼等は家格により官位の昇進、城内の座席は勿論、邸宅建築の樣式、禮裝衣服の制限、行旅行列の道具供揃より登城の先後、獻上物、拜領物に至るまで一定し聊も分に超えたることはなすを得なかつた。幕府より發する公文書にもまた一定の形式があり、樣や殿や御の字の書體にまで身分によつて區別せられたものである。

かくの如く格式は大に整ふに至つたが、眞實の主從關係たる精神的結合力に至つては、これに反比例して次第に薄弱とならざるを得なかつた。更に農民についても村役人と一般農民との間、地主と小作人との間に大なる區別があり、町人についても親方と徒弟、家持と借家人との間には踰ゆ可らざる溝渠があつた。要するに武士階級内に於ては勿論、その他の階級内に於ても階級的區別が嚴存し、農には農の禮あり、商には商の仕來りあり、工は亦工の作法を保つといふが如く社會のあらゆる事柄について故例格式に拘泥し、表面上の形式は大に備はるに至つたのであるが、その内實に於ては空虚となり、表面上の整備は實質上の破綻となる有樣であつた。

既に兵農分離せし德川時代に於ては武士は不生産的階級であり消費階級であつたが、封建制度が武家支配の政治組織である點からいへば、彼等は支配階級として百姓町人を土芥の如くに考へ驅使せしものであつた。然るに中期以後武士は切捨御免の特權はあり乍ら最早切り捨てる勇氣はなく、農民からも屢々一揆を起されて農民の要求に聽從せざるを得ざる狀態に立ち到つて居つた。更に幕府諸藩の財産窮乏や武士の生活難は武家をして町人の前に膝を屈せしめ、その資給によつて僅かに生活を遂ぐるの有樣となつた。「塵塚談」に「武家は人を治め、商人は皆

めらるるの法なるに、今は町人が人を治る世のことし」といへる如く、彼等は最早支配階級たる實力を有せざるものであつた。

次に農民階級は如何。當時の封建制度は經濟上より見れば土地を主要なる生産手段とし、農民を唯一の生産階級とし、その上に、武士と稱する特權階級が支へられて居た組織である。當時農を本とし商工を末とせしことも、全く右の如き關係から武士階級の存立のためには農は欠く可らざるものであつたからである。然るに中期以後農民は甚しき生活難に陥り、農村の疲弊を生じたことは前述の如くである。事こゝに至つては農民は最早從來の如く武士階級を養ふに足らざるものとなり、武士階級も農民のみによつてその生活を維持することは極めて困難とならざるを得ざるに至つた。

次に町人階級は如何。當時は「工商はなくともすむべし、農人は一人にても増ことをはかるべし。商人は一人にても減んと欲すべし」と説かれ、商工を末業として排斥した程であるから、町人は全く無用の階級として考へられて居た。然るに泰平の打續くに從ひ、武力は當世に用なく、金力が之に代るの時代となつた。即ち町人の富は武士を壓し、その財力によつて隱然社會の一大勢力を占め、武士階級と雖、彼等なくしては生活するを得ざる有用階級となつた。

之を要するに武士は支配階級であり、農民は生産階級であり、町人は無用階級として考へられたものであつたが、その階級的特徴は中期以後次第に變化し、武士階級の無力、農民の疲弊、町人階級の勃興を見るに至つたものであるが、更に進んでは一階級の者が他階級者の如くに變化し、或は一階級へ潜入することすら行はるるに至つた。

昔の武士は廉恥を重んじ、貨殖のことは口にするだに恥づべきものとされて居たのであるが、時代の經過に伴ひ、武士も生活困難のために、何事も物質的利益の伴はざることは之をなさざるに至り、出入町人から物品を購入する度毎に利潤の上前をはね、種々の名義で役德をかせぎ、養子を迎へるにも財産の多少を問題とするに至つた。當時諸侯の中に諸士救濟のため家中工業を行ふもののあつたことは上述の如くであるが、この現象は武士の内職と共に不生産的階級たる武士が工業生産に從事するに至つたものであつて、武士が物質的利益を追求して止まざりし事と共に、武士が町人化せし一例と見ることが出來る。然しそれ位のことではなく武士たる身分をすてて、生活に餘裕ある町人階級に入つたものも少くない。「江戸町方書上」や「町人考見錄」によれば江戸京都の有名な商家町人の中には武家出身の者の少からざりしことが明かである。

武士が財産を目當として養子を迎へることは既に元祿寶永の頃から盛んに行はれた。或は殊更に物領除をして持參金付の養子を迎へ、また所謂直家督の制度によりて事實上家督の賣買同様のことが行はれ諸藩に於ても輕き士分の株は賣買せられたものである。而も必しも武家の血統に限らず平民からも養子を迎へ或は平民に株を賣つたことも少くない。維新の元勳伊藤博文公爵の如きも、父君は山口縣熊毛郡在住の由緒ある百姓であつたが、萩の城下に出て、伊藤家の株を買はれたものであると傳へられて居る。かくの如く他姓養子旗本御家人株の賣買がその人物を論ぜず、武士浪人百姓町人の區別なく、只財産を目當とせしことは、先祖の血脈を失ひ、庶民が士流に潜入する機會を作つたものといはなければならぬ。

農村を都會から引離し、農民を町人より隔離することは當時爲政者の方針であつたけれども、市中に近き農家は自ら市風に化せられしのみならず、農民の中には町人の生活を羨み、之を目標として進み、或は都會に入つて商人日傭夫となり、或は町人と縁組をなし、また農村に殘留せる者にても農業を廢して小商業などを營むものも少くはなかつた。前述の「江戸町方書上」を見るも舊家たる町人の中、その祖先の農民たりしものが少くない。江戸には上方者殊に江州人伊勢人が多いと稱せられるが、それ等の者の中にも商人として移住したものの外に、元來農民であつたものが、江戸に來て商人となつた者も少くはないであらう。町人が財力の上に於て武士階級を壓倒したことは既に述べし所であるが、それ等町人の融通に對して、武家は或は紋付の衣服を呉れ、扶持米などを與へ、又は苗字帶刀を許し、又は格式を授けたものであるが、これは全く町人を武士同様に待遇するものである。大阪の鴻池善右衛門の如きは加賀、廣島、阿波、岡山、柳川五藩の掛屋を勤め、尾州紀州の用達を兼ね、扶持米のみにても合計一萬石に達し、別家でさへ七十人扶持を受けたものがある。これは全く商人の侍化である。町人の財力は他の一方に於て農村にも及び、町人が一方では地主として勢力を占めたことも少くはなかつた。町人請負新田や、其他の新田開發の場合に町人が資金を投じ、後に其土地を自己の手に兼併した如きこれである。要するに町人はその掌握せる金力によつて或は武士階級に潜入し、或は武士の如き待遇を受け、或は地主たる地位を占むるに至つたものであつて、昨日の町人が今日の武士となり、武士が町人と變る世の中となつたものといふことが出來やう。

六　結　言

私は以上述ぶる所によつて徳川時代における社會經濟狀態は、その前半と後半とに於ては著しく變化せることを明かにした。而して封建制度に欠く可らざる要素たる階級制度の維持が、時代の經過と共に困難となり、階級區別の混亂を惹起したることをも説いた。而もこれ等の變化は何れも、封建制度の據つて立てる根據を動搖せしめしものであるから、徳川時代に於ける封建制度が覆らざるを得ざりしことはいふ迄もない所である。

人口問題の文明批評

室伏高信

一

人口問題は今日の流行問題であるのか。われ〳〵は今日はこの問題を語ることなくしては時代を語ることはできないのであるか。それともわれ〳〵はこの問題を語ることによつてわれわれ自身を暴露してゐるのであるか。或は不用意のうちに、或は意識的に。

人口問題はしば〳〵時代を試めしてきた。そしてまた實に多くの人々を試めしてきた。多くの高名な、若しくは無名な人たちがこの問題のトリツクにもかゝつたし、多くの政治家やその支持者たちがこの問題を利用もしてきた。

帝國主義的政策のために、そして反社會主義的宣傳のために、人口問題が如何に多く論ぜられたことであるか！

各々の生産様式が各々の人口法則をもつてゐるといふところの「資本論」の立場は眞理である。けれども各々の黨派が各々の人口論をもつてゐたといふことは一層に眞理である。人口問題の歴史は階級的闘爭の歴史であるといつてもいゝ。十八世紀末においてマルサスの人口論が惹き起した不當なセンセエションは黨派的利害からであるといふマアクスの解釋は充分の理由をもつてゐる。だが、人口問題を遠くの方へと延期した社會主義の立場も一つのPartei in teressenを暴露してはゐないのか。

人々は人口問題を語ることの代りに階級を語つてゐたのだ。或は更に黨派を語つてゐたのだ。そして人口問題そのものについては何ごとも語られてゐなかつたのだ。

マルサス人口論の時からして今年で百三十年である。マルサス説の盛衰は殆んど周期的であつたが、その間に人口論は如何

なる進歩を遂げたのであるか、社會科學の聲は市場に滿ちてゐたのであるが、この似而非科學は人口問題に對して如何なる答辯を與へることができたのであるか。

人口問題は今日では世界的に八釜しい。キインスがいふたやうに、それは今日は正しく政治問題である。否、それは常に政治問題であつた。資本主義と社會主義とがこの問題を中心として再び闘爭をはじめたのである。資本主義の宣傳は相變らず昔のままであるが、その口車に早くも捲き込まれてしまつた社會主義者も、然り似而非たる社會主義者が既にその本性を市場に暴露してさへゐる。けれどもこの天下の物笑ひを笑つてゐる社會主義者、本物の社會主義者は如何たる立派な識見を示したか。マアクスからのクオテエション。その說明。皮肉な笑ひ。そして何が殘つてゐるか。半世紀も前に死んだ人間の學說を掘り出してくるよりほかには今日の問題を解釋することはできないのであるか。日本だけでも年々百萬人も增加してゆくといふこの生きた問題、刻々に形勢の變つてゆくところの人口の問題を、われ〳〵は死人の口を通さなくては何ごとも語ることはできないか。否々、六十年前の「資本論」といつても、人口論の點では、それは要するに一個のゴドヰン說に歸着してゐるのではないのか。百三十年前の「政治的正義」が樂觀したやうに、六十年前の「資本論」が樂觀したやうに、マアクスの使徒たちが今日もまた限りなき樂觀に耽つてゐる。宛かもマルサスが富の分配の問題を閑却したところの弱點のために、多くの人口論者たちが階級の問題を無視したために、そして政治家たちが帝國主義の宣傳のためにマルサスを利用したために、社會主義は當然に人口問題を閑却し、無視し、否定する特權を與へられたかのやうに。

鹿を追ふもの山を見ず。資本家の立場にあるものも、社會主義の立場にあるものも、この六十年、或はこの百三十年間に起つた世界の偉大な變化についてしば〳〵これを忘れてゐる。そしてその間に起つた人口問題の意義の變化について、就中、今日の世界、そして就中今日の文明においての人口問題の深い意義について、何人もまだその銳敏な嗅覺を働かせてはゐないやうである。だから私は特にいつたのだ、人々は人口問題を語ることの代りに自己を暴露してゐるのだと。

二

マルサスの時代には思想が時代に先行したが、今日では時代が思想に先行した。

マルサスは未來の恐怖からしてあの人口論を書いた。彼は一

種の恐怖病にかゝつてゐた。ディアトリベの立場からすれば彼はあまりに迂遠なことだつたに違ひない。われ／＼が若しも時代に對する正義の興奮といふ立場をとつたとしたならば、この時に必要なことは「人口論」ではなくつて「政治的正義」であつたに相違ないのである。

彼は亞米利加を一つの目で見た。そこには既にフランクリンがゐた。人口は二十年毎に二倍になるといふ説を立てゝゐた。亞米利加ではそのとほりだつた。ペテイになると十年にして人口は倍加するとさへいつてゐた。マルサスはこれ等の説に修正を加へて二十五年にして人口は倍加するといひ出した。だから「資本論」の著者がマルサス説のごときはウオレエスや、フランクリンや、等々の燒き直しだといつて一蹴してしまつたにも一理はある。實際に彼はフランクリンに脅かされ過ぎた感がある。そして對岸の火事を見てあまりに周章て過ぎたといふ感がある。エンゲルスが彼を非難していつたことは如何にも事實だ、ミシツピイの沿岸を見るがいゝ、そこには歐羅巴の全人口を移殖しても尚ほあまりあるだけの餘地があるのではないかと。

エンゲルスの時代においてさへ事態は未だかくのごとくであつたのだ。かくのごときの事態のもとにおいて人口問題が宛も焦眉の急でゝもあるかのやうに論ずることは、如何にも間拔けた話である。エンゲルス曰くそれは笑ふべきことであると。エンゲルスが先づ笑ひ、カウツキイが續いて笑ひ、そして日本のマアクス主義の一團が今日は笑つてゐる。河上肇がその代表的な一人である。彼は高田保馬を、鈴木文治を、若槻前首相を、大阪朝日、每日をみな笑つてしまつた。それはたしかに笑ふに應しいのである。笑ふべきほどの人口論しかわれ／＼は聽かされてはゐなかつたのである。けれども日本においての人口論が如何に笑ふべきものではあるにしても、それは今日も笑つて濟まされるところのものであるのか。エンゲルスが笑つた時のごとくに、われ／＼の時代は笑つて濟ましてゐることのできる時代であるのか。われ／＼は今日も尚ほゴドヰン的に萬萬世紀の後までも人口は增加し、そして地球が、これを支へるに充分であるといつて平氣でゐることが許されてゐるか。若しくはエンゲルス的に大地が人間を養ふことのできないといふごときは狂氣の至りであるといつてそれで問題に答へたと思つてゐることが許されてゐるか。更に若しくは社會主義的立場にあるものが人口問題なぞを口にすると天罰でもうけるといふのか。

ディアトリベの立場からいふならばゴドヰンもエンゲルスもあらゆる樂觀説もあれで善かつたに違ひない。ゴドヰンもエンゲルスも立派に常識をもつてゐた。「人間の住みうべき四分の

三億はまだ開拓されてもゐなかつたであらうし、人間は尚ほ十五倍も增加して差支へないものだと考へたことも、寧ろ一個の立派な常識であつたであらう。だが、十九世紀の百年間はあらゆる常識的豫言者のためにはあまりにも奇蹟に滿ちてゐた。ミラクル ads of centuris とゴドキンの誇張したところのものは十九世紀の百年間で通過してしまつたではなかつたか。人間の住みうる殘されたる四分の三なるものはこの間に果してどうなつたか、十五倍の人口といふたところのものは果してどうなつたのか。そしてあのミシツピイの沿岸には何ごとが起つたのか。

ゴドキンの時代には今日の紐育ほどの人口もなかつた亞米利加の形勢について見るがいゝ。六十年前に百萬であつた紐育の人口は今日は六百萬に近い。十萬であつたシカゴは三百萬に近い。たつた四千人しかなかつたロス・アンゼルスでさへ六十萬を超えた。そして亞米利加合衆國の全體からいふとどうなつたか。一八〇〇年に五百三十萬しかなかつたものが十九世紀の三十年には千二百八十萬に、五十年には二千三百十萬人に、八十年には五千萬を超えたのである。二十五年間にして人口が倍加するといふマルサス說は亞米利加で立派に證明されたのだ。そしてマルサス・ゴドキン時代に比べると、亞米利加では人口が十五倍どころか二十倍にもなつたのだ。そしてそれが決してたゞなる移民の結果でないといふこともその移民輸送國たる歐羅巴の人口がこの間に二倍し、三倍し、四倍したことによつても分つてゐる筈なのだ。英國のやうな老大國をもつてしても十九世紀の百年間に人口は八百萬から三千二百萬にと激增したし、われ〲の日本も日本の十九世紀である最近の五十年間にその人口を倍加したではないか。

繰返していふが、ミシツピイの沿岸はどうなつたか。十九世紀のはじめに歐羅巴のもつてゐた全人口に近いほどのものが既にミシツピイ沿岸に集まつたのだ。人口過少の問題は實に人口過剩の問題となつてきた。移民の子孫であるところの亞米利加の勞働者が移民の排斥を若しくは制限を叫んできた。人口問題が既に舊大陸から新大陸へと移つてきたのだ。

資本家に人口問題を語る資格のないといふことは、今日も昨日ももとより同じである。彼等の人口論はどこまでも帝國主義の宣傳であるといはれるところの、充分の理由をもつてゐる。勞働の搾取が行はれてゐる限りは、餘剩價値なるものが彼等の掌中に流れ込んでゐる間は、彼等には人口問題を口にする資格はない筈である。否、資本家的生產が行はれてゐる限りは、彼等には人口問題を語ることの資格はない筈なのだ。彼等にして人口問題を口にしたいといふなら、宜しくその生產樣式を解消す

べきであり、また宜しくその手にしてゐるところの餘剩價値の一錢一厘までも彼等のまことの主人の前に返還すべきである。

けれども資本家なぞはもうどうでもいゝ。資本家に發言の資格があるにせよないにせよ、われ〳〵がこれを語つてならないといふの理由はない筈だ。人口問題が既に舊大陸から新大陸にまで移つたところの今日において、人口問題が常にわれ〳〵の生活を脅迫してゐる今日に於て、われ〳〵が人口問題を語つてならないといふごとき馬鹿々々しい理論には終りを與へて然るべきである。われ〳〵は今日は未來に對する如何なる惡夢からでもなしに、今日の問題としての人口問題に直面してゐるのだ。その脅威は未來においてあるのではなくして今日においてある。それは最早や如何なる假定的な事件でもなくして一個の切實なる現實である。少くとも二十世紀になつてからは、われ〳〵はこの現實に向つて一歩々々近づいてきた。近年における各國の人口增加率の著しい減少は何ごとよりも雄辯にこの事實を語つてあまりあるのだ。

三

各々の生產樣式が各々の人口法則をもつてゐるといふことは眞理であると私はいふた。實に封建的生產樣式においての人口問題をもつて資本主義的生產樣式においての人口問題を律するといふことはもとより誤つてゐる。生產についての固定的な觀念のもとに人口問題を割り出したところのものが今日において通用しないものであること、否、通用しなかつたものであるといふことは既に議論の餘地がないのである。實際に資本主義は封建時代においての過剩人口を解決したのである。墮胎や、戰爭や、飢饉や、若しくはマルサス的な道德的抑制の方法によることなくして、それは積極的にこれを解決したのである。資本主義社會は、その最初の段階においては、人口過剩の代りに、人口の過少に苦しむだのである。多數の子供を產めるものは國を富ましめたものだといふところのピットの言葉はこの時代の資本主義的精神を最もよく語つたものである。マルサスをして人口の過剩を訴へしめた歐羅巴は十九世紀の百年間においてその人口を一億七千萬から三億九千萬に增加させながら、しかも「十九世紀の八十年においてマルサスの名が落日のごとくに衰へた」といふことは、資本主義が當時において倘ほこの四億足らずの人口を吸收してあまりあつたといふことを證明してゐるのである。こゝに絕對的過剩人口といふごときものはこの世界には存在しないかのやうである。マアタス主義は今日も倘この立場を維持してゐるのである。如何にも封建時代においての過剩人口なる

ものは資本主義社會においての過少人口なのだ。まことに人間をテエゲタス山の荒原に捨て込むだのでもなく、バレエサラム河にほうり込むだのでもなくして、一つの社會においての過剰人口が他の一つの社會においての過少人口となつたといふことは、如何にも絶對的過剰人口なるものの存在が否定されてゐるかのやうに見えてゐる。一つの生産様式を打破せよ、人口問題は自ら解決するであらうといふことの樂觀說は、ここには如何にも眞理であるかのやうに見えてゐる。けれども絶對的過剰人口なるものは果してこの世界に存在しないのか。myriads of Centuries の後までも人口は增加し、しかもこの大地がこれを養ふことができないと考へるのは狂氣の至りであるか。若しくはかくのごとき限りなき樂觀說こそ狂氣の至りではないのか。

四

資本主義社會は何ゆえに封建社會においての過剰人口を解決したか。われ〳〵はこゝにおいて資本主義的生産方法とは何ぞやといふ事について考へる必要がある。それは一個の機械生産だと私は答へる。勞働搾取だとか、個人主義だとかいふ事は資本主義に限つたことではない。マアクス主義の立場はこの點において全く間違つてゐる。間違つた出發點から出發したためにアルッアからオメガまで間違つてゐる。否、資本主義の本質を賃銀制度にあると考へたサンジカリズムでも、ギルド社會主義でも、資本主義の本質を把握することから甚だ遠いのである。それは科學とともにきたところの、機械生産といふ事によつて前代の如何なる生産方法からも區別されるし、また機械主義といふ事によつて前代の如何なる文明からも區別されるのである。勞働の搾取だとか、個人主義だとか、賃銀奴隷だとかいふ事は機械生産の結果であり、果實であるにしか過ぎないのだ。機械生産のあるところ必ずわれ〳〵の大衆は奴隷に落されるし、機械生産さへ廢止されたなら資本主義的な勞働の搾取も、個人主義も、若しくは賃銀奴隷も廢止されるのだ。資本主義が遂に一個の工業主義において發達したといふとは實にそれが一個の機械生産であるところの直接の結果である。われ〳〵が若しも一度この資本主義の本質について理解すると、資本主義社會が何ゆえに封建社會においての過剰人口を易々と解決してしまつたかといふことの秘密を、然りこの簡單な秘密を探ることが出來るのである。資本主義の本質は機械生産においてである。そしてそれは工業主義において實を結んだのである。またそして工業主義が商業主義と結合してゐたといふことも勿論である。

再び問ふ、資本主義社會は如何にして封建社會においての過

猶人口を解決することができたか

機械生産の結果として生産能率が増進したことは事實である。そしてそれは農業の範圍においてもいはれることである。クロポトキンが嘗つて指摘したことのあるやうに、十九世紀における佛蘭西の農業技術の發達、農業における機械の利用は、この國における人口増加率以上に農業の生産率を増大させたのである。われ／＼はこの一つの事實を閑却することは勿論できないのである。獨逸においても、丁抹においても、否、多くの農業國において、十九世紀の間に農業生産が大いに増大したといふことは事實である。日本のやうな集約農業においてさへも農業生産はたしか發達したのである。特に就中亞米利加その他の新大陸の諸國において機械の應用が農業の開拓と發展とに與つた力は決して少くはないのである。けれどもわれ／＼はこれによつて大地を無限に搾取しつゞけてゆくことができるか。幾何級數的ではないにしても、算術級數的にでも、われ／＼は無限にこの大地からの生産物を増大させてゆくことができるか。「お前は多産的であるがゆゑにお前は貧乏だ。」かういふ理論が例外なしに當箝まるのは兎の世界であるに違ひない。マアクス流にいふならばかうした抽象的な人口法則は植物と動物とにだけいへるであらう。われ／＼はもとより Cuniculis ではない。地上の草を喰ひつくした後で死を待つよりほかに智慧のない兎よりはたしかに餘計の智慧をもつてゐる。われ／＼はわれ／＼が農業や牧畜を考へ出した時からして兎よりは智慧のあつたことを證明したのである。そしてわれ／＼が機械生産をはじめた時からしてわれ／＼の人口法則は兎の人口法則を徹底的に破つたのである。十九世紀は實にその黄金時代である。世界はこゝに無限の發展にも見えたし、人間の智慧は無限に盡くることなき泉でもあり、大地は人間のために無窮の寶庫であり、その寶庫は人間の不斷に發展する智慧とともに發展するもののやうにも見えたのである。エンゲルスは人口問題を論じて曰く、科學は幾何級數をもつて進歩すると。蓋し科學が幾何級數的に進歩しそしてまたそれとともに人間の生活手段も幾何級數的に増大するであらうと彼は考へたのである。こゝに哲學のうへでは形而上學が馬鹿にされたし、經濟學のうへでは報酬漸減の法則が蔑視されたのである。「十九世紀の八十年代においてマルサスの名が落日のやうに衰へた」のは、かくの如き事情のもとにおいては當然過ぎるほど當然であつたのである。けれどもかくの如き事情がいつまで續くのであるか。科學は永久に幾何級數的に進歩して止まるところを知らないのであるか。そしてまたそれによつてわれ／＼にこの地上から無限に増大してゆくわれ／＼の

生活資料を搾取してゆくことができるのか。

何ゆゑに十九世紀の八十年代において落日のやうに衰へたところのマルサスの名が今日に至つて再び復活してきたか。帝國主義のために既に分割しつくされた今日の世界において何ゆゑに人口問題の宣傳が八釜ましくなつてきたのであるか。殘されたところの四分の三が殘されざるものとなつて、資本主義のためには世界はあまりに狹くなり過ぎた今日において何ゆゑに食物の問題が叫ばれなければならなくなつたのであるか。兎よりは智慧のある筈の人間が兎と同じやうに食物の問題のために飢えなければならないといふことは如何にして起つてきたか。今日の資本家が食糧をどこかに隱くしてゐるといふわけでもないし、また昔の羅馬の貴族のやうに食べては吐き、食べては吐き、一日中食べてばかりゐることによつてその富を消費するほどの馬鹿でもないのに、食糧問題のためにわれ〳〵の大衆が頭を悩まさなくてはならないといふことは何を意味してゐるか。

資本主義が末期に近づいてきたことは事實である。資本主義は既にわれ〳〵の面前においてよろめいてゐる。われ〳〵はその兆候を、證據を、理論をいくらでも示すことができるのだ。「資本主義の最後の段階としての帝國主義」そのものでさへも既に最後の段階に上つてきた。世界は既に新しい帝國主義の運手のために如何なる餘地をも殘してはゐないからだ。

封建社會においての人口過剩といふことが封建社會そのものの行詰まりといふことを意味したにほかならないといふ結論には、恐らくは何人も反對はしないだらう。資本主義社會においての人口過剩にしても同じことだ。それは資本主義社會の行詰まりでなくて何んであるといふか。

資本主義的生産方法は人口をどし〳〵と殖やして行つた。人口は幾何級數的に增加して行つたにもかゝわらず、資本主義社會がよくこれを支へて行つたのは、生活の手段もまた幾何級數的に殖えて行つたからだ。科學でさへも、人間の智慧でさへも、この間において幾何級數的に增大して行つたといへるであらう。その人口增加率が前世紀の後四分の一からだん〳〵と低くなつた。クレマンソオにとつては最早や人口問題とは人口の增加しないといふことでさへあつた。亞米利加においてさへも、然り新しい移民によつて絶えず新しい血液を加へてゆくところの亞米利加においてさへも、人口增加率は著しく減少してきた。それにもかゝわらず人口問題が八釜ましくなつてきたのはどういふわけか。人口の增加が今日では算術級數ほどにも行かなくなつてきたのに、人口食料問題についてわれ〳〵が考慮しなくてはならないとされるのは如何なるわけか。資本主義そ

のものが既にその自らの増加させたところの人口を吸收しきれなくなつたことの證據でなくしてこれがなんであるか。そこに資本主義社會の落日を見ることなくしてわれ〳〵は果して生きた目をもつてゐるといふことができるのか。

資本主義は人口を増加させた。それは世界の人口を何倍かにした。人口を増加させることによつてそれ自身を生長させた。これはまた人口を増加させなくてはそれ自身を生長させることのできない種類のものであつたのだ。そして兎はこの地上に滿ちた。ミシツピイの沿岸を見よといふが、そこにも二本足の兎は一杯に滿ちた。そしてわれ〳〵の草はどうなつたか。兎が草を喰ひつくして、資本主義はその自らの兎のために最後の審判をうけなければならなくなつたのだ。

マアクス的人口法則からして世界は再び兎の人口法則にと還つてきたのだ。

資本主義社會はその興るや人口問題とともであり、その滅ぶるやまた人口問題とともである。資本主義と人口問題とは不可分な二つである。これは人口増加なくしては發達することのできなかつたものであるごとくに、人口の増加が一定の限度に達した時には、それはそれのうちにおいて滅亡しなければならないところの約束をもつてゐたのだ。

人口問題の意義はこゝに一變した。それは資本主義のための成長と宣傳の問題からして、それの自滅の問題にとその意義を變へたのである。われ〳〵はこの點に深い注意を拂ふべきである。そこに大きな秘密がある。そこに資本主義の運命が結ばれてあり、そしてまたそれ以上に現代文明の問題が隱くされてゐる。この秘密を握れ。新興の階級が、若しくは資本主義の敵が、人口問題から退却してゐなければならなかつたのは最早や半世紀も一世紀も前のことである。人口問題を審判せよ、資本主義もまた審かれるであらう。人口問題を解決することよつて社會問題は解決されるといつた昔の人口論者に比べて、われわれは人口問題を審け、資本主義もまた審かれるであらうといふのである。それは一見しては甚だ多く似通つてゐる。けれどもそれは甚だ多く隔つてゐる。一つは人口問題によつて階級の問題をすりかへてゐるペテンであるのに、われ〳〵の立場は階級の問題を乘り越えてゐるからである。

五

農業の革命がまだ殘つてゐるといふのか。科學の發展は無限であるとまだいつてゐるのか。カウツキイの人口論といふのが正しくそれである。彼曰く人口問題は五百年も後の事であると。

カウツキイは机の抽出から物を取り出すやうにマアクスを引用することができるといはれる。如何にもそのとほりだ。だが、この馬鹿正直によつてである、彼がレニンのやうな後輩にさんざん愚弄されて、そして葬られてしまつたのは、あの正直な、勤勉な、好々爺の後姿、伯林の五階建の家根裏に煤けてゐたとの老マアクス主義者の姿は私の目にまだありありと殘つてゐる。誰れ人がこのやうな善良な人間を心から憎むことができようぞ。だが、農業のこれからの偉大な革命と彼のいつた時に、そしてそれに限りない信頼を置いてゐると彼がいつた時に、われわれはこれに對して何をもつて答へるか。

農業の革命といふは既に試めされたではなかつたのか。ボオナンザ・ファアムの失敗といふことが既にこの問題に答へたではなかつたか。

農業における機械の利用が農業の生産率を高めたと私はいふた。そのとほりだ。だがそれが工業においてのやうに考へられたとしたら途方もない見當違ひではないのか。農業と機械とは、たとへ二律背反ではないにしても、その交渉はほんの僅かだ。僅かであるべきだ。季節的に、そして短時日的にしか機械を使用することのできない農業が、近代文明からうけとる恩惠は寧ろ甚だ少ないといふべきだ。だから農業は革命の代りに改革されてきたのだ。否、その改革が一體どれだけのものだと思ふのか。亞米利加のやうな新大陸においてさへ、そして最新の科學的方法の用ゐられてゐるところにおいてさへ、報酬漸減の法則が既に目立つて見えてゐるのではなかつたか。

科學の無限の發展といふや。それの幾何級數的進歩といふや。そしてまたそれに伴ふところの生活資料の幾何級數的增加といふや。諸君は十九世紀を語つてゐるつもりなのか。それとも二十世紀について語つてゐるつもりであるか。エンゲルスが科學の無限の發展といふことに無限の望みを置いたことはさもあるべきことだ。それは尙ほ科學の成長時代であつた。われわれは科學の發展からして限りなき搾取をつゞけた。けれども今日はどうであるか。われわれは今日もまたこの科學の前に限りなき樂觀をつゞけてゆくことができるか。科學に對する搾取に對して今日も尙ほ限りなき希望を繋いでゐることができるか。

科學はその頂上を過ぎないまでも、既にその頂上に達してゐるのではないのか。智識の官僚政治が繁文縟禮の極に達し、そして少數の天才だけが科學の最高果實をうけとることを許される今日においては、科學の成長は既にその最後の段階に達したのではないのか。

應用科學は尙ほ多くの餘地をもつてゐるに違ひない。飛行機、

の後にラジオがあり、ラジオの後に超ラジオがきたるであらう。資本主義文明は正しく科學の文明である。それは機械の文明であるごとくに科學の文明である。けれども科學が一定の發展過程に到達した時にその發展が遞減し、そして遂に中止しなければならないやうに、應用科學と雖も同じ法則の支配をうけとるではないのか。資本主義の科學文明においてわれ／＼が行詰まりを感んじてゐるといふのは、科學そのものの行詰まり、たとへ行詰まりまでには行かないまでも、効用遞減の過程に到達した事の證據ではないのか。然り科學の効用がわれ／＼の人口增加の割合に伴ふとができなかつたことの證據ではないのか。

　個人主義的から團體主義的へと變化しなくては科學は破産の外はないであらうと、ソデイのいふたことは意味あることである。資本主義の最後の段階がカルテルであり、トラストであり、シンジケエトであり、そして集産主義であるやうに、科學のシンジケエト、科學のカルテル、科學の集産主義もきたるであらう。だが、それによつて科學はそれ自身を革命するか。修正するか。科學はそれ自身を合理化し、そしてその時である、息を引きとるのは。共産主義の時代が科學の黄金時代でもあるかのやうに考へる位ゐ愚ろかしいことはない。資本主義こそ科學の黄金時代である。共産主義はそれが修繕されつゝ、生命を失つて、息を引きとるの時代なのだ。

六

再びいふ、資本主義は如何にして封建社會においての過剩人口を解決したかと。私は既に一つの答を考へた。けれどもより大なる答を保留した。より大なる答とは何か。

　私は英國の一例をとつて示すであらう。英國は何によつてその人口を增大させたか。十九世紀の初年において八百萬であつた人口を如何にして今日の四千萬近くにと增加させることができたか。十七世紀において五十萬の人口しかなかつたところの倫敦は如何にして七百五十萬の大都市となることができたか。

　英國の農業は發展することの代りに衰微した。科學と機械とは英國の農業をして一歩々々衰頽へと導いた。一八七一年から一九〇四年の間においてさへこの國の農耕面積は三百萬英町以上を減少した。穀物はこの間に三十七パアセントに、肉やベイコンは十八パアセントにと減じた。そして人口はその間においてさへ一千萬も增大した。何ものがこの人口を支へたか。日く工業主義。

　十九世紀は正しく工業主義の時代である。工業主義はあらゆるものを解決した。工業主義は大英國を建設し、そしてそれを

世界に支持した。人口は都會へ都會へと集まつた。英國人口の八割は都會人だ。七百五十萬の倫敦人は一粒の穀物をも生產することなくして易々と彼等の人口問題を解決した。封建社會の農民が自ら刻苦營々穀物を生產しながら、尙ほ間引きをなし、嬰兒殺ろしをなし、道德的抑制をしなければならなかつたのに對して、英國人口の八割は一粒の穀物をも生產することなくしてその人口を鼠算で增加して行くことができた。人口問題のごときは問題でないといふ聲の起つたのもげにことはりである。人々は科學や機械や工業主義がそれ自身のうちに人口問題解決の方法をもつてゐると思つた。エンゲルスのやうな科學病者は、世界は無限に膨脹する過程だと思つてゐたに違いないのだ。

こゝにジェボンスがある。ジェボンスはその英國的工業主義の前途を非觀したことによつてジョン・ブルの多幸な夢を脅かした。だが、この悲觀論者でさへも何んといつたか。われ／＼の生活資料は最早やわれ／＼の穀物生產には依存しないと、また曰く穀物條令の後においては、それはわれ／＼を穀物から解放して石炭のうへに移したと。

英國人は石炭を食べた。或は鐵と石炭とを食べた。鐵と石炭とさへあれば、食物は自らきたるといふのが英國的自由貿易の眞精神であつた。鐵と石炭とを採掘せよ。人口の問題はそれによつて解決されると。實際に英國の農業は衰頽しながら、しかも穀物の價格は下落した。「十九世紀の八十年時代においてマルサスの名が落日のやうに衰へた」のも、その最大原因の一つは穀物の價格が下落したからだ。農業勞賃は下落し、穀物は下落する。鐵と石炭とで人間は生きてゆくことのできるといふことが分つたのだ。されば人口問題を口にするよりも工業主義の爲能膏にきたれと人々はいふたのである。

けれどもそれが十九世紀のことだといつたらどうか。われわれの日本においての十九世紀の遺物が如何に多いとであるか！政治家はいふ、先づ商工業を勵奬せよと。人口食糧問題の調査委員の諸君は曰く、先づ商工業を振作せよと。社會學者（高田保馬）もまたその尻馬について曰く、人口問題の解決は商工業を盛んにするのほかはないのだと。

曰く商工業の奬勵、曰く國產の奬勵、曰く勤儉思想の奬勵、曰く愛國思想の奬勵。それは抑も何の兆候か。大道廢有仁義。國家昏亂有忠臣。危險思想が勝利を占めて愛國思想の奬勵があり、商工業が行詰まつて商工業の奬勵がある。

十九世紀として笑ふこと勿れ。十九世紀にはこうした愚ろかな奬勵はなかつたのだ。十九世紀は商工業は主人であつた。

それは獎勵されることの代りにそれ自身を獎勵した。

最近の五十年間は日本の十九世紀であると私はいふた。そこに商工業の日本がある。日本は日本の穀物で立つてゐなくなつてからももう久しい。日本の自由主義者は久しく第二の英國を夢みた。小さな英國を夢みた。鐵と石炭となくして第二の英國を夢みた。小さな英國ができた。そして人口過剩がきた。德川時代において三千萬しかなかつたわれ〳〵の人口、そして永い間停滯してゐたわれ〳〵の人口が六千萬となつた。そしてまた年々に百萬も增加する。けれども產兒制限は危險思想であるとして禁壓された。そして最後にどうなつたか。日本の支配階級が人口過剩だといひ出した。抑もこれは何の兆候であるか。日本の商工業が既にその人口を吸收する力を失つたのでなくして何んであるか。日本の商工業主義の行詰まりでなくして何んであるか。

私は勿論獨り日本についていつてゐるのではない。われ〳〵は世界についてこれをいふ。マルサスは早くからこのことを考へてゐた。ジエボンスよりも前に彼は英國工業主義の必然的行詰まりの法則を示してゐた。今日はその行詰まりの時がきた。商工業主義の總決算の時がきた。あのよろめいてゐる大英帝國の足もとを見るがいゝ。あの衰頹しつゝある英國の紡績業について見るがいゝ。あの產業的衰頹と階級的混亂と民族的分裂の最後の痛ましい光景について見るがいゝ。だが、英國だけが過去であると思つたら大きな間違ひだ。英國は兆候だ。英國が過去であるといふよりは工業主義が過去である。總じて商工業主義が過去であるといふことに氣付いたものでなくては、今日は世界の轉機を、その最高の秘密において語ることはできないのである。

七

農業の衰頹といふことをわれ〳〵は幾度か口にした。農業の衰頹はたしかである。英國においても、日本においても。亞米利加においてさへも今日は農業救濟といふことが政治上の一大問題となつてきた。けれどもそれは關係國の問題であるか、世界の問題であるか。

英國はその小麥の四分の三を、肉の五分の三を、卵の五分の三を、乳酪の半ばを、そして全食糧の六十パアセントを國外から輸入する。英國の農業は正しく壓迫されたのだ。それが如何に衰頹したかは既にこれを述べた。けれどもそれは何ものが衰頹させたか、曰く外國の農業。就中新大陸の農業。更に適切にいふならば新大陸においてのより低き生產費によつての農業。世界的にいへば農業は衰頹することの代りに勃興したのだ。工

業國において衰頽し、新大陸において勃興したのだ。

工業主義といふことと勿れ。それは空中に立つたのでもなく、鐵と石炭とによつて立つてゐたのでもない。それは何んによつて立つたか。外國農業のうへに立つた。外國農業のうへに寄生した穀物條例によつて英國人が穀物から解放されたと思つた位無邪氣な樂觀はない。これは英國の穀物から解放されたであらう。同時に外國の穀物のうへに立つてゐた。

私のいふことは次の點である。增加した英國の人口は鐵と石炭とを食べてゐたのではなくして外國の農產物を食べてゐたといふことである。

こゝに重大問題がある。こゝに人口問題においての最高解決がある。人口の限度は商工業に依存してはゐなかつたといふことである。そしてまたそれは常に農業のうへに依存してゐたといふことである。東が草を食つてゐたごとくに、われ〳〵人間もまた草を食つてゐた。商工業の勃興が人口の增加を支へてきたのではなくして、農業の增大が實にそれを支へてきた。そして農業の增大だけがそれを支へてもきたし、支へる力をもつてもゐたのだ。資本主義的生產方法が封建社會においての過剩人口を解決したといふのはたゞ便宜上の言葉である。資本主義的生產方法が過剩人口を解決したのでもなく、若しくは世界の增加しゆく人口を支持してきたのでもない。增大してきた農業の力だけがこれを解決したのだ。主として新大陸の農業が。繰返していへば農業は勃興したのだ。工業國の例外を除いて、全世界においていふならば、農業は勃興したのだ。近代における人口の增加とは、この農業の發展の結果でもあり、また農業發展の限度においてでもある。　Permanent increase of agriculture always causes increased population somewhere——われ〳〵は再びマルサスを讀むべきである。マルサスは凡てを語つてゐる。世界の商工業主義者はマルサスを讀むべきである。マルサスこそ彼等の夢を破るところの明確な法則を世界に示したのだ。あらゆる商工業主義の必然的行結まりの法則が彼によつて示され、そして百餘年の歲月はこれを世界の現實のうへに證明したのである。

八

人口の增加は國力發展の結果としてまことに慶賀に堪えませんと。これは日本の現在の總理大臣が人口問題調査會の序幕において宣言した言葉である。

田中義一はアダム・スミスと同格だ。スミス曰く凡ての國家の繁榮の最も確實なる證左はその住民の增加にあると。否、も

れ〳〵は更にこの生めよ殖えよの哲學を重商主義にと遡ることができる。チャイルド曰く、主として國を富ましむるものは人口の増加を促すこと良法律であると。ダベナントは曰く人口は國のまことの力であると。ベエコンは曰く國家の眞の偉大は人口の繁殖にあると。更に否、われ〳〵は田中義一の思想を探つて遠く羅馬にと遡ることができるであらう。そこにはアウグストウスがゐる。人口増加のためにもろ〳〵の帝國主義的立法が彼の手によつて行はれたことは今日も尚ほ人々の記憶に新らたなことなのだ。

増加した人口は果して國家の偉大と繁榮とを語つてゐるか。然り、それは國家の偉大と繁榮とを。けれども昨日の偉大と繁榮とを。あらゆる人口問題こそ正しく國家の過ぎ去りし偉大と繁榮との陰影であるのにほかならないのである。

國家の繁榮と偉大とがなくしては、その國における人口の増加は存在しなかつたに違ひない。けれどもこの繁榮と偉大の國家において何ゆえに人口問題が起つたか。偉大と繁榮とが過ぎ去りつゝあるがゆえにこそわれ〳〵はこゝに人口問題をもつ。實に「偉大にして繁榮」なる文明の落日期において、われ〳〵はこゝにわれ〳〵の時代の人口問題に直面したのである。

マアクス主義者は今日も尚ほ古き公式を繰返してゐる。曰くそれは不變資本に對する可變資本の割合の減少によるのだと。その傾向はたしかにあらう。けれども現實の問題はどこから起つてきたか。われ〳〵の立場は次のごとくである、それは可變資本の割合の減少ではない。可變資本の絶對額においての發展の遲滅、若しくは停止によるのであると。然りそれは割合の問題でもなく、傾向の問題でもない。絶對の問題であり、現實の問題である。商工業主義にとつての絶對の問題であり現實の問題である。そして汎く現代文明にとつての絶對的の問題であり、現實の問題である。實に今日の人口問題とわれわれのいふてゐるこの現代文明がもらしてゐるところの嘆息であるにほかならないのである。

九

資本主義は人口問題において起り、そして人口問題において仆れると私はいふた。否獨り資本主義それ自身だけではない。現代文明そのものが人口問題とともに起り、そしてそれと運命をともにすべきである。われ〳〵の文明は人口の文明である。人口の増加なくしては購ふことのできないものであり、そしてまた人口の増加によつて購はれたところの文明である。それはもとより機械の文明であり、工業の文明であり、都會の文明であ

り、資本の文明である。けれどもそれ等のものは何れも人口の増加と不可分の關係において存在する。われ〳〵はこれを量の文明と名づけるのである。われ〳〵はわれ〳〵の祖先のもつてゐた質の文明、即ち一つの文化に對してわれ〳〵の時代の量の文明をもつて置き換へたのである。曰く帝國的國家、曰く大社會、曰く大量生産、曰く大經營、曰く摩天樓、曰く丸ビル。われ〳〵は實にわれ〳〵の祖先が小社會のうちにおいて偉大なる生活をなすことを知つてゐたのに對して、大社會のうちにおいてわれ〳〵自身をメキャニズムの一作用にと化せしめたのである。われ〳〵はわれ〳〵の祖先が無限なものにおいて彼等の生活の理想を示してゐたのに對して、有限なものにおいて成功の觀念を追ふてきたのである。われわれはわれ〳〵の祖先が仕事において、藝術において、若しくは人として一個の完成者であることをもとめたのに對して、それ自身においては無意味なるもののうちに生涯の仕事をもち、そしてそれ自身を量としてのみ評價してきたのである。人口問題はこゝに重大な意義をもつたのである。それは資本家にとつては餘剩價値の源泉であり、國家にとつては「繁榮と偉大」の證據である。われ〳〵の文明は人間を群としてのみ評價することを知つたのである。われ〳〵は實に金貨に引き換えるものにおいてのみ價値を認め、そして數學の對象となりうるものにおいてのみ世界を認識したのである。その量的文明である、人口問題において煩悶しはじめたのは。人口の文明が人口において行詰つたのである。人口において行詰まり、そして量的文明としての行詰りをはじめたのである。人口問題がたゞなる人口問題ではなく、またたゞなる資本主義經濟の問題でないといふのは實にこれがためである。量的文明の總崩れ。その兆候。世界の偉大なる轉換。人口問題に對するわれ〳〵の答はこれである。

世界的反動の趨勢と今後の無産階級運動

鈴木文治

一　この反動時代を如何にして乗り切るか？

目下世界を支配しつゝあるこの一般的な反動傾向を、如何にして乗り切るか、といふことは、進歩的方向へ志すものゝ誰もが考へてゐることである。なかんづく、無産階級運動に從事するものにとつて、この一般的反動傾向に對して、如何に處してゆくかといふことは、文字通り夢寐の間といへども、その脳裡から去ることはできない。

無論この反動傾向が、後期資本主義の必然に辿つてゐる段階に相應ずる現象であり、資本主義を相手とする無産階級運動が、當然にブツ突からなければならない、避け得られぬ强敵であることは云ふ迄もない。從つて、かゝる敵を與へられたるものとして甘受し、これと飽くまでも全力をつくして戰ふのは當り前であつて、かゝる意味に於いて、全世界の無産階級運動の刻下の苦闘は、無産階級解放のためにする血と汗とにまみれた、たらとい記錄以外の何物でもないことは斷言し得るのである。

しかしながら、かゝる貴重なる苦闘が、反動の下に於て、行はれてゐる以上、反動傾向其者に關する明確なる認識と判斷とにもとづいて行はるべきは言ふまでもなからう。と同時に、當面してゐるのは同じく反動傾向でありながらも、歐洲各國のそれと、我が國のそれとは、幾分かそれ／＼異つた個有の特質を包藏してゐるに違ひないのである。即ち、我々は、反動の有する歴史的社會的意義とともに、反動傾向そのもののうちに働いてゐるところの種々の具體的な要素に對してゝ周到なる注意を怠つてはならない。かくの如くにして得た的確な認識の下に行はれる苦闘のみが、それの持つ充分なる意義をば發揮し得るで

あらう。我々の把持しつゝある現實主義運動方針は、かゝる立場を採るものに外ならないのである。

世界は今や文字通り反動の下に支配されてゐる。就中、その典型的な狀態を我々は歐洲に於て見るのである。歐洲資本主義下に於ける無產階級の苦鬪は、同時に、世界各國無產階級の苦鬪である。歐洲の動きと流れは、世界の動きであり流れである。就中明治維新以來、歐洲資本主義に追隨することによつて、その資本主義的發展を遂げた日本は、その今後の狀勢に於ても、何よりも歐洲の狀勢に左右さるゝであらうことは、理論的にも、實際的にも容易に首肯し得られる。

私は、たま〳〵去る五月ジユネーブに開かれた第十回國際勞働會議に、勞働者代表として日本の組合諸君から推されて出席した。しかしながら、私の出席の大半の目的であつた、「勞働者結社團結の自由」は、資本家、及び政府側代表の一致した脅迫によつて、遂に悲慘にも廢棄の止むなきに至つた。(この「團結の自由」問題の詳細の事情については、私が目下編纂中の第十回國際勞働會議勞働者、代表報告書について見られたし、十一月中旬刊行の豫定。)無產階級運動にとつて最も根本的な團結權が、かゝる運命に遭遇したことは、如何にしても悲しむべき事實である。同時にかゝる悲しむべき事實を生んだ國際勞働會議の一種の反動化こそは、われ〳〵の一層注目しなければならない事實であらう。たとひ一時的にせよ、かゝる國際勞働會議の反動化は、何に原因したか。それは言ふまでもなく、國際勞働會議を支配した歐洲の一般的反動傾向なのである。

かくの如き意味に於て、團結權問題に敗れて目的の大半を失つた私が、この會議に出席したことによつて僅か一ケ月の間ながら、歐洲に滯在し歐洲の一般的反動傾向とその下に苦鬪しつつある無產階級運動の實際に當面して來たことは、まつたく望外の收穫であつた。その上に、歐洲無產運動の指導者や鬪士の二三と相見えたことは、私の觀察に幾何かの正確さを與へるに役立つた。無產階級運動にとつて致命的重要な問題であるところの「團結の自由」をすら葬り去つた程の一般反動傾向のうちにも、やがてこれを克服すべき一つの力を見逃すことが出來なかつたのである。歐洲反動は、その下に苦鬪しつゝある無產階級運動の進展とともに、如何に展開されんとしてゐるか。歐洲の鬪士は、この反動傾向に對して、如何に處し、如何に乘り切らんとしてゐるか？　私は、これらの點について、紹介と斷定とを併せ行ふことにより、目下歐洲同樣反動內閣の下に呻吟しつゝある我が國無產階級運動に、若干の進路を提供せんとするに外ならないのである。

二　歐洲反動の一典型としての英露斷交

英露斷交は最近に於ける一般的反動傾向の最も顯著な現はれであつた。反動の性質をあらはす最も典型的な一事件だつた。それは次の二點から言ひ得る。すなはち、英國は伊太利と相並んで歐洲に於ける中小反動國の事實上の擁護者であり、各國の反動政策は英國を中心としてその國際關係を聯結させてゐること、もう一つは英國勞働黨が反對黨としての實勢力を持つてゐて、その階級的國內關係が最も緊張してゐること、その二つの事情からであつて、換言すれば、英國が資本主義發展の歷史的段階としての反動の要素と、社會關係とを充分に具備してゐるからに外ならないのである。

從つて、英露斷交に際して、英國內に對立する保守黨（政府黨）と勞働黨（反對黨）とから發せられた主張と批判とは、反動といふ一個の歷史的段階が、その中に包藏してゐるところの諸要素――經濟的、政治的根據――を知る上に、最も有力な示唆を提供してくれるものとして、看過することのできぬ事實である。よつて、左に兩黨の主張と批判とを揭げて見よう（保守黨側は現首相ボールドウヰンの當時發した聲明に據り、勞働黨側は、斷交を決定した下院に於ける領袖クラインズの代表反對演說による。）

まづ保守黨政府は、對露斷交を行ふことについて左の二點を力說した。

一、アルコス・ハウス搜索の結果「赤化宣傳」の事實は歷然たるものがあること

二、斷交によつて受くる通商貿易上の損失は極力避ける、斷交はしても通商だけは、繼續してゆく積りである。

次に、勞働黨は、これに對し、

一、果して「赤化」の事實があつたか疑はしいものである、現政府は、さきに「赤化」（ジノヴヰエフ僞造文書事件）によつて政權を勞働黨より奪ひ、再び「赤化」（アルコス・ハウスより斷交へ）によつてその政權を維持せんとしてゐる。

二、斷交により、直ちに英國機械業に一千萬磅（一億圓）の損失を與へる、政府は通商を繼續させると言つてゐるが、斷交しながら、かゝることのできる筈のないことは明である。

と駁擊してゐる。われ〳〵はかゝる兩者の主張からして、英露斷交といふ一事件の中に二個の重點を見出す。それは「赤化」と「通商」とである。

「赤化」とは何か、言ふ迄もなくロシアのモスコーに本部を置く第三インターナショナルの世界政策に基く活動の謂ひである、これ以上說明の必要を認めない。

「通商」とは何か、それは英國目下の惱みを語る言葉である。大戰後英國產業の低下は、歐洲各國のそれと共に實に著しいものがあり、かゝる低下に伴ふいはゆる國力恢復の問題は、目下英國を占める最大の關心事なのであつて、これを中心として政府、反對兩黨の政策は戰はれて來たのである。對露通商の斷絕による英國機械業の甚大な打擊は、かゝる意味に於て問題の重點たらざるを得なかつた。

かくみるとき、英露斷交が、第三インターナショナルの世界政策と、國力恢復問題との、二つの背景にからみついた一現象であることは容易に肯かれるであらう。すなはち英露斷交によつて代表さるゝところの、一般的反動政策は、叙上の二個の要素に、その基礎と役割とを同時に見出してゐるのである。

これは何を意味するか。すなはち、一般的反動政策が、その字義通りに完全に反動化し、建設的能力を失つたことを示すものに外ならない。それはたゞ、第三インターナショナルの世界政策を「赤化」といふ甚だ漠然たる內容を持つた言葉に轉化し、これを更に、あらゆる無產階級の進步的、建設的運動に結び付けることによつて、無產階級の歷史的、社會的使命遂行を阻止する道具に轉用し、さうすることによつて、あはよくばその建設的無能を彌縫せんとしてゐるに過ぎないのである。

しからば、かくの如き反動政策は、一體どういふ根柢の上に行はれ、また、どうして目下の歐洲を支配するに到つたのだらうか？これらの點に關しては、一應大戰後の狀勢に溯つてみることにする。

三 歐洲反動結成の過程

(イ) 大戰後の經濟低下と復興

歐洲大戰は、各國資本主義がそれ〴〵の帝國主義的野心のために起した戰爭でありながら、その結果は自らにほとんど言ふべからざる打擊を與へた。これについては既にたび〳〵紹介されたことだから、こゝではたんに數字を以て示して置かう（調査は今年ジュネーブに開かれた國際經濟會議の「各種產業總括記錄」に據る）

先づ一九一三年と一九二五年とを比較して見ることにする。何故なら一九一三年は大戰の直前であり、一九二五年は大戰終了後六年を經過して歐洲經濟は可成りな安定を示してゐる時だからである。

◇一九二五年歐洲主要生產高指數（一九一三年を一〇〇として）

	（露を含む）	（露を除く）
石炭（及褐炭）	九一	九三
石油	八八	一〇四
銑鐵及鐵含有	八〇	八四
粗鋼（鑄造）	九五	一〇〇
機械工業	八七	九〇
紡績工場消費	八四	八八

かくの如く、大戰後數年を隔てゝ經濟復興は或る程度迄緒についた筈の一九二五年の生產高すら、大戰前に比して著しい減少を示してゐる。露を含む數字と露を除く數字との間には多少の相違があり、それはロシアの產業が革命によつて可成り破壞され、その恢復がまだ遲々たるものであることを物語つてゐるのではあるが、それにしても、たゞ石油と粗鋼を除く外は、ほとんど決定的な減少振りを示してゐるのである。これを更に、北米並びに亞細亞と比較してみるとき、その間の著しい對照に一驚せざるを得ない。

◇一九二五年度世界主要生產高指數（一九一三年を一〇〇として）

	（北米）	（アジア）	（歐洲）
石炭（及褐炭）	一〇二	一四五	九一
石油	三〇七	三〇五	八八
銑鐵及鐵含有	一一七	三三五	八〇
粗鋼（鑄造）	一四三	五二〇	九五
機械工業	一二六	三〇四	八七
紡績工場消費	一一二	一三〇	八四

數字の個々の詳細なる說明は本論の目的以外であるから他の機會に讓る。要するに、大戰が歐洲全般の產業に與へた打擊が如何に痛烈であつたかを、これらの數字によつて覗ふことができれば良いのである。

無論、かくも甚だしい歐洲經濟の疲弊は、經濟理論的に見れば、一般市場の減退と、市場の直接需要以上に過剩な生產設備との間の不均衡から生じたものであることは言ふ迄もないのであるが、かゝる不均衡をもたらした種々複雜な原因こそ、この際注目に値する。即ち大戰後今日まで尙ほ打ち續いてゐる經濟復興は、大體それらの原因の及ぼす諸作用の減却を目標として行はれたに相違ない。いま國際經濟會議の報告書に基いて、その主なるものを列擧して見よう。

第一、戰時中軍事需要のために交戰諸國は各自の生產設備を擴張した。斯の如きは殊に製鋼及び屑鐵工場、造船渠、コ

ールター染料設備等に於て著しい。

第二、大戰中どこからも供給を絕たれた中立諸國に新設備が作られ、同時にそれらの設備は、いはゆる工業立國主義の採用とともに、高い關稅の堡壘によつて保護された、ハンガリーの綿紡績業、ルーマニヤの金屬工業等はその著しいものである。

第三、歐洲以外も同樣だが、歐洲に於ける關稅率は一般に著しく高くなり、また關稅障壁の數は獨立國の數の增加につれて自然に增加し、通商を妨害すること一通りではなく、それと共に、國內市場の平均の大さも著しく減少した。

第四、戰爭直後歐洲は一般に貧困に陷つて國民の購買力は減少し、必需品以外に殆んど何も買ふ餘裕はなくなつた、このことは第三の事情と相俟つて更に國內市場の大さを減少させたが、直接消費物の生產だけは相變らず繁榮した。

國際經濟會議の報告書は、以上の各項のうち第一のこと、即ち、既に過剩となつた工場設備が及ぼす危險の度は餘程減少したが、他の三項の有する積極的作用は、まだ／＼有力であることを各處に力說してゐる。それは何を意味するか？

先づ、第二項及び第三項のことからして、歐洲各國に、いはゆる保護貿易主義が旺盛となり、國家資本主義の傾向を濃厚に有するに到つたことを看取する。

次に、第三項及び第四項のことからして、歐洲各國の國內市場の大いさが一般に著しく減少したことを看取する。しかもその原因は一般國民の所得の減少と生活程度の低下を重なるものとしてゐるのである。

すなはち、これらのことが歐洲に一般的な經濟恐慌を起させた主なる原因であり、從つて恐慌後の經濟復興に作用し、歐洲資本主義の目下の安定狀態に影響し、同時にその內部に種々の矛盾を發生せしめてゐる諸要素に外ならないのである。すなはち、國家資本主義の下にその復興を漸次遂げて來た各國產業は、一方尙ほ依然として恢復の遲々たる國內市場の減少との間に生ずる矛盾を、各國間に存在する關稅障壁その他の障害を打破することによつて避けやうとしてゐるのである。先般ジュネーブに開かれた國際經濟會議もこの點を主要目的としてゐたのであるが、今後尙ほ未解決の問題として殘されてゐる。

(ロ) 國家資本主義と「反動」

かくの如く、大戰によつて蒙つた各國の深酷な經濟低下が、濃厚な國家資本主義的形態に於てその「復興」を行つて來たといふことは、當然のことでもあり、また重要なことでもあつた。何故なら、各國資本家が受けた打擊は、自力によつて立ち

直るにはあまりに痛烈であつて結局國家權力の援助を必要としたし、各國民の受けた失業や、所得の低下による苦惱も、矢張りその救濟は、國家權力の積極的發動に俟つことが多かつたからである。しかし、どうしてかゝる國家權力が目下の樣に反動化したのであらうか？

それはつまり、資本家階級の要求は、必然に各資本主義國家の支配階級にも影響を與へずにはおかないのは自明の理だからである。すなはち所謂『國力恢復』による安定を目指す資本主義は、強力なる國家資本主義的政策に向つてその權力を行使するところの政府を要求したのである。そして、かゝる要求は、大戰後の未だ醒め切らない一般國民の一種の國家意識を利用することによつて案外に容易に滿たされた。ドイツのドーズ案賠償規定にもとづいてヒンデンブルグが大統領に當選し、フランスの財政困難にもとづいてポアンカレー擧國一致内閣が出現した如きは、その最も好適なる例とする。英、其他悉くかゝる例に洩れない。かくして、資本主義安定の要求に基く國家資本主義の傾向は、漸次鞏固なる陣容を整ふるに到つたのである。

しかし乍ら我々は、かくの如き傾向と同時に、「國力恢復」に對する各國無産階級の、異なる立場よりする、資本家階級と相對立する利害關係に立つ要求が、つねに熾烈であつたことも看過することはできない。しかも前述の如く、失業と所得の低下とは容易に解決されず、「恢復」はその大部分を未來の問題として殘してゐるのである。資本主義安定の必然的な攻勢は無産階級の日常生活の上に掩ひかゝらざるを得ない。これらの事情が相俟つて生ずる無産階級運動の伸張と擡頭とは、資本家階級にとつては何よりも鬼門であつた。かゝる鬼門的勢力に對しては當然彈壓を必要とした。かくして各國支配階級は、その國家資本主義的政策を強行するためには、無産階級運動を彈壓せざるを得ないところの反動勢力と化したのであり、同時にこの反動勢力は、言はゞ資本主義の選手として、「國力恢復」の問題に當面し、果して一般國民の滿足をかち得るや否やの、絕えざる試練の下に置かれてゐるのである。

目下歐洲各國に瀰漫してゐる反動傾向は、大體以上の樣な經路と役割とを以て、その結成を遂げて來た。しかし、我々はかかる反動の結成に作用した、もう一つの要素をも見逃すことはできない。勿論副次的にではあるが……。

（八）第三インターナショナル世界政策の失敗

近代に於ける最も眼覺ましい事件の一つであるところの一九一七年ロシア革命の成功は、一體如何なる原因に基くものだらうか？　即ち、それは如何なる社會狀態に於て遂行されたもの

だらうか？

ロシア帝政々府の支柱であるところの軍隊は遠く東部戰線に於いて打續く戰敗によつて完全にその士氣を阻喪してゐた。中央政府は文字通り腐敗し、無力に陥り、一般國民の抱いてゐたロシア帝國に對するあらゆる誇りも、支配階級への信頼も全く失はれてしまつた。貨幣は價値を失ひ、國民は饑餓に襲はれてゐた……等々のことこそは、ロシア革命を成功させた因子であり、同時に千載一遇の滅多には來ない特殊事情なのであつた。

更に我々は、一層特種なる、ロシアの持つてゐた三個の成功原因を擧げることが出來る。第一は、ロシアが自給自足國であつてよく列國の經濟封鎖に堪へ得たといふこと、第二にはロシアの大衆の殆んど全部が農民であつて、彼等は土地に對して根強い所有慾を有し、工業プロレタリヤの復雜な要求よりもはるかに簡單であり、しかもロシアに土地は豐富であつたこと、第三は、上流及中流より成るブルジョア及び小ブルジョア階級が、數に於ても頗る少數であり、且つ一朝有事の際の能力に於ても甚だしく無力であつたこと、等のことである。かゝる特殊事情は、ロシアを除く他の歐洲各國に於ては勿論、中工業國たる我が國に於ても容易には發見し得ない。到來の可能性の薄いものであつて、むしろ、多くの點に於て、これと正反對の事情をすら見出すのである。

かくの如き、ロシア革命を成功させた特殊事情こそは、同時に、モスコーに本部を置く第三インターナショナルの世界政策の失敗を齎らした。それは何故か？　即ち、かゝる特殊事情は、前述の如く、時を擇ばず、所を論ぜず、發見し得るものではないからである。劃一的な、觀念的な、遠くモスコーの一室に於て發せられる世界政策が、この意味に於て、殆んど到るところにその失敗と破綻とを繰り返してゐるのは、むしろ、當然とも言ふべきであらう。

しかし、一層悪いことには、それは決してたゞ單なる失敗や破綻ではなかつた。むしろ全世界の無産階級運動に對して、一種の積極的な「妨害」をすら齎らしたのである。

大戰直後ドイツに於ける第三インターナショナルの活躍は何を生み出したか、ヒンデンブルグが大統領となる遠因を作るについて、非常に與つて力があつただけである。伊太利に於てはどうか。第三インターナショナルの無謀なる行動は、ムッソリニ下のファシヨ伊太利を出現せしめるに役立つたに過ぎない。我々は、本論の第二章に於て、反動勢力が、無産階級運動の擡頭を阻止するために、第三インターナショナルの政策を「赤化」なる言葉にカムフラージユして利用しつゝあることを説

た。英國の保守黨内閣は「赤化」によつて政權を奪取し、「赤化」によつて政權を維持せんとしてゐることを觀た。我が國に於ける政友會内閣は如何？……

かくの如くにして、第三インターナショナルの世界政策は、反動をしてそれの有する階級的本質より以上に、かたく、廣汎に結成せしむるに役立つたのである。我々は、それに謝する以上に、その罪を問はなければならない。自國の特殊事情を忘れ、世界各國がそれ〴〵に有する特殊事情を無視して行ふところの劃一的な世界政策が、如何に世界各國の無産階級運動の正規な發達を阻害してゐるかは、我々の既に目睹してゐることであつて、これ以上に喋々を要しないであらう。

四　無産階級運動今後の展向

（イ）經濟上に於ける勞働組合主義の伸張

既述數章に亙つて、我々の觀て來たところは、この世界的な反動の下から無産階級を救ひ出すものは、どうしても、必然的に、民主主義發達に基礎を置く運動方針でなくてはならないといふことを明らかにするに在つた。しからば、かゝる無産階級運動の新たなる進展は、如何なる具體的な形態をとつて行はれるべきであり、また行はれつゝあるか。以下、この點について多少の考察を試みることにする。

＊　＊　＊　＊

まづ目下の世界資本主義安定狀態に於て、幾百萬の失業者群があり、一般無産階級の生活低下が遲々として恢復されないといふことは最も重要な事實である。無産階級を抑壓して、資本家階級の利益のみを擁護せんとする反動政策の破綻は、この點に藏せられてゐるのである。しかしながら、かゝる事實は同時にまた決して共産黨の運動方針を理由づけるものでなくして、却つて無價値なものたらしめてゐることをも既に明らかにした。失業や生活の低下は痛切なる現實の問題であつて、圖り知れぬ未來にその解決を托し得ることではなく、たとひ部分的にしろそれが緩和されるといふことは、一般無産階級の强烈な要求なのである。或る程度まで民主々義の發達せる國に於ける一般無産階級は、昔しのピューリタンが天上に約束した當てにもならぬ樂園を地上に約束する如き共産黨の宗教的な僞瞞手段によつては、到底動かさるゝものではない。何となれば失業や生活低下の緩和は、未來淨土で滿足し得る宗教問題に非ずして、現實の社會問題だからである。

從つて我々の目標は、かゝる現狀を民主々義的に轉換せしめんとするところの、現實主義的社會主義の政策に濺がれざるを

得ない。かゝる政策は、同時にまた次の時代に於て產業の支配經營を行はんとするところの勞働階級が種々の訓練を豫め行ふところの準備的手段でもある。勞働階級が將來に於て產業を管理し、經濟的自由を獲得することは、これに關聯する幾多の問題を處理するに必要な才能を具備することなしには不可能なのであつて、眞の政治的自由もかゝる經濟上の民主々義的發達の基礎の上にはじめて築かれるのである。この點はまた我々の政策を、一般支配階級の行ふ所謂「社會政策」と嚴重に區別させてゐるところのものに外ならない。

しからばかゝる現實主義的社會主義は、失業や生活低下を作つた目下の資本主義安定狀態に對して、如何に具體的に當面するか、といふことが次に來る問題であらう。それには「安定」の全部的努力を形成してゐる產業合理化に觸れなければならない。

產業合理化とは、國民經濟を簡單化することによつて意識的統制の要素を多くし、從來の自由放任資本主義から一種の國家資本主義へ向ふものであつて、多くカルテルやトラストの形態を採るものであり、これに技術的改革による科學的經營法をも附隨したものであることは既に一般に知られてゐる。從つて、それは資本主義經濟組織の内部に多分に社會主義的要素を加へるものであり、同時に生產技術はいよ〳〵洗練されるのであつて、言はゞ資本主義が必然的に辿りつゝあるところの自己沒落の一過程なのである。たゞそれが資本家を管理者として居り、資本利潤への採算化のみを目的としてゐることが問題の重點なのであつて、合理化其者は問題の對象ではあり得ない。從つて我々の目標は合理化が資本家の利潤を中心としてゐることになる勞働階級への壓迫に注がれなければならない。合理化の實施の結果が、實質的賃銀の增加、市場の擴張といふが如き經濟上の效果を伴はざる場合に於て起る失業のより一層の深化と生活の低下は、我々が斷じて許すことのできないことである。我々は積極的にかゝる現象を防止せねばならない。それにはどうすれば良いか？　問題は結局產業管理者である

この點に就て我々に重要なる示唆を提供して呉れるものは、去る九月六日英國エヂンバラに開かれた英國勞働組合大會に於ける議長ジョーヂ・ヒックスの勞資共同商議機關論であらう。英國に於ては失業者が既に百萬を超え、炭坑問題は深酷化し、しかも保守黨政府の反動政策はいよ〳〵露骨を極め、去る六月からは、苛酷極まる勞働爭議法が施行され、或ひはまた上院の權限擴張案が議會に提出されんとして、反動勢力は文字通り狂暴をつくしてゐる。かゝる反動下に於て、平常から協調的

組合内に於ける最も闘爭的な分子として知られてゐたヒックスは、「目下の產業過渡期に於て勞資間の共同商議及交渉上の機關を充分に運用する餘地及必要は充分に在り」と斷定し、「產業支配に責任を有し且又その間に蟠居する諸問題に關して理解を有する組織的團體の代表者間に於ける實際的意見の直接的交換は、政府の姑息なる政策に比し遙かに深大な意義を有する」と論じ、最後に左の如く結んでゐる。

「我々はこうした討議を行ふことによつて勞働組合主義の或る重要な主張を拋擲するものだなぞといふ說のために狐疑逡巡すべきではない。否反對に我が組織的運動はかゝる討議によつて當面の實際的目的に關して更に明確なる理解を得るであらう」と。

ヒックスの論は即ち、產業の實際的管理に、勞働組合が參與すべきことを主張したものであり、失業、生活低下その他のあらゆる重要問題に關聯する實際的な支配權を、多々益々勞働組合に分配せしめんとするに外ならないのである。かゝる態度は必然に產業合理化に關する問題をも解決する。世上之を以て輕率に一般の勞資協調論と混合するものが多いが、これは勞働組合の有する本質的機能の無理解より生ずる妄斷であらう。組織されたる勞働者の團體が、その有する實力によつて爲す交渉並びに協約こそは、近代資本主義に於ける勞資の最も典型的な闘爭形態であるに過ぎないのである。

かくの如く現實主義的社會主義の運動方針は、その經濟上の闘爭に於ては、目下の反動傾向に對して飽くまでも根强い勞働組合主義を以て臨み、團體協約權の確立を產業民主々義獲得の中心目標として進まなければならないのである。戰後經濟疲弊の甚だしいドイツに於てもこの種の努力は勞働組合の實力によつて漸次むくゐられ、團體協約の件數は左の如く迅速に增加しつゝある。

一九二四年	七、〇〇九
一九二五〃	七、五三三
一九二六〃	一一、六二四

（ロ）政治上に於ける社會民主主義の進出

目下の世界的反動傾向を轉換せしめるには、共產黨の運動方針では本質的に不可能であり、却つてこれを助長せしむるものであつて、それは社會民主々義の發達によつてのみ完全に果し得るのである。このことは、無產階級の進出がそのもつとも集中的な形態に於て現はれるところの政治的方面に於て、觀面に實證されつゝある。

英國が世界に於ける典型的な反動下に在る國の一つであるこ

とは第二章に述べた如くであり、從つてこの國に於ける種々の現象は、世界各國の狀勢が既に密接に連環されてゐる今日に於て、實に重要な意義を持つてゐるのである。いま同國の「オブザーバー」紙が調査したところに依る、同國に於て最近行はれた六個の補欠選擧の結果をみることにする。その得票別は實に左の如くである。

勞働黨	六八、二六一票	四〇%
自由黨	五四、三八五〃	三二
保守黨	四九、〇八五〃	二八

また、前回（一九二四年）の總選擧以來行はれた補欠選擧全部の總得票別は

勞働黨	二九八、一二八票
保守黨	二九六、九〇六〃
自由黨	二二一、三六七〃

この數字に於て自由黨の比較的豫想外に多數なことゝ、勞働黨の得票が常に第一位を占めてゐて、しかも最近に到るほど增加の度が多くなつてゐることは注目に値する。これは即ち、自由黨の得票は、保守黨から勞働黨へ移る過渡的な要素を持つてゐるのが多いのであつて、來年の總選擧には必然的に勞働黨に赴く可能性を含んでゐる。勞働黨の得票數が漸次增加の傾向を有するのと反對に、保守黨のこれが著しい減少の一途を辿つてゐることは、この間の消息を明らかに物語つてゐる。そしてかかる現象こそは保守黨政府をして來年の總選擧結果を怖るゝの餘り、上院の權限を擴張して下院に對抗せんとする上院改革案提出の決意をなさしめたのであるが、この前代未聞の反動的努力も、二千萬選擧民の猛烈な攻擊に遭つて、さらに一層自らを不利に陷れつゝある。

英國に於ける共產黨の勢力はもと〳〵微弱なものではあつたが、今年開いた同黨人事委員會は、その黨員數が昨年の一萬八百名から三分の一減少して七千三百七十七名に下つたと發表してゐる。勞働黨は十月五日の年次大會に於て共產黨との絕緣を決定したが、これは勞働組合大會の對露勞働組合斷交決議とともに、今後共產黨に一層打擊を與へるに相違ない。

次に、ドイツ社會民主黨の最近に於ける目覺しい進展は注目に値する。ヒンデンブルグ治下の反動政策にも係らず、今年キールに開いた年次大會の發表では、黨員は八十萬人に激增し、この增加は極右の「黃色」勞働組合と共產黨とから主として獲得したものであつた。一方共產黨は兩三年前の二十五萬から現在八萬五千にその黨員を激減してゐる。今年の大會に於て社會民主黨は、明確な現實主義的社會主義の運動方針を採ることを決定し、從來の內閣に若干の椅子を割込む主義を放擲した。一度革命の洗禮を受けたドイツに於ける社會民主黨のかゝる發展は、大戰直後の獨裁によつてのみ社會主義を獲得せんとした傾向が薄らぎ、社會民主々義が決定的勝利を占めたことを證明し

である。

さらに、北歐の一國ノルウエーに於て十月中旬比例代表制による議會改選が行はれた結果、同樣に社會民主々義の立場を採る勞働黨が壓倒的勝利を占めた事實も、看過することはできない。比例代表制であるから、當選者數はそのまゝ得票數の比率である。左に當選者別を掲げる。

勞働黨	現政府黨（保守及自由黨の聯立派）	農民黨	急進黨	共產黨
五九	三二	二六	二九	三

勞働黨の當選者は一擧に廿七人を增加したのであつて、この增加は現政府黨たる保守黨及び自由黨の聯立派が廿二人を失つたことゝ、共產黨の減少に基いてゐる。農民黨及び急進黨は、我が國に就て言へば、それ〴〵日本農民黨及び日勞黨に相當するものであらう。

* * *

これらの國以外の各國に於ける實際を示す材料が手許にないことを甚だ遺憾とするのであるが、しかし、この夫々典型的な特質を有する三つの國の情勢は、世界各國の實狀を察する上に、あながち不足な材料ではないと思ふ。

以上擧げて來た數字は言ふ迄もなく、現存反動勢力が漸次一般大衆の信頼を失ひ、その失はれたる信頼が、大衆の民主々義的發達に伴つて、社會民主々義への支持となつて、その姿を現しつゝあることを示してゐる。共產黨の他愛のない數字は、かゝる必然的趨勢に對する彼等の認識不足を直截に證明してゐるのである。

しかも、かゝる必然的趨勢こそは、一般大衆をファシズムの危險から遠ざからしむるものに外ならない。何となれば、民主々義的發達の上に一種の獨裁たるファシズムは君臨し得る筈はないからである。ファシズムは、無產階級運動が共產黨の革命的獨裁主義を採つて一般大衆から遊離し、徒らなる混亂と無能とによつて大衆に見離されたとき、突如として大衆を奪ひ去るものであり、特に大衆が民主々義的に未發達なことを根本條件とする。イタリーその他のファシスト國はかくして生れた。かゝるファシズムの魔手から大衆を救ふものは、社會民主々義の無產階級政治運動以外に何物もあり得ないのである。

經濟上に於ける勞働組合主義と、政治上に於ける社會民主々義とによつて相表裏さるゝところの現實主義的社會主義の無產階級運動方針は、今や理論的にも實際的にも、この世界的反動を着々制覇しつゝある。

五　日本及び東洋に關して

以上、私は主として歐洲の狀勢に即して論を進めて來た。しかしながら、かくして得た種々の結論は、日本及び東洋に關し

ても本質的に同様な妥當性を持つのである。

勿論日本及び東洋は、それに固有の特質を持つてゐる。その特殊性の一つ／＼は枚擧に遑がない。それ故にこそ日本及東洋の無産階級動は、それ自身として獨立の形態を有し得る。しかし、その底を流れるところの本質的な法則性と必然性とは、先進國たる歐洲のそれと毫も異るものではなく完全に共通してゐるのである。歐洲各國の經つゝあるところは、必然に我々日本及び東洋の辿り、若くは辿らんとしてゐるところに外ならない。世界の情勢は既に一環として密接な連絡の下に在るからである。

しかし、このことは決して歐洲各國に對する漫然たる模倣の是認を意味するものではない。我々は兩者の連環を、一個の法則性と必然性に於て理解し、世界の大勢を充分に把握することが必要なのである。かくしてのみ、日本及東洋の有する特殊性は確固たる形に於て受容され、進歩的に再現され得る。國粹主義と模倣主義とはともに何等の進化性を有しないのであつて、昭和時代に於ける共產黨の運動が、明治時代に於ける歐化萬能主義の先蹤を繰り返すであらうことは、歴史の敎へるところである。鹿鳴館に集まつた人達は舞踏服で身を裝つた。今は？或る劃一的な戰術を以て……。

＊　＊　＊　＊

日本及び東洋に於ける民主々義の漸次的な發達は、無產階級の進出に對して一個の光明を投げる。日本に於ては、たとひ不完全だつたにしろ、普選の第一回を行つて、その結果は我々の運動方針に充分なる希望を與へた。

支那に於ては、今や國民革命は半途にして挫折されてはゐるが、三民主義の名に藉る民主々義の思想は、もはや充分に一般大衆の間に浸み渡つたことは何人と雖も認めるところである。軍閥の影は、共產黨と共に日一日と薄らぎつゝある。

印度に於ては、一九一八年から二二年にかけて漸く發生を觀た勞働組合は最近數ヶ年左の如く顯著な發展を遂げ、國民運動の有力な基礎を築きつゝある。

	組合數	組合員數
一九二三年九月	一九	四一、六四六
一九二四年〃	二一	四七、二四二
一九二五年〃	三八	五四、一七五
一九二六年〃	五六	七二、四一一

最近に於ては、勞働黨結成の運動すら起され、國民議會と相呼應しようとし、勞働組合法案は我が國より一足先に本年六月から實施された。その内容は、英國の新法案と同樣、官吏及官業の加入を禁じ、政治基金を勞働組合が支出する等のことを禁じてゐるが、とにかくかゝる現象は、印度に於ける民主々義の發達を示唆する。

かゝる狀勢の悉くは、歐洲のそれと相俟つて、東洋に於ける無產階級運動を導く有力なる因子に外ならないのである。

（一九二七・一〇・二七）

銀行合同促進の利弊

牧野輝智

（一）

銀行の合同奬勵は歷代の大藏大臣が等しく墨守してゐる對銀行政策の重要なる一である。銀行合同の必要を最も早く力說し、是が實行を試みるのは高橋是清氏の藏相時代であつたと記憶する。其の後內閣が幾度か變り、藏相の任に當る人も其都度更迭したけれども、銀行合同奬勵方針には何等變更なく、加藤(友)內閣の藏相市來乙彥氏も、憲政會內閣の藏相であつた濱口雄幸氏片岡直溫氏等も、同一方針であつた。山本內閣の井上準之助氏や淸浦內閣の勝田主計氏などは、其任期が短かゝつたゝめ此問題に就て實績の見る可きものはなかつたけれども、就中井上準之助氏などが熱心なる銀行合同論者であることは、其平素の主張や日銀經營の方針に照して頗る明白なことである。現內閣の藏相三土忠造氏も亦高橋翁の衣鉢を繼ぎ、銀行改善の根本方針としては依然合同の奬勵を金科玉條としてゐるやうである。然るに最近現內閣の閣僚中歷代の藏相が實行に努めてゐる銀行の合同奬勵に對して異議を挾み、徹底的の合同奬勵が、地方金融を硬塞せしめ、尠からず弊害を醸しつゝあることを力說するものが現はれた。それは望月遞相中橋商相等であつて、是が爲めに三土藏相は銀行合同の方法等に就き幾分手加減を加ふことになつたと傳へられてゐる。

經濟上の時事問題として我々が新味を感ずるは此點である。銀行合同の勵行は可なり永い以前からの事實であるが、餘りそれが一徹であるため多くの弊害をも體驗せられた。であるから私は玆に此の問題を捕へて銀行の合同には如何なる利益があるか、如何なる弊害があるかの問題を少しく考察して見たいと思ふ。

（二）

我國の銀行の根本的の弱點は行數のみ多くして資力が、甚だ貧弱であるといふことであつた。明治卅五年現在にて銀行數は二千二百九十行であるに對して、資本金は公稱資本にて四億一千萬圓に過ぎなかつた。一行當りの平均資本は十七萬九千圓に過ぎない。更に各銀行に就て見ると、資本金一萬圓、二萬圓、三萬圓、五萬圓といふ小銀行がざらにある。甚しい例を擧げると、三重縣松坂町の横須賀屋銀行といふのは個人銀行ではあるが、資本金千五百二十圓（大正十二年末現在）である。株式會社組織の銀行でも靜岡縣白須賀町の白須賀銀行は資本金三千圓である。二萬圓五萬圓といふが如き小銀行に至りては、地方に行かずとも東京に幾つも其實例がある。斯の如く極端に小規模の銀行が、今日の經濟界にありて銀行として存立するの不合理なことは多く云はざるも甚だ明かである。銀行としての第一條件は經營の基礎が堅實であるといふことである。銀行は多くの人々の資財を預りて、營業をなすものであるから、如何なる場合にも預金者に損害を及ぼすことのないやうに堅實第一主義を以て進むことは、銀行經營の根本義であらねばならぬ。必ずしも今春の銀行恐慌の例を俟たずとも、多くの銀行が破綻の失態を演ずる原因は、皆な此の根本義を忘れて放漫な經營をなしたことに存してゐる。であるから高橋是清氏を始とし歷代の大藏大臣が、我國の銀行業の弊根は無數なる小銀行の對立にありとなし、是が合同を奬勵し促進するために努力しつゝあることは、主義としては異議を挾む可き筋合のものでないと考へられる。

（三）

斯くて歷代の藏相が相繼いて銀行の合同を奬勵した結果として、銀行の合同は行數の減少に於ても一行當りの資本金增加に就ても相當見る可きものがあつた。今試みに明治卅五年以後最近までの、銀行合同の狀勢を統計にて示せば左の通りである。

全國銀行の合同狀勢

	普通銀行		貯蓄銀行		合計	
	行數	資本金	行數	資本金	行數	資本金
明治卅五年	一、五八五	圓 四〇四、四九七、〇〇〇	七〇五	圓 一二、一〇八、〇〇〇	二、二九〇	圓 四一六、六〇五、〇〇〇
同卅六年	一、五五六	四〇二、九七四、四〇〇	六九九	一二、一四五、一〇〇	二、二五五	四一六、一〇八、五〇〇
同卅七年	一、五三一	二九六、九五二、七三〇	六八五	一二、三八八、一〇〇	二、二〇四	四一〇、〇六九、八三〇
同卅八年	一、四九五	二九六、五二二、六七〇	六八五	一二、九三五、一〇〇	二、一七八	四一一、三二八、七七六

同卅九年	一、四七〇	三〇〇、六二三、一二〇	六八八	一三五、一二四、六〇〇	二、一五八	四三五、七四七、七二〇
同四十年	一、四六八	三四九、二〇五、二五〇	六七八	一三八、八四四、六〇〇	二、一四六	四八八、〇四九、八五〇
同四十一年	一、四五〇	三五七、〇一三、八〇〇	六七〇	一三五、〇三九、六〇〇	二、一二〇	四九二、〇五三、四〇〇
同四十二年	一、四四四	三七六、五六五、三三五	六五九	一三三、八〇〇、六〇〇	二、一〇三	五一〇、三六五、九三五
同四十三年	一、四四八	三八六、七九七、八三五	六四六	一五三、八七二、一〇〇	二、〇九四	五四〇、六六九、九三五
同四十四年	一、四四七	四〇二、三四五、九八五	六四六	一四二、六二二、一〇〇	二、〇九三	五四四、九六八、〇八五
大正元年	一、四六〇	四五二、三九二、四八五	六四〇	一四九、三五四、六〇〇	二、一〇〇	六〇一、七四七、〇八五
同二年	一、四五七	五〇六、七〇一、四一五	六四八	一七〇、四四五、六〇〇	二、一〇五	六七七、一四七、〇一五
同三年	一、四四五	五一五、二六九、七一五	六五八	一八八、七一二、八五〇	二、一〇三	七〇三、九八二、五六五
同四年	一、四四二	五一四、七一一、〇一五	六五七	一九三、三二四、三五〇	二、〇九九	七〇八、〇三五、三六五
同五年	一、四二七	五三〇、〇九九、八一五	六六四	二〇一、三七四、八五〇	二、〇九一	七三一、四七四、六六五
同六年	一、三九八	六五九、五九四、七六五	六六四	二二五、六二〇、七〇〇	二、〇六二	八八五、二一五、四六五
同七年	一、三七七	七七八、二四二、四六五	六六一	二五八、七五五、七〇〇	二、〇三八	一、〇三六、九九八、一六五
同八年	一、三四五	一、〇八三、八三五、〇〇〇	六五九	三四一、三三〇、〇〇〇	二、〇〇四	一、四二五、一六五、〇〇〇
同九年	一、三三一	一、六〇六、五六三、〇〇〇	六六四	五四九、九二三、〇〇〇	一、九九五	二、一五六、四八六、〇〇〇
同十年	一、八三五	二、二〇九、八四一、〇〇〇	一六三	七二、六四一、〇〇〇	一、九九八	二、二八二、四八二、六〇〇
同十一年	—	—	—	—	—	—
同十二年	一、七〇一	二、四五六、三三五、九二〇	一三九	八三、七七一、〇〇〇	一、八四五	二、五四〇、一〇六、九二〇
同十三年	一、六二九	二、四四一、八五二、二五〇	一三六	九〇、四五一、〇〇〇	一、七六五	二、五四〇、一〇六、九二〇
同十四年	一、五三七	二、四〇六、五六〇、七五〇	一三三	九〇、〇三一、〇〇〇	一、六七〇	二、四〇六、五六〇、七五〇
昭和元年	一、四二〇	二、三八四、九五七、五〇〇	一二四	九七、九四一、〇〇〇	一、五四四	二、四八二、八九八、五〇〇
昭和二年十月末	一、三三七	—	一二一	—	一、四五八	—

〔備考〕　一、右の統計は大藏省銀行局の調査である。　二、各年の統計は何れも其年十二月末の現在である。　三、資本金は公稱資本である。　四、大正十一年の行數及び資本金は調査中の書類が震災の爲め燒失して不明

右統計を解剖して見ると、普通銀行は明治卅五年に千五百八十五行であつたものが、昭和二年十月末には千三百三十七行に減じてゐる。是は數に於て著しい減少ではないが、それは貯蓄銀行法改正のために大正十年に貯蓄銀行の普通銀行に變つたものが、五百餘行の多きに達したからである。又普通銀行の資本金に就て見ると、明治三十五年に一行當りの平均資本十九萬二千圓であつたものが、昭和元年末には百六十八萬圓に増加してゐる。是は此の廿五ケ年間に於ける經濟界の進歩に基づくとはいへ、銀行の合同促進の効果が與つて力あることを看過してはならない。

次に貯蓄銀行の狀勢は明治三十五年に行數七百五であつたものが、激減して昭和二年十月末には約六分の一の百二十一になつてゐる。資本金は明治三十五年に一行當り平均十四萬五千圓であつたものが、昭和元年末には七十九萬圓に増加してゐる。

更に普通銀行貯蓄銀行を通計したものに就ていふと、明治三十五年末には全國銀行數二千二百九十であつたものが昭和二年十月末には千四百五十八行となり、資本金は一行當り平均十七萬九千圓であつたものが、百六十萬圓（昭和元年末現在）に増加してゐる。是を比率でいふと、銀行數は六割三分に減少し、資

本金は約九倍に增加した次第である。

（四）

銀行の資力充實を知るために最も注目す可きことは、預金が如何に增加したかといふことである。資本金の增加だけでは銀行の發達は分らない。然らば我國の銀行預金は如何に增加したかを調べて見ると

我國銀行の預金增加の狀勢＝（單位千圓）

	普通銀行	貯蓄銀行
明治卅五年末	五三六、七〇二	八四、九六五
明治四十年末	九四四、二九五	二一八、七四二
大正元年末	一、三五七、二七一	三三三、九二八
昭和元年末	九、〇三一、〇〇〇	一、〇六四、一四一
昭和二年九月末	八、六五八、六〇〇	一、〇五〇、七六六

といふ狀勢を示し、明治三十五年に一銀行の預金高は普通銀行にありて三十四萬圓であつたものが、昭和二年九月末現在では一行當り六百四十八萬である。大體に於て銀行資金が著しく增進したことは一行當りの資本金額と預金額の增加狀勢で十分推測することが出來る。

一體銀行の合同奬勵の本旨は何に存してゐるかといへば、それは預金銀行としての堅實性を鞏固にすることに外ならぬ。合同を促進し、不當又は無謀の競爭を防遏することも、其趣旨は銀行の堅實味を加增することに出發してゐる。何といつても銀行としての第一要件は基礎の堅實といふことであるから、此の要件を確實にする爲めに企てられた銀行の合同促進は、決して間違つた政策ではない。たゞ銀行の堅實といふことは資本金の增加や預金の增加だけで望み得可きことではない。其貸出しが確實で、必ず回收し得可きものでなければならぬ。我國の銀行の經營は此の點に於て大いに方法を誤つた。不良貸滯貨は著しく增加し、預金の總額よりか貸出の總額が多いといふ變態現象を演じた。今春の金融恐慌、銀行混亂は要するに此の不良貸滯貨が明るみに曝され、信用を失墜した結果に外ならぬ。斯樣な次第であるから銀行の堅實といふことは、銀行の合同による規模の擴大だけでは望み難いことであるけれども、兎に角銀行の信用增進の一手段たるを失はない。

（五）

然らば銀行の合同は既に極度に達し、此の上合同の餘地がないかといへばなか〳〵さうではない。我國の經濟事情としては千四百五十八の銀行でも未だ多過ぎるといふ嫌を免れない。特

に各銀行に就て其規模を調べて見ると、現在でも資本金二萬圓にも充たない質屋以下の銀行でさへ全國では十三行からある。左の通りである。（大藏省調査）

資本金二萬圓未滿の現在銀行（昭和元年十二月末現在）

資本金	銀行名	所在地
三、〇〇〇圓	白須賀銀行	静岡縣濱名郡白須賀町
三、七五〇	山口銀行	千葉縣安房郡七浦村
一〇、〇〇〇	太田垣銀行	兵庫縣朝來郡山口村
一〇、〇〇〇（營業停止中）	新海株式會社	長野縣南佐久郡海瀬村
一〇、〇〇〇	永續株式會社	静岡縣田方郡田中村
一二、〇〇〇	會員銀行	福岡縣八女郡北川内村
一二、五〇〇	東京割引銀行	東京芝新堀町
一二、五〇〇	熊谷商業銀行	埼玉縣大里郡熊谷町
一二、九〇〇	信用銀行	茨城縣久慈郡太田町
一五、〇〇〇	熱海銀行	山梨縣北巨摩郡熱見村
一五、〇〇〇	棚倉協同株式會社	福島縣東白河郡棚倉町
一五、〇〇〇	若櫻銀行	鳥取縣八頭郡若櫻町
一八、〇〇〇	瀧澤銀行	長野縣北安曇郡七貴村

十萬圓以下の資本の銀行に至りては一寸數ふるに暇ない程である。大藏省ではずつと以前から新銀行の設立には嚴格な制限を設け、大都市では資本金の最少限百萬圓以上、地方でも五十萬圓未滿の銀行設立は絶對に許さぬ方針を執つてゐたが、今春の議會で成立した新銀行法では、總べて銀行の資本金は大都市（東京、大阪、京都、名古屋、神戸、横濱の所謂六大都市）では二百萬圓以上、地方では百萬圓以上でなければならぬと規定し、一定の期間を置いて既存銀行の資本金を此の金額以上に引上げしむることになつてゐるから、其結果小銀行の合同が著しく促進されるはいふまでもない。

（六）

併しながら銀行の合同も亦他の一面には幾多の弊害が伴ふことは閑却してはならない。最近の閣議で一部の閣僚が三土藏相に對し極端なる合同奬勵の不可を唱へたといふのは即ちそれ等の點の一部である。銀行合同の第一の弊害は資金を都市、特に大都市に集注せしむることである。銀行の數が激減し、地方には大都市に本店を有する銀行が支店網を張り、預金を吸收することになれば、勢ひ地方の資金特に農村の資金は都市に吸收され、さなきだに資金難に苦しんでゐる地方の産業界をして、益々窮迫せしむる結果となる。更に都市の金融に就て云ふも、所謂大銀行主義は大なる商工業者相手の金融のみを業務とし、小商工業者相手の金融を顧みない弊害がある。手近い例として第一銀行の東海銀行併合の結果に就て見ても、預金者の保護といふ點からのみ云へば、基礎の鞏固でない東海銀行宛の預金が、第一銀行に肩代りされたことは有利に相違ないが、資金の融通

といふ點から見ると、從來東海銀行から資金の融通を受けてゐた、小商工業者は、東海を合併した第一銀行からは顧みられない結果となり、以前の東海銀行支店の貸付などは四分の一に急減したといふことである。今春の金融恐慌の結果、三井、三菱、安田、住友、第一の所謂五大銀行の預金は急增し、其增額だけで五億圓に達し、此五大銀行の預金總額は二十七億圓を越えてゐる。即ち全國千二百有餘の普通銀行の總預金の四分の一を五大銀行にて保有してゐる次第である。此の資金偏在の新現象こそ、即ち今年の中小商工業者の金融硬塞の有力なる原因である。金融恐慌が齎した資金偏在と銀行合同による資金の集中は形式に於ては異つてゐるけれども、結果に於ては酷似してゐる。即ち大會社や大商人の金融のみに便宜を與へ、中小工業者の便宜を閑却する點に於ては彼是ともに同一である。

更に一つの閑却してならぬ問題は土地金融の問題である。今日全國の普通銀行特に地方の中小銀行が土地に融通した金額は十五億圓に達してゐる。預金銀行が土地抵當の融資をたすことの不可なるは銀行論の初歩にある通りであるけれども、事實に於て我國の普通銀行は土地に對し十五億といふが如き巨資を融通してゐる。是は地方銀行などでは、擔保物件の確實なものがない爲であるが、又一面には是がどの位地方の金融を助けてゐるか分らない。ところが極端な大銀行主義が實現するとなると、土地に對する金融は行はれないことになる。それでは益益地方の金融を硬塞さするばかりであるから、是等の對策をも十分考慮することが肝要である。

要するに銀行合同の弊害は預金者の擁護、銀行の基礎の確立といふことのみを考へて、資金需要者の便宜、特に中小商工業者其他の金融といふ問題を閑却し、産業界の大衆に不便を與ふるといふ點に存してゐる。銀行合同を策する人は如何にして此の弊害を除去すべきかの問題を忘れてはならない。

（七）

私の考では總べて銀行では信用を生命とするものであるから其の業態が堅實でなければならぬことは勿論であるけれども、銀行の堅實といふことは必ずしも規模の大小と比例するものではない。臺灣銀行のやうな特殊銀行でありながら世界の銀行史で類例のないやうな失態を演じた大銀行もある。十五銀行の如く一億圓の公稱資本を有して破綻の醜態を演じた銀行もある。之を人間に例へて見ると、體軀の偉大な人のみが必ずしも健康ではない。體軀は倭小でもがつちりして健全體を具備してゐる人もある。更に又之を各國の通貨の現狀に例へて見ると、佛國や伊太利のやうに大國でありながら、其の貨幣の對外價値が四分の一以下に下落してゐる國もあれば、和蘭や瑞西のやうに小

國でありながらバーを保つて居る國もある。是と同樣に銀行も亦規模の小さいものが、必ずしも不堅實ではない。實際地方の銀行などは、さほど大資本の銀行たることを要しない。其地方の經濟力產業力に應じた程度の資力の銀行で十分である。繰り返して陳べた通り堅實といふことは如何なる場合にも絕對的に必要であるけれども、大規模といふことは絕對的の條件ではない。資本金三萬圓五萬圓の銀行が今日の銀行資本として時代遲であることは勿論だが、何千萬圓の大銀行の支店よりか、地方相當の小銀行の方が其地方の經濟事情と一致した營業を行ふことに便利である。此の事は動ともすれば强制的に地方銀行の合同を行はんとしつゝある當局者の熟考すべきことであると思ふ。

（八）

今日世界の銀行の狀況を見るに大銀行主義の標本を示すものは英國である。英國では銀行合同が極端に遂行され大ブリテン愛蘭を通じて銀行數は四十九に過ぎぬ（一九二三年末現在）。此の合同の推移を尋ねると一八九三年には百五十九行、一九〇二年には百十五行、一九一三年には五十二行、一九二三年には四十九行といふ經過を辿つてゐる。而かも、此の四十九行に就て其の預金の八割は、所謂ビッグ・ファイヴ即ちバークレー銀行、ウエストミンスター銀行、ミッヅランド銀行、ロイヅ銀行、ナショナル・プロビンシャル銀行で占めてゐる。此の五大銀行は何れも二千何百といふ多數の支店網を有し、英國の銀行業務を壟斷してゐる。斯樣な次第であるから今日の英國では所謂大銀行主義が遺憾なく發揮され、大規模の商工業の繁榮には大に貢獻する所があつたが、矢張り英國でも小商工業者は此の主義の犧牲となり、資金難に困窮し、勞働黨などは五大銀行に壟斷された英國銀行界の缺陷を頻りに攻擊してゐる有樣である。

英國と反對に多數銀行主義の標本ともいふ可ものは米國である。米國では一九二四年末現在で二萬八千二百八十七の銀行がある。其の內九千五百八十七行が聯邦準備銀行加盟の株主銀行で、一萬八千七百行が不加盟の銀行である。預金額は前者が二百七十八億弗、後者が百十二億弗であるから、前者の一行當り預金は約三百萬弗、後者は六十萬弗である。此の多數の銀行の存立は中小商工農業者の金融には便利であるけれども、每年多數の營業停止を見るは米國銀行界の特色とも見る可きである。幸に政府の監督が我國などよりも行屆いてゐるから甚だしい弊害はないけれども何としても無數銀行對立の弊害は免れ難い。是等の諸國の實例にも鑑み我國銀行合同に對して最後の結論を下すと、我國の銀行は數に於て資本金に於て尙は大に合同促進せしむる餘地はあるけれども、大銀行主義の弊害も既に十分現はれてゐる。であるから一方に於て銀行の堅實を期すると同時に、資金融通の方面に於て廣く產業上の各方面に行亘るやうに有らゆる對應策を講ずることを忘却してはならないといふことに歸着する。

――昭和二・一一・九――

政友會の農地金庫法案

中澤辨次郎

一

若槻憲政內閣が立案した小作法案は、如何にも不徹底であつた。其の爲に社會的不評を免れることは出來なかつた。それは同時に、田中政友內閣が該案を葬る絶好の口實となつた。彼等は若槻內閣の小作法案が不評判である機會を逸さず、組閣の劈頭先づ第一に小作法案を一蹴して終つた。けれどもそれに取つて代る可き代案を持たずに國民の半數を占めて居る農民に臨む譯には行かなかつた。其處で考へ出された案が今度の「自作農地金庫法案」である。彼等は稱して言ふ『我黨內閣の立案こそ、眞に農村を救ひ農民全般の利益を計る、所謂農村振興の根本方策である』と。知らず該案が果して眞の農村振興策に値ひするや否や、之れから寸評を試みよう。

產業立國だ、積極政策だ、地方分權だ、地租移讓だ何んだ彼だと鳴り物入りで打つて出た、政友會內閣の農村振興策として見る時、なる程該案は政友會內閣に相應しい政策ではある。十八億圓を限度とする農地債券の發行を許し、現存小作農地二百七十三萬町歩の約三分の一を卅五ケ年內の間に每年八千萬圓宛出して自作農地にして終ふと言ふのである。その試みや洵に壯なりと言へる。事情を知らぬ農民等は振ひ付き度くなる程有り難かるかも知れない。而も彼等は旣に之れを實行に移す可く四章に分け七十二ケ條に渉る尨大なる法案を用意し、それに要する一切の經費の如きも早くも明年度豫算案中に計上して第五十四議會に提出する段取りにまで進むだと云ふことである。其處で論を簡潔にする必要上、先づ該案の要綱を摘記して見よう。

一、自作農地の創設又は維持に關し申請ありたる場合農林大臣は自作農地委員會の審議を經てこれを決定し農地金庫に指令すること

一、自作農地委員會の組織權限その他必要なる事項は勅令を以つて定むること

一、自作農地の創設又は維持に關し適法の手續を了へたる時土地の所有者は抵當權者若くは質權者はその補償として農地金庫より命令の定むる所により農地債券の交付を受け自作農地の創設者又は維持者は農地金庫に對しその補償に相當する金額の年賦支拂義務を負擔すること

一、年賦支拂の期限は据置期間一年以内年賦償還期間三十四年とし、その年賦金額は農地金庫の補償價格を元本と見なして利率年五分により算出したる金額とすること

一、創設又は維持せんとする自作農地の面積は命令の定むる所により各地方に於いて田畑の自作により農家が生計を維持するに足る面積の範圍内であるを要すること

一、自作農地に對しては强制執行をなすことが出來ざると

一、自作農地には地租を課せざること

一、自作農地の創設維持の爲め必要の證書に就いては印紙税を納むるを要せぬこと

一、自作農地に就いては所有權取得に關する地方税を免除すること

一、農地金庫は法人としその主なる事務所を東京市に置くこと

一、農地金庫には所得税及び營業收益税を課せざること

一、農地債券は命令の定むる所に依り券面金額以下の價額を以つてこれを發行し得ること

一、農地債券は最高十八億圓を限度とし五分利付、その償還は据置期間一年以内、以後卅四年にこれを結了すること

一、農地債券の利子に對しては所得税及び資本利子税を課せざること

一、農地金庫の業務は農林大臣の監督に屬すること

一、農地金庫の事務費其の他の經費は豫算の範圍内に於いて國庫の補償をなすこと

一、農地債券を券面金額以下の價額で發行したる場合農地金庫の損失は國庫でこれを補償すること

一、償還年賦金の減免により蒙りたる農地金庫の損失は國庫がこれを補償すること

以上が彼等の言ふ農村振興の根本方策の全豹であり、土地制度改革を中心とする農村社會政策の完成案である。彼等は此の案を實行に移すことに依つて階級對立の存續を保證するが如き小作法案の如きを考へる必要はないと言ふて居る。何故なら此の案に依つて日本の將來の小作農は悉く自作農になり得て終ふか

らである。其の時こそ初めて我黨内閣の積極的農村政策の有難味が解かるから、期せずして我黨の立案は農民に理解され嚮がて全農民擧げて之れを謳歌するに到るであらうと彼等は夢想して居るのだ。此處に於いてか私は一と通り該計畫を檢討することゝしよう。

二

所が政友内閣の自作農地金庫法案を立案しようとした根本的考へ方の中に大なる自己錯覺の反映が織り込まれて居る。何んとなれば自作農地を金庫法に依つて助成せんとするには先づ第一に自作農そのものが農業として經濟的に經營されるであらうことを條件とする。若し萬一現在の自作農そのものにして近代經濟の數理に合致し得ざる不合利の點があるならば、其不利である根本原因を芟除しない限り、例へ自作農地を特別法律に依つて助成した所で、其の土地が永久に自作農地として維持されよう筈はない。然かるに該案には此の點の省察が少しも爲されては居ない。たゞ現在の小作地を自作農地に形式的變換を行へば、それで問題は解決して終ふものゝ如きお目出度い考への下に立案されて居る。現に我が國に於ける自作農家は近代經濟の大波に大動搖を受けて經濟的に立ち行くことが出來ず、年々約一萬戸――自作農地も約一萬町歩――宛減少して居る。從つて若し政友内閣がホントウに自作農の創定政策を以つて農村振興の根本方策であり、農村社會政策の要諦であると信じて行はんとする考へがあるならば、自作農地金庫法の準備條件として、現在の自作農と現在の小作農とが現在の農業經營に從事して居つても、經濟的に自活し得ると云ふ完全なる農業の助成法を設けるか、若くは彼等の生活を保障するに足る特別立法を伴はしめて然かる後に立案すべきである。然かるに彼等は事此處に出でず、徒らに貧農階級に對して國家の保障すると云ふ借金――その實は國家が中間に介在して契約の履行を強制力に依つて迫る――を負はせ、以つて彼等に超人間的勞働と超世間的勤儉とを假想し、其の血と汗の結晶に依つて年賦補償金を完濟させようとするのであるが、恐らく斯うした貧農の超人的過勞に依存して返濟される年賦金が決濟の就く頃には、貧農の全家族は擧げて骨と皮許りの悲慘なる人間に化して終ふか、若くは反對に返濟金額と同額若くはそれ以上の負債が他方に推積し、卅五ケ年の期限付拘束から該自作農地が解放されて、自由に抵當物件に供し得るか亦は自由賣買に付し得る機會を備育せねばならぬ狀態に陷る位ひが關の山である。これも向ほ且つ想すべし。然し乍ら默視出來ないのは、該案の中には小作農保護に名を借り、其

の實は小作問題の激化と公租公課の負擔荷重とに不平を洩らして土地の賣り拔けを企らむで居る大地主階級の土地賣拔助成法案としての本質的條件を遺憾なく整へて居る事だ。從つて該案を正しく解すれば貧農乃至小細農保護的社會政策の名に於いて實際は大地主階級保護を斷行せんとする反社會的欺瞞政策であると斷ぜざるを得ない。それも無智な細小農の眼前の小利にのみ汲々として居る心理を逆用——貧農階級の多くは土地の所有慾に餓え切つて居る。土地の所有を許されない狀態の下に置かれて居ることに依つて受難した彼等の體驗は極めて長い間間くも悲慘なる生活の記錄に充たされて居る——して將來下落すべき傾向にある耕地の價格を今日の高價に於いて維持し今日の價格に於いて貧農に買ひ取らしめんとする野望が秘められて居るのである。此の點に於いて該案は二重の罪を重ねる反社會的立案であると言へる

と言ふのは該案の內に毫も地主の賣り拂はんとする土地の價格に對して制限を加へようとしては居ない。否な地主の所有地處分權に對しては飽迄も完全なる自由を保たしめ、而もその販賣方法も最も適確である國家が仲介して全責任を負ふ仕組みを設け乍ら、他方貧農階級が該案に依つて自作農地を取得せんとすれば、三十五ケ年といふ極めて長い期間に於て極度の制限を付し、萬一中途に於いて些少の違約を生ずる場合は農地金庫より解約の宣告を下され（法案第八條及第九條）ても敢へて異存を述べる餘地が與へられて居ないのである。從つて自作農地金庫法案とは特別の强制法に依つて貧農の超勞働を三十五ケ年と云ふ長い期間に渡り、一定の土地の上に働かせ、それに依つて自作農にされようとする貧農が困窮しようがすまいがそれは問題ではない。地主階級が土地の賣り拔けを完全に終了する迄、土地の上にしつかり縛り付けて働せようとする法案であることに間違ひはない。そうすることに依つて土地の價格下落は完全に防止される。否な土地の需要——人爲的ではあるが——が發生する事に依つて、土地の價格は今日以上に騰貴する。此の點に於いて該案は完全に地主階級の經濟的地位を確保せしめんとする目的意識が秘められて居るのだ。假りに之れ等の點を割引して判斷しても、我が國の貧農階級が土地の所有に饑えて居る事は明白な事實である。此の一群に向つて十八億と云ふ大金を振り翳して「自作農地を創定する」と言へば、彼等にそれが實現されるかの如き錯覺を起さしむるには充分なる魅力がある。此の錯覺を利用して法案に二重の反社會的目的を盛るが如きは公黨の案として許すべからざる立案だ。

三

更に翻つて該計畫の數字を検討するとき該案が如何に杜撰極まるものであるかが暴露される。當局は十八億圓を限度とする農地債券を發行することに依つて、三十五ヶ年間に現在の小作農地の約三割を自作農地にすると言つてゐるが、十八億の金額に依つて求められる土地は町當り四千圓と假定しても——普通六千圓であるが——僅かに四十五萬町歩である。亦一ヶ年八千萬圓宛の金に依つて求められる土地の面積は僅かに二萬町歩に過ぎない。從つて卅五ヶ年掛りで七十萬町歩の自作農地が出來る勘定である。が今日既に年々一萬町歩宛の自作地が小作地化して居ると云ふ現實の自作農の經濟條件が改革されない限り、今後も同樣に此の變換作用は行はれるであらう。すれば、卅五ヶ年に毎年八千萬圓宛投じても僅々卅五萬町歩以上の自作農地は創定されない勘定である。而も自作農地の爲に支拂はれる最高額が既に十八億圓と限定されて居る以上、如何に間違つても四十五萬町歩以上の自作農地は創定出來ない。而も斯くの如き莫大なる資金に依つて爲される計畫が、その反面に於いてたゞ自作農地を形式的に作り上げれば以つて我事成れりと考へて居る案なるに於いて、殆んどそれと同面積同額の小作農地が、自作農業現實の經濟作用に依つて激成されつゝある點より顧るならば本計畫はホンタウに籠の中へ水を盛らんとする兒戯に等しい案である。堤防を築いても河身に對して改修を施さんとしない河川法を施行するにも等しい愚策である。堤防を如何に高くしても河川の本流に砂利が堆積すれば水害は免れ得ない。籠の中に如何に水を盛らうとしても籠が桶に置き換へられない限り、水は永久に湛まらぬ。而も敢へて之れを斷行すると空威張りして居るのが我黨内閣の積極政策とかを笠に着て居る政友會の諸公だ。好まく行つたら御手拍手喝采と云ふ所だが、ソウ〳〵安くは問屋が卸すまい。知らず政友會内閣は今後如何なる實行案を考へ出して自作農地金庫法案を物にする氣か。亦此の法案に依つて何處まで農民を愚弄して行く心算りか？

社會時評

地租委讓論の側面觀

吉野作造

政友會内閣は一枚看板の地租委讓をいよ〳〵昭和五年度から實施することに決したと云ふ。之を別の言葉でいへば五年度までこの六つかしい仕事を延ばしたと謂てもいゝ。孰れにしても之が實施は我々に取つて重大な問題だ。その事自身各方面に影響を及ぼすことの深甚なるのみならず、やり樣の如何がまた我我の利害休戚に尠らぬ關係があるからだ。從て之に付ての攻究は時節柄極めて必要であるが、そは本誌上でも之れまで屢々論議せられたから今は略するとして、私は之に關連して二三の政治的側面觀を述べて置かうと思ふ。

一、政友會の人達は地租委讓を以て國民に對する同會多年の公約だと云ふて居る。公約だから今更之を破るわけには行かぬ、政權を取て數ケ月を經た今日猶ほ之に對する成案がないとあつては國民を欺いたことになると主張して居る。併し國民の方では一向そんな約束をした覺えはないと云つた樣子に見える。何となれば、國民の多數にはそれをやらぬからとて公約無視などと責める氣配は毛頭なく、假令會てそんな聲明を聞かされたとしても、一般的公約尊重の誠意をてんで今日の政黨に期待して居ない彼等は、政友會の此事に限つて約束呼ばはりするをせゝら笑つて居るらしいからである。然らば今日の國民は此際政友會に向つて何を希望し且つ期待するかと云ふに、公約などはどうでもいゝ、事情が變つたと觀たら勝手に破つて貰つても一向異存はないから、昔の間違つた宣言などに拘泥せず、虚心以て今日の形況を率直に檢討し、國利民福の本質的増進の爲めに一番有效な方法を取つて欲しいと云ふことである。公約だ

からなどと云はれるのは本當に有り難迷惑だ。地租委讓の提案も、公約の有無に拘らず必要なのだと云ふところをもつと判然見せて貰ふのでなければ、納得の出來ぬは勿論だ。

二、國民の多數は政友會の公約呼ばはりを聞いて寧ろ呆氣に取られて居る。丁度注文もせぬのに高價な品物を送り屆けられた形だ。而して政友會の人達はたしかに之を天下に公約したと云ふ。その反面に於て世上にはまた、國民中の極めて小なる一部分ではあるが、ひそかに地租委讓の實施せられんことを熱望しその熱望の實現の爲に暗中飛躍を試みて居る者があるとの噂が高い。若し之が事實とすれば、そは多分所謂地方有志家と稱する階級にして、選擧の際には政黨の走狗となりて盛に政界の腐敗を助け、平時はその代償として種々の利權を政黨幹部に迫る徒輩であらう。而して此と彼との醜汚なる野合が當今政界腐敗の一大根源なることは實は既に人の知る所。識者は之を惜むこと蛇蝎の如く、一日も早くこの禍根を一掃して政界の取引を國民大衆の眼前に公明潔白ならしめたいと冀つて居る今日だ。若し政黨側が眞顏になつて此際國民に對する公約をうるさく云云するなら、心ある者は直にかの憎むべき野合を聯想して更に一層の反感をそゝらるるや必せりである。

三、以上の事實から私共は略ぼ今日の既成政黨が一體國民の如何なる階級と結んで居るかを推知することが出來る。今私は主として政友會に付て論歩を進めて來たが、此事は民政黨に付ても異る所はない。何となれば、民政黨は地租委讓に出て自家勢力の大に政友會に侵害さるべきを恐れて、新に義務教育費國庫負擔の餌をかゝげ頻りに地盤の擁護防衛に腐心して居るからである。要するに地租委讓と云ひ教育費國庫負擔と云ひ、之に依て一樣の利害を感ずる特殊階級が或は政友會に或は民政黨にそれ〳〵腐れ縁を繋いで居るまでの話で、之が即ち政黨の地盤なるものだ。而してこの地盤の意に反することが出來ぬと云ふ所に既成政黨の悲哀があるのだが、之を外にして彼に頼るべき根據のないと云ふ事實は、また益々深く之に頼らしむるのだから致し方がない。是れ政友會が國民の多數の更に何等の感興をも寄せて居ぬ地租委讓などを、天下の大事らしく騷ぎ廻らねばならぬ所以である。若し之を騷がなかつたら、之に出て一ト儲け不義の利權に懐を溫めんと待ち構へて居る地方の有象無象が、失望の極何を仕出かすか分らない。此輩に居直られては、普選の實施に依て前途の影の愈々薄きを自覺せる既成政黨に立つ瀬はなくなる。新興無産階級に思ひ切て打ツ突からざる以上、既成政黨がせめて公約實行の好餌を以て引積き少數有産階級の支持を無理にも繋がうと焦るのは極めて自然の數である。

四、之からの政黨は國民大多數の支持に活きねば本當は嘘なのだ。既成政黨は今なほ往時の地盤に戀々として新興階級に背を向けるのは愚の骨頂に相違ないが、又考へて觀れば斯くならざるを得ざる理由もある。それは既成政黨の地盤を構成する階級は一般無産階級と全然利害を異にし、殊に前者は近き過去に於て後者を酷使することに依てその富とその地位とを獲たものだからである。兩者の反目對立の關係が根本的且つ必然的のものなりやに付ては人に依て觀る所を異にせんも、少くとも當面の問題として、政黨は姑く有産階級の利害を無視し彼等との絕緣を賭する覺悟なくしては、輕々に無産階級の友となることは出來ぬ狀勢にある。玆に既成政黨の前途に取りて實際上の困難があるのだ。それも有産階級と絕つた上で思ふ通りに新興階級が自分達を支持して與れればよし、それが必しも當てにならぬとすれば、その不確實な豫想の爲に確實なる從來の味方を棄てるわけにも往かぬのである。否、新に興起した多勢の階級が一見自分達の敵らしく思はれるので更に從來の腐れ緣を一層堅める必要があると云ふ風にさへ焦らせられるのである。要するに今日のところでは、既成政黨の方から城門を公開して眞面目に無産階級を呼び迎へると云ふ見込は先づない。よし又あつたにしろ、私共始めとして國民の多數は恐らく直ぐには彼等の誠意を信ぜぬであらう。何となれば、過去に於ける彼等の歷史が私共をして斯く信ぜしむべく餘りに暗影に富んで居るからである。彼等は近き過去に於て如何に有産階級の利益に阿つたか。此輩の私を遂げしむべく如何に彼等は助けなき下層の人達を虐げたか。そして之等の間より起る當然の哀訴歎願に對し如何に執拗にその聽容を拒んだか。加之之に激して偶々現れた不得已反抗に向つては極めて峻嚴なる態度を以て臨んだではないか。詰り下積の階級は斯くして苦められ通しであつたのだ。而して斯かる忌むべき事實の存續を可能ならしめ之を合法なる形に枉げて公然世間に通用せしめたものは既成政黨ではないか。國民は今更どうして彼等の誠意を信ずることが出來よう。幸か不幸か聰明なる政黨界の策士は能く這般の事情に通じて居る。彼等が國民的公約などと稱して注文もせぬ品物を持廻つて居るのも蓋し之が爲であらう。併し乍ら國民の爲めとの假面の下に在來の腐れ緣を一層踏み固めんとの魂膽は、今更掩ひかくせるものではない。

附記

地租委讓それ自體の得失は姑く別問題とする。政友會が獨り之を勿態振つて持ち廻るのを眺めて、私は寧ろ鮮かに今日の政界の裏面の機構を見せつけられた樣な感がする。

以上を書き終つた數日後の十一月九日の新聞を見ると、政友會の臨時常議員會とやらでは頻りに四年度實施の斷行を政府側に迫つたとやら。三土藏相が起つて四年度實施の困難なる理由を述べんとすると、今更事務的理由などを聞かさるるは心外だ我々は唯政府に四年度實行の誠意ありや否やを質すのみと、異口同音に叫んで彼に口を開かせなかつたと云ふ。誠意だけあつても事實不能のものは致方があるまい。事實可能なりや否やは姑く別論として、問題が重大な丈け幾重にも事を愼重にするを本來得策とすべきであり、從てこの見地から觀て四年よりも五年の可なるは論ずるまでもない。而して與黨幹部は實施を急ぐの理由として專ら國民の公約を云々するも、そが實は我々平民の毫末も關知せざる所なるは亦前に詳述した通りである。故に政友會のお歴々の折角爭つて居る問題の如き、國民は實はどうでもいゝのである。四年にならうが五年にならうが我々の蒙る損害に大した變りはないからである。いづれにしても結局は政府側の意見通りに落ちつくことではあらう。只其處に安定するまでの間黨內には隨分紛擾のあつたことを一言しておく。而して是亦政友會が社會の如何なる階級に支持されて居るかを語る側面の一證だと思ふ。

自作農地創設案と內閣の運命

昨今の豫算閣議で自作農地創設案と云ふがやかましい問題になつて居る。前項末段にも說いた通り、地租委讓を四年度にやるか五年度に延ばすかに就ても政府と與黨との間に六つかしい縺れがあると云ふが、この自作農地創設案も、その決着の如何に依ては亦兩者の間隔を一層遠くせぬとも限らない。而して與黨幹部を代表すとも視らるべき當の責任者の山本農相は、今や大童になつて閣議の席上に奮鬪して居るが、幸か不幸か閣僚の大多數はこの案の通過に同情を有たない。著しく農相の面目を傷けざる範圍內に於て體裁よく之を葬り去らんとするものの樣であるが、それで農相が治まるかどうか。農相は與黨幹部の後援を恃んでか馬鹿に鼻息が荒いので、世人或は之が爲に內閣の決裂を來すことなきやを懸念して居る樣にも見える。內閣の運

に洩れた不平も手傳つて留守師團格の與黨幹部なるものの事に臨んで無謀な言說を弄するは今に始つたことではないが、飽くまで之を貫かうと云ふ程の確信と責任感とに動くのでもないから、いゝ加減騷がして置けば、何時の間にやらケロリと忘れてしまうかも知れぬ。故に私は結局閣僚多數の見解が實質的に採用さるるに至るを疑はぬが、たゞ自作農地創設案に依て達せんと試みた或種の隱れた魂膽が（假りにそんな物があるとして）全然跡を潜めるや否やは問題だと思ふ。この提案のもつ政治的意義はまた自ら別に之を考ふる必要がある。

一體自作農地創設案とは何か。分り切つたことだが一應その要領を簡單に說明しておく。一言にして云へば之れは小作人にその耕作する土地の所有權を持たしめんとの案である。人から借りて居るのでは土地に對する親しみも薄く又何時之を取り上げられるか分らぬと云ふ不安もある。が、若し之が完全に自分の物になるとすると、之を愛護するの念も厚く且又十分に勉強もするだらうから、自然收穫の多くなることは疑ひない。さすればそれ丈國の富が殖へるわけになる。加之小作人即ち地主だから、かの忌むべき小作爭議などの起りようもなくなる。爭議の絕滅と收穫の增加とは實は本案の實施が作ふ所の二大利益にして又之が本案の狙ふ目的だと謂てもいゝ。併し之は如何にして實行するか。（一）第一には地主をしてその土地所有權を抛棄せしむる。その爲に政府は農地債券なるものを發行し土地代金の意味で之を各地主に交付する。詰り政府は一旦地主から耕地を買上げその代價として債券を交付するのである。（二）次に之等の土地は一定の條件の下に小作人の所有に換へる。小作人は從來の小作料より多からざる年賦金を拂ふことに依て、何年かの後には自然とその土地の所有者になれる。之れ丈けを聞くと、小作人は每年支拂ふものは同じで、相手は何某と云ふ個人であつたのが國家に代つた丈けの差で、何年かの後には完全な地主になれるのだから、頗る割のいゝ話の樣に聞える。（三）之等の事務を取扱ふ爲に農地金庫を設ける。而して每年取り立てる年賦金は必しも全部の完納を期し難く農地債券の償還の方はどんどん洩れなく濟まさねばならぬから、結局國家は巨額の損失を蒙るに相違ない。故に露骨に云へば、地主と小作人と現に種々の爭議の起るに際し事實上地主側の蒙るべき損失額をこの案に依て新に國家が負擔することになるのだ。この點については農林當局は斷じて曰ふ、これ位の損失は、小作爭議の絕滅すること收穫の自然に增殖すること等の利益を考ふると全然云ふに足らぬではないかと。

斯う云ふ提案に接して先づ我々の考ふべきは

(一)自作農創設と云ふ事それ自體の利害得失如何、

(二)假りにそれが良いとしても、現に提案されて居る様な方法で之を行ふの可否は如何、

(三)殊に之が政友會内閣の手で行はれることに安心出來るか如何、

の三點であらう。

小作人を地主の地位にまで引き上げると云ふは純理として誠に結構なことだ。併しいろ〳〵やつては見たが思ふ通りの成績を擧げ得ぬと云ふが、從來の經驗の教ふる所ではないか。利口にしてやると云ふので折角學校に通はせても、馬鹿で卒業の出來ぬといふ者も世間に多い。いろ〳〵に苦心しても小作人が終りまで地主で押し通して呉れねば何にもならぬ。そこで之をどうすればいゝかの方法になるが、西洋諸國の經驗では、極めて限られたる範圍に於て而も極めて限られたる條件の下にでなければ仲々成績の擧らぬものなることを示して居るとやら。之等の事は別の機會に於て其道の專門家から説かるることもあらう。孰れにしても自作農創設を可とするは單純な抽象的空論の一に過ぎずして、實際施政上の方針として容易に手を染めらるべき問題でないことは勿論だ。少くともその細目の方法を立つるに就ては、啻に外國の經驗を精査するを要するのみならず、我國の事情をも格別愼重に攻究する所なくては叶ふまい。政府當局が這般の重大問題を餘りに手輕に取扱つたと云ふ點だけで、既に國民は今や多大の不安を感じて居る樣である。

農林省の提案そのものに付ては更に多くの疑義が説示されて居る。毎日の新聞論評を見ても分るが、閣議の報道を讀んでも分る。但し私は所謂法制上の疑義など云ふものには餘り重きを置かうと思はぬ。自作農地創設の目的を完全に遂せんとせば、折角地主となつた者をして中途之を轉賣すること勿からしめねばならぬ。そこで一定期間その土地を讓渡又は擔保權設定の目的物となすを禁ずると云ふのであるが、それが所有權に關する在來の原則と相容れぬとて問題となつて居る樣である。斯う云ふ批難をきいて、當局は無論のこと世上の論壇までが成程と思つて居る樣だが、斯んな法制上の技術に屬する事は本來どうでもいゝのである。我々の問題とするのは、將來の社會繁榮の上に實質的の關係を有する事項に限るべきである。而して實質的にいゝと決つたなら、その在來の原則と合ふか否かは深く問はずして可なりであらう。技術上不可能と云ふのなら致方なしとして、然らざる限り、如何に困難が伴ふとも、適當の方法を以

て之が整理を遂行したがいゝ。單純な法制上の困難だけでは本提案の採用を躊躇する理由とは斷じてならぬと考へる。

本提案に對して最も批議の挿まるるは、時期と方法と結果との三點であらう。(一)財界不況の最も甚しき今日、國庫に連年莫大の負擔を被らす本案の如き、何故に急いで實施せねばならぬのか。(二)あゝした方法で本案を實行すれば、事實に於て最も利益を占むるものは地主のみではないか。(三)而して遠い將來の結果を考ふるに恐らく小作人の地主に浮び上つたものの數は至て尠く、當局の揚言する夫の二大利益の如きも遂に空言に終るや疑ない。斯くして、斯んなべら棒な案で日本國民は救はれるものか、と云ふのが世上一般の定論となつた樣である。

若し夫れ本案の如きを政友會の手で實行せしめることの利害得失に至ては、世上の神經は一層過敏である。前段にも述べた如く、本案に依て現實の利益を得る者は、詮じつむれば地主階級だけである。而して地主は即ち政友會の地方的地盤を構成する最重要分子、之と政黨幹部との野合に由て我國政界の著しく溷濁せしめられ居ることは、前項地租委讓を論ぜる項中にも詳しく述べた。地租委讓で彼等の負擔を輕くしてやつたので足りず、今度は更に思ひも寄らぬ大金を與れてやらうと云ふのである。黨勢の擴張に此上もない好餌に相違ないが、國家は何も斯うしてまで政友會を膨脹さしてやらねばならぬ義理はない。立案者の眞の腹は或は其處に在るのでないかも知れぬが、併し今日此際無理の横車を押してまで此不評判な提案の通過をはかるは、少くとも國民一般の抱懷する這般の疑惑を解く所以ではない。目先のきく利口な政治家なら、黨略の上から云つても、斯んな案は當分陰の方に引つこめて置くに違ひない。

この問題は結局何處に落ち着くだらうか。私には能く分らない。疑のない點は、斯んな暴案の斷じて通してならぬことと、政友會中には、不幸にして黨略上無理にも之を通さうとする不所存者の意外に多いこと是である。私の希望から云へば通したくない。事の勢からいへば或は通らぬとも限らないらしい。只果して之が通るか否かに付ては、尙ほ次の諸點を考慮の中に入れておく必要があると思ふ。

（一）政友會の最高幹部中には近來段々、徹頭徹尾黨略本位で過進せんとする者とモ少し高處から物事を判斷せんとする者との二派に分るる傾向が見える。誰れと誰れとがどのグループと人を基として區別することは困難かも知れぬが（併し全く出來ないことでもない）、重大問題の起る毎に議論が兎角斯うした二つの傾向に分流するの勢は何としても掩ひ難い。而して幾分で

も公平な立場から判斷しようとする側の先頭に三土藏相あるは顯著な事實であり、田中首相亦明白にこの方の同情者であることも特に吾人の注意を要する所である。

(二) 田中首相が生へ拔きの黨員でないと云ふ事は、單にそれ丈けで黨員に對する彼れの威望なり統率力なりを相當に輕からしむべきは致し方がない。重大問題の協議に於て故の原敬は決して僚友にいつ迄も勝手な熱を吹かせなかつたとて、今日の田中を批議する場合の材料に能く之を引き合に出すが、之は決して公平なる比較ではないと思ふ。私も田中を原程の腹のある人とは思はぬが、彼の今日の地位に可なり大きなハンデイカツプの附いて居ることは亦之を認めてやらねばなるまい。加之前述の如く田中は流石に時勢を直觀するの聰明を具へてか、困難と知りつゝも斷乎として原の故智に傚ふを肯じない。そこで原に訓練された人達の間には意外の喰はせ者と映じて陰に大に忌憚されて居るかも分らない。斯う云ふ事情に在るとすれば、田中首相の最終の裁量が、多數に押されて黨略本位の立案を通すと限らぬと同時に、必ずしも彼自身の確信を押し切るだらうとも賴めない。是れ私が本件の落着如何の問に對して丸で見當がつかぬと答へた所以である。

斯んた風にして結局政友會は何處に行くのだらう。黨略本位で利權の餌を蒔き之に依て若干の議員數を增して行く所を見れば、確に之を一面の成功と云へぬことはない。併し之に依て政友會は如何に心ある者の反感と侮蔑と憎怨とを買つて行くか。黨員の中でも具眼の士は決して之を見誤ることはあるまい。そこで來るべき總選擧に單に政府黨たるの故を以て政友會が多數を占むることゝあらん乎、それこそ日本はおしまひだ。國民が斯くまで無自覺である以上、政友會中にも黨略本位の益々旺盛を極むべきは怪むに足らぬ。幸にして若し總選擧の結果、私共に取ては當然な併し乍ら彼等に取ては意外な不成績を見ん乎、こゝに始めて彼等は在來の妄を悟るべく餘儀なくさるゝことにならう。たゞ若し事のこの終局に達するを待たず、昨今わづかに現れた二派の爭端が漸を以て激成され遂に容易に收拾す可からざるものとなつたらどうなる。恐らく分裂の外はなからう。私共はよく一部の策士間に田中逐ひ出しの陰謀ありなどの噂を耳にする。是れ黨略本位の側が事毎に田中に慊らざるの感情を語るものではないか。併し田中は黨人生活の經歷極めて短き割に、單獨に逐ひ出さるゝには今や餘りに深く根を張つてしまつた。けれども未だ反對側を威服する丈けの素地が築き上げられてもゐないとすれば、二者爭端の激成が容易に分裂の危機を孕む怖れあるはまた想像に難くない。政友會それ自身の運命の如

きは實はどうでもいゝ。その潰裂に依て少しでも我國の政界に光明のもたらさるる見込ありとせば、是亦近來の一痛快事たるを失はない。

今日の無産黨は既成政黨間の醜き爭ひを匡救するの能あるか

改選後の府縣會は到る處政友對民政の醜い喧嘩で世間を賑はして居る。兩派の勢力伯仲にある處に於て取り分け紛爭の激しきは云ふ迄もないが、さうでない處でも內部の暗闘は可なりひどいと云ふ。斯くして既成政黨は益々我々國民の間に信望を失つて行く。彼等が這の下らぬ紛爭に熱狂するは元々自らその墓穴を掘る様なものであるが、併し考へて見れば、今日の與へられたる政治組織の下に於ては、不幸にして一擧に彼等の活動の手を封じ政界の空氣を革命的に一新するの方法が見出せぬのだから致方がない。理論上この點で最も大事な鍵を握るものは國民全體なのであるが、之とて漸を以てする智能の開發を遠い先きに待つの外なく、到底急場の間には合ない。其處で今日のところ、此事に關し一番賴りにされるものは新興階級を代表する無産黨議員の外にはないと云ふことになる。尤も今日所謂無産黨議員の數は極めて少い。彼等が我々の期待する如き實際の仕事を有效に爲し得る爲にはもツと澤山の當選者を持つ様にならなければならぬが、併しそは時期の問題として前途を樂觀して大した間違はあるまい。孰れにしても彼等が既成政黨の無爲横暴に憤慨して起つたものであり而して又既成政黨と何等の醜關係に繋がれざる新階級を背景として立つものとすれば、今日の政界に流行する既成政黨間の醜悪なる泥仕合を牽制し政界の空氣を一新してその圏內の一切の行動を正しい規道の上に復へらしむるものは、彼等を措いて他に求め得ないと考へる。それでも多年の積弊は之に由て容易に匡され得るや否や大に懸念なきを得ぬのであるが、兎に角我々は他のあらゆる提案に失望した揚句、なほ一縷の望を之等無産黨議員の活躍に繫げて居たのである。

さてそれ丈けの望をかけた上でそこで又當然に起る問題は例の共同戰線の能否如何の點だ。數から謂ても至て微弱な無產黨議員が、その陣營內部に於て亦多大の精力を相互の反目暗鬪の爲に浪費する樣では、既成政黨を牽制するなどの到底思ひも寄らぬは云ふまでもない。在來政界の腐敗に惱まされ既成政黨の橫暴に苦い經驗を嘗めた人達は、自分の單純な經驗から割り出して、これ丈けの大仕事に當るのだ共同戰線の張れぬ筈はないと安價に考へらるるだらうが、事實は果して其通りに行くかどうか。今日の實狀の下に於てはこの共同戰線といふのがまた頗る困難な仕事となつて居るのではないか。

無產諸黨の共同戰線のことは本誌に於ても從來屢々問題となつた。考へて見れば、之れ程局外の人には容易らしく見えて當人同士に取て無類に困難な問題はない。局外の人が考へる樣に現實の必要が遂に共同戰線を張るに至らしむるものなら、實は疾うの昔にそれが立派に出來て居る筈だ。さうした現實の必要は固より今に始つたことにあらず、過去に於てそれが意識的に唱へられたこと又試みられたことも一再ならずあるからである。夫れにも拘らずそれがどうしても出來上らず、今日となつては益々その可能性を稀薄ならしめてゐる。之は一體如何した理由か。我國政界の前途を念とするものは遂にどうしても又此事に心を留めざるを得ない。

私の考へでは、此事に關する最も根本的な原因は各無產黨ともその黨勢擴張の基礎を有權者の爭奪に置くことに在るのではなからうか。選擧民自身が今日未だ十分に政治的に覺醒して居ないことは訊くまでもない。彼等は政界の活動に付ては實は積極的の地位にあり得ない實狀にあるのだから、どうしても政黨の方から誘ひをかけられる形になる。この點は既成政黨も同じ事だ。否、既成政黨の方が却てこの點では先輩なのである。只彼と此と異る所は、既成政黨に在ては利を以て民を誘ふの武器とするに反し、金のない無產政黨に在ては之に代うるに友黨の惡罵を以てし、之に依て我方に民心を引きつけんと是れ勉める。民を誘ふ爲に利を貯へんとせば、利をあさる爲に常に政權を握つてをるの必要がある。從て既成政黨は政權の爭奪の爲には手段を擇ぶの餘裕がない。無產政黨には利の貯がない。是れ相倂立する對手に漫罵惡聲を浴せることの外に民心收攬の方途を發見し得ざる所以である。要するに民心を引きつける爲の手段はそれ〴〵異るも、無理に我黨の量的膨脹に急ぐの點に於て、今日の無產政黨は全然既成政黨と行き方を同うして居る樣だ。而して斯の如きは一體無產政黨の正しき行き方であるだらう

か。外の點は兎も角、此の行き方は民智の正しい開發を大に障碍する事だけでも大に呪はるべきではあるまいか。斯くするのも或は彼等が、既成政黨の經驗以外に新機軸を發見するの努力を惜み、爲に民衆の味方を以て任じ乍ら知らず識らず大にその開發を妨げて居るのかも知れない。本來民心は大衆の聰明を啓くことに依て獲べきものだ。黨勢擴張の方針が教育的になり、その爲に使はるる武器が眞理と品格とを以てする赤裸々の突擊であるとき、主義を以て爭ふ黨派に犬猿も啻ならざる反目の永續すべき理由はなくなる。反目抗爭が遂に君子の爭に化するに及んで、始めて異色の人達の間にも共同の特殊目的の爲にする鞏固な連合が成り立ち得るのだ。盲目的な泥仕合に浮き身をやつして居る間は、他方に對する一方の完全なる暴力的克服か、醜汚なる利益の分配に出る一時的結合か、この二途を外にして聯結を維持するの途はない。既成政黨はこの第二の途を取てやや成功を見たものだが、無產政黨が今日互に鎬を削つて居るのは蓋し第一の方途にたてこもつて居るからであらう。之が容易に成功するものでないことは言ふまでもなく、されぱとて第二の方途に出づべき柄でもないとしたら、一體無產政黨に如何なる方途が殘されて居るかは問はずして明ではないか。

各無產政黨は宣傳の方法として有產階級の暴壓を說くことを由來峻辣を極めて居る。彼等に對する反感を下層階級の間に挑發せんとてか、その所謂階級的自覺を促す方便として、彼等は有產階級の兇暴の怖るべきを强說してやまない。だから皆結束して我黨の傘下に來れと云ふのは、一見尤もらしく聞えて實はたほ一種の我田引水たるを免れぬ。何となれば同じ目的を以て下層階級の爲に起つもの外にも澤山あるからである。尤も主義を異にする者同志は各自己の立場を最善と確信し意見を異にする者に對して遠慮なく痛激を加ふるは當然であるけれども、冷靜なる客觀的觀察としては、立場見解の相違は已むを得ずとしてその對立を認容し、其間の爭ひは姑く之を適當に處理して差當り無產階級全體に關する大問題の解決の爲に提携協戮するを可とすべきではあるまいか。是れ即ち共同戰線論の起る所以、而して又今日まで既に幾度も云ひ古された問題なのである。然るに前にも述べた通り、之が我國ではどうしても出來ぬのである。有產階級の官權と結托して爲す橫暴專恣の彼れが如く甚しきに拘らず、曾て共同戰線らしい共同戰線の張られたことのたいのは、一體どうしたものだらうか。

私の考では之には大體二つの原因があると思ふ。

(一)有產階級に對する縱の爭よりも無產階級仲間同志の橫の爭

に感情上多分に熱中するものの多いこと。隣の奴が氣に喰はないとて、大敵の前に殺到し來るをも忘れて內輪喧嘩に熱中するは、理智にくらく感情に動き易い者に有り勝ちの現象である。我國の無產階級運動が今なほこの幼稚な狀態にあるのは心細い。

(二)反對の立場に對する寬容のないこと。其人を信ずれば、見解に大なる相違があればとて決して其人を憎むものではない。自分が甘いものが好きだのに先方は辛いものを欲しがるのだ位に考へても濟む筈だ。所が先方の辛きを好む儘に放任しておくと甘いが好きと云ふ自分の嗜好が脅されるなどと考へ始めるので困る。さうするともうぢッとしては居れなくなり、どこまでも相手方に甘いものを强ゐねば安心が出來ぬ。相手が若し頑として之を肯はぬと、遂にはその誠意をさへ疑はねばやまぬといふことになる、是れ今日無產政黨の一派が動もすれば他の一派に對して有產階級に大衆を賣つたなどと罵くに堪へざる惡聲を放つ所以である。斯く人の腹心を信ずることの出來ぬ以上は、其間に到底共同策動の成り立ち得ざるは當然であらう。

斯くして問題に對する私の答案は明白になる。今日の無產政黨が從來の偏執を棄て、各々の立場を固守して理論上の鬪爭を續けるは妨げないとして、均しく無產階級の爲に鬪らんとするの誠意は十分に之を認め以て互に尊敬の念を交換するに至らぬ以上、如何に階級戰の切迫を說き官權と金權との强力なる抑壓を語つても、到底有効なる共同戰線の張らるる見込はないと。事實の觀測としては近く光明の認め難きに失望するの一方、當事者に對する希望として私は深く以上の情景に反省せられんことを願ふものである。

小題言小四則

右書き左書き

麹町區役所の標識の變更もやッと出來上つて花々しき落成式が十一月の初め擧げられたと云ふ記事を見た。新築の區役所の

入口の上にはめ込んだ麹町區役所の五文字の左書きであるのが怪しからぬとてやかましい問題となり、落成式も何時やれるか分らないと云ふ報道を讀んだのは夏前のことであつたやうに思ふ。下らぬことを問題にする奴もあればあるものだと氣にも掛けずに居ると、輿論が大勢の迎ふる所となりて之れがたうとうかけ換えられたものらしい。之には四百圓も金が掛つたと新聞は附記して居る（併せて新聞は此金を誰れが寄附したかは儼秘に附されてあると書いてあつた）。之が無用の浪費でなくて何だ。

尤も私はあゝした標識は右書きよりも左書きがいゝと主張するのではない。傳ふる所に依れば、麹町區役所の設計技師は何か深く信ずる所があつて左書きにしたのだと云ふ。左書きがいいか右書きがいゝかは學問上から論じたら無論いろ／＼の說があらう。此點になると門外漢たる私には頓と判斷がつかない。故に麹町區役所の左書きを非として無理に之を書き換へさせた人達が、同じく亦相當の理論的根據を以て爭つたのなら、何も私に文句を容れる考はない。尋ねて見たが實の所何もさうした確たる根據はないのだと云ふ。さうすれば詰り常識の問題だ。常識の範圍內で取扱はれた問題とすれば、私がまた私の常識で之を批判しても大した不當ではなからう。そこで私の常識の判斷はと云へば、新規にやるのなら右書きがよかつたかも知れないが、併し又一旦書いたものを大金をかけてまで換へる程右書きでなければならぬ理由は毛頭ないと考ふるのである。

一體我國で橫書きのものは大抵右から始めるを例とする樣だ。如何に左りが流行しても、座敷の掛額に之を應用しては一寸治りがつくまい。尤も私は氣紛れ者があつて私に字を書けとでも強いて來たら一つ左書きでやつて見ようかなどと兼々考へて居る。何處からも賴まれないのでまだ試みたことはない。商家の屋根看板などには、近頃段々左書きが眼につくやうだ。橫文字を入れることも一つの流行だから、この點から云へば左書きを將來の趨向と觀てもいゝ樣だが、又店名を端の方に縱に入れそれの肩書として町名番地などを小さく書くとでもいふ段になると、今まで見慣れた眼からは矢張り右から左へ行くのでないと落ち付かない。さすれば右書きもさう急に左書きに壓倒さるるとも思はれぬ。先達中毎朝出勤の途中屋根看板に注意して見たが矢張り右書きの方が遙に多かつた。そこで外との釣合から云て私は、少くとも當分の所は右書きを以て本則とすべく、特別の必要なき限り左書きでなければならぬとする理由はないと考へて居る。併し又右書きを本則とすると云ふ事にもさう深い理由のあるのではないから、左書きにしたいと云ふことに些し

でもの理窟があるなら、之にしたとて一向差支はない。麹町區役所の設計者には前述の如く相當の意見があつたと云ふ。然らば其人の立場を尊重して其儘左書きを保存すべきであつたと思ふのに、格別の實質的理由なくして之が變改を强要したのは、何と謂ても愚の極たるを免れない。殊にその爲に多額の金を無用に徒費したに至ては、愚を通り越した横暴の沙汰と云はざるを得まい。

尤も昨今左書きを許すべきでないと云ふ説は既に一部の有力なる階級から熱心に主張されて居る。その説の迂愚論ずるに足らざるは、併し乍ら、少くとも識者の間に於ては定論となつてしまつた。この愚論に基いて國帑を徒費せる兇暴偏執の先蹤は既に小川鐵道大臣に依て示されて居るが、之も新聞などでは散散に批議された揚句だから今は云ふまい。私は前にも云つた様に、之は本來決して國民道德などと結び付けて論ぜらるべき問題ではないと信じて居る。詰りどッちでもいゝのだ。便不便で決めて差支ない。此點から云へばかの鐵道の驛名などは無論却て左書きであるべきではなかつたらうか。之はひとり羅馬字書きの地名と調子を合はせる爲めばかりではない、列車の進行がプラットフォームの左端から入る樣になつても居るからだ。併し驛名が左書きでなくてはならぬと云ふことは、固より一般に左書を是とする議論の根據にはならない。外の場合はまた其場合場合に就て別にその當否を考へればいゝ。只一言すべきは、理窟は別として此頃の青年には餘程左書きの習慣のついて居ることである。例へば學生の教場に於けるノートの扱ひ方を見るに、昔の樣に毛筆などを使ふものは一人もなく、殆んど全部がペンで洋紙に横書きをやつて居る。著者の横書きでも私の友人中大山郁夫君を始め之を試みたもの既に二三にして止らない。但し今のところ流石にまだ讀みにくいと云ふ批評は免れぬ樣である。私の知る限り試驗の答案は半分以上横書きであり、昨今は若い人からの手紙にも左横書きが大部多くなつて來た。故に將來の趨勢としてはこの點も大に考慮に入れておく必要があると思ふ。

いづれにしても右書き左書きは專門家の專門的根據に立つての論議は別として、又之に由て最終的解決が明示さるるまでの間は、少くとも我々の常識範圍内の問題としては、さうやかましく詮議立てすべき事項ではないと思ふ。一方を排して之でなくてはならぬとするの妄なるは勿論として、爲に無用の徒費の顧みられざるが如きは以ての外の不屆きと謂はざるを得ぬ。金高は僅かも知れぬ。けれども爲さるべくして怱諸に附せられて居る事業の頗る多い今日、斯んな馬鹿〳〵しいことの白晝公然

繰返へさるるのは、決して日本國民の名譽ではあるまい。

新刊批評

十一月はじめの東京朝日新聞に、鶴見祐輔君の「讀書論」の批評が載つて居た。鶴見君は「第一線」と云ふ雜誌に上記表題の論文を寄せ、我國に於ける良書選擇の不便を訴へた次手に、新聞雜誌の圖書批評なるものの多くあてにならぬことを歎じたものらしい。之に對して朝日新聞記者は、鶴見君の言を以て驚くべき偏見となし、事實を誣ひるも甚しいと難じて、且つ一、昔は兎も角少くとも今日の新聞は此點に關してさう出鱈目ではないこと、二、新刊紹介とてもいゝ加減な提燈記事や無責任な紙面埋めではないこと、三、就中近來各社が競つて載せてゐる專門家の批評の如きは立派な圖書批評と觀るを得べきこと等を擧げて居る。私も商賣柄書物には深い緣があるので、この記事も大なる興味を以て讀んだが、併し自分の感じを卒直に述ぶるなら、私はこの朝日記者の言には直に無條件の贊同を表し兼ねる。孰れかと云へば矢張り鶴見君の言ひ方に多分の眞實があるのではないかと思ふものである。朝日記者の所謂「幾分でもよくなりつゝある現狀」には固より眼をつぶるものではなく、寧ろ此點に於て各新聞社最近の努力を多とし將來益々良くなり進むことを疑はぬが、今日の所では未だ新聞社側に他の批評を賴りにしても大丈夫だと言ふだけの資格を許すことは出來ない樣に思ふ。鶴見君の言ひ方が强過ぎたかも知れないが、今日少くとも我々讀書階級に於ては、新聞の批評を多少の參考には供するが、之を十二分に信用していゝと考へて居る者は殆んどあるまいと考へる。

數年前までの新聞の圖書評論が正に鶴見君の云ふ通りであつたことは疑ない。之に較べると今日は非常によくなつた。少くとも之に關する新聞社の態度の眞面目であることは大に尊敬に値する。併し今日の新聞社の組織で此點に關し文字通り十分社會の木鐸なるを期し得ざることも亦明白ではないか。理想的なことをいへば、もッと澤山の專門記者をこの爲に備へ置き、且もッと澤山の金を用意して社外專門學者の忌憚なき評論をもどし〱揭載し得る仕組みになつて居なければならぬ。さうでない限り、新聞社がどんなに奮鬪したとて、十分に讀者の相談相手となり得ざるは分り切つて居る。今の仕組みで新聞社の爲し得る最高限度は、所謂新刊紹介欄に於て無責任な紙面埋めをやめることにもう一層の愼戒を加ふること、又特別批評欄に於ては取扱ふべき書物とその評者との選擇に十二分の注意を加ふること位の所であらう。最近の新聞がこの方面にかなりの力を容

れて居ることを喜び、私は常に熱心に之を愛讀して居るものであるが、今日現に之から受くる印象を憚る所なく申さば、所謂專門家の長文の批評にも怪しいのが決して尠らず、新刊批評に至ては半分位は責任を以て書いたと受取れぬものの樣である。東京朝日新聞はこの方面では最も信用するに足るものの一つであるが、それでも强てと求めらるれば、最近の紙面の中から一つ二つは私の腑に落ちぬものを提示するに難くない。朝日にして然り、況んや他の新聞に於てをや。と云つたら他社から叱られるかも知れぬが、私は兎に角今日の新聞の圖書批評をばさう信用していゝものとは思つて居ないのである。今の仕組みの下に於て最善の努力を竭して居ることは認める。だから十分信用して吳れと求めらるゝなら、私はそこに幾分の僭越を新聞社側に認めざるを得ないのだ。新聞社側を罵倒する意味で云つたのなら、鶴見君の言は或は偏見の譏を免れなからう。けれども猶一層の改善を希望する意味に於て鶴見君と同じ事を云ふのは、新聞界の現狀の下に於て必しも不當ではあるまいと考へる。

最後に私は、朝日記者を難じ鶴見君を辯護せんが爲めに此一文を書いたのでないことを一言して置きたい。私の切に願ふ所は、折角非常の改善進步を遂げた讀書欄が、獨り擔當記者諸君だけの努力に依てでなく、新聞社全體の方針としても之を向上充實せしむる爲に猶一層の力の注がれんことである。

解散の有無

今度の議會に解散があるだらうか。政友會の所屬議員百九十一名に對し民政黨は二百二十四名を數へる。議會開會迄には政府の陰險なる運動効を奏して猶ほ若干の異動を見るとしても、政友會に過半數を制するの見込なきは固より云ふまでもなく、民政黨亦單獨の力を以てしては大勢を自家の思ふ壺に導き得ざるや明である。問題の如何に依り又其時の對政府の人氣の工合如何に依り、民政黨の採用することあるべき不信任案に過半數の贊成の集まりそうな見込も全くないではないが、由來政府の誘拐には易々と應ずるの常なる政治屋の事だ。中立議員の概して賴むべからざる以上、今期議會の解散さるゝや否やは先づ主として政府の都合に依て決まるものと見てよからう。而して他に特別の理由なき限り、今の政府が總選擧を出來る丈け先きへ延ばすを得策とするは、是亦明白の事實である。

政府が出來る丈け解散を避けるとすれば、之に次いで當然に起る問題は與黨以外の議員の誘拐である。兎に角あの少數では議會の掛引に不便至極だからである。無論中立議員の中には早く旣に欵を政府に通ぜるものもあらう。當面の論戰に一ト通り

勝ち得る丈けの數は或は既に集めて居るのかも知れぬ。それでも萬全の策としてはモ少し正式の入黨者を必要としよう。是に於て議會の近付くと共に盛に誘拐の魔手の動くべきは想像に餘りある。民政黨の所謂本黨系なるものに從來の關係上誘へば動きそうなものまだ尠くないと云ふ事實と想應じて、政友會が議會開會までになほ幾名かを民政黨から拔き得ると云ふ噂も相當に高い。從來の例に照して必しも有り得ざる事柄ではないが、さるにても堂々たる帝國の選良が際どい所に立つて自らを商品の如く取引きさせるとはまた驚き入つたる沙汰である。買ふ奴も買ふ奴だが賣る奴も賣る奴だ。自己の節操を取引の對象とする點に於て、今日の政治家はどうも醜業婦以上の何ものでもない樣だ。

政友會にしてもさうだ。解散したくないと云ふのなら、本來なら立派な政策を掲げて大に民間の信望を博し、之では總選擧をやつても俺に勝目はないと敵をして諦めしめる位の所まで行かなければ駄目だ。誘拐や買收で一時を糊塗するが如きは心ある者の憤慨して措かざる所である。斯んな分り切つた下らぬことを書き立てねばならぬ程我が政界の腐敗して居ることにも、私共はひそかに大なる屈辱を感じて居る。」

犬養先生健在なりや

政友會內閣は立派な政策を以て民間の信望を博するを勗めず腰のフラついて居る低能議員を買收して一時の糊塗に腐心して居ると書いて來て、私は圖らず犬養先生の健在を問はねばならぬことになつた。

政友會內閣最近の放慢なる計劃と施設とは、既に萬人の指彈してやまざる所である。固より政友會の輕薄なる積極主義は今に始まつたことではない。故を以て彼を敵に廻した諸政黨は從來何れも緊縮方針を以て政友會に對抗したのである。中にも犬養先生の率ゐる舊革新俱樂部の一派は數こそ少かつたが、最も痛烈に政友會を攻擊した點に於て大に國民の感謝を買つたものであつた。政友會の積極主義に反對なる點は元の憲政會とても同樣であつたが、併し之には種々の分子が混在して居るので、同じ緊縮方針と云ても犬養先生一派の如く純正明白なるを得ざる嫌があつた。少くとも世人一般斯く考へて格別に先生の一味を多としたのであつた。それ程に心ある者はその侃々諤々の政論に多大の尊敬を拂つたのに、先生一派今日の狀況は如何であるか。彼等は今や政友會員として例の放慢先生等の驥尾に

附し恬として何の恥ぢる所もないではないか。

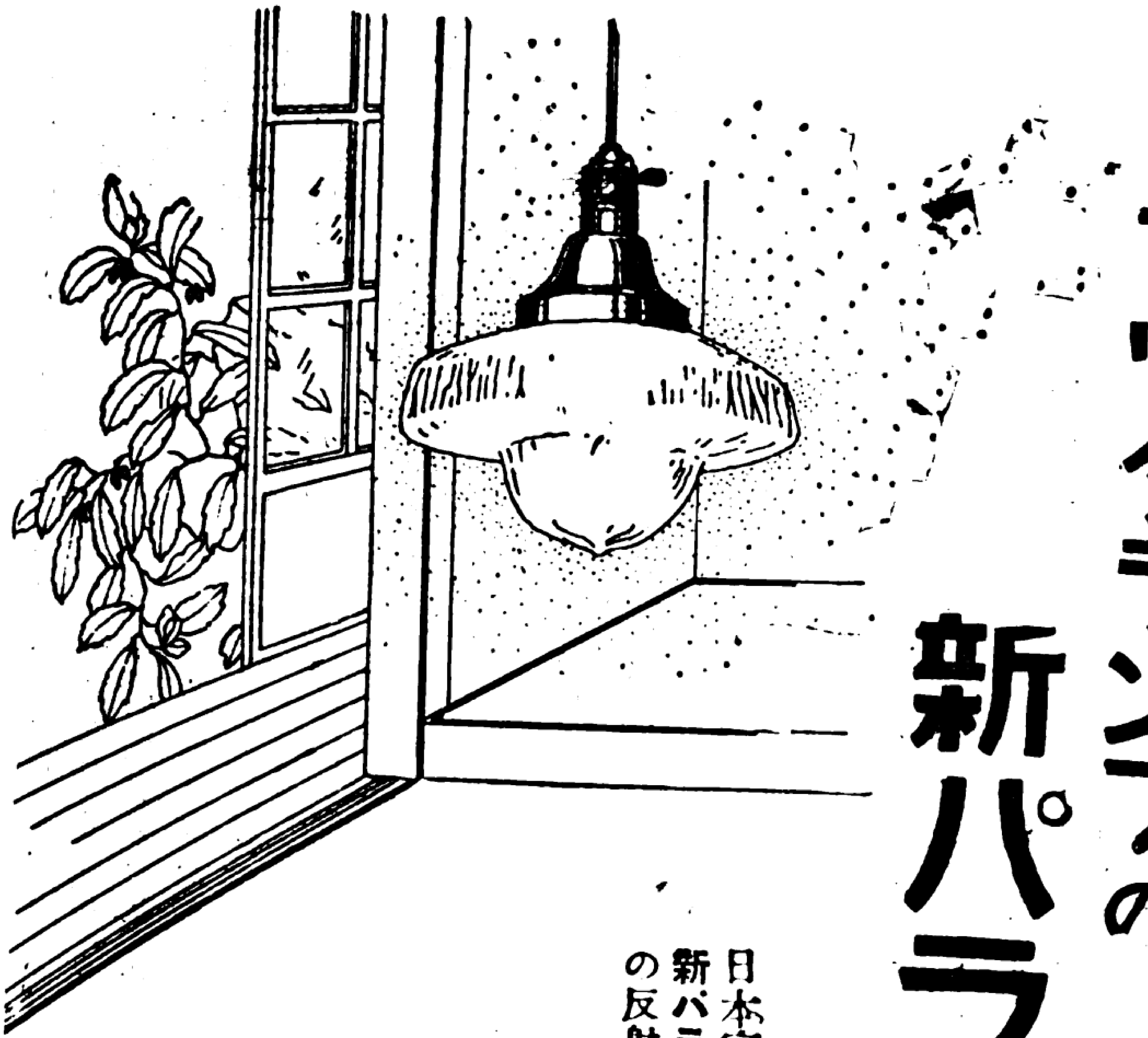
犬養先生の門下には人才も尠くはなかつた。例へば大口君の財政論の如き私共は甚大の尊敬を以て傾聽したものであつた。然るに何事ぞ、其人が今日敵の軍門に降を容れ平然としてその頤使するに甘んぜんとは。本人は得意かも知らぬが、私共より之を視るとき、醜と云はば無産運動の鬪士が資本家の番頭となつたよりも醜く、悲慘と云はば清節を以て稱せられた人が衣食の爲に女郎屋の帳面附に成り下つたよりも悲慘だ。人生節義を以て一貫すること斯くも難いかと、つくぐ\長大息するを禁じ得ない。

たゞ犬養先生だけは、今のところ表面に活躍されぬ丈け、割がいゝといへば割のいゝ地位に居られる。巧に攻撃の矢を外らすことが出來るからである。併し犬養先生は責任を重んずるの士だ。凡ゆる非難を堪へ忍びつゝ、瘦世帶で養ひ切れなかつた部下を大濟に賣り付けたといへば、罪を一人に負うて多數の家子郎黨に浮き目を見せなかつたと云ふ點で、先生の任俠を買つてやらぬことはないが、斯くては先生多年の良心が治まるまい。限りある家子郎黨よりも先生の清議公論に絶大の希望を繫けて居つた天下無數の青年の信頼をどうする。政友會の放漫を糺彈するに餘力を殘さざりし先生が一轉してその同じ放漫の味方となつたことを先生はまた國家に對して如何に辯明せられるのであらうか。今や天下の正直なる青年はこの點に於て大に迷つて居る。先生はいつまでも隱居を口實にして奥の院に姿をかくして居らるべきではない。

實は私は先生が一黨を率ゐて政友會に入つたと聞いたとき暫くは我が耳を疑つたのであつた。是れ楠正成が足利尊氏に降參したと云ふよりも奇怪の事實だからである。やがてその眞實なるを聞くや、平素先生の公義を信ずるの厚きよりして、私は先生深く思ふ所ありての決行なるべきを想像し、心中ひそかに犬養先生の投入が必ずや近き將來に於て政友會の面目一新を見るべきを期待して辛じて心を安じたのであつた。政友會も多數の人の寄り合であり、それに歴史もあれば行掛りもあり又海山千年の曲者も少くはない。さう犬養先生達の思ふ通りにもならぬは分り切つて居るが、併し始めから到底駄目だと見込のついて居るものなら、先生の斷然之に投ずるを決心する筈はない。這入つた以上、そこに何等の自信あつての事なるべく、從て先生の一味が少くとも相當の牽制力たり得べきは間違なからうと考へたのであつた。堅氣の娘を嫁にもらつて道樂息子の放蕩がや

んだと云ふ例もある。何と謂ても政友會は天下の大政黨だ、之を從來の儘にして置いては國家の爲にならぬ。少しでも之を牽制し善導するは是亦奉公の一端である。斯かる犧牲的精神に動いて政友會に走つたと觀れば、犬養先生一派の行動は決して無意義ではない。斯う考へて私共は僅に獨り慰めつゝ密かに爾後の形勢を觀望して居つたのに、其後の狀景は果して如何であるか。政友會の放慢は依然として變らない、否、考へ樣に依ては更に一層の甚しきを加へたとも云へる。何よりも先づ元の犬養先生の門下は如何の狀に在る。あの尊敬すべき大口君は今や抑て放慢政策の辯明者たるを光榮とする者の如く、愛すべき好漢近藤君の如きは忽ち政友臭の席捲する所となり有象無象の仲に交つて昔日の僚友に鐵棒を加へたなどと傳へられてゐる。いろいろの意味に於てその存在を鮮かにしては居るが、地の鹽たるの勤めをして呉れるだらうとの國民の期待は何れも皆見事に之を裏切つて居る。堅いと思つた嫁は堅氣でなく、息子と一緒になつて金錢を湯水の如く使ふ。親類緣者は今更の樣に周章狼狽を極めて居ると云ふ形だ。而してわが犬養先生はこの事態を果して何と觀らるるか。

先生の門下が政友會員でござると治まり返つて居るのはい い。獨り犬養先生が平然として之を傍觀さるる心事が私に分らない。敢て先生の健在を疑ふと云ふのではない。先生には必ずや深く思ふ所があるのだらう。只天下の青年の惑を解く爲め一言の釋明を與へられんことを冀ふ次第である。



マツダランプの新パラソリヤ

（六〇―一〇〇ワット用）

日本室向の理想的照明器具として今回發賣致しました新パラソリヤは耐熱、配光、能率、外觀等に於て從來の反射笠に比し遙かに優秀であります

特長

一、形狀が上品で優雅に出來て居ります
二、「ぎら〱」が直接目に入りませんから目の爲めにもよく光が柔かで室内が美化します
三、器具の直下附近が最も明るく出來て居りますから光に無駄がありません
四、グローブが薄肉で輕い上に取附けが至極簡單であります
五、最上質のガラスが使用してありますから丈夫な上に能率が極めて良好です
六、完備せる工場で大量に生産致しますから價格が非常に低廉です

東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市



切支丹傳道と無告の民

姉崎正治

一 亂世に於ける傳道と慈善事業

宗敎の傳道には、多く慈善救濟の事業が伴ふ。又何れの國何れの時代にも無告の民がある。その中には貧民病者もあれば、又社會からのけ者にせられて依る瀬ないアウトカストもある。慈善救濟が此等無告の民を目的にするは自然の事である。

切支丹宗門が日本に渡つて來たのは、恰も戰國の末、世は武力萬能で、その力に踏みにじられた者は無告の民となり、精神的にも物質的にも窮民が頗る多かつた。武力の世の中に、無告を救ふべく、又救ひ得る者は、獨り佛敎の寺院であつた。然し佛敎寺院はその莫大な財力を慈善救濟に注ぎはせず、却て兵を貯へ武を弄ぶ經費に使つてしまつた。奈良朝に於ける佛敎者の社會事業に盡した慈善心は、鎌倉時代の極樂寺良觀を最後とし、足利時代に於ける一二慈善事業家を除いては、寺院も戰國鬪爭に加はつて、修羅の仲間入をしてしまつた。獨り禪宗寺院だけは、此の仲間に加はらず、多少とも宗敎的生活をつゞけたが、その事業は主として文事にあつて、社會的には殆ど盡す所がなかつた。

その上に亂世の常として飢饉疫癘は殆ど年中行事の如く、特に切支丹の開敎者サビエルが薩摩に來着した少し前には、全國飢

饉に疫病を加へて「死する者算なく」、京都だけで屍を棄てる者が日毎に六十餘人あつたといふ。又翌年、サビエルが京都へ出た時は、恰も小兒の咳逆が大に流行して死者が多く、その上先年來の度々の兵火で荒涼の市街が一向回復してゐなかつた。その他各地方共に兵戈の災、重税奪掠の苦痛で、窮民は甚だ多かつた。加之、癩病の横梁は、二百年戰國の末とて、全く放任の姿で、病者は途に棄てられるか、僅に彼等仲間の集團を作つて活きるかの外なく、東北地方を除いて全國的の慘害であつたことは、段々後の結果で推して見ることが出來る。

此の如き間に入り來つて新な福音を傳へる者が、どうかして無告の民を救はうとするは、當然の事であつて、傳道の方便に使つたといふよりも、寧ろ至情已むを得ざるに出でた事業であつたといふが至當である。結果に於ては、そが傳道の方便になり、それに依つて信者を得たことは勿論の次第であるが、その結果を見て、初から動機が方便利用にあつたといふのは、人事の動き方を知らない斷案である。此の如き速斷に對して反證として擧げ得ることに、サビエル並にその後繼者の傳道方針が、主として「上から下へ」といふにあつた一事である。即ち彼等は、西洋でも中世紀間に、王侯の力が教會の爲に重要であつたことを知るのみならず、日本當時の事情は、國主大名が萬事の主導者であり、その賛助又は裁可なしには、傳道が大な妨害を受けることを熟知してゐた。これ故、サビエルが、來着して、最も目指した處は京都にあり、そこで先づ内裏(だいり)と公方(くぼう)とを動かし、それから傳道を下に及ぼす考であつた。然るに京都の實狀を見ると、下剋上(げこくじやう)の世の中とて、内裏には殆ど實權なく、公方樣も權臣等に壓迫せられて爲すなきを見、そこで地方毎に國主大名を味方にするに方針をかへた。山口の大内氏、豐後の大友氏を目指したのは、此の爲であり、それから後、迫害が上から加はつた時にすら、大名か將軍を味方にせうとしてゐる方針は、始に來たゼスイトのみならず、他の教團にも共通であり、その爲に、當時方に迫害を始めてゐた加藤清正をたよりにして來るといふ樣な愚を演じた教團があつた位である。

「上から下へ」といふ方針は根本であつても、當時の社會狀態では、何よりも貧民の病者が治療を求める方法がない。醫者は勿論、醫療の代理者ともいふべき山伏等は、貧民を顧みない。此の無告の民が新傳道の下に集まつて來るのは自然の勢であつて、サビエルが山口にゐた間にも、教法の事をきゝ質しに來る者の多い上に、治病を求める者が多かつたのである。そこで、後にも云ふ通り、豐後で病院特に癩病所を建てると、收容が多く、その爲めに身分ある者は、それらと混同せられるのを

忌むで、それが却て傳道の妨害になつたといふ位である。そういふ意味で妨害になつても、教師等は、無告の民、哀を乞ふ者を見すてる譯には行かない。始めの間は、さしあたり祈りをしたり、聖水を與へ、又はクルスを頭にのせたりなどして、所謂精神療法を行つた。それが有効であつたといふ記事も中にあるが、終には此だけでは追つかない。そこへもつて來て、日本人の最初の歸教者に醫術に通じた者があり、外國人教師の中にも醫者があり、此等の事情が合して、病者救治といふ事が、慈善の第一着となり、後までも續いた。

此の如く救濟事業が、段々に進むで他の方面に及ぶ事や、又時に隨つてその意義方法に變遷の起る事は、後に讓つて、此等の事業が日本人に如何の印象を與へたかといふに、バテレン等の布教は國を奪ふ爲だと憎み且つ恐れた方面にも、その救濟事業を認めざるを得なかつたことは明である。「非人乞食共を集めて、いぐち、癩病、やうちやう、唐がさ、腫物等、結緣(けちえん)に療治して、わが門徒に入れ、息災なる乞丐人の宗體にならむといふ者には一飯を施し」云々。「洛中洛外へ人を出し、或は山野の辻堂、橋の下などに至るまで尋ね捜し、非人乞食などの大病難病などのもの召連れ來らしめ、風呂に入れて五體を清め、衣服を與へて之を暖め、療養しける程に、昨日の乞食、今日は唐織の衣服を身に纏ひ、病も自ら快復せる類おほし。就中、癩瘡などの難病、南蠻流の外療を受け、數月を經ずして全快し、誠の佛菩薩、今世に出現して救世濟度(くぜさいど)し給ふなりと、近國他國風說區々なり」云々。

此等は、邪教として切支丹を排斥する側でも、その救濟事業の効果を認めたしるしであり、(言葉つきには多少の誇張はあるが)、又當時、救濟を受けた者には、有りがたい恩惠として之を受けた跡を傳へてゐる。而して面白い事には、自らその任に當るべき佛僧が、切支丹の救濟事業に對して讒謗した事、又一般の人々はかういふ救濟を見なれない爲に、つまり目的は他にあると惡く解釋した事。此等はどこの國でも新傳道地で見る現象であるが、戰國亂世の日本には、一方救濟の必要が多かつたのと、他方社會が救濟などいふ事を知らず、半は不可解の事、怪しいとして之を見たのと、そのくひ違ひの著しいものがあつた。上に記した病人がごた／＼してゐる形容は、宛然足利時代の繪卷物にある圖で、その畫の如く、病人、廢物、乞食が佛寺の門や庭に集まつてゐても、救はうとする者もなく、人は之を怪しまなかつたのである。且つ足利末期の繪卷物に、病草紙、地獄草紙、餓鬼草紙の類が多いのは、つまり當時の實狀の反映であると共に、又人心に畏怖不安の多かつたしるしである。そこ

へ持つて來て、切支丹の救濟が（始めは小規模にしても）始まつたのであるから、無告の民にとつては地獄でほとけの思をなしたも自然であると共に、偏に此等の廢物や病者を忌み嫌つて棄てゝおいた社會が、救濟事業に對して怪疑の目を以て見たのも無理はない。但しその蔑視には、自らなすべかりし事を、他人に先がけせられたに對する惡感もある。此の如き時代であつたから、切支丹傳道の中で救濟事業が自然に重きをなしたのである。

二　救濟事業の意味と方法との變遷

今、この救濟事業の內容と經過とを觀察して、全體に亘つて見ると、大切な變遷が目につき、それによつて救濟といふ事の意義にも二つ大に異つた點を發見する。即ち初期と隆盛期とに於ては、通常いふ意味の慈善として行はれ、比較的幸運で餘裕ある者が不幸な窮民を救ふといふ意味で、云はば上から下に與へる仁惠である。その仁惠を與へる人は敎師等であるが、財力その他之を助けた者は大名や富有の信者(內外人共に)であり、受ける者は、之と類を異にする無告の民。然るに宗門が迫害を受けて段々窮地に陷るに從つて、施與主たる大名の多くは棄敎し、富有の信者は財産を沒收せられ、而して外部との交通が、困難になるに從つて、西洋から來る財源は閉ざされる。加之、敎師等自身は隱れ忍びの中に危險と窮乏との中に生活しその點から云はば、他を救ふどころでなく、自身が泣いて訴へても救はれない樣になつた無告の民、否それ以上に迫害を受ける苦しい境遇である。然し、それでも救濟の心は棄てず、アニマ（心）の救は勿論、生活境遇の上にもどれだけかでも救濟をしようとする。但し、救濟は上から下を救ふのでなく、共に惱み共に悲慘の生活をする者が互に救はうといふことになる。即ち「慈善」でなくて、惱みの生活を共にする救である。

此の變遷は、近代に於て「慈善事業」が「社會事業」といふ意味に變じて來たのに似たものがあるが、その因由事情の異なる外に、その救ひといふ中には、共に迫害と戰ふといふ點に於て、同朋の感は一層痛切なものがある。而して此の變遷の境目は、勿論判然とは立たないが、大體慶長の後半、即ち十七世紀の始十年乃至十五年の間にあると見てよろしい。一二の例を擧げて見ると、フランシスカンの敎師が江戸淺草に癩病院を建てたのは慶長七年(1602)、それは勿論慈善救濟の意味で、此時禁敎令はありながら、殆ど公の設備であつた。然るに、それから六年經て敎師ソテロが江戸に來た時は、癩病所が隱れ家であり、その後癩病所の者も召捕られ、元和元年(1615)には、その中

に隱れてゐた敎師デーゴは、患者と共に投獄せられた。鑛山の問題が切支丹布敎に關係のあるのは、多くの人には奇妙に感ぜられるが、その始にあつて、幕府は採鑛術を習ひたい爲に、バテレンに鑛山檢分を求めた位で、伊豆の銀山や佐渡の金山の開發には切支丹の助力が加はつてゐる。その後も、諸の鑛山に對する傳道がつゞいてゐるが、迫害がはげしくなると、鑛山が切支丹の隱れ場所となり、足尾（昔は芦尾）銅山の如きは、づつと後に澤山の切支丹信徒を出してゐる。

此の變遷は、つまり他から行つて無告の民に傳道し、救濟せうといふ意味から轉じて、彼等と共に生活し共に惱むで、どれだけかでも救はうとした同朋生活に移つたもので、救ひといふ最後の目的は同じでも、その意味と方法と、從つて又方面も共に變動してゐる。その方面の變轉を極めて概括して見ると、大體下の如くなる。第一の慈善救濟の意味で先づ起つたのは、病人窮民の給養特に癩病者の收容で、それにつゞいて當時多かつた棄兒の收容、此と併んで朝鮮人捕虜の救助、此の三つを擧げ得る。先に引用した日本側記錄の傳へる所は此の第一項のみで、又それが最も著しかつたのである。中間には切支丹信仰の爲に流人になつた者の慰問救助があるが、第二の同朋救濟の狀態に入つては、一般病者の世話や棄兒救助は殆となくなり、癩病所に隱れてその中に生活すること、獄舍に入つては、同居の囚徒に傳道すること、非人乞食の仲間に入ること、鑛山に入つて鑛夫と共に働く事、此の四が傳道であり救濟であつた。政府側では、始めはそれに氣づかなかつたらしいが、それに氣がついてから、迫害搜索をその方面に進め、將軍自らが乞食狩をしたことすらある。

此概見を緒言として、此から、其一々の經過を尋ねて見やう。

三　病氣治療と病院の設立

信仰問題は暫く別として、切支丹敎師が活動を開始すると共に先づぶつかつたのは、病氣治療の要求であつて、一度に五十人、百人と推しかけられて困つた事もあつた。此等に對しては或はオラショ（祈り）を唱へて直してやつたとか、聖式に用ひた水を與へたとか、多くの宗敎の始めと同じ事が行はれた。その話しの一つを云ふと、熱病者がパデレの處へ來た。敎師は指でクルスを畫いて、「父と子と精靈の御名によつて」と唱へると、その言葉の終らぬ中に熱が去つた。ところがその患者は歸り路に神社に立ちよつて、再び熱の起らぬやうにと祈つたら、又熱が出た。驚き後悔してパデレの處へ來てあやまり、手にクルスを畫いたら、それで直つた。小供の樣な話しであるが、此

の様な治療が先づ行はれたのである。

然しこれのみでは濟まない。惡疾者が來る、負傷者が來る。傳道には適當な醫療方法を備へる必要が痛切になつて來た。そこで山口に病院を建てたい考はあり、歸教者の中には一人佛僧で醫術に通じた人が出來たが、その實行に先ち、大内氏の滅亡に終る動亂の爲に教會も危急に瀕して、病院計畫は行はれなかつた。然るに幸にしてポルトガルの商人で外科醫をしてゐたアルメイダ(Luis Almeyda)が發心し、財産を投げ出し、自ら宗門に入つてイルマンとなつたに加へて、豐後の府内(今の大分の前身)では國主大友氏から地所の寄附を得たので、そこに病院を建てることになつた。病院は二部に分れて、一般病者と癩病者とを別々に收容し、アルメイダがその醫療を擔任し、山口から逃れて來た日本醫師パウロが之を助けた。此は弘治二年(1556)で、開教以來七年目の事、切支丹病院の第一着であつた。その翌年に病院の狀態を記してゐる記事に曰く、

病院では十年二十年病みつゞけた外傷や腫物がなほり、或者は十五日位で健康を回復した。……中には五十里六十里の遠方から治療を受けに來る者もあり、又身分ある士や高位の坊主もあり、この夏だけでも六十人の中五十六人を癒した。從つて病の癒へた後に信者になつた者も少なからず、本人の外に親や妻子が共に改宗したものもある。

尙ほ又五年後、永祿五年(1562)の記事に曰く、

貧民病院には百人以上收容してあり、その他各地方からやつて來る者も日々少くない。御主はそれをみそなはし、惡病で望のない者で全く健康を回復した者も多い。その多數は瘻(ろう)の様な傷で治方もなく、日本の醫者が手ばなした者であるが、それがデウスの御惠みで、直に平癒し、望外によくなる。日本人は之に驚いて教を聽く様になるが、我等も亦醫藥のきゝめのない病に、それがよくきくのを驚くのみである。

此等の事が信者を引きつけたのは勿論であるが、それと共に醫者で歸教する者が此後增してゐるのは、一つはアルメイダが特に外科醫であつて、戰爭の負傷者を扱ひ、惡瘡を治した事が誘因となつてゐるらしく思はれる。年代は少しく後になり、歸教の理由は異なるが、京都で一代の名醫と呼ばれ、内裏や將軍家の典醫をしてゐた曲直瀨道三(マナセドーサン)が門人八百人を率ひて宗門の爲に盡したといふ。八百人が盡く信者になつたのではないが、師と共に救療に盡力したのであらう。

話は元へ戻つて、府内の病院に次いで、豐後の臼杵、それから京、大阪、堺、つゞいて長崎、有馬や、紀州和歌山に大小の

病院が出來た。此等一々の設立年代は確定し得ないが、大體に於て信長と秀吉との時代で、開教後三四十年ばかりの間。京の所謂る「南蠻寺」の正體にも不確の點はあるが、それが寺のみでなく、それ等には各々多少とも療病の設備をしたと考へられる。南蠻寺興廢記などに傳へてゐる、救療慈善の誇張した話しは、つまり天正年間に於ける京のキリシタン寺の面影を傳へるものと見るべきであらう。又藥草を植える爲に、信長が伊吹山五十町歩の地をバテレンに與へたといふ話しも、西傳にはないが、事實の根據ありと見るべきである。伊吹山には古から百草はあつたのであるから、藥草移植がそこに行はれたのも自然の事であり、且つ近江には外科醫方が多少民間に殘つてゐるものもある。先に述べた道三の歸教は丁度その頃になるのも偶然でなからう。

病院設立が必然の勢で起つて來たが、それには資金を要する。初期には先づポルトガル商人の喜捨を仰ぎ、又豐後では大友の補助を受けてゐるが、その支持の一有力者は先の道三と同年に信者になつた小西行長であつた。病院の爲に彼が幾何の支出をしたといふ事は傳はらぬが、棄兒收容の爲に年々百石を寄附したといふから、少なくともそれ位を病院にも出したに違ひない。而して彼の父龍佐は堺の富豪であつたので、父子の力で大阪と堺とに癩病院が出來た。龍佐が文祿元年（1592）に死んでからは、その長男ベント（即ち行長の兄）がその事業を繼承した。

四　癩病者の收容とその仲間入り

右、癩病所の設立は實に當時の急要事項であつたので小西の事業開始後約十五年、慶長の中頃には大阪だけで四つの癩病所があつて四百人を收容し、その後五年位には京都に五六あつて三百人を收容し、その頃和歌山にも一つ出來た。そこへ又新な傳道勢力が加はつて、一般傳道の外に癩病者收容に力を盡した。それは文祿二年（1593）に傳道を開始したフランシスコ會であつて、その開祖たる聖フランシスコが癩病者救治を以て發心の端緒とした傳統に基き、その始め渡來の四人が秀吉の承認を得て日本に踏み止まつて先づ始めたのは、大阪でベレムの家といふ病院と養育院を、つゞいて長崎にラザロの寺に附屬した病院と癩病收容所を建てた。然しこのフランシスコ會の傳道は、渡來後三年餘で大打擊を受け、文祿五年の末（1597の始）にその教師六人と信徒が殺され、且つマニラからの渡來を禁ぜられた。

然し迫害者たる秀吉がその後死んだので、潜入して來たソラ

ンシスカンの教師は家康に取入り、家康が通商を熱望するのを利用し、江戸に根據を作り得て、淺草に一寺を建てると共に癩病所を開始したのは、慶長七年（1602）であつた。それから後、約三十年の間、江戸の切支丹史は半は癩病所とその收容者とに關係し、禁教がやかましくなつて公然の布教が出來なくなつてからは、傳道者は癩病所を隱れ家とし、又信者が召捕られる時には常に癩病者がその中にゐた。御家人で切支丹として（但し又他の罪狀もあるとして）最後元和九年（1623）五十人と共に火あぶりになつた原主水も、初めて捕はれた元和元年（1615）には癩病所に隱れてゐる所を、患者と共に捕はれたので、此時投獄になつた癩病者は五十人、その頭分たるゼロニモは、元は身分のあつた士だといふ。その前にも二十六人の癩病者が捕はれてゐるが、その世話をしてゐた醫師ロレンソは四年在獄の間に自らも癩病にかゝり、その爲に死んだ。その後寛永三年（1626）にも、六十八人の癩病者がキリシタンたるが故に召捕になつてゐる。

話は元の長崎に戻つて、その開港と市街敷地の整ふと共に、寺院の建立について出來たのは、今の裁判所の在る邊にあつた「慈悲屋」即ち Misericordia の家といふ養育院であつたが、それに附屬して病院があつた。始は一つが後に二つとなつてゐるのは、蓋し豊後の場合の如く一つを癩病院としたのであらう。此のミゼリコルデヤの養育院と病院とは、元和六年（1620）に破壞せられるまで四十年に近い歴史を有し、九州全國に於ける慈善救病の模範であり、前後そこに收容せられた者は莫大の數に上らう。有馬で藩主晴信（後に背教者）の夫人ドナ、ジュスタが建てた病院の如きも、此を標本にしたものである。

そのミゼリコルデヤの家は、そこで慈善救病を行つた外にそれに附屬するミゼリコルデヤの組といふ組合があつて、信者が之を組織し、寄附を募つて財政を助け、又自ら看護の勞をとり、慈善施與を行つた。つまり維持會であり、又特志看護の組合であつた。此と同樣の組織は、京、大阪、堺にもあつて中々仕事をしてゐる。而して特に記すべき事は、その特志看護人の中には、九州は勿論、上方でも朝鮮人のあつた事である。此は後に述べる如く朝鮮捕虜で教會に救ひ上げられたものである。

長崎には、此外にサンデーゴの病院があり、先に記したラザロの病院もあり、最後破壞の時には七つあつた。慶長の初十餘年には盛に救病をしたのであるが、慶長十九年（1614）大追放の年にもデーゴ病院で二百人に洗禮を授けたといふ。然し徳川氏の禁教政策がひし／＼と迫るに從つて治病の慈善は、初に述べた第一期の意味から、第二期の同病相憐み相助ける状態に變

じて來た。その轉機を示す一事件として、右大追放で、運命が迫つて來るに從つて、教師信徒共に興奮して來て、有名な大行列が行はれた。此は晩春から初夏にかけて度々行はれたのであるが、その初をなしたフランシスカンの行列には、教師チチャン (Diogo de Chichan) は先づ痛烈な說法で、信者各自の懺悔を促し、それから自ら十二人の癩病者の足を洗ひ、自分の身には俵包をまとひ、滅罪の實を示す姿をして數千の行列の先頭に立つた。そのやり方は芝居がかりであるが、キリストが自ら弟子の足を洗つた例に倣つて、癩病者の足を洗つたのも、又教師信徒が破衣跣足で、身に灰をぬり、又は鞭で身を打ち血を流して行列したのは、此から來るべき彼等の運命を豫告したもの。即癩病者乞食非人と共に生活し、彼等を救ふ者としてよりは、寧ろ彼等と共に生活し、又終には彼等の小屋にかくまつて貰ふ樣になるその行末を、劇的に表したものであつた。

迫害がはげしくなると共に、病院で病人を治療するなどの餘裕は勿論ない。病者に對して教師のなし得ることは、忍び隱れて病人を慰問し、そのコンヒサン（懺悔）をきゝ、又死に瀕する者に臨終の式を行つてやるのみである。癩病者については、彼等のあはれな小屋に入つて共に生活する、又捕はれ殺される場合には、彼等を伴つて天上の望みの中に最期をとげさせてやるが、せめてもの慈悲たる外なかつた。無告の癩病者が教師を慕つたのも亦情の深いものがあり、此世では望のない身の、教師と共にマルチルとなれば、天上では清らかな身體を得て、アンジョ（天使）と共に生活し得るといふのが、最大の希望であつて、此の希望を充たす爲には、火刑は却て心に副ふ願はしい最期であつた。今、ベルトラン (Luis Beltran) といふドミニカン教師が、寛永三年 (1626) 召捕られた時の有樣を報告した書面を摘出する。

癩病者の小屋にて捕はれし夜、その宿主にて親切なるマルタと申す女は、我等のみ縛らるるを見て、自分も共に召捕られよとあせり願ひしも、役人はそれを容さず。マルタは天に向つて、自分をパデレより離し給はるなと叫びつつ、小子にすがりつき（但し手先はなき故、云はゞ腕にて）、又跡を追ひ（但し足先はなし）來り、人夫等がそれを引離さんとしても聞入れず、且つ天に向つて、ラウダアトド、ウミヌム、その他日本語のオラショを色々と唱へ、パデレ樣と離れぬ樣にと叫びて已まず、かくてその夜を過すべき家に行き着きても、そこには癩病者を容れず、又牢舍に向ひても同伴は許されざりしも、御主が哀れの願を容れ給ひてや、その事長崎奉行にきこえ、奉行の命として、此

女をも召捕る事と相成候。此女も、熱心に願ひ居る通り、

我等と一緒に火あぶりになる様にと祈り居候。云々

彼等は直に殺されず、一年間在牢したが、ベルトランと男三人は火あぶり、マルタと他の二人の癩病者は首打で殺された。

此の如き光景が幾度各地に起つたか。又その傳教師と癩病の信徒と共に獄中にゐる間に、儀式を行つて第三會員に列し、或はイルマンの聖職を授け、死出の旅路を飾つた場合も多い。又追放には信者の中に癩病者が多くあつたので、マニラでは癩病は日本人が持つて來たと言ひ傳へる位であり、從つて又追放せられて後潜入して來た中には癩病者もあつた。尚ほ追放については、乞食と共に後に述べる

尚ほ初に記した豊後病院の最後は分らぬが、比較的早く、大友氏の沒落と共になくなつたらしい。筑前博多にも早く出來かけたが動亂で果さなかつた。それでも慶長十三四年頃には「貧民の醫者」と呼ばれたジョアチム進藤が働いてゐた。慶長十八年（1613）には廣島で新に癩病所の出來たものもある。此頃尚ほ事業を盛にしてゐた病院は他にもあつたので、例へば今豊後竹田の八幡宮に殘つてゐる鐘の銘には明かに Hospital Santiago 1612 の文字があるを見れば、その地にも病院があつて、慶長十七年にもあれだけの鐘（多分マニラ鑄造）を輸入するだけの勢であつたことを證する。更に何病院の最も盛であつたのは慶長初期であらうが、その數は二十以上、三十に近かつたらしく、大追放の年の始には、フランシスカンだけで九の病院（多くは癩病所）を有してゐたといふ。京阪地方の寺や病院は、慶長の末に壞され、長崎のミゼリコルデヤは元和六年（1620）を最後とし、その跡に佛教の大音寺を建てて記憶を打消さうとした。而て佛寺では此の如き設備をしたものは一つもない。

五　日本人信者中の醫師

尚ほ右救病事業に附屬して、切支丹になつた日本人醫師の事を述べやう。

その第一着は、開教後二年、トルレスが山口にゐた時、そこで信者になつた佛僧二人の一人である。二人は大和塔峯の住僧であつたが、その一人、教善（Quiogen 漢字假宛）といふのは新にパウロといふ名を受け、佛學の外に醫術に通じ、山口の動亂を避難して豊後に行き、アルメイダの病院を助けた。パウロ教善と同行したトメ内田父子二人も病院で働いたが、元來醫者であつたや否や不明である。

之に次いで山口で信徒になつたパウロ・ヱサンは、大内氏の醫師であつたが、動亂に主人に殉死した。日本歷史に現れてゐ

る吉田意安でないかと思はれる。永祿八年(1665)京都でアルメイダの感化を受けた醫者はパウロ・ヨホ又はヨホケンとその子ビセンテ・ホインと傳へてゐる。ヨホケンは養方軒とも考へられるが、歴史では丁度その頃に坂盛方院淨秀とその子法印淨孝がある。西傳にあるビセンテは法印の號を得た位で、又立派な服裝をしてゐたと傳へるから、多少名を成してゐた醫者と見るべく、坂父子だとすればヨホケンは盛方院(又は軒)と見られやう。兎に角、此の父は若狹の生れであつて、京都で父子醫者をしてゐたが、信者になつて、後堺に移り、又豐後に來て府内や臼杵でアルメイダを助けてゐたといふ。

先に述べた曲直瀬(マナセ)道三(ドーサン)は、實に當時第一の名醫又學者で、足利の末から徳川にかけての大醫は殆ど皆その門から出てゐる。彼は元、佛僧であつたが還俗して、天文十四年(1545)京都で醫學の門を開いてゐたのであるから、丁度サビエルの渡來以後、京都に於ける切支丹の狀態を見聞してゐたのである。そこへゼスス會の敎師ヒゲイレド(Figueiredo)が豐後の府内に居た時、病を得、當時京都の名醫道三に診察して貰ふのを目的の一つにして京都へ來た。診察を乞ふと共に、宇宙人生の問題について談話を始め、段々に討論になり、その結果、歸敎したといふ。その問答も傳はつてゐるが、結着は靈魂の問題で、道三が說破せられた、而してそれは天正十二年(1584)の末であつたと傳へる。而して洗禮を受けたとは傳へてゐるが、敎名の傳はらぬ事を見れば、疑を容れ得る。

も一つ注意すべきことは、右天正十二年の前年、道三は隱居して享德院と稱し、道三の名はその妹の子(名は玄朔)に讓つてゐるから、道三と稱するは當らぬ樣であるが、昨年までの名をそのまゝに用ひて傳へるのは必しも有り得べからざる事でなく、且つ老醫師として傳へてゐるのを見れば、若道三(此時年三十六)でなく、老道三(齡七十九)として差支へなからう。兎に角、敎師の說に服し、切支丹に同情した位の程度と見るべきであらう。かくて老道三はその後尙十年生存したのである。

も一つ附加へて日本人醫者の切支丹については、西洋側に傳はらず日本で傳へてゐるコスモとシモンといふ二人の話がある。その話の出處は一つらしいが、切支丹來朝實記、南蠻寺興廢記、蠻宗禁制錄など俗書にしつこく出てゐる。その筋は、南蠻寺で病を癒して貰つて宗門に入つた禪僧惠俊(即ち後のハビヤン)と倂んで堺の商人安左衞門と和泉の百姓善五郎とが敎はれて宗門に入り、コスモとシモンといふ名を受け、寺の執事として大に働いた。その後二人は遠州(又は駿河)に下り、後堺に歸つて來て、コスモは市橋(又來橋)庄助といふ名で外科醫

術、シモンは島田滿庵といふ名で内科の醫術を營むでゐた。然るに推薦する者があつて、二人は秀吉に見え、色々幻術を行つて見せたが、その中に秀吉が先に不實に棄て且つ殺した女の幽靈を出したので、怒にふれて殺されてしまつた。此が話の筋で、尙ほその後此二人の門弟等もあつたといふ。二人の名も色々になつてゐるが、教名コスモとシモンといふに還元し得るだけは確であるから、それを手がゝりにして搜しても、宗門の記錄には見つからない。只醫術を營むだといふ點で此に參照として記しておく。

六　窮民救濟と棄兒收容

病者救濟と共に多かつたのは貧民乞食に對する救濟であるが、此は施與をするのが主で、今日の社會事業に於けるが如き組織がなかつたのは、時勢の當然である。施與といふ中には、時々の祭日、記念日等に食事の饗應をする事、衣類を與へる事などである。日本の傳説は「山中の辻堂や橋の下」などを搜してあるいて施與をしたといふのは、乞食の病人や行路病者を救ふた事を指すと思はれる。此の樣な事が、當時の日本人には奇異に感ぜられ、國を奪ふ手段じやないかと怪まれたのは、反面に、足利時代以來、無告の行路病者が委棄せられ、それが常態であつたといふ事相を物語つてゐる。行路病人と同性質のものは棄兒で、傳道記錄には、當時棄兒の多かつた事を屢記してゐる。

棄兒收容は、府内に於ける病院の一事業であつたが、先に記した如く小西行長はその爲に年々百石の資財を提供して、大阪や堺で、棄兒を救ひ、それと相併んで長岡越中守（細川忠興）夫人ガラシャは、大阪の自邸で孤兒院を經營して居て、慶長五年（1600）の最後までつゞいた。京都でサンタ・マリヤの組員は特に棄兒の收容を仕事とした。此は至る所小規模に隨時に行はれたことであるが、教師の中で特にそれに熱心であつた一人はドミニカンのナバレテ（Alonso de Navarette）であつて、此人は、元和の始め迫害の益す嚴しい中に、長崎大村附近に傳道し、窮迫の間にも信者を勸誘して「御飯の慈善」といふ組合を作り、主として棄兒を養ふ事業を行つた。然るに、民間では、パデレは信者には殉教を勸めながら、自分はにげ隱れをしてゐるといふ風評があるに憤慨し、言葉の傳道よりも身命を捧げた方が效果があると決心し、進むで虎口に飛び込み、元和三年（1617）晩秋、大村灣の離れ島で殺された。

ナバレテは此事業にイスパニヤ船長ガルチョの同情寄捨を得て居たが、死に先つて、その島から書を寄せて後事を賴むでゐ

る。

ゼスス が 君の心に附き添はせ給ふ樣に、而して御機嫌よう。棄兒の爲に施與をすることは、デウスに事へ奉る爲に最も大切の事なれば、その施與の料を前以て送るを忘れて下さるな。これを寫くのは、つれられて來た孤島からで、今は死を待つばかり、御主はその最もよしと見給ふ事を成させられるに違ひない。死刑の宣告は既に定まつてゐるので、今日は執行といふ話である。わたしは君を忘れない。

ナバレテにとつては、棄兒は、自分の後に殘す孤兒の如く思はれたのである。

貧民といふ中には、單に貧であるのみならず、社會から虐待せられ人間並に扱はれなかつた者が多く、非人とか乞食とか、その他扱ひに各々の區別もあつたが、此處では一々法制上社會上の區別をする必要はない故、先づ窮民階級と總稱しやう。即ち本當の意味での無告の民で、通常の人別帳(にんべつちやう)にも載らず、一般村落と離れて別の部落を作るなり、又は移動的の小屋に住する者である。此等部落に對する組織的傳道はない樣であるが、此等窮民が病人又は飢えたる者として救ひを求めたことは常にあつたので、サビエルが京に上る途中にも既にその遭遇があり、何れの地方にも信仰の組員が多少救濟の事を行ひ、肥後の如きは特に慈悲役といふ役目を信徒の中に設けた位である。但し救濟といつても彼等の社會上の位置を變更せうとする如き積極的事業は、勿論望むべからざる事で、只目前の急を救ふ事と、アニマ(魂)の救を與へるにある。されば、先に記したナバレテと共に進んで虎口に入り、死に就いたエルナンド(Hernando)の如きは、死地に入るに先つて、その信徒たるコルドン即ち帶の組員に遺言して、慈悲救濟の事を行ふやうに懇切に教へ、その他、「貧民の教師」と名を得たワスケス(Vasquez)もあれば、又貧民の醫者として知られたショアチム進藤の如きもある。

七　迫害と窮民の仲間入

然るに迫害が厳しくなると共に、教師や信者が自ら窮民となる。或は五人組が共々家を追はれ、或は召捕を逃れる爲に郷里を離れ、行先は野山に小屋作りをして住むか、又は窮民部落に入る。今まで救を與へた者が、他に身を托する樣になつては、信仰の上では教師であり世話掛であつても、生活の上では窮民の仲間に入つて、窮狀を共にする。肥後の如きは、慶長の始め既に、加藤清正の迫害で、士分の家族が幾百も、野山に掘立小屋の生活をして特殊部落を作つた。長崎でも、教師が召捕

られそうになり、その人が轉々して宿泊した宿主も同罪で危くなつた爲、數十人が教師と共に山野に隱れたことなど、大小の規模で各地に行はれた事である。その狀態が日本の記錄に殘つてゐる一例を示す。

寛永三（1626）寅年、長崎奉行として水野河内守差下され、彌以て邪宗門改め嚴く候へども轉ぶ者稀なり。因て玆に町々に町使の者二三人つゝ差下し、町端より糺明致し、轉ばざる者は、家を追出し、門をとぢ、段々相改め、追出されたる者共、山々田畑等に小屋を建て住居す。其先に火をかけ燒拂ふ故、かくるゝに所なく、雪雨に濡ひ、難儀に及ぶ云云。

而して此の如き避難者が安住の地を得るには、非人の部落に混入するか、又は自ら小屋を作る外なく、山林の中に隱匿部落を作つたものもある。然るにそれすら燒打に逢つたのである。

此の如き窮民部落は元來が隱れる爲であるから、記錄や通信のないのは自然の數であるが、迫害搜索の進むと共に、時々の記錄にその跡を示してゐる。一二三の例を示すと、長崎志（息距篇四卷引用）に曰く、

寛永七年（1630）庚午、大阪より邪宗門の乞食七十人差送らる。但、此者共伴天連にて、年々邪宗門嚴密なる故、御改を受けまじき爲、乞食となり諸方に隱れ居たるを搜し出され、長崎に差送らる。則ち呂宋（ルソン）に流罪仰付けらる。是より以後乞食えた共に宗門改め、踏鑑せしめらる。

即ち此までは此等の部落には、人別帳も備へず、踏繪にも漏れてゐたのであるが、その部落に潜む切支丹のあるに氣がついたのである。それでも一處不住の非人仲間は、にげてあるくことが容易であつたのは勿論の次第である。且つ又踏繪を此年から勵行したといふ記事は疑を要するが、それは今の要點ではない。兎に角、その後の追放にも同樣、非人仲間から搜し出したものが始終あつたのである。

次に江戸の方面を見るに、德川實記（寛永十三年三月五日）には將軍が當時築城中の諸門經營を巡視した記事がある。致台の記錄には恰もそれと同日、即ち 1636 四月十日將軍巡視の事を記し、越えて五日、跛者や盲人八十三人を引つぱり出し、切支丹じやないかと責めて、餓死させたとある。蓋し巡視の時に城門外の非人部落に目をつけ、そこにも切支丹がゐると斷定したものであらうが、それは偶然でなかつたと思ふ。されば、その後、井上筑後守が宗門改めをしてゐた二十餘年（1637—1652）の間に召捕つた切支丹の中には、江戸千駄谷で乞食二十餘人、牛込で乞食十人、神奈川でえた二十餘人、鎌倉でえた五

六人あつたといふ記事がある。此等が悉くは生來の窮民階級でなかつた事も想像するに足る。

八　朝鮮人捕虜の救護敎育

次には朝鮮捕虜の問題で、事は奴隷問題にも關聯するが、その複雜な點はこゝに省いて、捕虜乃至奴隷に對する切支丹敎師のした事を記さう。又司敎セルケイラ（Cerqueira）が奴隷賣買を廢せしめようとして、防止策を講じ、又天川に警告した書面の中に、種々その間の消息を伺ふに足るものがあるが、それも略して、直接に此等捕虜の爲に盡した事を記す。その事業は二つで、一は日本で此等捕虜を養育し感化すること、二は天川へ賣られ、それから交趾邊にも散在してゐた者を救ふこと。

一體太閤の朝鮮役でつれて來た朝鮮人の中には、幼兒が中々多く、加之、戰爭後にもポルトガル人に賣る目的で、朝鮮から掠奪して來た幼兒もあつた。此等に對する救濟は切支丹傳道の一事業であつた。但し組織的にした事業でなく、先に記した棄兒收容と同じく隨時に行つた事ではあるが、大體に於て平戶で救ひ上げた者を、大村や長崎で養育し敎育したのである。但しつれ歸つた朝鮮の幼兒は所謂る捕虜でなく、戰役で孤兒になり迷子になり、棄兒となつた者を收容したのもあるので、小西行長は陣中にゼスス會の敎師を伴ひ、敎師は信者を率ひて此の收容の任に當り、行長はそれをよく育て上げた。されば此類の收容兒童が切支丹信者になつたのは自然の勢で、小西のつれて來た一女子ジユリヤおたあは、小西の奥方に事へ、後に駿河で家康の奥女中として改敎を迫られ、屈せずして伊豆大島に流された。十三歲の時に捕はれて來たビセンテ嘉運即ち嘉兵衞は、小西の許に育ち、ゼスス會の敎育を受け、長じて慶長年間には朝鮮や北京にも出かけ（北京に四年ゐた）、日本に歸つて五年間イルマンとして傳道に働いた後、寬永二年（一六二五）敎師ゾラと共に捕はれた。その他、此と同樣信者として一生を貫いた者は二十人ばかり記錄にあるが、多くは幼少の時から日本の信者に育てられたものである。又その間には旣に奴隷になつたものを買戾さうとした事も二三確に傳はつてゐるから、他にもあつたに違ひない。

次に天川から交趾や印度にかけて、日本の商人や移民の外に奴隷として轉々して者、それ等に對しては、天川から常に日本人の敎師を派遣し、傳道と救助とを勉めてゐた。交趾で四百人の日本人在留者があつたといふ記事もあるが、その中には朝鮮人で、長くカンボジヤに住し、後寬永十九年（一六四二）ルビノに從つて潜入し、長崎で穴つるしになつた者もある。

九　追放人に對する扶養救助

初めに述べた救濟事業の第一と第二との中間（時期に於ても種類に於ても）は追放人の慰問保護である。但し追放といつても、中には强制追放せられるに先つて自ら退去した者もあり、此は先に述べた窮民部落の項と聯絡した問題である。何れにしても、追放を受けた者、退去した者に對して幾分でも餘裕ある他の信者や敎師が、精神的にも物質的にも慰藉を與へ保護を加へるのは自然の事で、至る處に行はれた。然し此も迫害の進むと共に、多くの人が皆共に苦み惱む者になり、終には追放よりも死刑が多くなつては消滅した譯で、つまり、傳道の盛な時と迫害のはげしくなる時との間に起つた事である。

追放又は退去が比較的大規模に行はれたのは、平戶に始まつた。慶長四年（1599）道可隆信が亡くなつた時、その繼嗣鎭信（しげのぶ）（即ち法印樣）はそれを機會に、家族臣下に追善佛事の參拜を强制し、以て切支丹を壓迫せうとした。然るにその子の妻なるマンシヤを始め重臣籠手田（コテダ）一族以下、信者達は之に服せず、六百人が一時に平戶を退去して長崎に向つた。その時長崎の信徒は大村藩の助を得て之を救ひ、收容して段々に處置をつけた。中には以前の長岡氏（細川）に引とられた者もあるが、更に角、追放人救護の第一着である。（此の二十年前の敎師追放には、大して救護を要しなかつた）。

此に次いでは、慶長七年（1602）頃から起つた肥後の迫害で、特に士分の者が段々に追放又は退去になり、一時野山に小屋がけ住ひをした。その間に特に巡回慰問に當つたのは日本人敎師ルイス宮原であつた。此の追放の結果として、信者で散亂し、後に多少の働きをしてゐる者もある。行先の最も多かつたのは有馬で、次には薩摩、安藝（福島領）、堺などであつた。次で五島から退去した者が長崎に集つたこともある。

最大の追放は慶長十九年（1614）ので、上方その他からかり集めた敎師信者と土着者と合せて、長崎は一時數百人の追放者を養つた。追放せられた先は天川（マカオ）とマニラで、それぐ救護どころでない歡迎を受けた。マニラでは、日本追放者だけの町があり、又尼寺が出來た位である。その中には高山右近とその娘ジユリヤや、內藤采女の如き身分の高い人もあつたが、更に角、窮民としての救を受けたのである。高山右近の外、京阪で追放を受けた者の中に七十餘人は津輕へ流されたが、此にも敎師等が慰問の施與や儀式祭具を齎らして出かけ、それが又東北傳道の源を開く事になつた。

それから續いて筑前、筑後、豐後、上方、江戶、駿河に追放

が屢ば行はれ、その移動行先にはそれ〳〵救護をした。その中で駿河から追はれた岡本大八をかくまつた伏見のジュアン岡平内の如きはその爲に自ら身命を抛つた。又長崎では、此等の追放人を收容し世話する爲に、常に莫大の經費を要して、教師も信徒も非常に苦むだ。先に述べた大阪の乞食七十人の如きもその一つであるが、その前後、長崎を經て海外に追放せられた者は中々の多數に上る。その最後は、寛永十六年（1639）長崎で、南蠻人との混血兒幷に南蠻人に養はれた養子、男女總計二百八十七人を海外に追放したにある。親子同胞の生別、特に幼年者の海外追放は人のあはれを惹いたものと見え、長崎夜話草の著者は、文を綴つて、その悲しみを叙し、「嶋かくれ行きしこそあはれなりし世なめりし」と結んでゐる。兎に角、始めの間は、多少とも餘裕のある教師や信徒が、追放人を救護したが、後にはその餘裕もなければ、又救護すれば直に召捕られるので、皆が共々窮民になつてしまつた。然し、追放は信徒を諸方に追ひやり、その結果、宗門の傳播を助けた場合もあり、その間の關係は別に研究を要するが、兎に角、幕府は、寛永以後その點に氣がつき、各藩領外に切支丹を追放すること（移住の許可をも含めて）を禁じた位である。

十　獄中の傳道

そこで窮民救濟の結果は、總ての方面で、切支丹自らの窮民仲間入となる。癩病小屋に入ること、非人部落を作ること、此等は前に述べたので十分である。それ以外に、第二期で著しい現象は、獄中で同囚徒の教化救濟と、鑛山に於ける共棲感化である。

獄中生活は、善惡共に人心の感動を促し、感化に好機會を與へるはいふまでもないが、特に德川時代の如く死刑になるべき者の多い囚人、又さなくともいつ出獄し得るや見當のつかぬ囚人が多數を占めてゐる中で、身命を抛つてかゝつてゐる切支丹の教師や信徒が同獄に居て、起居運命を共にする場合に、感化が強く行はれたのは自然の勢である。教化を施す側も此世に望をかけず、受ける側も、望少い中で、施す側は未來天上の生活を的確に且つ具體的に信じ、天上の幸福をあり〳〵と眼前に畫いて、言葉と生活とで感化したのであり、且つ又在牢年月の長い者もかなりあつたのであるから、感化を施す要素は實によく備はつてゐた。されば、獄中で信者になり、喜んで他の殉教者と運命を共にした者も處々にあり、然らずとも、多少感化を受け、それだけ幾分でも精神的慰安を受けた者は中々多かつたこ

とは想像するに足る。

尚一つ、窮民救濟と少しく筋は違ふが、獄中で教師が信者に聖職を授けることも信者にとつては大きな力であつた。聖職を授けるといふのは、信者の中でも信仰行狀の勝れた者に、教師格といふべきイルマンの資格又稱號を授けることであるが、獄中では多く同宿又は第三會員の共に捕はれた者にその名譽を與へ、儀式を修した。此は殉教準備の名譽で、日本での陞位と時期を反對にして意味を同じくするものである。即ち此によつて一層殉教の覺悟を定めさせると共に、その運命に勇み進ませる所以、且つ天上に於ける光榮を一層高めると考へられた。されば獄裏に命旦夕に迫る信徒にとつては、此が大なる慰安又激勵であつたので、殉教史上の重要行事であつた。人間世界に於ては、迫害者の前に訴ふる所ない無告の民に、天上に於ける報に希望をおかせる、やはり一種の救濟といひ得る。

十一　鑛山傳道と潜伏

最後に鑛山は、一種奇妙な關係から切支丹傳道と聯絡する。それは德川氏の覇權増進が根本で、家康は外國貿易の利益と鑛山探鑛の二つに財源の重要部を置き、此の二つながら切支丹教師の力を借りて利益を増進せうとした。つまりバテレン利用の策である。貿易の事は別にして、鑛山については、伊豆の銀山、足尾の銅山が慶長年間に段々開發して來た。南蠻鐵の輸入者たるイスパニヤ人は此の事に通じてゐると見込をつけたものか、バテレンに鑛山探鑛の相談をし、伊豆の銀山には一人イルマンが行つて檢分してゐる。佐渡の方は明確ではないが、大久保相模守の一件には、多少切支丹との聯絡があるらしく、假令それはなくとも、元和の初から教師が屡々佐渡に出かけてゐる。足尾も詳細不明ではあるが、下野や上野に信徒が少なからずあり、後年足尾には多數の召捕があつただけは明白である。そこで始は探鑛傳授の意味、或はかく稱して切支丹が聯絡をつけた鑛山は、迫害の進むと共に信徒の隱れ場になつた。而して初期にも、後期にも教師はその方に傳道した。それは新な信徒を作る爲であると共に、隱れ忍んでゐる信者を慰問する爲であつた。

今、一例として仙北地方特に院内の鑛山を見るに、寛永元年(1624)その地方の迫害で殉教した勞働者の名が殘り、鑛夫の常として生國を名の如くしてゐたので、その故鄕が分かる。その男女四十六人の中、故鄕不明（多分その地方のもの）が十七人、石見が四人、尾張が三人、近江、越後、越前、寺澤（出羽）朝鮮が各々一人、その他は仙北、關東、和泉、大阪、備

後、播磨、駿河、備前、仙臺、伊勢、下野、若狹が各一人、如何に各地方から鑛山に集つてゐたかといふことを示す。その中には信仰の爲に逃れて來た者もあらうし、鑛山内で信者になつた者もあらう。兎に角鑛山が切支丹の隱れ場の一になつた事は明かで、それが後まで殘つてゐる。

院内と山を隔てて奧州南部地方にも、此の聯絡が著しい。右仙北の迫害に先つこと半年、敎師カルバリヨ（Diego de Carvalho）が信徒六十人と共に捕へられたのは、仙臺領の山中、下嵐(おろ)江(え)の鑛山村であつた。此と北上川を隔てた地方は、その昔藤原三代平泉の榮花に財源を供給した金鑛地方であるが、南部藩の領内で、佐比内(さひない)の金山、大籠の銅山、小友の金山、保呂羽(ほろは)の鐵山等は皆後まで切支丹の出た處で、地方の傳說では、彼等が能く「湯加減」（多分鎔鑛の）を知つてゐたから、技術に從事したといふ。寛永十三年（1636）、幕府から、南部藩に對して、領内に切支丹のあることを詰問したに對して、藩は申譯になる樣な又ならない樣な申譯をしてゐる。即ち比佐内の山に京都の丹波與十郎といふ技術者を使用したが、それが連れて來た一千人が切支丹であつたのだといふにある。一千人が多すぎるにしても、上方や西國の切支丹宗徒が、避難者として東北に來て、鑛山に入つた者のある證據になる。その他松前の砂金も切支丹の東北傳道と關係あり、敎師で各鑛山を巡回した者もあり、寛永十九年（1642）に幕府が、特に令を出して、奧羽の山中に切支丹が多いから、嚴に搜索せよと命じてゐるのも此の爲である。出羽の延澤に後年多數の召捕があつたのも同樣で、何れも信徒避難者の隱れ家が段段山中と地の下とに入つたしるしである。

＊　＊　＊　＊

窮民の救助に始まつた慈善事業は、窮民の仲間入となつて終を告げた。キリスト敎の初期三百年の間に、到る處迫害を受けても終に屈せず、迫害者たる皇帝が自ら十字架の前に跪く樣になつたのは、複雜な原因事情はあるが、その一つは地方を異にし、迫害の時期を異にする窮民が、互に扶助し救護したことが、その一つの原因である。日本でも切支丹迫害の場合に此の如き相互扶助が可なり行はれた。移住、歷訪、通信、それ等も可なりあつたが、幅狹く山多く、道路が惡く且つ封建割據の日本では、ロマ帝國に於けるが如き迫害窮民の相互扶助が絕斷せられ、終に散々になつて、一つ一つ絕滅の運命に陷つた。

大阪を觀る

下田將美

一

幕末の儒者、廣瀨旭莊の著した九桂草堂隨筆の中に三都の人々を比較して、かう書いてある。

――京の人は細なり、大阪の人は貪なり、江戸の人は誇なり。京の人は矜氣多く、大阪の人は殺氣多く、江戸の人は客氣多し。京の人は土地を尊ぶ、其意に曰く、江戸大阪といへども皆田舍なり、すむは都に如くはなしと。大阪の人は富を尊ぶ、其意に曰く、公卿官祿高しと雖も、貧しきが故に我輩の商賈に手を下ぐるなり。世の中に富ほど尊きものはなしと。江戸の人は官爵を尊ぶ、其意に曰く、諸侯さへも貧しき時節なり、貧は愧づるに足らず、質を置いても立身するがよしと、是れ三都人氣の異なる所以なり。と

簡潔な文章の中に三都の人々の特長を促へて誤らない所は流石に見上げた觀察だと思はざるを得ない。旭莊がこれを書いてから半世紀以上の歳月は流れて居るのであるけれども今日でも大體觀から云へば此短評は依然として眞に近いものとして肯定せざるを得ないのである。私は大阪に移り住んでからまだ一年にはならない。大阪を觀るは言葉通り單に表面を見て居るだけであつて、皮下三寸の深さにも達してゐないことを自ら知る。それにも拘らず旭莊の短評を引用する氣になつたのは、短い經驗から云つても、矢張り大阪の中心は富であり、商賈であつて、すべてはこれを基點にして出發してゐることをしみじみと感じたからのことである。

歴史的の傳統と環境の力は偉大である。大阪が都市として存在するやうになつてから今日までの過去をふりかへつて見る

と、そこには徹頭徹尾町人の天下があり、町人の文明がある。大阪の繁榮は桃山時代からのことであらうが、これを一面から見れば秀吉の華美な性格と民衆的な政治の傾向とが期せずして町人階級勃興の機運を促進して、浪花はいつか町人の勢力を象徴する都となつてきた。それでも豐臣時代には大阪には同時に政治があつた。武士と町人との入り混つた世界であつた。それが德川時代に入つてからは最早政治から離れて純粹の商業の都に變つてきてしまつた。幕府が大阪を見る目、大阪を支配する手は、商賈が目安になり、富が目安になつて來た。經濟的に云へば江戶は消費地であり、政治の都であり、大阪は貨物の集散地であり、商賈人の都であつたのである。幕府の施設もすべてこれを目安にし、これを發達させるために都合のいゝやうな政策ばかりをとつたのであつた。大阪は完全に町人の天下となり、富の中心となつた。堂島の米市場の歷史にしろ、兩替屋の制度にしろ、大名が御用達を大阪の町人に命じて財政手段を講じたことにしろ、何れも富の中心を大阪に置いての話である。町人の都としての大阪が三百年の永い經驗を積んで髓の髓まで商賈人になり、町人化してしまつたのは一向に不思議ではない。明治維新以來今日までの大阪は少しは變つてきた。單に商業都市としてだけでなく、工業地としての大きな發達を遂げて來た。商工都市と云ふのが今では一番當つてゐるだらう。けれども大阪を人格化して一言に評したらば何と云ふかといへば、矢張り昔ながらの町人の天下であり、商賈人の都であらう。江戶は東京と名を改めても依然として、政治の都であり消費地であるやうに、大阪は依然として貨物の集散地であり、生産地であり、商人の都である。

表面的の大阪觀はもう止めやう。私はかうした商賈人の天下である大阪が昔も今も變らないことを目にふれた側面觀で少し記して見たいのである。

二

人と人とが每日顏を合せる。店で久しぶりに主人と客と會ふ。電車の中で知人同志が出會ふ。かうした場合に東京であつたならば、まづ一通りの挨拶があつた後には政界の噂話でもするだらう。大阪ではさうでない。

『なんぞボロイ儲けはおまへんか』とのつけからやつてのける。傳統的の金儲け主義、算盤のけたに死生のすべてを托する因習が何の不思議もなしに挨拶の常道となつて取かはされる。ここに大阪の色がはつきりと表はれてくる。東京人にして見たら餘りに味もそつけもない露骨なせりふだと云ふだらう。しか

し大阪人から見れば愚にもつかぬお座なりの會話を交して肝心の商賣を閑却してゐるらしい東京人こそ阿呆らしい骨頂であらう。

損か得かと云ふ觀念がすべてのものについて廻る結果、大阪人の日常生活は東京人では一寸氣がさして出來ないほど細かい。物を買ふにしても値切れるだけは値切る。散々値切つてまけなければ、それまで、まけさせればそれだけ得になるのだから一應は押すだけ押して見る。その又押しが强い。宵越しの錢は持たないなどと馬鹿げた見得を誇りにしてゐる江戸つ兒から見たらとても辛棒の出來ないやうな光景をいたる所で見る。

東京に住んでゐた時分に出入りをしてゐた松阪屋の番頭が三四年前に大阪の店へ替へられて來てゐた。私は此間久しぶりで其番頭に會つて見た。家賃が東京より安いとか、握りは東京に限るが、むし壽司も食べつけると下手な東京壽司より、餘程うまいとか云ふやうな他愛のない話から、いつか大阪人の買物振りの話になつた。その番頭はこんなことを云つた。

――實際わたしはこつちへ來た一二年と云ふものはお客様に泣かされ通しに泣かされました。早い話が店に並んでゐる反物一反でも安々とは買つてくれません。氣に入つたのがあると、それを丹念に調べてどこかしらに云ひ分をこしらへます。こゝに一寸しみがあるからなどと云つて、いくらか負けろと云ふのです。負けられませんと云つた位では承知しやあしません。何のかんのと、しつつこく文句をつけてたとへ少しでも負けさせやうとするのです。ではしみのない良いのがこちらにありますからこれをお求め下さいと云ふと、そのしみのあるのが慾しいのだと云ふのです。しみがあるから負けるのは當り前だその負けてくれたしみのあるのが是が非でもほしいとかう云ふのだから仕末がつきません。萬事此調子です。實際これには泣かされました、東京で樂な商賣をしてゐたのから見ると、こちらのお客様はまるで違つてます。まあお陰様でこの頃は、すつかりこつちも呼吸をのみこんでしまつて大阪式の商人になりましたから、樂ですが、來た當座は全くやり切れませんでした。

とさう云つてその番頭はしみ〴〵とつらかつた思ひ出話をしてきかせた。此番頭の云つたことは確かにうそではない。戎橋から心齋橋までのあのごた〴〵した通りを時々歩るいて買物をして廻つてゐるうちにも、さうした光景にはいくどとなく會つて來てゐる。此頃では私も、見づらく聞づらい程しつつこくねち〳〵と値切つて買物をしてゐる婦人達を見ても一向氣にも止まらなくなつてきた。

八百屋の店に長い蓮を半分に切つたり大きな唐なすを半分に

切つて並べてあるのを見受ける。半分づつお客樣が買ふから切つてあるに違ひない。ある大きな銀行の頭取の家では毎朝女中が五錢づつ味噌を買ふ、それも五錢で甘いのと辛いのと兩方買ふと云ふやうな話もある。惡口には違ひないであらうが、一應はありさうにも考へられる惡口である所が大阪である。

大阪の食ひものはうまい。有名な料理屋のものは申すまでもないが、一般の中下流の家庭の人が一家揃つて一寸食ひにゆくと云ふやうな手輕な料理屋もよく發達してゐる。さう云ふ所では食て餘したものは折につめてもつて歸る。お汁なんかは、實（み）だけもつて歸ると云ふが、こいつも萬更惡口ではない。或る一流の料理屋で、おそらくは相當のお客であらう人が、歸つてから仲居を電話口へ呼び出して、少しばかりの釣錢をとらずに歸つたのを催促してゐたのを現に私はそばにゐて聞いたことがある。すべてから云ふ細かいことは一寸東京では見られない圖であるだらう。

金がすべて口をきく、金の尊さ、有難さが骨の髓まで沁みこんでゐる都であるだけに、それだけ一般人は金を粗末にしない。こゝに大阪人の長所があると共に缺點もある。金より大事な忠兵衛さんと、淸水の舞台からとび下りたやうな最大の比較級を以て大事にされた忠兵衛も、つかひ果して二分殘してゐる。二分殘した所が矢つ張り忠兵衛らしい浪花の町人である所をよく現はしてゐる。忠兵衛が江戸の人間だつたら、言葉通りすつからかんに使ひ果しちまつたに違ひない。

三

かうした市民の氣分なり、生活なりはそのまゝ大きく見た財界の調子にも現はれてゐる。大阪の財界は血の出るやうな現實の戰ひであり、打算を基礎とした冷酷な世界である。東京の財界だとて打算が基礎になつてゐることにかはりはなく、血の出るやうな現實の戰もしてゐるには相違ないが、そこに情實の影がかなりに多くさす、大阪は商買がアルフアーであつて、オメガである。東京は商買のうらに政治家らしい氣分がチラ／＼見える、人情の匂ひが可なりに濃く色づけられる。この意味において大阪の財界は單純であるが、東京の財界は複雜である。大阪の財界のことは算盤を一挺もつてゆけば、大がいは割り切れる。東京の財界は算盤だけいくらはぢいて見ても、どうしても割り切れない妙な數字が混り込んでゐる。算盤で割り切れるのと、割り切れないのとの相違が、兩都財界の相違そのものである。もつと云ひかへて見ると大阪の財界は理智の世界であり、東京の財界は情の世界である。前者は學者の論文であつて、後

者は文藝家の創作である。

關東の大震災のあとで日本橋邊の老舗で隨分行つまつてしまつた店も澤山に出來た。現金取引になつて內容の苦しいものは露骨に落目になつて行つたが、それでも東京ではあのお店は先祖代々からの取引先きだから、さう薄情なことも出來ないなどと云つて、見す〳〵回收不能になりさうなことが目に見えてゐながらも人情からも品ものを送りつけてゐた商人も可成りにあつた。商買に人情がからんで算盤を狂はせるよい例である。それから見ると大阪は徹底してゐる。金のないのが緣の切れ目、何もかも『算盤が合ひまへんな』の一言で、さば〳〵と片がついてしまふ。だからどんな舊家にした所で、深い馴染にしたところで、落目になればそれつきり。問題にも何もなつたものでない。その代りに沒落した所で悔むにもあたらない。有爲轉變の世の中、その中に又良い目が出て、金さへ出來れば、もとの通りにすぐに大きな顏が出來る。かうまで露骨に手の裏をかへしたやうな取扱ひを世間がするものかと思はせる例は、擧げろと云へばいくらでもあげて見せることが出來る。尤も例外もないことはない。先頃中、川崎造船所が沒落の悲運に面接して大樹正に仆れんとする悲痛な光景を現出した時に、東京の大倉組は思ひ切つて差押へを斷行した。その他の東京側の大債權者も造船所の製品を片つぱしから召上げてしまつた。川崎造船は實際その日その日の經營に苦るしい算段をしなければならなくなつてゐた。貨車、車輛は製れるが、その部分品は他から供給をうけなければならぬのに、その部分品が現金取引なので思ふやうにならない。さればと云つて部分品が揃はなければ貨車も車輛も完成したものとして賣るわけにはゆかない。そこに川崎としての云ふに云はれぬ苦るしさがあつた。それを見た鈴木商店は自分の所も何れは同じ落莫たる肅殺の秋、債權者會の前に身を投げ出して、生かすなり殺すなり、まゝにして貰ふ身分でありながら、流石に、見るに忍びないとあつて、川崎に對して部分品をどし〳〵供給してやつた。現金でなければ取引はいたしませんなどゝ云ふ冷酷な態度は鈴木にはちつともなかつた。私はこの話をきいて本當に良い氣持がした。事が關西であるだけに餘計に身にしみて悅しい氣がした。人間や事業の榮枯盛衰なんてものは廻り持である。榮えるもの必しも永久に榮えず、衰へたるもの必しも永久の敗者ではない。弱いもの苦しむものがお互に助け合ふ。その美くしさの一例を關西に見たことは確かに拾ひものだといふ氣がした。とは云へ例外は遂に例外である。大體觀から云へば、何と云つても大阪は算盤を基本とした理智の世界であり、東京は算盤のけた外れた情實の影の多い世界

である。

一例をあげれば會社の人事關係でもさうである。恐らく東京の會社の人事關係位、情實がからまり、七面倒臭い手續きをふるものはないだらう。たとへば一時問題になつた東電の重役の選任にしてもさうである。所謂御三家と新聞に書いたやうに三井の代表だ、三菱の代表だ、何の代表だと一寸外からはわかりかねるいろ／＼の關係やら情實やら、蔓やらがこんがらかつて三四ケ月も重役がきまらずにゐる、面倒なことは此上ない。東電のことはさて置いて、もつと小さな會社の重役問題にしても何のかんのと單純にはきまらない。それ／＼の筋へ了解を求めて、大變な騷ぎをしてでつち上げる。だから有力者の後援がありさへしたら、とんでもない人間が、有力者から必要な株だけ持たせて貰つて押かけ婿のやうに平氣で賣込まれてゆく。財蔓をよくのみこまない限り東京の會社の重役問題などは決して易易と素人にわかるものではない。そこへゆくと大阪は簡單である、情實の影がないとは決して云はないが、東京のやうにまづ第一に情實を考へはしない。第一に來るものは金力である。金力を算盤で割り出して、實力があつて株數を多く持つてゐるものが重役になるまでの話である。これで大がい片がつく。それ故大阪の重役問題がたとへごた／＼した所で東京のやうに無暗に永引くやうなことは滅多にない。誠にさつぱりしたものである。私はこれが本當だと思ふ。財界の正道だと思ふ。東京はよろしくこの冷酷な算盤で割り切れる方法に學ぶ所があつて然る可きである。

四

奇々羅金鷄の子の平亭銀鷄が著した『街能噂(ちまたのうはさ)』四冊は江戸つ兒の見た浪華見聞記として確かに出色の珍本である。銀鷄と云ふ男は江戸で醫者をしてゐたが、元來親爺に似た風流人で狂歌がうまく、この街能噂もたま／＼何年か大阪に住んでゐた間に見聞きした所を洒脱な筆で書いてゐるのであるが、大阪と江戸の風俗の違ひを畫で現はしてゐる所などは、とんだよい思ひつきである。その中にこんな一節がある。——

萬松。イヤけふも見かけやしたが、アノ土器の內へ枝豆だの、薩摩芋だの、といふものを少しづつ盛つておくのは、あれはどう云ふわけでござりヤス

銀人。へゝあれは子供などが買いゝやうに、栗、柿、蜜柑、棗の類、その外種々の物を一文から二文、三文四文と盛わけて賣るのでござりヤス

千長。へゝ引それは大きに心得ちがひを致しやした。わたくし

は又、江戸のかさもり稻荷の團子や、淺草の鳩へやる豆などを土器へ盛て置やすから、やつぱりそのわけで、神佛へそなへるのかと思ひやしたが、あまりいろ／＼のものがありやすから、どういふわけかと思つて、おきゝ申しやしたが、それでわかりやした。

宿人。すべてこつちでは何でも早く賣るやうに物を分て札を附て置やす。

とある。この面影は今でもある。

又その街能噂の中にこんな一節もある。――

萬松。ソレ千長さん車が來る、あぶないく／＼

千長。アイ／＼承知だ。オヤおつな車だね。成程これは思ひつきだ。江戸の大八車より人夫がいらず、そして荷を積むところが、長板ときてゐるから嵩なでは餘程積めやせう。

萬松。さやうさ、アノ跡から鐘木のやうなもので押のは面白い。たしか此車をベカ車といふとか、いひやしたつけ。

千長。ベカとはどう云ふわけだらうね。

萬松、何かわけがありやせう。イヤそれよりは向ふを見なせい。どうだ／＼よつぽど美くしいしろものぢやねいか。

とある。これも今でも大阪の町でふんだんに見られる車である。積む荷は同じで、梶棒が二本でなしに、眞ん中に一本きり。一本で二本と同じ役をするものであつたならば、一本の方が安上りで得なことは申すまでもない。流石に大阪の荷車である。

夏になると街に金魚賣りが荷をかついで出てゐる。片荷は金魚の泳いでゐる桶に違ひないが片荷には古傘が一ぱい積みかさねてある。妙な取あはせで最初は見當もつかなかつたが、よく聞いて見ると古傘と金魚を交換するのだといふ。役にたゝない古傘の折れたのを風流な金魚とかへるといふのであるから面白い對照である。

或る春の一日、私は神戸の一番賑やかな元町通りをあるいてゐた。大きな糸やのショー、ウヰンドーにおそなへ餅が澤山飾つてある。糸屋で餅を賣るのは變つてゐるなと思つて近づいて見ると、本當の餅ではなしに眞綿でうまくつくつた、まがひもののお備へ餅である。一番上にちよこんとのせた橙々までが、綿で出來てゐて、瑞々しく濃い色をしてゐる。成程關西でなければ見られない工風だなと改めて感心したものである。お正月の鏡餅なんてものは實際の所、しまひにはカチ／＼になつて弱してかきもちにして食つた所で大してうまいものでもない。それよりは正月は餅の代用として床の間にかざり、用がすんだら子供のチャン／＼この入れ綿にでもする綿の餅の方がどれ程實用

向きだかわからない。

かう云ふ例を擧げて行つたならば、いくらでもあるだらう。損と得とが露骨な位にはつきりすべてのもの丶上に現はれてゐる。堂島が大きくて、北濱が東京の兜町のやうには振つてゐないといふ所にも大阪の人の聰明さが現はれてゐるやうにも思はれる。たゞ餘りに露骨に損得の觀念が發達して來てゐるが爲めに、東京の人には一寸理解が出來かねる位の徹底した言行を平氣でやつて、それが第二の天性にでもなつてゐるやうに思はれるふしも多い。

或船つき場に船が出るまでの時間を利用して船客に果物を賣りに來る行商人があつた。大阪生えぬきの町の商人らしい男が扇子をパチ／＼やりながら頻りにその行商人をひやかしてゐた。果物屋は大きな水瓜を手にもつて頻りにい丶水瓜であることをのべ立て丶是非買つてくれろと云ふ。『なんぼや』と客がきくと一圓十錢だと云ふ。高い、高い一圓にまけろと云ふので、それからは一寸聞いてゐられない位の押問答がつゞいて三十分も根よく二人で負けろ、負けられぬとやつてゐる。結局果物屋の方の押しが强くてどうしても負けないと見てとると、では切つて食ふのだから庖刀を持つて來いと云ふ。笑談ではない遠くまで歸つて庖刀なんか持つてこられるものではないから、このま丶で買つてくれといふと、では庖刀を持つて來ない代りに十錢負けろとくる、どこまでもしつこくからんでゆく。揚句の果は談判不調で果物屋は荷をかついで歸つて行つた。何のために三四十分も押問答をしたのだかわからない。すると今度は女のバナヽ賣りが荷をかついでやつてきた。商人らしい男はまたその女をつかまへて掛合ひを初めた。すばらしく見事な房の澤山ついた奴を六十錢だといふと、例の通り高いから五十錢にまけろといふ。七面倒臭い押問答がまた暫く取かはされた 客は何とかかとか品物にけちをつけて負けさせやうとする。けれども行商人の方も流石に抑れたもので、うはてにうはてと出てどうしても負けやうとしない。結局一文もまからぬとなると、では半分三十錢で買はふと云ひながら黑いしみのついた房を片つぱしからもぎすて丶奇麗な所ばかり、半分にしてやつと三十錢拂つた。行商の女も流石に呆れ返つたやうな顏をして默つて眺めてゐたが、その商人客はひとりで凉しさうに、扇子をパチパチやりながら、勝利者のやうにバナヽをぶらさげて船室の方へ歩いて行つた。大阪言葉のゑげつないといふのは、こう云ふ所へつかふのかどうか、まだよくは知らないが、とにかく徹底した買物ぶりである。こういふことが一向平氣で日常の茶飯事になつてゐるのは驚く可きものがある。

或お茶屋のおかみさんが或時私にこんなことを話してくれたことがある。藝者に旦那がきまる。月々のきめた金だけならばいゝが秋の温習會でもはじまるやうになると、いやでも餘計に金をせびられる。なには踊りとか、このはな踊りとか云ふやうなものと違つて温習會のは衣裝は藝者が自分の腕で揃へなければならない。そこで旦那の懐がいたむ。こいつを怖れて、中には温習會前になるとさつぱりと旦那を辭職してしまひ、又餘計な金が掛らぬやうになつてから誰かの旦那になるといふやうな連中も多いのだと。へー、そんなことで藝者の方も默つてゐるのかいと私は少々驚いてきいて見た。だつて仕方がありません。あきらめるんですといふ返事だつた。うそか本當か知らないが、どつちも徹底したものである。

或會社の重役は或時私にこんなことを話してくれた。少し研究するとわかりますが、大阪の商人の中には實に不思議な一種の商業道德がありますよ。たとへば見本には良いものを出しておいて、さて實際の取引になると、まるで粗末なものを持込んでくる。見本と違ふぢやないかと責めて見ると、あべこべに驚いたやうな顏をして、だつてあれは見本ですものと云ふのです。つまり見本といふものは良いもの、實際の取引にはきつとそれより惡いのが當然の當然だといふやうな考へ方ですね。それがちやんと一種の商業道德——道德もちと變ですがね、とにかく永い慣習による觀念になつてしまつてゐるのです。注意してごらんなさい。實に妙な考へ方の所がありますよと。

かう云つたやうな例を私達はいたる所で、見もし聞きもする。打算が徹底して第二の天性と化した所に、大阪の大阪らしい姿が現はれる。長所であつて同時に短所であり、良い方面にも惡るい方面にも一つの特長となつてゐるものと云つてよいであらう。

五

一本調子に徹底するところ。これが一般人の趣味の上にも現はれる。早い話が東京と大阪の趣味の違ひは、清元と義太夫の相違である。あくどいと云へばあくどいかも知れぬが泣くも笑ふも徹底した所に大阪の色があり大阪の命がある。私はそのよい例を野球に見る。

東京での野球の仕合ひは素より勝負そのものが興味の中心にはなるが、勝負の道程やら、技巧にも注意が拂はれる。見るものゝ多くは學生とか學生生活をへてきた會社員とか云ふものが中心になつてゐる。しかるに大阪では野球の興味は勝つか負けるかと云ふ二つに一つの點にかゝつてゐるやうに見られる。野

球そのものよりも、勝負事の中で最も面白いもの〻一つとして野球に熱狂してゐるといふ形がある、だから見る人も全く民衆言葉通り一般の市民の全部である。何にかぎらず一體勝負といふものは愉快なものである。しかし東京の人間はその勝負を見るにしても、それ〴〵角力が好きとか、野球が好きとか、何とか勝負の對照物に好き嫌ひももち、研究なり、通なりをふりまわしたがるが、大阪の人はそうしたものよりも勝つか負けるかと云ふことと自身に非常な興味をもつやうである。だから、ひとり野球には限らない何でも互角のものを並べて、どつちが勝つかを異常な興味で始終見てゐるやうな氣がする。

勝負が主眼になる時、人間は何ものをも忘れてその中に沒入する。大阪の人は勝つか負けるかに絶大の興味をつないでゐるだけに、野球の仕合ひに對する熱狂ぶりなどは實際物凄い位である。東京人も熱することは好きである。けれども野球に對する熱狂の程度は大阪ははるかに東京をぬいてゐる。しかもその熱狂する人々が一般の市民のすべての階級を網羅してをるのであるから正に言葉通り痛快な光景を現出する。

大阪の町に非常に野球の好きな豆腐やがある。殆んど、どの野球も見逃さない位に、それこそ三度の飯よりも野球を見る方が好きなのであるが不幸にしてその妻君は趣味を一つにしてゐない。從つて亭主が稼業をそつちのけにして野球を見ることに不平滿々たるものがあつて、いつも喧嘩の種になつてゐた。しかし亭主は女房の小言位で心を改める程單純なファンではない。そこで是非見なくてはならない仕合のある時には、わざと前の晩に仕込みを少くして、輕い荷をかついで店を出る。時間に間に合ふやうにその豆腐がい〻工合に賣れ切れてくれ〻ば幸であるがもしさうでない時には唯で人に豆腐をやつてしまふ。それでも品がさばけない時には溝の中へ叩つこんでしまふ。さうしてひそかに懷に忍ばせて家を出た貯金の通帳の中から、その日の賣上の辻褄を合せるに足るだけの金を引出してさて一散に野球場へとんでゆく、萬事を忘れて仕合を見てしまつたあとで、そしらぬ顏に空の桶をかついで家に歸り、貯金帳から出した金をさもその日の賣上げらしく女房の前へ放り出すのださうである。かう云ふ一寸想像もつかぬやうな熱心なファンが大阪にはある。

大毎が甲子園で選拔中等學校の優勝仕合ひをやつた時のことである。雲霞の如くにスタンドを埋めた見物に用事のある人を探すために、小使ひが大きな黒板に、何町の何々樣入口までなどと書いたものをもつて時々、場内を一廻した、その中に、長男危篤すぐ歸れといふのがあつた。まさかに急病なわけでもないのであらう。もし病の重い子であつたのだとするならば、そ

れを承知で野球を見に來てゐる人の熱心さは驚嘆すべきものがあるではないか。中にはまた、迷子がある。事務室に連れて來てあるから引とりに來て貰ひたいなどと云ふ黑板をかついで小使が歩き廻つてゐた。親になる人は小供が見えなくなつたことなどは、いつの間にか忘れてしまつて、夢中になつてフヰールドを見つめてゐたものであるのだらう。これ亦驚嘆すべき熱心さである。

大朝の中等學校野球大會の時にもいろ〱のエピソートが生れてゐる。無料席のいゝ場所を占める爲めには前の晩から甲子園の濱に野宿をした連中もある。通し切符で五圓のものが、最後の決勝戰にはたつた一日分で三十五圓に飛上つて、それで奪ひ合ひだつたといふやうな、まるでうそのやうな話もある。

かうした熱狂ぶりは、何ぼなんでも東京では見られない。しかもこの熱狂さが單に一部の野球好きの間に行はれてゐるのではなくして、大阪のすべての階級、すべての職業の人がほとんど例外なしに熱狂するのであるから怖ろしい力である。實際、エキサイトするに足る大きな、試合でもはじまる時には、ほとんど全市を擧げてその話で持ち切つてゐると云つても決して過言ではない。會社にしろ、商店にしろ從業者は都合がつく限りは甲子園めがけて押よせてしまふので、野球のために仕事にも隨分差つかへは出來ることだらうと想像されるが、そんなことは問題にされない位に、皆が勝負に醉つてしまふのである。實際怖るべき熱である。

私はかうした熱を、大阪の人の勝負ずきと云ふことに原因を歸したいと思ふのである。物質文化の思ひ切つて發達した都であり、打算觀念の極度に發達した市民にとつては、勝つか負るかと云ふ一事が最も面白い興味の對照となるのも無理のないことであらう。私はこゝにもはつきりと大阪及び大阪人のカラーを見、特長を見る。

六

八月十五日の夕方、私はいつもの通り梅田から阪神電車にのつて家路についた。急行の電車は小さい停留所をとばして奔るので、前の方の車にのつて立つてゐると、明け放した窓から涼しすぎる位の風が流れ込んで、汗ばんだ肌の上を快よく吹きすぎてゆく。私はその風を胸に顔に、むさぼり樂しみながら快よく馳る電車の動搖に身をまかせてゐた。やがて淀川の鐵橋にかかると川風は帽子が支へきれない位に、はげしく勇ましく流れこんできた。私は大急ぎで夏帽子をたなの上に載せながら、冷めたい流れを樂しむために窓の外を眺めた。海に近い川口の大

川は漫々たる水をたゝえて悠々と流れ流れてゆく。日は六甲の連山の影に正に落ちんとして、松でおゝはれた山頂は濃い紫色に染まつてゐる。殘照の美くしさ。茜色をした夕空はそのまゝに淀川の水の上にも落ちて、キラ〳〵と紅にそまつたまゝ悠々と流れ流れてゐる。いつも見馴れた景色ではありながら私はうつとりと眺め入つた。

川の兩岸には青い蘆が一面に生えて川風にそよいでゐる。電車が鐵橋を渡り切らうとする時、私はその川岸の蘆の根方に妙なものが浮いてゐるのを見付けた。それは小さな一尺餘りの船であつた。船には赤や青の美くしい紙片で飾つた柱が二三本立つてゐる。奔つてゆく電車の中から見るのであるから、勿論はつきりとは見屆けることは出來ないが、全體の恰好がいかにもよく整つた可愛らしい、美くしい玩具の舟であつた。

梅田から私の住んでゐる蘆屋までゆくのには電車が幾筋かの川を越えてゆかなければならない。いつもならば滅多に水のない川が多いのであるが、夏季だけあつて珍らしくどの川にも淺い水が流れてゐた。さうした川を越してゆく毎に私は、きまつて生えてゐる川邊の蘆の根方に、きまつたやうに青や赤の紙片で飾られた小さな舟がいくつも浮いてゐるのを見逃さなかつた。それはまるでお伽話の中に出てくる、月の世界のお姫様の乘つてゐる船でゝもあるやうな可憐な氣持を起させるものであつた。その可憐な小さい船はまるで小人が棹してゞも居るかのやうに、ひとりでに風に吹かれて、蘆間から蘆間へとゆら〳〵搖れ流れてゐるのもあつた。東京にばかり住んでゐた私にはかう云ふ船を見たことはいまゝでに一度もなかつた。何だらうと思ひながらも川邊にいくつも今日に限つてこんなものが浮いてゐるといふことゝ、船をかざつた青や赤の紙片が七夕の笹につけるものと同じものであるといふこととから、それが所謂精靈船だと氣がついた。氣がつけば其日は正に八月の十五日である。舊のお盆、なるほど精靈船が浮くわけだと、まるで何か新らしい發見でもしたやうないゝ氣持になつた。

そのあくる日、私は又同じ時刻の夕暮に梅田から電車にのつた。淀川を渡る時にきのふの船はどうしたらうと氣をつけて見たが、そこには最早お伽話のお姫様の乘つた小舟はどこまで流れて行つたのか影も見えずに、たゞ青い蘆の葉だけが、サクサワと川風に搖れうごいてゐた。

舊盆の川に昔風の精靈船を流す。いさゝか現代ばなれがしてゐる。梅田、堂島のあたり七階建、八階建の大きなビルデイングが次から次と建てられて、物質文化の華の咲きほこる大大阪の進歩ぶりを見てゐる私達には、かうした昔風の面影が、東京

以上に殘つてゐるところにたまらない面白さを感ずる。流石に大阪は古い都である。町人の文化が幾百年に亘つて人の心に、人の生活に、人の慣習に泌みこんでダンスホールの紅い灯にモダーン、ガールの濶歩する現代にまで、昔ながらの姿を持ち越して來てゐる。

ひとりお盆の精靈船ばかりではない。私は大阪の町を歩るいて、東京ではとても見られさうもない古典趣味のものをいく度びかみうける。昔風の虚無僧によく出あふのなどもその一つである。黒い着付けに編笠を深くかぶつて、腰に印籠をぶら下げた芝居に出てくる姿そのまゝの虚無僧が、現代などはとうに超越した悠々たるものごしで、門並みに尺八を吹きならしてゆくのを見るのは確かに私達初めてのものには珍らしい。或時はその虚無僧が尺八でなしに、本當の一節切を吹きならして堂ビルの前の通りを流して歩るいてゆくのを見た。堂々たる堂ビルの建築を見ながら、物さびた虚無僧の一節切を耳にする時、何とも云へない妙な氣持にもなつてきたのであつた。

寺の多い京都に近かつたことは、かうした影響を隨分深く大阪の人の生活にしみこませてゐたものであるらしい。信心や、信心の形によつて殘る迷信、さうしたものがいたる所に殘されてゐる。私の住んでゐる蘆屋にも寺はかなりにある。その寺々では日をきめて坊さんがお說教をする。そのお說教を村の人は、ほとんど一つの樂しみのやうに、又ゆかねばならぬ義務でゝもあるかのやうに根よく說教日毎にききにゆくのださうである。私の家の女中などは買物に行つてよくその說教のことを聞いてくるらしいが、今度の何寺の坊さんは大層上手だとか上手でないとか批評しながら村の人達は精出して通つてゐるのださうである。東京ではお寺の說教と云へばまづ年をとつた御信心の深い人達だとか、特別な人にかぎられてゐるやうであるが、こちらでは一般の家々で、年の老若にかゝはらず皆說教をきく習慣がついてゐるらしい。かう云ふ點は東京とはかなりに違つてゐる。

川に精靈船の浮くことも、七夕の笹の葉に青や赤の美しい色彩の紙切をつけたものが門並みに立てられることも、いづれも昔ながらの佛教の勢力の形身でなくて何であらう。昔の通りの姿をした虚無僧が街をあるいてゐることも、本式の裝ひをした山伏が、ちやんと、ときんを頭にいたゞいて、大きなほらの貝をぶう／＼吹き立てゝ歩るいてゐることも、何れも矢張り同じ意味から昔ながらの宗敎なり信心なりの名殘りを示したものでなくて何であらう

佛教の影響はひとり形の上だけに殘つてゐるのではないらしい。永く大阪に住んでゐる人は男でも女でも心の上にもその

影響はたしかに現はれてゐる。私はよく亭主と別れてしまつたり、亭主に捨てられたりした女が、あきれる程さつぱりしてゐる話をきく。夫婦間のとであつても、存外みれんなしにさば〳〵と片づいてゆく切れ話を可なり澤山きいてゐる。見様によつてはたしかに所謂水臭い話である。一輪咲いた花ではないが、ともかくも結んで切れぬ筈の契りを結んだ男と女との間がさう簡單に水臭く別れられるものでもなからうと考へるのは、われ〳〵東京にそだつたものゝ考へ方であつて、大阪の町場の女などには、さう云ふ點では存外さば〳〵した人情觀が發達してきてゐるものらしい。これを一言に水臭いと云つてしまふのは當つてゐない。寧ろ長い間の習慣がいつかかうした氣持を作り上げてしまふたのではあるまいか。もう一つ勝手な解釋をすれば、佛教の所謂、あきらめがこゝにも默々の中に力強く働らいて居るのではあるまいか。三世を廻る因果の教へは苦しみにも、悲しみにもあきらめの悟りを示す、形式の上に昔ながらの古い信仰の姿をそのまゝに持ちつたへきてゐる大阪の人達は、いつかその心にも萬事にあきらめを最後の底に持ちつたへて來て居るのだと解釋するのは間違つてゐることだらうか。

七

大阪と東京とを較べて見れば一長一短はいづれにもあり、一がいに云ふことはもとより出來ないけれども、東京に較べて殊にすぐれて居り、羨しさに堪えないものは、市をめぐる近郊の美しさと、それを連絡する電車の發達とである。

東京であつたならば一時間内外で氣持よく氣分を轉換することの出來る勝地を求めれば江の島、鎌倉逗子あたりをのぞいて、他にこれと云ふものがどこにあるだらう。しかるに大阪には一時間内外で遊ぶによい所はいくらでもある。京都もよし、奈良もよし、宇治もよし。海を求めるならば明石も舞子も、和歌浦も遠くはない。溫泉にしても近くにこれを求められる。若し東京の人が箱根に遊ぶだけの時間の餘裕をかすならば、大阪には更らにいゝ所が澤山にある。新綠の奈良、京都に遊び夏の日を濱寺や須磨、明石に遊ぶごとに大阪は何と云ふ美しい自然に惠まれた都であらうと、しみ〴〵羨しくならないことはない。

よしんばこれ程のひまを費さずとも、日々近郊から大阪へ通勤する電車の沿線にしても、東京の近郊とは比較にならない程のすが〳〵しい美しさをもつてゐる。私は蘆屋から毎日大阪まで電車で通ふ。春四月、阪急に乘つて夙川あたりを通つてからの後の兩側の窓に眺める野の景色は全く一幅の繪だと云つても差支へない。見ゆる限りの野には菜の花が一面にべつとりと咲き

つゞいて、吹く風さへも花の匂ひがする。所々の竹の藪影には紅椿の花が咲き川には春の白雲が悠々と浮ぶ。全く美くしい締である。東京の近郊には菜の花は少くなつて滅たには見られなくなつた。昔は道灌山から見下ろす千住、尾久の野には菜の花の黄金の敷物の上に、うす紫の筑波が浮んで氣持のいゝ遠眺であつたけれども、今は尾久は新開氣分の充滿した安つぽい色めいた町となつて、菜の花などはどこの隅にも見られなくなつてしまつた。今も猶、昔の菜の花の色をなつかしく思ひ出す私は、大阪へ來てから、毎日飽くことも知らぬほど貪り眺められる一面の菜の花をどれ程うれしく眺めたかわからないのである。阪神の沿線は阪急に較べれば田舍びた風光の美しさに於て劣つてゐる。けれども武庫川あたりから蘆屋まで車窓を眺めて、毎日のことながら飽きぬ景色も少くない。一方は遠く海が眺められる。或は紺青の色に、或は白銀の色に、或は淺黄の色に日によつて趣をかへる大海にはいつも白帆が浮んでゐる。一方には車の奔るまゝに六甲の山がうつり變つてゆく。山は緑ともなり紫ともなる。初夏の夕暮、平和な紫にかすむ山のいたゞきに陽が落ちて、朧に連らなる百姓家の影に、森の影に、畑のあぜに、野を焼く煙が淡々と立昇つてゐる趣などは、これがあの賑やかな大阪から二三十分の所に眺められる景色かと感心することともある。そのほか南海電車にしても大軌にしても沿線にはそれ〴〵の美くしさがある。郊外に惠まれたる大阪よ。煤煙の他には何ものもないやうな、市中は空氣のにごつた都ではあるけれども一度び電車で郊外へゆけば、海の風も山の風も清澄であつて人は一時にすこやかな呼吸を自然の中に樂しむことが出來る。郊外にめぐまれた大阪は全く仕合せである。

もし大阪にかうした美くしい自然に惠まれた郊外がなかつたならば、よしんば美くしい郊外はあつたにしても、これと大阪とを密接に結びつける交通機關が發達してゐなかつたならば、大阪に働く人々はいかに不幸なことであるだらう、幸にも大阪の郊外電車は完全に發達してゐる。或る點から云へば少し完全すぎて無駄な位にまで發達しすぎてゐる、たとへば私の住む蘆屋から大阪へゆく交通機關から云つても、阪神と阪急とが神戸と大阪の間を平行して奔つてゐる。その二本の線の間にはさまつて新國道の堂々たる道の眞ん中を、これはまた悠々たる大人の風がある緩行の國道電車が通つてゐる。鐵道省の本線も通つて汽車の利用も出來る。此上國道バスでも出來ることゝなれば五つの交通機關が縞のやうに一つ道を平行して奔つてゐることになるのである。少し發達しすぎる程發達してゐると云つても過言ではないであらう。

しかしこの交通機關の發達してゐるが爲にどれ程吾々は恩惠をうけて居るかわからない。電車の速力は速いし、競爭上乘客の取扱は念が入つて親切である。終點近くなるとたなの上の荷物を一々車掌が下ろしてくれるなどと云ふ取扱ぶりは不幸にして東京の人間には餘り經驗のないことであるだらう。私などは仕事の關係上夜が更けて、と云ふよりも實はもう翌日の夜中になつてゐる午前一時前後によく電車に乘つて歸ることがある。さう云ふ時にはついいゝ氣持になつて電車が出ると寢てしまふ。すると親切な車掌が、どちらでお降りでございますか蘆屋まで、宜敷ふございます蘆屋へ參ればお起しゝますからどうぞごゆつくりおやすみ下さいなどといふことが時々ある。誠に恐縮にたえない親切ではあるけれども、ともかくも、かうした心づかいをし、かうした取扱ひぶりをする東京の電車があるだらうか。

大阪の電車の所謂副業なるものも誠によく發達してゐる。電燈とか電力供給とかの本式の副業はもとより、住宅地の經營や土地會社、遊園地、市場等にいたるまで東京より一歩先きに範を示してゐるが、中でも面白いのは自然を利用した季節季節の遊樂を市民に供しておることであらう。春になれば摘草、初夏には苺狩り、蜆狩り、螢狩り、初秋になつていちじく狩り、葡萄狩り、秋やゝ深くなれば茸狩りと、つぎからつぎへと郊外に市民を誘つて、一日の清遊と實利を伴ふ設備がちやんと出來てゐる。これは一つは自然の惠みにもよることで何處でゝもできることではないけれども、何れにしても大阪の近郊の電車が、この自然の幸をうまく利用して、清新な興味を供給してくれることは誠に有難いことである。

大阪の人達はかう云ふ點では本當に幸福である。そうして此幸福は郊外電車の發達に待つ所の多いことを感謝しなければなるまい。

八

町人階級によつて創り出され、町人階級によつて代表された過去に於る大阪の文化は、何と云つても物質萬能の色の濃いものであつて、これを文藝上の作品から見ても、大づかみに云へば現實の色の濃いものが多かつた。關西が生んだ天才の文人、西鶴にしても、近松門左衛門にしてもどこまでもその立場は現實をしつかりとふんまへて、あるがまゝに事實を事實として見るといつた所に力强さがあるのだと思ふ。江戸の作家達が現實にはありうべからざるものを描くことに妙を得てゐたのに較べて、大阪ではすでに元祿の昔から、醜い現實は醜いまゝにそのまゝに描かうとする西鶴を持つてゐたことは確かに一異彩であ

つたと云はなければならない。かうした傾向は何と云つても、算盤をすべてのもと〻し、打算と數理の觀念の發達した大阪の町人の天下にして初めて生れうるものであると云つても差支へないかも知れない。もとより大阪には過去に於て幾多の尊敬すべき學者もあれば、西洋文化の先覺者もあり、一概に、物質萬能主義の都のやうに許し去るのはとんでもない間違ひであることは言ふを待たない。しかしこれを大觀して云へば何と云つても大阪は物質が勝つて精神的なもの〻方が劣つてゐたとは云ひうるに違ひない。これは過去に於る大阪の一般人達の間にどんな文學が一番發達したかと云ふことを見れば一番はつきりわかると思ふ。それは狂歌であり、俳諧である。何れもこれを今日に云ふ所の大衆の文學と云つて差支へないもので、手輕に卑近に誰れにでもやれる所に特長がある。これを云ひかへて見れば、いやに六つかしい學問的のものや、純藝術的なものではなしに、平易なもの簡單なものが流行して來てゐるのである。こ〻に大阪の藝術なり、趣味なりの傾向が一番よく現はれてゐるのではないかと思ふ。

世は明治となり、大正となり、昭和となつてこの方面にどんな變化が來たかと云へば、大阪の文化も時代と共に進み、變つて來てゐることは間違ひない。しかしまだ〱何と云つても東京と較べれば依然として大阪はさうした、學問なり藝術なりの方面からは進んでゐないらしい。趣味の程度から云つても餘程の懸隔がある。もとより東京と較べて藝術上勝つてゐるものもいくらでもあるし、個々の比較をすれば別な批評も下せるけれども大きく一般的に見て、大阪人と東京人との間には藝術なり學問なりへの考へ方に、まだ〱差異があると云ふ他はない。

私はこつちへ來てから、よく生粋の大阪人の若い實業家とさう云ふ話をして見た。するともの〻わかつた若い人達は、私と同じ結論をしてゐる。中にはこんな話をした人もある。戰時の好況時代には一時非常に骨董熱も盛んになつた。しかし大部分の新らしい大阪の金持は、何も過去の偉大な藝術家の作品を好愛すると云ふ意味ではなしに、全く自分の虛榮を滿足させる爲めか、それでなければ矢張り、株や米でも買ふつもりで、買つておけば將來又高く賣れるに違ひないといふ算盤の上から買ひ集めるといふやうな人も多かつたのだと。趣味も嗜好も、算盤からはじきだす。誠に私達としては云ひにくいけれども、大阪の人の氣風はまづそれが多いと云はなければなりますまいと云ふのが、その人達の結論だつたのである。

誠にありさうなことである。恐らくはこれが正直なことばであるのかも知れない。

しかしこれは過去の姿を露骨に評しての言葉である。最近にはこの傾向は大分變つてきてはゐないだらうか。これを實業家について云つて見ると長唄をやつたり、義太夫をやつたり所謂旦那藝の天狗連は東京も大阪も同じやうに多い。けれども東京の方には、藝術の好愛者から一歩進んで作者になつてゐる連中が少くない。鶴彦翁の狂歌は天下に有名であるし、藤原銀次郎氏も銀彦と號して狂歌がうまい。まだ探せば他にもあるのかも知れない。和歌には、すでに歌集を出してゐる米山梅吉氏もあるし、原邦造氏も仲々上手である。門野重九郎氏も詠む、更に小唄の作家にいたつては最近にいたつて多士濟々、月の家光丸事渡邊勝三郎氏をはじめとして、錦谷神田鐳藏氏まで大がいの不良老年組が競爭で作歌をしてゐる、その他俳諧にしろ漢詩にしろ私の知つてゐる作家だけでも隨分少からぬ人數に達してゐる。知らないのにいたつてはどれ程隱れてゐるのだか見當もつかないが、恐らくは皆それ相當に何かやつてゐるのではないかと思はれる。

そこへ行くと大阪はかうは居ない。東京人で、大阪に住むやうになつた人には可成り作家も多いやうであるが、大阪生えぬきの作家を實業界に求めると仲々容易ではない。大阪の人はかう云ふ點では餘りに聰明にすぎ、馬鹿げ切つた藝術境などに遊ぶほど呑氣な商賈人はない。私は最初大阪の實業家の中に何かの作家などを求めるのは愚の極だらうとさへ思つてゐた。ところが近頃大阪每日で財界の人で句作するものを求めて調べたところ實以て一驚するばかりに多士濟々であることを發見した。句にも實に立派な粒が揃つてゐる。或る有名な歌人は、大阪每日へ「財人の句帖」と云ふ續きものが出たのを每日愛讀して、私は大阪には文藝を解する實業家を求めることなどは迚も望めないことだと思つてゐたのに、あれを讀んで見て本當に驚いてしまつた。私達としても敎へられるやうな立派な句を作る人が隨分多い。私は大阪の財界に藝術なしと云ふ考へなどは根本的に間違ひだつたことを發見して、すつかり大阪を見る目が違つてきた。としみ〴〵と述懷をもらした位である。

これは一つの例である。過去に於る大阪は學者を尊重し、藝術を愛好し、富の力を以てそのよきパトロンとなりその進步と向上とを促進した多くの人をもつてゐる、今の大阪と雖も矢張り此點では同じ流れが流れてゐなければならない筈である。たゞこれが形に表はれた上に於て東京に劣つてゐるのは一つは、兩都の性情の相違による所が多かつたのであらう。政治と學府の中心である東京と云ふ都と、商工業の中心である大阪と云ふ都との相違から生れた所が多かつたのであらう。

若い大阪は、これからの大阪は恐らくはこれまでの大阪とは違つた道へ一歩を踏み出すに違ひない。又さうならなければならない筈であると思ふ。大震災を境にして大阪は本當に名實共に大大阪となつてきてゐる。その大大阪にまだろくな圖書館もなく、美術館一つなかつたと云ふのは大阪にとつて決して名擧なことではない。この點に今日では一般が氣がついて來てゐると思ふ。美術館の建設が具體化したのなどもその一證左である。今後から云ふ方面に大阪が目ざめて、現實の歩みを進め出す時に今日までの大阪觀は、一つの轉機を畫する時代に入つてくるに違ひあるまい、私はその時のくるのを今から待ち望んでゐる。

九

とりとめのない大阪觀が、いつか長々しいものとなつてしまつた。大阪を觀る目は人によつてそれ〲違ふであらう。餘りに物質的な、餘りに打算的な點にあきたらない人も隨分少くないであらう。しかし何と云つても大阪には怖ろしい底力がある。見てゐれば見てゐる程、スフヰンクスのやうな不可解な底力が湧き出てゐるのに氣がつく、更にこの底力を生かしてゆく驚く可き進歩的な所がある。夏の日に時計を遅らせて置いて日光の節約をする簡單にしてしかも有効な工風は、日本でこそまだやつてゐないが外國では方々で實施してゐる。あれは最初は英國人が考へたのを、餘り考へ考へして實行しないうちに、獨逸人の方がこれを聞いてサツサと實現してしまつた、それを見て本もとの英國ではあとからノソ〲ついて行つたのだと云はれてゐる。大阪にはこの獨逸人のやうに、いゝとなつたらサツサと實行してゆく勇敢さが多分にある。東京人には利害だけでなしに體面を一所に考へ易い癖がある。體面にかゝはるといふやうなことで利害から見す〲得になることに二の足をふむことも少くはない。その點では大阪は極めてさつぱりして勇往邁進する。帝劇で河合ダンスを見た人は、いかに彼女等が大膽不敵にデニショーンの良い所をとり入れてゐるかに氣がついた筈である。そつくり外國のまねをするなどは些か氣がさして、草書に崩したやうな模倣をする所が東京人の虚榮であり、意地であつて、良いものならば見得も外聞もなく平氣ですん〲取入れてゆく所が大阪人のずるさであり、聰明さである。圓タクにしろ、ダンスホールにしろ算へ上げれば同じやうな意味に於て大阪が東京より率先したものはいくらでも算へることが出來る。

怖ろしい底力と、而して打算に聰明なる勇氣と、この二つを持つて生きてゆく大阪はいろ〲の意味に於て大きな未來をもつてゐる都である、誤れば俗臭紛々たるものとなるけれども、この心を善導するものがありさへしたら、すばらしい仕事をやつてのけるであらう。變りゆく大阪を興味深く眺めるのにひとり私達だけではないであらう。

標札哲學

喜劇標札蒐集

魯庵生

標札哲學と云つたら滑稽だが、標札も多種多様で細かに推究したら標札を通しての一家及び主人の心理や信仰や倫理觀や人生觀を系統的に研究する事が出來る。等しく木の標札でも板目の通つたもの、木目の現はれたもの、粗材、堅材、唐木等種々がある。特に指物師を煩はしたらしい面取の手間の掛つたものもあるし、蒲鉾の板や菓子折の蓋を利用したものもある。其以外に陶札もあり、鑄物もあり、近頃は又陶札の中に豆電氣を仕組んだのもある。更に簡略な間に合はせをいふと、ボール紙もあり笹折の蓋もあり、畫學紙のキレハシや荷札もあり、出す入らすに名刺を貼付けたのもある。

更に文字をいふと眞行草隷の外に甚だ稀であるが小篆もある。さすがに龜版牛骨の文字や籀文に無いやうだがエタイの解らない繪文字のやうなものがある。其外に片假名や平假名や羅馬字がある。之を書いたのもあれば彫つたのもあり、鑄出したのもあり燒付けたのもある。更に又吟味すれば主人公の直筆らしいのもあれば夫人らしい女筆もあるし、書生に書かしたらしいのも子供に書かしたらしいのもある。名人の墨色判斷なら標札を一見して直ちに一家の運命を豫言する事が出來よう。

標札も亦此の如く細かに種別したら數十種が或は數百種に達するかも計られない。此の多種の標札に現はれる倫理觀や人生觀や貧富觀や何や彼やは姑らく措いて、此の種類の頗る多いのに目を着けたのが蒐集道樂者であつて、東京には餘り無いやうだが一と頃大阪で標札蒐集が流行して、到る處の標札が屢々竊まれた。一と晩に門並標札を取られたといふやうな珍聞があつ

た。尤も標札泥捧は昔から珍らしく無かつたが、多くは無益の呪ひやイタヅラであつた。蒐集するといふのでは無かつた。

蒐集家の專ら目指したのは名士の自筆であつた。主人公が必ず標札を書くと定つてゐないから、中には書生の書いた名士の標札を自筆と思つて秘藏するものもあつた。盜まれる方は初めは不良少年か職人のイタヅラと思つて、高が標札だから餘り問題にもしないが、二度も三度も重なると、第一手數が掛るので嚴重に何本も釘を打つて用心するが、どうして釘を抜くか矢張盜まれる。餘り度々なので交番へ訴へても、標札だから巡査も餘り身を入れて犯人を搜索して呉れない。標札泥捧には名士も大に弱らせられた。柿泥捧や瓜盜人よりも始末が惡く處置に窮した。

警察でも全く通り掛りの泥醉漢が酒に醉つての出來心か、町内の若い者が酒代をねだつて斷はられた腹癒ぐらゐにしか思はなかつた。處で蒐集家先生も竊かに採集してはコツソリ樂んでゐた中は無事だつたが、段々大袈裟になつて標札持主の會を開いて各々蒐集苦辛談の氣焰を揚げた。之も一回か二回そこらであつたなら仲間同士の天狗咄でケリが附いたのだが、度々會を重ねたので自然蒐集苦辛談の珍談奇談が外間に洩れて當局者の耳に入つた。

初めは『妙な事が流行るよ、』てな茶咄であつたが、『然う云へば某町の交番では度々口頭の屆けが處理に困つてるさうだ、』と一人の云つたのが口火となつて問題がシリアスとなつた。其中に自分の友人だか親戚だかで現に此の標札泥捧に手古摺つたといふ覺えのある男が仲間に加はつたので益々シリアスとなつて、單なる茶咄が法律問題化した。他人の所有權のあるものを竊取するは價の高下に論なく立派な犯罪を構成するといふ結論は意義なく決定したが、品物が品物だし、目的が趣味の滿足で賣る爲めで無いから微罪不檢擧といふ意見も同時に成立した。だが、品物には價は無いが門標は一家の存在の標識であるから、單なる竊盜よりはヨリ以上に公安を害するといふ説も出て、微罪ではあるが假借なく處罰しなけりやならぬと机を叩いて大いに論じたものもあつた。が、議論に花は咲いたが實際に犯罪調査に着手する段取には進まないで、結局一場の茶咄に終つて問題は有耶無耶に消えて了つた。

が、此の標札蒐集が當局者間の問題となつたといふ噂が洩れると、標札蒐集家は大驚慌を起した。蒐集にもピンからキリまであつて、國家の博物館よりも貴重な大蒐集もあるが、所謂蒐集家の最も樂む處は大骨董商や美術倶樂部あたりから千金を支拂つて買入れるものよりは市井に[illegible]出されない[illegible]

ものや或は無用の廢棄を採集する苦辛である。其故に蒐集家の興味を持つ品物の中には路傍で拾得したのは勿論、社寺や他人の垣の中からコツソリ失敬したものでも法に問はるべき性質で無いものがある。蒐集家は之に馴れて往々法に問はるべきものまでも惡氣がなく失敬する。標札竊取の如きは即ち此の無邪氣な犯罪の一つである。少くも無盡の呪ひに他人の家の鐵瓶や銅壺の蓋を持つて歸るよりも罪が深い。

標札だから路傍に落ちてゐたとは云はれない。所有不明であつたとは猶更云はれ無い。微罪であると高をくゝつても警察へ召喚されて訊問されるのは誰しもイヽ氣持はしないから、警察で問題になつたと聞くとミンナ慄へて了つた。氣の早いものは折角苦辛慘澹して集めたものを人知れず棄てゝ了つたり風呂の下で焚いて了つたりして涼しい顏をしてゐた。標札鬼集は之ぎり沙汰止みとなつたが、一と頃大阪では盛んに流行して、相當地位ある紳士までが夕方から蝙蝠の如く鳥打を眞深にマントに纏まつてコツソリと名士の門に忍んでは手ばしこく標札を剝取つては額に戴いて、『之さへ有りや大願成就……』とニツコリ笑つて闇の中へドロ〳〵ドロツと消えて了つたもんださうだ。ウソかホントか知らぬが七八年前の咄。

門前語

室生犀星

自分は毎年輕井澤で夏をくらすのが習慣になつてゐるが、それは東京にゐるよりも經濟的であるの が重な原因を爲してゐる。何も贅澤してゐる譯ではない。小さな別莊を借りるのだが輕井澤は西洋化の烈しいところで、大抵の別莊は昔の處刑の制札のやうな立札に、ローマ字讀みと日本語とをまぜた標札を出してゐる。ローマ字讀みの標札の出てゐるところは日本ぢうで輕井澤だけだらう。それはその別莊の主人が西洋人と交際でもあれば必要だらうが、さうでない場合は要のないことである。自分は日本風の標札を出して置いた。

輕井澤では西洋のやうに番號（番地）が重んぜられてゐる名前よりも番號さへ云へば買物が町からとゞくことになつてゐる。名前をいふと商家で番地を聞き糺すやうな習慣になつてゐ

る。これも西洋人の感化が永い間に固めた氣風や習慣にちがひたい。單に番號だけで事が便じることは鳥渡便利でよい。

標札に風流がるのは無意味であらう。

標札はそれだけの役目を上品にさへ仕上げてあればよい。文字は相當の美をもつことはその家の興床しさを織するものだが、冷たい陶器や金札や貧弱な名刺などは、自分は野卑の感じがして餘り用ゐたくない。木材で端正に書いたのは見よいものである。

標札に雅號を用ゐることは、醫者が學位を肩書してゐるのと同様、淺薄な感じを與へる。同時に草書で書かれたのも氣障な氣がする。標札には「端正」以外、何ものも必要としない。番地を入れることも既に時勢的に見て當然記さるべきことである。

自分はまだ曾つて標札を盗んで見ようと思ふた程、標札に能書を見たことがないやうである。恍惚として見とれるやうな標札があれば、今の世に道風や王羲之の門前を過ぎるやうな機會があれば或は標札を盗みたい心になるかも知れない。王羲之や道風は面倒くさがつてしまひに標札なぞ掲げないで作だやうになるであらう。

芭蕉は深川の庵室には芭蕉とは書かなかつた。といふのは信じられない事でもない。芭蕉も晩年には既に僞筆が行はれてゐたから、標札は出してゐても盗まれて了つたであらう。今の世に彼の標札があつたとしたら勿論珍らしいものに違ひない。明治の人でも紅葉や子規くらゐになれば標札そのものにすら、何か作と人との悌を多分に感じることができるであらう。やはり標札一枚にも輕蔑できないその家のあるじの心が沁み出てゐるのが本當で、そんなものには無頓着の人があるとしたら、色々な意味で氣樂な世渡りをしてゐる人であらう。

表札はいゝが 人間は？

木村莊八

表札が統一になると聞きます。初めて家を持つて表札を打上げる心持は、誰しも門外不出的だらうと思はれますが、或ひは昔日夢敗。中には名刺を貼り付けて、どうでもいゝと云ふ風にした人もありました。之れにとつては、表札が今更統一されやうと、ちぐはぐであらうと、家は以つて住居し床臥すれば足る。どうでも構はなからうと思はれます。前者にとつては、天下り的の統一令は面白くないかも知れません。

然し第一に事務、第二に又事務とした樣な三菱街あたりでは、却つてなまじ思ひの籠つたらしい表札などは、元々現はれやうせきがありません。蓄犬章と同じ工合にぴし〳〵人家毎を取付けた方が善いと思ひます。第一諸官省會社などには、夙にその表札を、長三洲も一六風もあつたものでない。楷行の別さへあつたものでありません。——と判斷するのが當代の風で、雨露に打たれたる木目に故人の墨痕を懷しむ等のこと、これ等は舊弊の誹りに當るばかりと思ふ。——朝にぞろ〳〵人間が入つて夕にぞろ〳〵人間が繰り出すだけの、その收容物たるに止どまる The Man-Box に適すればいゝだけの問題ですから、机があつて、食堂があつて、大小便が應時處分出來て、雨が洩らなければ足る。その表札とするものは、亦、爾く、わかりのいい、ペンキ屋か何かに書かせれば、結構です。統一は殊に結構でせう。電話帖の部分々々を擴大してピタ〳〵貼付けた樣のもので上等です。

然し必ずしもこの便法を人民一般の家屋に適用すると云ふのは、無慈悲の樣にも覺えますが、——然し頃來は、その人民と云ふ澆も、何れも統一的に敎化されて來る樣ですし、從つて家屋も（何々住宅と稱する邊に見よ。偶々微醉ひなどで古風に歸り來らうものなら、我家がわからぬ。餘りわかり善過ぎて實は最も不可解となる？）豫め統一めきます。例の「簡便で」「實用的な」表札令を津々浦々に及ぼしても、存外大した苦痛は生じないかも知れません。

大きに近頃發生するボーイス、ガールスの新家庭などには、一その方が歡迎されるかも知れません。或ひはこれだけしか知らない御國振りかも知れません。——十月二十七日夕の東京朝日新聞「小話挿話」に曰く

帝展の洋畫裸婦像「靴下をはく女」の前で二人の毛斷ガール小聲で「靴下を第一にはくのが本式なのね」（容世）

穿ち得て、涙の出る樣な明察があると思つたのです。事悉く成可く歷史の淺きに就く。如かず生前一律の表札裡に取片付けて、死んだら、その札を棺桶に轉用してわかり易く簡單に電氣火葬など、さば〳〵としていゝでせう。

○

——諧謔は笑つて済ませますが、只これだけでは済ませにくいのは、大きく云へば、知らず〳〵國風に及ぼす影響です。表札統一の實用便益なるは時に良案の樣なものでせうが、「良案」を招致する理想の、大道よりせず、稍もすると卑近より來る。恐る可しと思ふのです。

學生の登校は凡て和服より洋服が便利です。文字書面の類は筆墨よりペンが便利です。云々——便利でいゝには凡て論はなけれ、「便利でいゝ」たつた本願はこれだけの、理想的卑近から發して、稍もすると恐く近頃は事が定まるのは、その證人には、前に云つた、近頃二十歳の日本人を見ることです。直前に最近十年の國風の卑近化を語らない場合はないとしていゝ、淺ましい、歴然たる末恐ろしいもので、歴史を淺く「明治」には繋ぎ得てゐませう、蓋し遠く殖民性ならぬ傳統に寄托する者は、皆無です。教育にも第一之れが無いので、哀れむ可し、洒然として何にも知らずにゐます。——裸もメめずに靴下を履かう類を親と他人を見さかへない頃年の哀れさが成す業で、近頃の日本人は、一代日本人の奇に墮つる危險に瀕してゐる樣です。

表札は時にどつちでもいゝ、便利な方が不便よりいゝことでしたらうが、人間の同じく便利安直に傾く氣合は、好ましくありません。——と、偶々この統一案が、その依つて來る源は同じ匂ひの一片の現はれに過ぎない場合とすれば、萬例凡て同じ、油断なりません。

標札物語

上司小剣

標札のことは、これまでとても各府縣で、府令とか縣令とかいふものを出して、寸法や書きかたまで一定したものを掲げさせやうとしたが、田舍はとにかく、都會地ではいつも完全に行はれたることなく、うやむやの間に、またもとの如く亂雜(?)となり、『井上寓』とか『村山』とか、姓だけを書いたのや、または名刺を無雜作に貼りつけたのを見るやうになつた。無頓着で、づろうのために、規則を守らぬものもむろん多いが、中にはまた自分の趣味から、建物との釣り合ひなぞを考へて、規則通りのものを出さないでゐる人もなか〳〵多いのである。

個人〳〵の趣味を官權の規則で一律に定めやうとするのは、元來無理なことで、人間の顏をば同じ形に作りかへさせやうと

すそれも似た愚かさではあるまいか。強權に基づく法律といふものによつて、人類が未だ曾つて幸福を得たためしがないと信じてゐる私たち、一つの法律を作ることは一つの失策をくりかへすものだと思つてゐる私たち、一つの法律を廢することは、一つの法律を作るよりも遙かに善事だと思つてゐる私たち、……は、甚だ些細なことながら、今度出た標札一定の東京府令とやらを見ても、ばか〳〵しくてならない。

府令なんぞでなく、ほんたうの法律でも拵へて、守らないものは死刑に處するとでもしたら、みんな驚いて、御規則通りの寸法でキチンと一定した標札を出すだらうが、要するにそれほどの問題ではない。この『それほどの問題ではない』といふ腹が、規則を出した役人の腹の中にもあるから、勵行はなか〳〵容易でなく、一時はやつても、またすぐに逆戻りとなるのだ。

何事も實用〳〵の世の中ではあるが、しかし人間は實用一方で生きてゐられるものでない。顏に眉毛の必要なるが如く、モーニングコートの後のボタンの棄てがたきが如く、無用のもの必らずしも蛇足とは言ひがたいし、或る程度までの不便を忍んでも、趣味性を滿足させたいといふところが、人間のほんとうの生活である。標札の如きも、家や門の建築樣式に連れて、實用以外、必要以上に、一種の技巧を用ゐなければならぬ。それをば、たゞ俗吏の頭から割り出した實用本位、便利一方で、寸法や書きかたまでを一定させやうとするのは、個人の好尚を踏みにじり、趣味生活を脅かすものとも言ひ得る。幾度規則を發布しても、其の當座だけで、いつかは行はれなくなるのは、俗吏どもの考へてゐるが如く、この問題がしかく單純でないことを證據立てるものである。

私が初めて東京へ來た頃には、中央官廳の多くには標札がかかつてなかつた。民衆と直接交渉のない役所には標札が不要となつてゐたのである。霞ケ關へ行つてみても、外務省にだつて、海軍省にだつて標札はなかつた。またあゝした建築物には、實際標札のない方が、奥ゆかしく體裁のよいものである。畏れ多い例を引くやうだが、現今だつて、宮城二重橋の正門や阪下門には何んの標札もない。あれが奥ゆかしいので、あの莊嚴な御門へもつて來て、『宮内省』なぞといふ標札がかゝつてゐたら、甚だ不體裁なことになるのは申すまでもない。曾つて京都御所の建禮門へ『大本營』とした大標札のかゝつた時なんぞ、あまり體裁がよくなかつた。

其の後、俗物の世話燒きがあつて、中央官廳にもそれ〴〵標札を出すことにさせたが、それも別だん一定の形式や寸法のあるわけでなく、各官廳の好みと、建物に對する釣り合ひとによ

つて、横に『外務省』と金文字で大きく現はしたのもあれば、金屬の鑄物で、黒く小いさく『海軍省』と門柱へ嵌め込んだのもある。『司法省』のも小さな鑄物だが、其の隣りに同じ形で『裁判所』とした標札は變なものだ。裁判所にちがひはないが、あすこは大審院と東京控訴院と東京地方裁判所との三つが赤煉瓦の大建築の中に同居してゐるのだから、やかましく言へば、正式に廳名を現はした三つの標札がなければならぬわけだ。冷やかな法理一點張りで人に臨むところだけに、少々おかしい。其の他東京府廳や東京市役所の如きは、檜の大板へ黒痕淋漓と書家の揮毫したのを掲げてゐる。貴族院と衆議院とも、開會中だけは、有名な書家の筆になつたものを更らに漆か何かで彫り込んだ木製の大標札を掲げてゐる。參謀本部の標札も鑄物の小さなのであつたと思ふが、こんなところの標札は、民衆にとつて全く無用だ。

以上、各官廳ともまち〳〵に、各自の好みによつて、標札をかゝげてゐるが、これはなか〳〵よいことで、(中央官廳は標札のない方がよいけれど)一定の寸法や書き方を强ひないところが、面白いと思はれる。然るに何ぞや、個人の住宅に限つて、寸法から書きかたまでを一定させやうとするのは、いかにも俗吏の發案らしく、少し大袈裟に言へば、個人の好尙を蹂躙し、趣味生活を脅かすものである。

要するにかういふことは、わかりさへすればよいのを限度として、あとは個人の好みに從ひ、家屋に對する調和に任すべきものである。現に私なんぞは苗字だけを書いた標札を永年掲げてゐるが、類の尠い姓だから、今まで一度も人に不便を感じさせたことはない。

私は元來、標札のことなんぞに可なり神經質で、自分の家のはもとより、他人の家の標札でも、曲つたり、釘がぬけかゝつたりしてゐると、ひどく氣になる。曾つて近所の醫者の家の栂の標札が斜めに曲つてゐたので、そこを通るたび氣にかゝつて、神經に病み、今になほすか、なほすかと思つてゐても、醫者先生無頓着とみえて、一向なほさない。さりとて、知りもしない家の標札を白晝おせつかいに、コッチからなほしにも行けず、夜の更けるのを待つて、私はひそかに金槌と釘とを用意し、泥棒にでも入るやうな思ひをしながら、おッかなびッくりで、そッと其標札をなほしに忍び寄つたことがある。

標札の劃一

村山知義

標札が劃一されることになつた。私に意見を徵されたのは多分、美術家――個人の趣味をすべてに增して尊重する者と解されてゐる――としての私が、これを不滿て思ふだらうと考へられたからではあるまいかと思ふ。

所が私は無論大賛成である。これはもつと早く當然さうなるべきであつた事が起つたに過ぎない。それ所か、何寸以上といふやうな漠然としたことでなしに、縱何寸何分、横何寸何分ときつぱりきめてしまつたらもつとよかつたらうと思ふ程である。

最高の形成藝術は建築である。今迄象牙の塔に籠つて、實際的關心のあるものは藝術品であり得ない、などとお高くとまつてゐた所謂純正藝術は「缺くべからざる惡」とみなされて、ルネツサンス式の誕生以後、最近に至る迄、殆んど何等のステイルをも生み出し得なかつた程閑却されてゐた建築のために全く押しのけられてしまつた。

(標札といふやうな小さな事のためにこんなことから說き出すことを、讀者よ、笑ふ勿れ、標札の劃一への反對は、藝術といふものの解釋の根本的の誤りから來るのだから。)

で、建築は我々の共同生活を可能にし、仕事の能力を高め、機械文明のあらゆる成果をとり上げ、我々に休息の場所を與へ、その上その宏大な量と面と運動とに依つてあらゆる新時代の美の表現に可能性を與へる。

建築は――住宅を特に問題にして――箇々の家から共同建築へ、更に都市構造へと發展する。その合言葉は、簡單、明瞭、清潔、能力的、統一、均齊等々である。そしてさうあることこそ美なのである。

標札も亦建築の一部であり、從つてそれの法則は建築の法則である。

標札の使命は郵便配達人と訪問客とに、その建築の中に住んでゐる人の名前と、その建築の建つてゐる場所の名前とを告げることである。この使命をよく果さない標札に美はあり得ない。そしてこの使命は、箇々の標札が獨立して勝手に果し得るのではなくて、ある廣い區域の標札全部が協力して初めて果し得るのである。

かくて標札は統一されなければならない。

又、一方から云へば、箇々の標札が勝手に個人的趣味と實用性とを野合せしめた所に美があるのではなくて、人間の共產共存的生活のために協力し、それを象徴する所に美があるのである。

共同建築が發達してゐる所では、標札もまた美事に統一整頓されてゐる。例へば伯林では多くの場合、五寸四方位の銅板に、同じやうな書體で彫られてゐた。

日本程、共同生活の習慣なく、共同建築が行はれず、從つて標札が不統一の國は無い。全く醜である。

しやれたつもりで油繪具で強いて不明瞭になすくつたのがあるかと思へば名刺一枚で濟ましてゐるのもある。浮彫にした妙にひねくれたのもあれば、大きな白い瀨戶物のもある。姓だけで名の無いの、姓名だけで所番地のないの、ローマ字、片假名、平假名、漢字、楷書、行書、草書。

極端な亂雜であり、極端な個人主義的生活態度の發露である。

標札の劃一は強制しても何の害もない。それ所か、當然強制すべきものである。

日本民家史

藤田元春著

濱田青陵博士は「日本民家の研究は、日本の社會、日本民族の歷史美術等あらゆる日本の人文を研究するものに取つて度外することの出來ない大切な分野であると同時に、又此の研究の結果こそ日本民族の現在並に將來に於ける住宅建築を指導する上に、最も適切なる基礎的資料を與へるものである。……我國學者の間にも漸く日本民家研究の興味が湧いて來たことを知り、非常に嬉しく感ずるのであり、將來益々此の方面の研究が進んで、國民自身の美術、庶民の建築が、上流貴族の美術建築と同樣に、國民の間に理解せらるゝ日の來ることを希望して已まない次第である」と序し著者（三高教授）の研究的態度と本書を賞讃してゐるが、寔に近來稀に見る好著として一般讀書界に推奬する。（定價八圓八十錢　東京神田駿河臺北甲賀町二三　刀江書院）

播磨風土記物語

松岡靜雄述

世界最古の人文地誌の一である風土記の研究が從來多くは文字の註釋に終始してゐるに反し、本書は民族誌學的考察を盡した新研究で三上博士の序の如く、古書の取扱ひに就て專門家の好參考たるのみならず又一般讀書子も充分興味を唆かされる好著である。尙史學、言語學、人類學、土俗學等にも得難き考證を提供せる貴重な研究である。（定價一圓八十錢　東京神田駿河臺北甲賀町二三刀江書院）

支那食人考

長永義正

色食の二道は生物の本然である。萬物の靈長である人間にとつては本然であるのみでなく喜悦と懊惱の源である。この源から美醜、哀樂、常異の變化が流れ出す。

孔子は『吾未だ德を好むこと色を好むが如くなる者を見ず』と云つて居る。史記に據ると孔子が天下を巡遊して居た頃、一ケ月餘りも衞の國に足を停めて居た。ある日、衞の靈公は夫人と同乘し、すげなくも孔子を次の車に乘せて街を通つたことがある。孔子は車のなかで、揺られながら、靈公の妻ノロに當てつけられた。この時、孔子が云つたといふ『吾未見好德如好色者也』の言葉には人間本然の力强さに對する孔子の驚異が現はれて居る。また、單に驚異のみでなく語調には絶望をさへ覗はれる。

孔子は靈公の醜惡にあきれて衞を去つてしまつたが、この言葉はひとり靈公に對する絶望ではなく全支那人に對する孔子の棄白科であるとも思はれる。支那人が今日までに、色道の上に築きあげた燦然たる實踐的功績を知るものは、孔子が二千四百年前に懐いた驚異と絶望が、決して無駄なものではなかつたことを肯定するであらう

人間本然の他の一相である『食』に就ては、孔子は不覺にもさほどの驚異と絶望を感じて居ない、論語の郷黨編に彼は周到なる食養生を説いて居る。曰く『色の惡きを食はず、臭の惡きを食はず』『飪を失へるを食はず』『時ならざるを食はず』更にまた曰く『割正しからざれば食はず』と。孔子の言を遵らんとすれば公設市場の牛肉などはとても喰へない程に嚴格を極めて居る。

この孔子の飲食に對する訓誡は彼が在世の中に無殘にも破ら

れて居る。孔門の中、剛勇をもつて聞えた子路は孔悝の難に逢つて、衛に死んだ。子路の死は孔子の逝つた周の敬王四十一年、魯の哀公十六年の前年であるが、子路は尸を醢の材料とせられて居る（美味求眞）。醢とは乾肉をきざんで麴、鹽、酒等で漬けた所謂しほからである。子路のしほからを誰が喰つたか文獻の徵すべきものがない。

色に於て絶望した孔子は食に於て弟子、子路を喰はれて全く裏切られてしまつた。孔子を平氣で裏切る支那人である、孔子以後の賢人が何を說うと構はない。五常人倫の道は口舌と文字に殘して色食二道に猛進する。

色は暫くをいて、彼等が食に猛進して生んだ變化に『食人』がある。支那に於ける人間とも喰ひは次の數個の場合がある。（A）人肉に對し特殊の嗜好を持つ者が常食する場合。（B）土俗の風習及迷信に據つて食人する場合。（C）饑饉戰爭等の非常時に食糧として人肉を採る場合。（D）藥用に供する場合。（E）敵愾心から特定の個人の肉を喰ふ場合。

A　嗜好に依る食人

史記の齊太公、世家第二に、管仲の臨終を見舞つた桓公と管仲の談話が出て居るが、正義の註に依るとその經緯はこうである。

臨終の枕頭に立つた桓公は『何か寡人に敎へのこして置くことはないか』ときいた。管仲は『願くば易牙と豎刁の二人を遠ざけて下さい』と云つた。桓公はけげんな顏をして『易牙は自分の子を烹て寡人を快くした者だ、豎刁は自から宮（去勢）して寡人に仕へて居る者だ、のに尙この二人を疑はねばならないのか』と反問した。

管仲は『人の情としては子を愛さないのではない、我身を愛さないのではない、易と豎の二人はその情を忍んで居る。かやうな二人は君を愛し、君によく仕へることは出來ない』と答へたので桓公も易、豎の兩人を逐放した。兩人の去つた後、桓公は食を甘しとせず、心怡とせず、三年を經過したが、管仲の訓を破つて再び易豎を呼返した。桓公病臥のときこの兩人は亂を作した。桓公は『嗟、聖人の見るところ豈遠からざらんや』と慨歎し、仲父に知らるるのが恥しいからと云つて衣袂を被つて悲慘な死をとげた。易牙は美食家桓公の意を迎へる爲め自分の子を殺し、烹て喰はした男である。人肉料理人易牙の去つた後、三年食を甘しとしなかつた桓公はまづ人肉の嗜好者とみなくてはならない。

三國時代の呉に高澧といふ武將が居た。酒を好んだが人を殺してその血を啜ることも嗜であつた。日が暮ると必ず自宅の前にがんばつて、その附近を徘徊する行人を掠めては殺し、その血を吸ひ肉を喰つて居た。

前秦の末に苻登と稱する豪族が居た。前秦中興の祖である苻堅の孫族で、苻堅の子、苻丕が西燕に破られて走死した後、南安（甘肅省の隴西縣）に據つて姚萇と爭つて居た。苻登は姚萇の子姚興に殺されたが、この苻登が戰場に臨むと必ず敵を殺して『熟食』と名づけて居た。部下の將卒に對し苻登はいつも『お前らは、朝に戰へば夕には必ず飽きるまで肉を喰ふことが出來るんだから、決して饑い思ひをせねばならんなぞと心配するなよ』と勵して居た。部下の將卒は苻登の言を聽いて、夕には死人の肉を飽きるまでむさぼり喰つた。是などは、敵の人肉が食料品として兵站部の糧食準備の中に繰込れてあるのであらうから（C）の場合には屬さないと思はれる。

後周の嶺南の首領、陳大光は或る日、酒席を設けて客を招待した。一人の書生に酌を命じたが何か粗相したものらしく陳大光の激しい怒を蒙むつた。光はその書生を屋外へ曳出し殺してしまつた。須臾して、その書生の人肉はどろ／＼になるほど煮融れて客に饗應された。書生の肉であることを知らない客は、舌鼓をうつて賞美してが、引出物に書生の手二本をニユウと出された時、客は身毛をよだてゝ懼れた。客は指を喉にさしこんで折角の御馳走を吐いてしまつた。

隋の時代に朱粲と呼ぶ匪の頭目が居た。その部下は二十萬と稱され淮、漢の間を剽掠してあるいた。朱粲は食糧が乏しくなると部下に婦人嬰兒を煮て喰ふことを教へ『、、、、、、、、、、、、、どこの國を歩るいても人間の居ないところでない限り、食糧に困るやうなことは無いから安心するがよい』と放言して居た。朱粲の軍中には二百石から容れられる大釜を据へ、人肉を煮ては軍中の飽食にまかせた。後に朱粲唐に降つたが、唐の段確と云ふ男が醉餘朱粲に『卿は人間を喰ふさうだが人肉の味はどんなものだね』と揶揄ひ半分にきいた。『そうだね』と朱粲は一寸答に躊躇つたが、『君のやうな醉ばらいを喰ふ味はまあ精粲肉（酒滓につけた豚の肉）のやうだらうさ』。と、——朱粲は段確を殺して煮て喰つてしまつた。

深州に諸葛昂と云ふ男が居た。豪俠の性を以つて廣くきこえ

て居た。ある時、渤海の高瓚はその俠名を慕つて昂を訪ねた。昂は高瓚のため酒宴を設けて歡迎し、愛妾に命じて行酒をせしめた。行酒をして居た愛妾が故なく笑つたといふので昂は妾を叱つて酒席から退けてしまつた。しばらくたつと、その妾は頰に脂粉をつけ、身に錦繡をまとひ、銀盤の上に坐つて再び出て來たが、酒卓の中央に置かれ、銀盤には肉を割く小刀さへも添へられてあつた。妾の身は蒸されてあつたのだ。昂は妾の裾をからげて腿の肉を、、、、これを瓚に喫した。酒席に侍つて居た人々は皆この慘らしさに目を掩ふたが、昂は平然として妾の胸をうちひろげて乳房の間の肥えた肉を撮んで、、はじめた。昂は飽きるまでは、、めなかつた。

唐の武后の時、杭州の臨安に薛震と呼ぶ小役人が居て好んで人肉を喰つて居た。臨安の寺に詣る人を泊めては酒を獎め、醉した上これを殺して居た。人骨は水銀をまぜて煮ては銷して居たので、永く人に知られなかつた。後に、自分の婿を喫らうとした。これを知つて婿は驚いて、牆を踰へて逃げ出し縣令に告げた。縣令の取調にあつて薛震はすつかり自白したので、その旨を中央へ奏達した。勅命に依つて一百の杖刑に處され、薛は刑死した。

張茂昭は鎭の長となつて居るとき頻りに人肉を啗んだ。彼が地方の軍營から京に還つた時、同僚の一人が「尙書は鎭に在つたとき人肉を好まれた由ですが、眞實ですか」と聽いた。張はこの疑問に輕くうなづいて見せ「人間の肉は腥いがね、爭つて喫に足るものだよ」と笑つて云つた。

唐の末、僖宗崩じて昭宗が宦官どもに擁立せられた後、天下大いに亂れた。藩鎭は各地に割據し政權の爭奪に寧日のなかつた頃、蔡州の秦宗權も亦近隣の攻略に狂奔して居た。この秦宗權は行軍にあたつて未だ嘗つて食糧を携帶したとがなかつた。ただ僅かに食糧として鹽漬にした人間の尸を携へるぐらいのものであつたが、その鹽尸も、ゆく先々で敵を殺して補充して居た。

五代の萇從簡は陳州の人で屠羊を家世として居た。後唐の莊宗にその勇を愛され、遂に左金吾衛上將軍の榮職にまで累進した。六十五才で卒したがその時大師の稱號をすら贈られた。萇は人肉の愛好家で、嘗つて河陽忠武、武寧等の諸鎭に在つた時、いたる處で、、、、、、、、、、これを喰つて居た。(五代史雜傳三十五)

宋の王繼勳は孝明皇后の母弟であるが太祖の時屢々貶せられた。後に右監門衞率府副率として西京に居た。彼の殘暴はとてもお話にならぬ程で　市民を脅しては子女をうかゞひ之を給使した。幼少で意の如くならないものは殺して之を喰つた。太宗が即位したとき、會々之を訴へる者があつたので王は洛陽で斬罪に處せられた。

王彥升は胡人(胡虜を稱する。所謂北狄である)を俘獲すると、先づ酒宴を設けて大いに飲む。醉ふと胡人の耳を手でひき裂いては口に入れ、咀嚼ながら盃の酒を徐ろに乾した。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、彥升は自若として談笑して居た。斯くして前後數百人の耳を喫つた。

交趾の儂智高は安南に於て大曆と大南國の二國を建て、共に宋の爲めに失敗した男であるが、彼の母阿儂は慘忍を以つて聞へて居た婦人であつた。阿儂は小兒を嗜んで、、、、、、、、、、、、、、、、、、食膳に供して居た。

紇石烈(漢姓は高なり)牙虎帶は金の武將で、嘗て淮、泗を鎭め、屢々宋兵を破つた勇士であつた。ある時、諸將をあつめて宴を催し諸將の夫人らも席につらなつて居た。皆が一緒に猪肉饅頭を喰つて居るとき一將の妻は平素から猪肉は喰はないと言つて、その饅頭に手をつけなかつた。之を知つた牙虎帶は左右の者に命じて別の饅頭一皿を持つて來さした。須叟して、食事がすんだので、牙將軍は猪肉を喰なかつた一將の妻に『お前の喰つた饅頭は何の肉だと思ふね』とたづねた。

『あなたが羊肉の饅頭とお易へ下さつたので、美味ございましたわ』と一將の妻が答へるのを待つて牙將軍は笑ひながら、『猪肉を喰はないと云つて人肉を喰つたね、お前の喰つたのは羊肉ぢやないよ』と云つた。之をきいた一將の妻は折角のお馳走を嘔いた上に、疾を得て數日間寢こんでしまつた。

宋は屢々金の爲めに侵略せられたが、高宗の時に金人が江南を侵したことがある。登州の范溫は義兵を率ひて海路錢塘に渡つたが、食料に充てる爲め持つて歩るいたものは人間であつた。二本足で歩るく人間を羊に倣つて『兩脚羊』と稱して居た。兩脚羊のうち、老瘦の男子を『燒把火』と呼び、若い婦人を『美羊』と稱し、小兒を『和骨爛』と唱へて居た。

陶九成に據ると、淮右（淮水以西の地を淮西とも淮右とも稱した。元史地理志には元の十三年、淮西に總管府を設けた、と）地方に居た軍隊は好んで人肉を喰つた。小兒を以つて人肉の最上なものとし、婦女は之に次ぎ、男子の肉は下なるものとされて居た。彼等の採つた人肉料理の方法は、、。、、、。

隋の煬帝の有名な運河開鑿の工事中に起つた出來事を記した開河記（唐の韓偓撰）に食人の一挿話がある。もとより、小說のことであるからどの程度まで信じてよいのかは判らない。寧陵の下馬村に陶椰兒といふ者が居た。その一家は巨富を擁して居たが兄弟は皆兇惡だつた。祖父の墓が、こんど開鑿されやうとする運河から二丈ほどしか離れて居ないので、發掘されることを心配して居た。そこで、、、、、、、、他人の孩兒を盜んで、殺した上、、、、、、、、、、、蒸て開河都護の麻叔謀に獻じた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、叔謀はすつかり好になつてしまつた。椰兒を召で詰問すと、椰兒は醉に乘じてその實を泄した。その後、椰兒兄弟は度々孩兒を盜んでは獻上し少なからぬ貢物を得て居た。このことを聞き知つた窮民は競つて孩兒を竊んで獻上し褒美を貰ふやうになつたので、襄邑、寧陵、睢陽の附近では孩兒が數百人も失くなり、恨み泣く聲が朝夕絕えなかつた。

虎賁郎將の段達が中門使となつて四方からの訴を聽く役をして居た。叔謀は家僕の黄金窟に命じて段達に金一盛を贈らして、凡そ上奏して子を食ふことを訟へた者は、その詞の理非を訊ず四十の笞刑に處し、洛陽まで送ることにした。令狐達がこの食人の事實を知つて秘かに人に兒骨を拾はせると、數日たらずして車に一ぱいになつた。この有樣で、市や村の子供のある民家では木の櫃を作り鐵で合せ目をかくし、夜になれば子供を櫃の中に入れて家內中の者が燭をつけてその櫃を守り、朝になると櫃を開いて子供の顏を見てお互に喜びあつた。

金臺浪墨卷七に死人の腸と胃とを煮んで喰ふ者のあることを記して居るが、その時代と場所及人名を惜しいことには明記して居ない。

B　迷信と俗習に依る食人

張華の博物誌巻二に『越之東有駭沐之國。其長子生則解而食之。謂之宜弟。』とある。

次に生れて來る弟の爲めに長男を食つてしまうとは頗る風變な風習と云はねばならない。

唐の李廓は潁州に於て火光賊七人を捕獲したことがあつた。賊等は前後數人の人を殺し、殺せば必ずその肉を喰つて居た。廓は何故に人肉を食ふのかきゝ質した。

『、、、、、、、、夜、人家に侵入るとき、その家の人々は必ず昏睡して居るか或るひは魘されて目をさまさないものだと、ある巨盗に敎へられて以來、人肉を喰ふやうになりました』と賊の首領とも思はれる一人が答へた。

桂州の婦人は子供を生むと、お產のとき、その衣胞をとつて置き、周りについて居る穢れたものをよく洗ひ落し、こまかく切り、五味を加へて調味する。斯くして出來上つた衣胞の御馳走は親しい友達の間に贈られる。

宋の仁宗、嘉定の戊寅の冬、廣西の諸司から欣州の知、林千之の食人の事が奏上せられた。ある道士が、林千之に『人の筋骨を强くするには、、、、、を食ふに限る』と敎へた。爾來、林は、、、、、、捕へては殺し腊（薑、桂皮などを混へて乾し固めた肉）にして常食して居た。そして、林は人肉の腊を地鷄、地鴨などと稱して洒落て居た。

C　饑飢戰爭の食人

史上最古の記錄として「宣公の十年、楚人宋を圍みし時、城中食盡き子を代へて喰ふことあり。」又齊の閔公の二年狄人衞を伐ち、懿公を殺して其の肉を盡く食ふ」と美味求眞では左傳を引て居る。

晉の趙思綰は魏州の人で昌軍節度使である。魏の高祖が崩じて隱帝が立つたとき、李守貞、王景崇と共に逆反を起した。隱帝は郭威をして諸將を督せしめ、先づ李守貞を河中に圍ましめた。數ケ月たつて趙思綰の城中も食糧が缺乏して來たので、そろ／＼人を食ひだした。趙は城中に於て兵を犒ふ宴會を催すときは數百人を殺して御馳走したが、その庖刀の使ひかたは、、

、、、、、、、、、、、、、、、、。また、趙は人間の臍を別にとつて酒と一緒にこれをのんで『人間の臍、一千を喰へばその勇に敵する者なきに至るであらう』と豪語した。（五代史雑傳五十三）然し、趙思綰の喰つた人の肝は六十六個であるとも云はれる。思綰は後に郭威の爲め平げられた。

宋の靖康丙午の年、金の侵略を蒙つた。この後、六七年間と云ふものは、山東、京西、淮南の各地は文字通り荊蘇千里と云ふ荒亂の狀態であつた。従つて、一斗の米は數千錢に昂騰し、盜賊と官兵は呼應して人民を虐殺した。それのみでなく到る處に食人が行はれ、人肉の價は犬や豚より安價であつた。よく肥つた男一枚が僅か十五錢に過ぎなかつた。男一枚と云ふのは人の體軀をそのまゝ曝して脯にしてあるから一枚二枚と數へたものらしい。

明の末期は連年流賊の横行と饑饉に人民はいたく惱され、到處に食人のことがあつた。特に崇禎十五、十六の兩年は河南、山東一帶に迯る〳〵饑饉があつて民間に人肉を喰ふとが盛んに行はれた。この頃は、どんな親しい間柄でも容易に他人の部屋へ入らなかつた。それは油斷をして居ると餓の爲め見境も無く、殺して喰はれることを怖れたからである。禮儀正しい家庭では老幼男女相譲つて喰はれ、また喰ひもしたが、多くは强食弱肉が行はれた。甚しいのになると我子を殺して喰ふ母があり、街に出て子供を誘ひ出し、家へひき連れて殺す婦人さへもあつた。また、人肉を麵包の中へ入れて賣出すものもあり人肉の醃を騾馬の肉だと僞つて賣るものもあつた。山東の某地では公然と肆を開いて、一斤銀八分で人肉を賣つて居た。そして人肉を『米肉』と稱して居たが、唯一人として之を怪しむものがなかつた。

この頃は、行商に歩るく商賣人は必ず數百人が一隊となつて往來した。獨りで歩けば必ず饑民に捕はれた上、喰はれてしまうからである。また、軀の肥つた人は數日間節食し、瘦せて骨立たなければ決して外出しなかつた。餘り肥つて居ると食慾をそゝる危險が伴ふからであつた。丁度、この頃に船頭の某がある市を通ると自分の妻を率いて賣りに出て居た男があつた。船頭は婦を買うと思つて居た時であつたので『いくらだね』ときくと、銀三錢と云ふので船へ錢をとりに還つた。錢を持つて再び行つて見ると、既にその婦は肉肆に賣られ、、、、、、、、、、、、。船頭は仕方なしに別の婦を買つて歸つた。

その船頭の買つた婦はこんな話をした。村に一人の幼女があつて隣家へ養女に貰れて居た。肉づきのよい娘であつたので養

家の姑は殺して喰はうとした。娘は驚いて實家へ逃げかへつて斯々の次第と物語つた。さうすると、實父は『こんなに肥へて居る娘を、他人に喰はれるのは如何にも惜い』と云つて、自ら娘を殺して煮て喰つてしまつたと。

崇禎年間の連荒には娘を喰ふ母親、幼い男の子を喰ふ父親、母を喰ふ子、なぞ此處かしこで生地獄を現出した。

明末に李自成が汴梁（河南省開封縣）の城を圍んだ時ほどの悲慘な籠城は少なからう。汴の白愚の『汴圍濕襟錄』を見ると當時の模樣が詳かに記されて居る

李自成の汴梁包圍の第三回目は四月から初まつて居る。逆闖（李自成の軍を闖と稱する）は野の麥を切棄てゝ遠大なる兵糧攻に着手した。城の內外の交通を斷ち、逃れ出るものは捕へて手足耳鼻を切すてた。斯して二ケ月、六月には食糧の缺乏を來し、饑民救濟の爲め官の出す粥一杯を得んが爲め日々數百人の人が踏殺される狀態となつた。八月になると饑死するもの續出し、樹の皮、草の芽はもとより糞の中に居る蛆まで喰ひつくされ、老幼の形骸は鬼のやうに、氣息奄々と僅に生きて居るのみであつた。次で、食人の修羅場が出現した。强壯の者は行人を掠めて喰つた。白晝に通行する人もなくなると、夜、人家を襲つて人肉を得て歸るといふ始末で、人々は先づ自家の僕婢を殺して喰ひ、次にその子を殺して喰ふと云ふ有樣であつた。

ある日、汴梁城內の推官、黃澍の役所で一人の死人が出來た。この死人の肉を一人について一斤宛に分けたが、ある狡猾な下僕が倍の二斤を貰ひたいと肉を切つて居る男に要求した。『そう澤山一人に遣れるものか』とはねつけられたので狡猾な下僕は『よし、くれなけりや、お前の頭をたゝき破つて腦味噌を喰つてしまふぞ』と怒つて見せた。人肉を切つて居た男は『兄弟！そう怒るもんぢやないよ、サア二斤分遣るぜ』と肉切を放り出した。下僕が『こりや、忝けない』とお辭儀をしながら肉片を拾ひ取らうとした時、肉を切つて居た男は、やにわに立つて斫で下僕の頭を叩き割つてしまつた。この有樣を眺めて居た人々は、曩に貰つた人肉をいそいで喰ひ初め、たつた今、殺されたばかりの下僕の肉も群りあつまつて喰つた。

推官の黃澍はこれを聽いたとき、『さあ、俺を殺して、お前等の腹に飽きるまで喰つてくれ』と天に跪いて怒號した。皆のものは、この長官の怒に怖れて謝罪した。黃澍の家族は外で食人が行はれて居ることを一向知らなかつた。豚や羊の肉と思つて平氣で喰つて居たが、或るとき肉包を喰つて居ると、口の中で、いかにもこはばる物があるので吐き出して見ると生々しい瓜の

ついた指先であつた。これを見て驚のあまり家族の一人は病死してしまつた。九月の半になつて賊闖は汴河の水を塞いて、陰雨のあとの河水を汴城へ流しこんだ。大部分の住民はこの水の爲め魚腹に葬られたが、千餘名の强壯な者らは城壁や鐘樓に避難した。この避難した者の間に、また弱肉强食が行はれた。もとから屠業をして居た、鄭姓を名のる二人の男は數人の仲間を作つて孤弱な避難民を殺し初めた。彼等は丁度、豚を屠るやうに泣き叫ぶ人間を解いては鍋に入れて煮た。この人肉の肉汁は栰を組んで、此處彼處と高いところを擇んで避難して居る人々に賣られた。彼等の賣つた人肉の價は一斤數兩の高價で、數日のうちに數百金を儲けた。生き殘つた人々も、自己の生存の爲め、この驚くべき商賣を止めやうとはしなかつた。

崇禎十五年、蘇州に大饑饉があつた。蘇州城の內外を問はず皆人肉を食料とした。道路に死ぬ者があると、之を埋葬せず、秘かにその肉を割いて口腹を滿して居た。官憲は食人を嚴禁したが、何んの効果もなく、依然として人肉が喰はれて居た。胥門の外に人肉店があつて、毎日一人の壯丁を殺して食料供給に當つて居た。この時の人肉市價は、五六歲の少女が一萬文、少年が八千文で、三十歲以上の男女の肉は一斤三十文で切賣されて居た。

淸の順治九年、李定國が新會を攻めた。城中の將卒は久しからずして食糧に窮し人肉を喰ひ始めた。初め新會の城門は固く閉されて居た。城外の住民數百名は入らうと思つて縣令に入城の許可を仰ひだが許されなかつた。守備の將卒は、これをきいて、この物資缺乏の際にあたつて十日の糧を失ふとは何事だと、縣令に迫つて彼等を入城せしめた。入城を許された數百の鄕民が守備の將卒の口腹を滿したことは當然であるが、新會八ケ月の籠城に一萬人近くの人間が喰はれた。

事が定つて後、守備の將卒が城外を步るくとうや／＼しく禮拜する者があるので、何の爲めに、そう鄭重な禮拜をされるのかと聽けば、『私の父母妻子とも皆、公の腹中に葬られて居り、墳墓を作らうにもつくりやうがない、それに寒食（淸明節の前二日）も近づいたことだし、今のうちに是非、公の腹を一拜して置きたいと思ひまして』と云はれた。

その後、淸代には久しく太平の日が續いて食人の事はあまり文獻に記載されて居ないが、太平軍（長髮賊）が起つて以來、明末と同様の景象を再び見るに至つた。

同治三四年、安徽の南部に到る處、食人が行はれた、初め一

斤三十文位であつたが漸騰して一斤百三十文になつた。句容、二溪地方では一斤八十文、人の骨髓を兎油と名づけて一斤二十文で賣つて居た。江陰、無錫方面では少女の腿肉一斤百文、乳房一斤八十文、臀肉一斤六十文等で、男子の肉は上下を別たず一斤五十文の値段であつた。女子の陰戸と肛門、男子の陽具と穀道(後陰)及び頭、足、手掌等は喰へないので之を棄てたが、道の兩側は累々として、之等の廢物が堆積されて居た。

江陰の金武祥に石溪の食人を歎くと云ふ一文がある。悽慘の情がよく現はれて居る。

兵塵漲空不見天。　荒郊寂歷無炊煙。
饑民袖底藏白刃。　日斜潛倚和垣邊。
弱女伶仃來乞食。　張口無聲面漆黑。
饑民突前白刃露。　女言未畢身已仆。
自憐此軀饑不肥。　肉少未足充君飢。
不死道路即刀頭。　今得早向黃泉歸。
君不見豺虎不忍殘其群。　世間即有人食人。

D　藥用の食人

藥餌としての食人は支那に決して珍らしくない。不治の重病も人肉を以つて癒し得るとする迷信が古くからあつたらしく、廿四孝に現はれて居るやうに、尊屬に肉體を提供することが一種の美德とされた。美德として認められて居る肉體の提供も一面からは食人たるを免かれない。この食人は暗に獎勵されて來た。民國の今日ですら、支那新聞には腕の肉を、腿の肉を割いて瀕死の父母に捧げる孝子孝女の美談を見ることが稀ではない。

次に、奇怪を好む支那人が保健保腎等の爲めに人肉を藥餌とする場合である。如何なる病氣に、人肉を如何にして用ひるかと云ふことは茲に記すことを憚るが、人間を藥餌とする場合は人肉の特定の部分が多く用ひられて居ることを注意せねばならない。また、道教の現世的墮落を最も端的に現はして居る閨丹術の如き人體の排泄物を藥用に供する場合もある。從つて、藥餌としての食人は人肉の全部に亘るのが甚だ少ない。

清の順治年間に安邑の知縣に鹿藎心と云ふ者が居た。痿痺(肢體のしびれる病氣)の疾にかゝつて困つて居たとき、自ら扶乩術の方士、劉海蟾と稱する男が、小兒の腦味噌を喰へば癒ると教へた。扶亂は扶乩とも云ひ呂純陽を創始者とする道教の一分派で、符を作つたり咒をしたりする邪教の一つである。鹿はこの言葉を信じ、高價を拂つて小兒を購ひ撃殺して喰つ

た。幾人を殺して、喰つても病氣は癒らなかつた。鹿は方士に乱仙（降神術のお告の類）を請ふたので、方士は『生の腦味噌を喰はねば駄目だ』と敎へた。小兒の頭を鑿つて鹿は腦味噌を吸つた。數人の小兒が鹿の爲め生きながら藥餌にされたが病氣は癒るどころか、益々惡化して遂に死んだ。この事が世の知るところとなり方士は刑に處せられた。

清末の光緒三十四年、江蘇の崇明縣に一人の老儒が居た。家業豐に、姫妾前に滿つと云ふ裕かな暮し向であつたが痿痺で振はなかつた。この老儒も誤つて小兒を喰へば强壯となると云ふ人の言を信じ、金を惜まず、百方手をつくして小兒を買もとめ、蒸して喰つた。食卓につくと箸と刀を交ぜ用ひ一度に一人の子供を喰つてしまふことがあつた。斯して、漸く殺す子供の數が增てゆくと、喰ひ切れない者は糟づけにしたり醃にしたりして、十數甑に納めて列べて置いた。喰ひたくなると甑から取出してはおもむろに味つて居た。この事が官に知れ、獄につながれたが一ケ月も經たないうちに老儒は瘦死してしまつた。

腿や臂の肉を割いて藥餌に供した事例は枚擧するに暇の無い程であるがサンプルとして手近にある清末の蕉廊脞談から一例を引いて置こう。

吳廣文の妻が臂を割いて姑を治療した話、陳明府の女の陳婉が臂を割いて親に喰した話、崇欲の妻錢氏が姑の爲め臂を割いた話――と、もう一つ次の話が同書に記されてある。

彭相國の孫女は、性純孝、言笑いやしくもせず、每に列女傳を讀んで、古の孝行の者に敬慕して居た。祖父の相國が病篤く醫師も手を束て居ると云ふとき、孫女は秘かに天に默禱して臂肉を割いて藥に交ぜて祖父に進めた。この肉を割く時、痛のため伸吟する聲をきいて家人は不思議に思つたが孫女が何も語らないので判らなかつた。その後、孫女が病卒し家人が驗視したとき、臂に創痕が宛然と殘つて居たので割肉進藥のことが知れた。

E　敵愾心に依る食人

殷の紂王と云へば、婦人妲己を愛して炮烙の刑を創め、酒池肉林、長夜の飲をなした史上代表的の兇暴者であるから彼の食人は（A）に屬するものであるかも知れない。史記本紀によると、九侯に美人の女があつた。紂は之を入れたが九侯の女が淫を喜ばないと云ふので紂は怒つて女を殺した上に九侯を、醢にしてしまつた。鄂侯は之に就て紂と爭ひ强辯したので脯とせら

れた。また、紂は聖人はその子の羹を喰はないと聞たので、その言を確める爲め、文王の長子白邑考を煮て羹を作り文王に與へ、子の肉であらうとは知らず喰つた文王を、聖人の資格なしとて冷笑したと云ふ話が傳へられて居る。

侯景は羊鵾の爲め殺されたが、その屍を建康に送つたとき、民は爭つて之を喰ひ、立どころに喰ひ盡してしまつた。明の大監、劉瑾は誅せられて市に磔になつたが、劉を怨む人民は爭つてその肉を購ひ生のまゝ喰つて恨をはらしたと。

隋の煬帝の時、司空の官に居た楊素に會ひに行つた李靖は紅拂を手に持つて出て來た楊素の妓に見染められ、二人手に手をとつて太原へ逃げ還る途中、靈石の宿で赤い髯の男と合つた。李靖と赤い髯の男が大分酒杯を重ねたとき、赤い髯の男は『少し酒の肴を持つて居るが、あなたもおつき合ひしませんか』と革の嚢から一人の頭と心藏と肝臓を取出し、頭はそのまゝ嚢に入れ、心臓と肝臓を匕首で切つて二人で喰つた。そして赤い髯の男は『この人間は天下の心に負むいた奴で、私はこの奴を十年間つけねらつて居たが、今始めて打取ることが出來、憾をはらすことが出來ましたよ』と云つた。

右の話は、唐の張說の虬髯客傳の一節である。眞僞は別として、敵の肉を喰はんと云ふ敵愾心からの食人ぶりが如何にも面白く現はされて居る。

F 人肉の味

人肉の味について想ひ出されるのは、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、――、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、。人肉が美味か下味か、喰つた經驗の無い者にこれを述べる資格は無いから、本稿を草するに當つて負ふ處の多かつた、梵天廬叢錄の筆者柴小梵の食人經驗談を記して置こう。

光緒三十年といへば民國紀元の八年前、その年の八月に蘇州の閘門吊橋の上で山東人が醃肉を賣つて居た。その肉の形や

色合がいかにも加香肉（醃漬にするとき藥味香料を入れたものらしい）に似て居り、その價も非常に安かつた。從つて近隣の者は爭つて之を購つた。柴小梵の隣人も、この肉を三四斤購つて煮た。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、（、、、、、）、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、（、、、、、）、、、、、、、。柴氏は隣家と親しいつき合をして居たので嘗（あじみ）を貰つて喰つた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

數日の後、この肉屋の山東人は長洲縣の官憲に逮捕され、その自白するところによると、彼が賣つた肉は全部人肉であることが判明した。官憲が肉屋の乘つて來た船を搜索すると、船には口もとの小さい、大きい甕が四つかくされてあつた。その甕の中は、全部鹽漬の人肉で、甕の底から人の手や足が出て來たが頭だけは、どうしたものか見つからなかつた。その肉屋は徐州及海州方面から人肉を運んで來たものらしく、法にしたがつて處刑されたが柴氏は、これを聽いたとき三日の嘔をなした。今にいたつても、人肉の一件を思ひ出すと、咽喉が妙にムズ〳〵するのを覺えると柴小梵氏は記して居る。（終）

國のない人々の國

——もだん・でかめろん其七——

谷譲次

1

龕燈みたいなものが低い天井からぶら下つて、その照明が、あめりか人が稱して東洋的と言つて嬉しがるところの、いやに薄ぐらい圓い効果を出してゐるんだが、蒜(にんにく)と霧と嚙煙草と工業によごれ切つた赤煉瓦の外觀からでは、なかにこんな仕掛け(トリック)があらうと思はれない。しかし、いくら思はれなくても、このとほりちやんと相當廣い部屋に卓子が散らばつて、卓子に人がついて、その多勢の人が笑つたり饒舌つたりして、それと一緒に銀の食具を口へ運んで、食具にやはらかい光が落ちて、光りにお酒(ブウズ)のにほひが絡んで、酒杯に櫻の實が浮いて、櫻は——これは造花の櫻の枝だが、そいつが卓子の上に縱横に交叉して、どうやら遠い物語の國土日本の情景を彷彿とさせ得た——つもりでゐるから、何とも凄まじい。

裏街の夜のキャバレである。食事をとりながら、唄や踊りの寄席が、卓子のあひだに展開される

あんまり若くない女が莫迦に若い扮裝で出現して、波斯だか印度だかの腰振りだんすをおどり出す。それはいゝが、踊りながら彼女は、隅でピアノを彈いてゐる長髮の音樂家——インデアナ州生れで合衆國から一歩も出たことのないくせに何とかスキイといふ露西亞人まがひの名を持つてゐる——その何とかスキイへ、明らかに必要以上の注意を示す。早く云へば秋波だ。すると映畫の惡漢そのまゝの支那人が跳び出して來て、今や何とかスキイへしな垂れかゝらうとしてゐる彼女を力任せに

引き離すのだ。勿論、客は總起ちになつて、悲鳴、喚號、口論、物議が喋然として周圍を占領する。その眞ん中で、突如として支那人の手に短刀が閃めく。女は一聲叫んで床に倒れる。給仕人達が狼狽して奥へ擔ぎ込む。客は色を失つて戸口へ雪崩れる。かうして一生に一度の恐しい經驗をした氣で、みんな這々の態で歸路につくんだが、いづくんぞ知らん、この忍傷沙汰が寄席の一つであつたりする。雇はれゝば何でもするのだ。だから、亞片窟を見物に行つて、このキヤバレの女と同じ支那人が空の管を吸つてうつとりとしてゐるところを發見してもべつに不思議がることはあるまい。

紐育の第三街といへば、支那町を中心に「國のない人々の國」だ。

言はゞそれは世界地圖の上に存在するあらゆる國々の人が、めいめい其の國を見捨てゝ、またさうすることによつてお互ひを貫く一つの心意氣（スピリット）を感じて、その感情の文書に據り、こゝに樂しく世界地圖にない一つの國を形作つてゐるやうなもので、ブルガリア人が土耳古人と結婚して亞米利加人を生み、そのあめりか女が支那人に戀して世帶を持ち、そこにアルメニア人が下宿して猶太人の店へ通ひ、食事は希臘人の料理店でしたゝめながら布哇人の俗樂に耳を傾け、西班牙人に靴を磨かせて愛蘭土人の巡査に挨拶し、獨逸人から肉を買つて佛蘭西人の麵麭をもとめ、あるめにあ人の——まあ、とにかく、色んな國籍の人が何時の間にか其のいろんな國籍を脫却して、紐育第三街のあたりに不思議な超國境の一廓をつくりだしてゐるとだけ言はふ。

紐育には黑人が多い。四十萬人の黑い渦卷である。六つの黑い週刊新聞と四五の黑い雜誌まで有つて、黑い連中の勢力は隱然たるものだが、この黑い波の寄せては返す沼地（スワンプ）——裏町——の中心（ハアト）の中心（ハアト）の中心（ハアト）に、ひつそりとしづまりかへつてゐる一區域、それがこゝにいふ「國のない人々の國」なんだが、町を通つたぐらゐでは、ほかの往來と何らの違ひもないから決して氣がつかない。が、もし人あつて注意して觀察したなら、路傍の煉瓦のかけら一つにも外來者を白眼視する皮肉と冷笑を讀むであらうし、何よりも、往きかふ人の悲しい眼いろのなかに、豫言者に見るやうな秋風の氣魄をみとめることであらう。

豫言者は昔からしぢう淋しい眼をするやうに運命づけられてゐる——故鄕に容れられないからだと物の本にもあるとほりだ。

この、故鄕を追はれた、あるひは自分から故鄕を追つた様々の膚いろ毛色の豫言者のなれが、この「國のない人々の國」の住民であり、そして、かれらのあひだの法典（コード）は其のうら悲しい眼

一つなのだ。

人間性への理解——と住民のなかの哲學者は言ひ、とまることを許されない旅人なんだ——と彼らの詩人は浪漫化するかも知れない。が、そんなことは何うでもいゝ。要するに「國のない人々の國」の人々は、坊さん——天空水先案内（スカイ・パイラット）——にしたがへば到底濟度することの出來ない不信者であり、社會改良の婦人俱樂部員によれば恐しいごろつき（ラフ・ネック）であり、最後に警官に言はせれば、片つぱしから前科者か犯罪可能者といふことになる。

實は、こんなこともどつちだつて差しつかへないんだが、しかし、「國のない人々の國」の國家的名譽のためにこの機會に明言したいことは、その中に住む人が何が起つても少しの關心も拂はないほど　ほかには起りさうもない色んなことが此處ではおこるといふ一事である。

だから、こんなことも立派な事實としてあり得るわけだ。

其のこんなことを究明するのがこの物語の目的である。が、その前に——。

まづ、「國のない人々の國」の探檢からはじめるとしよう。

都に雨の降るごとく——とか何とか洒落れたことを言つた詩人があるが、このにほひの高い章句の心もちは、何うしても古い石疊みの街でなければぴつたりしない。

で、紐育に雨が降る。白い光線のしぶきだ。

さうすると、出たら目に高い建築物の上半が水氣にぼやけて、自動車の車體が感覺的に黑く艶つて、女は帽子を脫（と）つて着物の胸で包んで走り、男は外套も着ず傘もさゝずに濡れて往くのを見得にし、非緊縞タキシの運轉手は聲を鳴らして客を呼び、町角UCSの煙草店には雨やどりの男達が黑山に重つて。短い洋袴から膝小僧を飜して駈けてゆく女の列に歡呼の聲をあげ、交通巡査の白い桐油に瀧が流れて、窓硝子が一せいに埃りをおとす——都に雨の降る時。

大通りを横に切れて裏へ這入つてゆくと、兩側の商店の格が急に落ちて、そのうちに店の二階に人が住んでゐたり、飾窓に挾まれて住宅が歪んでゐたり、道路には果物の皮や紙屑が地を滑る水を堰いて、一様に黑い石造物が未來派の畫面のやうに立ち並び、よろめき合つて、水滴に霞む町筋には人つこひとりゐない。更紗をかぶつた露西亞女も、カラアをつけない襯衣の襟を圓く折り込んで、赤い太い頸をむき出しにした南歐羅巴の男も、裸足の子供たちも西印度人の猿廻しも、みんな雨に追ひこまれて、いつもなら臭くてやかましい第三街の下町も、いまは淸潔な無人の境だ。ただ牛酪の焦げる香ひと赤ん坊の泣く聲とが何處からともなく水けむりのなかに漂つて、この「國のない人々

の國」にも家庭のあることを思はせる——。

　ガッツの理髪店の隣がシュワルトの質屋で、金いろの玉が三つ。品といふ字のやうに重なつて軒先に出てゐる。ありとあらゆる古いうす汚ない品物が、何週間かの塵埃をかぶつて、窓から店全體に溢れてゐるんだが、主人といふのは其の質流れの一つみたいな白髪のお婆さんで、死んだシュワルト氏の記憶のために彼女はシュワルト夫人と呼ばれてゐた。このシュワルト夫人の商賣は階下の質屋よりも二階と三階の素人下宿が主で、だから「貸間あり（ルウムス・トウ・レット）」の紙がしぢう窓の隅に立てかけてあつた。ときどきこの紙片が白いことがあつたが、それは裏返しに置いてあるからで、つまりシュワルト家には目下一つとして都合（アコモデイト）のつく部屋のないことを意味してゐた。そして空室の出來次第、植物のやうなシュワルト夫人の手が紙を返してまた字の書いてあるはうを表へ向ける。要するにあきのあるなしによつて紙が引つ繰りかへるだけで、紙片は常に正確に窓の一隅の位置を保つてゐた。その傍に綠色の縮紙で卷いた素燒の鉢がおいてあつて、三年も五年もことによると十年もさわらないものとみえて、草だか木だか黒く乾からび切つて、やがて化石しようとしてゐた。

　さて——この歴史に富むシュワルト家の屋根裏に、サア・ウイラアド・オタといふ一人の日本人が、何時の世からともなく巣を食つてゐた。

　ウイラアド・オタ卿である。

　話しはこのオタ卿を芯に開いてゆく。

　ところで、何故このウイラアド・オタがオタ卿であるかといふと——いや、それは後廻しにして、「何時の世からともなく」巣をくつてゐたといふのが氣になるから、直接よく本人に訊き質してみると、オタ卿の曰く。

『テデイの二人以前の大統領は何てつたつけね？俺（ミイ）がこの國に來たのは其の人が當選した年だつたよ。』

　テデイはルウズヴェルトのことだ。すると矢つ張り、シュワルト家の窓の鉢と同じに、オタ卿はかなり古いと言はなければならない。が、古いといふのは日本人として亞米利加に古いといふ意味で、ウイラアド・オタ卿はいまやうやう中年の域に達したところだ。餘程子供の時に渡來したものとみえる。

　この、オタ卿が比較的若い「貴族」——とにかく「卿（サア）」がつく——であるといふ點が大切なんで、だから、つぎのやうな事件を第一話として、こゝに物語が始まるわけだ。

　雨の夜の第三街——まあさ、ま、聞いてくれ給へ。

　道路には果物の皮——こゝらの人も果實によつては皮を食べないものもあるから——と紙屑が地を流れる水を泳いで、一樣

に黒い石造物が未來派の畫面みたいに立ち並び、よろめき合ひ、默りこくつて、水氣に煙る町筋には人っこひとりゐない。濡れそぼれた無人の境である。

何事か起りさうな晩――なんかといつて、あんまり期待されちやあ困る。じつは問題はオタ卿の獨語なのだ。言ふのを忘れたが、ウイラアド・オタ卿にはひとりごとをいふ癖がある。

そこでそれ、そもそもこの話全體が世の獨りごとといふものに取材してゐるゆゑんである。

2

ロクサナといふ女があつた。

これも言ふのを忘れたが、ロクサナはシユワルト夫人方の屋根部屋の、オタ卿の隣室に住んで、そこから廣小路の百貨店の掃除婦に通つてゐた。ばかに眼の小さな、象が風邪をひいたやうに肥つた身體で、歸つて來て階段を上りながら途中で十三回休んでは赤い顏をして苦しがつてゐた。そして、その度びに神の名を呼んで、わたしはわたしの心臟がわたしを殺しつつある事實を識る、なんかと家中の人へ大聲で宣告してゐた。獨身のくせに眞鍮の――もつともロクサナに從へば金の――結婚指輪をして、とにかくこのロクサナは、天氣のぐあひと、見る人の好意によつては時として女に見える日もあらうといふ複雜な女だつた。

この雨の夜に、晩くなつて第三街のシユワルト家へ歸つて來たロクサナは、いつものやうに隣のガッツ理髮店との間の横丁を這入つて、そこに蛇みたいに建物に貼りついてゐる鐵の非常梯子を、一段々々味はふやうに踏みしめて自分の部屋のある屋根うらへ登つて行つた。シユワルト老夫人は大變に家憲を重んずる性質なので、玄關の戸は八時になると必ず締めてしまふ。それで、すこしでも夜が更けると、何うしてもこの非常口から出入りしなければならなかつた。ロクサナが歸つた時はまだそんなに遲くはなかつたけれど、もう表ての扉は閉まつて、雨のせいか、あたりもひつそりとまるで深夜のやうだつた。床屋で入れ忘れた洗濯物が吸へるだけ水を吸つて重さうに下つてゐたりして、何處かの部屋（アパートメント）から牛酪のにほひと赤ん坊の泣く聲がするのが、ちよつと家庭といふものを思はせて、何時の間にかすつかり若さを失くしてしまつたロクサナを其の女らしさにおいて瞬間悲しませた。

屋根裏と言つたところで、四角い建物だから上も下も同じ廣さで、小さな部屋が幾つも並んでゐる。晝間でさへ間違へることが多く、ロクサナもこれまでよく他人の部屋へ這入つたり、ロ

クサナの室へ知らない男が飛び込んで來たりすることも珍しくなかつたので、その晩なんか、ロクサナはことに部屋を取り違へないやうに注意した。鐵梯子を上り切つたところに小さな戸があつて、そこを開けると、狹い廊下の兩側に、まるで海水浴の脫衣場のやうに同じ作りの部屋の扉がずらりと並んで、それを階段の上に燃えてゐる裸かの瓦斯火がぼんやりと照らし出してゐた。ロクサナは灯りの下を通り過ぎながら、何年となくその瓦斯口のそばに貼り付いたまゝになつてゐるシユワルト夫人の金釘流の告示を見て、今夜も微笑んだ。

——瓦斯の節約は市のためです。誰でも氣のついたかたは、適當と思はれる頃に消して下さい。

かう書いてある。序でだが、シユワルト夫人は實に告示(サイン)好きで、家ぢう到るところにこの種の貼紙がしてあつた。WCには——。

「あとから來るのお他の人を忘らない。あなたもあとから入ることがある。だから、あとから入るあなた自身のために——。」

と貼りつけてあるし、玄關には、

「お行儀のいゝ小猫(プシイ)よ、足を拭いて、お這入りなさい。」

客間には、

「微笑は人生の日光」といふのと、「どうぞ煙草の灰は灰皿へ」の二つが額に納まつて掛つてゐるが、その肝心の灰皿がないので、男達が夫人に注意したり訴へたり難詰したりすると、シユワルト夫人は「人生の日光」の微笑をもつて靜かに答へるのだつた。

『わたしは煙草は喫みませんから——。』

で、シユワルト家の客間で煙草をのむことは惡魔にも不可能だつた。

そのほか、廊下(ホウル)の突き當りには、「つねに窓を開けて日光を入れて下さい。日光の訪れない家はお醫者が訪問する。」とあつたし、臺所には、「水の栓を固く締めておくこと。」など・など・など——まだ各室を搜し廻つたら幾らでもあるだらう。

ロクサナは其の告示のしてある瓦斯の灯の下を通つて部屋へ這入つた。

はだかの——敷物のない——床板の上に、隅に寢臺が一つ。木の椅子が一脚。鏡のついた戸棚が一つ。それだけ。今朝出かけた時と變りのないロクサナの部屋だつた。ロクサナは電燈を捻るのも億劫になつて、そのまゝ椅子の背へ着物を脫ぎかけて寢臺へ潜りこんだ。そして、しばらく窓硝子を打つ雨の音を聞いてゐるうちに、高架線(エル)が三つも唸つて過ぎたかと思ふと、あとはもう掃除婦ロクサナの輕い鼾だけだつた。

「國のない人々の國」第三街の夜は、煤煙を溶かした黑い雨

に更けて行く。廣小路の空には下界にどよめく灯が映つて、水蒸氣が赤く燃え立つてゐるが――。

ちようど其の頃――つまり廻り舞臺だ。

この雨の夜の第三街を軒傳ひに來て、今やシュワルト家の屋根裏へ上らうとしてゐる一つの黑い影があつた――などと矢鱈に讀物（フィクション）めく必要は毫末もないので、この怪しの黑い影こそは實に――どうもやつぱり面白くない。出直さう。

ちつとも怪しいことはない。住人のひとりウイラアド・オタ卿が歸つて來たのだ。

晩くなつたオタ卿は、いつものやうに隣のガッツ理髮店との間の横丁（アレイ）を這入つて、そこに蛇みたいに建物に張りついてゐる鐵の非常梯子を、一段々々味はうやうに踏み締めて自分の部屋のあるシュワルト家の屋根裏へ登つて行つた。雨のせいか、あたりもひつそりと靜まり返つて、まるで深夜のやうだつた。ガッツで入れ忘れた洗濯物が、吸へるだけ水を吸つてだらりと重さうに下つてゐたりして、それが、闇黑に白く浮き出て、同時に何處かの部屋（アパアトメント）から牛酪の焦げるにほひと赤ん坊の泣く聲がするのが、ちよつと家庭といふ心持を覗かせて、何時の間にか若さを失くしようとしてゐるウイラアド・オタ卿を、その中年近い感情において瞬間悲しませた。

前にも言つたとほり、屋根裏に同じやうな戶の部屋が幾つか並んでゐるので、晝間でさへまちがへることがあつて、オタ卿もこれまでよく他の部屋へ飛び込んだり、識らない人がオタ卿の室へ這入つて來たりすることも珍しくなかつたので、その晩なんか、オタ卿はことに部屋を取り違へないやうに注意しなければならなかつた。狹い廊下の階段の上に搖らいでゐる裸かの瓦斯灯の下を通り過ぎながら、オタ卿はそこに貼り出してあるシュワルト夫人の文句「瓦斯の節約は市のためです、うんぬん」を見て、今夜もちよつと微笑んだ。そして自分の部屋へ這入つた。

はだか――敷物のない――の床板の上に、隅に寢台が一つ。木の椅子が一脚。鏡のついた戶棚が一つ。それだけ。

今朝出かけた時――オタ卿は近處の芝居小屋の背景畫家兼道具方兼大工兼仕出し、一言にして盡くせば舞台裏（バック・ステイヂ）の――時としては舞台上の――便利な男（ヘンディ・マン）何でも屋だつた――そのオウロラ劇場へけさ出勤したときのまゝのウイラアド・オタ卿の部屋――卿は自宅（ホウム）と呼んでゐたが――であつた。で、濡れて來たオタ卿は電燈を捻るのも億劫になつて、そのまゝ其處らへ着物を脫ぎ捨てゝ、世の常の「くたびれた事業家」のひとりとして、就寢の祈りのかわりに一日を終へた溜息とゝもに、とても勇敢に寢台へ滑り込んだ。

で、もし、このワイラアド・オタ卿が普段からもうすこし注意深い人物だつたら、彼はこの時、雨の夜寒にも係らず寢台の中が嫌に生暖かくて、ぷうんと女――掃除婦ロクサナ――の體臭を嗅いだことであらう。

オタ卿が這入つてくると同時に、ロクサナは眼をさました。そして、卿の無禮、過失を咎めようとして寢台に起き上つたが、やみに慣れたロクサナの視力は、かへつて彼女自身が室を間違へてオタ卿の部屋へ闖入し、しかも――あらうことかあるまいことか――かれの寢台に横たはつてゐるのであることを明快に告げた。そこで彼は、非常時に際しての不可解な沈着をもつて、最も迅速に、かつ靜寂に、卿が寢卷に着更へてゐるあひだに寢台を滑り下りて、卿が一方から這ひこんだときは、彼女が他の側から寢台の下へもぐり込んだ刹那だつた。だから今からして、寢台の上には正當なる權利者オタ卿が在り、寢台の下の床には不幸な不幸なロクサナが板の冷たさに顫へてゐる次第だ。くどいやうながら「國のない人々の國」の雨の夜である。

思へば、色んなことが突然するのも當然至極なわけで、單に其の色んなことの一つとして、オタ卿がこの時いつものくせの命ずるまゝに例の獨り言をはじめたんだが、それは寢台の上下の二つの人生にとつて實に運命的な發表であつたといはなければならない。

『あゝあ――よく降りやがるなあ。』とオタ卿は先づ欠伸を皮切りに、つぎに順序により天候を批評して、それから直ちに眼前の暗い空間へ向つて話しかけた。

『ひとりで寢るのは寢たのぢやないよ枕かついで横に立つ――か。情ないね。』

誤解のないやうに斷つておくが、これはすべて勿論英語で言つてゐるので、この唄の文句などは兎に角そんなやうな内容を持つた觀察だつたらうと言ふまでのことで、なにも卿がこれを英詩に譯して吟じたわけではない。

『雨は降るし、いゝ年齢をして、何時まで經つても風來坊(ホボ)みてえだし、つくづく嫌になるね。と言つたところでじやぱんへ歸るにや金がなし、また歸つたとこで仕ようがなし、雨は降るし、どつち向いても獨りだし――さうさう、獨りと言へば隣室の先生は何うしてるだらう？ロクサナとかつていつたけな。ロクサナさん――可愛いロクサナ、ねえ、ロクサナや、おいロクサナ、おい――何う呼んでもちよいと好い名だな。家庭的、さうだ、とても家庭的な名だよ。ロクサナのやつ、もう寢てるにきまつてる。それとも、俺みたいに床ん中で眼を開けて考へてるかも知れない――隣の日本人はどうしてるだらう？なんて――

はゝゝゝ、止せよせ。ウイラアド、お前、ロクサナを戀してるのか？うむ戀してる。え？戀したつていゝぢやないか。あいつ、ふとつてはゐるがなかなか樣子がいゝよ。顏だつて赤かつたりしてね。愛嬌がある。年も俺とは恰好だ。一つ申込んでみるかな？いきなり廊下で掴まへて、私はあなたを愛します。結婚して下さい——いけねえ！はゝゝゝ、やつこさん驚くだらうな。知りません！なんてつんとして、それから俺のことを氣違ひだつて言つて歩くぜ、ことによると訴へるかも知れない。さうすると困るな。』

　ほんとに困り切つたやうに、卿はすつかり悄氣返つて默りこんだ。

3

　が、考へ拔いた末、やがてまた口をひらいた。

『しかし、眞意は認めて呉れるだらう。それでいゝ——一體、紐育では何處でどうして女に結婚を申込めばいゝんだか、第一それが判りやしない。月夜に、甘い香の漲る果樹園の小徑で、しづかに手を取つて——なんかと言つたところで紐育ぢやあセツトがないし、そんな中世紀的なのは此の頃流行らない。ぢやあ、けふみたいな雨の日の混雜時刻に、鮨の罐詰のやうな電車から死物狂ひで降りながら、その苦しい最中に、ロクサナさん、結婚して下さいとやるか。それとも、やあ、お早やう、僕と結婚しませんか、か。どつちも妙だな。女が自信の絶頂にゐる時が結婚申込みの最好機だといふから、一つ一番いゝ着物に一ばん好い帽子をかぶつてるところをいつしよに市街自動車にでも乘つて、終點まで行つて同じ車で歸りがけに、實はロクサナさん、僕あ君を戀——こいつも變だ。いつそ、活動へはいつて、濡れ場(ラブシイン)をこつちで忠實に眞似しながら——「結婚！」と一言だけ耳へ囁くか。これなら俺にも出來さうだな。とにかく何とかして隣りのロクサナへ俺のこの氣もちを知らせなくちやあ。先方も獨りで朧訳々々してるのに、雨は降るし、俺もいゝ年をして、何時まで經つても風來坊みたいだし、つくづく嫌になるなあ——うむ、全く嫌んなるよ。ロクサナさん、僕のロクサナ！おい、ロクサナ——おやすみですか。え？寢たのかもう——ああ、雨は降るし、雨は降るし——。』

　低聲がだんだんむにやむにやに縺つて、暫らく窓硝子を打つ雨の音がしてゐるうちに、高架線が三つ程唸つて走り過ぎたあとは、もうオタ卿の輕い鼾だけだつた。

　この獨語をすつかり聞いてしまつたロクサナは、オタ卿が眠りにおちるや否や寢台の下から這ひ出して、脫いだ着物を纏め

てこつそり隣りの自分の——今度こそは自分の——部屋へ歸つた。そして悦びに叫びたい衝動をこらへて床についたが、ロクサナはたうとう一晩ぢう窓硝子を打つ雨の音を聞いてしまつた。となりの日本人——何も此の際日本人と限つたわけではないが兎にかく男のひとり——の上に、女としての自分の魅縛が働きつゝあることを知つて、彼女はむしろ其の奇蹟に驚かなければならなかつた。じぶんに注意してゐる男があるといふ發見は、ロクサナの頬をロクサナの遠く忘れてゐた感情で赫くして、いつとはなしに諦めてゐたものが、俄かに彼女の胸へ返つてきた。で、その雨の霽れた次ぎの朝から、ロクサナは急にお洒落になつて、廊下や非常梯子の中途や、ガッツ理髪店との間の横丁(アレイ)や階下のシュワルト夫人の客間なぞで、何べんもオタ卿と二人きりで顏を合はす機會を、それとなく作つたけれど、そして一度なんか現實に新聞を卿に貸したことさへあつたけれど、勿論卿は、お早やう、結婚しませうとも言はなければ、今晩活動へとも何ともいつまで待つても切り出さなかつた。あの獨語のことなんかけろりと忘れてゐるらしかつた。ことによると雨が言はせた一時の氣紛れだつたのかも知れない。

それから後もまた雨が降つたり霽れたりした。雨の晩にはロクサナは隣室の鍵穴へ忍んで行つて耳をすましたけれど、獨りごとはよく聞こえたが、みんな他のことばかりだつた。ロクサナが偶然らしく見せかけて何度も卿に出あつても、日本人はただ默つて恐れ入つてゐるだけでちつとも其の好機を利用しようとはしなかつた——こゝにおいてか、待ち草臥れたロクサナは積極的にオタ卿を捕まへて結婚を申込んだ。その結果、卿はほんとに捕獲されたやうな形で、たうとうロクサナと結婚してしまつた。

「國のない人々の國」の一隅で、百貨店掃除婦と舞臺裏何でも屋との國際的結婚式が擧げられた。いや、式なんかなかつたけれど、二人が結婚した何よりの證據には、一週間ばかりした雨の夜に、二人は大喧嘩をして——いかにも夫婦らしく——そして思ひ切りよく別れてしまつた。何でもそれはロクサナが雨の情緒に唆されて、何時かの雨の晩の間違ひから寢臺の下で卿の獨語を聞いちまつた仔細を告白したゝめだといふことだが、二人はそれから元どほりに隣り合つた部屋に住んで、ロクサナは百貨店の掃除に通ひ、オタ卿は小屋へ出勤して朝夕顏を見れば挨拶してゐた。これには神樣も非常に苦笑なすつたけれど、何しろ紐育第三街の出來事なんで、「どうもおれにお判らねえなあ」と嘆聲をお洩らしになつたゞけだつた——

ところで、小說的興味のために文法上近い過去をもつて記述

して來たが、じつはこれはちよつと前の話しで、では其の後のウイラアド・オタ卿はと言ふと、こゝで彼の習慣たる獨り言が如何にも色濃い存在としてこの筋の上に大きな持役を示してくる。

孤獨はたましひの空腹だ。だから孤獨も空腹もともに人の口を淋しがらせる。そして孤獨は其の口から悲しいひとりごとを押し出す。が、自分とじぶんの聲に驚くうちはまだ救はれる。おほぜい人がゐるのかと思つて覗いてみて、一人で饒舌つてゐるのにこつちがびつくりするやうになつてはもうおしまひだ。亞米利加にゐる日本人の多くは、都に雨の降る日なんか、まるで客でもあるやうに一人で問ひ、ひとりで答へ、ひとりで笑つてゐたりする。それが抑揚の强い英語なのも、悲しいと言へば悲しい。

『おや！煙草は何處に？――なに？煙草？こゝにあるぢやないか――あゝさうか、有難う――ところで先刻のはなしだがね、君は一體何うしたらいゝと思ふ？――僕か、僕はね、君はこの際むしろ默つてゐてだね、おもむろに先方の――しかし、それもさうだが――。』

などと上手に二人分の聲色を使ひ分けてゐる。

何といふ都會的な泪ぐましさであらう！長い間の孤獨に打ちのめされて、下宿の壁の自分の影を相手にかうして嬉々として談笑してゐるのだ。

しかし、獨語癖は何も亞米利加日本人の特性とは限らない。第三街を取り卷く「國のない人々の國」の眼の悲しい豫言者のむれ、故里を捨てゝ集まつた旅人達は、ひとりにしておけば必ず直ぐに聲を發して何か言ひ出すし、群集のなかにあつても頭の底でしぢう二人の對者を想定して言葉のやりとりをしてゐる。だから、あんなにも淋しい眼いろをしてゐるのだらう。

獨房の囚人のやうに、寢台の脚や帽子や鉛筆や草に話しかける――この人々は銘々の獨房を墓穴へまで持ち込まうとしてゐるのかも知れない。

――なんかと嫌に感傷的になるのは、なるはうの勝手で、この商業的な世の中では、すべての技能は、それがもし上手でさへあれば立派に稼業として立つてゆく。ひとりごとだつてさうだ。ひとりで饒舌つて、それで二人の人間が話し合つてゐるやうに聞かせることが出來れば、これは既に一般に認められた技藝であつて、市場において相當な交換價値を呼ぶ。

ひとりごとが一個の職業としてお金になるのだ。

腹話術（ヴェントリロキズム）といふ。

これは發言する人が口を閉ぢて話しをすると、それがさなが

ら發語者を離れた近くの物體から聞こえるやうな氣のする一種の技術的手品で、よく寄席や見世物にかゝる人氣のある藝當だが神靈的欺術に幽靈を出してこの方法で何か言はせたり、さうかと思ふとお告げや占ひなどに詐用される場合もすくなくない。注意の方向を轉ぜしめて錯覺を起させるのが、其の主眼である。

この腹話はあきらかに獨語が特殊の發達を遂げたもので、名稱の腹話はヴエントリロウクイズムの譯だが、原語は羅典語から來てゐて、やはり「腹で話す」といふ意味だ。これは羅馬時代にヴエントリロウクイズムは腹もしくは下腹部で發音すると思つた誤つた考へに由來してゐるので、いまこの腹話なるものをもうすこし說明すると、ヴエントリロウクイズムは話者の口以外に發聲の個處があるやうに思はせる一つの藝(アート)で、とんでもないところから聲がするやうに見せかける。何うしてかういふ効果を出すかといへば、それは、話者がしつかりと口を閉ぢて口腔と舌だけで發音するからで、外から觀たところでは發聲に必要な筋肉や機關が完全に動かないためと、それに補助的手段として、話者は自分の視線と態度によつて特定の場所や物體から聲が來るやうに巧みに觀者の注意を他に外らすのだ。この目的のために多くの職業的腹話者(ヴエントリロウクイスト)は人形を持つて演話するんだが、たいがい人形の內部へ手を差し入れて、指で上下の顎——人形の——を動かすことが出來るやうになつてゐるから、自分は口腔で大聲を發しながら、その發音に從つて人形の口を如實に開閉して、觀者をしてまるで人形がものを言つてゐるがごとき感を抱かしめ、藝の趣きを增すとゝもに自分の口邊から觀者の注意を驅逐することに成功してゐる。この注意を他へそらすための小道具はヴエントリロウクイストにとつて重大な條件であつて、これらが或る程度まで揃はなければ、いかなる名人でも其の魔術的な所期の効果をおさめることはむづかしい。だから、多くの腹話者が、闇黑のなかではきまつて失敗する。暗くては對者の注意を轉換して心理的誤謬に導く小道具の使ひやうがないからで、彼らは明るいところでなければ決して腹話しないのをつねとする。

つまり、闇の獨語が光明へ出たのが腹話だ。

そしてウイラアド・オタ卿のひとり言は既にこの域に達してゐたといへる。

4

寄席を覗くと、よくこのヴエントリロウクイストが掛つてゐることがある。

色物(ヴアリエテイ)といふ、踊りもすこしは踊り、唄も些さか歌ふ程度の舞臺へ出る腹話者が一ばん達者でもあり面白いやうだ。

　演壇のやうなものを置いて、略禮服(タキシイド)か何かで立つて、手に大型の人形を抱いてゐるんだが、これは大概猿か黑ん坊か道化役か田舍者か、あるひは其の時評判の人物――政治家か拳鬪家か俳優か野球選手か――の似顏の人形にきまつてゐる。二尺から三尺の高さで、なかが虚ろになつてゐるから右手を入れて身體からすこし離して持つてゐる。そして內部の操り仕掛けの絲を五本の指に絡んで、その指をさまざまに動かすことによつて、人形は人間そつくりに多種多樣に口を開閉し、眼をくりくりさせ、首を振り、上半身を搖すぶる。それが話してゐる事柄とぴつたり合ふので、人形の口の運動といひ、その表情動作と言ひ、何うしても人形そのものが口を利いてゐるとしか思はれない。

　腹話が演藝となると、すべて申しあはしたやうに會話の形をとる。即ち、腹話者は手の人形のはうへすこし身體をねぢ曲げて、自分の口をあけて、自分の聲で何か問ひかけて置いて、さうして今度は、口を閉ぢ正面を向いて、人形の言葉として口腔で大聲を發する。それは實に大きな聲だ。同時に、右手の指で人形の口や顏を動かすのだから、何うしたつて人形が饒舌つてゐるとしか見えない。のみならず、腹話者はその時横をむいて煙草に火を吸ひつけてゐたり、手巾でせつせと顏を拭いてゐたりするので、いくら種が解つてゐても誰でもちよつと誤魔化される。

　人形の口の動かし方は巧妙をきわめてゐて「オウ」は楕圓に細長く「イヽ」は横に切れて、その他すべて話者の音に合はせて話に從ひ、一つ一つ連續的に變化してゆく。大笑ひもすれば咳もする。しかもその間、腹話者の口はしつかりと閉ぢられて顏や咽喉の筋肉も微動だにしてゐない。それでゐて口の中で出す聲が、まるでめがほんで怒鳴るやうに廣い劇場の隅々にまでりんりんとひゞき渡る。その上、人形が黑ん坊なら南部の訛り、道化役なら愛蘭土か猶太人の口眞似――技まさに神に入るとでも言ひたいのがあつて、獨りごともかうなると立派な專門だ。

　他愛のないやりとりから始まる。はじめ演者が自分の口で問ひを發し、つぎに人形の口を動かしながら自分で答へる。それが人形がしやべつてゐるやうに聞こえる。

　まづ、こんなぐあひ。

『やあ、アルフオンソン・アナスタシアス・アダムスさん、何だかけふは機嫌が惡いね。怒つてるのかい？』

『よう、エラスマス・エマスンかい。うん、怒つてるよ、俺

は。』
『何うしたんだい？』
『兄貴と喧嘩したんだ。』
『兄貴と？』
『あゝ。兄貴のやつ、今日茶色の服を着るつてきかないんでね。』
『茶色の服？　着たらいゝぢやないか。』
『ところが宜かないんだ。けふは俺が着る番だから――。』
『おうやおやつ！　すると何かい。君達兄弟は二人で同じ服を着合つてるつてわけかい？』
『なに、俺がしぢう兄貴のを借りてるんだ。』
『朝、投げ錢でもして其の日どつちが着るか決めればいゝのに。』
『うん。投げたよ。兄貴のやつ、俺をいゝやといふほど投げやがつた。』
『早く起きて兄貴が寢てる間に着ちまへばいゝのに。』
『駄目だ。』
『なぜ？』
『兄貴が着て寢てるんだもの。』
『何でも共通かい？』
『はんけち以外はね。』
『君、兄貴の靴まではくのか。』
『靴だもの、穿くさ。抱へて歩いたつて仕様がない。』
『兄貴も一足しかないんだらう？』
『俺だつて一足しか要らないよ。』
『兄貴は怒らないかい、靴なんか穿かれて。』
『よろこんでるよ。』
『何うして？』
『靴が小さくて俺が足を痛くするから――。』
『どうも驚いたな。君はさうやつて何でも兄貴に頼つてるんだね。』
『呼吸以外はね。』
『で、もし泥棒が這入つて兄貴の金でもさらつて行つたら、君は一體何うするつもりだ？』
『その泥的を探すね。』
『そりやさうだらう。』
『捜し出してぜひ訊くね――何處に金が隱してあつたかつて。』
『かなはないね、君にあ。』
『いや。俺も其の泥棒にはかなはないよ。兄貴から金を取り出すなんて、じつに驚くべき手品だからね。あつはつはゝ。』
なんてのから初まつて追々政治上の問題や、その時々の出來

事を諧謔的に批評し合つたりするんだが、この人形の役は亞米利加の社會によくある「何をしても駄目な」「度し難い」「一家の頭痛の種の」「海軍へでも入れちまはふかと思つてゐる」弟の型で、觀客はめいめい親しくおぼえがあるから一句ごとに笑ひ崩れる。

これが寄席演藝の獨り言腹話術の種あかし。

見世物にもある。が、腑が落ちる。どうかすると演者の口の動くのが見えたり、さうでなくても人形が話してゐるやうには聞こえないことが多い。ヴエントリロウクイズムは遠くで發聲してゐるやうに思はせるところがこつで、聲が話者を離れゝば離れるほど上手といふことになつてゐるのに、それがすこしでも同じ人間が饒舌つてゐるやうな感じをもたせちやあもうおしまひだ。曲馬團の副見世物(サイド・シヤウ)なんかで草をむしつて來て、草が物を言つてゐるらしく見せかけようとしたりするが、大ていは失敗である。もつとも田舍の女子供相手だから、それでやんやと喝采されてはゐるが——。

交靈術(スピリチユアリズム)のまやかし物に腹話法を應用することがある。白い敷布かなんかをかぶつた幽靈をどろどろどろと出しておいて、實驗者がこつちから腹話で其の幽靈が何か他界の土産ばなしでもしてるかの如く聞かせようといふんだが、一頃こいつが英國に流行つて、死んだ亭主や父母に會つて其の後の模樣を聞きたいといふ特志家のあひだに、この腹話の交靈者が大持てにもてゝ引つ張り凧になつてゐた。賴むはうでも腹話といふことは百も承知してゐても、どうせ何にでも飽きて退屈し切つた上流の貴婦人達なんかのことだから、その餘りにも眞に迫つてゐる一時の感動と獵奇のために大金を出して招いたものであらう。幽靈を余興にお茶の會を開くなんて科學と哲學を完全に超越して近代的に痛快である。なに、幽靈のことだから言語の明晳は必要としない。出來るだけ陰深たる聲で鬼哭啾々と天國の門番聖ペテロとの會見記の一くさりでも演ればそれでいゝ。うす暗い室内に現れる幽靈は助手のこともあるし、降靈術者の手中にある特製の幻燈作用のこともある。そいつがぼんやりとヴエランダに立ち現れたりすると、術者が腹話で幽靈の聲を出すんだが、腹話である以上、前にも言つたとほり邊りが眞暗では聲の出所に錯覺を起させるのに不便だから、この種の職業的發音幽靈の實驗にはかならず或る程度の光線を必要とする。決してまつくらなところぢや遣らない。いくら幽靈だつて暗くちや出るにも引くにも躓いたり戸まどひし——ことに恐怖と尊嚴を生命とする性質上、轉んぢや片なしだ。

メリイ・メルバとかネリー・ネルバとかいふ男爵夫人だか子爵

夫人だかがあつて、このお婆さんはじつに驚くべき澤山の心靈經驗を有してゐるが、そのなかの發聲幽靈の大部分は、あとから思ふとこの腹話によるものであつたと告白してゐる。かつて亡夫の幽靈を出させてものを言はして貰つてゐると、蘇國人(スカッチ)の筈なのが幽靈にはすこしも生前の訛りがないので、夫人が不滿に思つて私かにその旨を呟いたところが、夫人の言葉が終るか終らないかに、幽靈は早くも語調を一變して吃々たる蘇國語を聞かせて吳れたといふことである。これで夫人が滿足したことは勿論だ。高價な幽靈なんだから、せつかく出ても思はしくなければ、投資者は何んなに個人的な苦情でも持ちだす自由があるわけで——夫人としては無理もない立場であつた。

さて發聲幽靈のことはそれでいゝとして、その後のウイラアド・オタ卿だが、卿は卿の獨語癖を放任して極度にまで、これを發達せしめた結果、ごく自然な過程として、いつの間にか押しも押されもしないヴエントリロウクイストになりすましてゐた。

で、卿が道具方として其の舞台裏を這ひまはつた北極光劇場(オウロラ・セアタ)を皮切りに、花々しく裏町の演藝界へ乘り出してゐた。

それにつけても、男爵夫人で氣がついたからまた取り紛れないさきに、こゝでちよつと——ウイラアド・オタの名に「卿(サア)」が冠するに到つた故事をあきらかにしておかう。

話しは昔へ返る。

5

もう話はむかしへ返つてゐる。

夏だつた。と先づ時候の觀念を與へておいて——。

さて、その頃オタはまだシュワルト家へ移らない前で、第七街のフインチ夫人の下宿にごろごろしてゐたが、そこに零落れ果てた英吉利の貴族でジョナサン・ダブス卿といふ青年が泊まつてゐた。ところがこのダブス卿に對する下宿中の人氣といふものは大した騷ぎで、食事の時なんかフインチ夫人が眞先に

『ダブス卿、お粥をもつと召上りませんか——肉は如何です、ダブス卿。』

なんかと下へも置かないもてなしだつた。これはお腹の空いてゐるオタの反感を買ふに充分で、その上、オタの部屋に飾つてあつた夫人の置時計まで何時の間にかダブス卿の室へ持つて行かれてしまつたので、ことにオタは、同宿の女達が先を爭つて「お早やう御座います、ダブス卿さま」といふ此の唯一つの挨拶をする機會を持つために早起きをする。ある者は前の晩からおきてゐる——なに、それ程でもない位——やうな歡待方を見

ゐるにつけ、その原因がダブス卿の人物でも男ぶりでも何でもなく單に「卿(サア)」の一字のために過ぎないと知るや、オタは猛然と奮起して自分に向つて宣言してしまつた。

『よし！ あいつが英吉利のダブス卿なら俺(ミイ)は日本のオタ卿だ！』と。

かうして間もなく、第三街のシュワルト夫人方へウイラアド・オタ卿と名乘る一人の日本青年が貸間を求めて現れたのであつた。

卿とある以上日本の貴族に相違ないといふんで、シュワルト夫人はすつかり昂奮した。

『あの、屋根裏でございますが――。』

と懼るおそる伺ふと、驚いたことには、オタ卿はさつさと荷物を提げて――自身でである――其の屋根うらの部屋へ上つて行つた。

いくら貧乏でも貴族には矢張り上品なところがある――シュワルト夫人を始め人々は好意の眼でオタ卿を眺めて、卿は直ちに下宿と界隈の適度の尊敬を受けることになつたが、そのなかにたつた一人あきらかに卿に顔を突き出してゐる少女があつた。ケテイと言つて眼の大きい髮の黑いそばかすだらけの、近處の菓子屋の賣子だつた。兎に角ほかの人はみんなオタ卿を小男爵――オタは自分を、財産をなくして海外に放浪してゐる日本の小男爵と觸れ込んだ――として取り扱ふのに、このケテイだけはふんと言ふ調子で、オタの存在それ自身を卿の爵位と一緒に常に無視してゐた。

ケテイのこの反逆的特徴はオタ卿の頭の中に彼女を強く印象させた。そして或る一人の女の印象は、長い間には戀愛に變化することもあり得るといふ公式のとほりに、ウイラアド・オタ卿はやがて意識してケテイを戀するやうになつた。が、ケテイは、「オタ」か「卿」のはうか、それとも二つをいつしよにして嫌ひなのか、てんでオタ卿に一顧も與へないで、果ては明白に彼を避けるやうにさへ見えて來た。

それはいゝが、戀はえて人をあからさまにする。ケテイを戀するやうになつてから、オタ卿がだんだん「卿」らしくなくなつて往つた。

そしてつひに緊要の日が來た。といふのは、同じ下宿にゐたぎりしや人の給仕人が、給仕人獨特の對人的直覺と言はうか、或ひは同業間の第六感といはうか、どうもオタ卿はものもあらうに給仕人らしいとの觀察を發表するに到つたのである。

『この間、先生階下の客間で何か書いて、その鉛筆を、かうね、かういふぐあひに耳へ挾んだんだがね、その時の樣子がま

るで注文を取つたあとの給仕人宜しくだつたよ。職業の習慣てものは鳥渡したところに出る。あいつ何處かの食堂ボウイぢやねえかしら——？』

といふやうなことから、其の晩、多勢が食卓についてゐる時、夫人が棚の鉢(ボウル)を取つてくれと言つたのでオタ卿が氣輕に立つて鉢を持つて來やうとすると、その鉢の持ち方、扱ひ方、ことに左のはうからすうつと手際よく夫人の前へ置いた物慣れた鮮かさ——それらを眼ざとく見つけた希臘人が、鋭く、

『給仕(ウエイタア)！』

と呼んだものだから、オタ卿はうつかりと、

『はい。只今。』

と職業的に答へてしまつた。冗談にしては餘りに眞に迫つてゐて、誰も笑へなかつた。笑つたものもあつたが、それはオタ卿がたうとう給仕人である事實が露(ば)れたことを笑つたのだつた。

オタが小男爵でも卿でもなく、たゞの給仕人ウイラアド・オタに過ぎないと判明しても、シユワルト夫人を始め一同はそんなことは直ぐに忘れて、其の後もやつぱりオタ卿と呼んでゐた。が、變つたのはケテイだつた。オタが貴族でないと知れると、彼女は急に親しくなつて、そのうちにこんなことを言つた。

『だつて、「卿(サア)」なんてさつぱり人間らしくないんですもの。あたし、あなたは前から好きでしたけれど、そのためにわざと嫌ひに思つてゐたの。』

「國のない人々の國」だ。人種の見さかいなんか始めからない。オタ卿とケテイは直ぐに結婚したが、可哀さうに間もなくケテイは死んでしまつた——。

何年も何年も前のことである。

それからこつち、ずつと第三街に歴史あるシユワルト家の其の歴史の一つのやうに、そこの屋根裏に獨語を言ひつゞけて燻ぶつて來たわがウイラアド・オタ卿は途中一度あのロクサナとの浪漫があつたきりで、いまは當年の紅顏の給仕人が、かくも淋しい眼の豫言者になつてゐる。

が、ケテイに死なれたことによつて取つ憑かれた悲しい獨り言の癖が、卿をして今日あらしめたのだといはなければならない。

ウイラアド・オタ卿は、目下第三街附近の寄席に鳴るさうさうたる腹話術(ヴエントリロキヅム)の大家である。

はなしがこの點まで進展して來ると、こゝへ必然的に「國のない人々の國」の第一番の大立物が割り込んでくるのだ。

ジプシイといふ一群である。

だしぬけのやうだが、ジプシイとは何か——なんてことは誰でも知つてるもの丶、これも一應考へてみないと繼ぎにならない。

で、ジプシイとは何か。

ジプシイてのは、歐羅巴と亞細亞の大部分、南北あめりか、亞弗利加、濠洲、ことにろしあ、土耳古、はんがりい、西班牙、英吉利などに散在してゐる遊牧の民で、ジプシイといふ言葉は英吉利でいふエジプシアンから轉訛したものだが、このほかにも廣くぎりしあ人異敎徒、ボヘミア等の語をもつて呼ばれてゐる。ジプシイ自身はじぶん達のことをロマニイまたロマノといつてゐるが、最初何處から來た人種だか判らない。たぶん印度からだらうと言ふことで、彼らじしんの記錄によれば小埃及即ちエピラス地方の出となつてゐる。歐羅巴に始めてジプシイの現れたのは十二世紀だつたが、十五世紀に到るまではさまで社會的に注意されなかつた。英吉利へは十五世紀の末に渡つたものらしく、ハリルドで蘇國王ジエイムス五世の前で或るジプシイが踊つたことが古書に見えてゐる。はじめは歐羅巴でもジプシイは評判がよかつたもので、金屬の細工物が上手なので非常に重寶がられた。が、間もなくジプシイは子供を誘拐するといふので到るところで處刑され、迫害された。しかし、のんきな連中で音樂と舞踏に長じ、現在のジプシイの男の職は伯樂と鑄掛屋で、女ジプシイの仕事は占ひと籠作りにきまつてゐる。その他ジプシイ全體の民族的事業としてはこそ泥、箒賣り、刺靑師、殺人などだ。スミス、スタンレイ、リイ、ラヴルなんて姓は大概ジプシイの血統で、見たところ何となく身體が柔軟で、皮膚はおりぶ色、眼が光澤のある黑、齒がばかに白く綺麗で、頭髮は漆黑だ。一眼見て感じで判る——これがジプシイ。

このジプシイは昔から國のない人々なんだから、第三街の近邊では、其の國際的に出鱈目なところが、彼らを一つの權威ある存在にしてゐたが、そのジプシイ仲間でも名打ての遣り手として聞こえてし、こ、たまお金を留めてゐたのが、この物語（ナラチヴ）に重大な關係のあるレベカ・ボスウエルといふお婆さんであつた。

石炭がらみたいにかさかさな此のレベカ・ボスウエル婆さんは「智的な金魚」（インテレクチユアル・ゴウルド・フイッシュ）を使ふ賣占者だつた。——

第三街。シユワルト夫人の質屋の前をすこし河のはうへ下ると、にわかに軒の低い家が二三並んで、そのなかの一つに、窓に素人らしい手でへんてこな魚の繪が極彩色で書いてある。上に半圓を作つて「身上判斷」（フオウチユン・テラア）と讀めるから、その魚の繪こそは「智的な金魚」を指すもので、これがレベカ・ボスウエルの住

ひなのだ。

段を上ると妙なにほひがする。皮と錆と油がごつちやになつたジプシイの人種臭だ。それを我慢して扉を叩けば、原色の布を頭からかぶつて、袖の大きな白い着物の胴を締めたレベカ・ボスウェル婆さんが派出な洋袴をして、木の枝の杖をつき突き、自分で出て來て戸を開けるであらう。

這入る。

6

はひると直ぐに裸かの床の狹い部屋で、家具と言つては片隅に寢臺が一つ、卓子が一つ、それを中に壞れかゝつた椅子が二脚。それだけである。

が、幌車を馬に牽かせて兩大陸を流れ歩いて來た民族だけあつて、その頃の風が遺つて矢鱈に飾が下つてゐる。壁も窓も天井も赤や青の布で一杯だ。それが、そこらに置いてある頭蓋骨や蛇の乾物や標本用瓶詰の胎兒や、背皮のぼろぼろになつた古い分厚な書物や剝製の小動物や、馬具やら鈴やら繩やら索やら小刀やら、さうかと思ふと萬國々旗の額やら燭臺やら死刑の繪やら、羅針盤や古風な時計や犬の顎や呑氣めいた赤茶けた寫眞や歌留多や鏡や西班牙煙草の罐や、石のやうにこちこちになつた植物やほんとの黑い石ころや――さう言つたものが壁に卓子に床に雜然と散らかつてゐて、全く足の踏み立て場もない。が、その中に一つ、じつに奇態なものがこの部屋へ這入ると同時に訪問者の眼を惹く。それは窓ぎわに据えられた金屬製の三脚で、眞鍮の棒を三本、三分の一程上部のところで縛つて下を擴げて立てゝあるんだが、その上に開いた三つの金棒のなかに、傾むすほどの硝子の鉢が載つかつて、内部に濁つた水が盛られて元氣のない金魚が一匹しようことなしに泳ぎまはつてゐる。

レベカ・ボスウェル婆さんの「智的な金魚」といふのがそれである。

いかに智的であるかといふと、金魚がものを言ふ――。

『おすわりなさい。』

これはレベカ婆さんの命令だ。で、据わる。お婆さんも机をへだてゝ椅子にかける。そして默つて依賴者の顔を凝視める。お婆さんは人相を觀るのだ。

いつまで經つてもぢつと動かずにゐる。そこでこつちから色んなことを訊くと、レベカお婆さんは靜かに金魚鉢のはうを向く。うす汚れた水の中で智的な金魚が浮いたり沈んだりしてゐる。やがて、

「この緣談、急ぎさへすれば纏る。」

だの、

「資本はあとからつく。迯らはずに直ぐ事業に着手なさい。」

だのと、此金魚がすべての質問に答へて呉れる。金魚らしい細い澄んだ聲が、窓のそばの金魚鉢の水泡から聞こえてくる——やうな氣がするだけで、實は、言ふまでもなくレベカ婆さんが口の中で饒舌つてゐるのだ。例の腹話術（ヴェントリキヤム）である。

經驗によつて觀相は達者だつたから、この金魚のお告げがまたよく適中した。「智的な金魚」の占ひは實際素晴しい思ひつきで、レベカ・ボスウエルのお婆さんはこれで一財産作つて、その全部をひとり娘に讓つて死んで往つた。

だから、いまのレベカ・ボスウエルは若い綺麗な女だが、この二代目レベカは人相見も下手なら、第一腹話がなつてゐない。腹話なんてものは習つて出來るものではなく、先代のレベカ・ボスウエルやウイラアド・オタ卿のやうな名人上手になるには、先天的に特殊な口腔と舌の構造を或る程度まで必要とするのに、それが欠けてゐるとみえて、二代目レベカは幾ら稽古してもヴエントリロウクイストにはなれなかつた。腹話が駄目なら「智的な金魚」はおぢやんである。そのため「國のない人々の國」の名物が一つ減つたけれども仕方がない。若いジプシイ娘のレベカ・ボスウエルは大きな財産で寢食ひしながら毎日遊んでばかりゐた。

さてと——その年になつて紐育に初雪の降つた日の夕方だつた——。

暗い低い空が第三街を押しつけて、みんな外套の襟を立て、斜（はす）になつて歩いてゐた。きらめき出した電燈の光線のなかを白い塊りが踊り狂つて、飾窓の硝子に結晶體の模樣が浮き出てゐた。

から毎年降誕祭近くなると、ウイラアド・オタ卿は赤い火影の搖れる爐ばたの大椅子を思ふ——つまり、家庭といふものへの憧憬が耐らなく胸へこみ上げてくる。

それを押へて、卿はひとり靜かに料理の皿を突ついてゐた。

北極光劇場のうらにカトリオニの東洋料理屋といふのがあつて、すでに東洋（オリエンタル）といふくらゐだから支那人か日本人の店だらうと思ふと、それがシシリイ島人の料理屋だつた。伊太利風の、ちよつと特色のあるものを食はせるので、卿は晩飯は三日に一度はそこときめてゐた。その日も腹話の出演のあひ間を見て、このカトリオニのシ、リイ料理へ食事に來てゐたのだつた。

オタ卿が僞んやりとオリグラトンの乾酪を口へ運んでゐると、そつと背ろから肩を叩くものがある。振り返つてみると、

同じ小屋に掛つてゐるジプシイ一座の花形男優として近處の人氣を集めてゐるラモンテイヌだつた。

『何うなすつたんです？ばかに考へこんでるぢありませんか。』ジプシイの役者は快活に椅子を引き寄せた。そして、オタ卿が默りこんでゐると、しばらく躊躇したのち、ラモンテイヌはこんなことを言ひ出した。

つぎはラモンテイヌの言葉である。

『私はよくあなたに間違へられますが、あなたは私に間違はれることはありませんか。え？あるでせう？日本人とジプシイで何方も髮が黑かつたり膚が淺黑かつたりするからこれは仕方がありますまいが、その上私とあなたは顏まで實に似てゐるつて樂屋で言つてますよ。さうでもないが、でも、似てますね。え？あなたはさう思ひませんか。さういへば、私は全くよく似てゐると思ふ。何しろ、しよつちう間違はれるくらゐですからね。ま、それはそれとして、ちよつとあなたにお願ひしたいことがあるんですがねえ——話しだけでも聞いて呉れませんか。さうですか。いや、有難う。では、かい摘んでおはなしゝますが、私は今じつは一つ困つた問題があるんですよ。えゝ何つて、じつさい、その、困つてるんです。弱るんです。といふのはですね、恥を言はなければ判らないが、お祭しの通り女のことなんでしてねえ——。

なに、古い關係ぢやあないんです。ごく新しいところで、正直、關係も何もありやしない。たゞ紹介されたばかりで向うが勝手に熱くなつてるんでさあ。

はゝゝ、かういふと馬鹿に色男振つてるやうですがね、罪實は私も惡かつたんです。いや、罪の半ばは私にある、とまあ、私は思つてるんですが、それと言ふのが私もさりげなく水を向けたんですからねえ。もつとも、これが此の飛んでもない間違ひの最初だつたんですから、どうも全體が皮肉に出來てますよ。

なんて私ひとりが承知顏に饒舌つてたんぢやあ何の事やらさつぱりお判りになりますまいから、思ひ切つて初めからぶちまけますがね——。

實は、あの、レベカ・ボスウエルつて女なんですよ、相手は。

えゝ。友達の家で會つたんです。それからまあ、交際を始めたんですがね、人に聞いてみると、その女のお袋つてのは有名な吝ひ者で、隨分金を殘して死んだらしいんですな。そこで私も考へましたよ。私だつて何時までも舞台にゐたつて段々映えなくなるばかりですから、いゝ加減に潮を見て引つ込まなけれ

あならないが、それには與を決めておくことが第一でせう？で、私は、これだな！と思つたんです。一つこの女を摑まへて結婚の約束でもして置かう。金は唸るほどあるつていふし、女も滿更でなし、占め々々！といふわけで精々今まで機嫌を取つて來たんですがね、それがあなた、莫迦々々しいぢやありませんか。昨夜はじめて判つたことなんですけれど、何うも變だと思つてよく本人に聞いてみると、なあんだ！同名異人なんですとさ。名前は同じだが、あの金持ちのレベカ・ボスウエルぢやないといふんです。

何處かそこらの店に働いてゐるんださうですが、これには私もがつかりしましたね。何だか玩具にされたやうな氣がしましてね、詰らないやら癪にさわるやらでぼうつとしちまひましたな

ところが、こゝに弱ることは、女はそんなことは夢にも知らないで、益々追つ驅けて來るんです。今日なんかも四度も五度も電話を掛けて寄こして、今夜こゝの食堂で會ふことになつてるんですがね、私はもう御めん御免！――あのレベカ・ボスウエルと思へばこそ今までお金のためと思つて一生懸命つき合つて來たんで、それが別人と判れば、何だか非道く不人情たやうですけれど、あんな女にもう要はありませんや。

そこで何うでしせう？お願ひと言ふのはほかでもありませんが、一つ助けると思つて私の身代りになつて、今晩ちよつとそいつに合つてやつて呉れませんか。いえ、大丈夫ですよ。夜ですし、それにこの通り電燈が暗いし、なあに、顏を陰にするやうにしてゐれば露れつこありません。え？じつさい、全く、失禮ですけど、あなたと私は似てますからね。私はよくあなたに間違へられますが、あなたは私に間違へられることはありませんか。え？あるでせう。似てゐるんですよ事實。それ程似てる。ねえ、馬鹿な女なんか誤魔化すのに世話はありません。もしさうして戴けると私は大いに助かるんですがなあ――ちよつと他へ廻るところもあるんでしてね。いゝえ、決してばれませんよ。また、よしんば露れたつていゝぢやありませんか。あの女あなたになら私よりももつともつと參つて來ますよ。え？何うしようと元より御勝手です。あなたに上げますから其の女を。進呈しますから――え？どうせ退屈してらつしやるんでせう？面白づくに何うです？一つ快くお引請け下すつちやあ。」

退屈してるでせうから面白づくに――がオタ卿のこゝろを動かしたものとみえる。またラモンテイヌにはかなり似てゐるのを幸ひ、オタ卿は「快く引請け」てしまつた。頼むはうがジプシイの役者ラモンテイヌなら、頼まれたのが日本の小男爵ツイ

ラアド・オタ卿である。しかも、ところは「國のない人々の國」だ。こんな相談は直ぐに纒まる。

かうして其の晩、オタ卿はラモンテイヌのかはりにカトリオニでジプシイの女に會つた筈なんだが、それから間もなく、腹話者オタ卿は寄席を退いて、第三街の智的な金魚の家レベカ・ボスウエル方に納まり返ることになつた。女は矢つ張りあのレベカ・ボスウエルだつたのである。

何でもあんまりラモンテイヌがお金のことばかり口にしてそれを目的に自分を丸め込まうとしてゐるらしいので、レベカが鳥渡同名異人だと嘘を言つてみたところが、果してあのとほり早速逃げ出してしまつた。そしてカトリオニで身代りのオタ卿にあつたレベカは、勿論直ぐににせのラモンテイヌであることを看て取つたけれど、どうせ退屈してゐた矢先だから面白づくに知らん顔をして其の後も交際してゐるうちに、レベカはほんとにオタ卿が好きになつて、自分から進んで結婚を申込んで、弗の香を嗅いでくるラモンテイヌを見事に振るひ落したあの「同名異人」の秘傳などを笑ひながら話したりした。結婚の相談なんか直ぐに纒まるのが第三街である。オタ卿はジプシイの富豪ボスウエル家へは入りこんで、レベカから傳授を受けていゝ加減に人相を親ながら、金魚らしい素晴しい聲の腹話で、ひたすら金魚に何か言はせてゐる。

「智的な金魚」が復活したのだ。

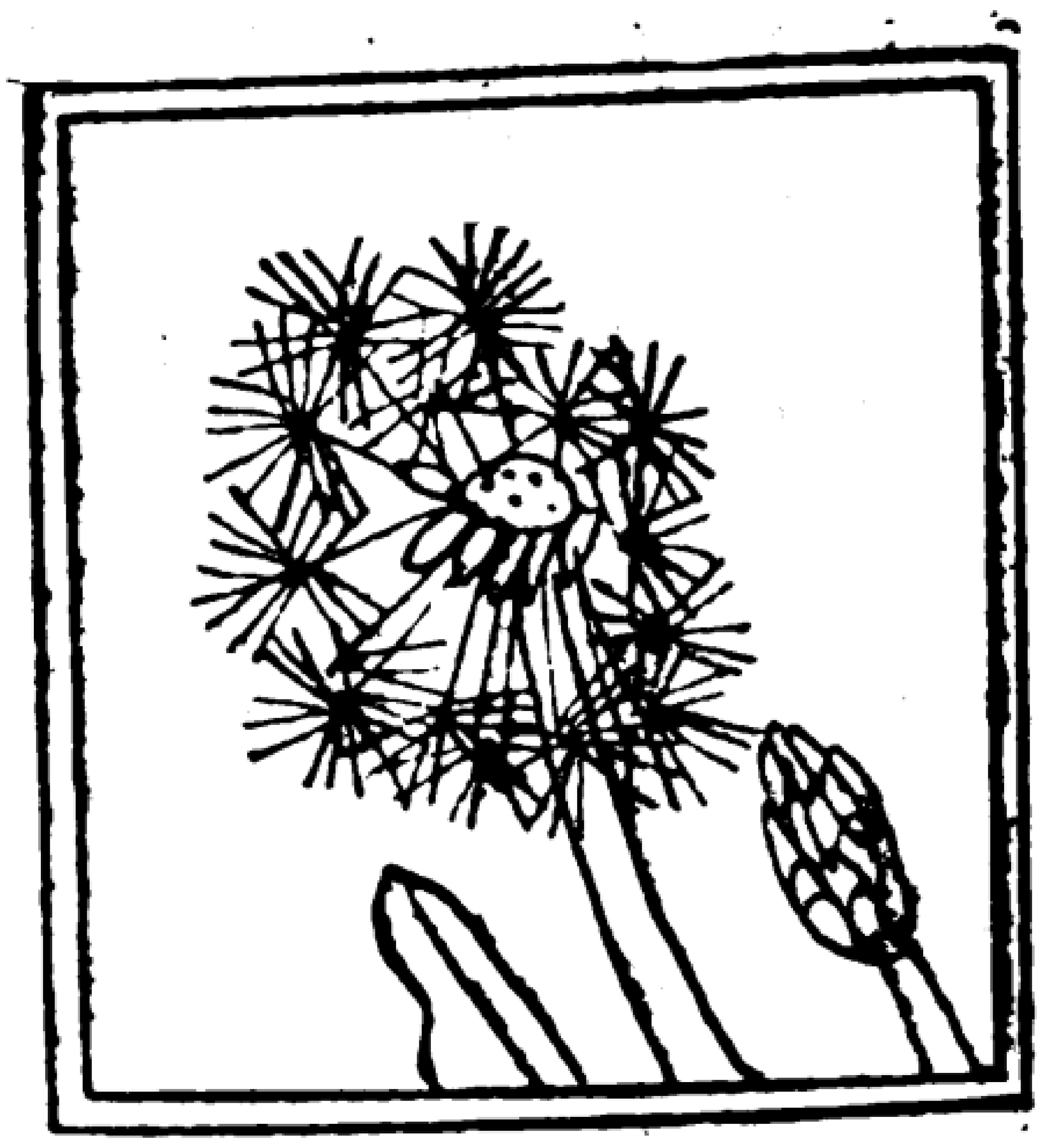
「國のない人々の國」の人々は一體何の力によつて踊り踊らされてゐるのだらうか——それは自分達じしんのあの悲しい眼の魅惑ではなからうか。

『何うしてあれがあゝなれば、そのためにこれがかうならなければならないのか——何しろすべて第三街の出來事なんで、どうも私にも判らないことばかりです。』

神樣がかう仰言つたら、悪魔が直ちに同意した。神樣と悪魔が見解をおなじうしたのは後にもさきにもこの時きりだ。

「國のない人々の國」には色んなことが起る。

——おはり——



當なし行脚（其六）

魚河岸＝泥沼＝木場＝木賃宿＝玉の井

堺　利　彦

一　魚がしの朝

お前も柄になく一等旅客にまで成つて見たのだから、今度は一つ木賃宿旅行でもやつて見てはどうだといふ、『一讀者』からの勸めを受けた。そしてそれには、東京市中の深川、本所、淺草あたりを舞臺にするのが適當だと云ふので、我が『一讀者』は私の行脚すべき日數と順路まで親切に立案してくれた。私は大體それに從つて歩いて見る事にした。

十月末の或日午前六時前、兎に角私は或る電車に飛び乘つた。乘客はまだ多くなかつたが、その大部分は勞働者風だつた。殊に私の目についたのは、トタン製の四角な箱の樣な物に幅廣の眞田紐を附けて、それを肩に掛けた人が、そこにもこゝにも、凡そ十人ばかりも居る事だつた。電車は築地行だつた。築地の終點で降りると、乘客の大部分は皆ぞろ〳〵と本願寺の方に行く。トタン箱の人達も皆そちらに群れて行く。私も自然それについて行つた。本願寺の横を通つて、右に折れ、左に折れ又右に折れて行く中、そこらにある店の樣子がどうも尋常でない。何だか生々として、ひどく活氣がある。山葵、生薑、紫蘇の實、ウゴなどの類を並べた店が幾つもあるのは、どうしたのだらう。そうかと思ふと又、ゴム靴專門の店の幾つもあるのが、

どうも不思議に見える。變だな、變だなと思ひながら行く中、例のトタン箱の人達が更に其の數を增して來る。氣がついて見ると、その人達が大抵みんなゴム靴をはいて居る。色々な飲食店がある。天ぷら屋がある、すし屋がある。そのすし屋でフト思ひついた。あゝそうかも知れない。でもまだしつかり分らないで、トタン箱の群について行く中、果してそこに『魚市場』と書いた大きな看板が現はれた。

魚がしが日本橋から築地に移つた事を知らないわけでもなかつたが、兎にかく見るのは今が初めてだ。何だか知らんが、滅茶々々にごたついた處で、荷物自働車が無數にある、自轉車が無數にある。大小の荷車が無數にある。水にぬれてジメ〳〵ビチヤ〳〵した地面を無數のゴム靴が縦横に踏みにじつて行く。甲斐々々しいおかみさん姿さへ矢張りゴム靴をはいて居る。その間を、東京見物の田舎者らしい親爺が、日和下駄を引きずつてトボ〳〵と歩いて居るのは、さぞ間が抜けて見えただろう。然し別だん叱られもせず、只だ折々少し突き飛ばされながら、その中をくぐりぬける様にして進んで行くと、無數に立ち並ぶバラック式の棟々の下に、各種各様大小無數の魚が、青い光、赤い光、白い光を放つて、到る處に新鮮の氣をただよはせて居る。この大ぜいの人が、このおびただしい魚を、買つて居るのか、買つて居るのか、誰が何をどうして居るのか、素人目にはサッパリ分らないが、兎にかく魚は今片はしからズン〳〵と運ばれて行く。自働車で運ばれて行く、自轉車で運ばれて行く、手押しの荷車で運ばれて行く、例のトタンの箱で運ばれて行く、天秤棒の兩側にユサ〳〵とゆれる半台で運ばれて行く。蝦か何か一ぱい盛つた木箱が、犬にでも挽かれる橇の様に、泥の上をズル〳〵と引きずられて行くのもある。鰹か何かの大きな頭が目を光らせながら、首實檢にでも供へられる様に、兩手に捧げられて行くのもある。氷の屑に埋まつた小鮒の群が、もう觀念したらしく、箱の中に頭を並べて、おとなしく連れられて行くのもある。湯氣のポカ〳〵と立登る、赤い大きな蛸入道の一組が、それ〳〵竹籠の中に頑張りながら、無念のまなざしで囚はれて行くのもある。

暫くして人の群れが少しまばらになつたので、私は恐る〳〵市場の稍や奥の方にはいつて見た。道のかたへに巨大な鮪が幾つも幾つも寝てた様に轉がつて居る。首を切り落されたのもあり、片身をそがれたものもある。そがれた片身は切石の様な四角な肉塊に揃へられ、落された首は、まだ其のまま打つちやつてある。白く光る、長い大きな庖刀で、その大きなズカ胴が、今や正にザクリ〳〵と切り割かれつゝあるのもある。切り落して

られた尻尾を繩で縛つて、提げて行く男もある。

その直ぐそばに數個の屋臺店が並んで居た。天ぷら、牛めし、おでん、すしなどがある。まだ朝飯を食はない私は、吸ひつけられる樣に其のすし店の前に立つた。魚がしの朝のすしは本當に旨かつた。殊に、薄桃色をした齊身の鮪が堪らんほど旨かつた。

二　おでん屋の朝酒

引返して市場の外に出た。そこもこゝも飲食店が賑つて居る。或おでん屋が又私を吸ひつけた。客は皆なコップ酒をチビチビやつて居る。絣のうはつぱりを着て、丸髷をキチンと結つた、可なりキリヨウのいゝおかみさんが、同じくコップを前に控へて平氣でやつて居るのが殊に面白かつた。

『御免なさい。』私がさう云つて連中の間に割りこむと、兩隣の人は少しづつ腰かけをずらせて、愛相よく私を迎へて異れた。私は大根と豆腐を貰つた。そして同じく一ぱいのコップを控へた。コップは小鉢の中に据えてあつた。小鉢の中には山盛の酒が溢れ落ちて居た。この溢れが嬉しいのである。淺ましい話だが、私は監獄の汁の溢れを思ひだした。あそこでは、汁が膳の上にあふれると、皆が嬉しがつてそれを膳の角から吸ふのだつた。こゝでも私は先づ鉢の中の溢れを飲んだ。酒は悪くなかつた。

客は大てい定連と見えて『オヤおとつさん、入らつしやい』などと女中が云ふ。『ヤア、しばらくぶりですな』などと客同志が挨拶する。私の隣席の三十男は本願寺邊の魚屋さんで、皆の顔を見渡しては獨りで、氣焰を擧げて居る。『俺の樣な奴でも、これで親方だと云や、矢つぱり内の若い奴等あチリ〳〵してやがる。ハハハア、おかしなもんだぜ。だけど金の野郎、――金て奴が俺の内に居るんだが、――そいつが近處のカフエーのおふじといふ女に惚れやがつて、ナーニ向ふぢや何とも思つてやしないのに、そそつかしい野郎で、腕にフヂとほりものをしやがつた。何でも絹針を四五本買つて來やがつて、毎日チク〳〵やつて居たが、四五日するとチヤアンと出來た。所がどうだい、女は町内の呉服屋の番頭と二人で家を持つちやつた。………』

『ずいぶんそそつかしいわね。』おでん屋の女中が口を入れた。

『イヤ、そそつかしいも何もあつたもんぢやねえ。サアそれから金の野郎、ヤケを起しやがつて始末にいけねえ。それで俺が一つ取つちめてやらうと思つて、或晩おそくまで店に頑張つて待つて居たが、野郎歸つて來ねえ。俺ア我慢しきれねえで寢ちやつたが、フト目が覺めて見ると何だか變な聲が裏口の方に聞える

ちやねえか。おかしいと思つて裏口の戸を開けて見ると、金の野郎がズブ〳〵に醉つぱらつて、グウ〳〵いびきをかいて寢てやがるんだ。俺ア驚いちやつた。この野郎！ 何ていザマだと引きずり起すと、野郎ビックリすると思ひの外さ。——ナニ親分だア？ 親分が何でい。俺をどうしようていんだ。サアどうにでも勝手に仕やがれ。——手が附けられねえ。俺の方が强いかと思つたら向ふの方が强いや。親方が若い者と喧嘩しても始まらねえ。仕方がねえから欺しすかして內に抱きこんで寢かしてやつた。……』

こんな話の中に、丸髷のおかみさんは默つて去り、『おとつさん』と呼ばれた男は、『卷煙草が一本ないか』と、おでん屋のおかみに無心した。『あゝ見てあげよう』と、おかみは奧てはいつて行つたが、やがて卷煙草を二本つまんで來て、一本を『おとつさん』にやり、一本を自分で吸つた。

本郷の親方の話はこゝで一轉した。『だけど俺ア考へるよ。俺ア女房も無いし、子供も無いし、これで先にどうなるんだろう。』『マア、とんだ述懷だわねえ。まだ先々なんてい年ぢや無いぢや無いの。』おかみがそう云つた。『あなたナゼおかみさん貰はないの。』女中がそう云つた。『だつて俺ア女房なんてうるさくて仕樣がねえ。お蔭で每日こうして、朝つぱらから二十錢三十錢と一杯づゝ、行く先、行く先で戴いてりや天下太平だ。出入には自働車にも乘るしさ、尤も荷物自働車だがね、アハハ。俺ア餓鬼の四五人もかゝえて苦勞してる奴の氣が知れねえ。……』

この時、店の表に七十近いと見える老人が誰かと立話をして居たが、やがて例のトタンの箱を肩にかけてスタ〳〵とあちらに行つた。『おとつさん』は其のうしろ姿を見やつてから斯う云つた。『こゝの內ぢやア、こうして每日、店からは莫大な揚りがあるし、……』

『莫大と來たもんだ！』と女中が口を入れた。『おとつさん』はそんな事に頓着せず、『それに娘は專賣局に務めて給料が取れるし、おぢいさんまであんなにして稼ぐ事はありやしない。』すると、おかみは、『あれがあの人の病ひさ。あれをやらなきや寢られないと云ふんだから。』それぞれの生活が面白い。

三　女生徒のダンス

私はそれから隅田の渡しを渡つて月島に出た。半町ばかり行くと、左手に眞白い大建築がある。小學校だ。そして今日は、その廣庭で運動會をやつて居る。廣庭に沿うた往來には、近處の人達や、通りかゝりの人達が群がつて、柵を隔てゝ見物して

居る。私もその間にもぐりこんで見物した。私に取つては、ずいぶん久しぶりの、珍らしい光景で、足の痛いのを我慢しいしい、とう〳〵二時間ばかり立つて居たほど、それほど運動會を面白く感じた。晝の休みには直ぐそばの公園で遊んで、午後は更に公園の石棚の上にあがつて、そこに立つて見物を續け、足の痛いのを又二三時間も我慢したほど、それほど運動會が面白かつた。

體操が、これまで、私共の見なれたものとは大ぶん違つて居た。一人が逆立をすると、一人がその足を持つところなど、『迚も面白』かつた。然しそれはまだ大した事にも思はなかつたが、女生徒のダンスには聊か驚いた。ダンスと云つては惡いかも知れないし、手踊りと云つては勿論不都合なのだらうが、兎にかくそんな様な運動をやつて居る。こんな『淫蕩』な風俗は、共產黨、耳かくし、モガ・モボの類と同じく、正に『撲滅』に値するものでは無いか知らん。然し又、女生徒の徒步競爭に、途中で手拭をかぶり、襷をかけ、バケツを提げ、箒を持つて駈けだすところなどは、『女らしい』良風美俗を飽くまで保存するものとして、大いなる感嘆に値するのだらう。然し又、女らしいと云へば、ダンスや手踊りも大いに女らしいのだから、あれも矢張り『良風美俗』なのだらう。之を要するに、男の爲に家庭の事務に當る事と、男に對して媚を呈する事とが、同じく共に『女らしい』のである。

一體に洋服の女生徒の多いのに驚いた。それと同時に、その間に交つて居る、少數の、和服の生徒が氣の毒に見えた。レースの時など、和服の女が袴をまくりあげたりするのを見ると、明らかにそれがハンチキヤツプであつた。或る競爭の時、勝つた娘達が校長先生の前に並んで賞品を貰ふのに、それが皆な洋服姿ばかりだつたのが、特に私の目についた。もちろん、和服が一着になり、二着になる場合も無いでは無いが、洋服ばかりがズラリと並んで賞品を貰つた時、そこに理由が無ければならぬと考へられた。袴が邪魔になつたのか、平生の營養不良がハンチキヤツプになつたのか。

洋服の女生徒だけの演技が一二回あつた。五年は白の上衣に黒の裙の揃で、三年は白のエプロンの揃ひで、どちらも美しかつた。それはいづれも『あした明治神宮に行く』のだと、見物の人達が噂しあつて居た。その仲間にはいれない和服の子達が、どんなに寂しい氣持になつてるだろうかとは、誰も語つて居なかつた。

四　泥舟の生活

月島の大通りの夕暮は物さびしかつた。道路はだゞびろく、兩側の店屋は低く、人通りは少なく、あちこちに大きな工場めいたトタン屋根の建物がデコボコして居るのも、何んだか落ちつきがない。私はこの無趣味な新開町をブラ〱歩いて見た。

やがて月島橋の上まで來た。私は暫くその欄干にもたれて夕暮の景色を眺めた。橋の下の堀には舟がたくさん泊つて居た。私が橋の欄干から眞下に見おろした處には、三艘の空舟が右手の岸に近く並んで居たが、その向ふに續いて居る十艘の舟は皆泥舟か塵舟であつた。あちこちの舟から煙が立ち登つて居た。夕飯の仕度だろう。

短く切つた小いさい薪を小刀で細く割りながら、それを七りんで燃して居るのも見える。稍や大きな金屬製のヘッツイに釜をかけて、黒煙を出して居るのも見える。赤ん坊をおぶつて、舟べりでお櫃を洗つて居る女もある。小さいバケツに棕櫚繩をつけて、それで水を汲んで居る女もある。米をといで居るのもある。盥に洗物をつけて居るのもある。積みあげた泥の中に斜めに突きさした丸太棒を物干竿にして、それに掛けた襦袢やおしめなどを、今取りおろして居るのもある。

私の目の下に並んだ三艘の空舟の中、中の舟には男達が三四人集まつて、腰かけたり、寝そべつたり、卷煙草を吹かしたりして、何か頻りに語り合つて居た。右の舟では、おかみさんが中の舟に向つて何か大きな聲で怒鳴りつけて居た。左の舟では、こちらに背を向けたおかみさんが、獨り默つてセツセと働いて居た。子供達は舟から舟へと行つたり來たりして、遊んで居た。五つか六つばかりの女の子が大きな鞠を川の中へ落しこんで泣きだすと、十一二の男の子が舟べりに腹ばひになつてそれを拾ひあげてやつた。

船内の構造を見ると、舳(へさき)の方の凡そ三分の一(或は四分の一)が住居で、あとの三分の二(或は四分の三)が荷物の積み場である。住居の部分には低い屋根があつて、その屋根は(多分ガラス)の引窓になつて居る。そして其の上に防水布らしい蔽ひが掛けてある。今、私の目から見ると、舟は三艘とも、舳を向ふにして並んで居るが、その中の舟の屋根の右側に一人の男がもたれかゝつて居り、屋根と荷積場との境に置いてある箱の上に一人の男が腰かけて居り、その箱の兩側に二人の男がしやがんだり横になつたりして居る。そして屋根の左側の引窓があけてあつて、そこから子を負ぶつたおかみさんが出て來たり、又そこに這入つたりして居る。屋根の下には疊か胡蓙が敷いてあるらしい。そこの廣さは四疊半か、或はこれ以上あるだろう。

やがて中の舟の集合所から、右の舟の親爺らしいのが立ちあ

がつて、右の舟に戻つて來て、屋根の向ふに置いてあつた大きなバケツを取り上げて、それを提げて向ふの泥舟に渡つた。その泥舟の右の舟べりから橋板が一枚、川岸へ掛けわたしてある。それが此の一群の舟と川岸とを繋ぐ道路である。そしてその川岸の、橋板から三間と離れない處に、水道栓が一つ立つて居る。右の舟の親爺は、そこに飲水を汲みに行つたのである。蓋しこれが先程、おかみさんに怒鳴られた結果なのだらう。

　右の舟のおかみさんは、夕飯の用意を荒かた濟ませたと見え、赤坊を脊中からおろして乳を呑ませて居たが、中の舟の男達が皆それぞれ立つて行つたのを見て、今度は彼女がその舟に渡つて行つて、暫く例の箱の上に腰かけて、そこのおかみさんと話して居た。然し又暫くすると、彼女は更に左の舟に渡つて行つて、そこのおかみさんと話して居た。隣づきあひ、先隣づきあひの趣きが面白く見えた。

　例の橋板から黑犬が一匹のそ〳〵と舟の社會に入りこんで來た。然し彼は直ぐに泥舟のおかみさんから追ひ返された。黑犬とすれちがひに、襟のついた半天を着て、手拭を肩に掛けて、何か新聞の紙ぎれにくるんだ物を片手に持つた男がやつて來た。これは早仕舞の船頭さんが、夕飯のおかずに魚の切身を買つて、お湯から戻つて來たものらしい。彼は舟べりから舟べりを傳つて、遙か向ふの艜舟の中にはいつた。空舟組の船頭さん達も、それぞれ勞働服を脱いで裾の長い着物に着かへた。左の舟の親爺が先づ手拭をさげて橋板を渡つた。それが橋の上まで來ると、欄干から下の舟を見おろして『待つてるぞ』と呼びかけた。『ウ、今行く。』右の舟の親爺が答へた。右の舟のおかみさんも橋の上を見あげて、『×さん、風呂錢持つてるか。』『あゝ持つてる。』『ぢや、貸しといてお吳んなさい。』蓋し小錢が無いので、內の親爺の爲に風呂錢の立替を依賴したのである。右の舟の親爺も小ざつぱりした姿で橋板を渡りかけた。すると、『待つてろよ！』と泣きそうな顏で十ばかりの男の子が叫んだ。『俺の下駄がない』と云ふのである。親爺は又戻つて來て、荷積場の底をあちこち探してやつた。男の子は紺がすりの着物など着て、見苦しくない子振をして居た。やがて親子が連立つて出かけて行つた。

　男女が行つてしまふと、今度は女達が三四人連でペチヤクチヤしやべりながら出かけて行つた。三人までは赤ん坊をおぶつて居る。一人はピンを持つて居る。一人はザルを風呂敷に包んで持つて居る。それから買物らしい。もう大ぶん暗くなりかけて居た。

五　木賃宿の文化的進步

今日は運動會に熱心で晝飯を食ひそこねた。腹が大ぶんすいた。電車で門前仲町まで行つて、『名代ゆどうふ』で夕飯を食つた。

ゆどうふで一杯やつたので晝の疲れが出た。然し今から宿屋に行つたのでは、餘り夜が長過ぎる。時間をつぶすには淺草に限る。淺草に行つて曾我廼家九郎君の喜劇を見ながら居ねむりした。

今夜は何處にとまる。淺草から吾妻橋を渡つて本所仲の郷に出た。一讀者君のプログラムに從つて、小梅業平の安宿を目ざしたのである。仲の郷の停留所のそばを右にはいると、そこら一面が宿屋町で、『簡易旅館』『簡易宿泊』などの看板が軒並に掛つて居る。『御一名三十錢より』『三十錢より一圓まで』『別間あり』『入浴隨意』『室内寢具淸潔』『大勉强 親切丁寧』『勞働人歡迎』『宿料大勉强』『仕事のお世話します』など色色の廣告文句がある。『小梅業平木賃宿組合』といふ大きな判甲を押した張出しもある。

私はその中の、極あたり前らしく見える、或る一軒にはいつた。上り口の右手に十七八の娘がひとり、小机を前に控へて應接して居た。『泊めて貰へますか』と云ふと、娘は私の身なりを判定したらしく、『五十錢位ですか』と云ふ。正しいと云つて五十錢銀貨を出すと、娘は直ぐに帳面を開いて『お處は』と云ふ。私がその帳面を取つて自分で住所姓名等を認めると、娘は直ぐに立つて私を二階に案内した。段梯子なり廊下なり、存外奇麗な作りである。通されたのは三疊の部屋で、『定員一名』の札が掛つて居る。『お湯におはいりなさい』と娘が云つて呉れたが、私は疲れ過ぎて居たので、そのまゝグズ〳〵寢てしまつた。部屋は入口が障子で、突當りがスリガラスの窓になつて居る。蒲團はもちろん柔かではないが、黃縞の木綿地が少しも汚れては居ない。敷蒲團には白いシーツが冠せてあり、掛蒲團の襟にも白布が掛けてある。枕にも白い鞘がはめてある。總てが小ザッパリして居る。枕の堅いのだけには少し弱つたが、その外には何等の不快もなかつた。

フト人聲に目がさめると、娘が又一人の客を案内して來て居た。客は廊下から室内をのぞいて、私の寢て居るのを見て、『まだ蒲團は一枚か。もう何處でも一枚だぜ』などと云つて居たが、そのまゝ何處かに行つてしまつた。『別間』にでも陣取つたのだらう。又しばらく寢て目がさめると、今度は洋服の紳士風の人が大きなカバンを提げてはいつて來た。狹い處に一[illegible]れたか

ら叶はん』と、相客のあるのが不平らしく、『毎晩來るのだから、成るべく部屋を極めてくれよ』とは云つたが、そのまゝ娘が床を敷くのを待つて、直ぐに私の横に寢てしまつた。私もねむたいので碌々挨拶もしなかつた。

朝は早く目がさめた。起きて便所に行き、風呂場の脇の洗面所で顔を洗つた。何處にも不潔の感じがない。そこの壁に姿見の鏡まで掛つて居た。部屋に戻つて見ると、隣りの寢床の人は腹這になつて煙草を吸つて居た。『どうやら降りそうですね』『サア、困つたものです』などと至極調子がいゝ。『何處かお勤めですか』と聞いて見ると、『えゝ何か詰らん事をやつて居ます』と惡びれもしない。然し直ぐそれに續いて、少し辯解する樣に、『家を持つて居たのですが、すつかり失敗しちやつて……。もうこゝに三日とまつてます』と云ふ。『そうですか、私はこゝいらに初めて來たのですが、どこの家も大抵同じ樣なものですか。』『えゝ、こゝは皆これです。』『三疊の部屋が多い樣ですが……』『えゝ何處でも大抵三疊ばかりです。あなたは何か御商賣ですか。』今度は向ふから尋ねて來た。『えゝ、私はマア遊んでる樣なもので……』と曖昧な返事をすると、『どうせねえ、こゝいらに來る人は、そんなにシツカリした仕事なんぞありやしない』と、向ふで宜しく註釋して呉れたので助かつた。『まだ暫くはここに御滯在ですか』と聞くと、『實は友人と二人で間借をしたので、明日あたりそこに移る筈です。そこは二階で、六疊と四疊半で十二圓だから、安い方です。何しろこゝでは棚が一つあるぢやなし、永くは居られません。』『然し思ひの外總てが奇麗ですね。』『えゝ汚なくはありません。』思ふに、こんな會話をする我々兩人は、こゝの客の中では種違ひなのだらう。然し、どうもこれ以上、面白い話が發展しさうにもないので、『ヤア失禮します、又どこかでお目に掛りませう。』『左樣なら。』『左樣なら。』誠にあつさりした別れではあるが、然し存外、氣持のいゝ、一夜の交りだつた。

表に出た時、私は考へた。これが木賃宿の一夜なのか『簡易旅館』といふ名稱と共に、その實質も文化的進歩を遂げたわけなのだらう。

六　汁と飯と肉豆腐

少し歩いて町の角まで來ると、その角を折りまわした、稍や大きな構への家がある。㊍本店食堂部といふ看板が出て居る。『理想的小料理辨當』『美味安價』などいふ書き添へもある。食堂の一部には硝子戸に『事務所』と書いた所もある。そこには『互助組合勞働無料取次所』といふ看板も掛つて居る。食堂

の隣りには　本店旅館部と書いてある。『上等別間設備あり』といふ張札もある。そしてその二軒の家を中心として、そこらの街路に大ぜいの勞働者が群がり立つて居る。彼等は勞力をこゝに陳列して、買手の附くのを待つて居るのである。私はしばらく其の邊をうろついて見て居たが、一向に商品の賣れて行く樣子が無かつた。

兎にかく朝飯を食はねばならぬと思つたが、㊍本店食堂部で『理想的小料理』を食ふのは餘り面白くない樣な氣がした。そこから少し離れた處に、向ひあつて二軒の飯屋があつた。一方は牛めし專門らしかつたが、私は矢張り朝飯らしく味噌汁が吸うて見たかつたので、その向ひの方にはいつた。立長い食卓が三つ土間に並んで居た。私は眞中の食卓の片隅に腰かけた。小女が直ぐに味噌汁と飯を持つて來てくれた。味噌汁は熱くて旨かつた。

私から少し離れた隣りの席には、隨分とよく日に燒けた中老人が、八つか九つばかりの男の子を連れて、私と同じく味噌汁を吸つて居た。間もなく私の向ひ側に、毛糸のシヤツを上衣にした勞働者がやつて來た。彼は元氣よく、汁と飯と肉豆腐を註文した。彼が肉豆腐を食ふのが如何にも旨そうに見えた。私は大の豆腐好である。早速その眞似をして肉豆腐を註文した。軟かい豆腐が細切の肉にまみれて居るのが馬鹿に旨かつた。但し飯は少々堅くて困つた。

左の食卓には、銅色の額が頭の頂上まで禿げあがつて居る半天着の親方が、德利を二本前に並べて、牛めしと新香でやつて居るが、甚だ景氣よく見えた。それと向ひあつて、私の方に脊中を向けて居るのは、一廉の洋服姿だつた。何を食つてゐるかは私の處から見えなかつた。それの隣席には、丁度今、やつれた顏のおかみさんが、脊中に赤坊をおぶひ、七つ八つの女の子と、四つ五つの男の子とを連れてやつて來た。かけをおくれと註文するのが聞えた。『坊もかけがいゝや』と男の子が云つた。この『かけ』は私の聞きちがひかも知れない。あとで見れば、矢張り汁で飯を食つて居た。子供達は『かあちやん』『かあちやん』と絶えず母親を呼びながら、嬉しそうに食べて居た。『かあちやん』は脊中の赤坊をゆすぶりながら、しじう立つたまゝで食べて居た。

右の食卓には、親子とも見え、夫婦とも見えない事はない男と女が、こちらに脊を向けて並んで居た。男は鳥打帽をかぶり、眼鏡をかけ、縞の羽織を着て居た。顏のこけた横顏に大ぶん疲れが見えて居た。女は古風な束髪で、ネル（?）の單衣にメリンス（?）の小さつぱりした帶を結んで、前掛の白い紐でそれ

をギュッと締めて居るのが、惡い恰好ではなかつたけれども、丸くふくれた頬の色は餘りよくは見えなかつた。

飯屋を出て、ぶら〳〵◉本店の前まで來た時、うしろから私を追ひこした洋服の紳士がある。小カバンを左の手に提げ、コーモリを右の手に持ち、サッサと急ぎ足に行く姿は、どうしてもそこに群れて居る自由勞働者達と、全く別種な身の上であつた。然るにそれが、よく見ると、先ほど飯屋で私に脊を見せて居た、その洋服の人なのであつた。

七　針仕事の老翁

今日は一讀者君の立案に從ひ、先づ被服廠跡に行つて見た。そこは菊花陳列場になつて居たが、大して美しくも無かつた。震災記念堂建設地には、荷車の馬が繋いであつたり、犬や子供が飛まわつて居たり、鳩が餌を拾つて居たりした。その外何事もなし。

仕方がないので、ぶら〳〵川岸の方へ、それこそ當なしに歩いて居ると、『舊安田庭園』と書きつけた門の前にヒョツタリ出た。『昭和二年四月開園』とある。成るほど、安田善二郎君が朝日平吾君に刺された後、安田家の庭園が市に寄附されたといふ事が思ひだされる。安田の工場の煙毒問題がやかましかつた事もぼんやり思ひだされるが、それが此の寄附の前であつたか後であつたかはハッキリしない。兎にかくこゝは、元の安田家の庭園で、それが今年から市の小公園となつて居るのである。

面白い處へ思ひがけなく來あはせたものだと考へながら、ぶら〳〵その中へはいつて行つた。池があり、橋があり、森があり、丘がある。一隅には丸い塔の様な大きな建物がある。それは本所公會堂で、矢張り安田家の寄附に依つて建築されたものだそうな。

私は橋を渡り、丘を越え、森を拔けて、園内の或る片隅の靜かな寂しい處に來た。

稍や色づいたイチョウの木の下に、『駒止石』といふ立札をした、由緒ありげな石がある。又その傍らに『至誠勤儉』と彫りつけた安田頌德の石碑がある。別だん邪魔にもならない様だから、今にこれが、多くの人の目に、ひどく滑稽に見える時まで、このまゝ殘して置いてあげてもいゝだろう。尤も、その時になつたら、又別の意味で保存されるかも知れない。

そんな事はどうでもいゝ。私は暫らくこの靜かな場所を樂しむべく、一つのベンチに腰かけた。ベンチがそのあたりに三つ四つある。私の向ふにあるベンチには、顏に帽子をかぶせて、仰向に寢てゐる人がある。私の右手にあるベンチでは中學生が

二人並んで寫生して居る。今一つ、私の左手の少しうしろの方に引込んだ片側のベンチでは、ひとりの老人が横向に俯向いて稍や人から隠れる様な態度で何か頻りに膝の上で仕事をして居る。よく見ると、どうも針を使つて縫物をして居るらしい。

老人の頭は胡麻鹽である。そして首のまわりには鶯色の襟巻が見えて居る。彼れのうしろには鳥打帽が裏向に置いてあつて、その中に手拭だの何だの、色々な小物が入れてあるらしい。彼は年老いて獨身なのだらう。そして獨りで静かに着物の繕ひをする様な、自分の家（若しくは部屋）らしいものが無いのかも知れない。若い男の針を持つのは、悲慘と云ひつゝ自分も笑ひ人も笑つて濟まされるが、老翁の針仕事は滑稽では濟まされない。私が振りむいて彼を見る時、彼も振りむいて私を見た。彼は人に見られる事を好まないらしい。私は悪いと思つて彼を見ない事にした。

右手のベンチでは、學生が去つて、その跡に上品な老人が來て、腰の煙草入を抜き取り、ゆつくり〳〵と煙草を出し、煙草を詰め、マッチを摺り、そして悠々として煙を吹かして居る。向ふのベンチの人は、先程からの姿勢を少しも變へないで、死んだ様に眠つて居る。

私は又しても振返つて胡麻鹽の老人を見た。見るのは悪いと思ひつゝ見ないでは居られなかつた。よく見ると、彼は着物を脱いで羽織だけ着て居たのだつた。羽織は筒袖だつた。彼は脱いだ着物を膝の上に廣げて、それの襟を繕つて居るらしかつた。永いあいだ、彼は無器用な手つきで骨折を續けて居た。私は外の景色を眺めるあいま〳〵に、濟まぬと思ひながら、見ない振をして又折々彼を見た。彼は漸く繕ひ終つたらしく、ベンチの上に立ちあがつて、その着物を着ようとした。彼は稍や人目を憚りつゝ羽織をぬいだ。下には白い手拭地の様な襦袢を着て、その上に毛糸のチョッキの様な物を着て居た。彼れの今繕つた着物は綿の袷と白地の浴衣との重ねであつた。彼はその重ねの筒袖を着て、頻りに襟先の具合を氣にして居た。袷には黒い襟が（謂ゆる羊羹色ではあつたけれども）キチンと掛つて居た。彼は先程からそれに苦心して居たものと見える。然るに其の黒い襟の上に、浴衣の白い襟がはみだしすぎて居るので、彼はひどくそれを氣にして、幾度も幾度も、あちらに引張り、こちらに引張りして、直して居た。漸くそれが濟むと、彼は紫の細紐で腰を縛り、その上に黒いシゴキ帶を卷きつけた。

それでお仕度が濟んだかと思ふと、今度は又羽織の繕ひだ。それが又好いかげん永い間かゝつた。いよ〳〵羽織も出來上つた。彼はそれを着て立上つた。鶯色の襟卷を襟に卷いた。鳥打

帽の中の手拭を取つて埃を拂ひ、何か二三の小物を取つて手拭にくるんで、それを懐中に入れた。それからベンチを降りて、妻皮つきの日和下駄をはいた。そしてベンチの角に立てかけてあつた雨傘を左の手に持つて、少しヨチ〱して歩きだした。腰が稍かゞんで居た。然しこの老人、これでどんなにサツパリした、セイ〱した、好い氣持になつた事だらう。私はその後姿を見送つて嬉しかつた。

跡には、向ふのベンチに矢張り同じ姿勢で寢て居る人より外、其のあたりに全く人影もなかつた。晝はもう疾くに過ぎて居た。私は又晝飯を食ひはぐつた。

八　お賽日、雨の廓

今日は深川の不動樣のお賽日だと聞いて、再び昨日の門前仲町を經て、そこに參詣した。道順がわるくて行つたり戻つたりして居るが、當なしの事だから苦にもならない。

不動樣は今本堂の再建中だが、參詣の賑はひは大變なものだ。賽錢が文字どほり雨と降つてる。私も負けん氣になつて一錢投げた。

境内の廣場に種々雜多の賣物や人寄せがある。産地直賣、丹後峰山の半ゑりが一かけ二十錢。大きい人にも小さい人にも伸縮自在の五色帶じめ。百足のあぶら。マアつけて見なはれ、わたしの云ふた半分たほつても損は行かん。文化きせるそうじ。人參藥王散。無暗にしやべる奴、默つて濟まして居る奴。しやべるにも兩樣がある。エライ勢ひで演説的に怒鳴り立てる奴、おとなしく會話的に諄々と話す奴。それが皆それ〲相當に客を引く。大學帽をかぶつて家賃と敷金との事を論じ、悲憤慷慨して居る處が、人だかりが一番多い。猿に小い麥藁帽をかぶせて、わしが生れは山の中などと踊らせて居る處も、大學帽に負けない人氣がある。盲目の老夫婦の尺八には、つい白銅一つ投げる氣になつた。どんな目のわるい年寄でも、譯なく糸が通せるといふドイツ新發明の縫針は、つい老妻へのみやげに買つてやりたいたと思つた。

不動樣からお隣りの八幡樣へ拔ける道にコーモリ傘を賣つて居る男がある。二圓五十錢！、二圓、一圓八十錢、えゝ思ひ切つて一圓五十錢！、それでも買はなきや一圓と二貫！、サアどうだ！、えゝモウこうなりや意地だ、一圓！一圓！一圓！一圓！。私はそれを一本買つた。丁度雨が降りそうな空あひになつてゐた。

一讀者君のプログラムの中に洲崎遊廓見物の一項がある。ここから洲崎は直ぐだ。私は乘合自働車で繰りこんだ。然しその時にはもう雨が降つて居た。或カフエーで夕飯を食つて、今買

ひたてのゴーモリをさして、兎にかく廓の中まで踏こむは踏みこんだが、廣い大通りがガランとして寂しいので、どうにも足が進まなかつた。『田舍親爺』が安コーモリをさして、雨の廓をトボ／＼歩いてゐる圖は、ずいぶん奇なものであつたらう。遂に降參して大州町まで引返し、プログラムの立案趣旨には反したが、疲れたあまり、ツイその邊の只の宿屋に寢た。

九　木場の女勞働者

第三日。今日は第一に木場見物。入舟町から北に入れば直ぐに木場だ。熊手十文字に堀があつて、縱に横に多數の橋が掛つて居る。そしてその間に、陸上にも水上にも、そこにもこゝにも材木だらけである。中井橋といふ小さい橋の上から西の方を見まわすと、『米松、檜、樅、甲板』『天井板、床廻材』『米檜、樺、杉丸太』『北海雜木』『建具製作』『磨丸太、產地直賣』などいふ看板があちこちに見える。そして何處からともなく、新らしい木の香がプン／＼鼻を打つ。

中井橋と鍵の手になつて細歩橋がある。細歩橋の袂に立つて堀を見渡すと、水の上には一面に板が浮び丸太が浮んで居る。舟も幾つか泊つて居るが、皆な木舟である。こゝでも矢張り、赤ん坊をおぶつたおかみさんが、舟べりからバケツの釣瓶で水を汲んで、釜を洗つたりして居る

中井橋の袂に甲斐々々しい姿の女勞働者が二人立つて居る。二人とも頭に手拭を卷き、襟に手拭を掛けて居る。二人とも筒袖の羽織を着て、羽織の上から細帶を締めて居る。一人は辨當包を脊中に負ひ、一人はそれを手に提げて居る。二人とも裾は短くして白い腰卷を見せ、足は脚半ゴム足袋といふいでたちである。『先つきお銀ちやんに會つてよ。』『そう！どんな顏してた？』『おばさんお早うナンテ！あはは。』そんな會話のきればしが聞える。向ふから又同じ樣な姿の女達が四五人やつて來る。『早くお出でよ、私達あぶれちやつたんだよ。』先の二人組の一人がそういふ。『×××があると云ふぢやないの。』四五人組の一人がそういふ。『山口さんの近處だつてさ。』『チエツ！』などとやつて居る。漸く二つの組が合して一つになる。『お早う御座います。』『お早う御座います。』ずいぶん丁寧な挨拶をする。彼等は連立つて細歩橋を渡つて行く。中の一人は赤ん坊をおぶつて居る。私は彼等の跡を、少し離れてついて行く。武市木材株式會社營業所、鈴木問屋吉野福久商店などいふ看板が目につく。積み重ね、立て並べた材木のあいまあいまに、何々商店、何々賣場などいふ小さい事務所がある。總てが古風な此の木場の町に、この賣場だけは皆な清楚な、小ぢんまりした、粋

子テーブルに電話といふ設備である。中には懸崖の小菊の鉢が一つ置いてあつたりする。『荷揚中御注意』と書いた赤旗が幾つも幾つも軒から差出されて居る處がある。女達は右に折れて、龜井橋といふを渡りかけたが、跡戻つて眞直に行く。その邊やはり、堀が十文字にあつて、橋が無數にあつて、そこもこゝも、陸上も水上も材木だらけである。そして木の香がプンプンしてる。

女達は遂に右に別れて或る小橋を渡つて行く。榛原製材所と云ふのが見えて、機械の音が聞える。荷馬車や貨物自働車が幾つも幾つも向ふからやつて來る。窕多商店木材倉庫部の前を通る。私は馬車や自働車をよけて、横道の小橋の上にぼんやり立つて居ると、突然何物かゞ私の胸にブツつかつた。見ると、それは水に浮んだ材木の上に立つて居る人の、棹の小尻が當つたのであつた。『御免なさい』と向ふでは私にあやまつて呉れたが、私は働らく人の邪魔になつて濟まないといふ氣持がした。『何を田舍者がぼんやりしてやがる』と、叱られないのが見つけものであつた。

松の橋から水の上を見て居ると、そこには棹を持つた人が、材木を小舟にして、或は材木を飛石にして、材木から材木へと渡つて行く。棹の先には鋭い牙の樣な刃物がすげてあつて、人はそれを材木の表に輕く打込んで、自由自在に材木をあやつッて居る。二つの大きな材木を片足づつ踏まえて居る時など、陸から見る者がハラ／＼する。

中の橋の袂に荷車が落ちあつて、暫くは動きが取れない。四苦八苦でもがいて居る馬もあるが、お蔭で休んで居るのもある。馬の首の兩側に麻の長い房が垂れて、その房の末が紫に染めてある。尻尾の根元の處に小鈴が四つ五つ結びつけてあるのもある。牛が主人から烈しく怒鳴りつけられて、如何にも恐れ入つたらしく、大きな首を横にして、その嚴めしい二つの角を隣りの車の輪の間に隱さうとして居るかの樣に見えるのもある。

女達は名なしの橋の袂の道ばたに休んで居た。一人の女は脊中の赤ん坊をおろして乳を飲ませた。外の女達はその子にダツコの手を差出したり、その子の頰つぺたをツツついたりして、暫らく樂しそうに遊んで居た。向ふから、問合せに行つたらしい二人の女が歸つて來た。『何處だ、何處だ。』『木德さんださうだ。』『あゝ、そうか。ぢやあそこだ。』皆は立上つて元の道に引返した。『今日はまだ來る筈の人が來ないので、まだ足場も出來て居ないのだとさ。』『おや、おや。』『彼等はぶらり／＼跡戻つて行つた。

私は先程から大便を催して居た。然しこの邊にそんな用を足

す處は見つかりそうもない。茶店だの、カフエーだのと云つた樣なものも、迚もこの近處にありはしない。止むなく私は女達と別れて、元の入舟町に引返すことにした

十　深川公園の自由勞働者

入舟町に出て電車通りを西に進んだが、矢張り用の達せる場所が容易に見つからない。段々進んで行く中、深川公園の前に出た。公園には大抵必ず便所がある。私は安心して公園にはいつた。果してあつた。やれ〳〵助かつた。

便所から出て來て見ると、ここは昨日見物した八幡樣の前なのである。公園の入口が即ち八幡宮の參詣道なのである。そこに石のソリ橋のあるのは、その爲である。先つき、ここにはいる時、何だか大ぜいの人が群れて居ると思ひながら、自分の急用の爲に氣がつかなかつたが、『東京市深川公園職業紹介所』といふ札の掛つた事務所が、ソリ橋の直ぐそばにあるのを見て、今はじめてこれが自由勞働者の群である事を知つた。

公園の入口から事務所の前にかけて、勞働者の群は百人餘りもあるだろう。もう大ぶん賣れて行つたのだろうが、まだこれだけ賣れ殘つて居る。ソリ橋の上の欄干にもたれたり、腰かけたりしてるのも六七人ある。彼等は退屈まぎれに、錢を賭つては當てつこをしたりして居る。忽ちドヤ〳〵と或る一點に勞働者が集まる。やがて親方らしい人が五六人の勞働者を連れてあちらに行く。それだけ賣れて行つたのらしい。あゝ腹が減つて仕樣がねえとツブやきながら、八幡樣の前の茶店に行つて菓子パンを一袋買つて來て、それをかぢりながら犬にも半分わけてやつて居る男もある。公園前に自働車がとまつて、紋付を着た丸髷の婦人が着飾らせた赤ん坊を抱いて降りて來る。それがソリ橋と並んで居る通用橋を渡つて、八幡樣へ參詣する。ソリ橋の上の勞働者が奇聲を發して、『あゝヨカ〳〵』などとはやしたてる。

八幡宮の左手の廣場にはベンチが幾つも置いてある。そのベンチの上にグツスリ寢こんでしまつて居る男もある。ベンチのもたれの角に腕をかけて、居ねむりをやつてる男もある。ベンチに腰かけて前に俯向き、兩手で顏を蔽うて居る男もある。新聞を讀んでる男もある。只ポカンとして何か眺めてる男もある。ゴム足袋の底に太い針を通して、その繕ひをして居る男もある。私はこの最後の男のベンチに行つて、彼れの横に並んで腰かけた。

『毎日ここに幾人くらい勞働者が集まりますね。』先づ私は斯う聞いた。『そうですね、二三百人は來るでせう。そして半分ばかりはあぶれまさア。』彼はこう答へた。『こんなに深川あぶれるの

ですか。』『えゝ〳〵、日曜日だと三分の二はあぶれまさア。』談話は面白く發展して行く。『ぢや今日は餘つぽど出たんですか。』『餘つぽど出たにやア出たが、跡から跡からと外のあぶれが皆こゝに集まつに來るんだから、いつまで立つても減りこはねえ。一度て百人も連れて來なくちや。』『そんなのも來る事がありますか。』『たまにやあります。』『仕事は皆んな紹介所に申込んで來るのですか。』『イヤ、紹介所のは大てい市の仕事ばかりです。』『ぢや外の仕事は直接買出しに來るわけですね。』『そうです。』『市の仕事よか其の方がいゝんです。』『仕事は、多くどんな種類ですか。』『市の仕事は大てい道路工事か何かで、安くて駄目です。二圓とは出やしない。』『ヘエー、ぢやどんな仕事が割がいいんです。』『先づ川岸揚(かしあげ)がいゝ方です。二圓五十錢位くれる。』『川岸揚とは?』『船から運んで來る荷物を川岸で揚げるんです。本船に行くと蕎傲を出して二圓六十錢位くれる。それが一番いゝんです。』『本船に行くとは?』『本船に行つて、そこの荷物をおろすんです。』『ハハア。それで君はもう今日はあぶれですか。』『えゝ。先つき土木課から一圓で八人と云つて來たが、餘り安いし、丁度足袋を繕ひかけてたからヤメちやつた。』『あゝさうですか、一圓とはずいぶんひどいですね。然しあぶれても皆存外のんきにしてますね。』『イヤ、さうぢや無いんです。仕方が無いからです。あれで實は皆な鵜の目、鷹の目ですよ。どこそこにこれ〳〵の仕事があるが、誰か行く者はないかなんていふ、そんな悠長な話ぢやないんですからね。毎日こゝに來てると、大てい風體を一日見りや分るんだから、向ふの人が來さへすりや、そら來たと云ふんでバタ〳〵と皆が驅けつける。丸で池の鯉に麩をやつた樣なものでさ。』『成るほど、さつき親方らしい人が五六人連れて行つたのがそれだなと思つた。

その時、八幡樣の方へバタ〳〵と驅けて行く者が十人ばかりあつた。麩を持つた人が來たと見える。暫くすると、『三人だとさ』と吐きだす樣に云ひながら歸つて來た一人の小男が、私等のベンチに來て腰かけた。『今日はもう仕事にならねえ。歸らうか。』『足袋つくろひの人がさう云つた。『何處かで暫く寢るかな。』『小男はさう云つた。『これほどなら先つきの土木課に行くんだつた。一圓でも取るだけが得だ。』『遊んだつて飯は食ふんだからなア。』『遊ぶ方が餘計に何か食ふよ。』『全くだ。』『仕方がねえ、肉豆腐でも食つて來るか。』『二人は連立つて八幡樣の裏門の方に出て行つた。

私は又ぶら〳〵ソリ橋の方に戻つて來た。ソリ橋の上には相變らず六七人がジャンケンをしたり何かして居た。『あゝ〳〵』と大きなノビをする男もあつた。行きなりヤケな聲を出して

『お前とならば何處までも……』と歌ひだす男もあつた。Aが何か云つて笑つて居ると、Bが『何？何？』と問ひつめる。『あそこに好い女が行くと云ふ事さ』とAが云ふと、Bが『馬鹿！』と叱りつける。すると又Aが、『だつてお前のかゝあよりやスコーシ別嬪だらう。アッハハハハ』と笑ひくづれる。成るほど向ふに意氣な姿のおかみさんが通つて居た。これも先程、足袋つくろひの人に聞いたのだが、この勞働者達の中、女房のあるのは高々一割位のもので、あとは皆『宿屋住居』だそうだ。『家なんぞ持つてた日にや、迚も生きて行かれやしねえ。』

十一　富川町の簡易宿泊所

私は再び木場に出で、冬木の辨天を抜けて西平野町の電車通りに出で、何處か面白そうな處で晝飯を食ひたいと思ひながら、ツイラか／＼と區役所前から高橋停留所まで來た。何となくそこを右に折れて猶ほ『面白そうな處』を探して居る中、富川町に來た。富川町は勞働者町としてプログラムに指定された場所だつた。或る西洋料理に飛びこんだが、ちつとも面白そうで無かつた。止むなくライスカレーを一皿食うて、コーヒーを一ぱい飲んだ。勘定はそれで二十錢だつた。今日はそれでも初めて晝飯が食へたわけだ。

そこらの裏町をあちこち歩いて見た。古い言葉の『マッチ箱』といふ感じのする長家は澤山あるが、謂ゆる『貧民窟』といふ感じのする、黑い、汚ない、じめ／＼した處は見つからなかつた。兎かくする中、『富川町簡易宿泊所』の前に出た。先づ『附屬食堂』の張出しを見ると、『定食、朝十錢、晝十五錢、夕十五錢』とある。『獻立』は『朝、味噌汁（大根、）新香。晝、フライ、新香。夕、大むろ鯵、新ぎり（？、）新香』とある。別に『揚南ばん十錢、肉うどん十五錢、天ぷら十五錢。パン、ジャム付八錢、牛乳七錢、コーヒー五錢』とある。宿泊所の方をのぞくと、『宿泊料二十錢、自治費二錢（傷病者相互扶助、慰安講演會、圖書常備藥購入費、）積立會三錢（退宿の際仕拂ふ）』とある。猶ほ別に、いよ／＼勞働日記帳を渡す、完全に一週間分記載して呉れた人には、薄謝として金一圓づつ社會局から交附するといふ帳出しもある。少し中の方へはいつて事務室らしい處をのぞいて見る。『人事を盡して天命を待つ』と題した漢文の額が、何だか態とらしく感じられる。態とに違ひない。その時、事務員が出て來て、私の姿をじろ／＼見て、『御視察ですか』と云ふ。ヒヤリとした。『いえナニ』と、そのまゝ外に出ようとすると、『どうぞこちらも御覽下さい』と『娛樂室』に案内された。十疊と八疊くらいの、二室つゞきの廣い部屋で、碁盤だの、將

茶盤だの置いてある。毎月こゝで講演會もやるのだそうだ。『天道親無し、常に善に與す、新平』と、これも漢文の額がある。馬鹿にするなと云ひたかつた。そんな講演をやられちや、さぞ堪らないだろう。掛軸も一つある。『いつまでもあると思ふな親と金、ないと思ふな運と災難。』『ウツカリしてると、成程なアと感心しそうな文句だ。然し何處までも氣永におとなしく『天命を待』たせたり、『運』を待たせたりする事に努めて下さる處が誠に恐ろしい。

何しろ今夜はこゝに宿らせて貰はうと思つて居た腹案が、『御視察ですか』でスツカリこわれてしまつた。外に出ると雨が少し降りだして居た。傘があるので、大威張りで歩いて居る中、急に土砂ぶりになつて來た。その時丁度錦糸堀行の電車通りに出た。直ぐ向ふに活動小屋がある。兎にかく雨やどりに飛びこんだ。特等五十錢で又晝寢だ。

十二　フセンと社會主義

活動から出ると、雨はもうやんで電氣がとぼれて居た。夕飯こそぜひ『面白い處』で食ひたいと考へた。西に向つてブラブラ森下町の方へ行く中、或る牛めし屋の食卓に一パイ人が詰めこんで、景氣よく賑はつて居るのが面白く思はれた。入口に近い處に一つ空席があつたので、そこに陣取つて牛めしと、蜆の汁と、淺漬と、お酒を一本、注文した。客は大てい勞働者風で、皆な默つて食つたり飲んだりして居る。皆が盛んに氣焰を擧げて居るだらうと思つた私の想像が裏切られた。

向ふの壁ぎわの食卓に新しい客が一人來た。大きな坊さんだつた。『おぢさん何にしませう』と小女が尋ねる。『何がある』と坊さんが云ふ。蜆のおつゆ、鯵のおつゆ、何とか、何とか、何とかと、のべつに早口にまくし立てる。『アハハ、わしや頭がわるくて忘れてしまふた。』小女が又同じ事を繰返す。

私が牛めしを肴にしてゆる／＼一本を飲んで居ると、私の筋向での半天着の親方は、これも一本ばかり平らげて居たが、飯を半分ばかり食つたところで腹掛のどんぶりの中から巻煙草を取出し『大ぶんすいて來たから一休みして一ぷくやらう。滿員の時はそうは行かないが』と獨りごとを云ひながら、マッチをすつて煙草を吹かした。そして誰を相手にするでもなく、少々もつれた舌で氣焰を吐きだした。私としては、實にこれが聞きたかつたのである。

『なあオ　イそうだらう。一升に四十錢、一合に四ン錢の稅金だ。一體それを誰が拂ふ。酒屋が拂ふんか。めし屋が拂ふんか。そうぢやねえや。みんな飮む奴が拂ふんだ。俺達が拂ふん

だ。俺達にや憚りながらジユウロードーシヤといふ名前がチヤーンと付いてらア。だからフセンだ。フセンの理由はそこにあるのだらうと、俺アそう考へてる。ねえ旦那、そうだらう。』この『旦那』は私に向けた言葉であつた。私が熱心に彼れの顔を見て居るので、彼は私を話相手にしたのである。然し『旦那』には弱つた。『旦那なんてよしてくれ。然し全くだ。普選でなくてどうするもんか。いよ／＼本年からだぜ。』然し親方は來年の總選擧の事など餘んまり考へて居るらしくもなかつた。

彼の話は一轉して酒の善惡に移つた。幾ら正宗だつて一升や二升は玉がはいつてる。玉たア水の事だ。彼は酒造りの經驗を有する事を誇つて居た。『お話をすりやアまあそんなわけでさア。』『あんた方ア御存知かどうか知られえが、本當のお話をすりやアまあそんなもんでさ。』私は大いに彼と共鳴して、彼と一緒にそこを出た。

『一つ飲み直さうぢや無いか。どこか好い處に案内して呉れ玉へ。』私がそう云ふと、『そりやア幾らも安い好い處はこゝいらにあるがね。然し無駄だ。それよりか、あんたは一體どこい行くんだ。』この質問には大いに困つた。『ナニどこに行くといふ事もない。この邊に宿りさへすればいゝんだ。』『そりや俺の内へ行かう。俺の内は猿江だ。俺の内だつて實は弟の内だが、おつかアが死んで今は弟と俺と二人きりだ。遠慮も何もありやしねえ。俺と一緒に寢よう。その代り朝は早いよ。五時にや出かける。』

私はよつぽど附いて行かうかと思つたが、そこまでやつては少し踏みこみすぎると考へ直した。それで私は深く彼れの厚意を謝して、兎にかく何處かで飲み直すことを主張した。彼も遂に同意して或る飲み屋へ私を案内した。『安いよ。こゝア、そして肴も好いや。』彼はそう云つて酒と肴を注文した。所が彼は更に私を追究して來た。『あんたは商賣は何だ。』いよ／＼困つた。『別に商賣はない。僕アひま人だ。』『そんなわけはねえ。商賣のねえ人間があるもんぢやねえ。先つきから聞いてりや、あんたは江戸辯だ。』『俺も永らく東京に居るから、大ていのはわかる。』彼は大ぶん私を不審した。『成るほど、君が不審するのは尤もだが、然し大抵わかるだらう。僕が別だん悪い奴でない事は。』『ウム、そりや俺にも分る。だから餘計おかしいや。内は何處だい。』彼はそう云つて、私に鉛筆を持つてるかと聞いた。私が鉛筆と手帳を出して彼に渡すと、彼は可なり達者な書體で、深川猿江町××番地××方、加藤××と書きつけた。そして私にも名處を書けと云ふ。私が手帳の隅を破つて、市外大久保百人町××番地××××と書いて渡すと、『大久保ならそんなに遠かアねえ。なぜ歸らねえんだ』と云ふ。『それにや色々譯があるさ』と云つて見たが、『ど

うち腑に落ちねえ』と首をかたむける。こうなるとモウ私の方が受身で、私は早く此の人の手から逃れたいと考へ出した。

『ぢやア兎にかく僕にあい宿を世話してくれ玉へ。』私がそう云ふと、彼はまた一度、彼れの家に宿る事を勸めた後、『ぢや此のくらい好いか』と、食卓の下に片手をひろげて見せた。それからそこの勘定、――刺身と、餡と、新香と、酒二本で六十幾錢かを私が拂つた。彼は律義にも其の半分を負擔すると云つて聽かなかつた。私はそれを斷るに骨が折れた。

二人は好い氣持で元の牛めし屋の方に戻つて來た。彼は頻りに、私に金を使はせた事を氣の毒がつた。私は少しばかりお世辭の積りで、『僕は先つき君が普選の氣焔を吐いたのに感服したのだ』と云ふと、『あゝありや俺の思つたまゝをブチまけたんだ。ちつとも間違つた所はありやしねえ。だけど俺ア何だぜ、社會主義ぢやアねえ。』私はヒヤリとして一言の受け答へも出來なかつた。然し私は今、彼がいつか必ず社會主義になるだらう事を祈り且つ信じて居る。

彼は遂に私を××屋といふ安宿に連れこんだ。そして店先の番頭に向つて、『この旦那を今晩よろしく頼むよ。實は俺、今晩この旦那に御馳走になつて、それからこゝに案內して來たんだ。靜かな處でゆつくり寢たいていんだ。だから別間にしてた。』

彼はそう云ひおいて歸つてしまつた。

彼れの親切は感謝に餘りある。然し實際のところ、彼は餘計な事を云つて吳れた。『別間』は私の望むところでなかつた。然し取消すわけにも行かない。私は五十錢拂つて、下駄とコーモリを持つて奥の一室に導かれた。室は二疊敷。成るほど別間だ。これに二人は寢られない。枕は相變らず堅かつたが夜具はこゝも不潔でなかつた。そして掛が二枚あつた。然し木賃宿の別間は一等汽車の寢臺室と同じく、私に取つては實に寂しい詰らない處だつた。

朝早く目がさめた。外はまだ薄暗い。『入らつしやい！』『入らつしやい！』といふ賑やかな聲が頻りに聞える。これがどうも隣りの家らしい。朝飯の食堂だらうと判斷した。顏を洗つて、コーモリと下駄を持つて店先に出たが、誰も居ない。默つて外に出た。隣りの家は果して『たばこや旅館附屬』の『文化食堂』であつた。中にはいると、六七人の女達が、『入らつしやい〳〵〳〵〳〵』と口々に歡迎する。客は三十人あまり默々として食つて居る。一人食ひ終つて歸るのがあれば、今度は女達が『有がとう〳〵〳〵〳〵』と、同じく口々に景氣よく送りだす。

私は十二錢の定食、汁と飯を食つた。私の眞前に居た、稍や老いた勞働者は、別に鰹の煮たのと、白菜の漬物とをあつら

へ、彼も二杯取つて、これを辨當に詰めて居た。『何處に行つてるの?』その隣りの人が其の男に尋ねた。『築地に行つてる。』『一築地?』『あゝ。親方の處に仕事があるから來い來いと云つて呉れるんだけれど、こちらが年を取つたもんだから、もうやれねえ。』彼はさう云ひながら辨當を詰め終つた。

私はその男の跡についてそこを出たが、フト氣がついて見ると、羽織を着て居ない。宿屋に忘れたのだ。宿屋にはいると、まだ店の者は起きて居ない。默つて上つて、羽織を着て、默つて出て來た。氣樂なものだ。

伊豫橋の袂まで來ると、そこには二三十人の勞働者が群れて居る。その脇には簡易旅館の聯合廣告が立つて居る。町を歩いてる人も大ていまだ勞働者ばかりである。それらの人達に交つて、柳下町停留所まで來ると、そこには又、十人二十人と勞働者が幾つもの群を作つて、電車の來るのを待つて居る。如何にも勞働者町の朝景氣である。

十三　龜井戸、玉の井、安來節

その日の午後、私は偶然、友人B君と或るカフエーで落ち合つた。『どうだ、僕と一緒に行かないか。』『あゝ行つてもいゝが、何處に行く。』『別に極つた處はない。何か君に名案はないか。』『ある、ある。龜井戸、玉の井の探檢はどうだ。』『ヤア、そいつは大變だ。然しよからう、行かう、行かう。』

先づ龜井戸。天神の境内は幾許も昔と變つて居ない。然しそれはいづれにせよ、我々の目的でない。目的の魔窟は何處だらう。人に聞くわけにも行かない。只あちこちと見當をつけてあるく。さすがは巧者の揃ひで、とう／＼見つけだした。まだ新らしい二階建の長家が幾列も並んで居るのがそれだ。B君が案內者顏にズン／＼はいつて行く。私もおづ／＼ついて行く。家の作りは普通のしもた家と變らない。只だ格子戸があけてあつて、上り口の障子にスリガラスの窓があつて、その窓に楕圓形のスカシがあつて、そのスカシから、眞白い顏にずいぶん濃くべニをさした、惡どいお化粧の目と眉と、鼻の一部分と、頰の一部分とが、表をのぞいて居る。そして人が近ると、嫣然一笑、何のかのと聲をかけて居る。まだ晝なのに、彼等はチヤンと營業をやつて居る。馴染の客が來たのでもあろうか、障子の横の小いさな戸をあけて、御本尊の觀音様が全身を現はして居る處もある。こんな店が幾十軒あるか幾百軒あるか知らぬが、これでは丸で一種の遊廓だ。張店を禁じた遊廓よりも、或は却つて甚だしいとも云へる。靜かに尺八を吹き鳴らして行く虛無僧のあるなども、矢張り遊廓の感じを與へる。或る横丁の角に呉服物の行商らしい男が立つて居ると、まだ十五六にしか見えない小娘が向ふから走つて來て、『Xさん、半襟

持つて?』などと甘つたるい調子でやつて居る。いづれ借金ばかりふやして行く女だろう。

『君と僕とこうして歩いて居ると、ずいぶん不釣合な道連れだね』と私が云ふと、B君は、『ナーニ、田舎の叔父さんを案内してる所だと思や、別に不思議はない』と云ふ。叔父と甥とで魔窟を探捡するとは、ずいぶんさばけた叔父さんでもあり、ずいぶん不良な甥でもある。

魔窟からまだ幾許も離れない道ばたで、神の旨を知る法(山室軍平著)といふ、小いさなパンフレットを一冊づつ貰つた。『白蛇の出る』といふ柳島の妙見から電車に乗つて、又浅草に出て、『中清』の天ぷらを食つた。そして今度は吾妻橋から、昔の『一錢蒸汽』今の『モーター引船』に乗つて隅田川を逆登つた。隅田の堤に櫻らしい櫻のないのが、我々を變な氣持にする。日が漸く暮れて薄月が見える。燈火點々、星點々、水上の夕景色が何となく物悲しい。忽ちにして遥かの向ふに繁華の火影がパット現はれる。あれは何處です。我々は驚いて人に問うた。答は白髭です。白髭橋といふ大橋が出來て、その橋の辿りが繁華な町になつて居るとは、今の今まで我々は夢にも知らなかつたのである

白髭で上陸して、大ていその邊が玉の井だろうと見當をつけた。B君の老熟した智慧と判斷とに依つて、我々は苦もなく魔窟の眞只中に踏み入つた。その邊、表通りは總て只の町だが、裏町の筋々は悉く魔窟である。店の構造などは亀井戸と同様で、只だ窓のスカシが少し違ふ。こちらのスカシは楕圓形よりも長方形が多く、そして大體あちらよりも面積が廣い。雨あがりの泥濘の中を、ぞろ〱と冷かし客があるいて居る。聲の掛け方や、手招きの仕方や、嫣然一笑のやり方などが、こちらの方が餘程露骨だ。尤もそこは、晝と夜との違ひかも知れない。女の中には斷髪のモガ式もある。殊に驚かされるのは、まだ子供じみた小娘の多い事である。

『ちよいとヨウさん、ヨツさんてば!』と呼ぶ聲がする。ヨウさんとは何だらう。『洋服の事さ。』B君が教へてくれた。『ボロでも洋さん。半天なら親方だ。』『それは半ズボンの洋さんの口嘲也言葉だつた。『アラ、あのおぢさん、樂隠居そうに。』『それは私に對する、厚意(?)の批評だつた。『アラあんた何しよつてるの。』これは私が學生カバンを肩に掛けて居る、そのおかしな姿を指摘したのだつた。

半ズボンの洋さんが我々に語つて聞かせた所に依れば、ここに約四百戸の魔窟がある。女は一戸二人と限られて居る。公認された賣淫ではないが、検梅は施されて居る。税といふものはないが、それに代るものがある。即ち彼等は平均して三個月に一回くらい、警察官に踏み込まれて、廿九日の拘留に處せられ

る。そして二三日拘留の後、歸宅を許され、殘餘の日數に對しては、科料を納めさせられる。それがつまり默認された密淫賣の營業稅なのだそうだ。揚代の通り相場は一圓で、甘い人は二三圓も取られる。夜中から朝まで宿るのは五圓だそうだ。飲んだり食つたりするのは、寧ろ厭がられるといふ。成るほど簡單明瞭だ。古い習慣や面倒な儀式の多い、從つて隨分な費用のかゝる公娼の遊廓が、この種の近代的私娼に取つて代られるのは、如何にも當然だと思はれた。只だ女達と雇主との關係がどんなものか、半ズボンの洋さんがそれを話して呉れないのが、誠に殘念だつた。

或家で三味線の音が聞えた『彼女等の中、大志ある者が三味線を稽古してるのかな。』『それは猶ほ、大志ある主義者が獄中で語學をやるが如しかネ。』

圓タクを奮發して再び淺草に引返し、B君と共に御園劇場で安來節を聞いた。こゝの空氣は一種特別で、舞臺の女達と、聽衆とが密接に聯絡して、兩者の交互作用に依つて演技の過程が遂行されて居る。つまり聽衆は掛聲を發したり、相の手を受持つたり、色々な註文を出したり、種々雜多な巧妙な野次を飛ばしたりして、演技の一部を分擔して居るわけである。從つて聽衆は、一組の友達が藝者を揚げて遊んで居ると云つた樣な氣持であるらしい。そこに御園劇場と安來節の盛んに歡迎される理由があるらしく考へられる。更に聞く所に依れば、最も巧妙な野次は總て樂屋から頼んだサクラだとも云ふ。何しろ賑やかなことと此上なし。歌の中に、私の旅行記に取つて殊に面白いのが一つあつた。曰く『安田善次郎も金さへなけりや、朝日平吾の刃の錆とはなりやすまい。』そしてそれが、われる樣な大喝采だつた。

十四　おしまひ

もういよ〳〵紙數が超過した。その夜、私はB君と別れ、雨の中を獨りでショボ〳〵山谷まで行き、そこの『三十錢均一』の簡易旅館を尋ねた。どこもここも滿員だつた。ヤツトの事で、稍や上等の四十錢の宿にとまつた。

翌朝は玉姫町の總泉寺の境内にある職業紹介所をのぞいたり、山谷停留所の、深川公園にも劣らない、自由勞働者の群を見たりした後、電車で東京驛まで引きあげた。それが丁度九時頃で、驛の南口から丸ビルへの一直線の道が、丸ビル出勤のサラリーメンに依つて、凄まじい人間の流れを現出して居た。私は『中央公論』の人達に一度私の姿を見て置いて貰ひたいと思つて、丸ビル七階に同社を訪問して、それでいよ〳〵此の旅行を終つた。

（讀者諸君。永々つまらぬ旅行記を讀んで下さつた事を感謝します。當なし行脚はこれで打止めに致します。又何か面白い思ひつきがあつたら、重ねて本誌上に諸君と相まみえる機會もありませう。左樣なら。――堺生）

三土藏相と山本農相

小汀利得

◇

十一月四日に初日を開けた豫算閣議の大芝居、何がさていままでの陰氣な緊縮消極劇の一座とはかはつて、表題を聞いただけでも陽氣な感じのする積極政策劇、表看板には「抱腹絕倒」と銘打つた「肥料の公平なる分配」などと云ふ珍妙奇天烈な一幕も並べられて居ることゝて、見物は芝居の開かない前から、もう大はしやぎであつた。果せるかな、開幕早々例の自作農創定案を中心に、山本、三土の兩優がチヤン〳〵バラ〳〵の大活劇を初めたので、血の氣の多い見物衆はいづれも手を拍つてよろこんだが、兩優必死の猛鬪の中に、舞台は急に廻つて今度は地租移讓の一幕、四場、與黨幹部大評定、與黨の閣僚面詰、小泉三申暗躍、與黨政府大八百長の場への早變り、見物はあまりに目まぐろしき場面の變化にこゝもと狐につまゝれた形である。

◇

此方もこゝで舞台を一轉させる。一體今度山本の出した自作農創定案なるものは、まことに愚案であつて、どうひいき目に見てやつても、此の問題で山本ともあらうものが運命を賭してまで騷ぐのは腑に落ちない。

根本論としても今時分自作農創定などと云ふことに力を注ぐことには餘程大きな疑問がのこるが、それは別にしても現在の形勢では小作農を自作農にするどころではなく、先祖代々自作農であつた立派な百姓が、段々土地を高利貸や高利貸的銀行に捲き上げられて居る者が多いから、若し救ひてやろとしたら自

作農維持方法でも論ずることが先決問題であらう。

また自作農を拵へてやると云へば、大層聞えはいゝが、今の高い地價のまゝで之れを食ふや食はずの水呑百姓に押しつけるのは、實際云へば罪な話しだ。日本では土地が少いせいか昔から土地所有慾が盛んで、この傾向は特に田舍で著しいものがある、尤も土地が場所によつてほとんど骨董視されて居る理由は、土地増價税のやうな制度を歴代の政治家が怠つて居ることも、與つて力あるが、議論はこゝでは抜きにする、たゞ此の前の歐洲大戰の末期に勸業銀行から資金を出さして、製造した自作農は當時の高い地所を抱え込んで、いま、四苦八苦の態で、それでもまだ地所を持ち堪えて居るのはいゝ方だが、もう疾くに手離した者も少くない。

過去の實例がさうである上に、農村の地價は最近數年間段々下る一方で、しかも小作爭議の深刻化はます／＼この傾向を助長して居る。この傾向は現在の地主の懐勘定から云へば甚だ面白くないに違ひないが、日本全體の爲めには害よりもむしろ益が多い。

それにも拘はらず政友會が黨勢擴張を主眼として一方においては地主を救濟すると同時に、他方小作人の土地慾をそゝつて、國民全體に八億六千餘萬圓もの大負擔を課さうとは甚だ不心得千萬な話である。

◇

山本はその昔ドイツのライプチヒ大學に留學し、農政學を專攻して『ドクトル、フイロソフヰエ』の學位を取り、歸つてからも勸業銀行の鑑定課長をしたこともあるのだから、今度の自作農創定案の精神が出鱈目であることや、案そのものが杜撰極まることは百も承知、二百も合點だが、それにも拘はらず強く頑張るのは『三土憎し』の一念に燃えて居るからに外ならない。

六月には三土が折角捏ち上げた川崎造船救濟案をたゝき壊して、三土の面目を潰したが、あの時は山本の方にもいゝ案が出來なかつたのでまづ喧嘩兩成敗と云つた形であつた。

すると今度は山本の出した豫算、これは政友會の最重要政策中に數へらるべき自作農創定や、水產事業山林事業の助成、肥料の國營管理等の豫算を三土が遠慮なく削つてしまつたので、山本はたゞもうカン／＼に怒つて仕舞つた。

しかも山本の強味は之等の案はいづれも政友會の黨政擴張上必要欠くべからざるもので、與黨代議士が擧つて自分を支持するであらう點であつた。

そこで四日の豫算閣議には三土をば、眞向微塵にやつつける心組で出掛けたが、農林省の案が餘りに杜撰であつたので、與黨内部はいさ知らず閣内では反つて山本が全閣僚の包圍攻撃を受ける始末であつた。川崎問題以來三土いぢめでは常に歩調を揃へて來た中橋までが今度の案には餘り同情を持たないので、山本は孤立無援もう燒けくそになつた。

「農地金庫案を閣議で承認しないんなら、政友會内閣と無理心中さ」と凄いことを新聞記者に宣傳したり、首相の田中に會へば自分の進退に關するぞと脅かしたりすると同時に、一方に於いては、政友會の有象無象をも動かして、死物狂ひのあばれ方を初めた。

◇

閣内がから割れて仕舞ひ、與黨内の空氣も險惡となつては、何とかしてこの空氣を一新する必要がある。それは恰度國内問題の矢叅しい時に態と、外國に事を構へて全國民の注意をその方へ外らすと同じやうに。

そこで政友會切つての智慧者の小泉策太郎が、あの小さんそつくりの顔を方々へ出すやうになつた。

『から紛糾して來ては逆もいけない。山本に助け船を出してやらにや』と說き廻つた。この三中老の入知慧で初まつたのが、地租委讓問題の一幕、與黨幹部が總出で政府の五年度實施を攻撃する、幹事長から總裁に決議文をつきつける。幹部が閣僚を大いに面詰する、まるで煮えくり返るやうな大騷ぎが演ぜられた。

併し之れ丈の大騷ぎの最後の幕はどうであつたか？　大小幹部があの眥を決して激論した割合には、頗る變通自在な生溫るい決議を總裁たる田中の手許に出したに止まるではないか。

地租委讓騷ぎの落付く先は、實は有のやうな黒い手が動いて初まつたことゝて、下つ端の陣笠はさうでもあるまいが、幹部と名のつくものゝ間にはもうちやんと割り切つて居る、いな彼等は一つの筋書に從つて舞臺で動いて居る傀儡に過ぎないのだ。

地租委讓は五年度實施と定まり、その結果は聲明通り一應幹部總辭職ともなつた。併し一旦辭表を出しても、それは田中が預つて置き、議會開際までには皆逆戻りすることは請合ひである。

それにしても小泉は知慧のある男だ、これで山本救濟即政友會内閣倒潰防止の目的を達した上に政友會の有象無象には、立派に選擧區への申譯けも立ち、來年の總選擧にも何とか誤魔化

しがつくやうにしてやつた。

◇

今度のいきさつの概略は、いままで述べたところでほゞ見當がつく。それならば一體山本と三土はどうしてさうまで仲が惡いか？ それには山本の性格、經歷、政友會に於ける山本と三土の地位から、山本と田中の關係、現內閣成立當時の面倒な行掛り等を一應見る必要がある。

山本は日本海の孤島佐渡ヶ島の產、明治三年生れの今年取つて五十八、學問は前にも述べたやうにドイツでやつて來て、第二高等學校の先生を勤めた男で、物の道理も判り演說も出來、まづ以て立派な男だが生れが離れ小島の佐渡のせいもあらうか、非常に偏狹な性格の持主だ。

その一例を擧げると、この頃出來た閣僚と實業家の懇親會でも、山本は小川平吉と共に閣僚側を代表する幹事だつたが、たとひモシ〱の小川平でも何度も大臣になつてゐるから席次は小川が上に違ひないのに、山本は先着の故を以て上席へ着いた切り、いつかな動かなかつた。またその會の名前をつけるにも小川の案を排斥して極力自說の丁卯會を主張し、流石に圖々しい小川をして遂に讓らしめた。これは極めて小さい例ではあるが山本の面目躍如たるものがある。

そして山本は多年政友會に在つて、黨に對する功勞は相當にある。一時は黨務を疎んじたと云ふので故原敬から喧しく云はれ爾來十數年政友會の悲境時代には相當財的寄與もして居るが如何せん彼の遣り口は、中橋あたりと違つて大口に投げ出さないもんだから、いつも大臣の口をあとの鳥にしてやられて居た。併しいつまでも愚圖々々して居ては、一生に一度も大臣になり損なふかも知れないと考へ初めて今度の田中が總裁になつてからは隨分財的援助を吝まなかつた、眞僞保證の限りではないが、山本悌二郎と云ふ手形（所謂單名の融通手形）が時々市場へも出廻るさうだから、山本も今では苦しい中を黨の爲め金策もして居るであらう。

さう云ふ事情で田中も山本に對しては、今までに色々の言質も與へて居るのに、一向それを實現しないで高橋が大藏大臣を罷めれば、いきなり三土を大藏へ持つて行つたりするから、山本が怒るのも強ち無理はないかも知れない、或る閣僚は山本のことを評して彼は學者として終るべきものが誤まつて金持ちとなり、その結果また大臣となつたので到底その器ではないと云つて居る。

◇

山本の當面の敵たる三土はどんな男か、彼れは山本よりも一年遲れて明治四年六月讃岐の國の片田舍には生れ高等師範を出てから永く附屬中學の國語の教師なんかして居たが見出されて岩崎小彌太の家庭教師となつて外國へも行き、歸朝後は韓國政府の學政參與官と云ふものになつたりして居たが、山本より一期遲れて代議士となり、高橋是清に可愛がられて、高橋の下に勅參になつたり、書記官長を勤めたり、政務次官になつたりして田中内閣には文部大臣となり、高橋老人の罷めた後を襲つて大藏大臣になつた。

三土に對する世評は概していゝ方であるが彼れが平氣で噓八百を並べることは彼の大藏大臣就任以來世間の實驗濟みである。しかし不思議なことには休業銀行がいつ開くとか開かないとか、いゝ加減な出鱈目を並べ立てゝも、誰も責める者もないのは人間としての三土に罪がないからか、それとも彼れがまだ世間から齒牙に掛られないかどちらかであらう。

山本にして見れば代議士としても後輩であり、黨に對する功勞もなく、唯高橋に可愛がられて、くつ付いて居る中に財政の數字を覺えたに過ぎない三土輩の爲めに自分が熱望し、田中からも或る言質を得て居た大藏大臣の椅子をさらはれてはどうも腹の蟲が納まらないのである。しかしそれにしても總理大臣であり、政友會の總裁である田中が、もう少ししつかりして居りさへすれば、事毎にあんなヘマはやらないですむんだが田中が案山子見たいであるばかりに、年中紛擾を捲き起して居るのだ。

田中と云へば彼れの物の判りの悪いのには閣僚もほと〳〵持て餘して居るが、ジュネーブで軍縮會議の開かれて居た七月の或日、田中は突如米國大使の訪問を受けた。云はずと知れた日本政府の肚を讀みに來たものなので、慌てゝ海軍省から某次官を呼び、軍縮會議に關する知識を得ようとしたが、幾ら説明してもトンと判らず、おしまひにいよ〳〵部屋を出ようとして某氏を振り返り『君、五五三てのはなんだつたかね？』と聞いたので、某氏も餘りのことに呆れ果て『五、五、三とは十、十、六のことです』と答へたら、田中は『あさうか、よし判つた』とすた〳〵出て行つたさうだが、恐らく今でも田中にはワシントン會議の主力戰比率の五、五、三は判らないで居るだらう。

新年號豫告

御馳走する前にその品數を列べ立てて、吹聽するのは興を殺ぐから、こゝでは餘り新年號の效能書きを列べたくないと思ふ。が、たゞ次のやうな事と來年度の大體の編輯方針だけとを披露しておくから他は編輯者の手腕を信賴して其出來榮えを期待して頂きたいと思ふ。期待以上に出ることはあつても決して多年の我愛讀者を失望せしめないであらうといふことを茲に斷言する。

新計畫はいろ／＼あるが、公論欄は依然として我國文化の最高標準を示す論文の數種を掲げることは在來と異るところはないが、極めて異色ある論客を求めて社會科學の討究にのみ偏せず、廣く自然科學・宗教の領域にも突入して讀者の眼界をして濶達たらしめようと思ふ。所謂中間記事と呼ばるゝ說苑欄は從來から本誌の特色として好評あるものであるが、今後は益々其特色を發揮すると同時に、在來の型を破つて讀者並に同業者の想像も及ばないやうな破天荒の進展をして見たいと思つてゐる。二三の腹案もあれば又成算もある。これが實現される日には滿都の人氣を沸騰させるであらうと思ふが、他の雜誌には見られなくて本誌にのみ掲載され而も誰が見誰が讀んでもアツと驚嘆せずにはゐられないといふ種類のものだけに容易には手に入らないし、迂濶に吹聽することもできない。創作欄に至つては徒らに數と量とを競爭して駄作愚作の展覽會場たるをやめ、拔も讀みごたへのある、そして何人も讀まずにゐられない一流大家の傑作數篇を掲載し、時に意表外の新計畫を樹てゝ、沈滯せる我文壇への清涼劑たらしめようと思つてゐる。

若しそれ久しく本誌の「文藝時評」「演藝時評」に明快透徹の筆を揮つて、中央公論の聲價を高からしめた正宗白鳥氏は本年一杯にて「演藝時評」の筆を納め、來年からは引續き自由なる立場に在つて「白鳥隨筆」に筆を執らるゝこと

になつてゐるから、一代の珍品「荷風隨筆」と共に是れ亦珍中の珍として一世の賞賛と羨望とを博すること受合である。

然らば「文藝時評」はといへば、今日では最早作家の批評時代は過ぎて嚴正なる文藝批評家の批評時代に入らんとてゐる機運を察し、我評壇の第一人者片上伸氏を煩はして毎月なるべく個々の作品について忌憚なき評言と新時代の文藝論とを聽かうと思ふ。新設「映畫時評」に至つては中央公論の一大躍進でなければならない。新時代から活動寫眞とスポーツとを除き去ることはできないやうに、我誌も新年から「映畫時評」欄を新設して映畫を藝術的に觀賞し廣く名畫を江湖に推稱したいと思ふ。而も斯界の權威者小山內薫、久米正雄、室生犀星の三氏をして毎月三人三樣の鑑賞を聞くことを得ることは、ファンならずとも滿都の喝采を博するであらうと信ずる。

「社會時評」は吉野作造氏が本誌の爲めに殆ど半生の心血を濺いで一世を指導せられし所、中央公論が今日我國評論壇に重きを爲してゐるのも正しく吉野作造氏の力によるものであつて、吉野作造氏と中央公論とは正に水魚の關係とも云ふべく今後ともに氏が我誌に嚴正卓拔の批判を寄せらるゝに變りはないが、社會時評の社會時評たるの面目を發揚し、我社會時評をしていよ〳〵言論界の權威たらしめん爲めに、法學界の權威者と、經濟學界の權威者とを以てして、三氏三方面より、日々夜々勃發する社會的現象を細大洩らさず中央公論の俎上に上して一世の指標たらしめたい。それには牧野英一博士と牧野輝智氏とを煩はすことに無理にもお願ひしてゐるところである。

以上は本誌が新年以後の連續的計畫の一端を洩らしたのみで特に新年號の一つ一つの內容には觸れなかつた。それは蓋を開けてアッと云はせようとする野心からでもあるが、また事實依賴中未だ發表の時機に達しないものもあるからである。抱負は大きい、然しながら事實どんなものが出來上るかは吾等にとつても奇蹟を待つ心である。計畫が大きければ大きいほど困難も亦之に伴ふ。讀者は只吾等が血みどろの決心と、何でも讀者の爲にいゝものを提供したいといふ熱心とを買つて下さればいゝ。そして新年號の出るまで待つてゐて下さればいゝ。批評は內容を見ての上にして……。

編輯者雜記

×

「編輯者雜記」欄を新設して、編輯者より讀者への通信に代へる。併せて社會に訴へることあらば此欄を通して訴へたいと思ふ。編輯樂屋噺も亦時にとつての興味でないこともなからう。

×

「作家の飜譯」號は出ない前から評判がよかつた。文壇が一般に沈衰してゐる證據だらう。或作家はその話を聞いただけで「それなら僕も金を出して買つて見ようと思ふね。」とのことであつた。蓋し此作家は毎號寄贈を受けてゐるので、金を出しては一册も買つたことのない人であつた。

×

それにしても飜譯號に永井荷風氏の一文を逸したことは惜しい。

×

「來年こそは……」とは、歲末になると誰しも、或は恐らく怠け者ほど感じることだらうが、吾等は切實に「來年こそは……」の感情に燃えてゐる。それは今年に爲殘したと思ふ點も多々あるからであるが、年が更れば氣も變る……で、何かしら新らしい氣持で張りきつてゐる。一つ目醒ましい働きをして見ようと思ふ。全的にぶつつかつて見たい。じつとしてゐられない氣持である。氣持ばかりでなしに些か自信も有る。準備もできてゐるが、それを此處で洩らさないのは蓋を開けた時にアッと云はせたい爲である。讀者よ、編輯者の手腕に信賴してくれ給へ。

×

本號の高畠氏の論文「血と速度の現代」はいゝ論文だ。現代社會の病弊を論じ盡して餘蘊なし。大衆に推薦したく思ふ論文だ。「誰も讀めないやうな論文や、讀んでも判らないやうな論文をいくら書いても仕様がないじやないか。紙屑を拵へてるやうなものだ。僕は一つ誰にも判るやうな論文を書いて見たいな。」――これが筆者執筆の出發點だ。その抱負のほども察せられると思ふ。

○

時代は絶えず動きつゝある。常に進展し轉向する現代生活に於て傳統にのみ執着することはやゝもすれば沈滯を招き易い。我々は傳統を無視することは出來ぬが、生活の新鮮味潑剌味を取入れることは一層必要だ。これは本誌が過去に於て生きて來た道であると同時に又將來に於て生きんとする態度である。

○

現代各方面に於ける權威の雄編大作を網羅することは常に本誌の努力する處であるが、新人の力作の紹介も亦其使命とする處である。眞に力ある新人出でよ。現代は斯くの如き新人の出現を如何に期待して居ることであらう。沈滯の空氣を破り得る者は常に新人でなければならない。

○

無名の士の投稿も大に歡迎する處だ。其中

から眞球を探り得るならば愉快である。

○

ついでに投稿に就いて一言。近來規定違反の投稿が多いが、必ず返送料及書留郵券封入を忘れないで頂きたい。規定に反する投稿は其原稿に對して本誌は一切の責任を持たないから豫め承知せられたい。

□

地租委讓の延期に駄々をこねる政友會の黨員諸君は、法制上の手續やそれに代る財源などはどうでもいゝのだ。たゞそれを餌に地方民の御機嫌を伺つて、來春の總選擧に危くなりかけた自己の足場を支へやうと焦つてゐる心理は、心ある者の誰しも直感するところだらう。この事は單に政黨者流のみではない。今の社會の表層に立つ人、自己のために天下の公器を私するところ無きや。

□

飜譯號を世におくるにあたつて、今更の如く想起する事は、芥川氏があの死を遂げられる三日前に私に語られた一事である。それは「曾てフランスの某誌が飜譯號を出した事があるが、その結果は實に見るに堪へざるものであつた。今度の中央公論の企圖には心からの賛意を表するが、唯禱るところは前者の轍を踏まないことである。自分も既に飜譯すべき原作も決定し、日夜想を練つてゐる」と。私はその意氣に打たれたのであつたが、氏は今既に冥路の客、呼べども答へない。今本號を世に出す時、氏の遺靈に對して新たな感慨の繁きを禁じ得ない。

△

昨今出版界は何所を見ても焦燥と溜息のみだ。旱天に雲影を望む百姓の心理だ。併し曾て霽れない雨の降つたこともなく、降らない一年の續いたことも聞かない。徒らに悲觀し徒らに今日への迎合にあせるのは自ら墓穴を掘るものだ。値下げだ、擴張だと先きの見えすいた惡足掻きは吾々のとらない所である。吾々は何所までも堅實な根の上に健全な成長を期してゐる。新年號からの發展は充分期待されていゝ。

△

新年號の計畫に就ては別項豫告に大體記されてゐるが、小山內、久米、室生、三氏によつて擔當される映畫時評は必ず斯界に大センセイションを惹起すべきものだ。

△

今日に於いては映畫も立派な藝術の一部を擔つてゐる。而も社會的にその影響する所の多いのを思ふ時、これに對して一の高踏批評もなかつたといふことは遺憾である。あると思へば會社側の宣傳か、然らざれば低級な與太批評のみである。

△

新興藝術に對し正しい進路を與へ、健全な發育を期すは吾々の重大な責務である。

荷風隨筆

永井荷風

○中洲病院を訪ふ

初冬の一日、風なく日の暖なる折を窺ひ、中洲河岸なる中洲病院を訪ふて、院長大石國手の診察を請うた。わたくしが宿疾の治療を國手に請うてより指を屈すること既に十年を經てゐる。此の間中洲病院は大正癸亥の年の災火に燒亡し、國手は函館に去つて葛裘を變ること三たび、病院再建の計畫の成るのを俟つて歸京せられたのであつた。そして病院再建の工事は今年の五月に至つて竣成し、隅田川の水涯に臨んで塔の如き四層の樓閣を聳かせた。病院の傍には遠からず深川に渡るべき新橋が架せられるので、其の工事の畢る曉には、曾て震災前には酒樓茶亭の軒を連ねた中洲河岸の光景は、病院の樓閣と新橋との二つを得て全く別天地の觀をなすであらう。

國手はこの日わたくしの病の小康を得てゐることを祝した後、手づからエレベーターの金網戸を開き、わたくしを導いて屋上の庭に出で、薔薇や菊花の咲きみだれた鉢物の間に立つて、河上の景を眺めながら閒談せられた。

大石國手が產科醫の泰斗として當代の刀圭家中に重んぜられてゐることは、わたくしの言を俟たぬ所である。又わたくしが男子の身でありながら、何が故にその生命を產科醫に託してゐるか。その事も亦贅するに及ばぬであらう。既に拙著「斷腸亭雜稾」に於て、わたくしは大石國手の爲人を稱揚し、そが診斷の妙は啻に病體にのみ留るに非らずして、往々人

間の精神に入ることを述べた。

其の日國手は新に處方せられた一封の藥をわたくしに與へ、歸るに臨んで案頭の一冊子を把つて、「これは僕の經歴と病院の沿革を書いて見たのだから、おひまの節御覽なすつて下さい。」と言はれた。冊子は今年の夏五月病院再建竣成の際に頒布したものである。わたくしは國手が禪學に通じ又詩を善くすることを知つてゐる。曾てわたくしが築地の僑居に在つて病に臥してゐた時、診察に來られた國手は枕頭の箋紙を把つて、

今歲風光爭忍レ看。新陵礎下雪痕寒。
世間誰道人情改。是不二窮冬一亦永嘆。

とその近什を書して示されたことがあつた。此の絕句には冬嶺といふ雅號が書してあつた。國手は一にまた不鳴庵と號し、禪學については自然居士の名がある。是れ南天棒中原鄧州師より印可を受けた際に授けられたものと云ふ。

わたくしは病院を出で新に開かれた街路金座通とやらに通ずる新架橋を渡り、右折して新大橋に出で、川筋通の蒸汽船に乘つて永代橋に到る水上、徐に大石國手の冊子を攤いて讀んだ。其の文は果せるかな、國手の爲人と平生の薀蓄とを知らしめて餘りあるものである。わたくしは茲に中洲病院震災遭難の記事の一節を抄錄する。

「大正十二年九月一日天災一度到るや、院內の全員各良く力を盡し、泰然自若、然も敏捷正確、一人の狼狽者無く、一人の落伍者なし。凡て入院患者の保護にのみ任じて周到なり。不肖之れを目擊し心中感淚を禁ずる能はず。徐に彼等の爲す所に委ねて遺憾なかりき。之に加ふるに中洲町居住の諸家殊に中洲青年團員諸君の甚大なる直接の援護の下に、四方已に黑煙擧り中洲町も亦免るべからざるを看るに至り、幾度か反復する强震の間、二十八名の入院患者を靜かに大傳馬船二艘に分乘せしめ、中洲病院職員男女四十七名、これを衞りて卽ち隅田川上に浮ぶ。一天怪暗、狂風奔波、檣船既に難きに加るに兩岸の猛火船を燒き人を燗かさずんば已まず、河水宛ら溫湯の如し。淺野セメント會社の大鐵煙筒は赤熱して屈曲し、

萬年橋の鐵欄亦飴の如く撓曲して水面に落つ。大小の火彈絶えず兩岸より發し低く水面を拂ひ、大川を越え一東岸に達す。又高く渦風に煽られて黑天に金砂を撒し慘絶凄絶なり。遙に下流を望めば月島も亦一大火炬に化し烱々として狂波に映ず。上流新大橋上避難の人兩岸より追はれ追はれ來つて充溢す。河上輻輳の船或は風浪に弄ばれ重荷に堪へずして顚覆するあり。若しくは又相續いて火を發す。水に落つれば數秒にして大半波底に沒し、燒かるゝものは阿鼻叫喚。火船空しく水上を浮動す。火岸火天。火水。火船。目前地獄に坐して誰か生色あらんや。不肖が乘船も亦幾度か燃えんとせるも諸員を激勵し鞭撻し、徹宵河水を以て全船に澆注して幸に燒けず、溺れず、早曉に達せり。此間幾度か死地に入り其情景今日も猶決して忘るゝ能はざるも、殊に腦裏に止つて去り能はざるは不肖が病院の燒失し行くを自ら目撃し、其の屋標に記せる不肖の名が次第に燒け行くを見たる時正に大死一番なりき。斯くして辛じて傭船を見出し相共に溯上す。幾度か渦風に弄ばる。水上陸岸死屍累累、子を抱いて死せる慈母あり。愛馬空しく荷を負うて流れ我が乘船に著いて去らざるあり。縱に鐘ケ淵に舟を留め紡績會社に就いて寄宿を乞ふ。店長（多和田氏）淚有り矣。號令一下。部下數十人をして少しく傾倒せる一屋を建て起さしめ、先づ女工寄宿舍の疊を敷き、次いで倉を開いて唐草模樣の新寢具を出し、予等に饗するに握飯を以てするのみか、患者を數へて鷄卵と牛乳とを併せらる。誰か殊遇に泣かざらんや。聞く多和田氏の手中女工四千人、其中僅かに六人の死者を出せるのみなりきと。人を導くの人行ふこと亦難いかな。寄寓十日、此間患者半數の處置を終へ本郷に一屋を得、五十六人移り住す。乃ち噬臍古語を書して揭ぐ。曰く君子見難氣彌奮。以て一同を慰撫激勵す。」云々。

震災の記事は其の當時の出版物にして之を載せざるはなかつた。然し多くは文藻に乏しき採脈者が倉皇の際に記錄したもので、傳聞の誤も亦無いとは言はれなかつた。之に反して、大石國手が記事を見るに、其の觀察の精細は其の文藻と相俟つて、當時の光景をして眼前に歷々たらしむるものがある。古來杏林の名士には文字の修養卻て專攻の文人に優るものが少くない。昔には山脇東洋、望月鹿門、井上金峨、杉田玄白、澁江抽齋等枚擧に遑あらず、近世には戶塚靜海、淺野栗

閑等があり、當代には森鷗外先生があつた。大石國手は舊藩府の醫官大石氏の後裔であると云ふ。斯の家よりして斯の人を出したのは亦怪しむに足りない。

○市河先生の燼錄

震災の慘狀を記述した當時の文獻の中、わたくしの特に珍重して措かざるものは市河泰庵先生の燼錄である。先生は本年正月宿痾のために小石川の新居に簀を易へられた。わたくしは生前先生とは纔に書翰の往復をしてゐたのみで、平生疎懶のため一たびも其の邸に赴いて病を問うた事もなく、遂に永く謦咳に接するの機を失つてしまつた。燼錄は先生が飯田町の舊居遊德園に在つて災火に襲はれ家人と共に身を以て免れた時のことを漢文で記述せられたもので、編を分つて、避難紀事、雜事片片、神主石牌、烹茶撫書以下十餘章となし、大正十四年十一月印に付して知人に頒たれたのである。卷尾の語に、「此ノ稿今茲(コトシ)九月十二日ニ筆ヲ起シ、旬日ニシテ之ヲ閣ク。秋暑燬クガ如シ。汗ヲ揮ツテ書ス焉。詞句ノ拙陋雜駁ナルハ、恰モ燼中ヨリ出ヅル所ノ如シ。因ツテ燼錄ト曰フ。聊カ以テ忝間諸君ノ一笑ニ供ス。」としてある。

震災の際都下の火は一時に四方より起つた。當時新聞紙の報道は急遽の際のことで被害の概略を記すに過ぎず、殊にその火元の如きは之を審かにすることを得なかつたものも尠くなかつた。これは罹災者の言ふ所について聞かなければならない。麴町區飯田町方面の火災を語つて遺すなきものは泰庵先生の燼錄である。「避難紀事」に曰く、「大正十二年九月一日、朝來小雨霽ル。暑甚シ。將ニ午ナラントス。時ニ予坐椅ニ倚ツテ飯ノ至ルヲ待テリ。俄然トシテ地大ニ動ク。予ハ即チ安祥シテ起チ、臥褥ヲ回シ障子ヲ開イテ先ヅ庫ヲ見テ、意謂(おもへら)ク、庫ハ昨年大修繕ヲ加ヘタリ。以テ據ル可シ焉ト。躊躇スルノ間、震フコト益大ナリ。電燈ノ搖擺スル事非常ナルヲ見、咄嗟ニ踵ヲ旋シテ庭ニ向フ。(略)。時ニ近ク爆音ヲ聞ク。忽ニシテ又消防車ノ響ヲ聞ク。蓋火ヲ失セシ也。須臾ニシテ消防ノ去ルヤ以テ火ノ熄ムト爲ス。何ゾ圖ラン水道壞タレテ消火施

スニ術無キナリ。丙子水ヲ馬決ニ盛リテ來ル。乃チ嘴ヲ投ジテ連ニ飲ム焉。曰ク桔槹ハ倒ル。予カラ縄ヲ繰ツテ汲ム。謂ル所以ナリト。予曰ク荒野（借家人）ハ如何ト。曰ク幸ニ免レタリ。但シ對面ノ比屋瓦皆墜ツ。其ハ頭ヲ傷ケ來ツテ水ヲ求ムト。予曰ク那邊ノ失火ゾ。曰ク齒科醫學校也ト。予時ニ立ツテ四顧ス。（略）霎時ノ間不意ノ烈風暴ニ起リ、黒烟倏チ我衛ヲ覆フ。學校吾家ヲ距ツル事一丁ニ滿タズ。（略）黒烟益低ク、大星ノ降ル者漸ク多シ。遂ニ意ヲ決シテ逃レン事ヲ計ル。丙子ノ曰ク、噂物ヲ出サザルカト。予此ノ時慾心全ク絶ユ。忽チ一書匣（内ニ曾祖父全集關係書類ヲ容ル）偶マ庫ノ外ニ在ルヲ憶ウテ、曰ク然リ。那個ヲ携ヘン乎ト。丙子ハ即チ帶ビテ出ヅ。乃チ匣ヲ捨テ兒ノ帶ヲ以テ之ヲ縛シ、其ノ他ハ則机邊ノ一小物ト雖モ擧ゲテ顧ミズ。蓋シ當時、餘震劇ニ至ル。予若シ丙子ニ命ジテ家ニ入ラシメ、萬一ノ事有ラン乎。恐ラクハ設想ニ堪ヘザル者有ラン。且ツ事急ナリ。卒迫ノ際此ノ一函ヲ脱シ得タリ。亦以テ多トス可シ。逃計既ニ定マル。門前ノ路溢タシテ墜瓦ノ危アルヲ想ヒ、乃チ庭前ノ籬ヲ破ラシム。吾庭隣園ニ接ス。隣園ハ廣ニシテ多樹トナス。故ニ平日我庭ノ朓望曠濶ナリ。知友皆羨ム焉。今予等枝ニ縋リ莽ヲ排シテ下ル。下ル事半途ニシテ右顧スレバ、忽ニシテ火焔ヲ見ル。蓋シ我ガ庭右ニ他人ノ樓屋アリ、故ニ庭中火ヲ見ザリシナリ。（略）曉星小學校ノ前ニ至ルヤ、滿衛狼狽。跣足ナル者アリ。纖シテ由スル者アリ。板上ニ篤疾ヲ舁スル者アリ。偶婦人ノ盛裝シテ趨ル者アリ。紅裙翩翻トシテ素足膝ヲ露ハスヲ知ラズ。予ヤ病中褌ヲ嫌フ。此ノ時一衣一帶一眼鏡ノミ。故ヲ以テ徐歩ノ闊倘頗ル醜ヲ呈セン事ヲ恐レ、心中獨リ苦笑ス。（略）未ダ曉星ノ前ニ至ラザルニ左顧シテ神田ノ方面ヲ瞥見スルヤ則チ凶焔炎々タリ矣。剛ニ纔ニ崖ヲ下リシ時樹間ヲ仰イデ我ガ書庫ノ黒烟ノ下ニ立テルヲ見ルヤ、心中實ニ言フ可ラザル者アリキ。今此ノ慘狀ヲ目擊シ言フ可ラザル者更ニ一段ヲ加フ。予ヤ身ニ痿疾アリ。三年地ヲ踏マズ。今ヤ蹣跚トシテ人ノ肩ニ倚ツテ烈日ヲ冒ス。其ノ倖ンデ倒レザル者、寔所謂一種靈能ノ發現ナル者乎。」　（下略）

來庵先生、名は三陽と云ふ。姓は市河氏。江戸時代著名の書家米庵先生の孫にして、萬庵先生の嗣子である。その亦學德と

藝並び併せて名家の後たるに愧ぢなかつたことは世の周く知る所。駑劣わたくしの如きものゝ言ふを俟たぬ所である。たまく初冬の一日中洲病院を訪ふて冬嶺國手が罹災の文を讀み、家に歸つて思出づるがまゝに燼餘録を再讀したので、こゝに是をしるしたのである。

○譯詩について

一 中央公論の編輯者はわたくしに佛蘭西現代の抒情詩、もしくは短き散文詩の翻譯を試みることを勸めた。わたくしは既に久しく洋書を高閣に束ねてしまつたので、戰後佛蘭西の詩壇には如何なる新詩人の輩出したかを知らず、又日本文壇の愛詩家が今日は如何なる傾向の詩を迎へてゐるかをも審にしない。戰後わたくしが繙いた佛蘭西の新しき詩集はアポリネエル。ヴアレリイ。ジユウルロマン其他二三家の集に過ぎない。一時わたくしが鷗外柳村二先生の顰に倣つて、西詩の翻譯を試みたのも、思へば既に二十年に近いむかしである。當時わたくしが好むでこの事に從つたのは西詩の餘香をわが文壇に移し傳へやうと欲するよりも、寧ろこの事によつて、わたくしは自家の感情と文辭とを洗練する助けになさうと欲したのであつた。わが舊著の中「新橋夜話」に收めた「短夜」といひ「晝すぎ」といふが如き對話體の文、また劇詩の體裁を取れる「秋のわかれ」の如き當時わたくしはいづれも佛蘭西抒情詩の翻譯から新に得たる收穫となしたものであつた。然し幾くもなくして、わたくしが讀書の趣味は境遇と共に變化し來たつたので、爾來この種の制作を再びする與會を得ないのである。

一 然しわたくしは泰西の新詩を讀むることを全く廢止してしまつたわけではない。唯系統を追うて讀むことを辭つてゐるのみで、目に觸れるものは隨意に之を漫讀してゐることは過ぎし日と更にかはりはない。或は霖雨の日に渉る夕、無聊のあまり書篋を整理する時、或は草稿を脱し得た夜半机上の亂帙を片寄せる時、或はまた風靜なる日俗客の來らざるを

幸、窓を開いて紙魚を追ふ時、わたくしは平生嗜讀の詩集を把つて漫讀することを無上の娯みとなしてゐる。泰西詩家の集中わたくしが二十年來今猶時時諷詠することを忘れないものは、A. de Musset の集である。André Gide の詩篇 Les Poésies D'André Walter の一卷である。Jean Moréas の文集 Esquisse et Souvenirs （小品および追憶）である。今や西洋近世の名著にして邦語に譯せられないものは殆どない位であるから、思ふに以上わたくしが嗜讀の三書の如きも、既に世に紹介せられてゐることであらう。未だ爲されてゐないならば一日もその速ならむことをわたくしは世の翻譯家に切望する。

一　アントレーチットは小說家として知られてゐる。其の名著「せまき扉」は曾て竹友藻風氏が其の中の一節を翻せられた。後に山内義雄氏が其全譯を世に公にせられた。チットは始め詩を以て世に顯はれ、後に散文を公にしたのである。是は獨りチットのみには留まらず、佛蘭西の文士の古來取り來たつた道である。ヴイクトル、ユーゴーの如きも戯曲エルナニをつくるに先立つて、多く詩篇を公にしてゐる。トーデやモーパサンの如きも年少くしてまづ詩を世に示した。エミルゾラに在つてすら猶且つさうであつた。自然主義が衰へて、象徴主義の行はれてから佛蘭西文壇に迎へられる戯曲小說の傑作は悉く詩人の手に成つたものと見てもよい。是わが日本現時の文學と全く其趣を異にする所である。明治年代に於ける硯友社の文學を看るに其の由るところは西鶴のみではなくして、元祿俳家の俳文に負ふところも亦尠くない。是亦現時の文學と異るところであらう。

一　チットの詩篇「アンドレヱ、ワルテルの詩」は同棲してゐる年少の詩人とその戀人の二人が、眠られぬ或夜、過去現在と未來とに渉るさまぐ\なる冥想と憂悶と、また果敢なき希望とを語合ふその情景を敍したものである。此の詩篇の構想と情調とは其が短篇小說・パリユード（PALUDE）と殆ど同じきものである。而してまたパリユードの一篇を一貫する神秘的なる憂傷の情味は、後年の傑作なる「狹きとぼそ」の中にも多分に看取し得らるゝものである。唯前の二作には餘

者の共調をなした宗教的人生觀がそれほど顯著になつてゐない。此の點に於て前の二作は作者が年猶少き時に成つた事を知らしめる。

一 アンドレエ、チツトは其の語錄の中にボードレールの詩を愛誦したのは年少の時であつて、其後に至つては成るべく之を再讀しないやうに力めたといふやうな事を言つてゐる。ヂヤン、モレアスも亦「秋」と題した散文の中に、ボードレールを稱揚することは、年少の時、初めて其の詩を讀んで以來今日に至るまで終始變るところはない。然し今はこれを稱揚するのみにして再び其詩篇を讀まうとは思はないとの意を述べ、ボードレールは偉大なる藝術家であつたが、然し純粹なる詩人であつたとは言ひ得ないとなし、暗にボードレールを抑へて、ヴエルレーンを揭げてゐる。之に由つて之を觀れば、モレアスは詞藝に巧みなるものよりも、又思想の深遠ならんよりも、感情の純白なるを以て詩人の本領となしたものと思はれる。

一 ジヤン、モレアスの散文集「小品と追憶」の一書はわたくしが嗜讀の書中、その第一に位せしむべきものである。集中「十一月。」「烟。」「午後。」「散策」など題せられた小品文はいづれも散文の間に詩を挿入したものである。わたくしは初て之を讀んだ時、何といふわけもなく元祿時代の俳文を追想した。言ふまでもなく彼と此とは時代と人種とを異にした別種の文明より産れ出でた文字であるが、それにも係らず、わたくしをして讀過の際突然斯の如き感想を催さしめたのは、淡々たる行文の中、兩者ともに洗練せられたる趣味の極致を示した所、一脈何等か相通ずるものが存るためであらう。わたくしは歐羅巴の文學については佛蘭西を除いては他に知る所がない。然し小品文の絶妙なるものは、おそらくは佛蘭西近世の文學を除いては他に之を求むることを得ないであらう。則ボードレールやマラルメの散文の如き、又現在にてはポールクローデルの極東嘗見記の如きものである。

一 わたくしは佛蘭西抒情詩の妙を說いて、圖らずもわが俳諧師の文に及んだ。俳家の散文にして讀過の際、わたくしを

して殆ど西洋の詩をよむと同じやうな、音樂的幻想を覺えさせたものは、松尾桃靑の「銀河の序」の如きが其一例である。序の後半に曰く「……窗押開きて、暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半天にかゝりて、星きら／＼と冴たるに、沖の方より、波の音しば／＼はこびて、魂けづるが如く、腸ちぎれて、そゞろに悲しびきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なにゆへとはなくて、しぼるゝばかりになむ侍る。荒ら海や佐渡に横ふあまの川。」

一　俳家の文例を集めた「本朝文鑑」に次の如き作例を擧げてある。

花

君見よや春と秋と。　花さけば葉おつとよ。
葉はおちは掃くべきに。　花になやむわが心。

今若し試にこの四句を取つて佛蘭西語に飜譯したならば、アンリイ、ド、レニエーやポオル、フホール等の好んで作つた四季節序の詩に似たるものができるであらう。

演藝時評

正宗白鳥

「相馬の金さん」

歌舞伎座十一月興行の二番目「相馬の金さん」は、雜誌で讀んだ時には、左ほどに思はなかつたが、舞臺に上つたのを見ると、可成り面白かつた。作者岡本綺堂氏が老練な作劇家である所以である。一般の見物によく解るやうな、退屈させないやうな用意が行屆いてゐるばかりでなく、江戸末期の直參武士の面影が、當時の時代相に包まれて、淡々とした描寫によつて浮んでゐる。それに、「主君はおれ達を棄てて行つたのだから、主君の意志に從ふ必要はない。おれはたゞ田舍者の理屈が癪に障るから戰ふのだ」といつたやうな、主人公の心理が、昔の綺堂物に見えるやうな、取つて付けた理窟でなくつて、いかにも自然らしく出てゐる。序幕の「ゆすり」が、刀が蛇になること以外は、默阿彌型であるし、常盤津の師匠は、この作者の多くの作物の女性の如く、取合はせに出されてゐるのに過ぎないやうで、印象が乏しいし、弟半三郎でも、友人石澤でも、人物の配合が、この作者のいつもの常套であるが、しかし、主人公を引立てるための役としては、可成りに活用されてゐる。

左團次の「金さん」や、その一門の俳優の役々は、綺堂物として調和してゐるが、吉右衛門の石澤寅之助は、調和を缺いでゐる。一時代舊い人物が出てゐるやうである。少し物々しい感じがする。默阿彌の「四千兩」の藤十郎（?）といつたやうな感じがする。松蔦は藝もうまくなつたし、美しくもあるが、我々が辰巳藝者や江戸の遊藝師匠を連想させられる

やうな仇つぽいところはない。福助もさうである。梅幸だけの江戸の女性らしい魅力を持つた女形も次第に無くなりつゝある。しかし、これは時世の變遷として止むを得ないので、理智を沒した色氣をしたゝらせてゐた歌麿形の美女や、半四郎型の女形以外に、彼等は新たな女性を表現していゝ譯である。

一番目の「戰艦三笠」は、築地小劇場でやつて評判であつた「海戰」と對照すると面白い。海戰を題材としても、あゝいふ戲曲も作られ、かういふ芝居も作られるのだ。今度の新作は、會話や舞臺の運びがかういふ芝居に有り勝ちの惡くどさがなくて、簡潔なのがいゝ。しかし(序幕は見落したが)二幕目だけについて云ふと、猿之助の僕従だけの芝居になつて、他の人々は員に備はるのみであるのは、あまりに簡潔過ぎるやうに思はれる。

「千姫最後」は、歌右衛門の千姫が、心理表現に努力してはゐるが、前興行の淀君が再び現はれてゐるやうである。容貌に於て若い女性らしくないばかりでなく、若い女性の惱みも現はれてゐない。臺詞廻しが重々しくて勿體ぶつてゐて、やんちやなお姫様と云つたところがない。

「鎌倉三代記」は、はじめ錦繪美の面白さが感ぜられたが、見てゐるうちに、退屈してしまつた。歌舞伎座の舞臺は廣過ぎて、薄ら淋しい。この一幕は誰れの出し物と云つていゝか分らぬほどに、誰れも見榮えがしない。今度の吉右衛門は二役とも思はしくなかつた。

「うつぼ猿」は所作事の縮詰のやうな感じがした。ここでも、歌舞伎座の舞臺の廣さが氣になつた。(十一月一日)

「坊つちやん」

翌日、本郷座の初日を觀た。戲曲化された「坊ちやん」を觀るためであつた。

故人夏目漱石氏は、演劇を好かなかつたさうだ。昨年のある雜誌に、森田草平氏は、原則として、通俗に妥協しなけれ

ばならぬ戯曲に筆を執らなかつた點に於て、故人の藝術の至醇を說いてゐたやうであつた。それで遺族も、故人の意志を尊重して、かつて、ある劇場の虞美人草（？）の上演希望を斷つたといふことを聞いてゐる。ところが、今度は遺族が負けた。遺族の心に留つてゐる故人の意志が負けた。死者をして死者を葬らしめよ。私は、「坊ちやん」上演について、最初に感じたのはこの感じであつた。

しかし、私は、故人の意志に拘泥することを必しも是としてゐるのではない。今日のやうな脚本缺乏の時世では、有名な小說の利用も結構である。

ところで、私は、漱石氏の多くの作品は、自然主義作家のとはちがつて、多少の戯曲性を帶びてゐると思つてゐる。所謂「芝居氣」に富んでゐる。中にも、「坊ちやん」は、各種の人間の型が誇張されて描かれてゐて、筋立てにも變化があり會話もいき／＼してゐる。「金色夜叉」や「不如歸」に劣らないほどに、多數の讀者を持つてゐるのではあるし、興行者がこの小說に目をつけたのは賢明である。

「播州皿屋敷」の如き、古くさい、馬鹿々々しい、陰慘な芝居を、例の盛り澤山で見せられて、退屈して疲勞した見物に、この芝居によつて笑はされて、面白がらされた譯である。誰れにでも直ぐに分つて、直ぐに快く受入られる程度の正義觀が作品に漂つてゐるのは漱石氏の作品が一般に愛讀される一つの理由になつてゐるが、この小說はことにさうだ。警句や諧謔が頻繁に讀者を喜ばせ、見物をも喜ばせてゐる。

この芝居は、小說をそつくり並べ立てたやうなもので、殆んど戯曲的技巧を弄してゐないのであるが、下手にいぢり廻すよりはよかつた。原作者の持つてゐる面白味が、自然に芝居の面白みになつてゐる。それとゝもに、原作を讀んでゐないものには興味が薄いにちがひない。これにつけても漱石氏が芝居を好んで、喜劇を書いてゐたなら、乾度面白いものが出來てゐたであらうと思はれた。舞臺暗轉の間に、子守唄や、當時の流行唄を用ひたのは、脚色者あるひは演出者のいゝ

思付きである。

役者は作柄についての苦心はあまり入らなかつたであらう。猿之助の「坊ちやん」の一人芝居であるが、單純な「坊つちやん」振りを發揮しさへすればいゝのである。原作には何の陰影もなくつて、讀んだ通りなのだから、猿之助も、原作を前に置いて頭を捻ねる必要はなかつたであらう。苦心は臺詞をよく暗誦する點にあるだけのやうなものだ。しかし、柄から云つて、舊派俳優のうちでは、猿之助が最もこの役には嵌つてゐるらしい。舊派の重なものは必ず持つてゐる「芝居顏」(菊五郎でも吉右衛門でも、あるひは友右衛門でも、現代の人物に扮しながらその顏に、現代の實社會の人間とは、何處かちがつた顏付がほのめくのであるが)を離れてゐるし、舊劇仕込みの妙な思ひ入れもない。

それなら、猿之助は、この役によつて、舞臺藝術の一傑作を創出したのであるかと云ふと、私はさうは思はない。無論はじめから終りまで役柄は一本調子で、誰れに對しても同じ態度でいゝ譯であるし、これだけの人生の經驗をしながら、心に變化を來たさない單純を保つてゐていゝ譯であるが、「坊つちやん型」の人間を、「型」を離れて、現世に生きてゐる個人「坊つちやん」として現はせないものであらうか。原作には、靑年らしい詩があつたやうに思ふが、舞臺ではその味ひはなかつた。

序幕から大詰まで、早足でセカセカと通り過ぎるのは、脚色がさうなつてゐるためでもあるが、この脚色に忠實に從つても、俳優として、この十幾場の間には、時々は、足を留めたり緩歩したりしてもいゝ譯である。その方が、單純性の人間が周圍から受ける波動を現はして、一層いきいきした實在性を示すのではあるまいか。就職の辭令を渡された時の校長の訓論は、單純性の彼れに取つては、一つの打撃である。天ぷら蕎麥の落書も打撃である。バツタも打撃である。山嵐との友情の破裂も打撃である。常人は單純にそれ等の浮世の風をそら吹く風として通り過ぎてゐるにしても、見物は、この「坊ちやん」が世間に勝つてゐるのか負けてゐるのか分らないところを感じていゝ筈である。そこに喜劇の面白味が一層深

くなる譯である。原作は一人稱で、主觀的ではあるが、小說だから、自から心理の說明もあり自己批判もある。芝居ではそんな說明は出來なくつても、そこを小說の文字以上に、自分の身體と言葉によつて生かすのが役者の腕前である。生徒に飜弄された後でも、黑板の落書を見た時でも、若い「坊つちやん」にあるべき筈のしよげたところがなかつた。下宿屋の老婆に、古賀轉任の內情を聞かされた時に、人間の表裏に感動したところがなかつた。魚釣り舟で天を仰いでゐる時に、天然を享樂してゐるところがなかつた。夢に老婢に對してゐる時に、乳母に懷く子供のやうな親しみが流露してゐなかつた。最後の渡し場でゞも、山嵐に別れこの土地に別れる時に、未練を殘さずに、サツサと行つちまふのは面白いとしても、いつも、サツサと早足で進むのは、人を型に押入れたやうな感じがする。

猿之助は、いろ〳〵な舊劇の技巧に可成り熟してゐる上に、何か變つたものをやつて見たいといふ向上慾に燃えてゐるらしい。歷史劇か江戶時代の社會劇しか出來ない舊派俳優のうちでは、この人などが、現代の社會劇を演じ得る素質を持つてゐる方で、今度の「坊つちやん」がそれを證明してゐるのであるが、それとゝもに、現代物を演ずるには、神經がまだ鈍いことも、今度の「坊つちやん」によつて證明されてゐる。

他の役々も、曾我の家流のわざとらしさに墮しないで神妙に演ぜられてゐるのであるが、それでも、ところ〴〵曾我の家の場面が連想された。芝居はあゝしなければいけないのか知れない。

「播州皿屋敷」では、鐵山にも忠太にも感心しなかつたが、松蔦のお菊の技巧は巧かつた。しかし、皿數への技巧だけで、前後は今人の目には、どんな歌舞伎好きの人にも、いやらしさと馬鹿らしさを感ぜしめるに過ぎないので、この芝居は將來たび〳〵繰返されようとは思はれない。從つてかういふ技巧に熟することは骨折甲斐のないやうであるが、兎に角、技巧に工夫してゐる點は、「坊つちやん」のやうな新作のサラ〳〵と手輕く片付けられてゐるのとは違つてゐる。歌舞伎座の「千姬の最後」も、「死にたくない」のに殺される人間苦を現はし、この皿屋敷も「死にともない」のに殺される人

間苦を現はしてゐるのだが、前者では簡單に片付けられ、後者ではその人間苦がひちくどく現はされてゐる。歌舞伎の悪くどさにも困るが、新作の簡單さも飽つ氣なく思はれることが多い。

竹の屋劇評集

饗庭篁村氏は、芝居を快く樂んだ劇通である。しかし、谷崎氏などの近代人とは違つて、芝居を觀賞するにも、心の底に在來の道德觀を保持してゐたことは、この劇評集を讀んでもよく推察される。

先代の菊五郎の世話物の面白さを說いて、「ア、斯う書きかけても、筆を擱いて一寸此幕だけ見に行きたい」と云つてゐるところなど讀むと、私は、さういふ面白いものを見そこなつたのが殘念に思はれる。

團十郎の活歷物が概して不評判であつたことは、この劇評集を讀んでも察せられるが、それにつけても、私はこの不世出の天才の不遇に思ひを及ぼした。舊套を脫せんと志してゐた彼れも、彼れの天分を充分に發揮させる名作家を得なかつたのである。默阿彌の如きも、菊五郎や左團次を生かすに足る戲曲は作出し得ても、團十郎の天分に相當した斬新なる作品は創造し得なかつた。團十郎は舊套を脫せんとした藝術家であり、默阿彌は在來の法則を超脫し得ない藝術家であつた。

この劇評集の文章は、私が昔讀んだ竹の屋主人の小說を思出させるやうな、江戶文學特有の輕妙洒脫な味ひを有つてゐる。灰汁ぬけのした皮肉は、現代の文人にはとても眞似られない。同じく江戶の系統を傳へてゐても、永井荷風氏などの皮肉な筆致は餘程趣きを異にしてゐる。私はそこにも時世の變遷を見るのである。しかし、明治二十八年十月の明治座の「一谷嫩軍記」や「河內山」の劇評には、

「出ませい／＼大作出ませい。新脚本出ませいと手を取つて引立るやうに、學者達が世話をやかるれども、こればかりはかつて新作は出ず。出かけた新作も是ほどにしてお待兼ねの中へニュースーと燒火箸を水に入れた儲に一ツは面目なしと引込

氣、此處しばらく妙作の大脚本出まする間のつなぎとして世に現るゝ古狂言。舊演劇の身代限り選擇もない綴合せ。あらひざらひを並べ立て、此うちどれぞ御意に入らばの古着棚。錦だらけの目ばゆさは、これ演劇の盛兆か、稽古とか溫故とか、演劇の上に字がつくは目出た過ぎたる事共なり」

と、書出されてあるのと見て、今から三十餘年前に、江戸文學通の竹の屋翁に、「あらひざらひの古狂言と揶揄されてゐたそれ等の古狂言が、今日、舊に倍した勢ひをもつて跋扈してゐるのを思出すと、人間の觀劇趣味の、さう激しい變遷は遂げないことが、新たに感ぜられた。

我が饒舌錄

(谷崎氏の演劇觀など)

谷崎潤一郎氏は自信に富んだ藝術家である。名人氣質を有つてゐる。鑑賞力が豐かである。だから、その評論も乾涸びた理窟に墮しないで、所説の當不當に關はらず、讀者の感興を惹くだけの力を有つてゐる。

私はいつも面白く思つて讀んでゐる。「改造」の十月と十一月との二號に渡つて述べられてゐる演劇觀も、氏一流の感想として面白い。私の「演藝時評」が、氏を刺戟して、氏のかねて懷抱してゐる演劇觀を吐露せしめる機緣になつてゐるらしいので、私はます／＼面白く讀んだ。

同感のところもあり、不同感のところもある。これで、私も、谷崎氏の所説を刺戟劑として、鬪い心に力をつけて、自己の斷片的演劇觀を書きつけて見ようと思つてゐる。

○

氏は、「私が菊五郎を褒めたのに對して、近年の芝居を例に引いてさん／＼菊五郎をコキ卸された」と云つてゐるが、私

は氏の菊五郎讃美に反對せんがために、故意に厄年を持出して非難を加へたのではなかつた。私は、今の俳優のうちでは、まだしも菊五郎に望みを囑してゐる。若し、何處かの雜誌が、「あなたのお好きな役者は誰れですか」と、往復はがきで訊きに來たなら、「尾上菊五郎です」と答へてもいゝくらゐに思つてゐる。しかし、厄年は、私が批評した通りに、脚本も演出ぶりもよくなかつた。あれを褒めるのは、谷崎氏の所謂「都會の下町のお孃さんや奥さん」が、贔屓役者が舞臺に顏を出しさへすれば、一も二もなく、現を拔かして喜ぶと同樣な心理であると思つてゐる。私は、菊五郎が好きではあるが、彼れのあばたを笑窪と見るほどに盲目にはなり得ないのである。

谷崎氏はまたかう云つてゐる。「厄年を評し、菊五郎を評してゐる正宗氏が、何故にあの中の淺妻船の踊りに就いて一言も云つてゐないのであらうか。これが私には不思議であつた」云々。氏が前項に云つてゐる「學問や識見や思想なども必要だが、三味線の音色のよしあしの分らないやうな人間だつたら、芝居を云爲する資格はない」といふ言葉と照合せると「汝は三絃と舞踊については沒分曉漢であるが故に、淺妻船の批評を逃げたのであらう」と氏が思つてゐるらしいことは、言外に察せられる。

氏の如く、「感覺第一」說を持出して事々しく論ずるまでもなく、歌舞伎はその名の示す如く、歌は唄であつて、舞は踊りである。唄つて踊るのが、數百年前歌舞伎勃興當時からの本領であつて、從つて、三絃と舞踊を引離しては、在來の歌舞伎美は鑑賞されないことは分り切つてゐる。しかし、それは在來の古典美であつて、それに價値があらば保存を企つべき古典美であつて、現今は、それ等から引離した新演劇の樹立が、明治以來の新人の心を勞してゐる問題となつてゐて、菊五郎だつて、新代の新演劇に向ふ可能性の有無によつて、彼に對する我々の關心の度合ひが違ふのである。彼れが舊歌舞伎の保存にのみ安んじてゐるのなら、私は彼れに對して多くの注文を出さなくつてもいゝのである。

私は、あの時「淺妻船」は見なかつた。

幕間に長田秀雄氏と廊下であつて、氏の勸めるまゝに喫茶店へ入つて、互ひに演劇談を試みてゐるうちに、二番目の序幕が開いた。「淺妻は面白いですよ」と、氏は雜談の間で輕く云つたが、私は「さうでせうね」と輕く受けただけで、座を立たなかつた。そして、暫くして氏に別れて座席へ戻つた時には、踊りは殆んど終つてゐた。若し、私が見てゐたなら一言ぐらゐは評語を下してゐたかも知れなかつた。あるひは、見過したまゝ何とも云はなかつたかも知れなかつた。

それは、谷崎氏の不思議がるほど不思議なことではないのだ。

私が、「厄年」だけによつて、堂々たる菊五郎全論を試みたのなら、「淺妻」に於て現はされたであらうと思はれる彼れの舞踊の技能を逸したのは不當であるが、私は、月を連らねて演劇評論を試みてゐる。菊五郎に關しても、隨所に是非の評を加へてゐる。ことに「淺妻」に拘泥する必要はあるまい。（この時の舞踊が近年の菊五郎の舞踊中、特に傑出したのであつたのなら、私が見落したのは遺憾であつたが……）

それに、「厄年」の序幕に、劇中の女主人公の所演に假托して、菊五郎の踊りの手並を見せようといふのは、陳腐な脚色である。ことに、「淺妻」をまるごと踊らせるなど、作劇法から云つても拙劣である。察するところ、菊五郎は、劇中の女主人公の性格や心境を離れて、菊五郎獨自一箇の踊りを踊つたのであらう。踊り終つてから、それから女主人に扮した氣持でゐたらしかつた。

今思出しても、「厄年」は作品の上からも演技の上からも、緊張味を缺いただらしのない惡劇であつたことが感ぜられる。

それに、あの劇評中に舞踊に關する評語のなかつたことを、今更らしく不思議がるのは、私は迂遠であると思ふ。

私は立川焉馬の「歌舞伎年代記」をも、あら方通讀してゐる。明治以來の劇評は、三木武二、杉贋阿彌、その他の大劇

通のものを、随分讀んで來た。最近刊行された「竹の屋劇評集」も、殆んど全部通讀した。ところで、これ等の大劇通も、舞踊や三絃については、滅多に批評を下してゐないのである。たとへば、竹の屋氏の如き、明治三十年二月の歌舞伎座劇評に於て、「五十三驛扇宿附」といふ、先代菊五郎所演の猫化け(ねこばけ)のやうな惡劇については、細評を下しながら、團菊顔合せの大所作事、團十郎としては最後の努力を試みたと云つてゐる「關扉(せきのと)」の大舞踊については、「引ぬいてからの立派さ、褒めるに詞なし」とか、「天下無双の兩優のことなれば絶々妙々」とか、簡單な讚辭を呈してゐるに過ぎない。それだけでも評語らしいことを云つたのは珍らしい方なので、竹の屋氏の幾多の批評を今檢査すると、舞踊については一言も云つてゐないところが多い。それが在來の劇評の常例であつた。昭和二年の劇評中に私が「淺妻」について一言も云はなかつたことを、谷崎氏が今更らしく不思議がるのは、私には却つて不思議である。氏は私を不思議がる前に、在來の劇評家のすべてに對して不滿の目を向けなければならない。

舞踊や三絃を充分に、翫賞し批評するのには、特種の修養が必要なので、普通の劇評家には困難であるし、またそれ等の藝事に熟通する評者があつたにしても、余般月々の舞踊について、一々批評を試みるのは愚ろかなことではないか。

○

同じ演舞場で新派三巨頭によつて演ぜられた「お艶殺し」は、無意味な人殺しの連續で、非藝術極まるものであつたが、それは谷崎氏の原作がいけないのではなかつた。脚色が拙かつたのだ。俳優の技術が拙かつたのだ。この「お艶殺し」や「法成寺物語」は、新派や築地小劇場の俳優の手に掛るよりは、菊五郎などによつて演ぜられたなら、原作の持味が一層よく現はされたであらうと思はれる。菊五郎も「厄年」などを選んで、し勝手のいゝことばかり考へないで、谷崎氏の戯曲にでも目をつけて、新たに技藝を磨いたらいゝだらう

谷崎氏の作品と菊五郎の作風とは似てゐるところがある。……肉體美を現はさうとする作者の筆致は、菊五郎の柄に嵌

つてゐる。そして心靈の閃めきを缺いで感覺をのみ重んじる頽廢的都會人情調は、谷崎氏が自己の藝術に於て、專ら現はさんとするところであつて、菊五郎なら、作者の狙つたところを、舞臺に再現し得られるかも知れない。

○

谷崎氏また曰はく、「世の中には、物に醉へる性質の人と、醉へない性質の人とある。後者のやうな人に取つては、歌舞伎劇のみならず、凡そ芝居と云ふものは、悉く無用の長物であらう。……私の見るところを以てすれば、正宗氏は醉へない性質の人でありそれを誇りとしてゐるかに思はれる。此の人が劇場へ出入りをして抑も何を求めようとするか」

成程これも一理窟である。私の演劇時評の如きは、中央公論の場所塞げたるに過ぎない譯である。

ところで、翻つて考へると、谷崎氏のこの「饒舌錄」の結論は、必しも眞理を獨占してはゐないやうである。假りに、谷崎氏の斷定に從つて、私が醉へない性質の人であり、それを誇りとしてゐるとしてゐるならば、そのこと自身が、傑れた批評家としての條件の一つになるのではあるまいか。「西鶴は野暮であつた」と田山花袋氏は批判してゐる。德川文學の研究者たる藤村作氏は、「酒と色との歡樂の世界に大盡、太夫、引舟、くつわ、遣手などの中に立交つて、常に素顏の醉はない眼を光らせて、周圍の人と事とを冷靜に觀察し、そこに漂ふ甘美な歡樂の氣分を味はうてゐたであらう」と、西鶴を評してゐる。私は必しも此等の評語に同感するのではないが、醉つてばかりゐては、醉漢の狂態だつて分りやすまい。

藝術家としてさへ、さうである。況んや批評家をや。

谷崎氏は、芝居だけについ云つてゐるが、人間界のすべての事相を、少しも陶醉の痴態を帶びないで、極度の冷靜さを持して、描寫し批判した文學が現はれたなら、如何に痛快であらうかと私は渴望してゐる。スヰフトの「ガリヴァ旅行記」の如きは、その一つである。私は直ちに物に醉ひ得られる素質を有つた作家の藝術を愛好することも人後に落ちない

つもりであつて、谷崎氏等の作品をも愛誦してゐるのであるが、それとゝもに醉はない作者の出現をも渴望してゐる。人間の戀愛をも、「ガリヴア旅行記」にも勝つた冷靜さで描破する作家が一人くらゐ出てもいゝと思つてゐる。皆んなが「涙ぐましい」ものを讀んでは貰ひ泣きしたり、色つぽいものを讀んでは、肉慾を刺戟されたり、菊五郎の踊りを見て、現を拔かしたりするばかりが、必しも藝術翫賞の極致ではないのではあるまいか。

谷崎氏は、さういふ冷靜な作家の作品を全然好まないのであるか。さういふ演藝批評を全然好まないのであるか。

○

ところで、私は谷崎氏が獨極めに極めたやうな性質の批評家でも翫賞家でもないらしい。私は、極度の冷靜さ。すなはち、微塵も「物に醉はない」心境に到着すること。自己の形骸を土木視し、萬衆人事の起伏を雲烟の過眼と同一視する妙域に達することを、一生の修業としてゐるのだが、人生の終りに近づきながらそれは空しき望みとなつてゐる。從つて、日常生活に於て徹底を缺き、演藝時評に於ても、一貫した徹底味を缺いでゐるのである。菊五郎の舞踊などをも、美服を裝つた骸骨の踊りと視するほどの妙域にはまだ達してゐないのである。しかし、年少の頃から好んでゐて、屢々「醉はされた」經驗のある音樂や舞踊についても、それ等から、何らかの「心の糧」を得、人生修業の料を得ようとする用意だけは、まだ忘れてゐない。

○

坪内博士は、今の歌舞伎は、「歌舞伎の干魚」だと云はれた。その筆法に從へば、谷崎氏その他の激賞する菊五郎の舞踊だつて、「舞踊の干魚」であるかも知れない。清新なる滋味に乏しいと云つてよからう。

舊幕時代に發達して、幕末には、劇場の舞臺をして所作事くらべの觀あらしめたほどに榮えた舞踊は、要するに曲輪の情事の物眞似か、當時の市井の風俗の模倣であつて、當時の見物には生き〳〵した感覺に訴へられて、役者とゝもに自分

も踊るやうな氣持になれたのであつたが、今日では、時世が移つてさういふ生きた感興は得られなくなつてゐるのではあるまいか。踊り手自身も、前代の俳優ほどの生々した感覺をもつて、武士に扮せられないと同樣に、曲輪の眞似事も、生生とは踊れなくなつてゐるといふのが當然の理である。さうでないと思つてゐる俳優があつたらそのこと自身が、俳優の鈍感を證明してゐる。「太夫の道中八文字」揚屋入りでも間夫狂ひでも、土手馬の振りでも、山谷通ひの猪牙の氣取りも、今戸の法印さんでも、昔の見物なら、そこに自己の見聞の美化された姿を見たり、日常の理想としてゐるところの影を見たりして、どれほど陶醉してゐたか知れないのだが、今日の見物には、さういふ物眞似は、ちんぷんかんぷんである。我々は、踊り手の美しい姿態を、谷崎氏の所謂「感覺」に訴へて樂むに過ぎないのである。

音樂や舞踊に對して内容の穿鑿をするのは愚かなことで、我々は音調や形式美によつて、直ちに自己の胸臆を動かされるので、文字によつて意味を限定された文學などよりも、一層痛切に感ぜられるところもある譯なのだが、しかし、音樂でも舞踊でも、生氣を失つた「干魚」になつては、我々がそれから受ける感じは、自から薄らぐ譯である。

六代目菊五郎は、年少の頃九代目團十郎に愛撫されて、峻嚴なる訓陶をも受けて、演技に於てその骨法を傳へられてゐると云はれてゐるが、私にはさうは思へない。

「菊五郎も、踊りを生野暮薄鈍の花柳流で仕込まれたなら駄目だつたが、茅ケ崎團爵に仕込まれてゐるから、外の連中とは踊りの位が違ふ」と、ある通人の云つたのを、數十年前に、私は間接に聞いたことがあつて、それ以來、注意して彼れの踊りを見物してゐるのであるが、私には、彼れが團十郎の眞髓を身に具してゐるとは思はれない。玉川千之丞水木辰之助以來、近世の瓶雀歌右衛門や芝翫に至るまでの、傳統的日本舞踊の形式は、あるひは最もよく菊五郎に傳つてゐるのかも知れない。彼れは、舞踊といふ一種の日本古典の藝術の保存者としての最適任者であるのかも知れない。(古藝術の保存と云つても、芝居や踊りは、繪畫や彫刻とはちがつて、生きた人間によつて保存されるのだから、時代の變遷によつて生氣

が失はれて、昔ながらの面影の完全に傳へられる筈はないのだが）しかし彼れは昔ながらの踊りをどれだけ新時代に生かす用意をしてゐるのであらうか。私には、しかし、團十郎の骨法さへも彼れに傳はつてゐるとは思はれたい。團十郎であらうがなからうが、そんな故人の規矩によつて藝術價値を上下される筈はないのであるが、私の謂ふところの團十郎とは、皮相な、生命のない形式美以上のものを指してゐるのである。

重ねて云ふ。私は（芝居見物人中の唯一人の異例者であらうとも）菊五郎の舞踊に於てさへ、人生考察の目を向けようと志してゐるのである。小山内氏が曾て云つたやうに「心の糧」を得ようとしてゐるのである。そして、それは少しも享樂に反したことではないと思つてゐる。芭蕉が秋の山野を旅しながら、眼前の光景に自然と人生の眞味を感得しようとしたのと同様である。

そして、私は、歌舞伎や舞踊の通人、及び、文壇劇壇の新人までもが、菊五郎の舞踊を非凡視してゐるのを不思議に思つてゐる。

私は、遺憾にも、團十郎の所演は、彼れの老衰期に於ける數年間を見たばかりであるが、その間に見たものによつてさへ、彼れと六代目との藝術的表現の差は、根本的であると思つてゐる。地藝に於て遜つてゐるものは、同じ人間の演ずることだから、所作に於ても遜つてゐる。……菊五郎が踊りに於て、新しい氣持を現はすと云ふと、新代の鑑賞家は、彼れの現はす皮相美に眩惑されて、新生命の發露をそこに見たつもりでゐるのであらうが、彼れがいつ、古い舞踊に新しい生命のきらめきを見せたことがあるのだらう。

團十郎の仲國が、嵯峨野の庵を訪ねて主命を傳へる折の、時鳥を聞く云々の唄に合せての表情と姿態とを私は今思ひ出した。あれは單たる繪模樣ではなかつた。時鳥を聞いてゐたのであつた。菊五郎が「ぬれてしよんぼり白鷺」の立姿を、數年前の初秋の頃市村座の舞臺で現はれたのを、今私は思出した。しかし、それは單なる繪模樣であつた。物眞似であつ

た。何とか云ふ歐洲の女名人の「瀕死の白鳥」を見た時、私はそこに、人間の苦惱の象徴を見た。私は外國の舞踊の妙味は知らないのであるが、舞踊でも、たゞの物眞似だけでは、絶妙の域に達したと云へないのではあるまいか。雨にしをれた白鷺に、雨露に惱んだ人間の心の表象を見てはいけないのか。前號の時評に於て、私が論及したのであつたが、「保名」の如きも、菊五郎得意の舞踊らしく、私は幾度も見て、面白く思つてゐるが、戀に惱んだ心の現はれは感じられなかつた。新作「江島生島」についても同樣である。……

谷崎氏の小說や戲曲には、文辭の美しさ以外に、讀者たる私の心の奧を覗かされるものがある。芝居に對してさう云ふものを求めるのは、求める方が間違ひであると、谷崎氏なら云ふのであらうか。しかし、谷崎氏も、「俳優にして優秀な技倆と魅力とを持ち、觀客にして洗錬されたる趣味と感覺とを有するならば、官能や肉體の美を通して、何かそれ以上の永遠なるものを、精神的の美を感じ得られる」と云つてゐる。

私は、洗錬されたる趣味と感覺とを有してゐる觀客が、「厄年」の如きものを、觀るに耐え得るか否かをさへ疑つてゐる。

○

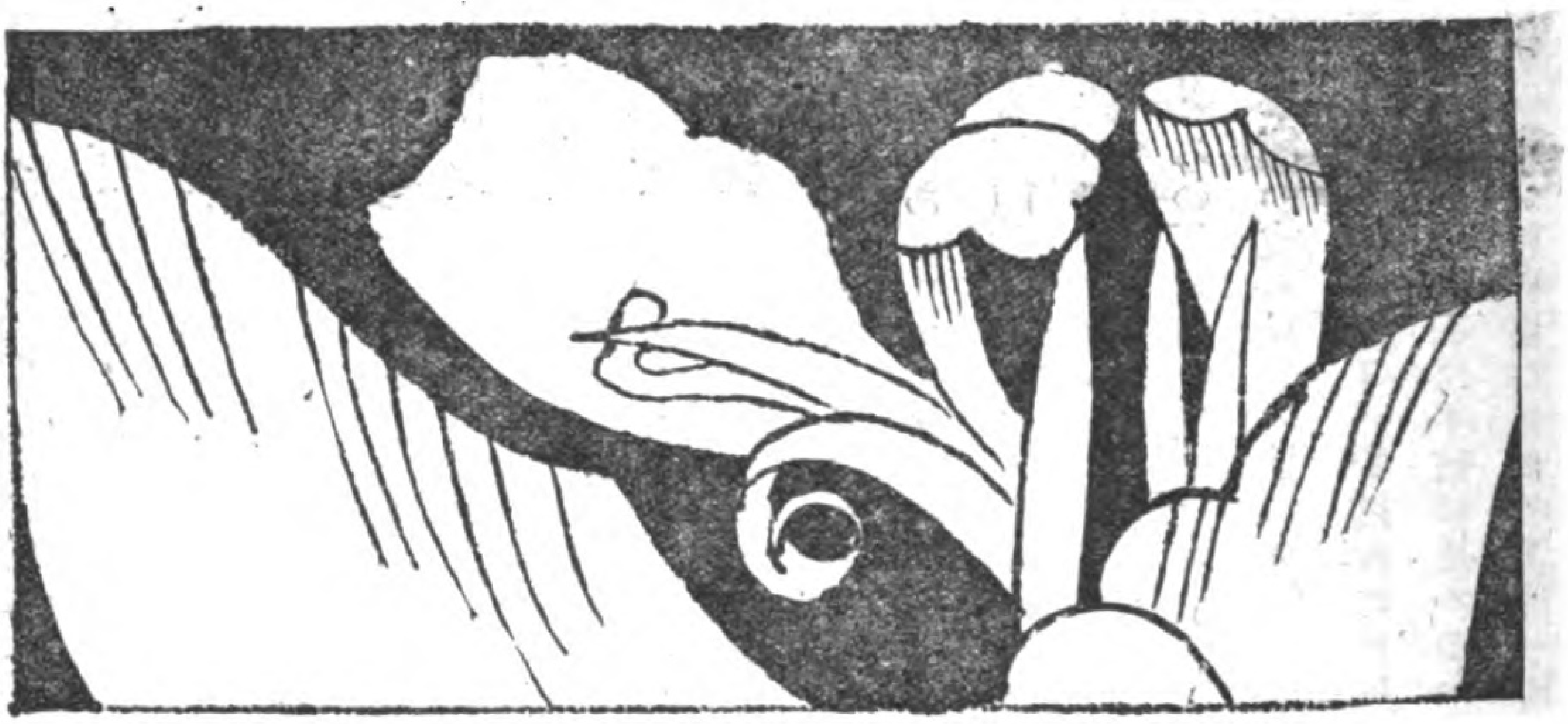
今、「週刊朝日」を手に取ると、水谷幻花氏が、菊五郎の人となりや藝術的態度を、面白さうに書いてゐるのが目についた。「芝居を碌に知りもしないで劇評を書く」と、菊五郎が誰れかに洩らした樂屋話が大問題になつて、劇評家にボイコットされて悄氣返つた話が出てゐるが、かういふことを聞くと、華美な生活に自足してゐる俳優にも、みじめな一面のあることが察せられる。これが、小說家か何かであつたら、「文學を碌に知らないで月評を書いてゐる」と、月評家を罵るくらゐは有勝ちなことなのだ。

それから、俳優の藝道苦心談くらゐ私の腑に落ちないものはない。瑣末なことばかり云つてゐる。

○

近年は、劇場へ入つても、序幕から大切りまで座席に腰を据ゑて、しみ〲舞臺を翫賞したことは少なかつた。たゞ劇場に身體を置いてゐるだけであつた。

ところが、今春偶然、演藝時評を擔任するやうになつてからは、職務として、成べく心を凝らして舞臺を視るようにした。俳優諸氏の技藝に感動するしないは別にしても、私がこの世に生きてゐる間の人生のある事相を見てゐるといふ意味で、得るところがないでもなかつた。……その得たところの一部を書きしるしたのが、私の「演藝時評」であつた。……獨り合點に近いわが演藝饒舌錄も、この邊で一先づ打切つた方がよからう。



グリーブ家のバアバラの話

トマス ハアディ作
谷崎潤一郎譯

ハアディ翁の小説に"A Groupe of Noble Dames"と云ふのがある。翁がしばしば題材とする英國の Wessex 地方の物語で、古い貴族の家に傳はる昔話が集めてある。話はすべて十篇から成り、土地の古老どもが集まつて、一人が一つづつ語る體裁になつてゐる。此處に譯出したのは其の第二の挿話、"Barbara of the House of Grebe"で、本文中に「私」とあるのは、これを語つてゐる男、村の年老いた外科醫である。

私は語學に自信がなく、飜譯に馴れてゐないので、出來上つたものを讀み返して見ると、少しギコチない所があり、我ながら飽き足らぬふしぶしが多い。折よく儕友辻潤君が遊びに來たので、二三箇所同君にも相談したが、勿論間違ひもあるであらう。記して原作者たる翁に謝し、併せて讀者の寛恕を願ふ次第である。

アプランドタワース卿が彼女をわがものにしようと云ふ決心をするに至つたのは、それは情熱からではなく、明かに一つの意趣からでした。彼がその意趣を抱いたのはいつであるか、或ひはいつから、見す見す嫌はれてゐるこ

とが分つてゐながら大丈夫物になると云ふ確信を得たのかは、誰も知つてゐる者はありません。多分それは、私がこれから話をする彼女の生涯の最初の重大な出來事のあつた、その以前ではないでせう。彼の老熟した、冷やかな片意地は、とかく血氣に任せて思慮を缺き易い十九と云ふ歳に著しく眼立つてゐました。それは少年時代に伯爵の地位とそれに附き纏ふ地方的名譽を受け嗣いだことや、又その家の血統に依るところが多いので、云はば彼は青春時代を知ることなしに、一足飛びに老熟の域へ引き揚げられてしまつたのです。彼のお父さんの四代目の伯爵が、バスの温泉へ湯治に行つたあとで亡くなつた時には、彼はやうやく十二歳になつたばかりでした。

が、何と云つても家の血統が大分關係してゐたので、あの家の紋章を帶びてゐる一族は遺傳的に決斷力が優れてゐました、善いことにつけても惡いことにつけても。

兩家の位置は十哩ばかり離れてゐて、その間には今は古くなりましたがその時分は新しかつた、ハブンプールとウォアボーンとをメルチェスター市へ連絡する稅道がつづいてゐました。その道と云ふのは、あの西部國道から岐れてゐる一つの枝道ではありますが、それが過去數百年の間もさうであつたやうに、今日もなほ、恐らくは英蘭土に於て見ることの出來る最も模範的な碎石舗道の一つなのです。

伯爵の邸は、彼の隣りのバアバラの父の邸と同じやうに、國道から一哩ばかり引つ込んでゐて、各の邸は普通田舍に見るところの馬車道で以て國道につながつてゐました。かのうら若き伯爵が、十八世紀の終りを去ること二十年ほど前の降誕祭季節の或る晩、バアバラ姫の住居であり、さうして彼女の兩親たち、サア・ジョンやレディー・グリーブの館であるチェーン・メーナアの舞踏會に出席すべく馬を驅つたのは、實に國道の此の近邊であつたのです。サア・ジョンの爵位はあの内亂の起る二三年前に授かつた從男爵で、彼の領地はアプランドタワース卿のそれよりも更に廣大なものでした。此のチェーンの莊園の外に、もう一つの莊園が程遠からぬ海岸の方に在つてコックデーンの郷の半分を占めてゐる、それか

ら名高いウォアボーンやその近傍一圓に互つて、數數の教區の中によく圍はれた土地がありました。此の時バアバラはやうやう十七になるやならずであつたのです。さうしてアプランドタワース卿が彼女に云ひ寄つたと云ふ傳説の起りは、そもそもその舞踏會が始まりなのですが、さうだとすると隨分早いことなんです。

何でも或る親しい友達――ドレンカーツ家の一人だと云ふことですが、――が、その日の晝間彼と食事を共にしたと云はれてゐます。さうしてアプランドタワース卿は、その時意外にも客人に向つて、自分の心の秘密な計劃を洩らしたさうです。

「あなたは彼女を手に入れることは出來ないでせう、――きつと駄目ですよ」と此の友達は別れ際にさう云ひました、「彼女はあなたに愛情では惹き着けられません、さうかと云つて立派な緣組みを求めるなどと云ふ考へは、まあそんな分別は小鳥の頭にあるくらゐしか持つてゐないでせう。」

「今にわかりますよ」と、アプランドタワース卿は物靜かに答へました。

彼が四輪馬車に乘つて國道を通つて行つた時、此の友達の豫言がその心中に往來したことは疑ひもありません。が、今しも彼の右手に方つて消えて行く夕日の影を背景にした彼の横顔の、彫刻的な安らかな輪郭を、若しもその友達が見たならば、伯爵の心の冷靜が搔き亂されてゐないことを悟つたでありませう。彼はローントン・インと呼ばれる、多くの不敵た密獵者どもが近所の森の中で仕事をするための集會所になつてゐる、さびしい路端の居酒屋までやつて來ました。さうしてちよつと氣を付けたら、その居酒屋の前の溜まり場に一臺の怪しい驛馬車が停まつてゐたのを見たでせうが、彼はすたすたとそこを乘り越えて、半時間の後には小さなウォアボーンの町を過ぎました。それからなほも一哩進むと、今宵の饗宴の主の家があつたのです。

當時その家は堂堂たる建て物で、――或ひは寧ろ幾つもの建て物の集團で、――遙かに不規則ではありましたけれども、

廣大な點では伯爵の邸宅に劣らないものでした。一方の翼は蒼然たる古色を帯び、ところどころに巨大な煙突があつて、それらの煙突の骨組みが外壁から塔のやうに突き出てゐました。それに茫漠たる面積を持つた臺所、ここで（人の噂では）ジョン・オブ・ゴウントの朝飯が料理されたと云はれてゐます。彼がやうやうその邸の前庭へ達したときに、當時のかう云ふ饗宴には附き物の樂器であつたフレンチ・ホルンやタラリオネットの旋律が聞えて來るのでした。

長い客間へ這入つて行くと、ちやうどそこでミニュエットの舞踏が、レディー・グリーブによつて開始せられたところでした、——古例通り時刻は七時になつてゐました、——彼は彼の爵位にふさはしい出迎へを受け、あたりを見廻してバアバラを捜しました。彼女は踊りには加はつてゐないで、何か物思ひに耽つてゐるやうに見えました、——殆ど彼を待ちこがれつつあつたのかのやうに。バアバラは此の時は善良な美しい娘で、決して他人の悪口を云はず、ほかの美しい婦人達を妬むことなどはめつたにしない方でした。彼女は次ぎの地方踊りが始まると、彼の申し出でを拒まずに、直ちに彼の相手となつて踊つたのです。

夜がだんだんと更けるに從ひ、ホルンやクラリオネットの音が賑やかに鳴り渡ります。バアバラは自分に思ひを寄せてゐる男に對して、好きであるとも嫌ひであるとも、別にはつきりした素振りを示しはしませんでしたが、しかし老練な人人の眼には、彼女の何かしら思案に餘つてゐるらしい樣子が見えたでもありませう。兎にも角にも、晩餐が濟むと彼女は頭痛がすると云ひ立てて、姿を消してしまひました。彼女に取り殘された所在なさに、アプランドタワース卿は長い廊下に面してゐる小さな部屋へ行きました。——彼は舞踏のための舞踏はむしづが走るほど嫌ひだつたのです、——そこには年寄り株の連中が火のほとりに腰かけてゐましたが、彼は窓掛けを上げて、今は洞穴のやうに眞つ暗になつた窓の外の庭や木立ちを眺めました。幾人かの客はまだこんなに早いのに歸つて行くらしく、二つの明りが門を曲りしなにちらりと見えて、やがて遠くの闇の中に沈みました。

女主人公が貴婦人たちの相手を捜しながら部屋の中を覗いたので、アブランドタワース卿が出て行くと、レディー・グリーブはバアバラが舞踏室へ戻つて來ないことを彼に告げました。彼女はどうしても堪へられないで寢室へ籠つてしまつたのです。

「あれは舞踏會のことで、今日は一日興奮してをりましたものですから」と、彼女の母親は續けました。「わたくしは今に疲れが出はしないかと案じてゐたのでございました。……しかし伯爵、まだあなたはおよろしいのでございませうね。」

彼がもうぢき十二時であること、さうして既に幾人かは歸つた者があることを云ふと、

「わたくしはまだ執方様もお歸りにならないと申し上げます」と、レディー・グリーブは云ふのでした。

夫人の機嫌を取るために彼は眞夜中まで留まつてゐて、それから歸路に就きました。彼の求婚運動は何等の發展も遂げずにしまつたのですが、それでも彼はバアバラが他の賓客には一度も相手にならなかつたことを確かめました。しかもそこには此の近傍の殆ど有らゆる人人が出席してゐたのです。

「それは唯時の問題さ」と、此の冷靜な若い哲學者は云ひました。

その明くる朝は彼は十時近くまで寢床にゐました。さうして彼が、恰も起きて階段の降り口まで來たときに外の砂利道に蹄の音が聞えました。數分の後に扉が開いて、彼が一番下の段に足をかけると、廣間でぱつたりサア・ジョン・グリーブに出遇つたのです。

「おお、――バアバラは何處にをります？――わたしの娘は？」

さすがのアブランドタワース伯爵も此れには驚かずにゐられませんでした。「どうなすつたと云ふのです、サア・ジョン殿」と、彼は云ひました。

此の報道は實に驚くべきことでした。從男爵の取り亂した說明から、アプランドタワース卿が推察し得るところでは、自分や外のお客たちが暇を告げてから、サア・ジョンとレディー・グリーブとはその後バアバラを見舞はないで寢所へ引き取つたらしいのです。と云ふのは、彼女がもはや踊りの仲間へ加はらないと云つて寄越したので、もうその時に寢てしまつたものと思つたのでせう。その前に彼女は、今夜は用をしてくれないでもいいと云ふ旨を召し使ひに云ひました。さうしてそこには若い姬君がてんで體を横にさへもしなかつた證據がありました。なぜなら寢床が取り亂されてゐなかつたからです。前後の事情から判斷するのに、うそつきの娘は舞踏室を去る口實を作るために氣持ちの惡い風を裝ひ、さうして十分とは立たないうちに、多分食後の最初の舞踏の間に、邸を脫け出したものであるとしか思へません。

「私はお嬢さんのお出かけになるところを見ました」と、アプランドタワース卿は云ひました。

「あなたは飛んだものを御覽になつた！」と、サア・ジョンが云ひました。

「さうです。」――彼は馬車の明りが遠くへ消えて行つたこと、而もお客はまだ一人も歸らない旨をレディー・グリーブから確言されたことを語りました。

「たしかにそれです！」と、父は云ひました。「しかし一人ではなかつたでせうな！」

「ああ、――誰でせうか相手の男は？」

「私はただ推測するだけですが、その推測が中りさうなのを何よりも恐れるのです。私はこれ以上は申上げたくありません。私はあなたがその相手だと云ふことも、――さうは信じませんでしたけれど、――有り得ることだと考へたのです。ほんたうにあなたであつてくれればよかつた！ 飛んでもない、あんな男に！――摑まへて處分しなければならない！」

「あなたは誰だとお思ひになりますか。」

サア・ジョンは名前を云ひませんでした。さうして訝だつてゐるといふよりは寧ろ茫然としてゐたので、アプランドタワース卿は彼をチェーンまで送つて行きました。彼は再び從男爵の疑つてゐるのは誰であるかを尋ねました。性急なサア・ジョンは素より執拗なアプランドタワース卿の敵ではありません。

彼はとうとう云ひました「私はエドモンド・ウィロースだらうと思ひます。」

「何者ですかその男は?」

「シー・ツツフォード・フォラムの若者で、——或る未亡人の息子なのです。」彼は語りました。その説明に依ると、ウィロースの父、もしくは祖父は、土地の古い硝子繪かきの最後の者で、あの邊にはあの技術が、(あなた方も御存じのやうに)英蘭土の他の地方では悉く滅びてしまつた後までも殘つてゐたのです。

「ああ、——それは何とも——飛んでもない事になつたもんです!」と、アプランドタワース卿は身も世もあらず失望して椅子にぐつたり倒れながら云ひました。

彼等はあらゆる方角へ密使を出しました、一つはメルチェスター街道へ、一つはシ・ツツ・フォラムへ、もう一つは海岸の方へ。

しかしながら戀人同士は十時間も先に立つてゐたのです。それに二人が馳け落ちの時を特にその晩に選んだと云ふのは、一般に乘り物が混雜するので、怪しい馬車の動靜が公園や近所の街道などで眼立たないだらうと云ふことを、いろいろ考へて練りに練つた結果であることは明かでした。ローントン・インで見受けられた客待ちをしてゐた驛馬車は、疑ひもなく二人が逃げるのに乘つたものです。二人の頭は斯くまで巧妙な計劃を立てたくらゐですから、多分今までに結婚の手續きを運んでしまつてゐることでせう。

二た親の心配は事實となりました。その日の夕刻、バアバラが差し立てた特別の飛脚に依つて齎らされた一通の手紙

は、彼女の戀人と彼女とが倫敦へ行く途上にあること、此の通信が彼女の家へ達する前に、二人は夫婦として結び付けられてゐるだらうことを手短かに告げました。彼女が此の極端な手段を取つたのは、外の男を愛する心にはなれないくらゐ戀しいエドモンドを愛するからであり、それにからでもして運命の脅迫を不可能にしてしまはなければ、いづれ近近にアプランドダワース卿と結婚させられるハメになるのが分つたからだと云ふのです。彼女は豫め此の手段を篤と考へて置いたので、萬一此の事のために父親から勘當された場合には、普通の田舍の世話女房として暮らす覺悟が出來てゐると云ふのです。

「畜生め！」と、アプランドダワース卿はこの晩我が家へ馬車を驅りながら云ひました、「畜生、馬鹿な女め！」――これで彼の彼女に對する戀愛と云ふものが如何なる種類のものであるかが分るではありませんか。

さて、サア・ジョンは親たる者の義務として既に二人の跡を追うて出發し、狂氣の如くメルチェスターへ馳せつけ、そこから更に一直線の街道を首府へ向ひました。が、彼は直ちにさうしたところで無駄であることに氣が付いたのです。それに追ひ追ひと、もう結婚が實際行はれてしまつたことが分つたので、倫敦に於ける二人の在り家を發き出す凡べての試みを放棄してしまひました。彼は歸つて來て、此の事件を出來るだけうまくお腹の中へ呑みこなすべく、夫人を相手にどつかと椅子に腰かけました。

世繼ぎの娘を誘拐した廉を以て此のウィロースを訴へることは、彼等の力で出來ないことはありません。しかし今更いかんともし難い事實であることを考へれば、彼等は手荒な報復手段に出ることは差し控へました。六週間ばかり立ちましたが、その間パアパラの兩親は彼女を失つた寂しさを痛切に感じながらも、その不屆きな娘に對して罪を赦すとも責めるとも、何とも云つてやりませんでした。彼等は娘が我れと我が身の上に招いた不名譽に就いて考へつづけました。相手の若者はたとへ正直な男であり、正直な父の息子であるとは云へ、その父と云ふのは早く世を去つて、後家は自分の身を過す

のに随分と苦労をしたのですから、従つて息子は充分な教育を受けてゐません。おまけに彼の血統と云ふものは、彼等の知れる限りでは、格別何の某の後裔と云ふのでもないのです。然るに娘の方はと云へば、母親を通して古い男爵の家家から蒸溜された最も純良なる液汁の混合であります。その血の中にはモードヴィル家や、モーハン家や、サイワード家や、ビーヴレル家や、カリフォード家や、タルボット家や、プランタジェネット家や、ヨーク家や、ランキァスター家や、その外まだまだどのくらゐの名家の色彩が交つてゐるか分らないのに、それらを捨ててしまふと云ふのは何たる勿體ないことでせう。

父と母とはそのおのおのに家紋を鏤めてある、四つの中心を持つ迫持で圍まれた煖爐の前に腰かけて、聲をあげて呻きました、——サア・ジョンよりも夫人の方は一と入でした。

「此の歳になつてこんな事がわれわれの上に降つて來ようとは!」と、父親が云ひます。

「それはあなたの事ですよ!」と母親はすすり泣きをしながら噛みつくやうに、「わたしはたつた四十一です!………あなたは何だつてもつと早く驅け出して二人をお摑まへにならなかつたんです!」

その間に結婚をした好いた同士は、自分たちの血液のことなぞは溝の水ほどに考へて、至つて幸福に暮らしてゐました、——幸福、尤もそれは、だんだん下り阪になつて來る奴で、誰でも知つてゐるやうに、天の神樣はよくしたもので、かう云ふ我武者らな色事にはさう云ふ掟をきめていらつしやる。つまり二人は、最初の一週間は第七天に、二週間目には第六天に、三週間目にはやや控へめに、四週間目には後先を考へるやうに、だんだんさう云ふ風になる。戀を得た後の戀人の心と云ふものは、ちやうど村の會長さんが時時われわれに說明して下さる、地球の地層のやうなもので、一番最初が熱い石炭、その次ぎが生溫い奴、その次ぎが消えかかつた燃え燼、その次ぎは冷え冷えとして——もうその先は云ふだけが野暮です。とどのつまりが、或る日娘の可愛らしい封印の痕のある一通の手紙が、サア・ジョンとレディー・グリーブの手許

へ届きました。彼等がそれを開いて見ると、若い夫婦からの嘆願狀で、二人は自分たちの所行についてサア・ジョンの許しを乞ひ、露はな膝を地に着けてお詫びをする、さうしてこれからは永久に孝行な子供になりますと云ふのでした。

　そこでサア・ジョンと夫人とは、もう一度四つの中心を持つ迫持の煖爐の前に据わり直して相談をしました。さうして手紙を讀み返しました。ほんたうのことを云ふならば、サア・ジョン・グリーブは哀れにも彼の名前や家系よりも遙かに多く娘の幸福を欲してゐたのです。彼は私かに娘の可愛らしいいろいろのしぐさを想ひ出し、ほつと溜め息を洩らすのでした。それにもう此の時までに、不釣り合ひな結婚と云ふ考へにも次第に馴らされてしまつたので、どうも出來たことは仕方がない、あんまり娘に辛くあたるのもよくないやうに思はれる、と、彼は云ひました。多分バアバラと彼女の夫とは明日が日にも困つてゐよう。私たちは何で私たちの一人娘を飢え死にさせてよいものか。

　ちよつとしたことながら、思ひがけない方面から彼等に一つの慰めが來ました。彼等は信用すべき筋から、平民ウィロースの先祖は嘗て零落した貴族の末孫と結婚をする榮譽を擔つたことがあると云ふ話を聞いたのです。要するに貴族の親たちと云ふものは馬鹿なものです。尤も此れは貴族ばかりにも限りませんが兎に角彼等はその日直ちに、バアバラの與へた番地へ宛てて手紙を出し、彼女が彼女の夫を連れて戻つて來ても差し支へないこと、彼等は異議なくその男に會ひもしようし彼女を責めもしないであらうこと、且二人を歡迎するやうに努め、二人の行く末のためになるやうな處置についても相談に應ずるであらうことを云つてやりました。

　二四日すると見すぼらしい驛馬車がチェーン・メーナーの館の門内へ引き込まれました。情深い從男爵と夫人とはその音を聞きつけて、恰も王族の宮樣御夫婦をお迎へするやうに走り出たものです。彼等はいたづら者の娘が無事に健固で歸つたのを見ると、嬉しくてたまりませんでした。――但し娘は何の肩書きもないエドモンド・ウィロースのおかみさん、ただのミセス・ウィロースではありましたけれども。バアバラは悔恨の涙せきあへず、新郎も新婦もしみじみ自分たちの

悪かつたことを悟つたやうでした。それもその筈、二人は自分の物と云つては一ギニーの金さへ持つてゐなかつたのですから。

親子四人はやがて心を押し鎮めて、叱言などは一と言も云はずに、みんなで事件の後始末を深重に協議しました。その時若いウィロースは非常に愼ましやかに後ろの方に控へてゐたので、レディー・グリーブが「もつと此方へ來るやうに」と前の方へ呼びましたが、その言葉は決して冷やゝかな調子ではありませんでした。

「何と云ふ美しい男だらう！」と、彼女は心で云ひました、「バアバラが夢中になつたのも成る程此れなら不思議はない。」

實際彼は、嘗て女の唇へ自分の唇をつけたことのある男どものうちの、最も美しい一人でした。青い上衣に桑の實色の胴衣を着て、淡褐色の半ズボンを穿いたところは、誰の前でもひけを取らない姿をしてゐます。彼は今、その大きな黒い瞳を氣づかはしげに輝やかしてチラリとバアバラの方を見ては、次ぎに彼女の親たちの方を見、それから再びやさしい眼つきを彼女の方へ返します。彼女は今や恐れ戰いてゐるのですけれども、而もなほその顏を見た者は、アブランドタワース卿の冷めたい血潮が微温以上に沸き上つたのも尤もであることを感ずるでせう。彼女の麗しい若い容貌は、（村の年寄りの女どもが古くから云ひ傳へた話に依ると、）白い駝鳥の羽毛で飾られた圓錐形の灰色の帽子の蔭から窺はれました。さうして彼女の可愛い爪先は、蛋色の袍の下にある鉢黄色の袴の下からちよつぴりと覗いてゐました。彼女の目鼻だちは規則的ではなかつたさうです。あすこの家に殘つてゐる小肖像を見れば分るやうに、それは殆んど童顏であつて、いかにも悧巧さうな口元をしてゐます。さうしてめつたに氣むづかしい顏をするやうなはしたない女ではなささうです。

さて、彼等は今の狀態を何とか適當に處置するやうに協議しました。若い夫婦は何事につけても全く親を頼りにするより外はないので、成るべく親の御機嫌を取つて置きたかつたものですから、あんまり厭な事でさへなければどんな應急策

をでも承知する氣持ちになつてゐました。で、彼等は既に二た月も一緒に暮らした後のことなので、エドモンド・ウィロースに充分な旅費を與へ、教師を一人あてがつて一年間大陸へ旅行にやらうといふサア・ジョンの申し出でを、敢て反對しませんでした。そこでウィロースは教師の指導に從つて出來るだけの勉强をし、內面的にも外面的にも、バアバラの如き姫君の夫たる榮譽にふさはしい研きをかける。彼は、旅行中國國の語學やら習慣やら歷史やら社交やら名所古蹟やら、その他限に觸れたことは何事に依らずその硏究に身を委ねる。さうして始めてバアバラの傍に据わつても羞かしくない人物として、お婿さんの地位に就くために戾つて來る、と云ふことになりました。

「それでその時までには、」と、有り難い親御のサア・ジョンは云ひました、「わしはあのユウショルトの別莊を、お前が歸つたら夫婦で住むことが出來るやうに用意して置から。あの家は手狹で、不便な所にあるけれども、まあさしあたつて若い夫婦が暮らすだけには充分だからね。」

「住居なんか四阿ほどの家だつて結構ですわ!」と、バアバラが云ひます。

「輿ほどの家でも結構でございます!」と、ウィロースも云つて、「それに寂しい所であるほどなほ好都合でございます。」

「わたしたちは寂しいのは我慢しますわ」と、バアバラは前よりはやや味氣なく云ひました、「誰かお友達が來てくれますわ、きつと。」

これですつかり事が極まつて、一人の旅慣れた家庭教師――それは多方面の才能のある、非常に世慣れた人物でした、――が迎へられ、或る日の朝、先生と弟子とは打ち連れて發足しました。バアバラが同行しなかつたのは、夫が彼女に氣を惹かれると、自然彼が熱心に學問や見聞の方へ凡べての時間を振り向けることが出來なくなると云ふ、重大な理由が提出されたからで、此の尤もな、先を見拔いた議論に對しては彼れ此れ云ひやうがなかつたからです。何日目には手紙を出す

と云ふ堅い日取りが定められて、バアバラと彼女のエドモンドとは戸口で最後の接吻をしました。さうして馬車は拱門の下を掠めて前庭へ走り出しました。

彼はル・ハーブルから、その港へ着くと直ぐに彼女へ手紙を書きましたが、逆風のためにその間は七日以上かかりました。彼はルーアンから書き、巴里から書き、國王だのヴェルサイユの宮廷だのを見たことや、その宮殿の素晴らしい大理石の建築や鏡の間のことなどを細細と語り、次ぎにはリヨンから、次ぎには比較的長い期間を置いて、チュウリンから書き、騾馬でモン・スニの山越しをした恐ろしい冒險の話をして、そのとき一行が凄まじい吹雪に行き遭つたこと、さうして彼も、彼の教師も、案内者たちも、もう少しで死にさうになつたことなどを語りました。次ぎに彼は伊太利のことを光り眩いばかりに書きました。バアバラは夫の心の發達が、月を重ねるに從つてそれらの手紙のなかに反映してゐるのを見ることが出來ました。彼女はエドモンドのために此の教育法を思ひつかせた父親の思慮の深さを、大變有難く思ひました。が、彼女はときどき嘆息しました、――夫さへ傍にゐてくれたら、生きた證據を眼の前に見て、自分はいい婿を選んだと思つて心強く感ずるのでせうが、――さうして今から先、この *mesalliance*（不釣り合な結婚の意）のためにどんないろいろの屈辱が待ち構へてゐるかも知れないことを、心ひそかに恐れました。彼女はめつたに家の外へ出ませんでした。と云ふのは、一二度外へ出たときに以前の友達に遇つて見ると、彼等の態度がガラリと變つてしまつたことに氣がついたからです。彼等は恰もかう云つてゐるやうに見えました、――「おや、そこへ行くのはお前さんかね、お仕合はせな村の兄哥(あにい)のおかみさん！」

エドモンドの手紙は相變らず愛情が濃やかでした。今となつては、彼女が彼に抱いてゐる愛情よりも更に濃やかなものでした。バアバラは此の、自分の愛がだんだん冷めたくなつて行くのを自ら認めて、善良な、正直な貴婦人としてそれを悲しみ恐れました。なぜなら彼女の唯一の願ひは、忠實な行ひをすると云ふこと、正しき道を踏むと云ふことにあつたか

らです。彼女は心配の餘りどうかして溫かい情愛を持ちますやうにと祈りました。さうして遂に夫の許へ手紙を出して、今や夫は藝術の國にゐるのであるから、たとへ小さいものでもいいから彼女に彼の肖像畫を送つてくれるやうに、さうしたら彼女はその肖像を日がな一日、さうして每日眺め暮らして、片時も夫の顏を忘れないやうにするであらうからと、賴んでやりました。

ウィロースは何しに否を云ひませう。彼は彼女の望む以上のことをする旨を答へて來ました。彼はピサで一人の彫刻家と友達になつて、その人が大變彼や彼の經歷に興味を持つてゐる、で、彼は此の人に大理石で自分の胸像を作つて貰ふ註文をしたから、それが出來上り次第送り屆けると云ふのでした。バアバラの方では、何か一刻も早く送つて貰へるものが欲しかつたのですが、しかし彼女は手間のかかることに不服を云つてはやりませんでした。するとエドモンドはその次ぎの手紙で、その彫刻家が彼自身の好みから、胸像を更に大きくして全身像にすることに極めたと云ふこと、彼は自分の技術の程を示す一作品が如何にもして英吉利貴族の眼に止まるやうにと苦心慘憺してゐることを云つて來ました。仕事は順調に、着着と捗つてゐるのでした。

とかくするうち、家庭に於けるバアバラはユウシ・ルトの別莊のことで彼れ此れと氣が紛れるやうになりました。その家は彼女の親切な父親が、彼女の夫が歸つて來たら彼女のすまひにするやうにと用意をしつつあつたのです。それは大きな建て物の設計に依つた小さな建て物、——邸宅の規模で建てられた小屋であつて、木造の廻廊がそのぐるりを圍んでゐる中央の廣間があり、此の入り口に相應して押し入れぐらゐの廣さしかない澤山の部屋がありました。それは寂しい坂の上に立ち、繁茂した樹木に包まれてゐたので、枝葉隱れに棲んでゐる鳥が晝と夜との見分けもつかないやうに、奇妙な時間に啼いたりしました。

此の小亭の修繕工事が進められてゐる間、バアバラはしばしばそれを訪れました。繁茂した森で遮られてはゐましたけ

れども、そこは街道に近かつたので、或る日彼女は垣根越しに外を眺めてゐると、アブランドタワース卿が馬に乘つて通るのを見ました。彼は彼女に慇懃に禮をしましたが、何だかギコチない樣子で、馬を止めずに行つてしまひました。バアバラは家へ歸つて、夫をいつまでも變りなく愛することが出來るやうに祈りつづけました。そんなことがあつてから、彼女は病氣になつて、長い間再び門の外へ出ずにゐました。

修學の年限は十四箇月に延ばされ、その家はエドモンドが歸つて來てバアバラと一緒に住まへるやうに、準備が整つてゐましたが、その時、いつもの彼女宛ての手紙でなしに、例の隨伴の教師の筆蹟で一通の書面がサア・ジョン・グリーブの許に屆いて、彼等がヴェニスで出遭つたところの恐ろしい災難を告げました。ウィロース氏と教師とは先週の謝肉祭の間の或る晩、伊太利の喜劇を見物に劇場へ行つてゐたところが、折から蠟燭の心剪りをする男の不注意で、劇場は火を失し、灰燼に歸した。觀客の或る者は悶絶した人人を救ひ出すべく人間業とは思へない努力をしたために、少數の者は命を捨てた。さうして彼等凡べてのうち、最も英雄的に生命の危險を冒した者はウィロース氏であつた。五度目に同胞を救はうとして這入つて行つた時に燃えてゐる數箇の梁が彼の上へ落ちたので、彼は死んだものとされた。しかしながら彼は、物凄い火傷は負うたけれども、神の加護に依つてなほ生命力を保ちつつ息を吹き返した。さうして彼の體質が驚くほど強健であるため、殆んど奇蹟的に命を取り止めさうに見える。彼は勿論手紙を書くことは出來ないが、數名の熟練した外科醫の手術を受けつつある。追つて後報は此の次ぎの便か、別仕立ての飛脚に依つて申し上げる、と云ふのでした。

教師は氣の毒なウィロースの苦難に就いては、詳しいことは何も云つてはゐませんでしたが、その報知がバアバラに打ち明けられるや否や、彼女は夫がどんな憂き目を見てゐるかを我が身の上に感じました。咄嗟に起つた本能は夫の傍へ驅け着けようと云ふことでした。けれどもよくよく考へて見ると、そんな旅行は彼女には不可能に思へたのです。彼女の健康は決して以前のやうではありませんでした。さうして一年中の此の季節に、歐羅巴を横切つて宿場宿場を馬車で行くこ

とは、或ひは一艘の帆前船でビスケー灣を渡ることとは、結果を見てから赦して貰へると云ふやうな性質の企てではありません。それでも彼女はまだ行きたがつてゐましたが、手紙の終りの方を讀むと、夫の教師は若しそのやうな手段が企てられるなら、それには强く反對の意思をほのめかしてゐることが分りました。此れは又外科醫たちの意見でもありました。さうしてウィロースの附き人はその理由を說明することを差し控へてゐましたけれども、結局それは自然と明かになつたのです。

事實は最も忌まはしい火の負傷が彼の頭と顏に來たのです、――彼女の心臟を彼女から贏ち得たあの美しい顏に。――さうして敎師も外科醫たちも、感じ易い若い婦人がその負傷の癒え去る前に彼を見ることは、彼女の介抱に依つて夫を幸福にさせるよりも、驚愕に依つて更に多くの不幸を彼女に齎すであらうことを、察したのです。

レディー・グリーブは、サア・ジョンとバアバラとがお腹の中では考へながらさすが無躾にさうも云ひかねてゐたことを、突然口へ出してしまひました。

「ほんたうに、氣の毒なバアバラや、お前には飛んだことになつてしまつたねえ。お前があんなに夢中になつてあの人を選んだのも尤もだと思ふたつた一つの特長が、――あの世にも美しい顏立ちが、――こんな風にして駄目になつてしまつた日には、もう誰が見たつてお前のふしだらの口實になるものはありはしないよ。……ああ、外の人と結婚してゐたらよかつたのに、――ほんたうに私はさう思ふよ！」さうして夫人は溜め息をしました。

「直きに又よくなるだらうよ」と、父親は慰めるやうに云ひました。

上に述べたやうな、さう云ふ言葉は、たびたび口にされはしませんでしたが、それでもときどきその話が出て、バアバラに一種不安な、自分と云ふものが如何にも情なく見えるやうな思ひをさせました。彼女はもうそんな話を聞くまいと決心して、ユウシ・ルトの家が用意萬端整つたので、召し使ひを連れてそこへ引き籠つてしまひました。彼女は夫が歸つて來れば

やがて夫婦が水入らずで暮らせるであらうその家に落ち着いて、始めて一家の主婦らしい氣持ちを味はうことが出來ました。

何週間も立つた後に、ウィロースは自分で筆を執ることが出來る程に恢復しました。さうして徐徐に、やさしく、彼の負傷の全程度を彼女に分らせるやうにしました。自分が視力を全く失ふに至らなかつたのは、天祐であつたと、彼は云ひました。さうして、たとへ一方の眼は永久に暗黒になつたとは云へ、なほ一つの眼は充分に視力を保つてゐることを、感謝を以て述べるのでした。彼が自分の狀態の一つ一つに就いておづおづと打ち明ける遠慮がちな樣子は、彼の經驗が如何に凄慘なものであつたかをバアバラに悟らせました。彼は彼女がどんな事があらうとも心變りはしないと誓つてくれたのを、有り難く思つてゐる、が、彼女にはまだ、自分の變りやうの凄いことが、彼女が會つても分らない程になつてゐることが、充分呑み込めてゐないのではないか、それが心配でもあると云ひました。しかし何事があつたにせよ、彼女に對する彼の眞意は昔と變りはなかつたのです。

バアバラは彼の懊惱の蔭に、如何に多くの事柄が潜んでゐるかを察しました。彼女は返事をしたために、自分は運命の命令のままに身を委ねる、彼が歸つて來られさへすれば、いかなる形態をしてゐようとも彼を歡迎するであらうと、云つて遣りました。彼女は彼に、小綺麗な侘び住まひのこと、やがて二人のものとなるまで其處を自分の家としてゐることなどを語りました。さうして彼女は、彼の美しい顏の凡べてが失はれたと聞いた時にどんなに自分がガッカリしたかと云ふことは、知らせませんでした。まして、一緒に暮らした期間よりも別れてからの期間の方が長かつたので、今では何だか見知らない人を待つてゐるやうな氣がするなどとは、猶更云ひはしませんでした。

次第にウィロースは全快して、歸國の出來る時節が來ました。彼はサザムプトンに上陸をし、そこからユウショルトへ手紙を出しました。バアバラは彼を迎へるためにローントン・イン——あの、町村落ちの緣に彼が待ち合はせてゐた森と

獵場との間にある場所――まで、出向いて行くことに手筈を極めました。約束の時間に、彼女は父親から今度の新所帶に用ひるやうに、誕生日に祝つて貰つた小馬の小型の馬車に乘つて出かけましたが、向うの宿へ着くとそれを返してしまひました。と云ふのは、歸りには夫の馬車があるから、それで道行きをして戻らうと云ふ申し合せが出來てゐたからです。此の路傍の居酒屋には貴婦人がゆつくり休むやうな部屋はありませんでした。が、夏の初めの、すがすがしい宵のことで、彼女はそんなことは氣にもとめずに、外をぶらぶら歩きながら、今にその人がやつて來るかと街道の方へ眼を放つてゐました。けれど、幾度も幾度も遠くの方にぱつと砂煙が揚がつてはだんだん近寄つて來るのを見ると、孰れも夫の馬車ではありません。バアバラは約束の時間より二時間も餘計立つてゐました。さうしてしまひには、海峽に逆風でも吹いたのではないか、それで夫は今夜は歸つて來ないのではないかと、案じるやうになりました。

彼女は待つてゐる間に、或る奇妙な戰慄を覺えましたが、それは憂慮と云ふのとも何處か違つてゐましたし、さればと云つて恐怖と云ふ程に強くもありませんでした。彼女の心は失望と氣休めと、兩者の間をしきりなしにさ迷ひました。彼女はたつた六週間か七週間の間、あまり教育はなかつたがしかし顏だけは美男であつた夫と一緒に暮らしたきりです。さうして今やその人と十七箇月も別れてゐたのです。而もその人は不慮の出來事のために、彼女が會つてもきつと分らないに違ひないほど變つてしまつた。彼女の心が千千に亂れるのも尤もではありませんか。

ところで彼女の差しあたつての當惑は、そろそろ此處に待つてゐるのがバツが惡くなつて來たのに、それにしてもローントン・インから歸るのにどうしたらいいかと云ふことでした。バアバラのすることはいつも斯うなので、此處へやつて來るのにも後先の分別があつたのではありません。二三分も待てば夫が直きに驛馬車に乘つて來るだらう、さうしたら自分も夫と一緒にそれへ乘り込まう、と云ふ積りで、彼女は無造作に自分の小さな乘り物を返してしまつて、一人で殘つてゐたのです。彼女は自分が長く家を空けてゐた夫を迎へに出て來たことが村中に知れ渡つてゐて、非常な興味を湧かしつつあ

ることに氣が付きました。彼女は自分の見える所より、見えない所にあるより多くの眼が窓の內部からじつと此方を見てゐるのを感じました。バアバラはその居酒屋で雇つて貰へるどんな乘り物にでも乘つて、家に歸らうと決心しました。彼女と、彼女が最後に、今や暮色の迫りつつある街道へ眼を放つた時、更に一つの砂煙が近づいて來るのを認めました。彼女は立ち止まりました。一臺の四輪馬車が宿屋の前に來て、さうして中に乘つてゐる者が人待ち顏に佇んでゐる彼女の姿を見なかつたならば、それは通り過ぎたかも知れませんでした。馬は立ちどころに駐められたのです。

「あなたは此處に——さうしてお一人で、ウィロースの奧さん?」さう云つたのはその馬車の主、アプランドタワース卿です。

　彼女は自分がどうしてかう云ふ淋しい場所に立たされてゐるかを說明しました。さうして彼が彼女の家と同じ方角へ歸ると云ふので、私の傍へおかけ下さいと云ふ彼の申し出でを承諾しました。初めのうちはお互ひにバツが惡く、話がはづみませんでしたが、それから一二哩も行つた頃には、彼女は眞面目に熱心に彼に話しかけてゐる自分と云ふものに氣が付いて、我ながら不思議な思ひがしました。彼女がそんなに感激したのは一に全く最近の生活——尋常でない結婚をしたために何となく孤獨に暮らしてゐた——その自然の結果でした。長い間心にもない隱遁生活を送つてゐた女が、不意に話相手に摑まつてぺらぺらしやべり出した時ほど、氣紛れなものはありません。さう云ふ譯で、彼女の赤裸裸な胸の思ひは一時に喉元へ込み上げて來て、相手が誘ひをかけるやうな質問や、又はちよつとした謎をかけるに從つて、我が身の苦勞の數數をしやべるに任せてしまひました。アプランドタワース卿は三哩も廻り道をするのを厭はず、彼女を門口まで送り屆けました。さうして彼女の手を執つて馬車からおろしてくれる時に、彼女は彼が鋭い非難を小聲で云ふのを聞きました。「私の云ふことさへ聞いていらしつたら、こんなことにはならなかつたでせうに!」

　彼女は何とも答へないで、家の中へ這入りましたが、夜が次第に更けて來ると、アプランドタワース卿とあんなに親し

くしたことがだんだん氣懸かりになつて來ました。しかし相手は、彼女の思ひがけない時に彼の方から出しやばつて來たのです。若しも彼に會ふことが前から分つてゐたのだつたら、自分はソツのないやうに立派にあしらつて見せたものを！パアバラは自分のたしなみのなさを思ふと、恥づかしさに冷や汗が出ました。さうして自責の念に驅られて、エドモンドの歸りに一縷の望みを托しつつ、眞夜中まで起きてゐようと覺悟しました。翌日にならなければ彼は來さうもありませんでしたが、それでも晩飯の用意なぞを命じたりしながら。

時間が立つにつれて、ユウシ・ルトの別莊の附近はしんしんとして物音もなく、聞えるのはただ樹木のそよぎのみでした。すると、殆んど眞夜中の頃、車輪と馬の蹄の音が門の方へ近づいて來ました。夫より外に來る筈はないので、パアバラは即座に彼を迎へるために廣間へ行きました。彼女は失心しさうな氣持ちを抱きながらそこに立ちました。思へば二人が別れてから何と云ふさまざまな變化が起つたことでせう！それに彼女は今し方アプランドタワース卿に出遭つたりで、その人の聲音と俤とがいまだに附き纏つてゐて、彼女の夫、エドモンドの姿を、心の奥底の鏡から追ひやつてしまつてゐるのでした。

しかし彼女は戸口へ行きました。さうして次の瞬間に一つの人影が這入つて來ました、——その輪廓は彼女も知つてゐます、が、その他の點はどうなつてゐるのかよく分らない人影が。——彼女の夫は羽ばたきをする黑い外套を身に纏ひ、帽子を目深に被つてゐました。その樣子は全く外國人のやうで、嘗て彼女の傍にゐた若い英吉利の村民のやうではありません。彼が燈火の明りの前へ來た時に、彼女が驚かされたのは、殆んど恐怖をさへ感じたのは、彼が假面を着けてゐることでした。彼女は最初此れに氣が付きませんでした、——その假面の肌合ひには少しも異樣なところがないのです、うつかり往來で出遭つた人なら、眞の人間の顏以外の何物でもないと思ふくらゐに。——

彼は自分の思ひがけない姿かたちに、彼女がぞつと身顫ひしたのを看て取つたのに違ひなく、慌てて云ひました。「私

はこんな風にしてお前の所へ來るつもりではなかつたのだよ。――私はお前がもう寝てゐると思つたのだ。よく起きてゐてくれたね、可愛いバアバラよ！」彼は片手で彼女を抱へました、が、接吻しようとはしませんでした。

「おお、エドモンド！――あなたなの？――ほんたうに？」と、彼女は云ひました、雙手を強く握りしめながら。なぜなら彼の姿や動作は先づ間違ひなくその人のやうに思へましたし、言葉の調子も昔の調子に似てゐましたけれども、聲の變つてゐる工合が、別人のやうに思へたからです。

「私はこんな風に體を包んでゐるのだよ、道中の旅籠屋や往來の人の目を避けるために」と、彼は低い聲で云つて、「ちよつと馬車を返して來るから、待つてゐておくれ。」

「あなたお一人なのですか？」

「ああ、私は教師をサザムプトンへ殘して來たのだ。」

彼女が晩餐の用意の出來てゐる食堂へ這入つた時に、驛馬車の輪の音が遠く去つて行きました。直ぐに夫は彼女の傍へ戻つて來ました。彼は外套と帽子とを脫ぎましたけれども、假面は未だに着けてゐるのです。さうして彼女にその時始めて分つたのは、その假面が何か絹のやうなしなしなした地質の、特別製のものであつて、肉の色に巧く似せてあることでした。これは額の生え際へ自然に着くやうに出來てゐて、その他の點も巧妙に拵へてあるのでした。

「バアバラ、――お前、加減でも惡いのかね」と、彼はさう云つて、手袋を外して、彼女の手を執りました。

「ええ、――加減が惡かつたんですの。」

「此のしやれた家は私たちのものなのかね？

「おお、――ええ。」彼女は自分が何を云つたのか殆んど覺えがありません、なぜなら、彼が彼女の手を執るために手袋から出した手と云ふのが、曲りくねつてゐて、指が一二本足りないのです。おまけに彼女は假面を透して、たつた一つしか

ない眼玉の光るのを見たのです。

「私はどうしてもお前と接吻したいのだ、今此の場で！」と、彼は傷ましい熱情を籠めてつづけました。「けれど此のままではすることが出來ない、――こんなものを着けてゐては。召し使ひ共は寢てしまつただらうね？」

「ええ」と、彼女は云ひましたが、「しかし起しても差支へないのよ、御飯をお上りになるんでせう？」

彼は食べるには食べるけれども、こんな時刻に人を起すには及ばないと云ひました。そこで彼等は食卓に近づき、椅子に腰かけ、お互ひに面と對ひました。

バアバラの心は怯え切つてゐたのですが、それでも氣が付かずにゐなかつたのは、彼女の夫がぶるぶる顫へてゐることでした。彼は自分が與へるところの、或ひは與へんとしつつあるところの印象を、彼女と同じく、若しくは彼女以上にも、恐れてゐるやうでした。

彼は間近く寄つて、再び彼女の手を執りました。

「私はヴェニスで此の假面を作らせたのだよ」と、彼は明かに當惑しながら口を切りました、「私の最愛の―― いとしいバアバラや――お前はあの――どう思ふだらうかねえ――私が此の假面を取つたら？　私を嫌ひはしないだらう――ねえ、お前？」

「おお、エドモンド、私はそんなことを氣にかけるもんですか。」彼女は云ひました、「あなたの身の上に起つたことは私たちの不仕合はせです。だけど私はちやんと覺悟が出來てゐます。」

「お前、大丈夫覺悟が出來てゐるかね？」

「ええ、ゐますとも！　あなたは私の夫ですもの。」

「ほんたうにお前、どんな外形の變化にも動じないと云ふ自信があるかね？」彼は再び云ふのでした、激しい心の動搖に

聲を掻き擧らせながら。

「大丈夫――だと思ふわ、きつと」彼女の答へは微かでした。

彼はうなだれて囁きました、「さうであつてくれればいい、ほんたうにさうであつてくれれば。」

それから暫くひつそりとして廣間の柱時計の響きが妙に際立つて聞えました。彼はちよつと横を向いて假面を外しにかかつたのです。彼女は息もつかないで待つてゐましたが、それは面倒な仕掛けになつてゐるらしく、幾らか手間がかかりました。彼女はちらりと彼の方へ眼を向けたり、直ぐその顏を背けたりしました。さうしてそれが取り除けられると、彼女はそこに現はれた慘憺たる物の形に眼を閉ぢました。一瞬間、總毛立つ感じが彼女の全身を走りました。が、それでも彼女は、土氣色になつた唇から自然に發する叫び聲をぐつと抑へて、改めて彼を見直すために無理にも心を引き立てましたが、もう一刻も我慢が出來ずに、椅子の傍へばつたり倒れて、眼を蔽うてしまひました。

「お前は私を見ることが出來ないんだな！」彼は絶望して呻きました、「私は餘り恐ろしいしろものだ！お前でさへも我慢が出來ない！それを知らないではなかつたんだが、それでも内心さうでないことを祈つてゐたのだ。ああ、此の忌まはしい運命、――呪ふべきは私の命を取り止めたヴェニスの外科醫どもの技術だ！……顏をお上げ、バアバラ」と、彼は哀願するが如くにつづけました、「私を完全に見ておくれ。若しも私を嫌ふのだつたら、嫌ひですと云つておくれ。さうして二人の間の事は永久にカタを付けようぢやないか！」

不仕合はせな彼の妻は身を引き締めて、胸も張り裂けるばかり悶えました。彼は彼女のエドモンドであり、彼女に何一つ悪いことをしたのではありません。彼は苦しみを受けたのです。此の人のために身も魂も捧げようと云ふ心が、ほんの一時彼女を救ひに來てくれました。彼女は命ぜられたもののやうに瞳を上げて、此の人間の殘骸、此の écorché を、もう一度しみじみと視詰めました。が、とても二た眼と見られたものではありません。彼女は覺えず、又しても顏を背けて

身ぶるひしました。

「お前は此れに馴れることが出來ると思ふか？」と、彼は云ふのです、「え、執方だよ！ お前はこんな化け物のやうなしろものの傍にゐられるだらうか？ 自分で判斷して御覽、バアバラ。お前のアドニスは、お前のたつた一人の男は、こんなものになつてしまつたのだ！」

氣の毒な婦人は身動きもせずに彼の傍に立つてゐました。動いてゐたのはその不安さうな眼ばかりでした。彼女の人間らしい感情の凡べては、愛情も憐愍も、恐怖のためにあとかたもなく驅逐されて、恰も幽靈を見た時のやうな恐ろしさ、薄氣味の悪さが一杯でした。彼女はどうにも、此れが自分の選り好んだ婿であつたとは、――自分の戀した男であつたとは、考へられませんでした。彼は外の種族に屬する一生物に形を變へてしまつたのです。「私はあなたを嫌ひはしません」と、彼女は顫へながら云ひました、「しかし私はただもう――一途に恐ろしくつて。――どうか私の氣の鎭まるまで待つて下さい。あなたは御飯を上るんでせう？ その間私は部屋へ歸つて――昔の氣持ちを喚び起すやうに努めて見ますわ。ね？ きつと私は努めますわ。だから待つてゐて下さいね？ きつと、きつと努めますから！」

氣も魂も身に添はない女は夫が返事をするのも待たずに、成るべくその方を見ないやうにして戸口へ這つて行きました。さうして部屋を脱け出しました。彼女は彼が晩餐の卓に就いたらしい物音を聞きました。が、彼は定めし、案じてゐた事が事實となつて散散な扱ひを受けたのですから、物を食ふ氣もなかつたことでせう。バアバラは階段を登つて自分の部屋へ這入ると、ぐつたり身を投げて寢臺の敷布に顏を埋めてしまひました。

かうして彼女は暫くの間留まつてゐました。その寢臺は食堂の上にあつたので、バアラバは跪いてゐると、程なくウィロースが椅子を後ろへ押し除けて廣間の方へ立つて行くけはひがしました。五分もすればあの物體は多分階段を上つて、さうして再び彼女の面前に現はれるでせう。あの物體、――世にも珍らしい恐ろしい姿の、彼女の夫とは似ても似つか

ない形相のものが。――此の深夜の寂しさに、附き添うてくれる召し使ひもなければ友達もない彼女は、全く自制心を失ひました。さうして彼の最初の足音が階段に聞えたとたんに、外套を羽織る暇もなく部屋を飛び出し、廊下傳ひに裏梯子の方へ走つて、そこを驅け降りて、裏口の戸を開けて、戸外へ出ました。彼女は何處をどう歩いたのか殆んど夢中で、やつと氣が付いた時には温室の中の花壇の間にもぐり込んでゐました。

そこに彼女はじつとしてゐました、怯えた大きな眼を見張つて、硝子の外の庭の様子を窺ひながら。さうして裾をたくし上げて、時時やつて來る田鼠を用心しながら。彼女は絶えず足音が聞えはしないか、人聲がしはしないかとビクビクしました。思へばそれは、自分が義理にも憧れなければならない筈の足音であり、自分の心には天の音樂とも響くべき筈の聲なのですが。……しかしエドモンド・ウィロースは其方へはやつて來ませんでした。だんだん夜が短かくなりつつある時候のことで、直きに明け方になつて、いち早くも朝の光りが射して來ました。晝間になれば夜ほど恐くはありません。彼女は彼に會ふことが出來、あの形相を見馴れることが出來るだらうと考へました。

そこでいろいろの憂き目に遇つた若い婦人は、温室の戸を開けて、二三時間前に飛び出した道を引き返しました。氣の毒な夫は、長い旅行の後であるから、多分寢室で寢てゐるだらう。彼女は出來るだけ忍びやかに這入つて行きました。家の中は先刻そこを逃げ出した時のままになつてゐます。彼女はあたりを見廻して、夫の外套と帽子を捜しましたが、何處にも見えません。夫は大きい荷物をサザンプトンで運搬車に托して、ただ一つ小さい鞄だけを携へて來たのですが、それもありません。彼女は勇氣を奮ひ起して、階段を上りました。寢室の扉は前の通り開け放しになつてゐます。彼女はおづおづ覗いて見ました。蓐には體の凹みが着いてゐません。大方彼は食堂の長椅子に臥したのであらう。彼女は降りて、行つて見ました。彼はそこにも居ませんでした。食卓の上の、手を付けない皿の傍に、手帳の紙へ走り書きをした一通の文が載つてゐました。それはかう云ふ意味のものでした。――

吾が永久に愛する妻よ。――私のおぞましい姿が御身に與へたところの結果は、前から私も斯うなるであらうと豫想してゐた。私はそれの反對を望んだのだが、それは愚かな事だつた。斯くの如き災禍の後に人間らしい愛が存在し得ない事は、私にはよく分つてゐる。白狀すれば、私は御身の愛を神の愛の如く考へたのだが、あんなに長い間別れて暮らしてゐた後では、餘りにも自然なる最初の恐怖に打ち克つだけの、充分な溫情が殘つてゐよう筈がない。それは一つの試錬であつた。さうしてそれは失敗したのだ。私は敢て御身をば咎めぬ。恐らくは此の方がよかつたかも知れない。では左樣なら。私は一年の間英蘭土を去るが、若し生きてゐたら、その期間の終りに於て再び御身に見えるであらう。その時私は御身の僞りなき心持ちを確かめたい。さうして御身が若しも私を厭ふのであつたら、私は永久に去つてしまひたい。E.W.

驚きが鎭まると、バアバラは全く自分を赦し難いものに感じたほど、心の苛責に惱みました。彼女は彼を、苦難を受けた人間として遇す可きであつたのです。子供のやうに、單に眼先に在るものの奴隸となる可きではなかつたのです。最初に彼女が考へたのは、跡を追ひかけて、歸つて來るやうに賴んで見ようと云ふことでした。しかし調べて見ると、誰も彼を見たものがないことが分りました。彼はこつそりと姿を消してしまつたのです。

それに又、昨夜の場面は取り返しのつかないことです。彼女の恐怖は餘りにも露はでした。さうして彼は、彼女が義理に引き止めたところで、それに欺されて歸つて來るやうな男ではありません。彼女は兩親の許へ出かけて、凡べての出來事を打ち明けましたが、それは內內、程なく彼女の家族以外の人たちにも知れ渡るやうになりました。

その年は過ぎましたが、彼は歸つて來ませんでした。今では彼の生死の程さへ疑はしくなりました。バアバラが、夫に對する嫌忌の情に打ち克つことが出來なかつたのを悔やむ心は次第に募つて、やがて教會の側堂を建てるなり、石塔を立てる

なりして、自分の餘生を慈善事業に捧げようと願ふやうになりました。そのために彼女は教區の結構な牧師に就いて、日曜毎に教會の座席に腰かけ、二十呎高い壇の上に居るその人の教へを聽きました。が、その牧師の出來ることと云つたら、頭へ手をやつて鬘の工合を直すことと、嗅ぎ煙草の函をコツコツ叩くことぐらゐが關の山でした。何分その頃は信仰が甚だ生ぬるい狀態にあつたので、側堂とか、尖塔とか、玄關とか、東の窓の色硝子とか、十誡の板とか、獅子と一角獸の紋章とか、眞鍮の燭臺とかは、此の近邊の何處でも一向に必要はなく、迷へる者の神信心からそれを奉納するやうなこともなかつたので、――さう云ふ寄進狀が每朝續續やつて來て教會と云ふ教會が出來たての銅貨のやうにぴかぴかしてゐる今のわれわれの幸福な時代とは、前世紀は此の點で著しく違つてゐたのです。かの氣の毒な貴婦人は其の方法で良心を和げることが出來なかつたので、せめて慈善的な行ひをしようと決心しました。日ならずして彼女の門前には、ぼろぼろの着物を着た、浮浪人だの、醉つ拂ひだの、僞善者だの、ぐうたらな乞食だのの耶蘇教徒共が每朝集まつて來ましたが、それでどうやら氣休めになりました。

しかし人間の心は、壁の上に這ふ蔦葛の葉のやうに變り易いものです。時が立つに從つて、夫からは何の音沙汰もないので、バアバラは母や友達が、「まあ、かうなつてくれた方が結句一番よかつたのさ」などと、彼女の前で云ふのを聞きながら、平氣でゐられるやうになりました。彼女は自分でも成る程さうだと思ひ始めました。たとへ心が結婚當時の昔に飛んで、その折自分の傍に立つてゐた男を想へば、未だに胸がときめいて懷かしさが込み上げて來るとは云へ、さうしてその懷かしさは、若しあの時の男が生きて眼の前に居てくれたら、一層強まるであらうとは云へ、あの腐爛した鼻つ缺けの姿を想ひ浮かべては、今も猶身ぶるひが出るのです。彼女は若く、まだ世馴れてゐませんでした。夫が最後に歸つて來た時に、やうやう氣紛れな空想に充ちた少女時代から、大人になりかかつてゐたところでした。

が、夫は再び來なかつたのです。生きてさへゐたらもう一度戾つて來ると云つた彼の言葉を思ひ、その言葉を守らない

やうな彼ではないことを思へば、彼女はその人を死んだものと見切りをつけてしまひました。それは彼女ばかりでなく、彼女の兩親も、さうして又もう一人の人間、――あの、默默としてゐる、恐ろしい太ツ腹の、冷靜な顏つきをした男、――彼の先祖の墓碑に彫まれた石像の如く、寂然と眠つてゐるやうに見える時でも、七人の衞兵の如く耳を欹てゝゐるあの男もさうでした。アプランドタワース卿はまだ三十にはなりませんでしたが、バアバラが夫の歸つて來た時に恐れて逃げた話を聞き、夫が即座に出て行つたことを聞いて、意地の惡い六十爺の如くニヤリと笑みを洩らしました。彼はしかし、ウィロースは感情を寄したとは云へ、若し十二箇月目の終りになつても猶生きてゐたら、彼の美しい瞳を持つた財産を請求すべく再び現はれて來ることはほゞ確かだと感じてゐました。

バアバラは最早や同棲すべき夫が居ないので、夫婦のために父親が備へてくれた住まひを捨てて、今はチェーン・メーナーの館に、昔の少女時代の如く暮らしました。次第にエドモンド・ウィロースとの情事は、物狂はしい夢であつたかのやうに思はれ、月を重ね、年を經るにつれて、アプランドタワース卿とチェーンの一家との交際は、――バアバラの駈け落ちの後、幾らか疎くなつてゐたのが、――著しく撚りを戻しました。彼は再び足繁く出入りするやうになり、自分の住んでゐるノリングウッドの館へほんの僅かな手入れや改築をするのにも、必ず馬をチェーンに走らせて、友人のジョン從男爵に相談すると云ふ風でした。かうして彼は自分をしばしばバアバラの眼に親しませたので、バアバラはだんだん打ち解けて、恰も兄弟に對する如く心置きなく彼と話をするやうになりました。彼女は彼を、思慮あり、分別あり、權威ある人として、敬るやうにさへなりました。彼の畑荒らしや、蕪泥坊や、もぐり商人に對する取り締まりの嚴しいことは通り者になつてゐましたけれども、彼女はそんな評判は、どうせ分らず屋の云ふことだらうと極め込んでゐました。

彼等はこんな風にして、彼女の夫の失踪以來數年を經、もう確實に夫が死んだと思はれる時分まで過ごしました。アプランドタワース卿は、氣の拔けた調子で結婚申し込みの蒸し返しをしても、最早やをかしくはあるまいと考へました。バア

パラは彼を愛してはゐませんでしたが、彼女はもともと、あの風のまにまに靡く植物、スヰート・ピーのやうな性分で、枝を垂らし花を咲かすには、自分以外のもつと頑丈な幹に縋ることが必要でした。それに彼女はもう大人にもなつたので、十字軍の戰ひに無數のサラセン人を屠つた立派な先祖を持つ人の方が、父と祖父とが相當の村民であつたと云ふ以外には何も傳はらない男よりも、世間的に考へて自分に恰好な婿であることが分つて來ました。

サア・ジョンはいい折を見て、彼女が自身を法律上未亡人と考へて差し支へないことを告げました。で、要するにアプランドタワース卿は彼女に對して話を進め、彼女と結婚してしまひました、但し彼女に、「私はウィロースを愛したやうにあなたを愛します」と云はせることは出來ませんでしたが。――私が子供の時分に、一人の年老いた貴婦人がありましたが、その人のお母さんはその婚禮を見たさうです。その話に依ると、ロード・アプランドタワースとレディー・アプランドタワースとは、その晩夫人の父君の館を出た時は四頭立ての馬車に乘り、夫人は銀と綠色の衣裳を裝つて、見たこともないやうな華美な羽毛の帽子を被つてゐたさうです。さうしてその綠色が彼女の顏の肌に似合はなかつたのか、それとも外の理由に依るのか、伯爵夫人は靑ざめて見え、どうも花やかとは云へなかつたさうです。婚禮が濟むと、夫は彼女を倫敦へ伴ひ、彼女は其處で流行季節のいろいろのものを見物しました。それから二人はノリングウッドの館へ歸つて、とかくするうちに一年を經過しました。

彼女の夫は、結婚する前は、彼女が彼を眞心から愛し得ないでも、それはあまり氣にかけない樣子でした。「ただもう私の妻にさへなつて下されば、それだけで私は滿足します」と、彼は云つてゐました。けれども今になると、彼女に溫かみの足りないことが癪に觸つて來たらしく、腹立たしさを素振りにも出すので、彼女は彼と膝つき合はせたまま、何時間でも默つて遣る瀨なく過ごすやうになりました。此の伯爵家の假相續人と云ふのは、遠い親類の者でしたが、アプランドタワース卿には嫌ひな物や人間が澤山あつて、その相續人も矢張りその中の一人でしたから、彼は疾うから世繼ぎの子

供を儲けたいと思つてゐたのでした。彼は此の希望が遂げられさうもないと云ふ廉で、いたく彼女を批難し、一體お前は何の役に立つのだと云つて責めるのでした。

或る日、侘びしい月日を送りつつあるアブランドタワース夫人の許へ、「ウィロース夫人殿」と記した一通の手紙が、思ひがけない土地から屆きました。ピサの彫刻家は、彼女が二度目の結婚をしたことを知らずに、久しく手間取つたウィロース氏の等身大の彫像が今も猶彼の工房に置いてあること、それは彼女の夫が同市を出發する際に、追つて通知するまで預かつてくれるやうに命ぜられたものであることを告げました。彼はまだその仕事の後金を受け取つて居らず、それにその彫像は場所を塞げて處置に困るので、若し殘額を支拂つて頂き、それを何處へなりと送り屆けるやうにお指圖が願へれば幸甚である、と云ふのでした。ちやうど此の手紙が着いたのは、夫婦の仲がだんだん疎くなつた結果、伯爵夫人が夫に知らせないちよつとした内證事（それは勿論、罪のない事なんですが、）を持つやうになつた時でしたから、彼女はアブランドタワース卿には一言の相談もせず、その彫刻家へ滯つた支拂を送つてやり、且その像を直ちに當方へ發送するやうに返事を出しました。

それがノリングウッドの館へ屆くまでには數週間かかりましたが、不思議な偶然の一致と云ひませうか、その間に彼女は最初の、今度こそ絶對に間違のないエドモンドの死に關する報道を手にしました。死んだのは數年前、海外に於いてのことで、二人が別れてから六箇月ほど後だつたのです。彼は既に大怪我をしてゐたところへ、かてて加へて精神上の落膽が伴つたので、些細な病氣で斃れてしまつたのですが、此の知らせは、英蘭土の他の地方に居るウィロースの親戚から、簡單な死亡通知狀の形式に依つて彼女の許へ屆きました。

彼女の哀傷はやがて故人の不幸に對する心からの憐愍となり、自分が薄情だつたことを自ら責める念となりました。自分は何故、晩年の故人の姿に接した時、以前の彼が生れながらに持つてゐた天與の美貌を想ひ起すことに依つて、嫌惡の

感じに打ち克つことが出來なかつたか。今や地上から消えてしまつたあの陰慘な形相の者は、彼女に云はせれば決して「あたしのエドモンド」ではなかつた。ああ、昔のままの彼に會ふことが出來るのだつたら!と、バアバラは思ふのでした。それから二日三日過ぎて、バアバラと夫とが朝の食事をしてゐる時、馬鹿に大きな荷物を載せた二頭曳きの運搬車が邸の裏手の方へ廻るのが見えました。さうして程なく、包みの表に「彫刻」と記した一箇の荷物が夫人宛に屆いた旨を、取り次ぎの者が傳へました。

「何だらう、いつたい?」と、アプランドタワース卿は云ひました。

「エドモンドの像なのです。私の物なのですけれど、まだ見たことはありませんの」と、彼女は答へました。

「お前、それを何處へ置くつもりかね?」

「まだ極めてはゐないんですけれど」と、伯爵夫人は云つて、「何處でも構ひませんわ、あなたの御迷惑にならないやうな所なら。」

「いや、別に迷惑と云ふことはないがね」と、彼は云ひました。

邸の裏手の方の部屋で荷が解かれると、彼等はそれを見に行きました。像は全身の姿であつて、純粹なカルララの大理石に刻まれ、エドモンド・ウィロースの天稟の美しさを殘る隈なく表現してをり、恰も彼が旅の門出に彼女に別れを惜しみつつ立つてゐる光景で、線と云ひ、輪廓と云ひ、凡べてに於いて殆んど完全な男性美の標本でした。誠にその作品は非常な忠實を以て仕上げられてゐたのです。

「正しく此れはアポロ神だ」と、今日まで繪でも實物でもウィロースを見たことのなかつたアプランドタワース伯は云ひました。

バアバラの耳へは、彼の言葉は這入りませんでした。彼女は最初の夫の前に、恰も傍に他の一人の夫が居るのを忘れた

如く、恍惚として立つてゐたのです。不具になつたウィロースの姿は、彼女の心眼から消えてしまひました。後の慘めな姿ではなく、此の完全な形のものこそ、實に彼女が愛してゐたその人であり、若しも彼女に眞實な愛があつたならば、あんな薄情な仕打ちをしないで、常にその人の中に此の形を見ることが出來た筈です。

やがてアプランドタワース卿が、「お前は此の人に惚れ惚れとしながら朝ぢゆう此處に立つてゐる氣かね?」と、不躾に云つたので、彼女はやつと我に復りました。

彼女の夫は今の今まで、本來のエドモンド・ウィロースが斯くばかり美男であつたらうとは少しも知りませんでした。彼は自分が、若しもその頃のウィロースを知つてゐたら、數年前の自分の嫉妬はどんなに深かつたか知れないと思ひました。

午後になつて、彼が廣間へ戻つて來ると、彼の妻は廊下に居て、像もそこへ移してあります。彼女はそれを眺めながら、矢張り朝と同じやうに、うつとりとして我を忘れてゐるのでした。

「お前、何をしてゐるのだ?」

彼女ははつとして振り返つて、「あの、私の連れ合――私の像を見てゐますの、よく出來てゐるかどうかと思つて。――」と、吃りながら云ひました。「いけないでせうか?」

「それは差し支へないけれども」と、彼は云ひました、「お前、此の嵩張り物をどうするつもりだ。いつまでも此處へ置いておく譯には行かないだらうが。」

「それはさうですわ」と、彼女は云つて、「私、場所を見付けますわ。」

彼女の閨房の壁の一方に、深く凹んだ出張りがありました。さうしてその次ぎの週に伯爵が二三日外出した間に、彼女は村の指物師を呼んで、自分が指圖をして、その凹みの内部を唐戸で封じ込めました。かうして出來上つた押入の中

に、彼女は像を安置させ、扉に錠をおろして、鍵を身に着けて持つてゐました。夫は歸つて來ると、廊下に像がなくなつてゐるのに氣が付きましたが、彼に遠慮をして何處かへ片附けてしまつたのだらうと思つたので、別に何とも云ひませんでした。と、時時彼は、夫人の顏に今まで嘗て見たことのない何物かがあることを看て取りました。彼にはその謎が解けませんでしたが、一種沈默の恍惚狀態、しめやかなる歡喜、と云つたやうなものでした。あの像はどうなつたのか知らん？　それが彼にはあたりが付かないので、だんだん好奇心を起して、此處彼處と捜して見ましたが、しまひに彼は、彼女の私室だなと氣が付いて、そこへ行きました。部屋を叩くと、戸の締まる音と、カチリと鍵をかける音が聞えました。這入つて見ると、妻は腰かけて結び紐の細工、當時 knotting と呼ばれた手すさびをしてゐました。アプランドタワース卿の眼は、以前凹みのあつた所に嵌まつてゐる、塗り立ての扉の上に落ちたのです。

「お前は私の留守の間に、大工を入れたと見えるね、バアバラ」と、彼は何氣なく云ひました。

「はい、左樣です。」

「なぜあんな無趣味な戸を着けたのだ？——あの出張りの上の、折角の欄間が臺なしになるぢやないか？」

「私はもつと戸棚が欲しかつたんですの。それに私、此處は自分の部屋だからと思つて、——」

「それは云ふまでもないことだよ」と、たださう答へただけでしたが、此れでアプランドタワース卿には、ははあ、彼處に在るんだなと分つてしまつたのでした。

或る夜、明け方の僅かな間に、彼は自分の傍に伯爵夫人の居ないことに心付きました。神經質に氣を廻すやうな人ではないので、彼は餘り苦にもしないで、再び眠りに落ちてしまつて、翌朝は忘れてゐましたが、二三日すると又同じやうな事が起りました。今度は彼ははつきりと眼をさましましたが、何處へ行つたのか知らんと思つて起き上る暇もなく、ゆ

るやかな寢間着を纏つた彼女が、手に蠟燭を持つて戻つて來て、その灯を吹き消して、寢てゐる筈の夫の傍へ寄りました。彼には彼女が異樣に興奮してゐるのが、その息づかひで分りました。しかし此の場合にも彼は、自分が樣子を見てゐたことは素振りに出しませんでした。彼は彼女が寢床へ這入ると、間もなく眼がさめたやうな風をして、何か取り止めのないことを二つ三つ話しかけました。「さうよ、、、、、エドモンド」と、彼女は上の空で答へました。

アプランドタワース卿は、彼女が怪しくも寢間を脫け出る習慣があること、それが最初に思つたよりも頻繁であることを突き止めたので、何をするか見屆けてやらうと決心しました。その次ぎの日の眞夜中に、熟睡した風を裝つてゐると、やがて彼女はこつそりと起きて、暗い中を部屋の外へ出て行きます。着物を引つかけて、跡をつけると遙か向うの、廊下の外れへ來て、そこなら火燧ち石の音が寢間まで聞える恐れがないので、彼女はカチリと火を　りました。彼は彼女が蠟燭へ明りをともして閨房へ這入つて行くまで、片側の人なき部屋に隱れてゐて、二三分の後に附いて行きました。彼が閨房の戸口に達すると、例の秘密な龕の扉が開いてゐて、その中に居るバアバラが、兩腕を彼女のエドモンドの頸の周りへ、さうして口をその口へ、しつかりと押し着けながら立つてゐるのが見えたのです。彼女が寢間着の上に纏つてゐた肩掛けは兩方の肩から滑り落ちてゐます。さうして彼女の長く垂れた白い衣と靑ざめた顏色とは、生ける人間のやうではなく、一つの石像がもう一つの石像を抱いてゐる如き感を與へました。彼女は接吻の合ひ間合ひ間に、子供のやうな甘つたれた調子で、囁くが如く、訴ふるが如く、像に向つて話しかけてゐます。——

「私のたつた一人の人——御免なさいね、私あなたに辛くあたつて。ね、ね、——親切な、忠實な、——私の完全な人、——私は永久にあなたに心を捧げてゐるのよ。うはべは不實のやうに見えても！　私いつだつてあなたのことを考へてゐるのよ——夢みてゐるのよ、——實は一日うとうとして。さうして夜も眠らないで！　おお　エドモンド、私はいつもあなたのものよ！」——すすり泣きながら、さめざめと淚を流しながら、髮を振り亂して斯う云ふ言葉が發せられてゐ

るのです。アプランドタワース卿は妻が此れ程の情熱を貯へてゐようとは、夢にも思つてゐませんでした。
「は、は!」と、彼は自分に云ひました。「此れだな、夫婦の語らひが空になるのは、――子供の出來る望みが溶けて無くなるのは。――は、は! 此奴は何とかしなけりやならない、よし、よし!」

アプランドタワース卿は、一旦計略をたくらみにかかると、老獪な人でした。彼は此の場合、何をされてもニコニコしてゐると云ふやうな生やさしい計略を考へたのではありません。さうかと云つて、部屋へ闖入して出し抜けに妻を咎めると云ふやうな、そそつかしい事もしませんでした。彼は出て來た時の通り、靜かに寢間へ戻りました。伯爵夫人がすすり泣きや溜め息の數數を繰り返して、疲れ果ててそこへ戻つて來た時分には、彼は平生の如くすやすや眠つてゐる風に見えました。翌日になると彼は對抗運動に取り懸り、妻の先夫に附き添つて旅をした彼の家庭教師の所在を調べました。すると此の紳士は、今はノリングウッドから程遠からぬ羅甸語學校の校長を勤めてゐることが分つたのです。アプランドタワース卿は都合がつくなり出かけて行つて、此の紳士に會見を求めました。校長はかう云ふ地方の偉いお方の訪問を受けたのを頗る光榮として、伯爵閣下のお尋ねになることなら何事に依らずお答へ申し上げるつもりで、出迎へました。

學校の事業やその發展の模樣に就いてしばらく談話を交へた後に、客は校長が嘗て彼の不幸なるウィロース氏と共に長途の旅行をしたことがあり、彼が不慮の災難に出遭つた時に現場に居合はせたことがあると信ずる旨を、述べました。客、アプランドタワース伯爵はその時の實際の光景が知りたく、かねてからそれを聞きたいと思つてゐたのだと云ひました。さうして伯爵は、彼の知りたいだけのことを單に言葉で聞き取つたばかりではありません。と云ふのは、だんだんおしやべりに身が入つて來ると、校長は紙の上へ、ひしやげた顏の寫生圖を畫いて、かう云ふ工合で此處が斯う斯うと、その繪に就いて息を切らせながら説明したのです。

「此れはどうも不思議なものですな!」と、アプランドタワース卿はその寫生圖を手に取りながら云ひました。「鼻も耳も

ないんですな！

ノリングウッドの極く近い町に住んでゐる男で、看板書きと器用な機械職工とを兼ねてゐる者が、或る日、伯爵夫人が兩親を訪ふべく暫く家を留守にしてゐた週の間に、アプランドタワース卿に雇はれて、その館へ呼ばれました。雇ひ主はその職工に、彼が手傳ひをする仕事は祕密にすることが必要であること、それだけ多分の報酬をやるから此の要求を守るべきことを、納得させました。かの戸棚の錠前は外されました。さうして器用な機械職工兼看板師は、アプランドタワース卿が懷ろに入れて持つて歸つた校長の寫生圖の助けを借りて、伯爵閣下の命令のままに、あの石像の神の如き容貌の上へ手を下し始めました。火が原型を毀ち傷けた通りのことを、鑿が複製に就いて行つたのです。その惡魔の如き破壞は、無遠慮に仕遂げられました。而も一層物凄くされたと云ふのは、それに繪の具を塗つて實物の如き色彩を與へたのです、勿論火傷をしてから後の實物の如くに。

六時間の後、職工が歸つてしまふと、アプランドタワース卿は仕上げを眺めたがら、意地の惡い笑ひを洩らして云ひました、——

「彫刻と云ふものは、人間を生前の姿の通りに現はすべきものだ。さうして此れがあの男の生前の姿さ。は！　は！　だが此れが役に立つんだ、ただのいたづらではないんだ。」

彼は合ひ鍵で戸棚の扉に錠を卸ろし、さて伯爵夫人を館へ連れて來るために出て行きました。

その夜彼女は眠りましたが、彼はじつと眼を覺ましてゐました。言ひ傳へに依ると、彼女は甘い囁きをうつゝともなく口走つたさうです。さうして伯爵は、夫人が夢の中でやさしい睦語を交はしてゐる相手と云ふのに、既に彼が破壞し盡して唯名ばかりにしてしまつたところのものであることを知りました。夢が終ると、アプランドタワース伯爵夫人は眼を覺まして起き上りました。それから毎夜の通りの所行が繰り返されました。彼女の夫がそつと睡間に居て、耳を澄らして居

ると、おもての破風に取り附けてある大時計が二時を打つたとき、彼女は扉を開け放ちにしたまま出て行きました。さうして廊下の外れの處で、いつものやうに、明りをつけました。伯爵は寢臺にゐながら、彼女が火燧ち石を燧つた後に、火口の火を燃え立たすやうにふうつと息を吹きかけたのを聞いた程、それ程あたりは靜かだつたさうです。彼女は閨房へ這入つて行きました。それから戸棚の戸へ鍵を入れて廻す音を、彼は聞きました、或ひは聞いたやうな氣がしました。次ぎの瞬間に、その方角から一つの長い鋭い叫び聲が傳はり、館の遠い隅隅へ反響しました。その叫び聲は繰り返され、つづいて重い物體のどたんと倒れる音がしました。

　アブランドタワース卿は寢臺から彈ね起きました。彼が暗い廊下に沿うて閨房の戸口に驅け着けると、戸は開け放しになつてをり、伯爵夫人が戸棚の中の床の上に、寢間着の襞に埋まつて倒れてゐるのが、蠟燭の明りで分りました。傍へ寄つて見ると、彼女は氣絶してゐたので、いい鹽梅にそれ以上の大事には至らなかつたと思つて、伯爵はほつとしました。彼は素早く戸棚の戸を締め、此の事件を惹き起した忌まはしい像を封じ込めて、兩手で妻を抱き上げました。彼女は抱かれながら、直ぐに眼を見開きました。一語も發せずに彼女の顔を自分の顔へひしと押し着けたり、彼は彼女を部屋へ連れ戻りましたが、さうしながら彼女の恐怖を追ひ拂はうとしてその耳元で笑つて見せました、皮肉と、いぢらしさと、殘忍との、滑稽に入り交つた心持ちで。

「ほう、――ほう、――ほう！」と、彼は云ひました。「へ、お前、びつくりしたかね？　何と云ふ赤ん坊だ！　冗談だよ！　バアバラ、――素敵な冗談だよ！　だが赤ん坊が夜中に戸棚の中へ這入つて、死んだ戀人の幽靈なんか見るものぢやない！　そんな事をすりや怯えるに極まつてゐるさ。――ほう、――ほう、――ほう！」

　彼女が寢間へ戻つて來て、まだ神經が少からず戰いてゐたとは云へ、漸く正氣だけは恢復した時に、彼は前よりは嚴かに云ひました。「さあ、私の奧さん、返事をするがいい。お前はあの男を愛するかね？」

「いいえ、——いいえ！」と、彼女は身ぶるひして、一杯に擴げた瞳を夫の上に据ゑながら、吃り吃り云ひました。「あんな恐ろしい人を、——もう眞つ平！」

「きつとかね、お前？」

「きつとですとも！」と、哀れな、氣落ちのした伯爵夫人は答へました。

しかし彼女の體力は自然にそれ自身恢復して來ます。翌朝彼は又も彼女に尋ねました。——「お前、今でもあの男を愛するかね？」——彼女は彼にじつと見られると、面を俯せて、なぜか返事をしませんでした。

「默つてゐるのは、まだ愛してゐると云ふことかね、馬——馬鹿な！」

「もう此れからは僞りを云ひません、さうして私の御主人のお氣に召さないことはしません、と云ふことですわ」と、彼女は行儀正しく答へました。

「それでは一つ、もう一度行つてあの男を見てやらうぢやないか？」さう云ひながら、彼はいきなり彼女の手首を執つてあの化け物の戸棚の方へ連れて行きさうにするのです。

「いやです、いやです！——いやですと云つたら！」と、彼女は聲を擧げて、一生懸命に夫の手を振りもぎりました。その様子では、昨夜の恐怖が彼女のか弱い魂に與へた打撃は、見かけ以上に强かつたのです。

「もう一服か二服も盛れば病氣が直るぞ」と、伯爵はひとり頷きました。

もうその頃は、伯爵夫婦の間柄が兎角面白くないことが一般に知れ渡つてゐましたから、伯爵は彼の密計を施すのに大した面倒はありませんでした。晝の間に、彼は四人の男に命じて、細引きと轆子（ころばし）とを持つて閨房へ來させました。四人の男は戸棚を開けて、像の上體を布で包んで、それへ繩をかけました。伯爵はそれを寢間へ運ばせたのです。さうしてそれから先のことは、半分は推測なのですが、私が聞いたところでは、かう云ふ噂が傳はつてゐます。——その夜、アブラン

ドタワース夫人が夫と共に引き籠ると、頑丈な四本の樫の木の柱の附いた寢臺の足元に、前にはそこに置いてなかつた背の高い黒い衣裳簞笥が立つてゐました。しかし彼女は、なぜそんなものが置いてあるのか別に聞いても見ませんでした。

「私はちよつと思ひ付いたことがあるんだよ」と、明りを消してから夫は云ひました。

「さうお？」

「小さなお宮を建てたんだよ、まあ云つて見ればお宮だが。——」

「小さなお宮？」

「うん、われわれが等しく尊敬してゐる人のためにさ。——え、どうだい、今お前にも見せてやるよ。」

彼が寢臺の帳の蔭に垂れてゐる綱を引くと、簞笥の扉がゆるやかに開きました。見ると、物凄い像を容れるために棚はすつかり取り除けてあつて、像はその中に、閨房に在つた時と同じやうに立つてゐます。さうして像の兩側に燃えてゐる蠟燭の明りは、歪み崩れた形相をまざまざと浮かび上らせました。彼女は夫にしがみ着いて微かな叫び聲を發し、蓐に顏を埋めながら哀願しました。「ああ、彼方へやつて、——後生ですから彼方へやつて！」

「いづれそのうちに、——つまりお前がほんたうに私を愛するやうになつたらね」と、彼は冷やかに答へました。「お前はまだ、ほんたうに愛してはゐないだらう、——え、どうだね？」

「それはまあ、——それは私、——ああ、あなた、後生ですから、——とても私こんなものは、——ああ、お願ひです、彼方へやつて下さいまし！」

「馬鹿をお云ひ。馴れれば何だつて平氣になるよ。もう一度とつくりと見て御覽。」

要するに、彼はその戸を締めもしなければ、蠟燭を消しもしないで、寢臺の足元へ開け放しにして置いたのです。さうしてその物凄い光景は不思議な魅惑を投げかけて、寢臺に横はつてゐる伯爵夫人は病的な好奇心を抱くやうになりまし

た。彼女は夫の命のまゝに、夜具の隙から眺めては、身を顫はし、顏を隱します。かと思ふと又眺めます。その間も始終それを取り除けてくれとせがみます。さうしなければ氣が違ふと云ひつゞけます。けれども夫はまだ許しませんでした。衣裳簞司は夜が明けるまで締められませんでした。

此の場面は次の晩も繰り返されました。伯爵は彼の手荒な矯正手段を少しも緩めず、苛責をつゞけたものですから、夫人は哀れにも、不貞な妻を誠實にさせようとする夫の折檻に攻めさいなまれて、すつかり神經を弱らせてしまひました。

三日目の晩、例の如くその場面が始まると、寢臺に横はりながら途方もなく氣違ひじみた眼を据ゑて、その恐ろしい蠱惑物を眺めてゐた彼女は、突然不自然な笑ひ聲を發しました。さうしてますます聲高く笑つて、像を視詰めたまゝ果ては笑ひつゝキイキイ叫び出しました。暫くすると聲はばつたり靜まりましたが、それきり彼女は氣を失つてしまつたのです。初めは卒倒したのだらうと思はれましたが、事實はもつと重大であることが直きに分りました。彼女は癲癇の發作を起したのでした。伯爵はさすがにぎよつとして、陰險な人には有りがちのことながら、今更自分が餘り酷薄に自分のためばかりを誤り過ぎたのが恐ろしくなりました。伯爵のやうな人間の胸には、切なる心遣ひよりも「いい氣味」だと思ふ感情の方が强かつたでせうが、それでも彼に相當した愛が忽然として燃え上りました。彼は紐を引いて簞司を鎖し、兩腕に彼女を抱き締め、そうつと窓際へ連れて行つて、息を吹き返させるやうに有らゆる努力を盡しました。

伯爵夫人が我れに復るまでには長い時間がかかりましたが、復つて見ると、彼女の感情に著しい變化が起つてゐました。彼女は夫に取り着いて恐ろしさうに息を彈ませ、幾度も幾度もいぢらしく接吻をし、とうとう激しく泣き出しました。彼女が此の場面で泣いたことは前には曾てなかつたのです。

「あなた、あれを取り除けて下さいまし。――いいでせう、あなた！」さう云つて彼女は、哀れつぽくせがむのでし

た。

「お前が私を愛するなら。」

「愛します。——ほんたうに愛します。」

「さうしてあの男と、あの男の思ひ出が嫌ひになつたのなら。」

「嫌ひです、——嫌ひですとも！」

「完全に？」

「想ひ出してもぞつとします！」と、伯爵夫人は奴隷の如く従順になつて云ひました。「どうして私はあんな不量見な事をしたのか、考へると恥づかしうございます。もう此れからは二度と間違つたことはしません。ですからあなたもあのいやらしい像を、決して私の前へ出さないで下さるでせうね？」

伯爵はもう許しても大丈夫だと感じました。「決して」と、彼は云ひました。

「ではあなたを愛しますわ」と、彼女は熱心に、此の上折檻されることを恐れるかの如く云ひました。「もう決して決して、結婚の宣誓に背くやうなことは此れつぱかりも、夢にも考へはしませんわ。」

さて不思議な事には、脅迫に依つて彼女から没義道に奪ひ取られた此の虚偽の戀愛は、次第に習ひ性となつて或る程度まで眞實性を帶びるに至りました。彼女の伯爵に對する奴隷的の歸依が著しく眼に立つて來ると同時に、先夫の思ひ出を厭ふ樣子がいよいよ明かとなりました。像が取除けられてしまつても、歸依の心持ちはますます募りました。反動作用は永久に彼女を把握し、時を經る程なほ強くなりました。恐怖と云ふものが如何にして斯くの如き性情の變化を及ぼすことが出來るのであるか、それは偉いお醫者さまに聞いて見なければ分りません。しかし私は、斯う云ふ反動的本能の例もないことはなからうと思ふのです。

その結果は、治療が永久に成功した代りには、治療それ自身が又一つの病氣となりました。彼女は夫にしがみ着いて、片時も夫を放したがらないやうになつたのです。彼女は夫と別別の居間に居るのを厭がりました。その癖夫が出し拔けに眼の前へ這入つて來ると、きつとぴくッと飛び上りました。彼女の眼は殆んど常に夫の上に固着して、彼が戸外へ出かけると、自分も喰つ着いて行かうとします。彼がちよつとでも他の婦人に慇懃にすると、止め度もなく燒き餅を燒きます。さう云ふ譯でしまひには彼女の貞淑そのものが彼には荷厄介になり、彼の時間を潰し、彼の自由を奪ひ、彼に癇癪を起させました。尤も今では彼が荒荒しい物云ひをしても、彼女は決して復讐的に自分一人の空想の世界へ逃避するやうなことはしません。慰藉の源泉となつたところの外の男に對する愛情は、今では凡べて冷めたい燃え殼となつたのです。

その時以來、此の恐氣づいた失意の貴婦人の生涯は、――それは彼女の兩親の淺ましい野心と、時代の陋習さへなかつたならば、もつと高尚な方向へ發展したでもありませうが、――意地の惡い冷酷な夫の色慾の道具になつたのです。此細な内輪の出來事が引きつゞいて彼女に起りました、――半ダース、八つ、九つ、十ばかりのさう云ふ出來事、――と云ふのは引きつゞいて八年の間に十一人の子供を產んだのです。けれどもそのうち半數は早產であつたり、生まれると直ぐ亡くなつたりして、たゞ女の子一人だけが成長しました。彼女は他日ベルトンレイ氏の夫人となりましたが、此のベルトンレイ氏が後年のダルメーン卿であることは、覺えてゐなければなりません。

世繼ぎの男子は一人も滿足に成長せず、遂に全く心身を疲弊し盡したアプランドタワース夫人は、溫暖な氣候風土に觸れて衰へた體力を癒やすべく、夫に伴はれて國外へ行きました。しかし何物も彼女の健康には利きめがなく、伊太利へ着いて數月の後、フロレンスで亡くなりました。

豫期に反して、アプランドタワース伯は二度と結婚しませんでした。彼の抱いてゐた愛情は、――不思議な、片意地な、殘酷なものではありましたけれども、外の婦人に移らなかつたものと見えます。さうしてその爵位は、御承知の通り、彼

の死と共に彼の甥の手へ渡りました。恐らく一般に知られてゐないだらうと思はれるのは、六代目の伯爵が邸を取り擴げようとした時に、新しい基礎工事のために地面を堀ると、一箇の大理石像の破片が、幾つも土中から出たことがあります。これらは大勢の考古學者に委ねられましたが、學者の說では、粉粉のかけらから推測し得る限りに於いて意見を立てれば、それは羅馬の半獸神の像の崩れたものらしい、若しさうでなければ「死」を寓意する像であるらしい、とのことでした。邸に住んでゐる老人の一人か二人だけが、それらの破片から成り立つものが誰の像であるかを察しました。

猶附け加へて置かなければならないのは、伯爵夫人の死後間もなく、メルチェスターの副僧正に依つて有り難いお說教が開かれました。その題目はそれと指してはありませんでしたが、此の話の事件から暗示されたものであることは云ふまでもありません。副僧正は單なる外形の美に迷うて肉の愛に溺れることの愚かさを力說し、さうして唯一の理性的な、道德的な情愛の發生は、人間の內部の價値を土臺とするものであることを示しました。私が以上にその傳記を述べたところの、やさしい、しかしながら何處か淺薄なところのある貴婦人の場合に於いては、疑ひもなく若いウィロースの男振りに對する惑溺が、彼女を驅つて彼と結婚せしむるに至つた重な感情であつたのです。それが一層慨かはしいと云ふ譯は、云ひ傳へに依ると、彼の美貌は彼の長所の最も小なる部分であつたらしいのです。人人の云ふところは凡べて、彼が確乎たる性情を持つた、才智の秀れた、有爲な人物であつたと云ふ推測を證據立ててゐるのです。

（完）



永遠の兄弟の眼

シュテファン ツワイク作
山本有三譯

「個々の行爲を避くることによりて、人はまことに行業より免かることなからん。
人は凡ての行業より瞬時も免かるゝこと能はず。

聖薄伽梵歌 第三章

何を行爲といひ、何を無爲といふや――これ聖者も屢迷ひし所なり。
されば人々は行爲を見詰めざるべからず。許されざる行爲をも見詰めざるべからず。
また無爲をも見詰めざるべからず――行爲の本體は淵深なり。

聖薄伽梵歌 第四章

これはヴィラータの物語である。彼はその民によつて德の四つの名を以て稱

へられたが、しかも王者の年代記にも、賢者の文にも記されてゐない。かくて人々は、その記憶を失つてしまつた。

まだ崇高な佛陀が地上に現れて、悟りの光をその下部たちに注がせ給はなかつた頃、ビルヴァーガアの國、ラジュピユタ王の許にヴィラータと呼ぶ一人の貴人がをつた。人々は彼を劍の稻妻と名づけてゐた。その故は、彼は他の如何なる戰者よりも猛き戰士であつたから。またその放つ矢は一度も過つたことなく、その術は空しくしごかれたことなく、その腕は打振ふ劍の上に雷の如くはためき落つる獵夫であつたから。その額は明るく、その眼は人の問ひに直面して濁ることがなかつた。嘗て彼の手が拳の醜き塊となつたのを見たものはなかつた。嘗て彼の聲が憤怒の叫びを發したのを聞いたものはなかつた。彼は王に仕へて忠なると共に、その奴隷たちからは崇敬の念を以て仕へられた。河の五つの流れのほとりに於て、彼よりも正しいとされたものは一人も存しなかつたからである。虔ましき人々は彼の家の前を過る時、恭しく身をかがめた。子供たちは彼を見ると、彼の眼の瞳の中にほゝ笑みかけた。

ところがある時、彼の仕へてゐる王に不祥な事變が勃發した。その國土の大半の管領に補せられてゐた王の后の弟は國全體をわがものにしようとして、潛に賂ひを以て、王の最も優れた戰士どもを自分の許に召仕へるやうに誘つた。更に彼は僧侶を說き伏せて、數千年來ビルヴァーガア族の間に於いて主權者の表徵となつてゐた湖の神聖な蒼鷺を、夜陰彼の營中に運び込ませた。かくてこの敵將は戰場に於いて象や蒼鷺を武裝し山間に潛める不平の徒を驅り集めて大軍を組織し、城下に向つて揚々として進軍した。

王は朝から夕刻まで銅の鐃鈸を打たせ、白い象牙の角笛を吹かせた。夜は數多の塔に火を點し、魚の鱗を搖潰して火焰の中に投げ入れた。それは星の下に黄色く燃え上つて、危急の報を傳へるためであつた。併し馳せ參ずるものは殆どなか

つた。神聖な蒼鷺が殺はれたといふ知らせは、大將たちの心に重たく響き、彼等の士氣を沮喪させた。大將株の中でも最も練達の稱ある上將軍と象使とは既に敵の陣中にあつた。見放された王は（彼は苛酷な君主で、法に厳に、役賦の誅求が甚しかつたから。）空しく味方を見廻はした。彼は部將の中に頼りになる者を一人も見出さなかつた。彼の宮殿の前には戰場の指揮者は一人もゐなかつた。たゞ集つて來たものは、奴隸や下僕の途方にくれた群れのみであつた。

この危急の際に、王は、角笛の最初の響を聞くや否や、誠忠の知せを寄こしたヴィラータのことを思ひ起した。彼は黑檀の輿を用意させ、それをヴィラータの家の前に運ばせた。王が乘物から下りた時、ヴィラータは大地に平伏した。併し王は嘆願する者のやうに彼を抱いて、征討の軍を指揮するやう彼に告げた。ヴィラータは跪いていつた。「わが君、私はそれを爲し遂げませう。叛亂の焰がわが君の下僕の足の下に踏み消されぬうちは再びこの家には歸りませぬ。」

かくて彼は子息をはじめ一族郎黨を驅り催し、彼等を引き具して王の兵と合せしめ、軍容を整へて討伐の途についた。終日彼等は叢林の間を進んで、つひにある大河のほとりに達した。その對岸には無數の敵がむらがつてゐた。彼等は多勢を誇り、夜明けなば河も、陸も鮮血を以て溢れさせせんものと、丁々と木を打倒しつゝ、橋を作るのに忙はしかつた。けれどもヴィラータは虎狩の經驗によつて、その橋の上手に淺瀨のあることを知つてゐた。それ故闇が沈んだ時、彼は部下の者をして一人〳〵河を渡らせ、夜中不意に眠れる敵を襲つた。彼等が瀝青の炬火を振りかざすと、象や水牛は恐れおのゝいて、眠れる人々を踏みにじりつゝ、倉皇として遁走した。ヴィラータは叛王の天幕の中に突入した第一の人であつた。彼は眠れる者が起上らぬ前に、既にその劍を以て二人を打ち倒し、更に、今や跳ね起きて劍を執らんとする第三の者を斬り捨てた。第四と第五の者は、闇の中に於いて交々刃を交へてこれを倒した。一人はその額を打割り、もう一人の方はまだ衣も掻き合はせてゐない、あらはなその胸を突き刺した。影の間に影を加へ、彼等が聲もなく横はるや否や、ヴィラータは天幕の入口に立ちはだかつた。そして神のみしるしなる白い蒼鷺を救ひ出さんと侵入して來る者どもを防がうとし

た。併し敵は最早進んで來なかつた。彼等は驚愕の餘り色を失つて潰走した。逃げ行く敵のうしろに勝ち誇つた味方の勢の歡呼の叫びが揚つた。敗走のざわめきは過ぎて、やがて遠く〳〵消えて行つた。ヴィラータは天幕の前に、血に染つた劍を手にしたまゝ、靜に胡床をかいた。そして味方の者が激しい追擊から歸つて來るのを待つた。

併し程なく神の日が森の後に目覺め、棕櫚の木は金色の朝やけに燃えて、大河の中に炬火の如くきらめいた。太陽は、東の空に於いて燃ゆる傷口のやうに、血みどろの姿を現はした。その時ヴィラータは立上つて衣類を脫ぎ、流れに步み寄つて、兩手を高く頭上にかゝげた。そして祈りながら神の輝く眼の前にひれ伏した。それから彼は流れに浸つて洗ひ淨めた。血が彼の兩手から流れた。白い波の中の光が彼の頭に觸れた時、彼は岸に戾つて衣服に身を包んだ。そして夜中の所行を爽かなる朝日の光の中に見ようとして、朗なる面持を持しつゝ、再び天幕に取つて返した。恐怖の色はなほ面上に漲り、眼は見開き、顏は引き裂かれて、死者は橫たはつてゐた。叛王は頬を打ち割られ、昔てはビルヴァーガアの國の將軍であつた不忠者は胸を貫かれてゐた。ヴィラータは彼等の眼を閉ぢてやつた。そして眠つたまゝ打倒された他の者を一瞥しようとして更に步を進めた。彼等はまだ半ば莚に覆はれたまゝであつた。二つの顏は彼には見覺えがなかつた。それは叛王の奴隷で、南國生れの、柔い髮と黑い顏の持主であつた。併し最後の者の顏を自分の方に振り向けた時、彼は眼の前が急に暗くなつた。それは山地の領主であつた、兄のベラングールであつたから。兄が叛王から招かれてゐたのを、ヴィラータは知らないで、夜中手にかけてしまつたのであつた。彼は體をねぢ曲げて打ち倒れてゐる兄の心臟の方へ顫へながら身をかゞめた。併し心臟はもう鼓動してゐなかつた。打ち倒された者の開いた眼は硬く見詰めてゐた。そしてその黑い瞳はヴィラータの心臟の中まで差し貫いた。ヴィラータの息は全く止つたほどに見えた。彼は死果てた者のやうに、死人の中に坐つてゐた。彼の母が自分よりも前に生んだ、あの兄の凝視する眼が、彼の所行を非議しないやうに、殊更眼をそむけながら。

だが間もなく叫び聲が飛んで來た。猛鳥のやうに部下の者が數多の分捕品を携へ、意氣揚々と歡呼の聲を擧げつゝ天幕

の方に引き返して來た。彼等は味方の勝つたゞ中に、叛王の打倒れてゐる有樣を見、あまつさへ神聖な脊髓の恙ないことを知るや、欣々として踊り廻り、茫然として彼等の間に坐してゐるヴィラータの垂れ下つてゐる衣服に接吻した。そして劍の稻妻といふ新た名を以て彼を稱へた。引き返して來る人々はいよ〳〵多かつた。彼等は分捕品を車に積んだが、荷が重いために車輪が深くめり込むので、彼等は笞を以て水牛を打たねばならなかつた。また舟も重荷のため危く沈みはぐつた。一人の使者は河中に飛び込んで、王に報告を齎すために先に急いだ。他の者は分捕品のところに屯して勝関を祝つた。併しヴィラータは夢見る人の如く默々として坐してゐた。たゞ一度家來が死人の身體から衣類を剝がうとした時に、聲を發しただけであつた。やがて彼は立上つて、材木を掻き集め、積み重ねた薪の上に死骸を安置するやうに命じた。死骸が燒かれて、その魂が淸淨に生れ變るために。本來からいへば、謀叛人の身體は森の豺に引裂かれ、その四肢は太陽の激怒を被つて腐爛して行くのが當然であるのに、ヴィラータが謀反人に對して、かくも手厚い措成をするのを部下の者たちは怪訝に思つた。けれども彼等は彼の命ずる通りにした。火葬の薪が積み重ねられると、ヴィラータは自ら火を點じ、燃上る薪の中に芳香と白檀を投げ入れた。――それから彼は面をそむけ、材木が、眞赤になつて倒れ、烈火が灰となつて崩れ落ちるまで、默然として立つてゐた。

その間に奴隷たちは、昨日叛王の手下の者が誇りかに作りかけた橋を完成した。先頭に芭蕉の花を戴いた戰士が進み、その後から兵隊と馬に跨つた部族の長等が續いた。彼等の凱歌や歡聲はヴィラータの心に騷々しく響くので、彼は一同を先に立たせた。歩み出した時にも、彼と彼等との間には彼の意志に從つてある隔りが置かれた。橋の中程で彼ははたと立止り、長い間流るる水を見入つた。或は右を、或は左を。――兵士たちは驚いて、間隔を保つために彼の前後に立止つた。と、彼は恰も天に向つて劍を打振ふものゝやうに、帶劍を持つた腕を高く差上げた。併し腕を下ろす際にだらりと刀の柄を滑らした。劍は大河の底に沈んだ。兩岸から裸の童子が水中に飛び込んだ。劍が過つて滑り落ちたものと思ひ、それを再び

引き上げようとして。併しヴィラータはそれを嚴しく止めた。そして顔色も動かさず、暗い額をしたまゝ、奇異のおもひをしてゐる部下の間に立つて歩みを進めた。彼等が刻々黄色い街道を故郷へ向つて急いでゐる間、一言も最早彼の唇を曲げなかつた。

彼等がビルヴァーガアの碧玉の門と鋸齒形の塔にはまだ程遠い頃、遙か彼方の空に一抹の雲が白く立ち上つた。雲は此方へ轉がつて來た。走れる者と騎れる者が埃を乘り越えてやつて來たのである。彼等はこの一隊を認めた時立ち止つた。そして王が彼等を迎へに來たしるしとして、道の上に絨毯を擴げた。王の足裏は生れた時からその淨化せる身體を焔が包む死に到るまで、此世の塵に觸れしめてはならないのである。すでにして彼方から侍童に圍まれ、齡を積める象に乘つて王が近づいて來た。鞭に從つて象は膝をかゞめ、王は擴げられた絨毯の上に下りた。ヴィラータは主君の前に平伏しようとしたが、王は彼に歩み寄つて、兩腕で彼を抱擁した。臣下をかくも敬ふことは當時まだ聞かれたこともなく、書物にも記されてゐないところであつた。ヴィラータは蒼鷺を運ばせた。蒼鷺が白い羽根を揮つと、歡聲がどよめき渡つた。馬は跪いて後足で立ち、象使は鞭で象をしづめねばならなかつた。王は勝利のあかしを見ると、更にまたヴィラータを抱いた。それから侍臣に目くばせをした。侍臣はラジュピュタの英祖の劍を持つて來た。それは七百年を七倍せる年月、王の寶庫に藏められてゐたもので、柄は寶石で白く、刀身には金文字で勝利の秘語が書かれてゐた。その先祖の文字は賢者や大寺院の僧侶さへも最早知ることが出來ないものであつた。王はこの劍の中の劍を感謝の贈物として、またヴィラータが今日以後戰士の中の上將軍であり、庶民の師帥である眞實の證憑として彼に手渡した。

併しヴィラータは額を大地にすりつけたまま、頭をあげずにいつた。

「王者の中の最も慈深き王者から一つの恩惠を、王者の中の最も寛容なる王者から一つの願ひを乞ひたいと思ひます。」

王は彼を見下していつた。

「おんみが余の方に眼を開かないうちに、それはかなへられてある。おんみが余の國土の半ばを望むとも、おんみが唇を動かしさへすれば、それはもうおんみのものである。」

その時ヴィラータはいつた。

「それならば、わが君、どうかこの劍は寶庫にお藏め下さいますやうお願ひいたします。その故は私は最早劍を執るまいと堅く心に誓ひましたからでございます。私は兄を、私と共に同じ胎内から生れ、同じ母の手の上で戯れた兄を、今日手にかけました以來。」

驚いて彼を王は眺めた。それから彼はいつた。

「それでは劍を持たないで、余の戰士たちの上將軍になつてくれ。わが國土を凡ての敵に對して安穏に保つために。優勢の敵に對しておんみほど巧に軍を率ひた勇將は嘗て一人もなかつた。權力の證として余が帶を取るがいゝ。またおんみを凡ての者が余の戰士の中の最高の者と認めるやうに、余の、この馬を取るがいゝ。」

併しヴィラータはもう一度額を大地にかゞめて答へた。

「目に見えぬものが私にある告げを送つて來たのです。私の心はそれを悟りました。おもへば私が兄を殺しましたのは、およそ人を殺すものはその兄弟を殺すものなり、との意を今明に思ひ知るためであつたのです。私は戰爭の指揮者にはなれません。劍の中には暴力があり、暴力は正義に背きますから。殺害の罪にかゝはりを持つ者は、その人自身既に死せる者です。併し私は恐しいことを自ら始めたくはありません。自分の悟得した證に反して不正をなすよりは、私はむしろ乞食の食を撰みます。永遠の輪廻の中にあつては、この生は短かいものであります。せめて私に分たれた生涯だけは正しいものとして永らへさせて戴きたいと思ひます。」

王の顔は暫く暗くなつた。以前の騒々しさに引かへ、彼の周圍は驚きのため靜まり返つた。兵役の義務なき自由の民が

敵を防いだ例と、部落の長が王の贈物を受けなかつた例とは、父祖の代にも、上祖の代にも嘗て聞いたことのない話であつたから。けれどもやがて王は、ヴィラータが獲得した勝利のあかしなる神聖の蒼鷺を見上げた。すると彼の額は再び明るくなつた。王はいつた。

「ヴィラータよ。余はおんみが敵に對して勇敢であり、わが國のあらゆる臣下の内にあつて正しい一人であることを昔から認めてゐた。余はおんみを戰爭に欠くことは忍ばねばならぬとしても、おんみが余に仕へなくなることは望まない。おんみは正義の人として罪を認め、罪を量るが故に、當然余が裁き人の長であらねばならぬ。そして余が宮殿の階の上で裁斷を下すべきである。余が城壁の中にあつては眞理が保たれ、國内では正義が守られるために。」

ヴィラータは王の前に伏し、感謝のしるしとしてその膝を執つた。王は彼に自分と列んで象に乘るやうに命じた。かくて彼等は六十の塔のある町へはいつた。町の歡聲は波高き大海のやうに彼等に向つて押し寄せた。

宮殿の蔭、薔薇色の階の高所から、今やヴィラータは日の出づるより日の沈むまで裁斷を下してゐた。彼の言葉は、重さを量る前に長く顫へる秤に似てゐた。彼の眼差は罪人の心の中迄明に突き入つた。彼の問ひは地下の闇の中に於ける貛のやうに、犯罪の奥底まで撓まず突き進んで行つた。彼の審理は嚴かであつたが、併し彼は即日判決を下さなかつた。訊問と宣告との間には常に夜の冷靜な時をおいた。太陽の昇るまでの長い時間、家人は彼が正か不正かを考へながら、家の屋根を小止みなく歩いてゐるのを聞いた。判決を下す前に、彼は自分の宣告が感情の熱に亂されないやうに、兩手と額とを水の中に浸した。判決を下した後で、彼はいつも犯人に訊ねた。自分の言葉に過誤があるかどうかと。併しそれに抗辯するものは殆どなかつた。彼等は默つて彼の坐の閾に口づけ、頭を垂れたまゝ、神の口づから受けるやうに、その所罰に

服した。

ヴィラータの口は如何なる重罪人に對しても死刑をいひ渡さなかつた。そしてそれを勸める者を斥けた。彼は血を厭つたからである。ラジュピュタの遠い祖先の丸井戸は、以前その緣に刑吏が罪人の頭を撥ねるために屈ませたので、そこの石は流れた血で黒くなつてゐたが、それも今はもう年と共に雨がまた白く洗ひ落した。けれども國内には最早不祥なことは起らなかつた。彼は罪人を岩の獄舍に閉ち込めたり、或は山に放つて、庭園の塀に用ふる石を切出させ、又は象と共に輪を廻はす川邊の米搗場に送つた。併し彼は人命を重じた。彼の判決には一の誤謬もなく、彼の訊問には遺漏がなく、彼の言葉には怒氣がなかつたから、人々はことごとく彼を敬つた。遙々田舍から百姓共は水牛の車に乘つて、彼の裁斷を乞ふための訴訟を持ち込んで來た。僧侶は彼の話を傾聽し、王は彼の忠言に從つた。彼の名聲は、若竹が一夜の中に直々と晴やかに延び上るやうに忽ちにして高まつた。人々は彼を劍の稻妻と呼んだ以前の名前を忘れて、ラジュピュタの國の端に至るまで、彼を正義の泉と呼んだ。

さてヴィラータが前庭の階から宣告を下しはじめてから六年目のことであるが、ある時訴へ人が、カザール族の若者を一人引き連れて來た。その蠻人は岩の上に住み、異なる神々に仕へるものであつた。彼の兩足は、何日もの旅を驅り立てられて來たので傷ついてゐた。また彼の逞ましい腕は四重に縛められてゐるために、暗い眉の下で腹立たしげに動いてゐる眼が、如何に傲然と威嚇して見ても、もう誰にも危害を加へることは出來なかつた。訴へ人は若者を階に据ゑ、縛められた彼を強ひて裁き人の前に跪ますかせた。それから自分たちも平伏し、訴へのしるしとして兩手を擧げた。

ヴィラータは驚きながら見知らぬ人々を見た。「兄弟よ。遠くからやつて來たお前たちは誰であるか。縛められて私の前に連れて來られた、この者は誰であるか。」

彼等の中の年長者は平伏していつた。

「私共は東の方の國に平和に住んでゐる牧人でございます。ところがこの者は惡い種族の中の最も惡い奴めでございまして、兩手の指よりももつと多くの人間を殺した猛獸のやうな奴でございます。このものめ等の習はしは不信心でございまして、犬は食ふ、牛は殺すといふ風でございますから、私の村のある者は娘をこれにやることを拒みました。そして谷間の商人に嫁せました。するとこの者は怒つて强盗となり、私どもの家畜の群を荒らし、また夜中娘の父親とその三人の息子を打殺しました。そればかりか誰かがその家の家畜を山の境に連れて行くと、連れて行つた者は必ずこれに殺されました。かうして村の者は十一人も生命を取られましたので、私どもは結束しまして、この惡者を獸のやうに狩り立て、荒ばれ者から土地を救つて裁きたいと思ひまして、判官の中でも一番正しい方のところに連れて參つたのでございます。」

ヴィラータは縛められた者の方に顏を向けた。

「この者たちのいふことは眞實であるか。」

「お前は誰だ。國王か。」

「私はヴィラータといふ、王の下僕である。そして罪に對して償ひをいたさせ、誤から眞實を分つための法の下僕である。」

縛められたものは長い間默つてゐた。それから鋭い目附をした。

「お前の知慧は人間の言葉を汲取るだけに過ぎないのに、遠くの方から何れが正しく、何れが誤つてゐるかを、どうして知ることが出來るのか。」

「あの者たちの言葉に對して、お前は抗辯を戰はせるがいゝ。私はそれによつて眞相を捕へよう。」

蔑むやうに縛められた者は眉をあげた。

「己はあいつ等と爭はない。怒に燃え立つた時、自分の手のやつたことは、己自身にも分らないのに、どうしてお前には

己のやつたことが分るのか。金のために女を賣つたあの男に己は正當なことをしたのだ。その子供や下僕たちに正當なことをしたのだ。いくらでも己を訴へるがいゝ。己はあいつ等を輕蔑する。お前の判決を輕蔑する。」

　懶惰な罪人が正しい裁き人を侮蔑するのを聞くと、他の者たちは嵐のやうな怒を覺えた。裁きの庭の下僕は既に刺のある棍棒を振りあげて打たうとした。けれどもヴィラータは目くばせして彼等の怒を抑へさせた。そしてもう一度訊問に訊問を重ねた。訴へ人が答へると、いつも彼は更に縛められた者に問ひ返した。併しその男は意地の惡い笑ひを浮べながら脣を食ひしばつた。が、たゞ一度かういつた。

「お前は他人の言葉からどうして眞實を知ることが出來るのか。」

　ヴィラータの訊問が終つた時、太陽は嶮しく彼等の頭上にかゝり、時は正しく正午であつた。彼は立上つて、いつもの習はしの如く家に歸り、明日改めて判決を言渡さうとした。併し訴へ人は兩手をあげた。「判官樣。」彼等はいつた。「私どもはあなた樣の前に參りますまでに七日も旅をいたしました。歸りますにも亦七日かゝります。私どもはどうも明日まで待ちかねます。家畜は飮むものをやらないと渇えます。畑には鋤を入れないわけには參りません。判官樣、お願ひでございます。判決をお下し下さい。」

　そこでヴィラータは再び階の上に坐つて考へた。彼の顔は頭上に重荷を載せてゐる人のやうに緊張した。何となれば慈悲も乞はず、辯疏もしない人間に判決を下したことは、彼には嘗て例のないことであつたから。彼は長い間沈思した。日影は時と共に延びて行つた。それから彼は泉に歩み寄り、彼の言葉が感情の熱に侵されないやうに、冷たい水で顔と兩手とを洗つた。そしていつた。「私の下す判決が正しくあるやうに。この者は死罪を犯した。十一人の生ける人々を溫かい肉體から異る世界に追ひやつた。人間の生命は一年間母の胎内に閉ぢ籠つて成熟するのであるから、この者は彼が殺した銘々の人々に對してそれ〴〵一年間大地の闇の中に閉ぢ籠められねばならない。またこの者は十一度人間の身體から

血を迸らせたのであるから、犠牲の數だけ償ふやうに、年に十一度、血が迸るまで笞打たれねばならない。併しその生命は罰してはならない。何となれば生命は神のものであつて、人間は神のものに觸れてはならないから。ひたすら大なる應報の意志に從つて下した、この判決が正しくあるやうに。」

かくて再びヴィラータは階の上に坐つた。訴へ人は提敬の證として階段に口づけした。併し縛められた者は、自分に問ひかけようとする判官の眼差を黙然と凝視した。その時ヴィラータはいつた。

「お前が私の温情を促すやうに、また訴へ人に對じて己を辯疏するやうに、私はお前に呼びかけた。併しお前の唇はついに開かなかつた。私の判決に誤りがあれば、永遠の神の前に私を訴へずに、お前の沈默を訴へるがいゝ。私はお前に寛容であらうとしたのだ。」

縛められた者は急に立上つた。「己はお前の温情なぞは望まない。お前が示さうといふ温情は、お前が一息のうちに己から取つてしまへる生命に比れば、そも／＼何であるか。」

「私はお前の生命を取りはしない。」

「お前は己の生命を取るのだ。しかも蠻人と呼ばれる己たちの種族の頭目がやるよりも、遙に殘酷な仕打で己の生命を取るのだ。何故己を一おもひに殺さないのだ。己は人を殺したが、相手を人間らしく殺してゐる。ところがお前は己の身體を腐肉のやうに大地の暗闇の中に埋めるのだ。あゝ、お前の心臓が血に怯え、お前の内臓に力がないばかりに、己は年と共に腐つて行かなければならないのだ。お前の掟は得手勝手だ。お前の判決は拷問だ。己は人を殺したのだから、己を殺せ。」

「私はお前の刑罰を正しく量つたのだ……」

「正しく量つた？併し裁き人たるお前が量る度盛は何處にあるのか。お前は笞の痛さを知るために、誰かに笞たれた覺えがあるか。お前は遊戯の指でどう年數を數へるのか。明るみの時間と、土中の闇に埋れてる時間とは同じものだとでも思

つてゐるのか。お前は己の生涯からどれだけの豫を豫ふか、それが分る程牢舎の實驗を持つてゐるのか。お前は何にも分つてゐない。お前は決して正しい人間ではない。咎を加へる者ではなく、咎を受ける者のみが咎の痛さを知り、苦しんだもののみが、苦しみを量ることが出來るのだぞ。お前の高慢が罪人を烏滸がましくも罰するのだ。しかもお前自身こそあらゆる者の中で一番罪深い者なのだ。何故といふに己は腹立まぎれに、つい情熱に驅られて生命(いのち)を取つたのだが、お前は冷靜な態度で己の生命(いのち)を取り、お前の手で測つたことも、重味を試したこともない度盛で己を測るのではないか。裁く者よ、お前は滑り落ちないやうに正義の階から立去れ。得手勝手な物差で測つたり、分りもしないくせに法を辨へてゐると自負する者に禍あれ。もの知らずの裁き人よ、階から立去れ。そしてお前の言葉の死を以て生きた人間を裁くな。」

蒼白になつて怒號してゐる男の口から憎惡が迸つた。他の者たちは怒つて、再び彼に飛びかゝつた。併しヴィラータはもう一度彼等を止め、罪人から顏をそむけ、低い聲でいつた。「この閾の上で行はれた判決を私は破ることは出來ない。判決は正義にかなつたものであるやうに。」

それから縛められたまゝ手向ひする罪人を人々が押へつけてゐる間に、ヴィラータは坐を立つた。併しもう一度裁き人は立止つて振返つた。と、そこには引据ゑられた男の眼がぢつと意地惡く彼の方を向いてゐた。恐怖がヴィラータの心の臓まで突入つた。嘗て兄が彼自身の手にかゝつて、叛王の天幕の中に倒れてゐた、あの折の死んだ兄の眼と、その眼は如何に似通つてゐたか……

その晩ヴィラータは一言も人に語らなかつた。見知らぬ男の眼差(まなざし)はさながら燃える矢のやうに彼の魂に突きさゝつた。家人は終夜、朝が棕櫚の木の間に紅く明けるまで、彼が一刻もまどろまないで屋根の上を歩いてゐるのを聞いた。

寺院の神聖な池でヴィラータは朝の浴みを取り、東に向つて祈つた。それから再び家に歸つて、儀式の黄色い衣服に改めた。その端然たる有様に言葉も出でず、たゞ打眺めて居る家人に彼は嚴に一揖しつゝ、ひとり王の宮殿に向つた。宮殿は彼には晝夜を問はず如何なる時刻に於いても開かれてゐた。ヴィラータは王の前に跪き、哀願のしるしとして王の衣の裾に觸れた。

王は明るく彼を見下した。そしていつた。「おんみの額は余が衣に觸れた。おんみが言葉にいひ出づるまでもなく、それは濟されてある。ヴィラータよ。」

ヴィラータは跪いたまゝでゐた。

「わが君は私を裁き人の長になさいました。七年の間私はわが君の名において裁きました。私の裁斷が正しかつたか否か、私は知りません。眞理への道を歩む爲めに、一月の靜寂を私にお惠み下さい。またその道はわが君にも、はた他の何人にも明さぬことをお許し下さい。私は正しく行ひ、罪なく生きたいと存じます。」

王は驚いた。

「わが國はこの月から次の月に至る間正義に乏しくなるであらう。併し余はおんみの道を尋ねない。その道がおんみを眞理に導くやうに。」

ヴィラータは感謝のしるしに闕に接吻した。そして今一度頭を垂れて去つた。

明るいところから彼の家にはいつて、妻子を呼び集めた。「月が一周りする間お前たちは私を見ないであらう。私から別れをとるがいゝ。併し何も問ふてはならない。」

おそる〳〵妻は見、子息たちは慶しく見上げた。銘々の者に彼は身體を曲げ、その額の間に口づけした。「さあ、お前たちの部屋に行つて、閉ぢ籠るがいゝ。私が戸口から出て行く時、どの方向に行くか誰も私のうしろを見送つてはならない。そして月が改るまでは、かまへて私のことを尋ねてはならない。」

そこで彼等は引き下つた。誰も何事もいはずに。

ヴィラータは朝服を脱いで黒い衣服をつけ、千體を示顯する神のみ像の前で祈り、棕櫚の葉に多くの文字を刻みつけて、それを手紙に巻いた。それから夕闇と共に彼は默せる家を出て町はづれの岩窟に行つた。そこは地の底の鑛坑と牢舍のあるところであつた。彼は牢番の戸を叩いた。やがて眠つてゐた男は莚から起上り、自分を呼んでゐるのは誰だと叫んだ。

「私は裁き人の長、ヴィラータである。昨日こゝに連れて來られた男に逢ひに來たのである。」

「判官樣、あの男は奥の方に入れられてをります。暗闇の一番深いところに。御案内いたしませうか。判官樣。」

「場所は分つてゐる。私に鍵を渡して、お前は横になるがいゝ。朝になればお前の戸の前に鍵が置いてあるだらう。それから、私に今日逢つたことは誰にもいつてはならない。」

牢番は跪いて、鍵と明りとを持つて來た。ヴィラータは眼で指圖をした。牢番は無言のまゝ退き、莚の上に身體を投げた。そこでヴィラータは洞窟を鎖してゐる銅の門を開き、牢獄の奥へ底深く降りて行つた。既に百年以前からラジュピュタの王はこの窟の中に囚人を幽閉してゐたのであつた。幽閉せられたものは皆日々山を深く掘下げて行つた。そして自分の後から追込められて來る新な奴隷のために、冷い窟の中に新しい場所を造つて行つたのであつた。

戸を元に戻す前に、ヴィラータは白い星の躍る蒼穹が四角に開いてゐる方に向つて、なほ一瞥を投げた。それからぴたりと門を閉じた。と、闇が濕つぽく彼に向つてふくれ上つて來た。その闇の上に彼の明りが餌をあさる獸のやうに、落着かぬ光をゆらめかせた。まだ木々の梢を渡る風の騒いさわめきや、猿の甲高い叫びは聞えてゐたが、第一の底では、それ

もう遙か遠くの低い騷音に過ぎなくなつた。第二の底ではもう海面の下のやうな靜けさが闃として冷たく橫たはつてゐた。石から吹いて來るものは濕氣だけで、この世の土の香はもう漂つてはゐなかつた。下に降れば下るほど、彼の足音は靜寂の固まりの中にいよ〳〵冴えて響いた。

最も高い棕櫚の木が天に向つて延び上つてゐる高さよりも、遙に深い地の底の第五層に、かの囚人の檻房があつた。ヴィラータは步み入つた。そして黑い塊りに對して明りを掲げた。その塊りは光が彼の上を撫でるまで、殆ど身動きもしなかつた。鎖が鏗然と鳴つた。

ヴィラータは彼の上に身を屈めた。「私が分るか。」

「分る。お前は己の運命の主長に任ぜられた奴だ。そして己の運命を足下に踏みにじつた奴だ。」

「私は主長ではない。私は王と正義の下僕だ。自分は正義に仕へるためにこゝに來たのである。」

暗い面をして囚人は眼を上げた。そして裁き人の顏を見入つた。「お前は己をどうしようといふのだ。」

ヴィラータは長い沈默の後いつた。

「私の言葉はお前を苦しめたが、お前の言葉も亦私を惱ました。私の判決が正しかつたか否か私は知らない。併し自分の知らない尺度を以つて測つてはならないといふお前の言葉には眞理があつた。自分は無智であつた。自分は知るやうになりたいと思ふ。數百の人々を私は闇の中に送つた。多くの人に多くのことを加へた。しかも自分のしてゐることを知らなかつた。今私は正しくあるために、また罪を負はずにあの世に到りたいと思ふ故に、それを經驗したいと思ふ。習得したいと思ふ。」

捕はれ人は依然として凝視してゐた。低く鎖が鳴つた。

「私はお前に下した宣告がどのやうなものであつたか、それを知りたいのだ。食ひ入る笞をわれとわが身に味はひ、縛め

られた時間を自分の心の中で味得したいのだ。贖罪として自分がどれだけのものを數へたかを知るために、一月の間お前の身代りになりたいと思ふ。そしてその重味と苦惱とを知つた上で、國からの判決を改めよう。その間お前は自由に出て行くがいゝ。歸つて來ることを誓ふなら、お前を明るみに導く鍵を渡さう。一ケ月の間お前の生命を解放してやらう。――さうしたらこの奥底の闇によつて私の智に光が差すだらう。」

石のやうに捕はれ人は立つてゐた。鎖はもう鳴らなかつた。

「何人をも容赦せぬ、假借なき復讐の女神にかけて、一ケ月の間は凡ての人に對して沈默を守ることを誓へ。さすれば鍵と私のこの衣類とをお前にやらう。鍵を牢番の部屋の前に置いて、自由に出て行くがいゝ。併しお前は千様の姿を示現する神のみ前で誓はねばならぬ。月の一周りの後、この書きものを國王の許に持參することを。私はそれによつて解放せられ、再び正義に從つて裁くことが出來るために。さうすることを千様の姿を示現する神にかけてお前は誓ふか。

「誓ふ。」――土の底からのやうに、顫へる者の唇からそれが迸つた。

ヴィラータは鎖を解いて、自分の着物を肩から外した。

「さあ、この着物を取れ。お前のを私に渡せ。そして番人に認められないやうに顏を包め、それからこの鋏を取つて、私の髮と髭とを刈取つてくれ。私も亦人に知られないやうに。」

囚人は鋏を取つたが、顫へて手が下つた。併し相手の眼が嚴然として彼に迫つた。彼は命ぜられた通りにした。長い間彼は默つてゐた。それから突然がばと身を投げ伏した。叫ぶが如く彼の口から言葉が飛び出た

「判官様、お前様が己のために苦しんでをられるのを、己は平然としてはゐられない。己は激昂した手で殺し、血を流したのだ。お前様の判決は正しかつたのだ。」

「お前にも私にもそれを測ることは出來ない。併し間もなく私は明悟するだらう。さあ、誓つた通り出て行くがいゝ。そ

して月滿ちた日に王の前に行つてくれ、私が解放さるゝために。その時は私は自分のする行を知り、私の言葉は永久に誤りなくなるだらう。行くがいゝ。」

捕はれ人は跪いて大地に口づけした……重く扉が闇の中に落ちた。もう一度燈火の光が壁に踊つた。その後で夜が時の上に落ちた。

翌朝誰にも氣付かれなかつたヴィラータは、町はづれの野原に引出されて、そこで笞打たれた。烈しい笞がはじめて彼の裸(あらは)の脊に飛んだ時、ヴィラータは聲を張上げた。次で固く齒を食ひしばつた。第七十の笞を受けた際に、彼の意識は暗くなつた。人々は彼を死んだ獸のやうに運び去つた。

檻房の中に倒れたまゝ彼は再び目覺めた。燃え上る烈火の上に仰向けに横たはつてゐる感じだつた。けれども彼の額の周圍は冷たかつた。彼は野生の草の香を呼吸と共に吸込んだ。彼は自分の髪の上に手がのつてゐて、その手から柔かいものが點々滴り落つるのを感じた。極く彼は瞼の隙間を開いて見た。牢番の女房が彼の傍に坐つて、彼を看護(みと)りつゝその額を洗つてゐた。やがて彼は彼女の方に大きく眼を見開くや、同情の瞳が彼女の眼差から彼に向つて輝いた。自分の肉體の燃えるやうな苦痛を通して、彼は深切の悲みの中にあらゆる惱みの意義を悟つた。仄に彼は彼女に微笑みかけた。もう彼は自分の苦惱を感じなかつた。

二日目には彼はもう起上つて、冷たい四隅を兩手で索ることが出來た。踏み出す一足毎に一つの世界が新しく開顯するのを感じた。三日目には傷が癒着して意識と力とが蘇つた。彼は今靜かに坐つてゐた。そして壁から滴(したた)り落つる滴によつて、大いなる沈默を數多の小さい時に分つ滴によつて、僅に時間を感じてゐた。その小さい時が靜かに積り積つて夜とな

り靈となつて行くのである。恰も數千の日を經て一つの生命が壯年となり、老年となるやうに。誰も彼に話しかけるものはなかつた。暗黑が彼の血の中に欝怱として凝つてゐた。併し內部からは樣々な思ひ出が靜寂な泉となつて湧き上つた。それは次第に流れ、次第に合して、彼の全生涯を映せる靜かな觀照の池となつた。彼が離れ〳〵に體驗したことは、今や流れて一となり、ゆらめく心の中に寫つた、かの淸淨なる像は、波のうねりもなき淸澄明徹の姿を取るやうになつた。嘗て彼の心がこゝに映じ出されたる世界の、搖ぎなき觀照の心ほどに、淸々しかつたことは一度もなかつた

日一日とヴィラータの眼は明くなつて行つた。闇の中から物が浮上つて、彼の感覺に形を示した。そして心の中でも亦凡てが落着いた觀照の內により明くなつて行つた。觀察の柔かい快感は現象の現象なる思ひ出の上に淡々として廣がりつつ、囚人が地の底に散らばつてゐる砂利を弄ぶやうに、變轉の諸相を弄んだ。我を沒し、無爲に入り、暗中にある自我の姿を忘れながら、彼は千體を示顯する神の力をより强く感得した。更に彼は如何なるものにも執着せず、意志の隸屬から明に脫し、生けるものゝ中にあつては死し、死の中にあつては生きつゝ、己自らがもろ〳〵の姿を貫いてさまよひ行く樣をも歷々と感じた。……かくて須臾のあらゆる不安は、肉體よりの解放の柔かき快感の中に溶けて行つた。それは恰も、彼が刻々闇の中に深く沈み込んで行くやうな氣持だつた。或は石となり、或は新しき萠芽を孕みつゝ、大地の黑い根となるべく。恐くは土地を鈍く掘返す蟲けらとなるべく。或は突き出る幹を以て伸び上らんとする草木となるべく、或はただ存在の幸福なる無意識の中に冷たく休らへる岩となるべく。

十八夜の間ヴィラータは我意を斷ち、生への剌戟を離れて、沒我的な觀照の神々しき秘密を味つた。自分が慣ひをなしたことは、彼には喜ばしい心地がした。旣にして彼は心の中に罪業と宿命とは智の永遠なる覺醒の上には、たゞ幻に過ぎないことを感じた。併し十九日目の夜、彼は眠りからがばと跳ね起きた。俗念が彼を襲つたのであつた。それは灼熱せる釘の如くに、彼の大腦の中に突き刺さつた。恐怖が激しく彼の肉體をゆすぶり、彼の指は木の葉のやうに顫へた。その恐

怖の念とは、四人が皆に背いて、自分のことを忘却してしまひやしないか。肉が骨から落ち、舌が硬ばつて沈默するまで、幾千日もこのまゝこゝに置きざりにされはしないかといふ不安だつた。今一度生きようとする意志が彼の體內に豹の如く躍り上つて、着物を引裂いた。時が彼の魂の中に流込んだ。人間の迷である不安と願望が流込んだ。かくて彼は永劫の生命なる千様の姿を示顯する神を最早考へることが出來なかつた。たゞ己自らのことのみしか考へなかつた。彼の眼は餓ゑたる如く光を慕ひ、固い岩を引掻いてる足は廣い場所を望み、飛ぶこと、走ることを欲して止まなかつた。妻や子息や、家や財寶や、浮世の熱い誘惑や、それ等五官によつて味はれ、血族の生々した溫味によつて感ぜられるものを、彼はひたすら考へないではゐられなかつた。

この事がおもひ出された日から、今まで黑い鏡の池のやうに彼の足許に音もなく横はつてゐた時といふ妖魔が、彼の思考の中に頭をもたげて來た。奔流の如く、時は滔々と突進んで來た。併しその流はいつも彼に逆つてゐた。彼は時の流れと共に流れ、漂ふ角材の如く、定まつた出獄の時刻まで波のまに〳〵流れて行かうと思つてゐた。けれども時は彼に逆らつて流れた。絕望した泳ぎ手のやうに、彼は喘ぎながら時々刻々時に對して苦鬪を續けずにはゐられなかつた。と、彼には壁の點滴が落ちることを躊躇してゐるのではあるまいかと思はれるやうな氣持がした。それ程滴と滴との間の時の隔りが廣くなつた。彼はもうこれ以上床の上にぢつとしてゐられなくなつた。あの男が自分のことを打忘れ、自分はこの沈默の穴藏の中で必定朽ち果てねばならないのだといふ考へが、彼を壁の間で獨樂のやうに追ひ立てた。靜寂が彼を息詰らせた。彼は罵りと歎きの言葉を以て石に叫びかけた。彼は自らを呪ひ、神々を呪ひ、王を呪つた。血の滴る爪を以て嘲る岩を掻き立て、頭蓋を戸口に突き當てた。ついに彼は氣を失つて床に倒れたが、また、目覺めて飛び上つた。そして狂へる鼠のやうに、四角い仕切の中を蹣跚として斷廻つた。

牢居の第十八夜から新たな月に至るまでの間、ヴィラータは恐怖の世界を體驗した。不安が彼の肉體を滿してゐたの

で、飲む物も、噛む物も彼の咽喉には通らなかつた。もう何の考も彼の頭にはなかつた。無限の時を一日から翌日へと分つために滴れ落ちてゐる點滴を、たゞ彼の唇が數へるだけであつた。そして彼はそれを知らなかつたけれども、彼の頭は皷動する顳顬のあたりが既に灰色になつてゐた。

けれども三十日目に戸口の手前が、騒がしくなつて、また靜かになつた。やがて足音が響き、戸が開いて、光が侵入した。次いで闇に埋れた者の前に王が立つた。王は彼を懇に抱擁しながらいつた。「余は父祖の文の中にも嘗て聞いたこともない程偉大なるおんみの行狀を知つた。おんみの行績はわれ〳〵凡下の者の上に星の如く高く輝くであらう。さ、こゝを立ち出でるがいゝ。神の火がおんみを照し、庶民が喜ばしき眼を以て正しき人を迎へ得らるるやうに。」

ヴィラータは眼の前に手をかざした。光が光に慣れない者の眼を餘りに鋭く突刺し、體内にあつては血を紫に波立たせたから。彼は爛醉者のやうに蹌踉として立ち上つた。併し下僕に支へて貰はなければならなかつた。門の前に歩み出る前に彼はいつた。

「王よ、わが君は私を正しき人とお呼びになりました。併し私は今、裁く者こそ不法の者であり、罪深き者であることを知りました。まだこの地の底には私の言葉のために苦しんでゐる人々があります。私は今はじめて彼等の苦痛を知りました。同時に如何なることも如何なるものを以てしても償はせてはならないことを知りました。王よ。どうか彼等を御放釋下さい。それから私の歩む前にゐる庶人を追ひのけて下さいますやうに。私は深く自分の名聲を恥ぢてゐるのです。」

王は目くばせをした。家臣は庶民を追拂つた。彼等のまはりは再び靜かになつた。それから王はいつた。

「宮殿の階の一番上におんみは坐つて宣告を下した。しかも今おんみは苦惱を窮めしことによつて、如何なる裁き人よりも一層聡明の人となつた。おんみは余が傍に坐つてくれねばならぬ。余はおんみの言葉に聞き、おんみの正義に依つて、自分も智慧ある者となり得るやうに。」

ヴィラータは併し嘆願のしるしに、王の膝をとつた。

「どうか私の職をお免じ下さい。何人も何人の裁き人になることは出來ないといふ意を知りましてからは、私はもう判決を下すことが出來なくなりました。罰するのは神のことであつて、人間のなすことではありません。運命に手を觸るゝ者は必ず罪に陷りますから。私は自分の生涯を罪なくして過したいと存じます。」

「それでは」と王は答へた。「國内の裁き人ではなく、余が行ひの助言者になつてくれ。そして余のために戰爭と和睦とを、税と貢とを正しく教示し、余が裁斷に過誤のないやうに忠言を惜まないでくれ。」

もう一度ヴィラータは王の膝を執つた。

「王よ。權力を私にお與へ下さいませんやうに。權力は實行をそゝります。王よ、果して如何なる行爲が正しく、また運命に逆らはないものでせうか。私が戰爭を勸めると、私は死の種を蒔く事になります。私の述べたことが實行に移され、しかもその一つ〳〵の實行は私の知らない意義を生んで行きます。正しくあり得るためには、人はたゞ如何なる運命にも、如何なる事業にも手を染めないより外はありません。孤獨に生きるより外はありません。人間の言葉を聞かずに、たゞ孤獨である時程、悟りの道に近づき、罪業から離るゝ事はありません。どうか私が凡ての罪業から清淨に保てますやうに、神々のみ前の犧牲の務めの外はあらゆる務めを免じて、自分の家で穩かに暮させて戴きたうございます。」

王はいつた。

「余はおんみを手離したくない。併し誰か賢者に逆らひ、正しい人の意志を害ふことが出來よう。おんみの意志通りに生きるがいゝ。余が國境の中に罪なく生き、かつ働いてゐる者がをることはわが國の譽れである。」

彼等は門の前に出た。そこで王はヴィラータを殘して去つた。彼は獨り歩み、太陽の甘い空氣を吸つた。凡ての務めを離れてわが家に歸るのだと思ふと、彼の魂はいつになく輕かつた。彼のうしろに跣足で逃げて行くやうな足音が低く聞え

た。振り返へると、それは彼が刑苦を除いてやつた罪人であつた。彼はヴイラータの足跡の埃に口づけし、恐る〳〵拜跪して姿を消した。ヴイラータは再びはじめてほゝ笑んだ。兄の凝視せる眼を見たあの時以來のことである。彼は喜ばしげに家に歸つた。

彼の家でヴイラータは光明の日を送つた。目が覺めると、それはもう既に感謝の祈禱であつた。彼は闇の代りに明るい空を見ることが出來、神聖な土の色と香とを感じ、朝雲生れる朗な音樂を聞くことが出來たのであつた。日々彼は呼吸の奇蹟と自由な四肢の魅力とを大きな賜物のやうに享受した。自分の身體妻の柔かい肉體、子息等の壯な體軀を天恵と感じ、到るところに千樣の姿を示顯する神の現前を祝福しつゝ認得した。彼は何處に於いても自分の生活を越えて他人の運命に立ち入りしことなく、また一度も目に見えざる神の千體の中の一體をも犯したことがないといふ穩かな誇りによつて、彼の魂は力づけられた。朝から夕べ迄彼は智慧の書に讀み耽り、また種々の三昧、すなはち冥想の沈默、乃至精神の好ましき沈潜に浸り、或は貧者への慈善、生贄を捧ぐる祈禱等にいそしんだ。併し彼の心は快活になつた。彼の言葉は下僕の一番下の卑しい者に對してさへもしとやかになつた。家の者は今までよりも一層彼を愛した。貧しいものに取つては彼は救ひ主であり、不幸な者にとつては慰安者であつた。多くの人々の祈りが彼の枕のまはりに漂つた。彼等は彼を昔のやうに、もう「劍の稻妻」とも「正義の泉」とも呼ばないで、「助言の畑」と呼んだ。その故は隣人が往來から彼の言葉を聞きに來たばかりでなく、彼はもう國の裁き人ではないにもかゝはらず、訴訟の仲裁を乞ふために、遠くから知らない人々が彼の前にやつて來た。そして何の躊躇もなく彼の言葉に從つたからである。ヴイラータは助言は命令に勝り、仲裁は裁判に勝ると思つてゐたから、それを幸なことゝ信じてゐた。彼は如何なる運命をも強ひず、しかも多くの人々の運命に觸れ

つゝ、これを善導するやうになつて以來、彼は自分の生活に罪のないことを感じた。彼は彼の生涯の眞實を晴やかな心を以つて愛した。

かくて三年の年月が過ぎ、更にまた三年の年月が明るい一日のやうに過ぎた。ヴィラータの心はいよ／＼和らいで行つた。それ故爭ひが彼の前に運ばれると、彼の心にはこの世にかくも多くの不和があるといふことがむしろ解き難い位であつた。人々は廣い生活と存在の甘い香りを持つてゐるにもかゝはらず、所有の小さい嫉妬心を以てひしめき合つてゐることが、彼には最早合點が行かなかつた。彼は誰をも妬まず、誰にも妬まれなかつた。平和な島のやうに彼の家はなだらかな生活の中に立つてゐた。情熱の渓流にも、慾望の流れにも亂されずに。

この靜寂の六年目のある宵、ヴィラータはもう寢に就かうとした時、突然鋭い叫びと、濕りを帶びた笞の音とを聞いた。彼は臥床から飛び出した。見ると、彼の子息等が奴隷を跪かして、河馬の笞で血が迸る程脊中を打つてゐるのであつた。堪へ忍ぶ苦痛を抑へかねて、奴隷の眼が彼を凝視した。又もや彼は手にかけた兄の、過ぐる日の眼差を心の中に見た。ヴィラータは駈け出して、子息等の腕を止め、事情を訊ねた。

說明と抗辯とによつて事柄が明かになつた。この奴隷は岩間の泉から水を汲み、木の桶で家に運ぶのがその務めであつたが、彼は眞晝の日盛の頃もう疲れたと稱して、遲れて運び込んだことも一再ではなかつた。そのために繰返し懲しめられたのであるが、昨日は別して嚴しい懲罰を受けたので、ついに逃亡したのであつた。ヴィラータの子息等は彼を馬で追跡し、河の向ふ岸の村で追ひついた。そして綱で馬の鞍にくゝりつけ、半ば引きずり、半ば步かせるやうにして、血みどろの足をした彼を連れ戻つたのであつた。かくて彼自身を戒めるためと、他の奴隷たち（彼等は怯えて膝を顫はせながら引き据ゑられた者を見てゐた）の見せしめのために、更に假借なき懲罰を加へてゐるところであつた。そこへヴィラータが來て拷問を止めさせたのである。

ヴィラータは奴隷を見下ろした。彼の足の裏の砂は血に濡れてゐた。おのゝいてゐる者の眼は屠殺される獸の眼のやうに開いてゐた。ヴィラータはその黒い凝視の背後に、嘗て彼自身の夜の中にあつた恐怖を見た。「離してやれ。」と、彼は子息等にいつた。「その者の過ちは償はれた。」

奴隷はヴィラータの靴の前の埃に口づけした。はじめて子息等は父親の傍から諾々去つた。ヴィラータは自分の部屋に戻つた。彼は自分の行爲に氣がつかずに、額と手とを洗つた。が、その際突如、彼は自身の目覺めた心が久しく打忘れてをつたこと、すなはち、はじめて又もや裁き人となり、運命に向つて判決を下したといふことを悟つて愕然とした。六年以來、はじめて再び眠りが彼から逃げた。

彼は眠れないで闇の中に横つてゐると、あの眼、奴隷の脅かされた眼(それともそれは手にかけた兄の眼であつたか)と子息等の怒れる眼とが彼に迫つて來た。彼は繰返し〱自問した。不法が子息等によつて、下僕の上に加へられやしなかつたかどうかと。血が些細な怠慢のために家の砂を濡らし、笞が僅な遲滯のために生ける肉體に加へられた。この罪は嘗て自分の脊中の上に熱い鞭の如く飛ぶのを感じた、あの笞打よりも遙かに彼を苦しめた。勿論この懲罰は自由な民の上に課せられたのではない。その肉體はまだ母の胎内にある時から、王の掟に從つて既に彼の所有であるところの奴隷に加へられたのである。併しある人間の肉體が、その自由意志を奪はれ、全く他人の意志のまゝとなり、誰がその生命を引き裂かうとも、破壞しようとも、その者に對して罪がないといふ掟は、千様の姿を示顯する神のみ前に正しいとさるべきことであらうか。

ヴィラータは臥床から起き上つて、敎の書の中に記錄を探すために明りをつけた。族籍、身分の秩序以外には、人間と人間との差別は何處にも見當らなかつた。また存在は千々であつても、愛の欲求に於いては何の區別も隔たりもなかつた。渇ける者のやうに、いよ〱烈しく彼は智を飲み込んだ。何となれば嘗て彼の眼が瞬間に當面して、か程までに緊張した

ことはなかつたから。その時焔が明りの木片の端でもう一度高く燃え上つて、やがて消えた。

併し今闇が四壁から倒れて來ると、ヴィラータは不可思議な氣持に襲はれた。見えぬ眼で索つてゐるものは、最早彼の部屋ではなくして、實に過ぎし日の獄舍であつた。その中にあつて當時彼が慄然として體得したものは何であつたか。自由は人間最深の欣求である。一生涯は勿論、一年間と雖も、何人も何人を閉ぢ込めてはならないといふことではなかつたか。しかるに彼は奴隷の生活の獨自の歩みを許さなかつたほど、この奴隷をば彼自身の意志の眼に見えぬ圏内に閉ぢ込め、その場その場の偶然の決意に繋ぎ止めてゐたのだつた。彼は翻然としてそれを悟つた。と、朗らかなものが默々として坐つてゐる彼の心の中に來た。岩が胸を擴げ、ついには眼に見えぬ高いところから光が彼の中に差し込んで來るのを感じた。今や彼は彼の中にもなほ罪のあることを意識した。彼が人々を己の意志のまゝに使役し、掟に從つて、それはたゞ人間の果敢ない掟であつて、千様の姿を示顯する神の、かの永遠の掟でないにもかゝはらず、人々を奴隷と呼ぶ限りは。

彼は跪づいて祈つた。「恭しく禮し奉る。千様のみ姿を示顯し給ふ神よ。あなたはあらゆるあなたのみ姿の中より私にみ使を遣はし、み使の力によつて私の罪より私を驅り立て、あなたの意志の見えざる道の上を、あなたの方へいよ〳〵身近く進ましめ給へ。私の生涯を清淨に送り、罪障なく過し得られますやう、永遠の兄弟の永遠に訴ふる眼の中にみ使を認めしめ給へ。兄弟は至るところに於いて私にめぐり逢ひ、私の眼差の中より見、また私は兄弟の苦しみを苦しみつゝあります。」

ヴィラータの顔は再び晴やかになつた。明るい眼をして彼は夜の中に歩み出で、星の白い挨拶を飲んだ。朝風のふくれ上る響を體内に深く吸ひ込みながら、彼は庭を横切つて川に行つた。太陽が東から上つた時、彼は神聖な流に浸つた。そして朝の祈に集つてゐる家族のもとへ歸つた。

彼はそのまとひの中に入り、優しい微笑を以て挨拶した。そして婦人たちを目まぜでそれ〴〵の部屋に下らせ、それから彼は子息等にいつた。

「お前たちも知つてゐる通り、この年頃この世で正しい者であり、罪なく生きたいといふ念慮のみが私の魂を動かしてゐた。然るに昨日わが家の土くれに、血が、それも生きた人間の血が流れたといふ不祥事が起つた。私はこの血から解放されたい。私の屋根の蔭の中で起つた過ちに對して償ひをしたいと思ふ。些細なことのために餘りに嚴しく罰せられた奴隷には只今から自由を與へ、彼の好むところに行かせることにしようと思ふ。異日最後の裁き人の前に立つとも、彼がお前たちや私を訴へることのないやうに。」

無言のまゝ子息等は立つてゐた。併しヴィラータはこの沈默の中にある敵意を認めた。

「私の言葉に不服で默つてをるやうに私には思はれる。私はお前たちの言葉を聞かないで、お前たちに逆らつて事を運ばうとは思はない。」

「過ちを犯した罪人に、あなたは自由を與へようとなさいます。懲罰の代りに報酬を。」と、長男は口を切つた。「家には多數の下僕がゐます。あれ一人ではありません。あらゆる行はそれ自らを越えて外にまで影響を持つてゐます。鎖でつながつてゐます。若しあの奴隷を解放したら、他のあなたの奴隷たちが暇を取りたいといつた時、あなたはどうしてそれを引止めることが出來ますか。」

「あの者たちが私の生活から暇を取りたいといふたら、それはさうしてやらねばならない。生きてゐる人々の運命を私は止めたくない。運命に形を與へようとする者は罪に陷るから。」

「併しあなたは權利の道標を解放するものです。」次男はいひはじめた。「あの奴隷たちはこの土地の木と同じやうに、またその木の實と同じやうに、私たちのものです。彼等はあなたに仕へてゐる限り、あなたに結ばれてをり、あなたも亦あの者たちに結ばれてゐます。幾千年の時を經て成長し來つた一つの列を、あなたは動かさうとするのです。奴隷は自分の生命の主ではなく、自分の主人の下僕です。」

「神から與へられた權利の外には權利はない。そしてその權利とは、神の口の息吹によつて萬人に吹き込まれた生命に外ならない。私は目が眩んで、自分は罪障から免かれてゐるものと自負してゐたが、今お前の言葉によつて、私を善に促してくれた。他人の生命を私は長い年月自分のものにしておいた。正しい人は人間を動物にしてはならない。そのことを、今私は明かに見、明かに知つた。私は皆の者を自由にしてやらう。この世に於いて私は彼等に罪を負ひたくない。」

反抗が子息等の額の上に現はれた。烈しく長男は答へた。

「水が枯れないやうに、誰がそもそも水を注ぐのですか。誰が畑で水牛を牽くのですか。あなたの氣まぐれのために、私たちは下僕にならなければならないのですか。あなた自身こそ生涯手を働かして仕事をしたことはないではありませんか。あなたの生命が他人の奉仕の上に成長して來たのだといふことをおもひ煩つたこともないではありませんか。しかもあなたが横になる莚の中には他人の汗がはいつてをり、あなたの眠りの上には下僕が扇を持つて搖へてゐるのです。然るに突然あなたは彼等を追ひ出して、あなたの血族である私たちに勞苦を強ひようとするのですか。奴隷が笞を受けないやうに、奴隷の代りに私たちが水牛を軛から離し、綱を曳かねばならないのですか、それは彼等にも亦千様の姿を示顯する神の口から息が流れてゐる故なのですか。父上、現狀を動かしてはなりません。何となればこれも亦神のものであります。土は進んで自らを開拓しません。土から穀物が出て來るためにはそれに力が加へられなければなりません。力は星の下の掟です。われ〳〵は力を欠くことは出來ません。」

「併し私は力なしに濟したい。力が正しいことは稀である。私はこの世で不正なことをしないで生きたいのだ。」

「人間であれ、動物であれ、はた我慢強い大地であれ、凡ての所有には力が伴ふものです。あなたが主人である場合には、また支配者でなければなりません。所有する者は人間の運命に縛られてゐるものです。」

「私は併し私を罪に陥れる凡てのものから離れたい。それ故私はお前たちに命令する。家の下僕には自由を與へ、われわれに必要な品は、自身でこれを處理すべきことを。」

怒が子息たちの眼差の中にふくれ上つた。彼等は殆どその不平を抑へることが出來なかつた。やがて長男がいつた。

「あなたは何人の意志をも枉げたくないといはれた。あなたは罪に陥らないために、奴隷に命令することを好まれない。しかも私達にあなたは命令し、私達の生活を脅かしてゐます。私はあなたに訊ねる。何處に神と人間とに對する權利があるのか。」

ヴィラータは長い間默してゐた。彼が眼を上げると、彼は彼等の眼差の中に貪婪の焔を見た。戰慄が彼の魂を襲つた。それから彼は低い聲でいつた。

「お前たちの教へてくれたことは正しい。私はお前たちに逆つて力を用ゐたくない。この家を受取つて、思ひ通りに分けるがいゝ。私はもう所有と罪業とにかゝはりたくない。お前が先刻云つたことは當つてゐる。如何にも支配する者は他人に自由を與へない。就中自分の魂に自由を與へない。罪なく生きようとするものは、家や他人の運命にかゝはりを持つてはならない。他人の勞苦によつて自らを養つてはならない。他人の汗によつて飲み物を得てはならない。女の歡樂や飽滿の安逸に執着してはならない。一人で生きる者のみが神に生き、働く者のみが神を感じ、貧しき者のみが凡て神を持つのだ。私は自分の土地よりも、見えざるものにより近く近づきたい。私は罪なく暮したいのだ。お前たちはこの家を受取り、平和に分けるがよい。」

ヴィラータは身を翻して外へ出た。子息等は啞然として立つてゐた。滿たされた所有慾が甘く彼等の體内に燃えた。併し彼等は心の中では恥ぢてゐた。

ヴィラータは自分の部屋の中に閉ぢ籠り、呼ぶ聲にも、促さるゝ言葉にも耳を藉さなかつた。影が夜の中に落ちた時、はじめて彼は行旅の支度をした。杖と施物を受ける鉢と、働くための斧、食糧として一握の果實、祈禱のための智慧の文字を記した棕櫚の葉とを持ち、衣服を膝の上まで高くからげた。そして妻や子供たちや共有の家財にもう一度別れを惜むことをせず默然として家を去つた。夜を徹して彼は歩みつゞけ、ついに曙て彼が始覺の悲痛なる刹那、劍を沈めた大河のほとりに出た。彼は流れを横ぎつて、それから對岸を溯つた。そこは全然拓かれざる荒蕪の地で、土はまだ鋤を知らなかつた。

東天が色づく頃、彼はある場所に達した。そこは雷電が古い檬果樹に落ちて火を發し、密林の中に少許の空地を形造つてゐるところだつた。川はゆるく弓なりにその傍を流れてゐた。そして鳥の群は恐るゝ氣色もなく、水を飲みに下の水面に集つてゐた。こゝは開けた急流になつてゐて明るく、背後は木々によつて蔭つてゐた。雷電に打たれて裂けた幹や、折れた灌木がなほその邊りに倒れてゐた。ヴィラータは森の中の幽邃にして、しかも光の透き入る、その四角い場所を吟味した。そしてそこに小屋を立て、人間を離れ、罪業から遠ざかつて、彼の生活をひたすら瞑想の中に送らうと決心した。

彼の手が仕事に慣れてゐないために、彼は五日間を小屋作りに費した。それからも彼の毎日の仕事は容易ならぬ勞苦であつた。何となれば彼は己を養ふために自ら果實を探さねばならなかつた。切り拂つても／＼また駸々と伸び上つて來る雜木を彼は小屋から防がねばならなかつた。饑ゑて闇に咆哮する虎が、夜中來襲しないやうに、空地を切開いて、周圍に

尖つた棘を打たればならなかつた。併し人間の聲が彼の生活の中に押し寄せて、彼の心を亂すことはなかつた。無限の泉から涓々として不斷に流れ出づる河水のやうに、日は靜かに流れて行つた。

鳥だけは常住やつて來た。休らへる人は鳥を威さなかつた。間もなく鳥は彼の小屋に巢を造つた。彼等はみづから進んで飛んで來た。そしてもう彼の手を恐れなかつた。彼が招くと、鳥は棕櫚の木から下りて來た。彼は鳥と戲れた。鳥は安んじて、彼の觸るゝに任せた。ある時彼は森の中で、片足を折つて子供のやうに泣きながら地上に倒れてゐる若い猿を見つけた。彼はそれを連れ歸つて育てた。やがて猿はものを覺えるやうになり、おどけた樣をして眞似をしつゝ、下僕のやうに彼に仕へた。かくて彼は安かに生物に圍まれてゐたが、併し動物の中にも亦人間に於けると同じやうに、力と惡とがまどろんでゐることを常に知つてゐた。彼は鰐が怒つて互に嚙み合ひ、互に追ひ合ふ樣を見てゐた。鳥が尖つた嘴を以て川から魚を取り、また一方では蛇が突然鳥を卷き締める樣を見た。敵意を懷ける女神が世界に卷きつけた破壞の大いなる鎖が彼にとつては明かに掟として眼に映じて來た。それを智は否むことは出來なかつた。併し破壞と解放が事繁く行はる區域の各の罪障に何のかゝはりもなく、たゞ傍觀者としてそれ等の爭鬪の上にあることは、何となく心地よかつた。

一年と數ケ月彼は人に逢はなかつた。ところがある時、狩人が象の跡を追つて水飼場にやつて來た。そして對岸の奇異なる光景をふと窺つた。そこには夕暮の黃色い微光を受けて、狹い小屋の前に白髮の人が坐つてゐた。鳥は安らかに彼の髮に巢喰ひ、猿は彼の足の前で、朗らかな音を立てつゝ胡桃を二つに割つてゐた。彼は靑い色や樣々の色をした鸚鵡がゆすぶつてゐる桁を見上げた。そして彼が一度手を上げると、彼等は金色の雲の如く、さはめき立つて、彼の手の中に飛び下りた。「獸は彼と人語を以て語り、花は彼の步武の下に生ぜん。その人は皆もて星辰を摘み取り、その人は口の息吹もて月を吹き拂ふ。」さう約束されてゐる聖者を見たのだと、狩人は思つた。そこで狩人は狩を止め、目擊したところを傳へるために、家路に急いだ。

次の日はもう奇を好む人々が川向ふの奇蹟を窺はうとして押し寄せて來た。驚嘆せる人々の數は次第に増して行つた。ついにその中の一人は、大いなる正義のために、家と財寶とを捨てゝ故郷から姿をくらましたヴィラータを認めた。その風聞はいよ／＼廣く飛んで、國王の許にまで達した。國王は誠忠の士を失つて悲んでゐた際とて、七人を四倍せる舟子を以て小舟を用意させた。彼等は櫂をあやつつた。小舟はやがてヴィラータの小屋のあるところに着いた。それから彼等は賢者の方に歩み寄つて、王の足の前に絨毯を投げた。ヴィラータが人間の聲を聞かなくなつてから、實に一年と六ケ月であつた。彼はたじろぎつゝ立ち、ためらひつゝ客人の前にあつた。君主の前に於ける臣下の禮を忘れて、彼はたゞいつた。

「王よ、御渡御を祝福します。」

王は彼を抱擁した。

「年ごろ余はおんみの道が完成に向ひつつあるのを見てゐた。余はおんみから學ぶために、正しき人が隱栖の稀有なる行狀を見たいと思つて、こゝに來たのである。」

ヴィラータは會釋した。

「私の知つてをることはたゞこれだけです。凡ての罪障より脫るゝ爲には、人と共にあることを忘るゝことです。たゞ自分自らのみを孤獨なものは教へ得るだけです。私のなすことが賢明であるかどうか私は知りません。私の感ずることは幸福であるかどうか私は知りません。何事を助言する道も、何事を教へる術も私は知りません。孤獨の者の智慧は世俗の智慧とは違つてゐます。瞑想の掟は行爲の掟とは異つてゐます。」

「併し正しい人の行狀を見るだけでも、既に學ぶところがある。」と、王は答へた。「おんみの眼を見て以來、余は曇なき喜びを感ずる。この上何を望もう。」

ヴィラータは再び會釋した。そして再び王は彼を抱擁した。

「余は領内に於いておんみに願ひを叶へてやらう。それとも家族へ言葉を傳へて取らさうか。」

「王よ。何物も最早私のものではありません、この地上のあらゆるものは。曾て他の家の中に自分の家があり、他の子供たちの中に自分の子供がをつたといふことを、私は今ことごとく忘却してしまひました。故郷なき者は世界を持ち、解かれしものは人生の全體を持ち、罪なきものは平和を持ちます。私はこの世に於て罪なくありたいと望む外に、何の願ひもありません。」

「では壯やかであれ。祈禱の折には余を思ひ起してくれ。」

「私は神のことを念じてをります。そしてさうすることはやがてあなたのことをも、また地上のあらゆるものをも思ふことになります。凡てのものは神の部分であり、神の息吹ですから。」

ヴィラータは膝をかゞめた。王の小舟は再び流れを下に滑つた。幾月もの間孤獨の人は最早人の聲を聞かなかつた。

もう一度ヴィラータの名聲は翼を上げて、恰も白い鷹の如くに國の上を飛んだ。信仰のまことの生活をなすために、家と財寶とを捨てた人の話は、遠い村々や海邊の伏屋までも傳はつた。人々は神を崇むるこの人を德の第四の名を以て「孤獨の星」と呼んだ。僧侶はその寺院に於いて、國王はその家臣の前で彼の大悟を稱へた。また國内の裁き人が判決を下す折には、かう附け加へた。「私の言葉が、今神に生き、あらゆる智慧を領會せるヴィラータの言葉のやうに正しくあらんことを。」

ところが今や己の行爲の正しからざると、己の生活の空しき意義とを知るや、かの隱栖者の如く、小屋を造り、神に生き

んとして、家と故鄕とを捨て、家財を抛つて、森の中に入り込む者が、屢あらはれるやうになつた。そしてそれは年と共にいよ〳〵繁くなつて行つた。何となれば、先例は人間を結んでゐる地上の最も強い絆であるから。また一人の人の行動は、他の人を夢のまどろみから起き上らせ、時を有爲に用ゐるやう、その意志を正義の方へ呼び醒すから。かくてこれ等の目覺めたる者は己の空虛なる生活を悟り、己の手に血潮を認め、己の心の中に罪を認めた。ついに彼等は奮ひ立つて森に行き、かの隱栖者の如く小屋を造り、僅に身を支ふる乏しき衣食に甘んじ、ひたすら無限の信仰に生きようとした。彼等は木の實を探す道に、ふと互に相會しても、新に交りを結ぶために言葉をかはすことはなかつた。併し彼等の眼は互に喜ばしげにほゝ笑みかはし、彼等の魂は平和を捧げ合つた。人々はかの森を神を崇むる人々の移住地と呼んだ。そして狩人は殺戮によつて神聖を亂さないやうに、この荒野に足を踏み入れなかつた。

さてヴィラータがある朝森の中を歩いてゐると、隱遁者の一人が動かなくなつて地上に倒れてゐるのを見た。倒れてゐる人を起さうとして、その上に屈んだ時、彼はその肉體にはもう生命が消えてゐることを知つた。ヴィラータは死人の眼を閉ぢ、薪を捧げた。そして薪を積み火葬の用意を整へて、この兄弟の肉體を淸淨に蘇へらせてやるために、靈の去つた骸を密森の中から運び出さうと試みた。けれども木の實の粗食によつて衰へ果てた彼の腕には、この荷は餘りに重過ぎた。そこで彼は助力を乞ふために、川の淺瀬を渡つて手近の村へ行つた。

孤獨の星と呼ばれてゐる偉い人が往來を歩んで來るのを見た時、村人たちは歩り出て恭しく彼の意志を訊ねた。そして木を倒し、死人を葬むるべく直ちに森に赴いた。かくてヴィラータが歩みを進めて行くところ、女は身を屈めて禮拜し、子供等は立止まりて、奇異の眼をかゞやかせつゝ、默々と歩んでゐる彼を見送つた。また數多の男は家より驅け出で、この氣高い客の衣に口づけし、聖者の祝福を受けようとした。ヴィラータは併しほゝ笑みながら、この柔和なる人波の間を通つて行つた。そして最早人と相結ぶことがなくなつた今日でも、彼は如何に强く、如何に清く人々を再び愛し得るかを

感じた。

ところが至るところで近づいて來る人々の優しい挨拶に快く答へながら、村の最後の低い家の側を通り過ぎた時、彼は憎惡に滿ちた女の兩眼が彼の上に注がれてゐるのを見た。——彼はたじろいだ。何となれば數年來忘れてゐた、死んだ兄の凝視せる眼をまたもや見たやうな氣がしたからである。卒然として彼は後に身を引いた。それ程彼の魂は時樓の間に於いてあらゆる敵意から遠ざかつてゐた。彼ははじめ彼の眼の誤であらうと自分を宥めてみた。併しその眼差は依然として黑く、依然として硬ばつて彼の方に向つてゐた。彼は再び落着きを取り戾して、その家の方へ緩かに足を運んだ時、女は憎々しげに入口に退いてしまつた。併しその暗い奧の方から、あの眼差の微かな光が、恰も蓊欝たる叢間に潛める虎の眼のやうに、なほも自分の方に燃えてゐるのを感じた。

ヴィラータは氣を取り直した。「見たこともない女に對して私はどうして罪を犯すことがあり得よう。彼女の憎みが私に飛びかゝる程。」彼は自分にさういつた。「恐らくは何かの誤りであらう。私はその誤りを明かにしたい。」靜に彼は家に歩み寄つて、指の節で扉を叩いた。たゞ空しい響のみがはね返つて來るばかりであつた。併し彼はその見知らぬ女の憎惡に燃えながら近づく氣配を感じた。彼は物乞ひのやうに、我慢強く叩き續け、待つてはまた叩いた。ついにためらつてゐる女は歩み出た。そして暗い、敵意を含んだ眼差を彼に向けた。

「お前さまはこの上妾に何の用があるんです。」

彼女は荒々しく彼を怒鳴りつけた。彼女は柱につかまつてゐなければならないほど、怒りに慄へてゐるのを彼は見た。

ヴィラータは併し彼女の顔を見た。曾て一度も逢つたことのない人であることを知ると、彼の心は輕くなつた。また彼女は若く、彼はこの年頃人々の間から遠く離れてゐたから、彼は彼女の道を遮ぎり、彼女の生活に妨げをなす筈はなかつた。

「私はあなたに平和の挨拶をおくりたい。見知らぬ婦人よ。」とヴィラータは答へた。「そして何故にあなたは怒りを含ん

で私を眺められるのかお訊ねしたい。私はいつかあなたと仲違ひしたでせうか。あなたに何か逆つたでせうか。」
「妾に何をしたか？」——意地悪い笑が、彼女の口のまはりに漂つた。「お前さまが妾に何をしたか。それはほんの些細なことです。極々些細なことです。お前さまは満ち足りた妾の家を洞にした。妾から最愛の人を奪つた。妾の生命を死の底に投げ捨てた。お前さまの顔が再び見えないやうに、早く立ちさるがいゝ。それでなければ私の怒りはもう靜まらない。」
　ヴィラ－タは彼女を眺めた。彼女の眼が狂つてゐるので、恐くはこの見知らぬ女は氣が違つてゐるのであらうと思つた。彼は身を返して立去らうとした。併したゞこれだけいつた。
「私はあなたが考へてゐる人ではない。私は人々から離れて暮してゐるものです。如何なる運命の罪をも荷つてはゐない。あなたの眼は私を見間違へてゐる。」
　併し彼女の憎惡は彼のうしろから追ひかけて來た。
「萬づの人に知られてゐるお前さまを、妾はよく知つてゐる。お前さまはヴィラ－タだ。孤獨の星と呼ばれ、徳の四つの名を以て稱へられてゐる人だ。併し妾はお前さまを稱へない。妾の口は生ける人を裁く最後の裁き人に屆くまで、聲を枯らしてお前樣を訴へるだらう。お前樣が訊ねたいといふなら、こちらに來なさい。そしてお前樣が妾に何をしたかを見るがいゝ。」
　彼女は怖み戰いてゐる人を捕へて、やにはに家の中に引入れ、低い、暗い部屋に通ずる戸を押し開いた。そして彼を隅の方に連れて行つた。床の莚の上に何か動かないものが横たはつてゐた。ヴィラ－タは身を屈めた。そして慄然として後すさりした。そこには男の子が死んでゐた。その眼は彼を見詰めてゐた。永遠に訴ふる兒の眼が嘗て見詰めてゐたやうに。その側で女が叫んだ。深い苦痛に身を慄はしながら。
「これは妾の腹の、三番目の末の子です。この子もお前さまが殺したのだ。聖者と呼ばれ、神の下僕と呼ばれるお前樣

が。」

ヴィラータは不審の餘り抗疏の言葉を發しようとした時に、彼女は更に彼をその先の方に導いた。

「こゝを、この空いてゐる機織台を見なさい。こゝに夫のパラティカは嘗の間立つてゐて、白い麻を織つてゐたのです。夫に優る織手は國内に一人もゐなかつた。遠くから人々はやつて來て、彼に仕事を頼んだ。その仕事のお蔭で妾たちは暮してゐた。パラティカは深切な人であつたし、間斷なく働いてくれたので、妾たちの日々は明るかつた。夫は墮落したものを避け、裏町を避けた。そして妾の胎内に三人の兒を宿らせた。妾たちは子供が父に似て深切で、正しい人になるやうに育てた。その時夫は——あゝ、あの知らない人が來てくれなければよかつたのに——狩人から、現身のまゝ神に沒入し、家と財寶とを捨てゝ、手づから家を棄てた人が國内にゐるといふことを聞いた。するとパラティカの心はだん／＼暗くなつて行つた。夕方になると深く思ひ沈んで、碌に口もきかなくなつてしまつた。そしてある晩目を驚ますと、夫は妾の側から、あの信仰者の森と呼ばれてゐる森の中に行つてしまつてゐた。神を思つて、お前さまのゐるあの森に。あの人は神樣のことを考へると、妾たちのことを忘れ、妾たちがあの人の力で生きてゐることを忘れてしまつたのだ。貧困が家を襲つて、子供たちはパンさへ得られないやうになつた。そして一人死に二人死に、今日はこの末の子が死んでしまつた。これもみんなお前樣のせいだ。お前樣が夫を誘惑したからだ。お前樣が神樣の御本體に一際近く近づいてゐられるばかりに、妾の體から生れた三人の子供は固い土の中に這入つてしまつた。お前さまがパン屑を鳥に投げてやり、あらゆる苦惱から離れてゐる時に、子供たちの小さい肉體は千萬の苦痛のために、身體が曲つて死んで行つたのだと、死者と生者との裁き人の前に出て、妾がお前さまを訴へたら、思ひ上つたお前さまはこの償ひをどうするつもりかね。人は隠遁すれば浮世にあるよりも遙に神に近づけるなぞといふ愚かしい妄念で、お前さまは正しい人を誘惑したのだ。そしてその人と、その人の無邪氣な子供とを養ふべき大事な仕事を捨てさせたのだ。お前さまはこの償ひをどうするつもりかね。

ヴィラータは蒼くなつて、唇を顫はしながら立つてゐた。

「私は自分が他人の障りになつてゐたとは知らなかつた。私はたゞ一人でやつてゐるつもりだつた。」

「凡ての行業は神によつてなされるものである。何人も自分の意志を以てその行業より離れ、罪の掟から免るゝことは出來ない。その位のことは子供でさへも知つてゐるのに、賢人と呼ばれるお前樣が知らないとしたら、お前さまの智慧はそも〳〵どこにあるのか。自分の行の主であり、他人に教へを垂れてゐると思つてゐるお前さまは、實は思ひ上つてゐる一人の人間に過ぎないのではないか。お前さまに甘かつたことは妾の苦がかつたことである。お前さまの生はこの子供の死となつた。」

ヴィラータはしばらく沈思した。それから跪いた。

「あなたのいふところはまことである。あらゆる賢者の默想よりも一つの苦痛の中にこそ常により多く眞理への道はある。今私はそれを見た。私の知つてゐることは、みな不幸な人々から學んだものだ。私の見たものは、惱める者の眼差、永遠の兄弟の眼差を通してことごとく見たものだ。私は自分で考へてゐたやうに、神の從順なる下僕ではなくして、思ひ上つた男であつた。このことを私はあなたの苦しみを通して知つた。そしてその苦しみを今私も苦しんでゐる。赦して下さい。私はあなたに對しても、また豫想も及ばない他の多くの運命に對しても、罪があることを告白します。何となれば他に働きかけることのない者でも、この世では罪をつくる行爲をしてゐるのであるから。たゞ獨り離れて住む者とても、實は凡ての兄弟の中に住んでゐるのであるから。赦して下さい。內儀よ。パラティカが、戻つて來て、亡くなつた命の代りに、新しい生命をあなたの胎內に宿すやうに。私は必ず森から世間に戻つて來ませう。」

彼はもう一度跪いて、彼女の衣の裾に唇を觸れた。その時凡ての怒りは彼女から去つた。彼女は驚きながら步み去る人を見送つた。

ヴィラータはなほ一夜を彼の小屋の中で過した。星が白く空の深みから輝き、朝また消えるのを見た。彼はもう一度鳥を呼んで餌をやり、彼等を愛撫した。それから數年前に彼がこゝへ來た時のやうに、杖と鉢とを持つて、町に歸つて行つた。

聖者がその孤獨を去つて、再び城壁の中に留まるといふ知らせが廣まるや、庶民はたちまち歡喜して、遇ひ難き稀世の聖者を仰ぎ見んと、雪崩を打つて小路から走り出た。併し聖者が神を離れて近づいて來たことは、不吉の知らせではないかと、ひそかに不安を抱いてゐるものも多かつた。ヴィラータは恰も壁の間を通り抜けるやうに、歸依者の目禮する人垣の間を進んで行つた。そしていつも柔かに彼の唇の上に坐つてゐる朗かなほゝ笑みを以て人々に會釋しようと試みた。併し今はもうそれは出來なかつた。彼の眼はもの〳〵しく坐り、彼の口は閉ざされた。

かくて彼は宮殿の前庭に着いた。會議の時間は過ぎて、王はたゞひとりでゐた。ヴィラータは王の方に進んだ。王は立上つて、彼をその腕の中に閉ぢ込めようとした。併しヴィラータは床に平伏して、嘆願のしるしとして王の衣の裾を執つた。

「おんみの願ひは叶へられてある。その願ひが言葉となつて唇の上に出づる前に。」と、王はいつた。「信仰厚き人のために奉仕し、賢者のために助けを貸す力の余に賦與されてをることは、余の譽れである。」

「私を賢者と呼ばないで下さい。」ヴィラータは答へた。「私の道は正しい道ではなかつたのですから。私は一めぐり致しました。嘗て私の務めを免じて戴くために立つた國の前に、私は今嘆願者として立つてゐます。私は罪から脱れようと思つて、あらゆる行爲を避けました。併し私も亦神々に依つて際涯もなくこの世の人々に張り渡されてゐる網にかゝりま

した。」

「おんみについて、そのやうなことは信ぜられない。」王は答へた。「人々を避けたおんみが、どうして人々に對して邪まなことがあり得よう。神の中に生きてゐたおんみが、どうして罪に陷ることがあらう。」

「私は知りつゝ邪なことをしたのではありません。私は罪から逃れました。併し私どもの足は大地に縛られ、私どもの行は永遠の神の掟に縛られてゐるのです。何もしないことも亦一つの行爲です。私は永遠の兄弟の眼をのがれることが出來ませんでした。私どもは永遠の兄弟に對して、自分たちの意志とは裏腹に、善いことや惡いことを永遠にやつてゐるのです。私は七重にも罪があるものです。何故なら私は神にうしろを見せ、人生に對して奉仕を拒んだからです。私は無益な人間でした。何故なら私は自分の生命だけを養つて、他の誰にも仕へなかつたからです。今私はまた仕へたいと思ひます。」

「おんみのいふところは異に響く。ヴィラータよ。余にはおんみが分らない。願ひの筋をいふがいゝ。余はそれを叶へてやらう。」

「私は最早自分の意志から脱れようとは思ひません。自由な者も自由ではなく、無爲の人にも亦罪があるのですから。たゞ仕へる人のみが自由です。自分の意志を他人に委ね、自分の力を仕事に注ぎ、尋ねず、疑はず、たゞ行ふ人のみが自由です。行爲の眞つ只中こそ私どもの仕事です。――その始めとその終り、その本源とその成果とは擧げて神々のみ許にあるのです。私を私の意志から解き放して下さい。――凡ての意慾は惑ひであり、凡ての奉仕は悟りでありますから。王よ、さうして下さることを私は感謝いたします。」

「余にはおんみのいふところが分らない。おんみは余におんみを自由にするやう命令を發せよと請ふてゐる。そしておんみは誰かに仕へたいと望んでゐる。それでは他人に奉仕をなす者のみが自由で、その人に奉仕を命ずるものは自由ではな

いといふのか。余にはこのやうなことは分らない。」

「わが君、わが君が、これを心中に御了解にならないのは幸なことです。若し御了解になられたら、どうして王位に安んずることが出來ませう。どうして命令をお下しになることが出來ませう。」

王の額は立腹のために暗くなつた。

「それでは命令を下すものは、神の前では下僕よりも劣るといふのか。」

「神の前ではより卑しい者も、より勝れたものもありません。自らの意志を捨て、尋ねず、疑はず、たゞ仕へるもののみ、おのづから罪が消えて、神に歸するのです。これに反して、みづから意志し、或は智慧を以て相手を避け得ると思惟るものは誘惑に陷り、罪に陷ります。」

王の額は依然として暗かつた。

「それでは一つの務めは他の務めと同じなのか。神の前でも、人間の前でも、偉い者も卑しい者もないのか。」

「人間の前では偉く見えるものが數多あるかもしれません。けれども王よ。神の前では凡ての奉仕は皆一つです。」

王は長い間暗い面持をしてヴィラータを眺めてゐた。彼の心の中では自負の念が執拗にもがいてゐた。併し彼はヴィラータの憔悴した顏と皺の寄つた額の上の白髮を認めた時、この老人は年のために子供に返つたのだと思つた。そして彼を試すために、嘲笑的な口調でいつた。

「おまへは余が宮殿の犬の世話人にならないか。」

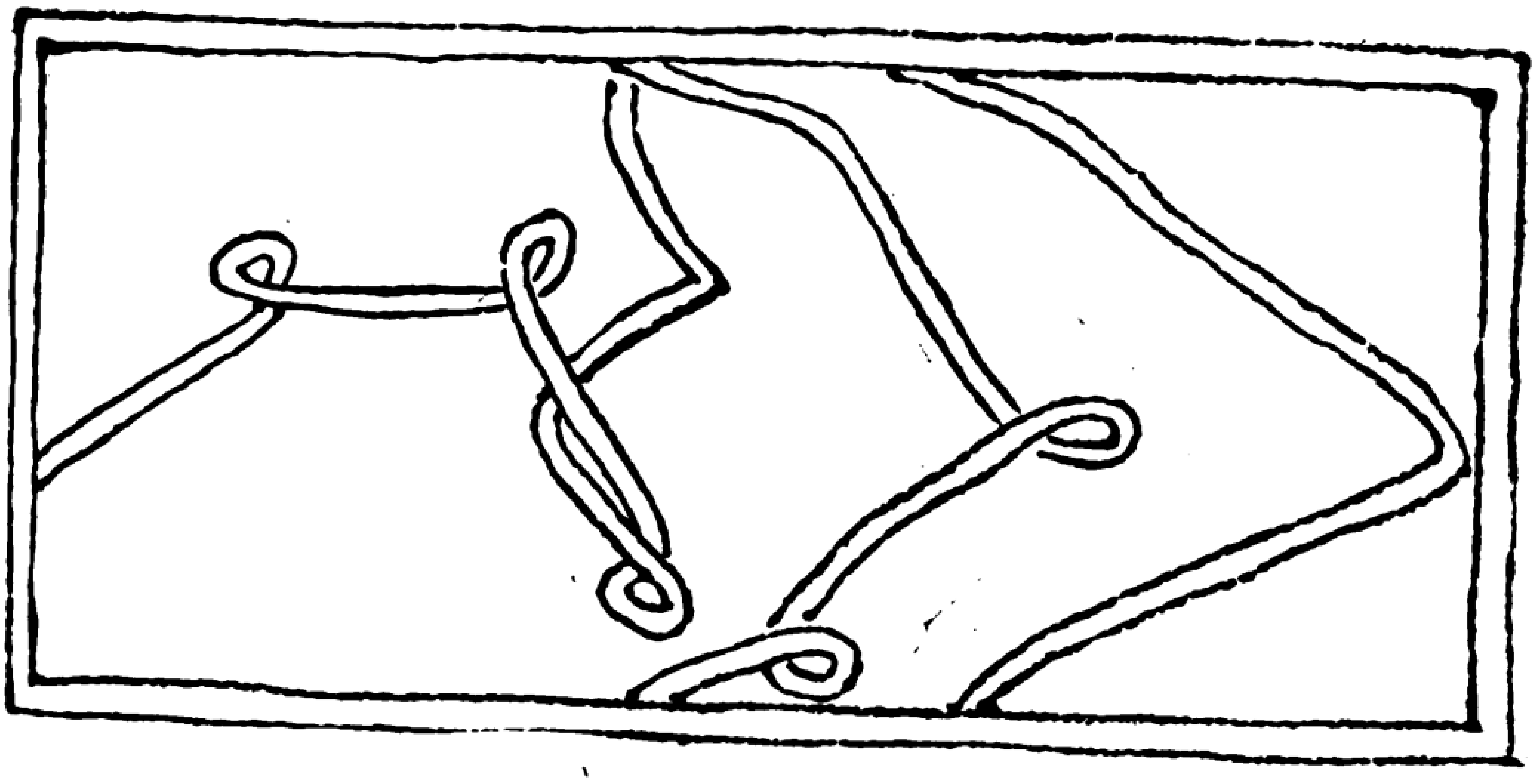
ヴィラータは平伏した。そして感謝のしるしとして階に口づけした。

その日から、嘗ては國を擧げて德の四つの名を以て稱へられた老人は宮殿の前の小屋の中にゐる犬の番人になつた。そして下の部屋に下僕たちと一しよに住んでゐた。彼の子息たちは彼を恥ぢた。彼等は彼に逢はないやう、また彼の血族であることを他人に知られないやう、その家から殊更卑怯な廻り道をした。僧侶はこの卑しい者から遠ざかつた。たゞ庶人だけは、嘗て國中第一の人であつた老人が、下僕となつて一繋りの犬を連れて歩いて來ると、數日の間は立止つて驚いてゐた。併し彼は彼等を顧みなかつた。それ故彼等は間もなく散々に散つてしまつて最早彼のことを考へなかつた。

ヴィラータは朝の紅から夕べの紅まで忠實に彼の務めを果した。彼は動物の塒を洗ひ、その皮の疥癬を搔いてやつた。彼等に食物を運び、寢床を用意し、その不淨を淸めてやつた。間もなく犬は宮殿の如何なる人よりも彼を愛した。彼はそれを喜んだ。殆ど人間に話しかけたことのない彼の老いた、皺だらけの口は、犬の嬉々としてゐる樣を見ていつもほゝ笑んでゐた。そしてこれぞといふ大きな事件もなく、たゞ長く續いて行く彼の歳月を愛した。王は彼に先き立つて崩じた。新しい王が君臨した。新しい王は彼を顧みなかつた。ある時彼が通り過ぎた折、犬が唸つたといふので彼を杖で打つた。他の人々も次第に彼の生きてゐることを忘れて行つた。

けれども彼の齡が滿ちて、ヴィラータが息を引き取り、そして下僕たちの塵芥捨場に埋められた時、人民の中には、嘗ては國が德の四つの名を以つて稱へた者のことを思ひ出すものは一人もなかつた。彼の息子等は隱れ、一人の僧も彼の亡骸の傍で死の歌をうたふものはなかつた。たゞ犬だけが二日二晩吠えたゞけであつた。それから犬も亦ヴィラータのことを忘れた。その名はついに王者の年代記にも書き込まれず、賢者の文にも記されてゐない。

この飜譯をなすに當つて、成蹊高等學校敎授高橋健二君の好意と助力とに負ふところが尠くない。こゝに特記して感謝の意を表する。(山本)



沈黙

（ある寓話）

Ｅ Ａ ポー作
正宗白鳥譯

山嶽は眠れり。溪谷、斷巖、洞窟は默せり。

アルクマン

「よく聽け。このおれの話を」と、邪神は、私の頭の上に手を置いて云つた。

おれは今、ゼール河のほとり、リビアの境内の、ある荒廢した地域の話をしようと思ふ。其處には、平靜の影もない。物音の止んだ時もないのだ。

河の流れは、橙黃色の、病みほうけた色を帶びてゐる。そして、その河は、海に向つて流れ出ようとはしないで、太陽の赤眼の直下で、荒々しく、びくり〳〵、絕えず波打たせてゐる。どろ〳〵した河床の左右に、幾哩ともなく續いてゐる陰鬱な

荒野には、すばらしい睡蓮が茂つてゐる。それ等の草花は、その淋しい所で互ひに溜息を洩らしてゐる。その長い無氣味な頸を天の一方へ伸ばして、絶え間なく頭を振つてゐる。草花の間からは、言葉の綾も分らないさゝやきが、地底をくぐる水音のやうにかすかに聞えて來る。さうしては、彼等は互に溜息を吐いてゐる。

しかし、その荒野も、際限のない譯ではない。その果ては、暗い淒い喬木の森が遮つてゐて、森の下草(したくさ)はヘブライズ島の波のやうに、絶えず動搖してゐる。しかし、空には、そよ吹く風もないのだ。この太古のまゝの喬木は、百雷の崩れるやうな響きを立てて、果てしなく、あちらこちらに打つつかつてゐる。木といふ木は高いてつぺんから、果てしなく露を降らせてゐる。その根元に蔓つてゐる毒を含んだ奇異な花は、不安な眠りに悶えてゐる。

それから、頭上には、灰色した雲が、瀟々また滔々と音を立てて、小止みなく西方へ馳せて、地平線の炎壁を打破つて、はては、一大爆布となつて渦卷いてゐる。しかし、空にはそよ風も吹いでゐないのだ。そして、ゼール河のほとりには、平靜の影もない。物音の止む時もないのだ。

夜となると雨が降つた。……降る時には雨であつても、地上に落ちると、その雨は血に化した。おれは、長い睡蓮の茂つた沼地に立つてゐたが、雨はおれの頭上に降りかゝつた。――睡蓮は、寂寥の神威に打たれて、互ひに溜息を吐き合つた。すると、その折、月は、無氣味な淡い霧の中から昇つて來たが、その色は深紅であつた。おれの目は、月光に照つた河邊の、灰色の大巖石に注がれた。その岩石は灰色であつた。無氣味な形をしてゐた。丈は高かつた。――岩石は灰色をしてゐたのだ。その前面には、ある文字が石を削つて彫られてゐた。おれは、睡蓮の沼を突き拔けて、河のほとりに近づいて、岩面の文字を讀まうとした。が、おれにはその文字が分りかねた。それで、斷念して、沼地の方へ戻りかけたが、その時、月光はふと皓々と冴え渡つた。おれは足を轉じて、再び岩面に目を注いで、そこの文字を凝視した。――

「荒廢」……かう題されてあつた。

おれは眼を見上げた。大巖石の頂上には、一人の男子が立つてゐた。おれは、睡蓮の間に姿を隱して、ひそかに、その男の行動を凝視しようとした。その男は丈が高くつて、風采も堂々としてゐた。肩から足までは、古代ローマの外衣で蔽はれてゐた。それで彼の肢體の相形はハツキリしなかつたが、面差しには神の面影があつた。夜も霧も月も露も、その男の面を蔽ひ隱さなかつた。その高い額は思慮の深さを現はし、その鋭い眼は注意の深さを現はしてゐた。そして、おれは、彼れの頬に刻まれた數條の溝を見て、悲哀と倦怠と憎人と、獨居渇望との表象を、そこに見破つたのだ。

その男は、岩の上に坐つて、自分の腕に頭をもたらせて、「荒廢」の光景を見渡してゐた。彼れは、低いところの不穩な雜木林を見下したり、高く聳えた原始林を見上げたり、更に目を遠く、さわつく空を見上げて、深紅の月色をも見詰めたりした。

おれは、睡蓮の蔭に忍んで、その男の行動を凝視してゐた。彼れは、寂しさに身を震はせた。しかし、夜は次第に沈んでも、彼れは岩上を離れなかつた。

その男は、天を見詰めてゐた眼を移して、物凄いゼール河を眺めた。無氣味な黄ろい水の上を見下して、また、睡蓮の荒野をも眺めた。彼れは、睡蓮の溜息に耳を傾けて、その間から洩れて來るさゝやきにも耳を留めた。おれは、おれの隱れ家に潛んで、その男の行動に注目した。彼れは寂しさに身を震はせた。しかし、夜は次第に沈んでも、彼れは岩を離れなかつた。

おれは、沼の窪みへ下りて、睡蓮の野を遠くまで渉つて、河馬を呼んだ。河馬は沼の窪のじめ／＼したところにゐたのだ。河馬は、おれの呼聲を聞きつけて、同類の神馬とゝもに、岩石の下までやつて來て、月光を浴びて、恐ろしい聲を發つてうなつた。おれは、おれの隱れ家に忍んで、その男の行動に注目した。彼れは寂しさに身を震はせた。しかし、夜は次第に沈んでも、彼れは岩上を離れなかつた。

そこで、おれは、厲しい呪咀の聲を上げて、森羅萬象を呪つた。すると、今まで、そよ吹く風もなかつた天上に、猛烈な風が吹起つた。空は風に攪亂されて死相を現はした。――雨はその男の頭に降りそゝいだ。河水は流れ下つた。――河は泡立つ水に惱まされた。――睡蓮はその土床のうちで悲鳴を上げた。――森は風のなかに粉碎された。雷は轟いて、稻妻は崩れた。――岩石は岩の根までも搖らめいた。おれは、おれの隱れ家に潛んで、その男の行動に注目してゐた。彼れは寂しさに身を震はせた。しかし夜は次第に沈んでも、彼れは岩上を離れなかつた。

そこで、おれは憤怒を起した。そして、河をも、睡蓮をも、風をも、森をも、天をも、雷霆をも、睡蓮の溜息をも、一切を咀つた。今度は、無音の咀ひで呪つたのだ。すると、どうだ。彼等は呪ひに打たれて鎭まり返つた。月は、天上をよろめいてゐた歩みをぴつたりと止めた。雷も死んでしまつた。――稻妻も消えてしまつた。――雲も動かなくなつた。――河水も流れを留めて平靜に復した。――樹木も搖がなくなつた。――睡蓮はもはや溜息を吐かなくなつた。――その間からさゝやきが聞えて來なくなつた。今こそ、この廣漠たる果しのない荒野に物音の影だに映らなくなつた。そして、おれが、岩面の文字を眺めると、文字はすつかり變つてゐた。

「沈默」……かう改題されてあつた。

おれは、その男の面に目を向けたが、彼れの顏は、恐怖に襲はれて眞靑であつた。彼れは慌てゝ、腕から頭を持上げて、岩上に突立つて耳を傾けた。しかし、この廣漠たる果てしのない荒野には、聲一つしなかつた。岩面の文字は「沈默」であつた。

その男は戰慄した。顏を背けた。そして、急いで、遠く逃げ去つた。だから、おれは、またと彼れを見られなかつた。

* * * * *

魔術士の書卷――鐵表紙の陰鬱な魔術士の書卷――にはさま〲な面白い話が記されてゐる。そこには、天上地上、あるひは大海の壯麗な物語もある。――また、海や陸や天上を支配した魔神に關した壯麗な物語もある。と、私は思つてゐる。巫女の事觸にも教訓があるし、ドヽナの社祠の境内で微動してゐる朧ろげな木の葉によつても、神の御託宣が判ぜられて、尊としとも餘げな話が昔には語られた。――しかし、善神アラがゐますとも、かの邪神が、墓の陰に、私の傍に坐を占めて、私に語つたかの話は、世にも類ひなく驚くべきものではないかと思つてゐる。

邪神は、その話を語り終ると、墓の穴へころげ込んで、カラ〲と笑つた。私は邪神に和して笑ふ氣になれなかつたが、邪神は、私が笑はないのを呪つた。つねに墓穴に住んでる山猫は、そこから匍出て、邪神の足許に蹲つて、彼れの顏を見詰めてゐた。

不穩な谷間

あの時は、
人の住まぬ靜かな谷間は、ほゝゑんでゐた。
人はみんな、戰の場へ遠く出て行つた。
留守を頼まれたお星様は、美しい眼付きで、夜毎々々に
蒼空の塔の中から、數々の谷間の花を見守つてゐた。

雲はひねもす、眞赤な日光が、
その數々の花の間に、のんびりと休らつてゐた。

この頃は、
旅人も旅人も、その谷間の不安な樣を、いたましさうに語つてゐる。
一つとして落着いてゐるものはないのだ――
鳴りを鎭めてゐるものは、この無氣味な無人境を包んでゐる空氣ばかりだ。
樹木といふ樹木は、霧のかゝつたヘブライズ島をめぐる底冷めたい湖のやうに鼓動してゐるが、
それは、風に搖られてゐるのではない。
雲また雲は、朝から晩まで、
不安な空に漂つて、苦しげにざわついてはゐるが、
それは風に追はれてゐるのではない。
下界には、菫の花がさまぐな眼の形をして、茂つてゐる。
百合は無名の墓の上に、搖らいだり泣いたりしてゐる。
それらの花は搖らめいてゐる――その香りの高い花びらからは、露の雫が果てしなく振落されてゐる。
それ等の花は泣いてゐる。――その纖弱い莖からは、盡きぬ涙が玉となつて落ちてゐる。



揚州十日記

王秀楚 記
佐藤春夫 譯

乙酉（弘光元年、即ち明の福王の即位二年、西暦一七〇五年である）夏の四月十四日に、督鎭史可法は白洋河から、守を失つてよろめきながら揚州へ逃げ込み城を閉ぢて敵を禦ぎ、二十四日になつた。

（十四日から二十四日までの間のことを記者は何事も錄してゐない。譯者はこれを補ふが、この間、清兵は揚州城を重圍の中に置いたまま、敢て近づいて攻めることをしなかつたのである。それはこの城を攻撃してゐる清の豫王が部下の諸軍を戒めてゐたからである。豫王は敵國の督鎭たる史可法の忠節と武勇とを惜んで、どうにかして彼を殺さずに降伏させ、さうして自分の國のために重用したいといふ考へがあつた。それだから史可法が城中へ逃げ込むと城を嚴重に圍んだ上で、かつては酒

州の守將であつた明の降將の李遇春といふ者に檄を持たして城に近づかせた。李遇春が可法を呼び出すと、可法は城壁の陴に登つて遇春を罵つた。遇春が利得を說き節を淸朝に屈して名を成すに如かずといふと、可法は怒つて矢を射かけたが、遇春は走り去つて矢は當らなかつた。すると今度はまた、豫王は士民に書狀を持たして來た。使者は城の濠のなかから守兵を呼んで城中に入つて可法に見えたいといふと、可法は强い兵卒に言ひつけて城壁を繩梯子でおりさせて、その書狀と一緖に使者をも水の中へ投げ込ませてしまつた。豫王は可法の志の固いのを見るにつけて益々この人を得たいといふ念が昂じて、三度目の使者を出したが、その書狀は啓いても見ずに焚かれた。そこで豫王は、どうしても可法の志の屈することが出來ないのを知つたので、旣に滿を持してゐた士卒を勵まして、急に城を攻めさせた。揚州は由來繁華な都市で、また美人の產地として二十四橋の風月は天下に響いてゐた。滿州の士卒は血に渴いてゐる）

城がまだ破れない以前、禁門のなかにはそれぞれ兵がゐて守備してゐた。予の住宅である新城の東の方面は揚氏を姓とする將校が守つてゐた。吏員や兵卒が要所々々にまくばられてゐたが、予の家にも二人の兵卒がゐた。左右の隣家も同じくであつた。この兵卒たちは家のなかをさんざんに蹂み荒して物品を徵發するので、それを緩和するためには每日、千錢以上も費さなければならない。これでは到底やり切れないといふので、近所同士が相談をして隊長にふるまい酒をすることにした。予はその上にもまだ心にもない恭敬の有樣を示してやつと隊長と交際を取結ぶことが出來た。隊長はそこで兵卒どもを誡めてくれたあげくに兵卒たちもいくらか遠慮するやうになつた。この隊長は音樂が好きで自分でも琵琶をやる。さうして名妓を得て軍暇を娛まうといふ意があつた。この夜、予に相談をして存分に飮んで歡を盡さうとしてゐたところが、不意に督鎭から紙片が到來した。彼はこれを覽るなり顏の色をかへて遽に城に登つたので、予も外の會衆たちも散會した。

次の日の早朝、督頭からの諭告掲示があつた。その中「一人當之不累百姓」といふ語があつた。督頭一人の身でこの責に當る、決して庶民には心配をかけないといふ意味である。（日ごろから督頭の徳を景慕してゐる市民の）これに對して感泣しないものはなかつた。また巡撫の軍が小捷を得たといふ噂が傳はつたりして、人々は天に謝し祝した。午餘に姻戚の某が興平伯の部下の逃兵を逃げて瓜州から來た。私の妻は久しく別れてゐたものだから相見てすすり泣きした。そのうちに大軍が城に入り込んだといふ噂を一二の者が私に知らせたので、私は急いで外に出て人々にこれを詢ひ正した。或人は靖南侯黃得功の援兵が來たのだと言つてゐた。城の上を見まはすと守備の兵たちはまだ規律立つてゐた。再び市へ出てみると、人々は怯え切つてゐるし、髮もおどろに跣足の群集が砂埃をあげながらやつて來る。尋ねようと言葉をかけても、氣もそぞろに息せき切つてゐて返事も碌に出來るものは無い。忽ち、數十の騎者が北から南へ、あはてふためき犇き押し合ひながら、さながら波の湧き立つ勢で、そのなかに一人を守立ててゐたが、これこそ督頭その人であつた。多分、東へ逃げようとして敵兵が城に逼つてゐて出ることが出來ないので、南關からのがれようといふのでこの道に來たものと思へる。この時、敵兵が城に入つたことはも早疑ひ無いのを悟つた。突如として一人の騎者がこれは南から北の方へ馬の手綱を放したまま緩歩しつつ面を仰いで歎き哀しみ、その馬前には二人の卒が名殘惜しげに馬の轡や首に取縋つたのが今もまだ目に見えるやうな氣がするのだが、殘念ながらこの人の名前は知れない。騎士たちが稍遠さかつたころには、城を守備してゐた兵丁が入りみだれて城壁から竄れ下り、胄を棄て戈を投出し、さうかと思へば首を碎いたり脛を折つたりする者もあり、城の櫓を見渡すとそこには早くも影一つなかつた。

（この記者がさまざまな取沙汰を心配してゐる間に、城の西北隅が破られたのであつた。城が陷つたことを知つて、督頭史可法は自分で頸を刎ねて、介錯することを副將の莊子固――一說には史德威――に命じた。しかし命じられたものはこ

れを爲すに忍びなかつた。子樹は參謀の許秀等とともに、死に切れずに着衣一面に血の滴つてゐる督鎮を抱いて馬に乘せた。最初に小東門から逃げようとしたけれども、そこにはもう大軍が逼つてゐた。子樹も許謹も皆其所で戰死してしまつた。この記錄の記者が波のやうに亂れどよめきながら南闕に向ふ數十騎のなかに守り立てられてゐる督鎮を見たといふのは、小東門から更に逃れようとしてゐた彼等の血まみれの一隊であつたに相違ない。）

これより以前の事に督鎮は城が狹くて大砲を列べることが出來ないといふので、城の堞に板をとりつけて、前は城の徑にその後は民家の屋根に接するやうにその板を橋渡しにして餘地をつくつて大砲を安置するに便ならしめようとしたのであつた。ところがその工事のまだ畢らないうちに、敵兵の弧を操つて先登した者が白刄を滅多打にふりかざして來たので、城を守備する兵卒や人民は互に押合ひをして、前方には進めないものだから皆逃げて、置かれてあつた板の上へ四つ這ひになり手を板き合ひ援け合つてやつと民家の屋根に逃げ延びることが出來た。ところが新に置かれた板はまだ固めてなかつたものだから、足をかけるとそれは傾いて、そのためにまるで人間が落葉か何かの如く、十の八九までは死んだ。ゐまく屋根に行くことの出來た者でも足は瓦を踏み破つて裂けた。それらが皆、劍戟の相擊つ如き聲を立て又は雨や雹や換彈などのやうにもあり、物凄まじい音響が錚𨦟の如く鼓聲のごとく四方に瀰渡つてやまなかつた。家のなかにゐた人々は惧れ騷きの限りをつくして爲すところも知らなかつた。さうして家といふ家はどこもかしこも寢室のやうな奧の方まで、守備の兵卒や人民どもの屋根づたひに下りて來た者どもが慌しく隙を覓めてもぐり匿れて、家の主人などが叱つたぐらゐでどうして、止まるものではなかつた。表通りの軒並は戸を閉ぢてしまつて全く人氣は絕えてしまつた。私の屋敷はうしろが城堞に面してゐたものだから、窓の隙間から城壁の上にある兵が南の方を循つて西に行くのを覗いてみたが、その步調は規律立つたものでふりそそぐ雨にさへも少しも紊れなかつたので、節制のある軍隊か知らと考へたりして心は幾分か落

着いた。忽ち門を叩く聲が慌しかつたが、これは隣人たちが相談をして、一緒に王師を迎へるがために案を用意して香を焚き、敢て反抗すまいといふのであつた。私は今更そんなことをしても仕方がないとは思つたけれども、衆の意見だからただ續けさまに、はいはいと言つた。そこで衣物を着換へ様子を整へてやや暫く待つてゐたが、誰も來なかつた。私はそこでもう一度窓のところへ行つて城壁の方を覗いてみた。すると隊伍が稍疎になつて歩いてゐるものもあつたし、止つてゐる者もあつた。ふと見ると、婦女がその間に雜つてつれて行かれてゐるのであつた。服装はみな揚州の風俗であつた。私は始めて非常に駭き、座にかへつて私は妻に言つた。兵が城に入つて來て萬一思ひがけないやうなことがあつたならば、お前は自害をしなければいけない。妻は言つた。承知してゐます。いくらかの金がここに有るのをお前に持たせて置く。我らはもう生きることなどは考へまい。私は趨り出て眺めると、北方から來た數騎が皆々轡をひかへて徐ろに近づくのを、軍を迎へる者たちはみな首を垂れて何か話してゐる様子である。この時人々がそれぞれ身の用心をしてゐるものだから誰も歩く者もなく、咫尺を距てたぐらゐのところでも息も聞きとれないほどであつた。稍々近づいてきてやつとこの數騎は家毎に金を索めてゐるのだと判つた。しかし彼等はあまり法外な考へも無く、少しでも得さへすれば別に兎や角は言はなかつた。もし應じない者がある時にも刀に手はかけてもそれが人の身に及ぶやうなことはなかつた。後に知つたところではこの時、捐金を萬兩も獻じて不意に殺された者があつたのは揚州人がそそのかしたのだといふ。やがて彼等は私の門のところへ來て一人の騎者は特に私だけを指ざして後の騎者に言ふには、我が爲めにその藍色の衣物の男を詮議してくれ。後の騎者は馬から下りようとしたので、私は飛んで遁げた。後方の騎者はたうとう私をあきらめて馬に乘つて行つてしまつた。私は自分ながらに考へたのには、自分の粗服は隣人たちと似たやうなものだのに、どうして自分ばかりに目をつけたのだらうか。そのうちに私の弟が來た。私の兄も來た。そこで皆で一緒に相談をしたことには、この住居は右も左も皆、富有な商人であるから人は私をも亦富有な商人と見做すらしい。どうしたものだらうか。最後に人知れぬ径を通つて兄のとこ

ろへ手賴つて行かうといふことになつた。弟が女たちを扶けて雨を冒してやつと仲兄のところへ行つた。この兄の宅は何家坟(無緣墓地)の後にあるので附近は皆貧民窟であつた。私はひとり自分の家に殘つて樣子を注意してゐると、不意に長兄が來て言うには、中通は血が湧いてゐるではないか、こんなところに殘つてゐて一たい何を待つてゐるのだ。生きるにも死ぬるにも兄たちと一つ處であつたならば心殘りもない。といふので私は先人の位牌を奉じて長兄とともに仲兄の宅に行つた。當時は兩人の兄、一人の嫂、一人の弟、一人の姪、又一人の妻、一人の子、妻の里方の二人の姨、妻の弟が一人、皆同じく仲兄の家に避難したのである。

日は漸く暮れて、多勢の兵卒が人を殺す聲が門外にぶつ徹しであつた。そこで屋根に上つて暫くかくれた。雨が實にひどかつたのに十數人が一枚の毛氈を擁してゐるのだから髮の毛がみんな濡れ透つてしまつた。門の外には哀痛の聲が耳を悚たせ魄を懾れさせたがやつと夜になつて靜まつた。そこで軒につかまつてどうやら屋根をおりて、火を敲きながら飯を炊いた。城の四方には火事が起つてゐて、近いところでは十數軒、遠いところは數へきれない。赤い光は映じ合つて稻妻の如く火に彈ぜる物音は耳に轟いて身を切る思は絶えない。又、人を鞭打つ聲が哀しい風になつて物凄まじく、悲痛は言ひ現はすことも出來ない。飯は出來たけれど一家中互に顏を見合して驚いたり心配したり、涙が流れて箸をつけることもなし得ず、されぱとて一向よい考も思ひつかない。私の妻は先刻の金を取出してこれを四つに碎いて、兄弟がそれぞれにその一つをとつて髻や履や衣や帶の内などに隱し藏めるのであつた。妻はまた破衣と古履とを捜出して私のために着換へさせた。目を見開いたままでたうとう夜明になつた。この夜、鳥があつて空中で笙の笛のやうな又子供の啼叫ぶやうな聲をさせた。それは人の頭の上から遠くないところであつた。この事を人に詢ねてみると外の人も皆これを聞いたといふ。

しばらくして火勢も稍息み天も亦だんだん明くなつた。再び高いところに乘つて屋根にのぼり、そこに躱れた。十數人の人がもう天溝のなかに身を伏せてゐた。突然、東廂へひとりの男が墻を乘り越えて上つて來たと思つたら、その後から

一人の兵卒が刀をさげて飛ぶが如く追ひかけたが、その兵卒は私たちの仲間を見ると、追つかけて來たものを見放して私たちの方へ突進んで來た。私は驚き慌てて逃げ下りた。兄が私につづいた。弟も走つて來た。百歩あまりで立ち止つたが、この時から妻や子供を見失つてしまつて、その生死は知れなくなつた。

惡智惠のある兵卒どもは、逃げ隠れしてゐる者が多いらしいと氣がつくと、咎められないやうに身元保證の符を渡してやると、衆人をだまかした。隠れてゐた者どもが我勝ちに現れ出て、兵卒どもに從うた。これが五六十人にも達し、その半分ぐらゐは女が雜つてゐた。兄が私にいふのは、力んで見たとてわれら四人もしも荒狂つた兵卒にでも出會したら、所詮は免れられるわけもない。一そあの群集のなかへ加はつたがどうだらう。大勢に雜つたら逃げられる機もあるしたとひ不幸に萬一の場合があつても皆揃つてゐれば心殘りもない。兄のこの言葉に、分別も晦んで生免れる手だても思ひつけない私たちは一緒に、さうだ、さうだと言つて、兄のいふとほりにした。この群集を操つてゐるものは滿洲兵であつた。私の兄弟の金はすつかり捜出されてしまひ、ただ私だけが未だ搜されずにゐた。と、その場に來た婦人たちのうちに私を呼ぶ者がある。見るとそれは私の友人朱書兒がふたりの妾である。私はあはてて呼び止めた。このふたりはいづれも髮ふり亂れ肌も露はに、足は深く泥のなかへまみれて脛まで埋まつてゐる。ひとりの方はこの時まで女の子を抱いてゐたが、兵卒が鞭でそれを泥のなかへたたき落すと、引かへして驅け去つた。一人の兵卒は刀を揚げて先立し、一人の兵卒は槍を横へて後から追ひ、また一人の兵卒は中に居て右へ行つたり左へ行つたりして逃げ出すものを見張りながら、凡そ數十人がまるで牛か羊かのごとく追立てられた。少しでも立留つたりすれば撻つか、それでなければ殺した。これらの婦女たちは長い綱で脛をつなぎつしりと珠數を貫したやうな有様で、一足歩けば一足躓く。路中は泥だらけ、地面一たいは嬰兒で、それが或は馬の蹄にかかつたり人の足に踏まれたりして、その臓腑は泥にまみれ、この泣き聲に野を掩うた。或る溝と池とを通り過ぎたが、堆く重ねられた屍は入亂れて互の手や足を枕し合ひ、血は翠い水に入つてあたりは赭く化

して五色にただれ、水面に埋まつて塘まで平になつてゐた。

或る屋敷へ來た。それは延尉（刑獄を司る役人）永言姚公の住居であつた。裏門から眞直ぐに入つて行つた。建物は奥深かつたが、そのところどころには皆、屍が積まれてゐた。心のなかで自問した、これが自分の死場所であらうと。そのうちに曲りくねつて表に出、左へ折れて街へ出た。そこでもう一度、或る屋敷へ來た。そこは洋品商の喬承望の家で、つまりこの三人の兵卒の巣なのだ。門を入ると前に一人の兵卒が居て、數人の美しい婦を拘へてゐたが、擇取りして來た箱や籠の綵紬や緞子が山ほどある。三人の兵卒の來たのを見ると高笑ひして、彼は私たち數十人を追ひ立てて裏の建物へつれ込んだ。婦たちは別に傍の室に置いた。この室の中には二個の几に三個の裁縫台が列べられてあつて、一人の年增の婦が衣類を仕立ててゐた。この婦は土地の者である。こつてりとめかし立ててけば〱しく着飾つて、笑鬧をしたり笑ひ興じたり、笑顏には得意の色を見せてゐる。好いものが見つかる度に兵卒に頼んで貰ひ受けては、媚の限りを盡しながら恥とも思はぬ。以前、或る兵卒が或る人に話したといふ言葉に、自分たちは高麗を征めて婦女を數萬人擄にしたが、一人として貞操を失つたものはなかつた、と曰ふ。それだのに我が堂々たる中國でありながら、かうまで無恥になるものであるか。まことに中國の亂るるわけではある。三人の兵卒たちは婦女たちの濡れた著物を外側から內側までまた頭の頂から足の踵まで、すつかりぬがせた。それから衣類を仕立てる婦に、背丈を見させたり身幅を量らせたりして、眞新なものと取かへさせた。婦女たちは兵卒どもの見幕をおそれて裸體になり身を覆ひつつむ事が出來なかつた。衣類を着換かへさせるとそれらの婦女たちを擁して、兵卒どもは酒を飲み肉を食ひしたい放題を振舞つて見えも恥も構はない。突然、一人の兵卒が刀を横たへていきり立つて叫んだ。野郎ども出ろ、出ろ。目の前には數人の人たちがもう縛られてゐるのであつた。中に私の長兄もあつた。仲兄がいふのには、もうかうなつては詮方もない。かう言つて私の手をとつてこの群のなかへ進み出た。弟も私たちについて來た。捕へられた男が五十人あまり、兵卒が刀を振つて叫び立てると皆生きた心も失せて一人と

して身動さへ出來る者はなかつた。私は兄たちについて建物から出た。外には人殺しが行はれ、皆は順々に運命を待つてゐた。私も最初には縛り上げられることをもう覺悟してゐたが、ふと心が動いて神の助があるやうな氣がしたので、身を忍ばせて遁げ出すと、もう一度裏の建物へ行つたのを、外の五十人あまりは氣づかなかつた。

裏の建物の西の部屋にはまだ老年の婦人たちが居合せて、身を隱すこともならなかつたので、通りぬけてその部屋の裏側へ來てみると、あたり一面には荷馬に青草を食はしてゐてそこを拔け出ることもならない。けれども氣が氣ではないから思ひ切つて身をこゞめて馬の腹の下へ入り、そのなかをあちこちくぐり拔けて這ひ出した。もし馬をびつくりさせて馬がちよつとでも足など擧げようものなら、自分の身はそれこそそこらの泥になつてしまつたであらう。また部屋を幾重かくぐり拔けたけれどどこにも逃け出る路はなかつた。たゞ片わきに路次があつて、それがこの家の裏門につゞく。（この國の大きな古い邸宅はその一族の人たちがそれぐ\に奴僕妻妾をつれてみんな一門の内に住んでゐるのだから、一つの屋敷には幾つかの家があつて、言はゞ屋敷のなかに家並がある形である。この主人公は豪商のそんな廣大な屋敷のなかをうろついてゐたであらう。）ところがその路次の門には長い鐵の釘が打ちつけられてあつた。私はまた引かへして裏の路次から表の方へまはつてみた。表の母家のなかゝらは人殺しの聲が聞えてゐた。益々恐れうろたへてあたりを見まはすと、左側に料理部屋がある。部屋にゐる四人の人間は、これも亦捉へられて來て料理番をさせられてゐるらしい。私をこの仲間へ入れて火を焚いたり水を汲んだりさせてもらひたいと賴んだが、四人は手きびしく拒んだ。言うには、我々四人に人數をしらべられて使はれてゐる者だ。もう一度しらべられて人數がふえてゐたら、詐が露はれずにはゐないので、さうなれば禍はわが身にふりかゝつてくる。さういふのを私がくどくしみじみと頼み入ると、彼等は大へん怒つて私を引立てゝ外へつれて行かうとした。それで私は其處を出たが、益々氣が氣ではない。あたりをよく視ると前に架があつて、この架の上には甕がある。屋根から遠いところではない。ここで架につかまり上つた。それから甕の口にどうやら手がとゞいたかと思

ふと、私の體は横ざまに傾き倒れてしまつて、どうにもしようがない。そこで私は急いでまた路次の門へ走つて行き門に身をよせて錠前の金具を兩手でつかんで百度もこぜ揺がしてみたが動かない。石で打ちたたいたところが大きな音が外庭にまで聞えさうで、人に氣づかれるのが心配である。仕方がないから又してもこぜ揺してゐると指が破ぶれて血が出て來た。錠前の栓は思ひがけなく動いた。力一ぱいに引拔くとそれが外れて掌に握りとれた。門の居を引外さうとあせつた。しかし居の木質は楛かつた。雨に濡れて木が膨えてしまつてぎつしりとはまり込んで錠前の栓の倍も堅い。私は精一杯にやつた。すると居はどうやら取れさうになつて、それでも拔けないと思つたら、樞の方が突然折れてしまつた。さうして門扉の倒れる音垣のくづれる聲、まるで雷のやうに響き渡つた。私は急に身を翻へすと乘越えて飛出したが、こんな力が一たいどこから湧いたやら自分にも判らない。いそぎ裏門を驅けぬけて出てみるとそこは城壁であつた。折から兵卒や騎士が一めんに見えてゐて私は進むことが出來なかつた。そこで喬の屋敷の左隣の裏門を體で押開けて入つた。かくれられる限りのところにはどこにも人が居て、きつと外の人間を容れることを承知しない。その家から裏までおよそ五へんは搜し歩いたが皆そのとほりであつた。直ぐに正面の入口の方に行つてみるとそこはもう大通りになつてゐて、軍役に使はれる男どもの往來は織るが如くに絶えない。人々はここを危險な場所だといふので見棄ててゐた。私は急いで入つたがそこに榻が一つあつた。それはひつくりかへつてゐて、底が上向になつてゐた。それ故私は榻の柱につかまつてその底に上つて身をこごめて隱れた。息ぜわしさがやつと落着いてと思ふと、不意に牆をへだてた隣から私の弟の泣きわめく聲がして、叉刀で打ち斬る音も聞えた。それから次には仲兄が泣いて賴んでゐる。仲兄は言ふ、私は金を持つてゐてさうちの穴藏に藏つてあるので、私を放してくださるなら持つて來て差上げます。一撃したと思つたらひつそりとしてもう聲は聞えなかつた。私はこの時にはもう自分の精神はどこへやら飛んで行つてしまつて、心臟は燃える膏のごとく、眼は枯れて涙も出ず、腸は固まつてちぎれさうになり、もう自分を統べる力もない心地であつた。やがて一人の兵卒が一人の婦人を

小脇に挾んでわき見もせずに歩み來て、この樹（私がその上に隱れてゐる樹）に横はらうとした。婦は肯かなかつたけれども、强ひられて後に可した。さうして婦は、ここは市に近いのだからわたしはもうここには居られない、と言つてゐた。私はもう免れられないところであつた。然し、暫くするとかの兵卒はやはり婦人を小脇に挾んで立去つた。この室には天井に幕が張つてあつた。（天井に板を張らないこの國の建築法では、屋根裏からの塵を防ぐためによくかういふ事がしてあるが）その幕は蓆のやうなものでこしらへてあつたので人の重みには勝えなかつたが、それでもこれを手頼にして梁に行くことは出來た。私は天井の幕の條をたぐつて上り、兩手で梁に這ひ上り足を駝梁に寄せかけた。ここは天井幕の蓆があるものだから漆のやうに眞黑であつた。そのうち一兵卒が來て、矛をもつて上を突き搜つたが、ひつそりとしてゐるのを見て誰も上に居るとは想像しなかつた。私はかうしてやつとこの日中兵卒に出會さずにすんだ。然し私の下の方では刃を被つたものが一たい何人あるか知れなかつた。表通に數人の騎者が行きすぎる度ごとに、きつと數十人の男女が泣き叫びながら引かれて行つた。この日雨はふらなかつたが日の光は見えず、夜明けも夕暮も分らなかつた。時がたつうちに兵馬もやや疎らになつたらしく、あちこちからは人聲の悲しみ泣くのを聞くばかりであつた。思へば、自分の兄弟はもう半分まで傷けられ、長兄とても長らへてゐるものやら亡きものやら推察することも出來ない。わが妻わが子は何處にゐるものやらも判らない。行方を求めたならばもしや一目見ることも出來ようかと、そこで梁にすがつてぼつぼつと下りた。

足を蹶がせて表通に來てみると通には人の首が相互に重り合つてゐる。どれが誰やら見分けもつかない。死骸に顔をよせてかはるがはる呼んで見ても返答する者も無い。遙か南の方を見ると數つかの炬火のぐるりに人が群らがつて進んで來る。私は慌ててこれをよけようと城郭に沿うて走つた。市中に積み重つた屍に足はつまづいて幾たびか膝をついてはまた立ち上つた。ものに驚く度にはすぐに地に仆れてのたれ死の眞似をした。しばらくかうしてゐるうちに小路に行きつくことが出來た。路行く人たちは闇のなかにぶつつかり合つて互に膽をつぶすのであつた。大通で火事が起りそれが照りかゞやい

て眞晝のやうであつた。

酉の刻から亥の刻までかゝつてやつと兄の家まで來た。しかし家の門は閉ぢてあつたから敢て直ぐにはたゝきもせず、折しも婦の聲のするのを聞くと嫂であるので、やつと靜かに扉をたゝくと內から答へるのは私の妻であつた。長兄はもう先に歸つてゐて、私の妻や子供と一緒に居た。私と兄とは聲をあげて哭きさうして仲兄や末弟などの殺されたことは互に口に出すのを憚つた。私は妻にどうして助かつたかと尋ねると、妻が話した。兵卒があとを追つかけて來た時、あなたが眞先きに奔げ、皆もそれにつゞいて、わたしだけが遺されてしまひました。わたしは彭兒（子の名）を抱いて屋根から身を投げたのに死ねませんでした。妹もつまづいて足を怪我して打倒れてゐました。兵卒たちがわたしどもふたりをつかまへて或る家につれて行きましたが、そこには男や女が何十人もまるで目刺の魚のやうに繋がつてゐました。そこで兵卒たちは私を外の女の人たちのなかへ殘して、これの番をして逃してはならぬぞ、と皆に言ひ置いたまま刀を用意して出て行つたのでした。するとまた外の兵卒がひとり入つて來て、妹を劫かして立ち去りました。しばらくしてゐたが誰も來たいものですから、私はたうとう外の女の人たちをだまして拔けて來たのですが、出てみると偶然にも洪のお婆さんに出會ひ、ふたり連れ立つてここへ來たので、仕合と助かつたのです。洪嫗といふのは中兄の家內の身寄である。妻はまた私が助かつた理由を問ふから、私はそのわけを告げしばらくの間は互に泣いた。洪嫗は炊き置きの飯を持つて來て勸めてくれたが淚に咽んで噛み下すことさへ出來なかつた。又しても方々に火事が起つて昨晩の倍もひどい。戶外に出て遠く無緣墓地を見渡すと樹立はさびしく物凄く哭く聲は籟となつてかすかに鳴りひびいた。或は父の子を呼び或は夫の妻をさがす聲だ。乳飲兒の呱呱の聲は草原にも谷間にも溢れて、いたましさは聞くに忍びない。かへつて洪の宅に行くと、私の妻は死なうと覺悟をしてゐた。私は夜をこめて話相手をしてそんなことをする間を與へなかつた。東の方が白むで來た。

妻の隠れ場へ行つて見ると、妻はうねりくねつたところを道案内して私を或る墓地へつれて来た。荒れて古瓦が散乱し久しく人の通ひもしなかつた所だ。私は茂るがままの雑草のなかに蹲り、子供は柩のなかへ入れ、その上からは蘆席をかぶせた。妻はその前に屈んだ。私は子の覆ひものの片わきにくるまつたが、首を上げれば頂が現れるし、足をのばせば踵が出てしまふので、息を忍ばせ手足をちぢこめて一裹になつた。性根もいくらか落着いたかと思ふと、殺伐な声がもう身近かに通つて、刀の金ものの鳴りひびくところに梢のかけ声がつづけさまに起り、声を合して命乞ひする者が幾十人かそれとも幾百人か。兵卒のひとりに出遇ひでもすれば、我々南方の人間は仲間の人数の多い少いによらず誰もみな頭を垂れ一個ひ伏し、頭をちぢこめて刀を受け、ひとりとして逃出すことすら出来るものはない。紛々たる女子供に至つては、皆口々に泣きわめいて地鳴りするばかりであるのは言ふまでも無い。盛すぎになると積み上げた死體は山の如く、殺掠は一しほひどくなつた。幸にも夜になつたものだから私たちはためらひながらもその場を走り出た。彭児は柩の上にぐつすりと眠入つて、朝から夕方まで泣きもしなければ、口も利かず、また食べたがりさへしなかつた。渇いた時には瓦の片に溝の水を掬つて来て飲ませて、口をしめてやるとそのまま睡りつづけるのであつた。それを呼び醒し、抱きかかへてその場を立退いた。洪媼も来合せた。私の嫂は引立てられて行つたし、姪は繦褓にくるまつてゐたがたうとう在處は知れぬ。悲しや、やつと二日の間に、兄も嫂も弟も姪も死んだものがもう四人だ。

皆して臼のなかにこぼし残してゐた米を覓し集めてみたが無駄だつた。長兄とお互の腿を枕にし合つて飢を忍んで夜明けになつた。この夜、私の妻は死を企てて殆んど斃れてゐたのを、洪媼のおかげで助かつた。私は長兄に曰ふのであつた。今日は誰の死ぬ日であらうやらも知れません。もしや私が死んでも、長兄よ、あなたはどうぞ無事でゐられて、どうぞ彭児と一諸に生き長らへて下さい。兄も涙ながらに私を慰め力づけた。たうとう別れて別々の場所へかくれた。

洪媼が私の妻に曰ふ。自分は昨日は櫃のなかへかくれて一日安心であつた。あなたと代つて上げるから、あなたはあ

そこへ逃げてゐるがいい。妻はしかし無理に斷つて、やはり昨日の柩の後に私とともにかくれて居なくてはならないと言つた。程なく數人の兵卒が入り來つて柩を破つてこの老婆を引立て、彼等はあらゆる方法で拷ち懲したけれども、老婆は他人の在處は一つもあかさなかつた。私は深くこの德に感じた。

しばらくすると兵卒の來ることが益々多くなつた。私のかくれ場のあたりに來るものは引きづついた。そのうちの或る一人は家のうしろへ來て墓所を眺めてから立去ると、にはかに十數人の兵卒が罵り喝しながらやつて來た。その勢はすこぶる猛々しかつた。不意にひとりが來たと思つたら、長い竿をもつて來て私の足を突いた。私は驚いて飛出してみると、揚州人でその兵卒の手引をしてゐる者は、顏はよく見覺えてゐてその姓は忘れてゐた。私はその男に向つて憐れみを求めると、彼は金を要求した。私がそれを差出すと、やつと私を釋しはしたが、それぢやお前の妻を出せと言ひ出した。するとその頭だつた者が出て來て、兵卒どもに向つて、まあやめて置けと言つた。そこで兵卒どもは散じ去つた。驚きの動悸がまだ鎭まりもしないうちに、忽ち一人の紅衣の若者が長刀を操つてつかつかと私のところへ來るなり、刃をとり直して私に立向ひ、金を差出させその上に私の妻を要求した。妻はこの時孕つて九ケ月であつた。死ものぐるひで地につかまつて起たない。私は紿いた。妻は身ごもつて月が重つてゐるのに、きのふ屋根から跌き落ちました。これが因で流產をして、どうしても坐ることが出來ません。立つて歩くなどは思ひもよりません。かう言つたが紅衣の若者は信じない。そこで腹をあけて見せ、その上又先から塗つてあつた血に染みた袴を驗めさせた。そこで遂に見向かなくなつて或る少い婦人を擄にした。一幼女と一小兒とが母を呼んで空腹を訴へるのを見てその男は怒つて一擊すると、腦が碎けて子供は死んだ。婦と女とを小脇にかかへて彼は立去つた。見知らぬ人が（彼少婦の夫であらう）私にどうかしてくれと乞ひ求めるのであるが、彼を同情してゐたのでは我身のほどが覺束かない。それよりこの場を別れて立退くのが分別である。しかし妻は寧ろ自殺の決心が固い。私も亦うろたへ切つてもう自分で自分が判らぬ。ふたりはたうとうそこを立出でて、梁にふた

り一緒に縊れたのであつたが、忽ち頂下の二本の繩は一度に兩方斷れてしまつて、私たちは並んで地面へ膝をつき、まだ起きあがる間さへないうちに兵がまたしても門にむらがり、直ぐさま堂の上に走つて來た。まだ兩側の廊下には氣をつけてゐないから私も妻も急ぎ走つて門外へ逃げ出した。或る藁小屋にかけ込んだところが、小屋の中は殘らず田舎の婦女たちで、私の妻だけはそこへかくまつたが私には拒んだ。私は急いで南の方の藁小屋へ奔つた。そこには中に枯草が堆く積み上げて屋根裏までとどいてゐた。私はそれのてつぺんへ登り首を突込んで伏し匿れその上へやたらに枯草をかぶせて、これなら大丈夫と考へたのである。間もなく兵卒がひとり一氣に跳ね昇つて、長い矛で突刺したので、私は草のなかから出て來て命乞ひをし、又もや金を差出した。彼はこの草の中を搜して更に數人を見つけたが、皆金を出して免してもらへた。この兵卒が出て行つてしまふと數人は再び枯草のなかへもぐり込んだ。私は草の中を覗いてみると、四角な卓が數臺あつてその外側はみな草に埋つてゐるが中はきつかりがらんどうで二三十人も這入れるらしい。私は無理にもぐつて入つた。自分ながらうまい思案だと考へた。ところが思ひきや、小屋のぼろ壁は腰から急に崩れてしまつた。ぽかりと穴が開いてなかも外も筒抜けになつた。早くも兵卒は覗いてゐた。そこで穴の外から槍をぐつすりと突き込んだ。前の方にゐたものは大創を負はない者は無かつた。私も腿のうしろに傷をした。前方にゐた者はみな兵卒のために捉へられた。後にゐた者は倒れながら草を分けて這ひ出た。私はもう一度妻のゐるところへ行つてみた。妻と一緒にゐる婦女たちは皆薪を積んだ上に臥て、體には血を塗り漆で髮の毛を固め煤や灰を顏になすりつけ形相は鬼か蜮のやうである。その聲でやつと氣がつくのであつた。折入つて賴みこんで、積草の底へ入れて貰へたが多くの婦女が重り合つて私の上に倒れてゐた。私は息がつまつて身うごきもならず危く悶え死しかけた。妻は竹筒を私に渡してくれたので、私はそれの片端を口にくはへ別の片端を上に出して空氣がやつと通ひ、それで死なないですんだ。戸外には或る兵卒が一時に二人を手で殺した。その出來事は實に怪怪で筆には上されない。草に埋まつてゐた婦女たちで身をわななかせない者は無く思はず哀しみ

の叫びを一齊に擧げた。するともう小屋のなかへ入つて來てゐた兵卒は、大股に歩み出てしまつた。空は漸く暗くなつたので婦女たちも起きたし、私もやつと草の下から出たが汗は雨に打たれたやうであつた。さて妻とともに洪の宅に歸つたが、洪家の老爺も老婆も皆居た。長兄も來てその話したところでは、是日は引捉へられて擔去られたが千錢の償ひをしたので保護令の旗をつけて放されたが、途中は死骸が入りみだれて山と積重なり血は流れて渠になつてゐたといふ。又聞くところによると王族の將軍（蓋し豫王）が昭陽の本營にゐて、數萬錢を日々遭難民にくばつて、その黨の人々は屢々殺人者を戒めとどめて命を完うさせる事も多いといふ。この夜は悲しみに咽んだ果に、人心地もなく睡りに落ちてしまつた。

二十五日から始つて今日で五日になるが、血腥いこともせめて幾らかはうすらぐかと心頼みにしたものを、又しても人の口とりどりに洗城の噂が立つた。（洗城といふのは水を浚へて魚を得る如く、市中を隅なく狩り立てるといふ意である）これを聞いた城中の生き殘りの人々で、死を冒して城壁に縋つて逃げ出すものがその半分にも及んだ。舊の官溝は堰きとめられて水を通ずることが出來なかつたので、逃げたものはそこに群れ集り溝は人に埋まつて平になつた。その結果がまた、逃げたがために反つて鋒に罹るやうな憂目を見るものもあつた。夜になると仲間を組んで官溝のなかにうづくまり死骸から金銀を捜し盜るのを、誰も見咎める者もなかつた。私たちはも早危險を冒して逃げるだけの力もなかつた。長兄は私を案じて自分だけひとり立退くには忍びない。とかくしてゐるうちに夜明けになつたので、城外へ落延びるといふ考も遂に思止まつた。以前の匿れ場はしかしよくない。妻は孕つてゐるといふので度々無事ですんだ。私だけが池のほとりの茂みのなかに身をかくし妻と彭兒とはそのうへに臥しかぶさつた。數人の兵卒が來てそのために劫かされて引出されたことが二度もあつたが、皆少しばかり賄を差出すと立去つた。繼いて一人の猛惡な兵卒が來た。鼠のやうな頭、鷹のやうな眼つき、見るから實に憎さげなのが私の妻を劫かさうとした。妻は伏し曲んだままでいつもの言ひわけを告げたが聽入れない。無理に立たせると妻はまた地面に倒れてしまつた。死んでも起たうとはしない。兵卒は刀の背をふり上げてめつた

打ちにした。血は着物の裏表にとつぷりと浸渡つた。妻はこれより先、私を戒めて、もしも不幸に出遇つて私がきつと殺されるやうな時でも夫婦だといふので命乞ひなどをして、あなたまで巻ぞへを食ふやうな目は見ないで下さい、と言つた事があつた。そこで私は遠く草のなかへ躱れて知らないふりをしてゐた。私ははらはらして、妻は今に死ぬだらうと思つてゐるのに、兵卒はそれでも思ひ切つてくれない。妻の髮を彼の臂に幾巻か巻きつけて横倒しに曳ずり去りながら呶鳴つけ打ちのめし、田甫から裏路地までの間五六十歩の地面を通つてから、ぐるりと曲つて大通へ出て行つた。幾足か歩めばきつと幾度か打ち懲した。不意に彼は大勢の騎者に行き合つた。そのうちの一人がこの兵卒と滿洲語を五六句話し合つたが、遂に私の妻を捨置いて立去つた。妻はやつとの事で這ひながら還つて來ると、一度に大聲で泣きくづれた。體中で傷のつかぬところとて無かつた。

忽ち烈しい火の手が四方に起つた。何家墳の近所には藁小屋が多い。燃えうつれば直ぐさま燼になつてしまふ。一寸の隙間さへあればそこに洗城の網をのがれ出て躱れてゐた人たちは火のために追拂はれて飛び出さぬ者はなく、飛び出せば出たでまた殺害されて、一人の免れる者もなかつた。さうかと思へば戸に閉ぢこもつたままで燒け死んだ人も、一家に數人或は百人に上るものもあり、その家には堆い骨が一たい幾つあるかも判らない。すべてこの場合、避れる場所もなく、避れる方法もなく、たとひ避がれ得たにしたところで一度敵が犯して來たならば金がなければ殺され、金があつても殺されるのである。惟だ一その事、路傍に身をさらけ出して屍尸と雜つて居たならば、反つてその方がまだしもきつと殺されるものともきまらない。私は妻及び子と一緒に塚の後に行つて倒れてゐたが、首と言はず足といはず泥や土を塗りつけて、まるで人間らしい形も無かつた。火の手はいやが上にも燃え盛り、墓地のなかの高い樹に燒えうつり、その光は稻妻の如く、灼ける聲は山の崩れるかと思ふばかり、風は怒り叫び赤い太陽はものすさまじく光を消されてしまつた。目の前には無數の鬼どもが千百の地獄の人たちを追ひ殺してゐる。驚きのあまり時には氣が遠くなつてしまふ。恐らく自分の身

はもう人間世界にはゐないであらう。急な人の足音と又いたましい叫びに心を震はせながら首をまはして見ると、これは長兄が獲へられて今や一兵卒と互に手むかひ合つてゐたのであつた。兄は精一ぱいの事でやつと振はらつて脱去ることが出來た。兵卒もあとを追つて趕せ去つた。この兵卒といふのは前日、私の妻を劫してしかし後に捨てて行つたあの者であつた。半晌ほどまはつて來ないものだから私は不安でびくびくしてゐた。長兄は忽然、走つて來た。裸で髪をふりかぶつてゐる。兵卒のために逼られて仕方がなしに私のところへ、金をもとめて救けてもらひに來たのである。私はやつと一かたまりだけ殘つてあつたのを出して兵卒に獻じた。ところが兵卒は非常に怒つて刀をふり上げて兄を撃つた。兄は地面に轉び狂ひ流れる血は體一面であつた。私の子の彭兒は兵卒にとり縋つて涙をすすつて免を乞ひ賴んだ。年は五つになつてゐた。兵卒はこの兒の着物で刀の血を拭いてから、又しても撃つて兄は死ぬばかりになつた。ひきづついて私の髪を引つかみ金を出せと迫つて、刀の背で私を滅多打した。私は金の盡きて了つたことを訴へて曰つた。どうしても金でなけやいけなければ仕方がないから殺してください。金でなく外のものなら上げられます。すると兵卒は私の髪を牽いて洪の家に來た。私は妻の衣類が二つの甕の中に入れてあつたのを階の下へひつくり返してひろげさらけて、取り放題にさせた。凡そ金や珠のたぐひは取上げないものはなく、衣類のつやの好いものも取つた。彭兒の頭に銀鎖があつたのを見つけて刀で引きちぎつて行つた。行きがけに私を振返つて曰つた。俺は貴様を殺さないがそのうちには誰かが來て殺してくれるぞ。私は洗城の噂がもう確實で、きつと死なねばならぬものと覺悟した。

兄は家に殘し置いて、妻と一緒に急ぎ外に出て兄を看ると、頭は前も後も八寸ばかりも傷を負ひ、胸の邊はもつとひどかつた。私たちふたりは之を扶けて洪の宅に着き、兄を介抱すると、兄は身に傷手のあることも氣づかないで、目がくらんでゐるかと思つたらまた息を吹きかへした。そつと殘して置いて私たち夫婦は再び墓場に來て身を匿してゐた。隣人も亦一緒に入り亂れた死骸のなかに臥てゐたが、不意に人間の聲を出して曰ふには、明日市を狩り立てたなら城內殘らず薙ぎ殺されるにきまつてゐますよ、奥さんはそのままにして置いてあなた私と一緒に逃げませんか。これを聞いて妻も私に逃

げることを勸めた。私は長兄の死にかかつてゐるのを考へれば、どうしてこれを見捨てて行けようものか。又、以前に希望をつないだのはいくらか餘金もあつたからである。今はもう無一文だ。生きてゐられようなどとは思ひもよらぬ。さう思ふと悲しさに氣も絶えてしまつたが程なくまた息が返つた。火もどうやら消えて來た。遠方には大砲の音が二度聞えた。往來する兵卒や軍丁もだんだん少くなつた。私と妻とは子を抱いて叢莽の中に坐つた。洪媼もそこへ來て互に身をよせかけた。數人の兵卒どもが四五人の婦人を擄にして來た。そのうち老いたる二人は泣き悲しむが、年若の二人は笑ひ戯れてびくともしてゐなかつた。後から別に二人の兵卒が追つかけて來て婦人を奪ひとらうと互に激しく爭つた。そのうちの一人は仲直りをすすめて、滿洲語を話した。直ぐさま二人の兵卒が年若の婦をかついで樹のかげへ行つて野合した。他の二人の婦も辱を被つた。老いた婦は哭きわめいて免を求めるのに、年若な婦たちは恬として恥ともしない。十數人が互に奸淫をして、やがて後から追つて來た二人の兵卒にわたしたが、その中の一人の若い婦はもはや起つことも出來なかつた。私はそれが焦氏の娘であることに氣がつき、その家の日頃の振舞がこんなところで應報されてゐるのかと、驚愕のなかにも歎息に得勝えなかつた。

突如として、出て來たのは、一人の紅い軍裝に劍を帶びて、滿洲風の帽子に皂靴をつけ、年のころ三十にもならぬ樣子ぶりの佼爽な人物である。その後に隨へた一人は黄色い服に甲をつけた顔つきもまた氣が利いて凛々しい。またその後には揚州人が五六人跟き從うてゐた。その紅衣の人が私をつくづくと眺めてから曰つた。お前を見るとそこらに居合す者どもとは違つてゐる、何者であるか正直に申述べよ。私は考へたが、讀書生であつたために免された者もあるか、また同じく讀書生であつた爲めに直ぐさま殺された者もある。それで私は本當は言はないで、言葉を飾つて返事をした。すると相手は私の妻と子とを指して、あれは誰かと問ふから、これは本當を話した。紅衣の人が曰ふ。明日王爺が命令を下して刀を用ゐるのを禁ずる筈だ。お前たちも生きてゐられよう。から言つて供の者に言ひつけて衣類を幾品かとそれに金一錠とを私にわたさせ、その上に問うて曰つた。お前たちは幾日ものを食はないか。私は五日だと答へた。すると、吾數の

あとに跟いて來いと命じた。私と妻とは信じてみたり疑つてみたりしながらともかく行かないわけにはならない。或る家に行つてみるとその蓄えたものは頗る豐富で米や魚が一面にある。紅衣の人は一人の婦人に向つて曰つた。姪好好（滿洲語で）この四人の者をよくもてなしてやりなさい。かう言ひ置いて私と別れた。その時にはもう日は暮れてゐた。私の妻の弟は兵卒のためにさらはれて行つて生死がわからなくなつた。妻はこれを悲しむことが特別に甚しかつた。た、しばらくして魚や飯を持ち出して私に食べさせた。私の家は洪の住家とは遠くない。私はその魚や飯を持つて行つて兄に食べさせたが、兄の喉はそれをのみ込むことも出來ない。私は兄の髮を拭つたり血を洗つたりしたが、私の心臟は刀でたち剌られるやうな氣がした。是日は刀を用ゐさせなくなるといふ噂を聞いたので、皆々いくらか心を安んじた。

明る日は五月朔日で、勢はそれほどひどくなかつたけれども、それでもまだ殺掠をしなくなるなどといふ事はない。又同時に富豪や大家は一軒殘らず屋さがしをし、子女の十餘歲以上は奪ひ掠められて逃れたものは殆どない。この日興平伯も揚州城に入つて來られたが、布の絲端、米の碎屑も些細なもののために奪はれ盡して、見るかげもないこの無殘さは伯を奉迎することも出來ないのであつた。

二日には、聞傳へによれば、府、道、州、縣には早くも官吏を置き人民保護の札を隅なく與へて庶民をよく諭して隱く必要をなからしめ、又、寺寺の僧侶達たちに諭して積上げた屍を火葬させたが、寺院のなかへ、この騷ぎに乘じて匿し込んであつた婦女も亦少くなかつた。火葬した死體を數へ査べて記錄に載せた數は八十餘萬であつた。井に落ちたり、川に身を投げたり、家に閉籠つてゐて焚けたり、又自ら縊れたりした死者はこの數のなかには加はつてゐないのである。擄へられた者も亦この以外である。

三日は掲示をかかげて施米をした。私は洪嫗と一緒に缺口關に行つて米を貰ひ受けた。この米といふのは督鎭の用意してゐた軍用の糧食であつたが、邱陵のごとく積重ねた數千俵の米が、見る間に洗ふがごと消えてしまつた。往き歸りの人々と言へば負傷者で、みな頭が焦げたり、額が爛れたり、臂や脛が折れ傷ついたり、刀の痕が顏中一面だつたり、さなが

ら蠟涙のたれた蠟燭が並んでゐるやうであつた。米を受取る時には親友とても遠慮はし合はない。強い者は貰つて歸つてはまたやつてくる。老弱や重傷の者は一日中待つても一升の米が手に入らないのだ。

四日、天氣が晴れ烈しい日が蒸せ燻して死體の臭が人の鼻を襲うた。前後左右到るところに燒き焚かれて、その煙はこもつて霧の如く腥さは數十里にまで感じ渡つた。是の日私は棉と人骨とを燒いて灰にし、それで兄の疵の療治をしようとした。兄は涙をこぼしてうなづいたばかりで、聲は出せなかつた。

五日、邊鄙な土地へ落延びてゐた市民が幾らか歸つて、互に逢うてはそれぞれただ涙が出て、一言も口を利くものはなかつた。私たち五人は幾分か蘇生の思はしたが、まだ家のなかに落つける氣にもなれないので、夜明けに起きて早い食事をすると野邊に出て居ることにし、その身裝はもつぱら未だ今までのとほりに心掛けてゐた。といふのは往來の追剝は一日に數十人を下らない。刃物こそ持たないが、それぞれ杖や棒で嚇しては人の財物を奪ふのだから、毎日杖の下で命をおとす者もあり、それが一たび婦女に出會すと、今までのごとく肆に捉へ劫し、殆んど滿洲の清兵であるか、守備兵であるか、反諜民であるか判らないのであつた。この日わが長兄は傷が重く刀痕が裂けつぶれてそのために死んだ。悲しい、口には言ひ現せない。憶へば私が初めこの難に遭うた時には、兄弟嫂姪姉子などの親しい者は八人であつたが、今はたつた三人が生き殘つた。それも妻の弟や妻の姨などは數へてはゐないのだ。

四月の二十五日に起つて五月五日に止まつたのであるが、その間にわが身が自ら歷て來たこと、わが目が直接に睹たところであるから之を漫然と記した。遠方の風聞は少しも之に載せない。後の人が運よくも太平の世に生れて無事の福を享け、その身に些の憂き目をも悟り覺えない人々が之を見たならば警め惕るべきを思つてくれるだらうかとの積なのである。

（　）內の文は譯者の蛇足なり
＊は意を解せざるを強いて判讀し誤あるを自ら懼るゝなり
以上、譯者。


飛行船は揚った！
中部日本の高空に
言論界の巨人!!
新愛知
忠實なる商品紹介機關
見よ各地に發行頒布する
弟妹新聞の数とその力を
新潟附録
富山タイムス
北國日報
福井日報
新信濃
甲信日日
飯田夕刊
東濃新聞
岐阜日報
駿遠日報
三重日報
大和附録
紀國新聞
名古屋
東京
新潟
高田
富山
金沢
松本
岐阜
多治見
甲府
飯田
静岡
豊橋
岡崎
大津
京都
大阪
奈良
津

婦人

山本有三著

戯曲集 西郷と大久保

四六版 上製 定價一圓五拾錢 郵税十八錢

最新刊

精進、精到、よく一年一作と自重し、定石を踏み、戯曲界の雄を以つて鳴る山本氏の近作「西郷と大久保」「嘉門と七郎右衛門」「大磯がよひ」「父親」「雪」を收む。一言一字の裡にも大事をとる氏の作品が、そして史實に則したるこれ等の鉅篇が讀書子に呼びかける力と情味とは決して常鱗凡庸の作と軌を一にせず、燦然創作壇に獨歩す。亂作揃ひのこのごろ本戯曲集の如きは萬人顧愛の第一に屈せらるべき傑作集。

發兌

東京市麹町區内幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二番

改造社



定價		
定價	送料	
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年十二月十八日印刷
昭和二年十二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　島中雄作
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ內二〇六番
振替東京三四番
同　長對三二〇番



贈答と人格
高貴の方々から
御愛飲の榮を賜はつてゐるカルピスは
御贈答用として
御接客用として
實に
最高敬意の表現であります。
滋強飲料
カルピス
酒店食料品店藥店にあり

明治三十年十一月廿九日第三種郵便物認可
昭和二年十一月十八日印刷納本

中央公論 十二月號 (第四十二年第十二號)

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

